

奇譚クラフス



新しい風俗文献誌

1



昭和四十五年十一月二十一日発行 印刷 昭和四十五年十一月二十一日発行 印刷 昭和四十五年十一月二十一日発行 印刷

作六鬼団



決定版

昭和37年8月号に端を発してより絶讃を博し続ける「花と蛇」の文字通りの決定版が堂々八百有余頁の超豪華本として完成致しました。驚異的な人気を生み出したこの長篇サディズム小説は、現在尚「奇譚クラブ」誌上に連載中でありましたが、過去四回の特集にも拘らず数多くの要望にお応えして、今回の総集篇発行となつた訳であります。八カ年の集積を味読して下さい。

● 瞠目のサディズム小説総集篇遂に成る!!

● 略号「花決定版」 ● 定価一、〇〇〇円(送200円) ●

内容主要見出し一覧

第一章	発端
第二章	ろ探偵の陥穽
第三章	美人の来陽
第四章	麗者の来陽
第五章	救者の来陽
第六章	救者の来陽
第七章	悪魔の地獄
第八章	怖ろしい地下
第九章	弄蛇の執念
第十章	淫蛇の執念
第十一章	美姉妹の執念
第十二章	色事子の執念
第十三章	美事子の執念
第十四章	落花生の秘密
第十五章	密室の秘密
第十六章	脱走の秘密
第十七章	華やかな宴
第十八章	地獄屋敷へ
第十九章	翻弄されるカッブル
第二十章	一千万円の身代金

第二十一章	身代金奪取の失敗
第二十二章	涙の宣誓
第二十三章	連命の逆転
第二十四章	奇妙な三々九度
第二十五章	飼育される白い動物
第二十六章	悪魔と悪女の悪業
第二十七章	屈辱の地獄
第二十八章	逃走の恐怖と失敗の結末
第二十九章	悪鬼達の残忍な所業
第三十章	落花無残の修羅場
第三十一章	淫らな美女の調教
第三十二章	すさまじいショーの展開
第三十三章	汚水にまみれた宝石
第三十四章	華々しき美女の屈伏
第三十五章	対峙する美女と美女
第三十六章	あぐんどい陥穽
第三十七章	羞恥図絵の展開
第三十八章	清純な令嬢の屈辱
第三十九章	人身御供の令夫人
第四十章	深窓の美少女とズベ公
第四十一章	小夜子への執拗な調教
第四十二章	変性色事師の登場

第四十三章	生れかわるスター京子
第四十四章	激しいスターへの訓練
第四十五章	低脳男と令夫人の結婚
第四十六章	愛弟子を調教する静子夫人
第四十七章	羞恥と屈辱の日本舞踊
第四十八章	悪魔たちの哄笑
第四十九章	地下室の羞恥と汚辱地獄
第五十章	珍芸を開陳する令夫人
第五十一章	淫靡な時代劇ショー
第五十二章	華々しきショーの展開
第五十三章	野卑な妾二人のいたぶり
第五十四章	ズベ公達の邪悪な責め
第五十五章	屈辱の中に泳ぐ奴隷たち
第五十六章	悪党の執拗ないたぶり
第五十七章	文夫と小夜子の屈辱的対面
第五十八章	勝ち誇る悪党一味
第五十九章	中国伝来の秘法
第六十章	緊縛された美女の涕泣
第六十一章	新しい餌食への触手
第六十二章	苦痛と屈辱の生地獄
第六十三章	恐怖の責め続く
第六十四章	結末なき責めの結末
第六十五章	甘美な拷問に悶える夫人
第六十六章	新しい儀の到来と静子の狂態
第六十七章	あくなき汚辱に泣く美女
第六十八章	ニューフェイスに飼育開始
第六十九章	肉体の悪魔に魅せられた女
第七十章	熱気を帯びたマゾの競演
第七十一章	女盛りの妖美な肉体
第七十二章	優雅な木馬夫人の崩壊
第七十三章	美女と野獣の奇妙な闘争
第七十四章	

お申込は大阪市住吉郵便局私書函第41号。
〒558 暁出版株式会社宛

女性モデル募集

勇敢な女性の出現を望む

▽規定△

入選作品の

一、応募作品は編集部にて慎重銓衡の上、入選決定しましたものは速かに筆者に通知致します。入選作品に対しては掲載の如何に拘らず、折り返えし賞金を贈呈致します。入選作品の著作権は当社に移行することを前にて御承知おき願います。

一、応募作品は、すべて未発表の自作の作品に限ります。たとえ未発表の作品でも他社へ投稿されたものはお断りします。作品の中に他人の作品を引用する部分がありましたら、出処（作者、書名など）を明記して下さい。一、原稿は必ず二百字詰又は四百字詰原稿用

紙をご使用下さい。枚数は四百字詰換算にて三十枚以上三百枚まで。三百枚以上に亘るときは一応事前にご照会願います。

一、締切日は毎月十五日、入選作品は出来るだけ早く誌上に掲載致します。

一、懸賞応募作品は一般の原稿、読者原稿と

區別するため第一頁に「懸賞」とお書き下さい。ペンネーム、匿名はご自由ですが、住所（連絡先）氏名は必ずお書き願います。応募者の氏名を公開したり他へ洩らしたりなど、絶対に致しませんから御安心下さい。一、ご投稿された原稿は原則として返戻は致

しませぬ故、若しご入用でしたらコッピ―をとっておいで下さい。

一、原稿の送付先は、大阪市住吉郵便局私書箱第41号、暁出版株式会社編集部宛、必ず郵送（第一種郵便にて）して下さい。直接の訪問並て詩人みなは固くお断り致します。

○本誌の内容充実刷新のため、並に本誌の文献資料性向上のため、女性の写真モデルを募ります。本誌の女性読者の方で写真モデルとして活躍を望まれる方は、どうか勇気を奮って御応募下さるよう、お願い致します。

○本誌愛読者の女性の方でしたら、国籍、年令、遠近は問いませんから御遠慮なくお申込み下さい。採用の方には壹万円以上拾万円までの謝礼を差し上げます。

○応募されました方々の個人的な秘密は絶対に漏洩致しませんから御安心の上御応募下さい。尚その際、お好みの傾向を出来るだけ詳しくお書き下されば幸いです。

○誌上掲載を原則としておりますが、若し掲載を望まれない方がありましたら、その旨添記して下さいるようお願いいたします。御都合に依って分譲用又は助手介添え或はプレイのみの出演をして頂きます。その時の報酬については改めて御相談に応じます故御照会下さい。

○モデルに關してのお申込みは、年令、略歴の他に身長と体重をお書き添え願います。写真を同封下されば尚結構ですが、若しお手元に適当なものがなければ、なくとも差支えありません。

申込先 大阪市住吉郵便局私書箱第41号

曉出版株式會社編集部宛

[illegible]

Osaka Japan

1月号 ¥350

☆北欧系の金髪碧眼の美女を緊縛する

六月号誌上にて、うら若き白人の女性を純日本式縛りの美女を縛り上げたルポ八金髪碧眼の美女を縛るVを発売しました。鮮明な写真に面紙に焼付けた極めの要望の許しをほしうというマニアの要望の許しを得るため、特にシアの嬢の許しを得て分譲することにしました。文獻的に見ても非常に珍しい資料だと思ひます。お打ちに下さい。お中、お早目にお申し込み下さい。お申込は大阪市阿倍野局私書箱第14号天星社宛前金にて願います。

首縄高手 小手縛り

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号AいさV
生れて初めて縛られる首縄高手。小手縛りの全裸の肢体を言われるままに動かし床の間の飾り物のように白い肌を晒すのだった。

縄の痛さに耐える

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号AいめV
ぎゅうぎゅうと力まかせに締めつける縄は柔肌に驚くほど喰い込んでは、その苦痛に耐えようとすると彼女の表情に一段と迫力を増す。

股間縛は凄く締る

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号AいあV
きびしい高手小手縛りに加えて首縄、更に埋れるような股間縛りで肌を割り不自然な姿態を強要すれば美しい顔面が忽ち紅潮する。

卓上の裸身は躍る

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号AいてV
テーブルの固い板の上に正座させられた白人の美女が縦横に縄を掛けられて二つ折りになっているのを正面側面背面から狙った。

両手吊りの全裸像

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号AいたV
シーラ嬢の美しい容貌とすらりと伸びた肢体とが両手を吊られて拘束されることよって締めきった被虐美を最高に發揮している。

投げだした被縛体

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号AいまV
縛られた彼女の心の中にマゾの芽が芽ばえていくかどうかかわからないが、全裸で縛られたこのポーズの中に諦めきった相が見える。

麻縄は女体を裂く

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号AいゆV
ドス黒い麻縄は情容赦なく白肌に埋まり青い目を曇らせて、この異様な緊縛に耐えようとする。

縛られるのはいや

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号AいせV
つぶらな青いひとみを見開いて何をするといいかたげに貴手を見る目には可憐な拒否がある。

私の裸を見ないで

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号AいしV
多分彼女は今まで人前で裸の肌を晒したことがないだろうに、今は後手に縛られて前をかくすべさえなく喘ぎ悶えるだけである。

日本式縛りの痛さ

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号AいそV
すらりと伸びた長い脚、しこしこ今は徒らな足掻きを見せるに過ぎない。日本式縛りの厳しさが今こそ彼女の骨身にこたえるのだ。

白人をいたぶる手

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号AいやV
責めのイケエとなつた哀れな彼女は悪魔の触手によって身動きも出来ない縛られるの姿をさんざんに、いたぶられるのであった。

金髪美女も台なし

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号AいもV
房々とした金髪、格好のよい高鼻、平常は男性を尻目に高慢だったか知らないが、このように縛られると裸を羞らう哀れな女だ。

被虐の表情を狙う

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号AいむV
高手小手乳房縛り首縄に責めあげたシーラを様々にいじめて其の表情をアップで狙いをつけた。

美しき緊縛の姿

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号AいけV
彼女の顔の美しき肢体の美しさを縄を用いることによって、このように最大限にまで高めることが出来たのは大成功であると思う。

逆エビ責めの外人

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号AいひV
長い足を逆に折り曲げてエビ縛りにすれば流石にスタイルの良さを誇るだけあって、まことに優美な肢体を輝くばかりに開陳した。

雁字搦目で椅子に

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号AいえV
あるだけの縄を使ってシーラの白い肌に狂ったように掛けた結末が、このよう余りにも日本的な縛りとポーズになつてしまった。

落花狼藉のしとね

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号AいうV
ビール瓶、コップ、食べ散らかした寿司の器、その中で麻縄で縛られた彼女は疲れきった全裸体を長々とびたように横たえた。

本誌自肅の徹底

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で
 穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象
 として編集しておりますが、青少年の保護
 育成に関する条例には抵触しないよう、十
 分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ
 ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵
 の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順
 次整えて参りましたが、更に挿入写真の減
 少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な
 どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺激の強いもの
 は極力掲載しないようにするのは勿論、掲
 載した文章は十二分に検討を加え、いやし
 くも青少年の健全なる育成に支障を与えな
 いよう努力いたします。尚、本誌の発行部
 数は最低限度にとどめ、その増大を企るた
 めの努力はいたしません。



奇譚クラブ

△第二五巻 第一号・通刊第二七五号▽

(昭和四十六年) 一月号 目次

△本 文▽

△扉で一言▽情熱と孤独の谷間	水川 潔 (9)
告白 私の緊縛日記より『白い陣痛』	前田真知子 (10)
懸賞応募告白 〃私生活〃	青木 一男 (16)
機関誌『助産婦』より「お産と浣腸」	清水 暗星 (22)
連載小説「大噴火」△二十八回▽	千葉 青鬼 (30)
懸賞入選作 太陽は狂っている	清野由紀夫 (38)
美女緊縛作法『八重垣流秘聞』(結)	風流極道軒 (46)
史実研究 切腹百年史 △女性篇八▽	中康 弘通 (62)
連載・Mの傾斜「壺中の園」(9)	真砂十四郎 (66)
ヘンなデンワ「グーなキカイ」	須渾 朔 (77)
プレイ・レポ「はじめての撮影行」	城 章夫 (80)
懸賞応募創作 奇型の舞踏	川崎 章 (84)
女責め図絵の系譜 ストリップ残酷物語	南 彦造 (94)
連載小説『花と蛇』△続篇第七十回▽	団 鬼六 (98)



マゾ女の妄想	深田 初美
日本趣味「和装の縛り」	山本 五郎
菱縄マニアの苦笑「昔の女」	早木 夢二
緊縛フォトについて	朝野 裕
追想詩「あの娘」	青井 松造
最近の緊縛映画から	東山 映史
サロン楽我記(第七十九回)	辻村 隆
幻の女相撲を恋うる	奮斗士好太
イメージ画「下手投げ」	妙花 山人
告白あるアナス狂の独白	佐渡 黄門
イメージ画「あわれ玲宝」	市原幸三郎
大映作品「おんな牢秘図」	沢瀉 しの
無惨面秘帖「腹削ぎ」	桐原 紫門
M奴隷みさ子の臨月腹プレイ	佐野みさ子
編集部だより	編集部
乗馬の女性「アマソンの想い出」	佐野 寿
イメージ画「疲れとり」	志羽 利也
提案「みさ子さん後援会」を!	仏山 逸富
短信往来 同好の皆様へ	紀川 正信
ありがとうKK誌	津軽 壤
独想「SMゴッコ」	小杉 千恵
女装マニア「女性でない口惜しさ」	中村 純

京子ファンの「花と蛇」への不満	前原 昇 (108)
創作ある夜のザンゲ	林 たけし (110)
随想 マカ不思議女性の心理	今 二郎 (118)
習作シリーズ「女子高校生」	水田真紀子 (120)
手記 新しい刺激を求めて	渡部 光雄 (126)
連載・アブ紳士行状記 『M派交友録』 (13)	鬼山 絢策 (132)
助太刀娘相撲 〃梢の冒険〃 (上)	奮斗士好太 (142)
私の夢想 佐野夫人とのプレイ	千部 好夫 (150)
被虐の旅シリーズ「六甲の霧」	由利美千子 (154)
性文献を追って 『性典入門』 (1)	斎藤 夜居 (164)
青春の陥穽 (12) 〃一対三〃	芳野 眉美 (176)
イメージ画「人造生命」について	室井亜砂路 (187)
創作 悪魔の復讐	大木 喬 (188)
妊婦さまさま 腹裂き妄想	羽鳥 水江 (196)
SMカメラ・ハント(八)川路叢子・渡部好美の巻	
『両手に花のプレイ旅行』	辻村 隆 (198)
読者通信	編集部選 (252)

読者ギャラリ	「想いの果」岡 たかし・「ムチをあなたに」豪 城二・「ごちそう」春川ナミオ・「得手不得手」九美 淳
扉カット	「溫柔と冷鋼」旭 桃太郎
目次カット	あらい・かずー土紋城 薫



カット・旭

桃太郎

情熱と孤独の谷間

何ごとも、する気のしなくなった日曜日の夕方、私はたった一人で、川沿いの町を歩いていた。

川原には、こわれた玩具、片方だけのサンダル、空になった洗剤の容器、マヨネーズの空罎、トマトジュースの空缶、それに蚊取線香の箱のへしゃげたのが、ころがっていた。ビニール袋が、べつとりと營養不良の草の根本に爬虫類のように、へばりついている。

私は、疲労と倦怠と、そして孤独のなかで、むしように人恋しくなっていた。

私は行くあてもなく、川に沿って只足にまかせて歩いていった。

街にも、ようやく灯がついた。

あの一軒一軒の家にも、それぞれ変った生活が営まれているのだなあと考えながら、私は私に縛られてくれる女性が現われるような気がして仕方がなかった。

明るくて温かそうな部屋で、真白い肌の若い女性が、私に縛られるために待っていてくれる。私はその想いのなかに溶け込んで、どす黒く淀んだ水面の下に溺れてゆく。泡立てながら、静かに。

私は、縄を手にして近づいてゆく。

柔らかく白い肢体はうねり、濡れたような足の拇指が蠱惑的に私を誘うのだ。

(水川 潔)



私が奇クの編集部へ手紙を出したのは、三月の中頃だった。

丁度、万国博が開幕したときだったし、私は学校が休みだったので、丁度いい機会だと思ってモデルになってもよいという便りを出したのだった。私の彼が奇クの愛読者だったので、下宿で時折り見せられて、よく知っていたのだが、自分がモデル志願を試みようなどとは夢にも思ってもいなかった。

それがなぜ急にモデルになってもよいなんて手紙を出す気になったのか、それは自分で

<告白>

【私の緊縛日記より】

白^{しろ}
い
陣^{じん}
痛^{つう}

前^{まえ} 田^だ 真^ま 知^ち 子^こ

もはつきりとわからない。でも、普通の人にとって、自分の行動に一つ一つ理由をつける人ってあるだろうか。

自分の心の中にわだかまっている、いろいろのしこりを願って考えてみると、その頃、私は京都や奈良へ行ってみたいと考えていたことは事実であるし、それに、出来たら、万国博を見てみたいとも思っていた。

しかし、私たち学生にとって、新幹線の東京―新大阪間の往復運賃だって、ちょっと、お小遣いで、というわけにはゆかないし、そ

れに宿泊料や万博の入場料、食事代となるととても調達に自信がなかった。

そんなわけで、この機会に、交通費と宿泊料ぐらいを負担して貰えたら、という軽い気持ちで「もしお許し下さるなら、いつでも、そちらへ参ります」と書き添えたのだった。

では、そういった事務的な意味だけで手紙を出したのかというと、そうでもなかった。

添布した一枚の写真にしても、一年半前の二十才になった春に写したもので、現在二十才の私にとっても、少しでも若く見てほし

いという気持があった。二十才のときと、十二才のときとで、どのくらいの容姿に差があるとも思われないが、やはり私は、若い日に写したものを選んでしまった。

そして、編集部宛の文章としては

『私は貴誌を読みはじめてから約二年になる愛読者でございます。私の彼にすすめられて読みはじめたのでございますが、彼は実践派でないらしく、私の身体に指一本触れることありません。最近殊に学内斗争のリーダーとして活躍している関係上、逢うことも間違になっております。そんなとき、貴誌の女性モデル募集の記事を読みまして、何かしらいたたまれぬ気持になり、思わず筆をとってしまいました。今まで一度も縛られたこともありませんし、SMに関しまして、貴誌を読みはじめて日も浅く、ましてやモデルとしての経験など、まったくございせんが、何とぞよろしく御指導お願いいたします』

と、書き、それに、身長、体重、バスト、ウエスト、ヒップの寸法を書いた。更に略歴の項には、現在在学中の大学名も書き、連絡場所は、下宿先にしておいた。

私の期待にも拘らず編集部から来た返信は「今暫く待ってほしい追って通知するから」

という簡単なものだった。

七月に入ってから、私は夏休み中に上阪したいという便りを出した。多分に万国博見物目当ての督促だったが、これに対して編集部からの返信はなかった。

私は失望した。

そうして、遂に万国博への夢は消えた。

秋風が吹きはじめ、私は再び学校へ通いだした。来年の春は卒業である。最後の学園生活だと思つと、しておきたいことが山程あるように思いながら、それでいて、なんとなく手持ち無沙汰な瞬間が、私の心をいらだたせるのだった。

九月の末、忘れた頃になって、やっと編集部から手紙が来た。

「十月以降だったら、いつでも御希望の日に上阪されまし。交通費、宿泊費、日当、それにモデル料支給」と事務的な連絡事項につけ加えて、「失礼ですが」と五千円札が一枚同封されてあった。丁度試験休みで身体はあいていた。

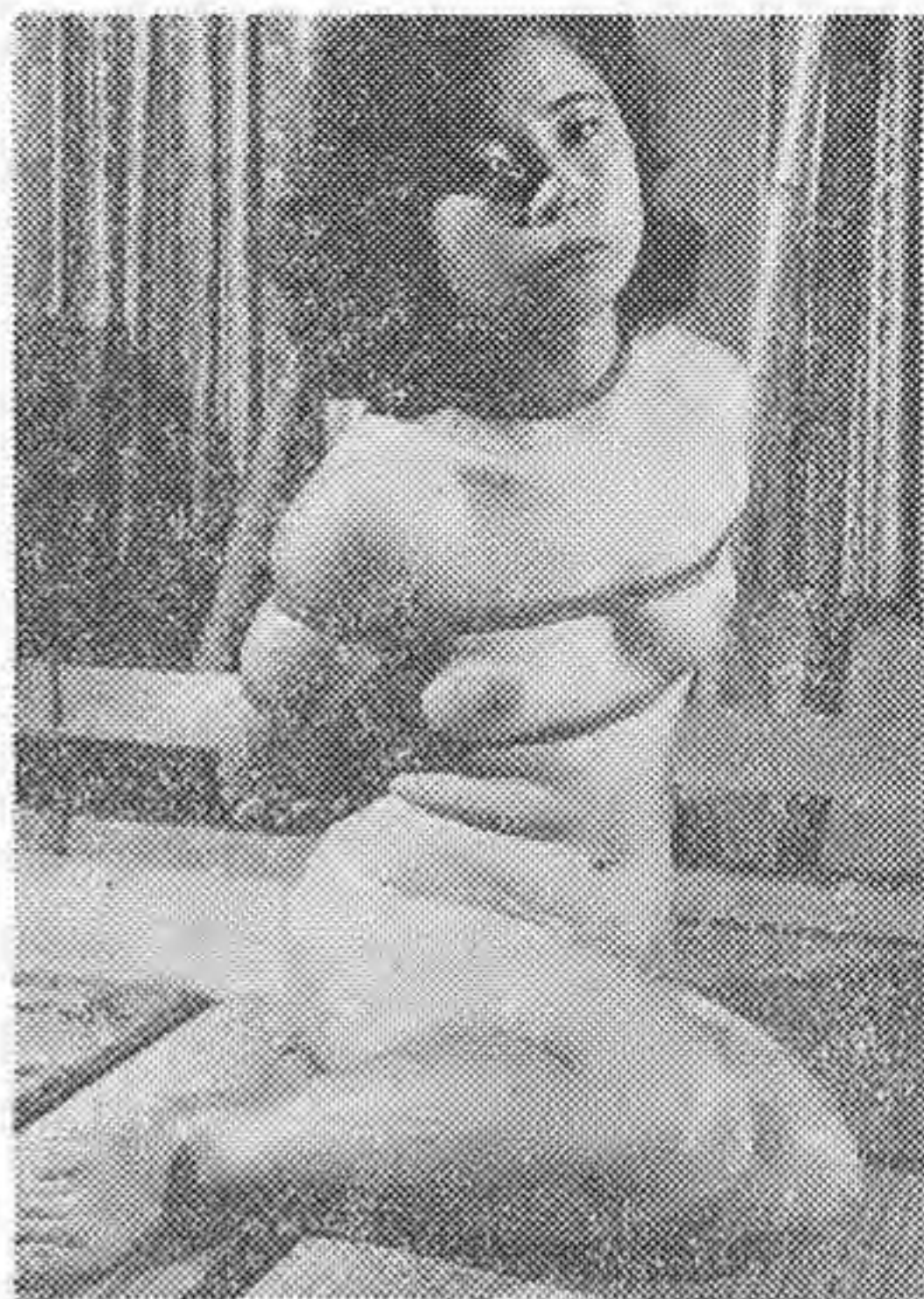
私は早速、法華クラブの



京都店075(371)2181番へ電話して空部屋を確かめた上、シングルの部屋を予約した。その足で東京駅の八重洲口で、十月五日、ひかり19号10号車、東京―京都間の切符を購入した。

速達で奇く編集部へ出した手紙――。

「お便りありがたく頂戴いたしました。十月五日、ひかり19号の10号車で、京都駅まで参りますので、よろしくお願い申し上げます。京都着は午後〇時十分でございます。京都で宿(法華クラブ)をとっており、京都見物もしたいと考えておりますので、よろしく、お含みおき下さいますよう、重ねてお願い申し上げます。列車が着きましたら、ホームでお待ち



いたします故、お迎えにきて頂ければ幸せに存じます。

かしこ

前田真知子

十月五日の午前十時前に、私は東京駅のホームに現われた。

幸いE席がとれたので、私は窓側に坐ることが出来た。三時間十分の孤独のひとつときは私に思索の時間を与えてくれた。

曇り空から時折り薄陽の洩れる秋空は、どんよりと重く淀んだようで窓外に移り変わる景色も、さして私の注意をひかなかった。

それよりも、私の心は私の身体の中を抜けて、遠くの方を飛んでいた。

け。

でも、とっても素敵だった。

今、これから訪れる憧れの京都が、私の胸いっぱいにはひろがっていく。

あの、心洗われる思いがした二尊院の鮮やかな紅葉の色が目の前に浮かんでくる。

徒然草で馴染の嵯峨の清涼寺や仁和寺。そして二尊院の総門を右手に出て、昼でもうす

暗い藪道を歩いて、向井去来と松尾芭蕉で有名な落柿舎を訪ねた。

なにしろ、新幹線で朝東京を経て、その足で来たので、駄歩で化野の念仏寺へまわったのが、やっとだった。

単調な列車の振動に揺られながら、私は快い夢幻の彼方をさまよっていた。

今年の秋のことであった。

学園紛争の余波で、私の大学も休校になっていたので級友と二人で、貯金をはたいて京都へ遊びに来てしまったのだ。

と、いっても時間的に余裕はあったのだが軍資金が足りなくて、たったの一泊二日、まわったのは、嵯峨野と東山めぐりだ

徒然草で兼好法師が「あだし野の露きゆるときなく鳥辺山の烟立ち去らでのみ」と書いている、この嵯峨の化野念仏寺と、その翌日朝早くから訪ねた東山の鳥辺山のあたりが、私たちの京都見物の皮切りであった。

二日目は、早朝から宿舎を出たので、昨日のあわただしさに比べて、少しはゆっくりとまわることが出来た。

市電五条坂で降りて、五条坂を登ってゆくと清水坂と交った角に、七味唐辛子の大きな店がある。清水の舞台で有名な清水寺へ詣ったあとで、この七味唐辛子の店のところまで引き返して、ここから産寧坂の石段を下って円山公園へ向かった。

道の両側には、小さな版画屋、陶器店などが並んでいるのを覗きながら、八坂の塔を見て霊山観音の前に出た。入場料代りに一本十円の線香を買って高台寺へ入り、コンクリート造りの巨大な観音様を仰ぐ。観音様は女の神様だから親しみが持てるのだが、コンクリート製というのはどうもありがた味がない。

高台寺の石段を降りたところに、文之助茶屋という茶店がある。ここで、二人で甘酒を飲む。東大谷の背後の山にある夥しい墓石を眺めて、この辺から清水山にかけて、昔の鳥

辺山なのかと思った。

「途中で、道に迷って、『この先行き止り』という立札のある所を行くと、藁葺きの小さな家があって、それが西行庵と芭蕉堂の裏側であるらしいのが、後でわかった。」

円山公園へ出たところで幸いにタクシーが拾えたので京都駅へ走らせたのだが、目の前に建っている知恩院へも行ってみたかった。

僅か二日のあわただしい京見物ではあったが、京都こそ心の故郷という気持を押さえることは出来なかった。特に私達のように、国文学専攻の者にとっては、一木一草といえども懐しくて仕方がないのだ。

そんな懷想も、列車が名古屋へ着いた途端現実に引き戻されてしまった。

二分間停車。

乗降客の入れ替えがすんで、再び列車は滑るように発車した。

京都まで、あと四十八分。

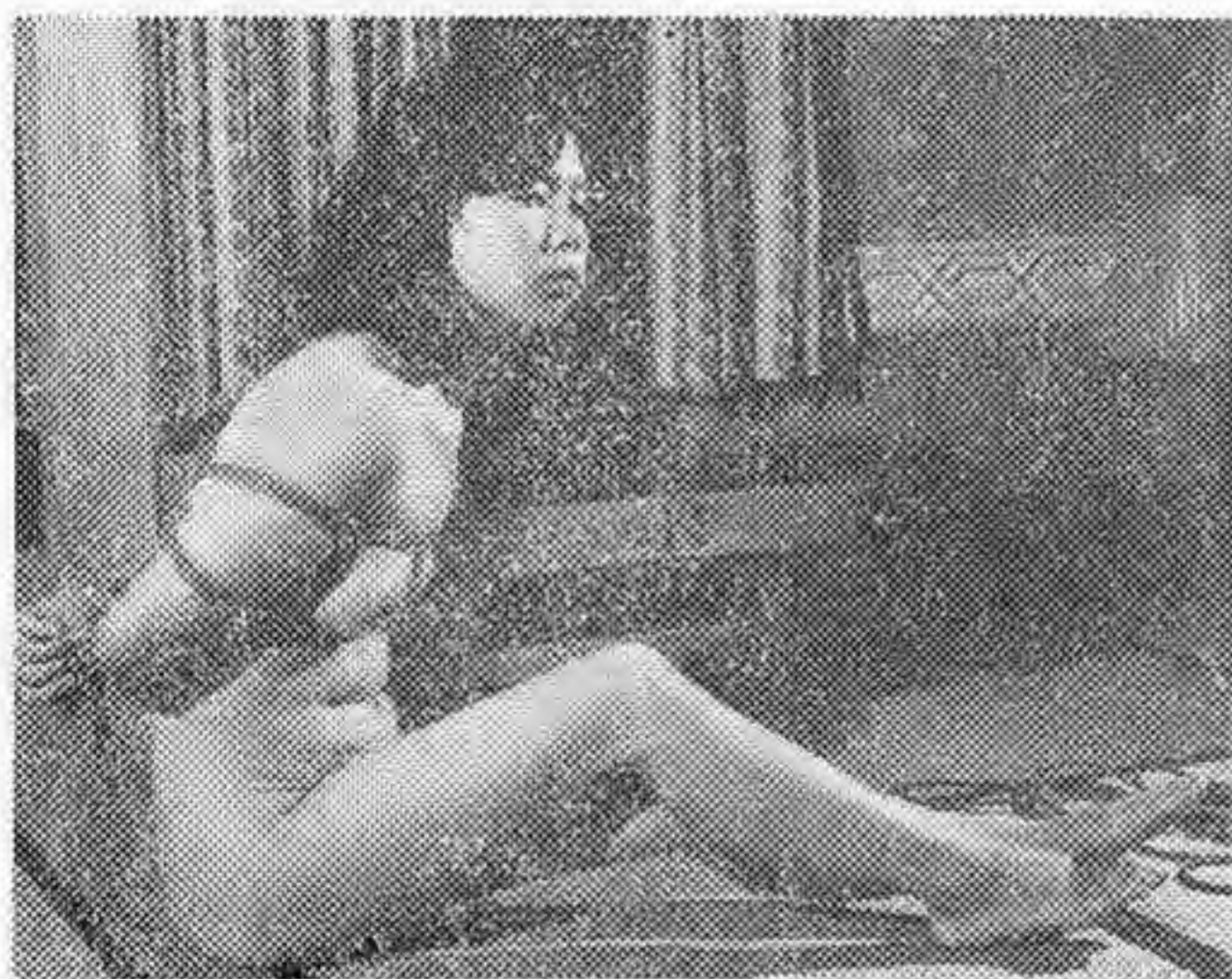
私は急に不安になってきた。

奇ク編集部へ一方的に速達を出してしまっただが、果たしてホームまで迎えに来てくれるだろうか。若し迎えに来てくれたとしても、私の送った、あの小さな写真だけで、私を見つけることが出来るだろうか。

心を落着けるために、化粧室へ行って帰ってくる、右手にチラッと琵琶湖の湖面が光って見えた。

もう、京都がすぐそこである。私の胸さわぎがひどくなる。

始めて縛られるという不安と、始めて異性に肌を見せ、しかも、写真に撮られるという圧迫感が、私の胸をしめつける。どうしよう、と思う。



列車は時々刻々と京都駅に迫っている。

私は彼のせいだと思いたかった。私に奇クを見せて啓発しておきながら、一向私にかまってい呉れないのだから、私がこのように、モデル志願をするのも、彼のせいである。

そんな考えから、私の心は少しは落着いてきた。

アナウンスが京都到着を示げて間もなく、列車は京都駅のホームに滑り込んだ。

私は十号車から降りると、そのままホームを離れずに人混みのすくのを待っていた。

五分程して、人の混雑の途絶えたとき

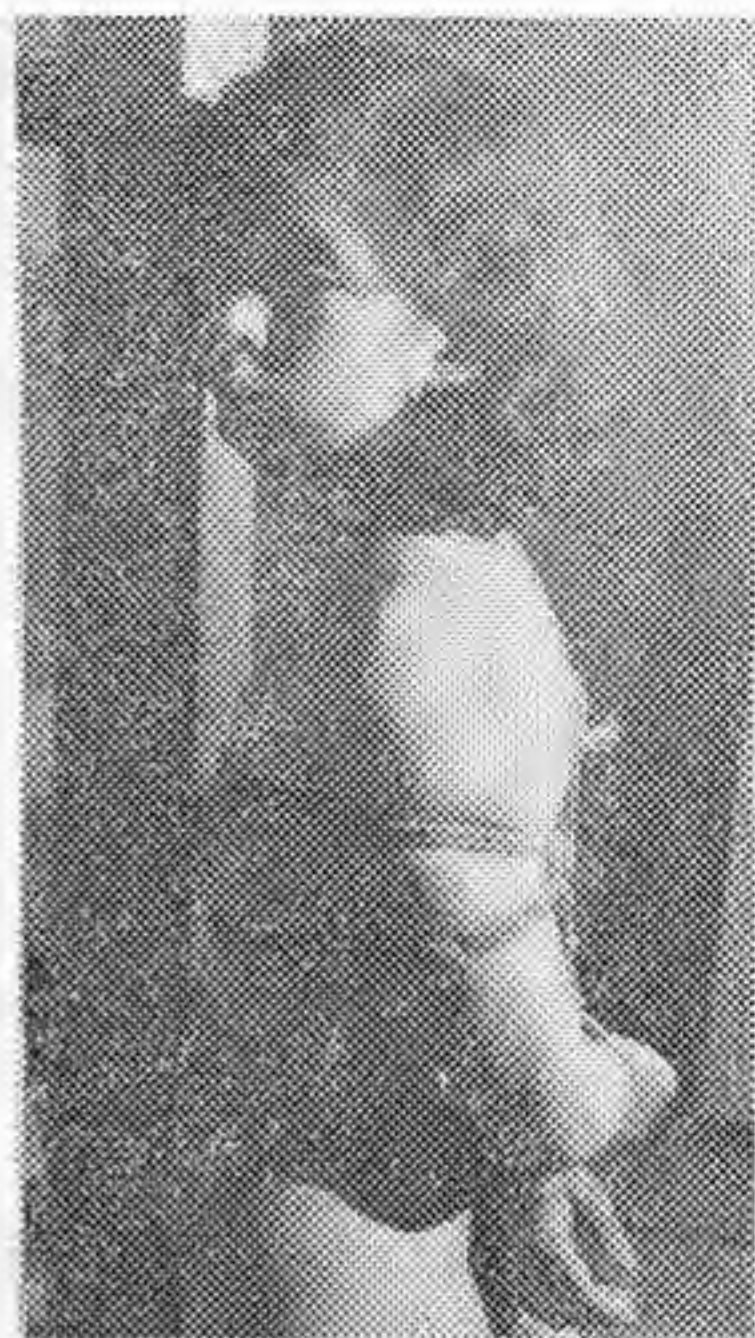
「失礼ですが、前田さんですか」

と、中年の紳士が近寄ってきた。

「はい、前田です」

私は自分でも不思議に思うくらい、平静に返事できた。つい、さっきまで、胸がドキドキワクワクしていたのに、今ではむしろ、冷たいくらいあっさり返事が出来た。

私がひかり19号の10号車で、京都へくるのを知っているのは、奇ク編集部よりない。だから、今、ここに迎えに来ているのは、彼が自己紹介するまでもなく、わかりきっているのだが、私が車に乗せられて見知らぬ街を走りだすと、急に淋しさがこみあげてきた。



もない冷たい女と誤っているかもしれない。

お上手を言ったり、お愛想を言ったりすることは、学生の私には出来ない相談である。

思っていることや考えていることを、そのまま言葉や態度に現わすことが至極自然であると、馴らされている私にとって、この際、どんな態度をとったらいのか、わからなかった。

私が世間話にもつてこないで、固くなっていると考えたのか、相手の紳士は、それ以上話しかけてくることをしなかった。

車が何処をどう走ったのか、地理不案内の私にはさっぱりわからなかったが、四、五十分も走っただろうか。とある、西洋のお城のような恰好をしたモーターに着いた。

身長一六二センチ、体重五一キロ。

私は自分の身体には自信があったので、裸になること自体、別にどうという抵抗を感じないが、自分の裸身を異性の手で、始めて縛られるということに関しては、とても平静でいられない気持であった。

SとかMとか、いうことについても、概念的には本や雑誌を読んで、凡その知識を得た

つもりでいたが、いざとなると、さて、何かなんだか、さっぱりわからない。

冒険心とか好奇心、それに未知のものに対する探求心とかいったものだけでは、とても自分から経験してみようとは思わないだろうと考えられる。

そこには何か、本能的な吸引力があるのだろうと思うのだが、それは言葉に表して、はっきり言えないもどかしさがある。

車を運転していた若い人が鞆や三脚を持って二階の部屋へ運んだ。

部屋へ落着いて、私がお茶を飲んでいる間、中年の人は、二台のカメラにフィルムを入れ

たり、照明器具を組立てたりしていたし、若い人は浴室の湯を見に行ったり、敷いてあった蒲団を片づけたり、せわしく立ち働いている。私が手持無沙汰で、立ったり坐ったりしている、浴室の用意が出来たので、お風呂へ入りなさい、と言われた。

「ええ」と返事したまま、モジモジしていると、「さあ、こちらですよ」と、若い男の人に案内された。

浴室には、湯の溢れた白いタイル張りの浴槽があった。私が足を伸ばしても、まだ十分余裕がある広さで、窓からさし込む明るい陽

陸橋を渡ると京都タワーをあとにして、車は市電の通る道路を右折していった。

「十月に入っても、ムシムシと暑いですね。新幹線では、三時間も退屈だったでしょう」

そう話しかけられても、私はただ「はい」と肯定とも否定ともつかない、曖昧な返事をするより仕方がなかった。

私の頭の中には、誘拐団にさらわれてゆく自分の運命を、自分で想定して考えた筋書きが充満していたのだ。

私は車の後部座席に後手に縛られて押し込められているのだ。救いを求めるために、声を挙げようにも、大きな絆創膏をべったりと口いっばいに貼られているので、ムムムと呻くより仕方なかった。

そんなことを考えている私を、とりつく島

ざしの中で、こぼれ落ちる湯水の玉が、きらきらと水晶のように輝いている。

私は全身を湯の中に浸した。

のびのびとした抱擁感が、私の全身を包んで思わず両足を思いきり伸ばしてしまった。

今朝まで、東京にいたなんて、夢のような気持。今、ここにいる自分が現実で、昨日までの私の生活は、厚いベールに霞んでしまった忘却の彼方の世界。そんな思いが、ふっと私の頭の中をよぎってゆく。

まわりの白いタイルに反射した陽光が、私の裸身にふりそそいで、濡れた私の肌は、真白い大理石のように美しく見える。

石鹸の泡をいっぱいたてて、私は自分の全身をゆっくりと洗ってゆく。

石鹸を流し落として再び浴槽に入る。

今までの緊張がはぐれて、肩先から力が抜けていって、けだるい気持——。

ふんわりと全身を湯に浸しながら、首筋を浴槽のふちに当てて仰向けになっている。美容体操の真似で、伸ばしたまま右足を挙げ、次に左足を挙げる。

湯が水玉となって美しく散ってゆく。

全身の力が抜けて次第にねむくなる。

白い雲の上に自分が浮かんでいるようだ。

と、突然、窓の方から汽車の汽笛の音が聞こえた。

私は、ふっと現実に取り戻された。

あつ、こんなことはしておれない。

あわてて浴槽を出ると、身体を拭くのも、そこそくに浴衣をまとって部屋へ戻る。

こんな長湯をして、この人達は私のことをなんと思っているだろうか。図々しい女だと見ているかもしれない。

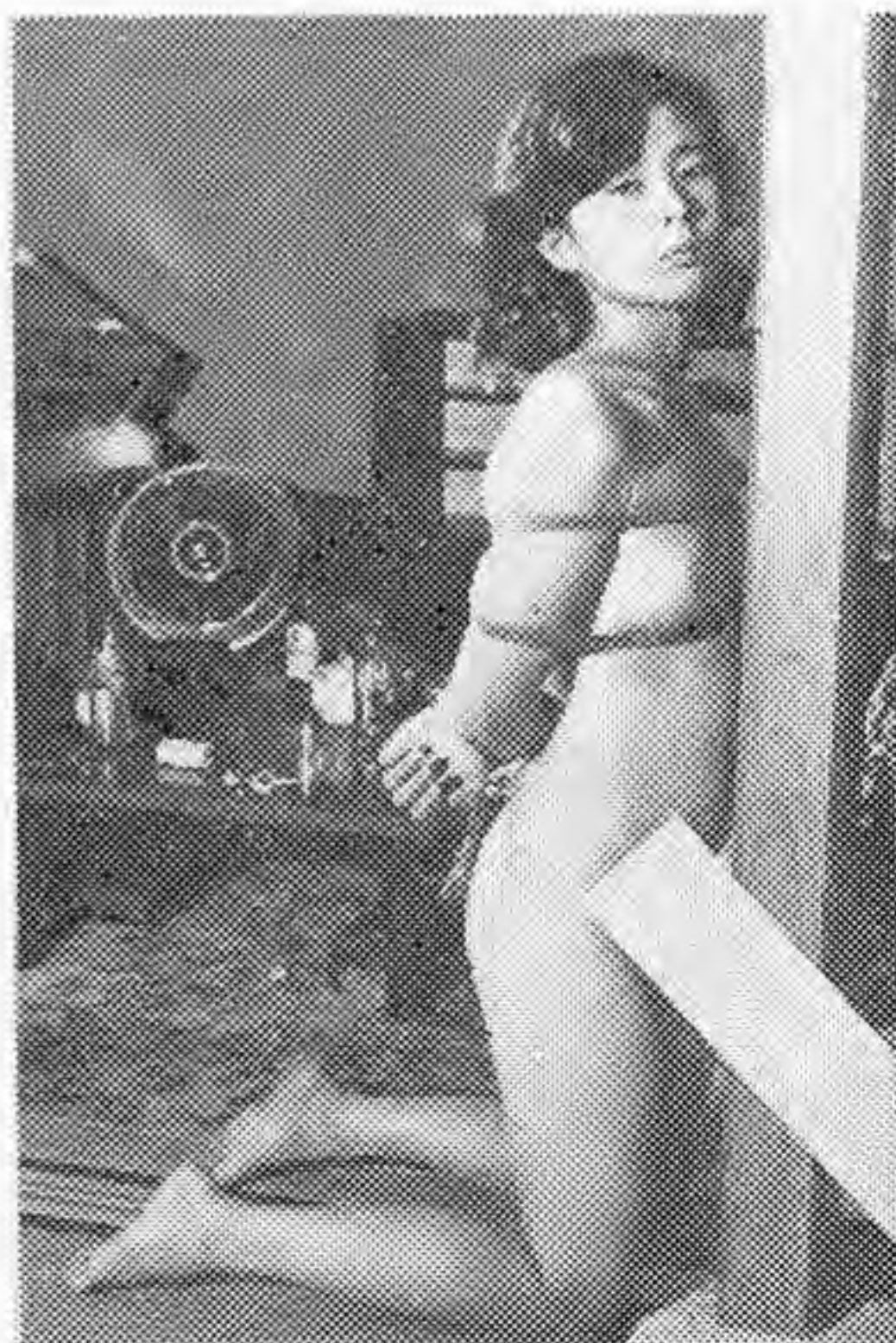
私は部屋の入口のところで正座して、浴衣の襟をかき合わせながら小さくなっていた。

部屋の中は電気のコードが畳の上を這っていて、もう既に準備が済んでいるようだ。

「そんなに固くならなくてもいいですよ。あすこに鏡台がありますから、お化粧をされたらどうですか」

年輩の方が親切に言っただけだったが、私は今まで化粧なんてしたことがないのだ。

「あの、わたし、お化粧なんてしたことがないんです。それに、化粧道具も持っておりま



せんし——」

「ふん、そうですか。お化粧なんかしなくても美しいですからね。肌は白くてすべすべしていて、それに凄く美人だもんな。なまじっか、変なものを塗りたくらない方が、清純な美しさが発揮されるかもしれないな」

そんな風に言われると、私もやはり女だもの、美しいと言われると嬉しく感じる。しっかりと合わせていた太股のあたりの力が少しづつゆるんでゆくような気持だ。でも、湯上りのせいもあるのか、あわてて上ってきて十分に身体を拭けなかったせいか、腋の下からすうっと汗のようなものが流れてゆくのだっ

た。

私は、これから処刑される女のように、かたくなに正座をし続けた。自分でも相当長い時間のように思えたが、実際は僅か、一、二分であつたかもしれない。

「始めは固さをほぐす意味で、二、三枚カメラテストをしてみますから、浴衣を着たまま、こちらへ来て下さい」

そう言われて、私はホッとした。いつ裸にならなければいけないのかと、そのことばかり、ひやひやしていたのだから、浴衣のままと言われて、ホッとしたのだ。

誘われるままに柱の前に立つ。ライトが点灯されて、明るかった部屋がまばゆいばかりに一層明るくなる。二台のカメラのピント合わせが行われて照明器具の移動も行われる。

「では、これから始めますよ」

そう言われていよいよ本番である。

まごまごして、浴衣をやはり脱がしてもらった。

白い肌がそのまま、あらわになって、ライトに照らしだされて、いたたまれない気持ちでも、傍で見ていたら、表面で見る限り、私が平気だったように思えるだろう。というのは、「いや」とか「あら」とか、声も出さな

いし、うずくまったり、前を手でかくしたりはしないで、ただじっと突っ立っているばかりだったから。

私としては、そんな声を出したり、いろんな仕草をするのは、自分にとっては一層恥かしさを増すことになるのだから、こうして、じっとしているのだった。

私は生まれて始めて縛られた。

黒ずんだ麻縄で、後手に縛られてから、胸に、乳房の上と下を二巻き、それから首に縄を掛けられた。苦しくないようにと頸に近い方へ縄をずらしてくれた。

手加減して縛ってくれたためか、縄そのものは取り立てて痛くはなかったが、麻縄のトゲトゲが肌にチクチクして、それが、いかに自分が全裸で縛られているということを、実感として私に味あわせてくれる。

後手首がきっちり縛られ、それが首の縄とつながっているの、高く挙げたまま、下げることが出来ないのが、身の置きどころのない無防備感となって、全身をぶるぶるとふ



るわせる。両膝の力がなくなって、なんだかがくがくするような気持ちである。

二つ折りにした一本の麻縄の端から端まで使って、本当に、す早い縄さばきだったのであつという間に、私は身動き出来ない恰好にたちどころに縛りあげられていたのだ。

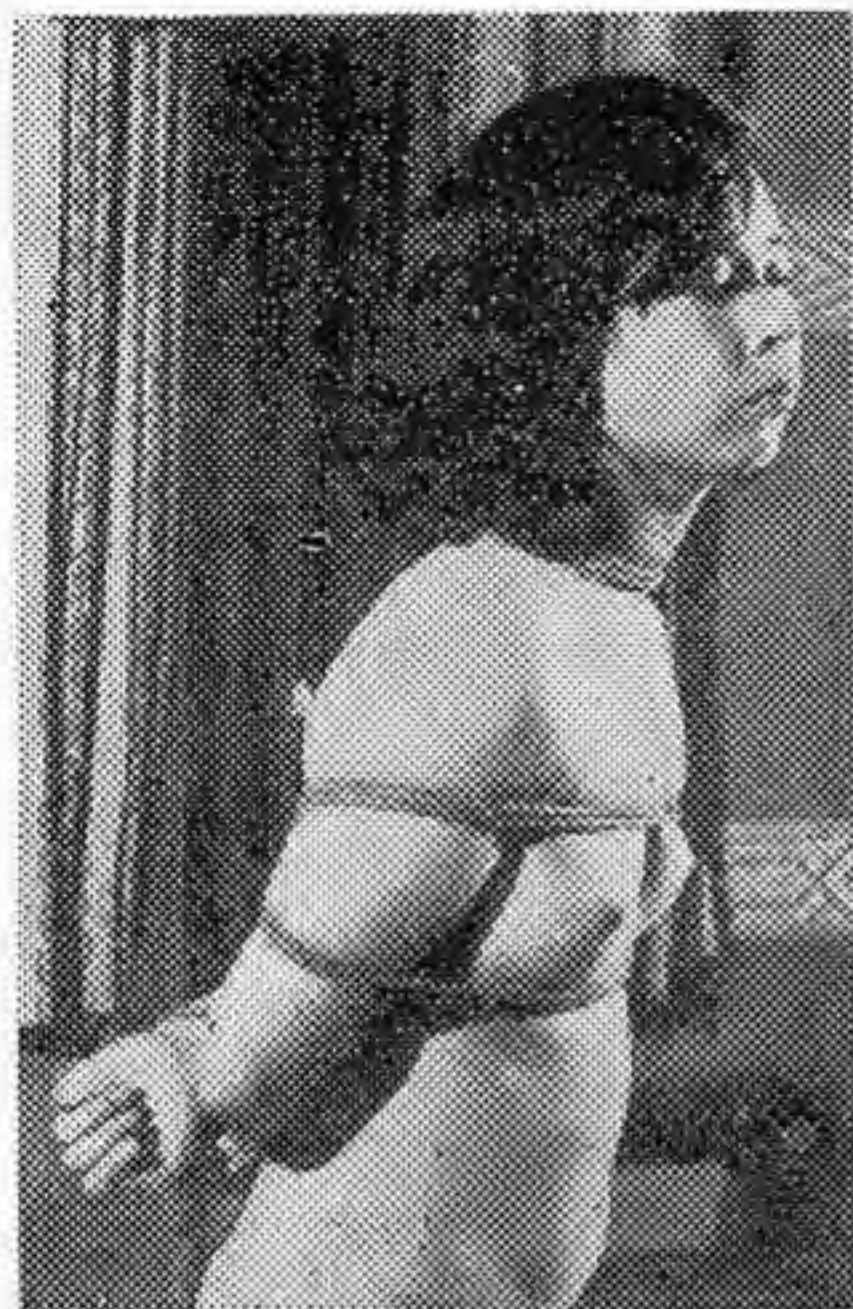
ピカッ、ピカッ。

右と左のカメラから、殆ど同時にシャッターが切られたのか、二度、閃光が放たれた。

私はなんのポーズをとることもなく、正面を向いて、突っ立ったままだった。

カメラテストというのだろうか。

私は首に回った縄が、ようやく息苦しく、縛られた後手首を下げると、一層首が締まる



ので、顔を紅潮させてじっとこらえていた。
「しかし美人だな。プロポーションもいいしそれに、肌の白さ美しさも抜群だな」

「いや、本当に。こんな綺麗な肌に縄を掛けるのは勿体ない気がするよ」

「勿体ないというより、痛々しいという感じがするのだが、それがまた責めの感じを大いに出すのだから、いい写真がとれるぞ」

二人は、そんなことを喋りながら、私の全身をじろじろ眺めるので、私はもう穴へでも入りたい、恥かしい気持で肌を染めていた。まるで人身御供になっていて、品定めされているような、お尻のあたりから背中へかけてモゾモゾする気持——。

「早く、早く、変わったポーズをとらしてV

私は自分の無防備の前面を、明るいライトの中にさらけだしているという、いたたまれない気持を心の中で叫んでいた。

全裸のまま縛られて立っている私の全身を、二人の男性は舐めるように、視線を這わせている。始めての経験である私にとってはこれだけでも、たまらない拷問である。

ライトが消えた。

窓からさし込んでくる光があるので、私の身体は、白くぼやけて見える。今まで気がつかなかったのだが、次の部屋の壁にはめ込まれている鏡に私の姿が映っている。

鏡の上下の幅がないので、頭と脛のあたりは映っていないが、胸から膝頭のあたりまでが立っている私の方からもよく見える。

鏡にうつっている自分の縛られた姿。顔が見えないので、なんだか他人の身体を眺めているような突き放した目で見る事が出来る。

二人の男性は、私のことは忘れたようにカメラをいじったり、コードを差し込んだり抜いたりしている。

ここで撮影されるのかと思ったのだが、そこまで縄を解かれる。浴衣をまとして休憩に入る。二人は煙

草に火をつける。

私は冷蔵庫からバヤリースオレンジを出して貰って飲む。もう十月だというのに、室内はむんむんする熱気に汗ばむくらいだ。

僅かワンカットの撮影であったが、私の気分は非常に落着いてきた。今だったら、何を話しかけられてもスムーズに返答出来るそうである。今まで、「ええ」とか「はあ」とかいふ返事しか出来なかったので、きっと冷たい女だと思われるかもしれない。

手紙では、あんなに書いておきながら、いざ逢ってみると、わたしって、至極つまらない女に見えるのじゃないかしら。

一息つけて、窓を開けて煙草の煙を追いつてから、再び撮影が開始される。

襖をはずした鴨居へ両手首を揃えて縛りつけられる。このポーズも、さっきと同じように、前面を無防備にさらけだしたポーズで、とりたてて、これといった肉体的苦痛はないのだが、如何にも晒されているという感じが私の心を妖しく泡立たせる。

三回程シャッターを切ったところで、このポーズも終りで縄を解かれる。浴衣を着せられて再び休憩。

さて、愈々これから、今日の主要な目的で

あるカラーのスライドを撮影するのだ、と言
い渡される。今までののは、貴女が始めてなの
でカメラに馴れて貰うためにモノクロで撮っ
たが、これから撮るものは、ポジのカラーだ
から露出をびったり合わせなければいけない
のだ、と私とライトの距離をテープで測る。
「ああ、それから、雑誌には掲載しても構い
ませんね。編集長からは、そう伺ってしまし
たが……」

「ええ、結構です」

私は思わず、そう答えてしまつて、

「名前だけは、匿名にしてほしいですけど」
とつけ加えた。

「ああ勿論ですとも。貴女の方で、特別にこ
んな名前にしてほしいという御注文がなけれ
ば、編集部の方で作ってもいいんですよ」

「はい、よろしく願ひします」

私は素直に願ひする。本名でさえなけれ
ば、どんな名前でも構わない。

「あの、それから、今日写したお写真、わた
しに頂きますかしら？」

「そうね、カラーの方は明日直ぐというわけ
にはいきませんが、白黒の方でしたら、今晚
紙焼きして、明日、お見せしましょう」

そこで、私は後へ手首を回して、縛られの



ポーズをとった。

後手首を揃えて縛られて、それから余つた
縄を胸へまわされて、首を締められると、今
度は股の間へ縄をまわされた。これが股間縛
りというのだろうか。私は自分のお尻の間を
トゲトゲしい麻縄が通つてゆくを感じると
思わず身体がぶるぶるっとして、背中に氷が
走る思いがした。

おぞましい異物感に、心持ちが二股で歩い
ている私の肩口を掴んで引き据えられると、
「坐りなさい」

と、場所を指定された。それから、ポーズ
をとらされ、目線の位置まで示された。

言われたポーズに対しては、「はいはい」
と私は至って素直であった。

立ったポーズ、坐ったポーズ、中腰のポー

ズ、それに横臥したポーズ。
合計二十枚ほどのシャッター
を切る間、一枚一枚と注文をつ
けられ、その度にライトの位置
も変更したので可成りの時間が
経った。

寝ころがったとき、首の縄が
締つて思わず知らず私の顔が赤
くなつたというので、締つた縄
の間へ指を挿し入れてゆるめて呉れた。

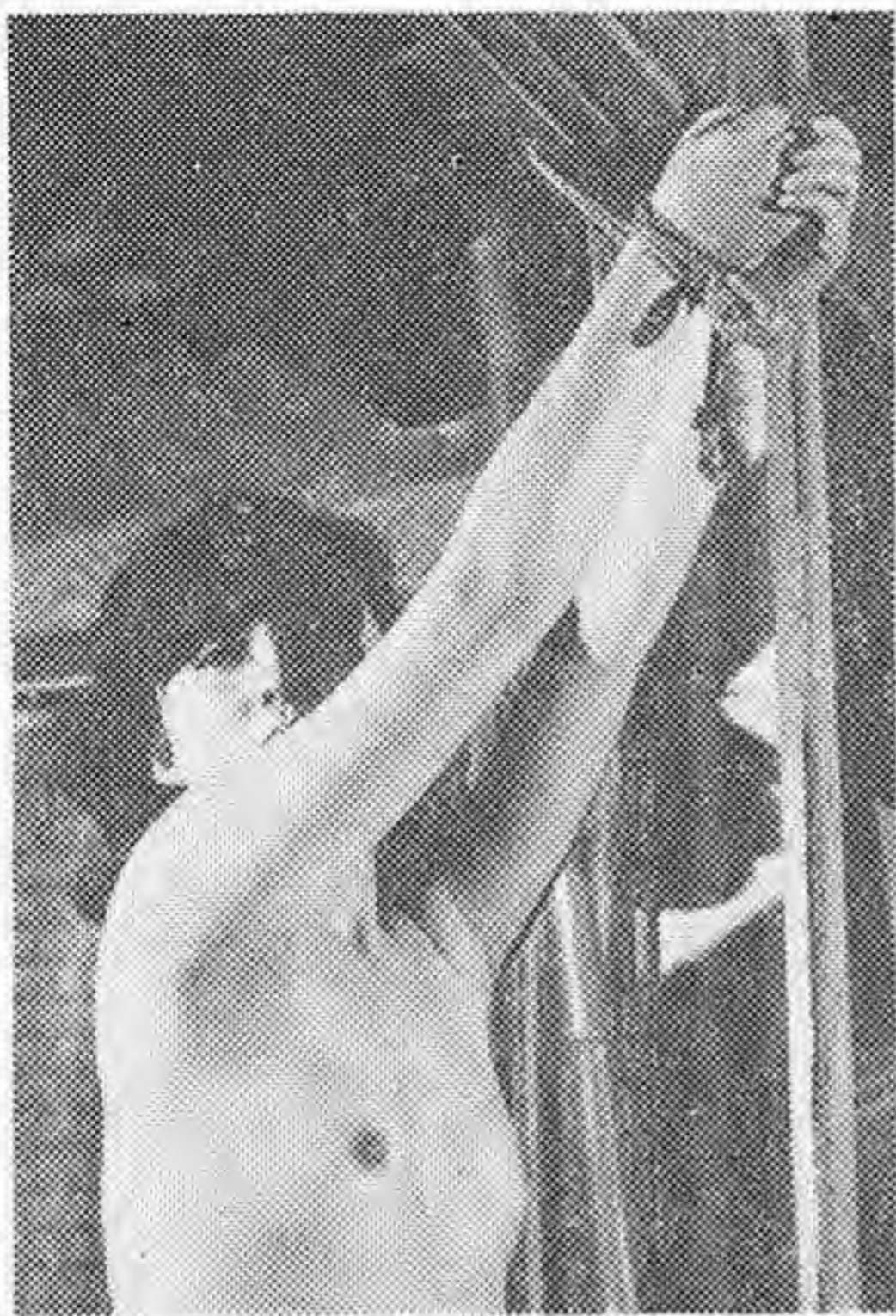
慣れというものは恐ろしいもので始まつて
から、まだ二時間ばかりしか経っていないと
いうのに、私は縛られたままで、右へ転がさ
れ左へ転がされても、恥かしくなくなつて
いた。それよりも、どうしたら美しく見える
か、ポーズを指定される方の意図に添ふこと
が出来るか、そのことばかり考えていた。

左腕を下にして横臥していると、乳房の下
あたりを、すうと汗の玉が流れ落ちた。

下になった腕の縄目が、ぐつと締つて二の
腕のところが痛い。もう痺れてしまったのか
後手首の痛さは、もう少しも感じない。

私つて、ほんとうにMかしら。

彼は私の身体に指一本触れようとはしない
のに、口では私に



「君は完全なMだから、立派な緊縛モデルになることが出来るよ。一度、志願してみてはどうか。きっと珍重されるよ」

などと言う。そんな彼の言葉がなかったら私はモデル志願など、しなかったと思う。

彼が私のどこを見て、Mだなんて言ったのだろうか。私は彼に縛ってほしいなんて言ったこともないし、彼もまた、私を縛りたいなんて、一回だって言ったことはない。

彼の下宿で、机の上に置いてあった奇クを拾い読みしている私に対して

「なんだか熱心に読んでいるな。こんな雑誌に興味があるんかい？」

と問いかけられたとき

「ええ、一寸面白いんじゃない」

そう答えて読み続けたことがあった。

彼は理屈っぽい議論を吹きかけてくる割には、私の身体に関心を持っていうようではなかった。下宿に遊びに行っている間中、私も肩の荷をおろして喋れるので、なんだかんだと、心おきなく言ってみると、いつも彼は彼なりの理由をつけて反駁してくるのだ。

言葉の遊びといってしまうえば、それまでだが、言葉と言葉のやりとりが、私達若い者にとって、一つの重要な課題であった。

実際はなにも知らないくせに、知ったかぶ

りをしている青二才なのかもしれない。それが証拠には、世の中のこととなると言葉遣い一つに当たって、自分の思っていることの十分の一も喋れないもどかしさを味わう。

「はい、そこでうつ伏せになって——」

そう命じられて、私はハッとした。

あわてて、自由になる脚

にはずみをつけて身体をごろりところがす。

だらりと力を抜いてはいけないというので顔を思いきり畳から上げ、両足に力をこめてそりかえる。すべて布片一枚用いないポーズなので、ファインダーを覗いてからも正を求められ、シャッターが切られるまで、二度も三度もカメラの位置や角度も変わった。

やっとな撮影が終わり私は入浴させられた。

「貴女は京都見物が御希望だそうです、明日は午後二時に迎えに行きますから、それまでに宿舎へ帰っていて下さい。これは交通費と今日の日当、モデル料です。それから原稿も書かれるという話だったですが、出来たら今晚にでも書いておいて下さい。原稿料の方は別にお払いますから——」

洋服を着終った私は、白い封筒に入った金を貰った。ずしりと厚味のある紙幣の感触が私の今までの疲れをふっ飛ばした。

宿舎である法華クラブまで送ってもらった私は、夜の京都を見物する暇もなく、机に向かったままで、今日一日の日記をここまで書いた。明日はまた、私にどのような運命が待っているか知らないが、私は寝る前のひととき、入浴してテレビでも見ようかしらとペンを机に置いた。

懸賞告白応募作

私生活

青木一夫



カット・春川ナミオ

私が、二年前に木原瑠理子という女性を知ったのは、私の後輩から同郷の女性として紹介されたのがきっかけでした。当時彼女は、東京でも有数といわれる大きな卸売市場の総務課に勤務していました。

彼女の容姿は、まあ十人並と言えるでしょうが、彼女の潤んだような目、日本人離れした個性的な鼻、ちょっと厚くて肉感的ではあるが、そのくせ真赤なバラを連想させるような唇、大きくてしかもプリンとしたバスト、蜜蜂を想わせるような細くくびれたウエスト

そして均整がとれてすんなり伸びた脚。私は一目見た瞬間から彼女を女性の中の女性として意識したことは確かでした。

それから私は毎日のように彼女の職場に電話して、彼女の欲心を買うのに懸命になり始めたのでした。そのうち、彼女の方も私を意識するようになったらしく、土、日曜には必ずデートする仲になるまで、それほど時間を要しなかったのです。

彼女自身、千葉の田舎から单身東京に出てきての一人住まいだったので話し相手が欲し

かったのでしょう。

デートが度重なるごとに、親密の度の深まるのは当たり前な事ですが、お互いに悩みを打ち明けあったり、過去の異性関係など親にも云えないようなことを、何の気かねもなく話し合える仲に発展していったのです。

○

単なるデートが半年以上も続いたある夏の土曜日の夕方、私は映画にでも誘うつもりで彼女の部屋を訪れました。親しさまぎれに、ノックもしないで戸を開けて中に入ると、彼

女はスリッパ姿で丁度足の爪を切っていると
 ころでしたが、一瞬ハッとしたように、
 「ノックもしないで女性の部屋に入るなんて
 失礼ね」

「いやー、すまんすまん、そんな恰好でいる
 とは知らなかったもんで」

「いいわよ。あんただから安心したわ。今、
 着替えしようと思ってストッキング脱いだら
 足の爪で破っちゃったの、それで切っていた
 ところよ」

「君の素足初めて見たけど、やっぱり想った
 とおり、可愛い足してるね。俺、女性の美し
 い足に弱いんだ。足の爪って、切りにくいだ
 ろう？ 切ってやろうか」

「そうね、とくに親指の爪って切りにくいわ
 ね。本当に切ってくれる？」

「もちろんさ、光栄の至りだよ」

私は彼女の足元に坐りました。瑠理子の足
 は、細くて小さくてそれでいて肉付の良い形
 のいい足でした。

切り終ったあと、私は彼女の視線を無視し
 て彼女の足の指の一本一本に接吻を始めまし
 た。瑠理子は初め足をちょっと引くような動
 作をしましたが、そのままじっとして私が彼
 女の最後の指に接吻し終わるまでだまって見

守っていました。

「そんなに、私の足って美しい？」

「うん、とっても美しい。今までこんな美し
 い足見たことない。でも足だけじゃないよ、
 君の体のすべてが美そのものだよ」

「本当？ わたしね、あんたが大好よ。いま
 でつきあった男の子は、みんなすぐに体を求
 めようとするの。その点あんたは違うわ。つ
 きあってもうだいぶになるけど、今まで一度
 だって求めたことなかったわね。わたしって
 あんたにとって魅力のない女なのかなあと思
 っていたくらいよ」

「そんなことない。君の魅力はたいしたもん
 だよ。なにせ女を知りつくした筈の俺を、こ
 んなに夢中にさせるんだからな」

「うれしいわ」

私は次の言葉をさえぎるように彼女を押し
 倒すと、その瞬間に唇を奪っていました。長
 いキッスのあと、私は彼女のスリッパに手を
 かけていました。

私達はその夜、初めて肉体関係をもったの
 です。

○

逢引きの数が増すに従って、しだいに私達
 は色々なプレーを考えては、実行に移すよう

になっていました。その一つにヒップライデ
 イングがあります。

これはあるゲーム、例えばポーカー、五並
 べ、サイコロなどをして勝敗を決めます。そ
 して勝者は敗者を馬にしたり、顔面騎乗した
 りする権利が与えられるというルールをつく
 りあげていたのです。始めのうちは私も勝者
 になりたくて必至でしたが、段々に敗者にな
 りたく思い始めるようになってきたのは、私
 自身不思議な現象でした。

私にとって勝敗を自由に操作できるゲーム
 は、なんといっても五並べです。

「今日はひとつ五並べで勝敗を決めようよ。
 いいね、絶対勝って、キミを馬にして乗りま
 わしてやるからな」

「いいわよ」

夏の暑い日中というせいもあって、彼女は
 ブラジャーとパンティだけの姿で、あぐらを
 かいています。私もパンツ一枚の姿で始めま
 したが、どうも彼女のセミヌード姿は悩殺的
 です。

私は四三の手を作るチャンスが何度もあっ
 たのですが、わざと分らないふりをして彼女
 に勝たせようとしてしました。碁盤の¾ほども使
 って、彼女はやっと五つ並べました。私はさ

も残念そうにしてみせます。

「やっぱり実力の差だね。さあ約束通りあんたが私の椅子になるのよ。そこにおおむけになりなさい」

彼女は勝ち誇った勇者のように仁王立ちになって、私を見下ろしました。私は内心嬉しにもかかわらず、しぶしぶというゼスチャーであおむけになりました。

彼女は、両足で私の耳のあたりをはさみつけるようにして立ちはだかりました。こうして下から見上げると、彼女が巨人のように大きく見え、何か絶対的な権力を一身に背負って私を完全に威圧するような尊厳なる女神のように見えるのでした。

彼女は徐々に腰を下ろしてきました。私は期待で胸がはちきれんばかりになり、心臓の鼓動も破れんばかりにはげしくなってきました。ついに全体重がかかってきました。私がこの世で最も大好きな彼女特有の甘い芳香がかすかに私の鼻を快く刺激しました。

私の感激はついに極限にまで達しました。それから、私達はガムハイディングをしました。彼女が自分で噛んだチューインガムを、自分の体の好きなところへ隠すのです。そして私が目隠しをして、鼻と唇だけで、それを

捜し出すというプレーです。彼女の隠すところはたいてい耳の後ろとか、へその中とか足の指などですが、時にはとんでもない場所のこともあります。

どこに隠したとしても、私は目隠しをされているので、結局彼女の体全身をくまなく舐めるはめになります。見付けるのも大変ですが、でもそれだけに探り当てたガムを口に入れて噛みなおす感激もまたひとしおです。

○

このようなプレーをしてマゾ的な状況を悦んでいたのですが、しかし私は自分をマゾヒストとは思っていなかったし、また彼女も自分自身をサディストとは思っていなかったでしょう。というのはプレー自体、ゲームによって勝敗が決定されるわけで、私と彼女は全く同権の立場にあったわけです。

そして更に私がマゾヒストとは思えない理由は、過去において私はサディスト的なことばかりやってきたからです。私を少しでも知っている友人達は私のことを「あいつは短気でサディスティックだよ」ということでしょう。

現に私が、某大学の空手部に簿を置いていた頃は、「鬼キャプテン」の異名をとっていた。

ました。部員の中には三人の女性が男子に混じって練習をしていましたが、私は女性に対しても男子と同じようにしごいたものです。空手の練習というものは、経験のない人では考えられないほど厳しいものです。男子学生でも面白半分に入部すると、その練習の厳しさに耐えられず退部していくという例はいくらでもあります。

しかしこの女性部員三人だけは別でした。地獄のような練習の厳しさに彼女らは最後までついてきたのでした。このことは私にとっで、全く驚嘆以外の何ものでもありませんでした。つまり「女性の精神力は男性のそれよりも強し」という観念が私を支配するようになったのはこの時からです。

私は瑠理子に対しても同じような考えをもっていました。おそらく勝気な性格という点では瑠理子の方が私よりはるかに上です。しかし果してそうなのか否かは私の推論の域を出ていないのは事実でした。今、考えてみると一つ事実であったことは、彼女が、私自身も気がつかない私の中のマゾ性を、スムーズに引き出してくれる唯一の女性であったということです。反対に言えば、私は彼女のサド性を徐々に目覚めさせてきた唯一の男性だ

ったとも言えるわけです。

○

ある土曜日の夕方、私は有楽町で彼女と待ち合わせ、食事をした後ダンスホールで一刻を過ごしスナック酒場に誘いました。彼女はアルコールには弱いのですが、飲む雰囲気はとても好きなようです。私達の入った店は、スナックとしては広い店でしたが、土曜日のせいか、ほとんど満員で、女性客も、かなりいました。彼女は店の雰囲気が入ったのか、珍しくミリオンダラー、ピンクレディーそしてジンライムなどを空けました。

その店から私の部屋までは車で約十五分、彼女のアパートまでは約一時間かかるので、可成り酔ってしまった彼女を、始めて私の部屋に泊めることになったのですが、私が住んでいる部屋というのは、普通の一軒家の二階に間借りしているの、アパートと違って男の友達を泊めても文句を言われるありさです。まして女性を泊めるなど、もし見付かったら大騒ぎになること間違いありませんが、深夜で寝静まっているのをいいことに、私は彼女の靴をもって、二人は足音を忍ばせ二階に上がりました。

私の部屋に入ると彼女はほとんどグロッキー

ーでフラフラしていました。

「本当に今夜は酔っちゃったわ。ねえブラジャーきつくてしょうがないのよ。はずして」

「うん、いいよ。気分、悪くない？」

「ううん、とってもいい気分よ」

私は彼女の服を脱がしてやり、フトンを敷いて寝かせましたが、酔いがまわったせいかパンティ一枚の姿で眠りこけている彼女を見ると、改めてその美しさに見とれてしまいました。細くてすらりとしたうなじ、小さな貝を想わせるような形のいい耳や唇、そしてムッチリ盛り上がった二つの乳房、そこから細く、くびれたウェスト、丸くて小さな可愛いおへそ、そして大きくてまろやかな感じのするヒップ、すんなり伸びた美しい脚、そして適当に肉付がよく小さくて可愛い足。

私の目には、まさに美の女王といっても過言ではない美しい女性としか映りませんでした。私は何の躊躇もなく、夢中で跪くと彼女の美しい、柔らかい足の裏にそっと唇を寄せていました。

翌朝私は、彼女の足の指で鼻をつままれて起こされました。

「そろそろ起きなさいよ」

「うん、眠いなあ」

「フッフ、長い間わたしの足の裏を舐めたりするから、寝不足なんじゃない？」

「あれ！ 知ってたのか」

「そりゃ分かるわよ。……あのね、わたしねトイレへ行きたいのよ」

「トイレか、ちょっと困るなあ。トイレへ行くには家主の部屋の前を通らなくっちゃあならないから、見つかるおそれがあるなあ」

「見つかるよ、うるさいの？」

「そりゃそうさ、女を無断で泊めたとなると即刻追い出されちゃうな。追い出されるのはいいんだけど、……やっぱりまずいよ」

「そう。困ったわねエ」

私は真剣に考えこみ、ついに心を決めました。

「トイレへ行きたいって、大の方？ それとも小の方？」

「いやーね、もちろん小の方よ」

「じゃ下へ行かなくてもいいことがあるよ」

「なあに、どうするの？」

「俺が飲むのさ」

「バツカみたい。そんなこといやよ」

「じゃ勝手にしろよ。がまんして膀胱破裂したって知らないよ」

「いいわよ、がまんするから」

その後、しばらくの間沈黙が続きました。私はとんでもないことを言って、彼女が軽蔑したのではないかという不安の気持ちもあり、何となく気まずい思いでした。それにしても顔の上に平気で腰かけることができる彼女がこの急場に当たっての私の妙案を無下に拒絶するとは何とも理解しがたい。女心は分からないものだ、などと私は考えていました。

ややしばらくして、

「ねえ、わたし、もうがまんできないわ。気が変になりそう、早くなんとかしてー」

「じゃあ、いいのかい？」

「なんでもいいわ。楽になれるんなら」

私は素早く仰向けに寝ころびました。

誰でも経験したことと思いますが、子供の頃、クリスマスイブの夜、寝る前に、自分の一番欲しいものを書いて、サンタクロースに本当に書いて、本当に紙に書いたものがもらえるのかなあ、などと考えながら、期待と不安の入り混じった複雑な気持ちで寝た翌朝、枕元に自分の一番欲しかったものを見出した時のあの感激。しかし大人になればなるほど、子供の頃のあの感激は二度と味わえなくなるものです。

でも、私のその時の歓喜は、まさに子供の

頃のあの感激を再びとりもどしたような気分でした。この頃から私はマゾヒストとしての自覚を徐々に持ち始めるようになったようです。少なくとも瑠理子という女性に対する私は、彼女を美の女王として意識するようになっていたし、彼女の美の前に跪くことが、極めて自然であると思ふようになっていました。そして私が彼女特製のワインを飲んだその瞬間から、私はワインの虜になってしまったし、同時に一層強固に彼女の虜にもなっていたのです。

ところが、これを更に決定的なものにするハプニングが起こったのでした。

○

その日私は、映画のオールナイトを見て午前一時頃帰宅しました。部屋の戸を開けると瑠理子が私の机の前に腰かけていました。

「やあ、きてたのか。何時頃来た？」

と、私は気軽に声をかけましたが、彼女は私の問いに答えようとせず、何かしら少しこわばった表情をしてニコリともしませんでした。そして、

「今夜はちょっとあんたに話があるの。ここで話したら下に迷惑かかるから、どっかホテルにでも行きましょうよ」

「いいよ。でも話って何だい？ 改まって」「行ったら話すわよ」

ホテルで部屋をとると、彼女は無言で私に一通の封筒を手渡しました。私はその封筒をチラッと見て、シマッタと思いました。それは田舎にいた私の婚約者からきたもので、私はそれを読んで、うかつにも机の上に置きっぱなしにしていたのでした。

「悪いけど、部屋で待っている間に、中身を読んじゃったわ」

「その女は只の友達だよ」

「内容からすると、あんたの婚約者としか受けとれないわ。わたし、あんたのガールフレンドなら一人残らず知ってるつもりよ。けど婚約者がいるなんて夢にも思わなかったわ。結局わたしは、あんたのおもちちゃだったってわけなの？」

「ちがうよ。俺が本当に愛してるのは君だけだ、信じてくれよ」

「今まではその言葉を信用してきたわ。でももう信じられない」

その婚約者というのは私の幼なじみで親たちが暗黙のうちに認めているという程度で私は、結婚するかもしれないとはっきり言ったことは一度もありませんでしたが、しても

いいという気持は心の奥底にあったのは事実でした。一方、ここまで深い関係が生じたものの、瑠理子と結婚したいと思ったことは今までに一度もありませんでした。

つまり私は、結婚と恋愛を明確に区別していたのでした。だから、確かに瑠理子を愛していても、それが結婚につながるとは思ってもみなかったのです。しかし、今やそのような私の価値基準が、私の意志にかかわらず徐々に打ちこわされていくのを私自身感じないわけにはいきませんでした。

「今夜は、あんたの本当の気持ちをはっきりと知りたいのよ。わたしがあんたにとって、どういう存在なのかを知りたいの」

「そりゃ君だって知ってる筈だろう。俺は君なしでは生きられない」

「うそよ、そんなの」

「じゃ、どうすれば信じてくれる？」

彼女はじっと睨みつけるように私を見詰めていましたが、やがて決心したように強くいきました。

「わたしのお仕置を素直に受けることね」

「わかった。何でもするよ」

「じゃあ、まず素裸になりなさい」

彼女が私に絶対的な命令をしたのはこれが

初めてですが、私は仕方なく命令に従いました。すると彼女は私のネクタイをとり上げて私の手を後ろに組ませ、きつく縛り上げました。そして今度は自分の脱いだパンティを小さく丸めて、私の口の中へ無理矢理押し込めて、その上からストッキングで猿轡をしまいました。私はただ、なされるままになっていましたが、内心では何かを期待していたことは否定出来ません。

「さあ用意はできたわ、そこにころがりなさいよ」

私が横になると、彼女は私のズボンから皮バンドを引き抜いてそれを右手に握ると、片足を私の顔の上にのせてふんばり、私の胸とわず、尻といわず、脚といわず、ところかまわず打ち始めたのです。

甘いプレイのようなお仕置を無意識に思い浮かべていた私は始めのうちはカーッと頭にくきましたが、何せ手は全く自由がききませんし、口には猿轡がはめられているので、何を言っても怒鳴っても声になりません。しかたなくだまって打たれるより方法がないとあきらめました。が、ピシッピシッと打たれるバンドは、女の力とはいいいながら飛び上がるほどの痛さを持つ皮鞭に変化しています。ところ

どころから血がふきでてきました。

思いもよらない強烈な痛苦にもだえていた私は、ふと気がついた時、何とも言えない恍惚感に酔いしれている自分を発見していました。

口の中には、ついさっきまで彼女の肌にピタリくっついていたパンティが押し込まれた彼女の柔らかい足の裏に踏みつけられて彼女の美しい手によって振り下ろされる皮の味はいつの間にか全く素晴らしいものに変わっていたのです。今まで味わったことのない最高の悦楽を、私は秘かにかみしめていました。

そして、このような無上の快楽を与えられる瑠理子と結婚しないで、他にどんな女性がいるというのか？ 私は死んでも彼女を離さないぞ、という強い決心が、心の底からモリモリと泉のように湧き上がってくるのを、ピシッピシッと鳴り続ける皮バンドの音を遠くに聞きながら、感じていたのです。そして声にはなりませんが心の中で、私は「君と結婚して、私の一生を君の奉仕に捧げます」と神に誓うつもりで瑠理子に呼びかけていたのです。



機関誌「助産婦」より

お産と浣腸

清水暗星

私が出産と浣腸を結び付けて考えるようになったのは小学校一年位の頃だったと思います。

私の家の近くに母の一番下の妹が結婚して住んでいました。多分当時二十三、四と思います。或る日急に陣痛が起きたということでも母が付添って産院に連れていくことになりましたが、私もタクシーに乗りたければかりに

せがんで連れて行ってもらいました。

私と母はうす暗い長椅子に腰をかけて待たされておりましたが、しばらくすると叔母が看護婦さんにうながされて歩いてきました。そして私達の前を通り過ぎて小さな別の部屋に入りました。その時、看護婦さんが手に白い液が一ぱい入ったガラスの器具をさげているのが目につきました。そのガラスの器具か

ら長い黒いゴム管がたれ、その先に黒いエボナイトのようなものが付いていて、それを看護婦さんが、人差指と中指ではさむようにして持っていました。母に「あれは、なに？」と聞くと

「赤ちゃん産む時は、あれでお浣腸してもらうのよ」

と教えてくれました。が、私はカッとのぼせ上ったのを覚えています。

私は既にその頃、もう浣腸に対しては異常なほどの興味をもっていて、母の留守にゴムのスポイト（当時私の家では浣腸にはゴムのスポイトを使っていました）を持ち出して、水を使って独りこっそりと遊んだこともありましたが、あのような器具で、あのような大量の浣腸をすることがあるなんて、想像もしておりませんでした。

あんな大きなおなかに、あんなにたくさん浣腸されたら一体どんな気持がするだろう。

それとも便秘した時浣腸して出すように、赤ちゃんも浣腸しないと出ないのかしら……。

子供ながらに異常な興味を覚え、女ってみんなあのような浣腸がしてもらえと思うと一種の羨望さえ感じたものでした。

それから何年か経ち一人で本屋などに出入り出来るようになると、店員やお客のいない時を見はからってお産の本とか医学全集のよ

うなものを読みあさりました。

しかし意外にも戦後のこの種の書物には、
「浣腸は流産の原因となるから避けた方がよい」とか「分娩前には助産婦や看護婦が浣腸をしてくれる」といった程度にしか書いてなく、失望させられました。

そんな日々を送るうち、古本屋で戦前発売された『産婆学教科書』という本をみつけました。これには『浣腸』という項目まで設けられてあり「分娩前には必ず浣腸をせよ」という事が細々と書かれてあるうえに、挿画までいれて、浣水器（現在の浣腸器）や漏斗を使った石けん浣腸の方法が図示されていました。私はその本が欲しくて欲しくて仕方なかったのですが、遂に「下さい」といえないで帰ってきました。

就職をしてから、他の趣味の関係で産婦人科の開業医と知り合うことができて訪問した日、先生が往診に出た後だったため看護婦さんと話をしておりましたが、思いきって分娩前に何処で浣腸するのか尋ねてみました。

しかしその答えは期待外れで「学校では分娩前に浣腸をする」と教わりましたが、この医院ではめったにしませんよ」という返事でした。往診から帰った先生にその事を尋ねますと、にやにや笑いながら

「浣腸は患者が嫌いますからね。うちではなるべくしないようにしています。特に患者が

便秘をうったえれば別ですがね。開業医は出来るだけ患者の気持を尊重してやらなければなりませんよ」

産婦は必ず、分娩の時に石けん浣腸を受けるものだという私のイメージは、簡単に破れてしまいました。

会社でも出産した女子職員に、それとなく聞き出したところによると、大きな病院で出産した人は、たいがい石けん浣腸を受けるらしいのですが、個人の医院では殆どされていないのが実態のようです。

KK誌35年10月号の山岸悠子さんの「病院にて」や、38年4月号の菅千代さんの「お産と浣腸」は、大部分がフィクションのようですが、私の大好きな作品でした。

十年ぐらい以前に、偶然見付けた機関雑誌「助産婦」に、研究欄で「分娩時の浣腸」という助産婦のレポートを発見し、コレクションとして保存していましたが、貴重な資料だと思えますので、以下その全文を紹介いたします。

○ 分娩時の浣腸 ……

函館市 佐〇木〇枝

分娩時の浣腸は、初産経産婦に関係なく当日便通があっても施行しています。

その理由として

一、外陰部の消毒を出来る限り完全にする。

二、直腸、膀胱を空虚にして、先進部の下向を妨げない。

三、浣腸の刺激により陣痛が促進される。

方法。

二%食塩水五〇〇CCを三十七八度にして使用します。施行して五分位経過してから排便させます。破水していない者、出血状態良好な者は便器を使用しません。この場合、患者上圍中破水したり、特に経産婦では分娩が進行して自ら動くことも困難になることがありますから、五分毎に外から声をかけ状態を注意します。

時期。

陣痛間歇時、経産婦は十〜十五分、初産婦は五〜七分頃を適当とします。間歇時が二〜三分でも子宮口が全開大していなければ、浣腸を施行します。陣痛間歇一〜二分で子宮口が全開大している時に遭遇した時は、嚴重に消毒した手指で、膣の方から直腸を圧して便を排除します。

分娩がのびた場合、浣腸は陣痛の状態を観察して、適当な時期に施行しますが、陣痛が一時中止して分娩が二、三日延長した時は、再び三〇〇CCの浣腸をします。

○

新潟 〇山〇クエ

助産介助に臨みまして、排便あるなしにかかわらず浣腸は必ず行うことを原則としてい

ます。行方時期は、初産婦に於ては分娩第一期の中間期以後破水前で、便所で排便出来る時期を見計って行います。経産婦では大体初産婦より早目とし分娩第一期の中間頃にすることにしています。

方法としては30cc浣腸器を使用致します。35cc位迄液が入りますからグリセリン18cc微温湯17ccとして用います。施行後は便意を催しても十分間位なるべく排便しないよう我慢させます。

浣腸後排便あればなお更のこと、たとえ少くとも陣痛促進剤の役目の一端を果してくれます。排便が全然なくその上陣痛遅々としてゐる場合は、更に一、二時間後に再度グリセリン浣腸を致します。今迄の私の体験上浣腸排便後は急速な子宮口開大並に陣痛微弱には非常な効果が見られる様です。グリセリン薬液使用は大凡二回を限度としています。

なおこの浣腸使用に先だち次のことをよく話す事としています。

一、少しでも便があつては赤ちゃんの通過に邪魔になり、お産が手間取りそのため親子共々難儀すること。

一、赤ちゃんの娩出の際、便が出たりしては非常に不潔であること。

以上のことを話すと拒む産婦も喜んで進んで同意致します。

此の外、冷水浣腸法として冷水30ccを二〇

分おきに三、四、五回行うことによって微弱陣痛の際案外効果があり、外の所作と共に加えて実行しています。

東京 鈴〇み〇子

分娩時の浣腸は、総括的の面から見て行なつた方が良いと思う。浣腸をして排便させ、腸内を空虚にし、児頭及び胎児の先進部の産道通過を容易にし、そつと分娩経過を促進すると共に、産婦の怒責によって便の漏れる事もないので、分娩を清潔に終了する事が出来るからである。

しかし例外として、施行しない方が良い場合もある。例えば胎児の位置異常とか、前期破水をしてなお羊水漏出の続く時、産婦の非常に疲れている時等は、見合わせるべきである。また、浣腸施行の時期は一般に分娩第一期に、行なうのが原則であるが、開業助産婦の場合は臨床上そうばかりとはいへぬ。初産婦の時は第二期に入つても尚且施行した方がよい時もある。要は分娩の進行程度、陣痛の強張骨盤の大きさ等考慮した上で行なうことだ。経産婦の場合等第一期の始で子宮口も二横指位開大で、児頭の先進部が未だ骨盤入口上の高い位置にある時期に、浣腸を施しても陣痛の強い時は、用便中分娩が思わぬ速さに進行して墜落産をおこす様な危険なしとはいへぬ故、助産婦としては失敗のなきよう注意

すべきである。しかし、初産婦で多少狭骨盤の時は第二期といえどむしろ浣腸を行なうべきで、用便の時期を充分に取ると、分娩の進行を非常に助ける。昔は坐産をした位であつて、用便の時の姿勢は胎児の骨盤内下降及び産道通過を助けるので大変効果が著しい時もある。だが分娩間際まで時間をかけ過ぎては外陰消毒の時期を失する事があるので、適当な時期に産婦を産床へ呼び戻す方がよい。

浣腸の方法は、薬用石鹼又は良質の化粧石鹼を微温湯で溶解した液を五〇〇〜八〇〇ccを注入する。普通時、使用する小型のグリセリン浣腸やイチジク浣腸では、量不足で腸内深く達しないから効果が薄い。なお分娩経過の程度によっては、産床の上で便器を使用する方が安全である。また反復施行する時は初産婦で分娩遷延し一日以上経つた時とか、微弱陣痛の時に陣痛促進の目的では行なう必要がある。なお一つつけ加えたいことは分娩が浣腸により異常に促進した場合、分娩直後の出血が多い様である。

東京 佐々〇や〇じ

私は原則として分娩時の浣腸は初産、経産を問わず施行することとしています。それは(一)排便により産道を拡大し、(二)陣痛を促進する。(三)糞便の圧出のため外陰部汚染による伝染の危険を防ぐ。(四)産婦が安心して怒

責出来る。(五)胎盤の娩出をも助ける。(六)後出血を予防する。

等の理由によります。実際に、経産婦などで分娩が短時間に済みそうに見えて、浣腸を怠ったために思わぬ手間のかかった例もあったからであります。

方法としては、浣腸用石けん末八グラムに微温湯を五〇〇cc程加えて石けん水を作り浣腸用イルリガートルで静かに注入します。この際、喉管の先にオリーブ油をぬります。

時期は初産婦にては分娩第一期の初めに行い、経産婦でも同じでありますが産家よりの知らせの関係で第一期の半ばになることが殆どであります。この場合は、破水の有無にかかわらず便器を使用させその量も調べます。また分娩が長びき第一回の量も少ないと見る時は、反復して施行することもあります。

以上のように分娩時の浣腸は排尿と共に大きな意義をもっておりますが、簡単なことだけに日常案外看過され易くなっているのではないでしようか。私は及ばずながら開業三十年の経験から、お産には「先ず浣腸」をモットーにしております。

○ 福島 三〇キク〇

毎日便通があっても分娩前に一応しております。浣腸をしませんと娩出期に便意を訴え、思う様に腹圧を加えにくいし分娩介助の妨げ

となります。

時期 初産婦五七分、経産婦十五分位の陣痛間歇の時。子宮口三〜五センチの時。子宮口五センチ以上開大せるも先進部上方に在る場合

方法 産婦に浣腸をする理由をよく説明し

一、一%の石鹼液五〇〇cc三八〜四〇度を一、イルリガートルに入れ泡沫を除き口を開きて側臥位をとらしめ

一、直腸管に油をぬり静かに挿入しゆっくり液を注入する

一、液が直腸内で作用するのを待つため終わってから五分以上過ぎて排便をこころみる。

一、分娩遅延せる場合。陣痛児心音の経過、母体の疲労状況、合併症の有無など細かく観察し、異常のない場合は食餌睡眠をとらせて、特に初産婦に於ては、産婦を慰めてもう一度少し多量な七〇〜一〇〇cc四十度位のをこころみると、刺戟をあたえて効果がある。

○ 埼玉 久〇喜〇子

私は分娩時の浣腸は時間の有る限り必ず行います。消毒内診の後、子宮口が四指以下の開大の時や、陣痛が間歇十分位有る頃迄は行います。

方法は摂氏三十五、六度位の温湯に薬用石鹼又は良質の化粧石鹼を二%位にとかし五百

〜六百瓦以上を作ります。産婦の体位は左側臥となし、以前は高位浣腸でしたが現在はスプレーに類するゴムの浣腸器を用い、急激をさけて徐々に注入いたします。陣痛時の怒責を禁じ、その間注入を待ちます。反復は余りやりません。導尿管を離尿の折は行います。

経度にも出血高血圧者は必要に応じ微温の石鹼液を少量、四十瓦位を行う事もあります。

又子宮口未開大の初産にて陣痛様の感有排便困難等の訴えには、浣腸液を少しく高温として使用いたしますと排便後一二時間の後に分娩開始か陣痛のキメ手となる事もあります。

分娩介助中時々便が漏れ、何回も消毒の必要なく第一、新生児の汚染の予防になります

故、便通は今日もありましたと訴えた場合にも分娩迄に時間のある限り、石鹼浣腸は大変

よろしいと私は信じております。尚、虫その他の場合浣腸液に硼酸少量を加えて使用する事もあります。

長年の経験から注意と致しましては(一)高温に過ぎぬこと、(二)多量過ぎぬこと、(三)陣痛発

作時は強く感じる場合も意外に液が肛門から排泄して種々の物を汚染する事に成りますから、施行の前に必ず敷物をします。

また分娩迄に時間があると思っても、なるべく冬期等室内で便器を使用させるように致しております。

赤の屈辱

前にも述べたとおり、有明が審問を親裁したのは全く異例なことであった。「お手付き女囚」の新入りという、特殊な状態もメッタにあることではなかったから、止むを得なかったであろう。ここに於て、有明の権威がどんなに強大であるかを窺い知ることができ

る。だから、ジャンヌの審問が終わって有明が去ったあとの廷内は何かホッとしたような雰囲気を感じとられた。もっとも、ホッとした

のは審問官たちの方であって、裁かれる女囚たちではない。審問官連中は、今度こそ気がねなく、哀れなイケニエに針を立てることが出来るからである。そもそも、このように中世めいたシステムで審問を行なうこと自体、女囚たちを苦しめ虐げる以外の目的は何もなかったのだから、楽にここを通過する望みは全くあり得ないわけだった。

審問は、銀と銅のクラス候補者を対象として行なわれる。何故なら、金のクラスは最初から高位者として扱われるし（山本百合子の場合）又、これは有明一人の好みに委ねられている階級だった。事実、これらの殆どがお

手付となって、次第に支配者のグループに入っていくのである。鉄のクラスは又、この国では家畜および家具（もの）としてしか考えられていないから、矢張り審問に値しないということになる。そこで、銀と銅のクラスであるが、これがこの国の中核を形作っているにも拘わらず、両者間の区別は、きわめて厳格である。すなわち、銀のクラスが一応、自由人であって支配グループに属すると見做されるものに対して、銅のクラスは奴婢、又は奴隷であって、人間的権利を認められないからである。しかし、初審問に限っては、つまり新入り女囚に対しては、すべて総合判定



とされるから、全員が奴位（奴隷の位）からスタートして行かねばならない。簡単にいえば審問官が決定できる判決は二種類しかないことになる。つまり、①罪状認否に対して原罪を認めたものに対する懲治監渡しの判決、②否認したものに対する拷問監渡しの判決のいずれかである。懲治監渡しには期限をつけることができるが、拷問監渡しには、つけられない。

ジャンヌが、すらすらと通ったのは特殊なケースだからであって、普通は、そうスムーズ

前号まで「ただひとりの絶対者、有明をいただく秘密の地下国家の描写が続く。世界の各地から拉致されてきた数多の美女達は、原潜ネプチューンから陸揚げされ、金、銀、銅、鉄、夫々のクラス分けにしたがって入国の手続きをさせられている。金のクラスに相当する山本百合子は、有明自ら審問されるだろう。有明のお手付となっていたジャンヌこと小林敏子の審問にも有明は立合った。犠牲者たちは、つぎつぎに五人の審問官で囲まれた円型の台上に追いあげられ、その裸身を惜しみなく曝さねばならないのだ。」

ズに行くものではない。

ホンコンで張恵華と呼ばれていた二十一才の美女、今は肉体番号F五五三号でしかない彼女の場合も、そうであった。

で、ジャンヌが去ると、審問官たちはF五五三号の審問にかかった。

首席審問官が鈴を鳴らすと、一旦、床下に行き下が行った丸いエレベーターが、今度はF五五三号をセリ上げてきたのである。

いうことを聞かなかった彼女は、強制検査を受けさせられた。

肉体のあらゆる機能が、自らの意示に反して次々と数字にされて行った。それは、すぐにコンピュータで換算され、ジャンヌの自由に自由意思で検査を受けたもの達と同基準の数値に直されて行った。そのデータが作表されて、今、審問官の机上にある。数値の示す限り、張恵華の性能は抜群だった。肢体のすばらしいプロポーションは、見てもすぐわかることだが、表にしてみると一層、それが際立っていた。レントゲン写真、胃鏡をはじめとする一連の医学的検査が、その健康状態が第一級であることを立証していた。更に苛酷なまでに行なわれた体力検査が筋力、反射神経を含めて運動能力が平均値を、はるかに

抜いていることを報告している。又、特に入念に行なわれた頭脳検査、知能指数、理解力記憶力などのテストは、彼女が肉体の美しさばかりでなく、内容においても優秀であつてつまり、才色ともに兼ね具えた麗人であることを余すところなく浮き彫りにした。重要事項は、このほか女性だけに要求される資質、つまり情緒、コケツトリ、羞恥などの感度も広般にテストされ克明に表示してあった。いかえれば、このデータにはF五五三号という一人の女性の「すべて」が納められていたのである。

服従しない女囚には自由がなかった。白磁のような素肌を、少しでもかくそうとするかのように、F五五三号は身をちぢめて、うずくまっていた。丸くなった背の中央に、手首が後手にロックされている。苦悶する心情を示すかのように慄えている繊細な十本の指が何故か別の生きもののように見えた。

首席審問官が今度は英語で、F五五三号の審問を開廷する旨を宣したときも、このうずくまる白い肉塊は何の反応も示さなかった。英語のわからない彼女ではない。大陸から逃げて来た彼女の父は、香港に定住して僅か数

年のうちに巨富を回復したのだった。九九・九九パーセント以上の難民たちが、喰うや喰わずの生活を余儀なくされているというのにこれは真に幸運だったというべきである。だが単に幸運であるといってしまうには余りにも血のにじむような努力があったことも否めない。しかし、これは物語りの主題とは関係がないから省略することにして、要するに張恵華が至極、恵まれた少女時代を過ごしたということだけを強調しておきたい。ハイスクールを終えると、すぐ英国の特殊学校に留学させられた。そこは貴族や金持の令嬢ばかりで全寮制度になっているので、日本の金に直して百万円に近い費用を父兄は一年分として負担しなければならぬ。その代わり、至れり尽せりの教育が行なわれるのである。その証拠に、張恵華は目に見えて洗練されて行った。英語も完璧なキングスイングリッシュを上品に話すようになったし社交術、特に音楽やダンスなどもメキメキ腕をあげて行った。趣味も広く、スポーツも、大好きなテニスは勿論、英国ではじめて乗馬でも吃驚するような上達を見せていた。それで、遅かれ早かれホンコンの上流社会をリードするレディとなるであろうと見る人が多かったし、両親も又

心からそれを期待して大事に育てあげられた美女は、その両親の手からもぎはなされて、今は赤裸にひきむかれ、なすところもなく、その、すべてを衆目に曝しているのである。その上、ここでは折角の教養も知性も全く無視されてしまって、まるで一匹の雌馬を検査するように扱われている。誇り高き彼女の自尊心は、生まれてはじめて受けたこの屈辱に怒り狂うばかりだった。とはいえ、強大な権力によって囚えられてしまった今、物理的な

抵抗をしても何にもならない。むしろ、みすみす相手の術中に陥って行くということを、強制検査のとき、イヤという程、体験していた。聡明な彼女は、肉体がどのようなにもてあそばれようとも、少なくとも自分の心だけは負けずに守って行こうと、けなげな決心を固めることによって、わずかにくずれ行こうとする誇りを守っていたのである。

「F五五三号、立ち上りなさい」

美しい声は英語も見事に発音していた。しかし聞こえたのか聞こえないのか、白い肉塊は、かすかに打慄えているばかりで、何の反応も示さなかった。もう一度、

「立ち上りなさい」

という声がしたかといううちに、アマゾン女兵の持った電気鞭の先が、豊かに盛りあがった臀部に突きささった。

「ヒエッ……」

女囚は悲鳴をあげたが



それでも強情に顔をあげようとせず、腰をいざって鞭先を逃れようとした。そこを逃すまいと蛇のように鞭がカラミついて行った。五人の審問官によって丸く囲まれた空間は、逃亡を許さない。打って打って、打ち据えられたあげく、

「やめて下さい。立ちます」

という意味のことを、トギレトギレに口走るようになったときは、もう全身が汗でビッシヨリになってしまった。鎖で吊るせば何でもないのだが、本審問では自分の意思で行動させるのが建て前とされているのである。

屈服したF五五三号はヨロヨロと立ち上ろうとした。しかし、後手錠では腕を使うことができず、疲れて思わず転倒してしまった。アマゾン女兵が例によって、髪を掴んで引きずり起こした。

必死の抵抗の甲斐もなく、今やF五五三号は、その素晴らしい裸身を隅々まで、審問官たちの目に曝すことになった。乱れに乱れ、涙か鼻汁か汗か失禁か、いずれとも知らぬ体液が身体中を濡らして、キラキラと輝いて見えた。そして、みじめな彼女の気持と裏腹に何故か五人の審問官が一樣に、プツ、とふき出してしまった。それもその筈、彼女は真赤な

六尺褌を締められていたからである。先程から、彼女が死に物狂いで肢体を縮めていた理由も、そこにあったのであった。彼女にとって、このようにみつともない褌姿を見せることは、全裸より辛いことだったのである。だからこそ、身体をまるめて、それをかくそうとした。そして、それも一切が徒労に終わってしまったのだ。

アマゾン女兵が報告した。

「申訳ございませんが、この者は昨晚からお祭りが始まってしまいましたので……」

「どうして処理をしておかなかったのです」

首席審問官が、なじるようにいった。

「はい。注射した黄体ホルモンが効かなかったのかも知れません。理由はよく判りませんが、今後よく調査いたします」

「丁度、悪い時期だったね。この国の人間になつてからなら、一時排血でサッパリしてしまえるのに」

そんな会話も日本語でとり交されてはF五五三号には全くわからない。わからないだけにかえって不気味に又、怖ろしく感じてしまう。想像を絶するおそろしさに、ブルブルと身をふるわせながら、立ちすくむばかりであった。

「審問には拘束具以外のものは許されない。とりのぞいてしまいなさい」

首席審問官が命令した。

「アイヨー」

F五五三号が、ありったけの声をあげて絶叫した。こんなに着けているのが恥かしかった赤い布切れだというのに、いざ抜きとられるとなると、これも又、一大事なのである。

まだ消退が済んでいない。

いくらもがいても暴れても、手足を縛られていては所詮、どうなるものではない。

赤い六尺が抜きとられたというのに、白い太腿を同じ色の筋が走っていた。その生あたたかい感覚が、彼女を絶望のドン底におとし入れた。スーッと血がひく思いで、彼女は気を喪って行った。

剃 髪

F五五三号が、生理をあばき出されるといふ最も恥かしい思いをさせられて、とうとう失神してしまった。丁度それと同じ頃、予審のとき右と左に別れて行った一方のF五五四号、可愛い白人娘の身には、もっともって苛酷な魔の手が襲いかかっていたのである。

C A A C fと予審で判定されたことは、泣こうがわめこうが、彼女は家畜か家具としか扱われないということの意味していた。この意味で右と左、つまり銅と鉄の両クラスの差異は天地の様にかけ離れているといえよう。

しかし、鉄のクラスの中でもfの総合判定をもらったF五五四号の場合は「家畜のように動ける」という点では格外者よりまだ幸せだったといわなければならぬ。何故なら、物位にランクされると、ベッドや椅子、テーブルその他の室内装飾品と同じに見做される。言いかえれば、物や家具は動いてはならないのである。極端な姿勢に固定されて、しかも長時間黙って、ジッと動かないでいるということは大変な辛抱である。それに比べれば、ペットは許された範囲内でなら声も出せるし用を足すことも出来る「静」の辛さと「動」の辛さを比べたら、後者の方が、まあまあ楽だろうということなのである。

予審で、たとえ銅のクラス相当と判定された者でも、その後の経過が好ましくなければ矢張り鉄のクラスに落とされてしまう。又、懲罰のため資格は上であっても、ここへ渡されてしまうという例もある。

F五五四号は教養は兎も角、美事なプロポ

ーションを示していたので、もし彼女が日本人だったら当然アマゾン女兵位になれたかも知れない。しかし、白人であるというハンデイキヤップが彼女を鉄のクラスに入れてしまったのである。

ここで、この国の人種差別にふれておかなければならない。

といっても、それはすべて有明の好みによるものであったが、大体において白人は余程の美女、才女でない限り、高位を覬覦することができない。それは丁度、アメリカにおける白黒を黒白とおきかえて考えた場合に近いかも知れない。何といっても白人、特に北欧やアングロサクソン系人種は、この国で美醜判定上の重要な尺度の一つとされている「肌質」つまり、肌の触感やキメの細さ、ウブ毛の濃淡、等々の点で、他の人種と比較して相当、劣っているということがマイナスになっってしまうのである。又、公式用語は日本語としまっているから、日本人以外は相当、不利になる。軍人、すなわちアマゾン女兵は厳格に日本人女性のみに限定されている。

屠殺場を想像されたい。そこに追い込まれた牛や豚はチェーンで吊るされ、コンベヤー

によって移動してゆく。その間に搾血、洗滌剥皮、等の工程が流れ作業で行なわれる。

鉄のクラスの取扱いは、本人の意思については何の関心も払われない。はじめから人間とは考えないからである。したがって、すべての行程が屠殺場のそれと似たシステムで進行する。血を搾られることもない。皮を剥がれる心配もない。しかし、人間の尊厳は血のように流れ去ってしまうだろうし、自尊心の衣は皮を剥がれるようにしてムシリとられてしまいうに相異なる。

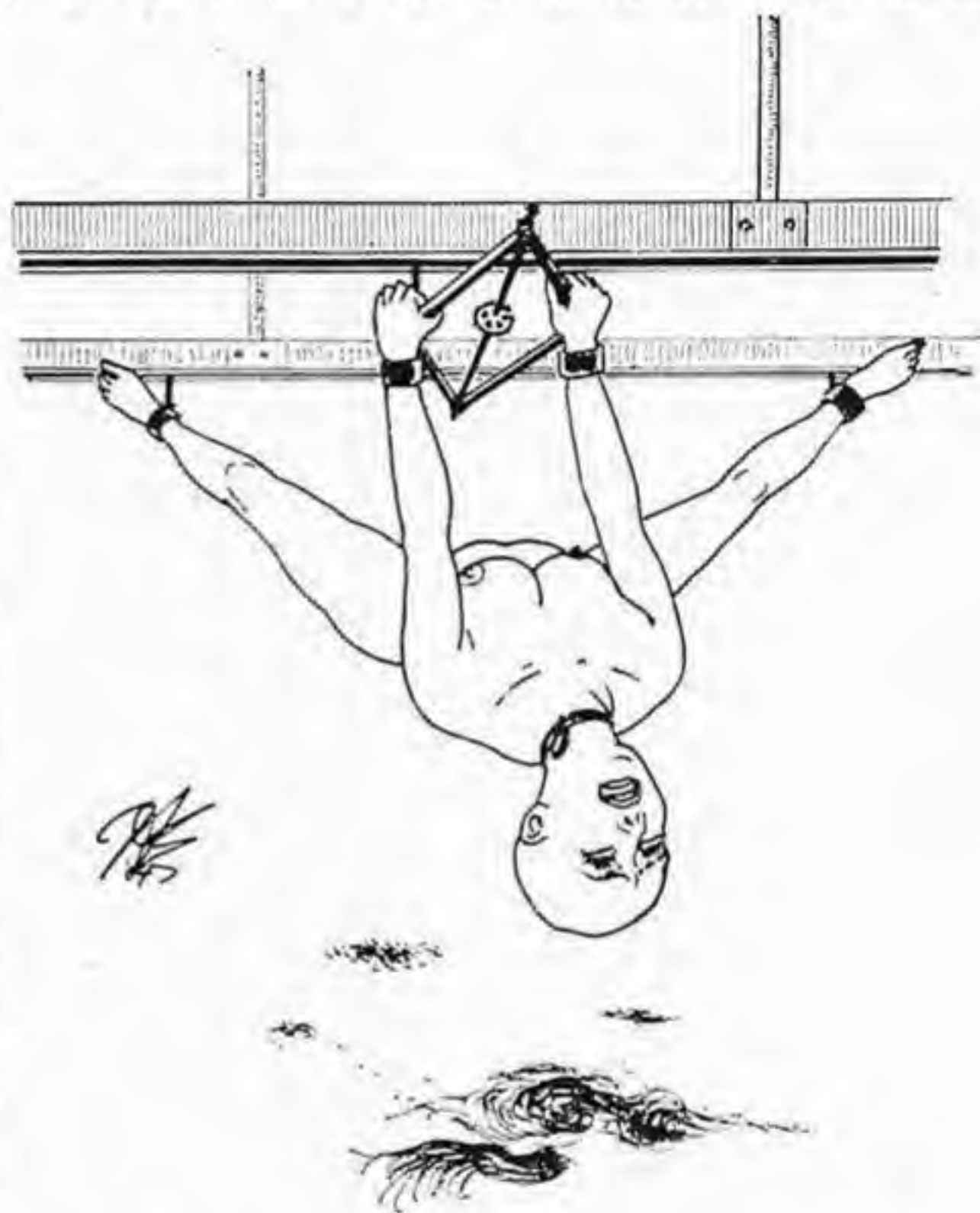
溜りのスペースは、面積を節約するために櫛の歯のように入りこんでいた。コンベヤーのレールは床から二メートル位の高さで、ウネウネと曲がっていた。それと同じ型で床上にもレールがとりつけられてあった。上のレールには両手が、下のレールには両足が肢をひらいて万才をした恰好に固定されていた。

何人も、いや何十人も、あとからあとから送り込まれてくると、裸体は洋服ダンスにかけた衣類のように、次から次へと目白押しに重なってしまった。それは丁度、屠殺場で鉤にブラ下った肉の林が出来上って行く光景に似ていた。

コンベヤーは上下に手足をひきのばされた

裸女の群れを、一定の間隔で静かに流していた。屠殺場とただ一つの相異点は死と生との違いだけである。

屠殺場で獣は先ず最初に殺されているから、そこには無気味な静けさがある。しかし、ここでは吊られた女たちが、あるいは愁々と哭き、あるいはヒステリックに叫んでいた。高い声、低い声が混り合って、何かワーンといった不協和音をかき立て、それがまた、ガランとした広い岩かべに反響して、何ともいいようもない程、怖ろしいパツクミュージックとなっている。



一通り犠牲者たちが溜ったところで、三人の白衣白覆面姿が現われて、一人一人、裸女を検査して行った。これは、もう一度、女囚達をチェックして、銅クラスへ上げるべきかどうかを考えるためでもあったが、同時に又予備的に畜、物二類を仕分ける責仕をも持たされている。

覆面女達は肉体が林立する中をかきわけて平気でその乳房に触ったり、内腿をつまんだりした。その度毎に無抵抗な女体は、たまげするような悲鳴をあげ、身をよじらせるのであった。三人の主だった一人が最後に何かいうと、あとの二人が別々に持っていた赤いゴムスタンプをペツタンと左乳上に押しつけるのである。一人の印は丸に畜の字、もう一人が持っているのは丸に物の字が読みとれる。

丸いゴム印を押されたものから再び動き出

して行くと、すぐに上のレールが下り、下のレールが上って女体を水平にしてしまった。ガツクリと頭がノケぞった。その頭にアマゾン女兵の持つ電気バリカンが噛みついて行った。みるみる頭髮が床に散っていった。女体はもう仰天して、泣き叫ぶことすら忘れてしまったらしい。頭が丸坊主にされるとバリカンは、更に残り三カ所の体毛をも剃りとってしまった。その上を電気針が走って、毛根を分解する。生ゴムのパツク液がベタベタと塗られたくられ、数分後メリメリとひきはがす。電気分解された毛根は簡単にスッポ抜けるのだけれど、それでも痛みが甚しい。いや、肉体の感ずる痛みはそれでもまだ軽いというべきかも知れない。毛髪を永久的に喪失してしまった女心の痛恨は、もっともっと強烈であったに違いない。

F五五四号も又、狂わんばかりに哭き叫びながら悪魔のようなコンベヤーを移動して行った。彼女に残された体毛といつては、そのまっ白な肌をキラキラ光らせているウブ毛のほかに、何もなかったといっている。強いていえば、彼女の美貌をいっそう引き立てている一揃いの眉毛だけは、剃られるのを免れ

ていた。

不思議なことに、丸坊主にされた肉の林は何か修道院めいた雰囲気変わっていった。ドイツのアウシュビッツなどでも、裸にされ丸坊主にされてしまった女たちは、急におとなしくなると伝えられている。彼女たちはそのまま屠殺場ならぬガス室に送り込まれる運命にあったのだが、案外もう助からぬと観念してしまったのかもしれない。それと同じ心理効果がF五五四号にも作用したのであるうか。

すすり泣きながらも、彼女は無駄に手足をバタバタさせなくなった。コンベヤーは手首足首をつかまえたまま、ダランと力の抜けた裸体を横に移動させる。次第に手の方が上に足の方が下に変わって、上体が起きあがりはじめた。

ガッシリした機械が後ろから延びてきて、F五五四号の頭部を固定してしまった。彼女は中腰でコンベヤーにブラさがったまま、顔を動かすことが出来なくなった。金属の爪が彼女の口にさしこまれて、下顎を強引に押しさげてしまう。アゴがはずれるかと思うほど口が開いたところで、やっと器具の動きが停

まった。小さな赤い舌がヒクヒクと躍って、悲しい呻き声に言葉にならないながらも何かをうったえるような抑揚をあらわしていた。だが、何をうったえ得たとしても、所詮は無駄なことであった。

有明が定めた鉄の規則は機械のように進行してゆく。

歯科医の使うタービンドリルが、口の中に押し込まれて、シェーンという鋭い音をたてはじめた。あどけないような顔つきをしたアマゾン女兵が、F五五四号の開ききった唇に顔をすり寄せて機械を操作している。忽ち唾液が真赤に変わった。下顎第二大臼歯と同第三大臼歯との間、歯齦のつけ根に、直径一ミリほどの小穴が横に穿孔されたのである。左右ともに孔をあけたところで、更に前の第一切歯の真中、顎骨のあたりにドリルが突き込まれた。三つの孔には夫々、外側から内側に向かってネジがさし込まれた。

たえず別の嘴管から水が注がれて、血の混じった唾液を口の外へ洗い出していた。それが彼女の豊かな胸を濡らし、乳房を赤く染めていた。

あらかじめ夫々の下顎内寸法に合わせて作られたV型金具が先きの三つのネジでシッカ

リと固定される。やがて血がとまると、今度は、チロチロと自由に動きまわっていた舌にステンレス製の蓋がかぶせられ、あらかじめV金具に作ってあった治具にパチンとはめると、たちまち彼女の舌は下顎の内側に貼りつけられたように留まってしまったのである。何とか舌を外そうとしてみてもステンレス製の舌蓋はノドの奥まで行っているので、どうしても不可能である。

こうして、F五五四号は舌の動きを封じられてしまった。これでは舌を噛んで死ぬことも出来ない。

麻酔もかけられずに穿孔された歯の傷が、ズキズキと痛んだ。しかし、もう一度、彼女は飛び上がるほどの激痛を経験しなければならぬ運命にあった。すなわち、電気メスがその繊細な鼻梁に襲いかかったからである。迸る血潮の中に貫通した小孔には、直径二センチばかりの鼻輪が通された。ポリネシアの土人には、このような鼻飾りをつける習俗があるのだが、アメリカの富豪の娘として生まれ、高度の文化生活に育まれたF五五四号には、そんな知識がなかった。ただ慄然としてまるで牛や馬のように扱われる只今の現実を歎くばかりであった。

鼻輪とギヤグの取付けを終わったF五五四号の裸身は、再びコンベヤーの動きにつれてブランブランと移動していった。彼女は、もう幽かな身じろぎさえ出来ない程、打ちのめされてしまっていた。

あちこちで絹をさくような悲鳴が起こっている。実際、F五五四号がたどったのと同じ行程を、多くの裸女たちが絶叫し、膏汗を迸しらせながら流されているのだった。

F五五四号の細っそりした項が、凹型をした金床に陥没している。

鉄のクラスには黒光りのする鋼鉄の拘束具が装着される。ここでは、首輪からだった。

金床の上で首輪の継ぎ目にピンが挿し込まれ

ハンマーで鋳打ちされるのである。ガン、ガンという衝撃が直接、頭脳に伝わって彼女を苦しめる。全くのところで、気が狂ってしまったわ

ないのが不思議なくらいである。トランキライザーが作用している事を彼女は知らない。鋳を打つ音は女囚たちに絶対の権力を文字通り体得させ、人間にして、もはや人間でない自らの運命を観念させるのに役立つ。ジャンバルジャンのような男でさえ、枷をとめる鋳の音には、死ぬ程の恐怖を味わったというではないか。

ここから先は、畜位と物位で処置が異なってくる。

先ず、左乳上に『丸畜』のゴム判を捺され

た女囚は、両手をコンベヤーから外され後手錠をはめられる。

銅のクラスで見たような着脱式ではなく、しかも巾が広いから後手を下へさげるわけには行かない。したがって、尻の下をくぐらせて前に回すことは不可能である。その代わり足輪は別々で鎖はつかない。

物位の女達は、両手首にも別々の金輪をはめられるだけで拘束はされない。もっとも附属しているフックを使えば、いつでも簡単に拘束してしまえる。

手足を自由にされている代償のように、彼女達の両眼には特別製のコンタクトレンズがはめ込まれた。黒色が濃いから、やっと灯火や明暗の差が映る程度で、目かくしされたも同然である。物(もの)には視覚は不必要だという考えなのだ。普通のコンタクトレンズより、ずっと大きいから、器具をつかって目蓋を拡大しなければ装着できない。反対に道具がなければ外すわけにも行かないということになる。

かくして、鉄のクラスの女囚たちは、ようやくコンベヤーラインから解放され、夫々の調教室に送られて行く。

「伝言板」

○分譲品総目録は作成が大変遅延しておりますが出来次第発送申し上げます。今暫くお待ち下さるようお願いいたします。尚、フォトのお申込みは、大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社内箕田京二宛に願います。○御送金は、現金書留、小為替、振替(切手代用は一割増)にてお願いいたします。普通郵便に現金の封入は違法です故、現金の場合は必ず現金書留(封筒は郵便局で売っています)にて御送金下さい。○既

刊の臨時増刊号「花と蛇」第一回分(前篇写真と絵画特集)第二回分(続篇小説絵画特集)第三回分(前篇続篇収録小説特集)のいずれも売切れにて在庫がありません。○旧号に広告してあります最近号に掲載していないものは在庫のないものがありますので、旧号に依ってのご注文は一応在庫の有無を御照会下さい。○雑誌の予約とお申込は大阪住吉局私書箱第四十一号暁出版株式会社へ願います。



太陽は狂っている

清野由紀夫

カット・岡 たかし

二十歳の秋、それは僕の幸福にして且つ、不幸の始まりであった。

世間並の人々の生活から、遠く離れた毎日
は、悲しい思い出の涙だけが僕の友達であつた。自由のない月日を過ごすのは、ある時には死ぬよりも辛いことだが、肉体の歓喜が、正常な精神を麻痺させてしまうのである。

何ものにも替えられないほど尊い若さや、栄光に輝くであろう未来と引換えに僕は甘美な誘惑と、黄金にも勝る食物と、陶酔の生活を選びとったのである。いや選ばざるを得なかったのだ。

仮に、僕が人並の生活を要求したとて、暗い牢獄しか待つてはいないのだ。

○

夜明けになったというのに、玄関のドアは一向に開く気配もない。僕は気が気ではなくなって、遂に声を出すのであった。

どういう訳なのか、昨夜の喜美子様は機嫌が悪くて、とうとう犬小屋に入れられてしまった僕なのである。

誠に女性の心ほど、測り知れないものはない。とても優しく、その両腕の中に抱いてくれる夜があるかと思うと、昨夜のように、

犬小屋の中に入れられ、その上にホースで、たっぷり水をぶっかけるような、残酷な目に合わせるのである。

「ワンワン、ワン、ワン」

それにしても、これほど人間にとって屈辱的なことはない。例え、犬小屋に寝かされ、犬の恰好をさせられ、犬の鳴声を口にしていても、所詮は心まで人間を忘れることは出来ないのである。

季節に変わりなく夏も冬も、生まれた時のままの姿で、喜美子様に奉仕する僕の運命。喜美子様が、このような、まるで宮殿とも

呼ぶべき大邸宅や、豊富な資産を得られたのも、すべてが僕の奉仕の結果に外ならない。夜明けの冷たい風に向かって、ワンワンと吠えつづける情ない感情は、到底言葉に現わせない。しかし同時に、心の奥深くに感じる、妖しいばかりの、うす気味悪い戦慄の陶醉も名状しがたいものであった。

いつまで吠えていても、喜美子様が玄関に現われる気配がしないので、僕は悲しみのあまり、次々と涙が流れ出て頬を濡らすのだった。何しろ、僕のしなければならぬ仕事はいっぱいあって、朝が遅ければ間に合わないのである。

いつも午前六時に起床、邸宅の清掃に一時間、洗濯が四〇分、食事の仕度が四〇分ほどかかって、八時半頃にやっと早朝の日課が終る予定なのであった。僕が朝食の用意を終える頃、起床される習慣の喜美子様だから、こんなに早く目を覚す訳もないだろうが、と言って、このまま犬小屋の中につながれたままでは、朝の仕事が出来なくて当然、不本意な厳しいお仕置きをされることになるのだ。

遂に、僕は大きな泣き声を張り上げた。

「ワンワンワン、御主人様アー、御主人様アー御主人様アー、喜美子さまあー。ワンワワ

ンワン」

惨めな僕の叫び声が届いたのか、ようやく玄関横のガラス戸のカーテンが開かれた。

既に東の空には、燦然と太陽が輝いているから、おそらく六時は過ぎて、七時近くになっているのに違いない。いつもの半分以上の時間で、この大邸宅を隅から隅まで、清掃しなければならぬ。

「あらア。由紀夫は犬小屋だったのね」

さすがに、今朝の喜美子様は優しい。

三十八歳という女盛りの喜美子様、その容姿は正に女王という貫録が充分に感じられ、僕にとっては天女にも等しい姿である。

長い黒髪は自然のまま、無造作に肩まで流し、雪のように白い肌や、ふくよかな頬から顎にかけての線の若々しさ、威厳があって、形良くのびた鼻すじ、よくそろった白い歯並をそっと包んでいる薔薇の唇など、とても四十歳近い女性とは思えない美しさである。

そして、豊かな胸の下はみごとに沈み、あざやかなばかりの曲線を描いて、まばゆい程の腰の線につづき、すらりとした両足がまっすぐに伸びて、生命の喜びに濡れる姿を作っているものであった。この美しい喜美子様ならばこそ僕は総てを捧げたのだ。

喜美子様の神聖な裸身を見ていられることだけでも、僕は世界一の果報者と言えるかも知れない。犬の恰好や、女王様の愛馬、喜美子様の便器、喜美子様の商売の道具、多勢の女性の玩具などになる惨めな身とはいえ、喜美子様の美しい姿の前では、一切の不幸も幸福になってしまうのであった。

人間の理性が、到底肉体の歓喜や、妖しい感情の波に勝てるものではないと知った時、僕の人並の将来は消滅したのである。

喜美子様の深い愛情と、誠に巧妙な、五年間の飼育調教が実り、僕の献身と奉仕は、まだ若い喜美子様に、莫大な富と、快適な生活をもたらしたのである。

犬小屋の中からやっと解放されて、僕は精いっぱい喜美子様に甘えることが許された。昨夜のうらみを忘れて、四つ足のまま、喜美子様の周りを飛んだり跳ねたり、美しい足先に唇を押しつけては、じゃれつく。

「ワンワンワン、ワンワンワン」

「よしよし、よしよし、由紀夫は辛かったのね。ごめんなさいね。犬小屋に押しこめて、おまけに水までかけちゃったのね。よしよし今日はいじめないでいてあげるわ」

「ワンワンワン。御主人様ったら、ひどい。

由紀夫とっても辛かった。ワンワンワン。早くおそうじを始めなきゃあ……ワン、今、何時です？」

「もう七時過ぎてる」

「いやあ。いや、いや、もう七時過ぎてるなんて、とてもお掃除も何も間に合わない。御主人様がいけないですよ。こんなに遅くなるなんて……」

「アラ、そうなの」

「そうです。だって由紀夫は二時間近くもワンワンって吠えてたんですよ。それなのに、御主人様が起きて下さらない」

「ふうん、それじゃあ、おまえは私の責任にして、掃除も何もなまける積りなのね」

「いやッ、ごめんなさい。由紀夫が悪うございました。うらみごとなんか言ったりして。お許し下さい。すぐお仕事を始めますから、鎖をほどいて下さい、おねがい」

「鎖をほどく前に、毎朝の言葉をやりなさいね。いい子だから……」

「え？　だって毎朝の言葉は、朝食の時にやる事になってるでしょ」

「今日は特別なのよ。昨夜はちょっとひどい目に合せたからと思って、少し甘い顔を見せると、すぐ調子にのってるような態度だ

から……。さあ、私の言うことが出来ないなら、鞭を持って来ようか」

「許して下さい。由紀夫は、ちゃんとやりまです。でも御主人様おねがいがあります。由紀夫のおねがい、きいて下さいますでしょうか？」

僕は喜美子様の足許にちゃんとおすわりをして、彼女の優しい言葉を待つのであった。喜美子様は妖しいほど美しい微笑を頬に浮かべていたが、やがて軽蔑の瞳で僕を見下ろして口を開いた。

「この犬め！　出来るだけの声を張り上げて吠えてごらん。私がヨシって言うまでよ」

「ワンワンワンワンワン！」

「小さい小さい。鞭が欲しいの？　おまえ」

「ワンワンワンワンワン！」

「ヨシ、始めろ！」

「ワン、ありがとうございます。ワン、由紀夫の朝の御挨拶を始めます。由紀夫は喜美子様という御主人様の深い愛情に守られまして幸福な毎日をご過ごすことが出来、誠に感謝の外ございません。一步世間に出れば由紀夫は官憲の牢獄につながれる運命であります。どうか喜美子様の家畜として忠実な奴隷として永くお仕え出来るよう、心からお願ひ申し上げます。尚、喜美子様の手にかかって、殺さ

れのような事がありましたも、それは由紀夫の最高の喜びであり、また望むところであり、何のおうらみも致しません——」

朝の御挨拶は、喜美子様の満足がいられるまで、いつまでもいつまでも続き、彼女の許可と共に僕の一日が始まるのであった。

「七時じゃあね、仕様がはいわね」

喜美子様は僕の頭髪を荒々しくひっぱたり、口の中に白い指先を押し入れ、舌の根をまさぐったり、鼻を優しく弄びながら、話をされるのが習慣になっていて、僕はその彼女の仕草に懸命に甘え、こたえなくてはならなかった。

「申し訳ありません。ごめんなさい」

気むずかしい喜美子様を、常に快適な気分になさなければならぬ僕の務めは容易なものではない。

「ワンはどうしたの？　最近少しなまけるようね。おまえは私の家畜なんだから、ちゃんと言葉にも何気ない仕草にも、それを現わす努力をするようになって、いつも言うてあるでしょう。いつまでも上達しないのなら、成長が止まっているのなら、また前のように、一切の人間の言葉を禁止しようか？」

「ワンワンワン、ワンワンワン。ごめんなさ

い、ごめんなさい、お許しを……。ワンワン
ワン、これから気をつけます。おねがい、お
許し下さい……。ワンワンワン」

「ヨシヨシ。いい子だから、努力することを
なまけちゃ駄目よ」

「ワンワンワン」

「ふふふ、可愛いわよ。よしよし、じゃあ今
朝だけは掃除を許して上げるわ。時間がな
いから、すぐ洗濯物をかたづけて、食事の仕度
にかかりなさい」

「ワンワンワン、どうもありがとうございます
す。御主人様ア、おねがいます。家の中ま
で由紀夫の背中に乗って行って下さい。おね
がいです。さ、早くお乗りになって」

「大丈夫かしら、つぶれない？」

「大丈夫ですよ、ワンワンワン」

たとえ喜美子様の体重でつぶれようが、倒
れようが、とにかく喜美子様に喜んでいただ
くということが、僕の目的であり、宿命なの
であった。

僕という人間は即ち、喜美子様の快樂のた
めに存在しているということなのだ。ここに
は僕の榮達は何もない。僕はいかにして甘え
悲しみ、すねてみせ、奉仕者の言葉と犬の声
をかみ合わせ、喜美子様の喜びの為に、最高

の家畜として成長する、課題があるだけなの
だ。

今でこそ健康で若々しい肉体を誇っている
けれども、やがて年月を重ね、僕の肉体に何
の魅力も感じられなくなり、喜美子様の最終
で最高の快樂ともいえる、彼女の手によって
なぶり殺しにされる時まで、僕の自由は返っ
て来ないのである。

この絶望の生活の中にも、妖しい、黒い悦
びがあることを、一体どのように説明すれば
良いのであろうか。

僕の肉体が毎日少しずつ衰弱していき、男
には惜しいとまで評判の高かった端正な容貌
も、いつしか陰が濃くなり、美しさが衰えて
いくのと対照的に、喜美子様の肌は真珠のよ
うに輝き、若さを保ち、僕の屈辱の犠牲によ
って、その富も増していくばかりであった。

○

朝食を作るのはとても嬉しい。僕の一日の
最高の喜びである。喜美子様と同じ物を食べ
られるということだけでも幸福といえよう。

朝食だけは夕食などと違って、まともな食
事でなければ、僕の労働にさしつかえるので
あった。何しろ午前十時から夜おそくまで、
貴婦人方の美容師として、また美容の道具と

して、更に彼女達の玩具として、家畜として
のさまざまな仕事が続いているのだから。

喜美子様は僕のお客様を、電話一本で予約
整理、この邸宅に招くのであった。訪問客が
多くて断りきれない日などは、深夜まで僕の
犠牲が続くことになる。

富豪の未亡人、女社長、有閑マダム、喫茶
店経営の女性、美容室経営の女性など、喜美
子様の多くの友達、多額の会費と日当を支
払って、僕の美容技術と肉体を、自分達の欲
望の相手として求めるのであった。

「由紀夫、昨日は少し分楽しくお相手してい
たようだけど、今日は少しばかり大変なお客
様が来るわよ」

喜美子様は、僕の作った食事をなさりなが
ら、いたずらっぽく笑った。

「昨日の真知子夫人は由紀夫に本当に優しい
わねえ。本気でおまえのことを愛しているの
かもわからないわ。おまえだって、好きだろ
う？ 真知子夫人のこと」

「きらいです、僕。みんなお客様だもの、仕
方ないでしょ。僕の愛してるのは、御主人様
だけに決まってるでしょ」

「ふふふ、相変らず優等生ね。今日のお客様
はね、とっても久しぶりの方なのよ。どうし

でも由紀夫に会いたって、大変なの。それで、百合子夫人や温子女士の予約をキャンセルして、今日はその人の専用よ」

「百合子様や温子様、よく承知なすったものです、信じられない」

「だから、明日はうんとサービスしなきゃ駄目よ」

「すると明日は、四人にもなるのですか？」

「そうよ、何か文句でもあるの？」

「いえ、そうじゃないんですけど、由紀夫、悲しいのです。お客様ばかり多くなって、最近はお主人様に少しも……」

「ふふふ。可愛いこと言うわ。いいのよ、私の方はね、おまえが稼いでくれれば、それが一番嬉しいのだから。今日のお客様なんか、久しぶりだけど最高の方よ」

「誰ですか？」

「誰だと思う？」

「ええーと、うん、わかんない。誰？」

「ふふふ、由紀夫の泣声が好きの方よ……」

「八重子夫人」
「いやあ！ いや、いやです」
「ホホホ、今日は私も楽しめるわね。やっぱり、八重子夫人が一番残酷なものねえ。でも

ひどく、いじめてくれるの方が、本当は由紀夫のことを愛して下さってる方なのよ」

「いやです。今日はもう食事しません。あんな鬼のような女で、デブの相手をさせられるなんて……約束がちがいます。御主人様おぼえてないんですか？ この前の時、殺されかけて、やっと許して貰って……。御主人様も、もう八重子夫人の相手はさせないって、僕を抱いて約束して下さいましたのを……。久しぶりも何も、まだ三カ月前のことですよ」

「そう？」

「そうですよ。今度はどんなことさせられるかわかったものじゃないです。八重子夫人は変態もいいところです。もう五十歳でしょうあんなデブ、思い出しただけでもいやです。ぶくぶくしちゃって、すごいことするのだから。食欲なくなっちゃった。由紀夫だって、時にはお休みの日が欲しい」

「何イ！ もう一度言ってごらん」

「……」

「黙っていたら、この犬め！……そうなの。じゃあいいわ。もう食事をするのをおやめなさい。命令するわ。いいね、トイレへ行って待っていなさい」

「御主人様」

「命令よ、わかっているでしょう。トイレで待っていなさい。お仕置よ」

「かんにんして……」

「つべこべ言わないで、黙って、私の言う通りするのよッ。この馬鹿野郎！」

喜美子様はすっかり怒ってしまったて、僕の身体を蹴とばし、壁にかかっている鞭を取って来た。

「さあ、犬になって、トイレへ頭を突っこんで。この馬鹿野郎め」

「ワンワンワン、許して！ おねがい！」

僕は四つ足になって、夢中でトイレに走った。喜美子様の鞭を逃れるためには仕方がなかった。何しろ喜美子様は男性にも勝る力の持主で、彼女の鞭を受けたが最後、何の仕事も出来なくなってしまうのである。

喜美子様の怒りを柔らげる方法の一つしかない。彼女の命令を忠実に守るだけである。僕は便器の中に仰向けになって、頭を奥の方に入れ、喜美子様の来るのを待った。

「さあ、今朝は許さないわよ。一粒でも一滴でも、外にこぼしてごらん。どうなるか、おまえが一番知ってるだろう」

「御主人様、嬉しい！」

思えば一週間ぶりの喜美子様の下さる宝で

あった。どのような果実も、どのような美味な食物も、この喜美子様の下さる宝物には到底のこと及ぶ物ではない。まして、それが敬愛する人のお仕置代りとなれば、なおさらのことである。

僕が喝望する果実が、完全に腹の中におさめられると、やがて甘美な慈雨が、僕の喉をうるおしてくれる、愛の香水が消化を助けてくれるのであった。

「犬め、どうだったのよ！」

「とってもおいしゅうございました。ごちそうさまでした。由紀夫、うれしい」

「よしよし。じゃあね、外の犬小屋に入っていて、八重子夫人のいらっしゃるのを、丁重にお迎えするのよ。わかったね？」

「ワンワンワン。わかりました。由紀夫は御主人様のおっしゃるとおりにします」

「八重子夫人はね、わずか一日で三〇万円も払って下さるのよ。月々の会費は百万円の線をきちんと守って下さる大切な方なのに、おまえって奴は、いやがったりしてとんでもない罰あたりだよ。この下司野郎め。さあ早く犬小屋に行つて、ちゃんとお坐りをしてッ！八重子夫人がいらっしゃったら、うんとお尻を振って、喜んでみせるのよ」

「はい、御主人様」

「そうか。よしよし、大分いい子になって来たね。その心を忘れないように、八重子夫人をお迎えするのだよ」

「はい、わかりました。ワンワンワン」

僕には涙をふくことも許されてはいなかった。頬を濡らしたまま四つ足で玄関に走り、三、四度、喜美子様に尻をふって挨拶した後犬小屋の中にちょこんとおすわりして、やがて来るべき人を待つのであった、

悲しみの涙なのか、うらみの涙なのか、くやしきの涙なのか、涸れることも知らない涙がとめどなく流れ、僕の全身に伝わって行くのだった。

ああ誰か、八重子夫人が来ない間に僕を助け出してくれる、優しい女性が出現しないものであろうか。もうあの恐ろしい八重子夫人のクライスラーは邸宅の門をくぐっているかも知れない。門の入口から玄関まで五分ばかりで着くはずである。

やがて庭の森の中から黒いクライスラーが出現すると、僕は犬小屋から出て、尻を左右上下に振りつづけ、歓迎の意を示さなければならぬのであった。

僕のすぐそばまで来て車は止まった。運転

席から妖しい笑顔を見せながら八重子夫人がその巨体を地面に降ろした時、僕は尻を振る努力も忘れて、絶望の谷底に落ちてゆくような気持を知った。

○

二十歳の秋の、あの運命の日を忘れることは出来ない。真実の愛を捧げて、命までも賭けた一度だけの恋に破れた時、僕の人生は破滅したのである。

女の不実を知った時、僕には彼女を許すことは出来なかったのだ。心から愛していればこそ、ただ一度のくちづけはおろか、その手さえも握ることもなく、ひたすらに結婚の日を待っていた男を裏切つて、彼女は他の男にすべてを許していたのであった。しかも事もあろうに、僕の一番嫌いな男がその相手だったとは……。屈辱と悲しみが、憎しみと怒りに変わっていくのは当然のことであつた。

「貴男には悪かつたと思つてゐるわ。でも仕方がないでしょ。谷川さんが好きになつてしまったもの。貴男に知られたように、私はみんな谷川さんに許してるのよ。こんな悪い女のことなんか忘れて、貴男にふさわしい女性を見つけて下さい、ね」

僕の両手が、雪よりも白い彼女の首にかか

り、幻の天使の姿が土の上に倒れるまで、僕は背後にいる人影に気がつかなかった。

「終ったわね。由紀夫さん」

喜美子様の言葉がすべてを知っていた。僕の男性美容師としての未来も、恋の終りと共に消滅したのである。

「清子さんって、本当は貴男のことが好きだったのよ。でもね、貴男が少し消極的過ぎたのよ。なんと言っても、女は待ってるもの。そこを谷川さんの押しの強さが勝った訳ね。でもまあ、もう仕方がないわね」

喜美子様は平然として言った。その冷酷な瞳を見つめて、僕にはどうすることも、何を言うことも出来なかった。

美容学校を卒業した十七歳の春から、喜美子美容室に勤め始めて四年余りになるが、この時ほど彼女の冷酷な瞳を、悲しいと感じたことはなかった。

「清子さんを殺してしまった以上、貴男は牢獄に入って、最後は死刑ね。いくら恋に破れたからと言って、殺人までする理由は認めてくれないわ」

「先生。僕は、どうすればいいのでしょうか。」

僕はなんてことをしたのでしょうか」

その夜、僕は喜美子様に童貞を捧げたので

ある。喜美子様は僕を抱きしめて言った。力強く、頼りのある、自信に満ちた美しい笑顔で――

「由紀夫さん、貴男を死刑なんかにはさせないわ。安心なさい」

喜美子様は美容室を売り払って、三部屋ばかりのマンションに移った。これも僕のためかと申し訳なく思っていたら、彼女は愛しくなぐさめてくれるのであった。

「気にしなくてもいいのよ。店は売ってしまっただけ、この部屋でだって商売出来ないことないもの。ドライヤーと鏡、それにシャンプー台を作ればいいでしょう。お客様は電話で呼ぶのよ。そのために、大切なお客様の住所を控えてあるのよ」

喜美子様は僕に言った通り、このマンションの一部屋を、小さな美容室に作り変えてしまった。

「由紀夫は絶対に外へ出ちゃ駄目よ。警察に見つかったら、死刑台が待ってるだけなのよ。いいわね」

喜美子様が三十三歳、僕が二十歳の夫婦生活が始まったのだ。だが夫婦生活とっていいのは、僕の方だけであつたかも知れない。マンションの生活が始って、一週間もしな

いうちに、僕は全裸のままの生活を強制されやがて客までとらされるようになったのである。

僕という青年の肉体を武器にして、お客様を性欲の虜にしてしまふ、喜美子様の手練はさすがであつた。御婦人方の肉体の美容に加えて、精神的美容法を取り入れた、喜美子様の素晴らしい着想であつたと言うべきだろう。僕の肉体をいじめ、自由に遊び、他のお客様と共に調教し訓練することは、喜美子様にとって、趣味と実益を兼ねた最高の商売なのである。

真知子夫人をはじめ、八重子夫人、節子未亡人、温子夫人、百合子夫人、和子社長、菊江会長、美津子夫人など、お客様の数は次々と増加、三年目には遂に、庭の中に山と川があるような大邸宅を手に入れる喜美子様の富の程であつた。

多勢の婦人方に調教訓練された僕だけが、美しい容姿の奥にひそんでいる、女の醜い本質を知っていると思う。

世間の間では、誠に優しく思いやりがあると評判の高いこれらの婦人方が、秘密の壁の中では、きたない言葉と残酷な仕打ちを平然と僕の肉体に降らせ注ぐのである。

それらは五年間のうちに、僕の肉体と精神を、完全な奴隷のものに変えるのに十分であった。もし僕の精神が、うわべの美しさだけに陶醉できるものにならなければ、完全に僕は狂死していたであろう。確実に、誠に巧みに、婦人方と僕の双方を操作して、これまでの富を築き上げた、喜美子様という女性は、やはり天才と呼ぶべきであろう。

僕を心の底から自分の家畜にならしめ、その上に限らない尊敬と慕情を失わず、女王と奴隷の関係を確保すると共に、お客様の数は増加することはあっても、減ることはないというこの現象を作りあげた喜美子様の手腕を、天才と言わずして、果たして何と形容する言葉があるう。

正に喜美子様だけが人間の本質というものを、女の心というものを、熟知しているといえるのであろう。

○

喜美子様の調教訓練を受け、その商品価値は他に類のないものとして、多くの高貴な婦人方に好評を得ている僕だが、やはり相手によって実質が上下するのを認めない訳にはいかない。

例えば、婦人方が五十歳だろうが六十歳を超

えていようが、それなりの美しさと智性を備えた方ならば、僕はどのような奉仕といえども、自分の最善を尽すことに喜びを感じるのだが、性悪で醜貌で豚だか熊だかわからないような女性に、常識の外にある行為を強制されては、単なる苦痛と嫌悪をしか覚えないのである。

「由紀夫ちゃん、久しぶりに会えてほんとに嬉しいわ。今日はゆっくり時間がありますからね。うんと可愛がってあげるわよ」

八重子夫人の笑顔は、アフリカ産のマント^{ひひ}狒狒が好色の表情を浮かべて立っているようであった。僕はぞっとする思いだった。だが奴隷として、自分の最も嫌なこの婦人に対して、精一杯の歓迎を示さなければならなかった。喜美子様の大切なお客様に対して失礼は許されないのである。思いきり尻を高く持ち上げて、左右上下に振動させ、八重子夫人の膝を前足でさわりながら、甘え、鼻をならさなければならぬのだ。

「ワンワンワンワン。八重子さまあ、待ち遠しゅうございました。ワンワンワン、由紀夫は八重子様が今日来て下さるか明日来て下さるか、いつもお待ちしていました。ワンワンワン、本当に嬉しゅうございます。八重子

様に、今日は一日中、お仕え出来ると思うと涙がこぼれるほどです。八重子様、由紀夫がお気に召さないことをしたら、うんと殴って下さいませ。お願いです、うんといじめて頂きとうございます。ワンワンワン」

僕の歓迎の御挨拶は八重子夫人の機嫌を良くしたようであった。彼女はにんまりと笑って、巨体を僕の背中に乗せ、喜美子様の待っている邸宅の玄関に向かうよう指図した。

それは僕にとって、絶望と暗黒の世界への道程であるように思えた。僕は三カ月前の、ロープや鎖の感触を肌で思い出しながら、もしかしたら、もう今日でこの世とお別れになるのではないだろうか。喜美子様と八重子夫人の為になぶり殺しにされるのではないだろうか、という危惧にさいなまれた。とたんに鞭の痛さが思い出され体が縮む思いがした。僕をなぶり殺しにした後、八重子夫人から莫大な報酬を受取った喜美子様は、素晴らしい恋人を作って人並の生活に戻るのではないだろうか……。僕は八重子夫人の重さに背骨をしなわせながら、予感と疑心の重なる四つ足の我が身を、喜美子様の待つ館へと、重々しく運ぶのであった。

—(おわり)—

カット・小川茂正



美女緊縛作法

八重垣流秘聞

風流極道軒

(その完結)

非人勦り

三人の非人が、いま、お節を勦っていた。

「予州は正面から、野州は左」

因州は、お節の右肩にもたれ込むと汚れた掌をのばして右乳房を狙う。野州は、ぴったりとお節の左脇腹に寄りそう。よだれをたらしながら予州はお節の正前にあぐらを組む。のみやしらのわいているさんばら髪が、三方から白いお節の柔肌をくすぐる。

一人の女体に、三人の男がよりたかっているのである。

その女が、自分の妻なのだ——。大学は身体中を焼火箸で貫かれるような屈辱感のなかで、ただ、何事かをわめきつづけた。

お節も悲鳴もあげている。全身で、無駄な抵抗をつづけている！

「ほれさ！ こんな具合によう！」

予州が、上半身を押し倒したとき、お節の下半身が宙にうく。宙にうきながらもお節は必死で膝を合わせ、どたりっと鈍い音をたてて床に横倒しされたときも、縛られた両足首で、隠しおおせるものではないのを知りながら、はかない努力を続けるのだ。

「ヘッヘッヘッ、奥方様。随分と上品ぶった

真似をするじゃあねえか」

因州は、お節の両足首に荒縄をとおすと、あかくそまった首に連結して、

「よく旦那方に見てもらったな」

と、ゆっくりと回転させ始めた。お節は、串刺しの刑を受けでもするように全身をけいれんさせ、みじめな姿を、老中稲葉美濃を始め十数人の男たちの前に、曝され続けるのであった。

「そちらの姐ちゃんもきなこと」

予州が、三千代の牢に入っていく、引き出してくると、

「あんたもこんな目に会いてえらいや」

頭の善七と二人で、縄をとき、くるくるっと一回転させると、苦もなく丸裸にしてしまふ。あれほど責められてきたのに、両手首の縄痕以外には、その痕をとどめない美しい肌であつた。

ぺたぺたと、その背中をたたいた善七は、白く輝く腕を折りまげると、三味線の三の糸で、三千代の手の親指を二つ重ねてくる。

「足も出しなよ、姐ちゃん。奥方様かも知れねえがな、どっちでい、ええ」

予州が、右、左の足首を強引ににぎりしめると、同じような糸で二巻きする。せめて縄が、がんじがらめにかかつていれば、いくらかは、羞恥心が押えられるかも知れない。三千代は、わずか二本の糸で、全く無防備の姿

前号まで——徳川吉宗の遺した百万両の黄金をめぐって、老中配下の黒鯨組と、長州藩の息がかかった黒駒勝蔵一味が対立。渦中にまきこまれた八重垣流捕縄術家八重垣大学を始めとするお節、千春、笹川妥女夫婦、女岡っ引きお千賀、夢売又平と情婦夜桜お蘭たち。清水次郎長がこれに絡まるが、勝蔵一味に女房のお長が捕えられる。時は慶応元年晩春、果たして黒赤縄十六方の秘技とは何か——。

にされてしまったわけである。

「この姐ちゃん、はくろがあらあ」

予州が、右乳房の下の小さなほくろを見つけると、ピチンと指ではじく。

ねっとり凝脂ののったお節の裸体に比べて、まだ若々しい新妻の香りをそこはかとなく漂わせる三千代の肉体であつた。

「何人の男に可愛がられた、おい」

予州が、さあっと手を伸ばすと、

「キャアッ！」

余りの不意打ちに三千代が悲鳴をあげた。

「叫んでも駄目さな」

白い咽喉のけぞり、丸髷の付根が、がっくりと肩のあたりにおちて黒髪が、背中の汗にべっとりくっつく。白い肩をふり、乳房をぶるんぶるんとふるわせ、脇腹を波打たせて呻きつづける三千代の姿からは、凄惨なばかりの色気が、まきちらされていた。

「キャッ、キャッ！」

と云いだしたのは、善七が、足裏をくすぐり、予州が腋をくすぐり始めたからである。

「キャアッ、キャッ……」

泣いているのか笑っているのか、玉のような汗を額からほとばしらせ、唇をとがらせ、すばめ、三千代は全身がこなごなになるよう

な思いで、くすぐり責めをうけつづける。

「や、やめて、やめて、やめて下さいませ」

そばでは、お節が、野州と因州の、よりあくだい責めにもう半狂乱のていである。

「ヒッヒッヒッ……奥方様……」

下卑た高笑いをする野州。お節がいよいよと頭をふる、その頭を支えて因州が、生涯お目にかかれそうもない旗本の奥方の朱い唇にどす黒い口を押しつける。

善七と予州も、やがて三千代の柔肌を狙って、黒い蛇のように四本の腕をくねらせていった。

それはもう責めとよぶよりも、淫らな宴、淫宴とよぶに相応わしい光景であつた。

れっきとした武士である稲葉と小栗が、このていたらくを許しているのは、八重垣大学と笹川妥女という二人の旗本に対する拷問としてこれ以上のものはないと信じているからであつた。妻が、非人どもの罵りものにされれば、いかな強情な武士とても、秘密を白状するに違いないと——。

が、この期待は見事に裏切られた。

予州と善七が、遂に下人の本性をむき出し始めたとき、その夫の笹川妥女が、

「先生！ もうこれ以上は耐えられませぬ。

どうか、どうか黒赤縄十六方とか申す秘術、伝授して下さい！ お願いします！」

と絶叫したが、大学は、答えなかった。

答えるすべがなかったのである。

「小栗氏、真実、知らないのかも」

ほっと一息入れた稲葉が言った。

「さあて……」

小栗は、床几からたち上ると大学に、

「八重垣、止むを得ぬ。死んでもらう以外にはないようだ。先ず、奥方のお節殿をこの場で、三段斬りにいたすぞ、よいか」

大学の乾ききった唇が、わななく。

「まっこと！ 存じませぬものを、無法なことを！」

「無法は承知の上。なにごとく徳川家の御為め、死んでもらおう」

といい、

「最後に問う。まこと存ぜぬな」

「……まこと存じませぬ」

「フーム……。大学、秘伝書にはなくとも、

口伝というか、先祖から一子相伝の云い、伝えはないのか……。一子相伝でなくとも、一代とばしの口伝も世の中には、まれにあること」

「待、お待ち下さいませ。一代とばし、一代とばしと申されますと、祖父——孫と、子を

とばしての口伝……」

小栗の一言で、車屋善七たちは、なれた手付きで、三段斬りの準備をととのえていた。

三段斬りとは、大岡越前守忠相の定めたという御定書百力条には勿論規定されていない斬罪の一種であるが、加賀藩など諸藩でぼつぼつ行なわれたもので、先ず罪人を後手に縛って吊るし、胴を両断する。人間の頭は重いののでぐると頭が下になる。その瞬間、首を斬る、身体は三つに切断されるという残酷な処刑のひとつである。

善七は、隅から吊し、責めに使う柱をひっぱり出してくると、それにお節の後手の縄をかけて吊るしあげ予州たちは、荒むしろを十数枚、その足もとから周辺にびったりと敷く。

真白い棒のようにお節の裸身が、ゆれる。

「……もしかすると、もしかすると、千次郎が、私の父、甚左衛門から、直接に……」

大学は呟くように云って、ハッとする。

勘当したとは云え、千次郎は嫡男、万一、千次郎の身に何事かが起こるかも……がその時は、もし千次郎が知っておれば、何もかくすことはない、有体に申し上げるとすすめればよい。大学は、妻のゆれうごく無残な裸身をしっかりと見つめながら、

「小栗様。千次郎を、千次郎にお訊ね下さりませい」

「千次郎とやらは、いずくにおる」

「町火消さ組の組頭加島屋兵助にあずけてございまする」

「町火消とな」

「いかにも、ゆえあって勘当致しました」

小栗は大きくうなずくと、善七に目配せし、お節を吊り柱からおろさせ、稲葉美濃と二人、すつくと床几からたちあがると、

「これら囚人、のがすでないぞ」

といいのこして、座敷牢をでていった。黒鍬左弁が、加島屋兵助の家へかけていたことは云うまでもない。

そして、そこに、千次郎は居なかったのである。父である八重垣大学は、伊皿子の南蛮屋別邸から自分たちが黒鍬組に掠られて金杉の宿に連れられていった直後、父たちの危急を見逃すことができず、その別邸をうかがっていた千次郎が、相愛の辰巳芸者君香といっしよに捕えられたことを知ろうはずがなかったのである。

加島屋から、千次郎の行方不明を知らされた黒鍬左弁は、これを稲葉美濃に報告し、稲葉は、遂に、南北両町奉行所にその探索を厳

命したのである。

身代りお蘭

老中からじきじきの厳命とあって、南町奉行山口駿河も、北町奉行都筑肥前も、総力をあげて千次郎の探索に乗り出した。

じめじめした梅雨が例年より数日早くやってきたなかを、みの笠や合羽をつけて与力同心たちがとび廻った。

浅草伝法院の朱房の重蔵の家でも、お千賀が、必死で、頼みこんでいた。

「あんた、これだけは見逃して、ね。たったひとりの千次郎兄さんのため。父、大学のために。ね、妾に、十手を持たせて……」

八重垣大学の娘でありながら、勘当されて身を持ち崩し、岡っ引きの女房になつてはいるが、お千賀には武士の娘としての血が脈うっていた。その上、黒駒勝蔵たちから受けた屈辱をどうしても晴らしてやりたい。

どうにか床をたたんだものの、まだ歩行も十分でない重蔵であつたから、

「ちえっ！ この傷さえ早くなおりゃあ」

と、地団駄ふみながら、結局は、お千賀の願いに頭をたてに振るはかばかかった。

「有難うよ、お前さん。今度こそは、あんなどぢはふまないから……」

お千賀は、さ組の組頭加島屋兵助と連絡をとり、配下の町火消の兄哥連を総出で、千次郎の行方を求めて走り廻り始める。

清水の次郎長たちは勿論、血眼である。高萩万次郎、小金井小次郎を始め弟分をつて、たよってしらみつぶしに八百八丁をあたっていく。お長姐御のため、大瀬半五郎のため、大政、小政、増川仙右衛門、みな眼を血走らせたの捜査であつた。

黒鯨組も——。徳川二百五十年の伊賀忍びのものの面目にかけて、左弁以下、四方八方に散っていく。

が、二日たつても三日たつても、落とし差しの千次郎たちの行方は杳として知れない。八重垣家では、千春が、どんよりと鉛いろに垂れ込めた空を見上げながら、

「お母様やお父様は、いまごろどこで……」
かたわらの望月秀之進の顔も沈んでいる。

千次郎たちは確かに江戸にいたのである。しかしそれは、到底、町方のものの探索手の及ばない所であつた。

芝は白金にある広荘な長州藩下屋敷——。

その一面にある木更津刑部のお長屋。お長屋といつても三十七万石の大藩の御勘定役のもの、部屋数も多く、地下倉の備えもある。

「菊は咲く咲く葵はかれるか……幕府が夏までもつかどうかじゃの、刑部」

江戸詰家老、毛利筑前の言葉に、

「御意」

刑部が答えた。

庭では、梅雨晴れの洩れ陽をうけて金蘭が黄色い花を咲き乱れさせ、タニウツギが紅色の蕾をほころばせようとしていた。

「して、黒赤縄十六方、あいわかったか」

「いま一歩、あと一押しかと」

「万事まかせ。將軍吉宗の埋蔵金百万両をそっくり頂戴して、倒幕の資金にあてる……フッフッフ、さぞ吉宗も満足じゃろうて」

刑部も、小鼻にしわを寄せて笑った。

「ご安心めされませい。倒幕の軍資金百万両必ず、お役に立ててみせます」

二人がいま立っている廊下の下のあたり、

地下倉は地獄であつた。

さらに云えば、女地獄——黒駒勝蔵が宿敵清水次郎長の女房を前に、淫らな責めの限りをつくしていた。

広さ百坪はこえよう地下倉——。

蝶足膳、宗和膳、胡桃足膳、さらには銚子や、角樽、高杯など、普段は使われない什器類が、うず高く積み重ねられた間を抜けて壁の一隅を押すと、どんでん返しの扉の向こうにさらに四五十坪の板間があり右側に一坪ほどのまるで檻のような牢が六つ並んでいる。

「お長、親分のお呼びだ、出てこい」

ミズチヨボの狐六、鍵束をじゃらじゃら云わせて、ひとつの牢に近づくと、

「何を云うのさ、迎えにこいって云いな」

「チェッ！ こなまいきな女だぜ」

錠前を外すと、馬吉、牛造たちがどやどやと入っていき、お長をひきずり出し、荒むしろの上にひき倒す。

錆鏢色のしぶい大島つむぎの裾が乱れて紅いものがちらりと見えた。

三十歳前後であろうか、小太りはしているが、さすが次郎長が惚れた女、鼻筋のとおりた色の白い美女である。

「勝蔵親分。やくざの道に外れたことをなさいますと、次郎長が許しますまいよ」

「フッフッフッフ……それは面白い。次郎長さんとは、いつか必ず決着をつけたいと思っているが、その前に、これまで散々邪魔してくれたお礼を、たっぷりとあんたさんにさせ

て貰おうと思ってね」

ニタツと笑った勝蔵、狐六に

「ひん剝いちゃいな。こんな果報は滅多にあるものじゃあねえ。ゆっくりと、罵りながら素っ裸にしてさしあげな」

「な、なんということをし！ 畜生」

わらわらと寄ってくる狐六たちに、お長が身悶えたとき、

「わ、妾を……姐さんは、お長姐さんは許してさしあげてえ！」

牢から絶叫したのは、お豊である。

「妾が、妾が身代りに。……妾が何でもするからさあ！」

「フッフッフッフ……こいつは面白い。姐御の恥をみるに忍びず、子分の女房のおでましかい……いいぜ、お豊からやりな」

熊七たちがかけよると、牢からお豊をひき出してくる。手荒らにひったてられながらお豊、別の牢に、

「お前さん、許して、お願い。姐さんのためなら、妾、どんなことでも！」

と、亭主の大瀬半五郎に呼びかける。呼びかけられた半五郎、

「畜生！ やい、勝蔵！ 人非人！」

血走った目で格子に身体をうちつけながら

怒号するが、何の役にも立たない。豚松がもうひとつの牢から、

「姐さん……お豊さん……半五郎兄哥」

おろおろと泣き声をあげている。

荒むしろの上に坐らされたお豊のまわりを子分たちが取りかこんだとき、

「お待ち！」

激しい声がとんだ。夢売の又平の情婦お蘭であった。このお蘭、お長たちがこうなったのは、自分が根岸の南蛮屋別宅の見張りを怠ったせい。どんなことがあっても、お長とお豊の操は守りとおしてみせなければ、女の意地もたたず、情夫の又平が、次郎長に顔向けひとつできなくなろうと、捕えられた瞬間から決心していたのである。実はあの喧嘩の朝、逃げようと思えば逃げられたのであったが、お長が、十数人の男に捕えられるのをみて、それを助けようと、共に捕えられてしまったのである。

「ほほう、これは面白い。お蘭とかいう女らしいが、滅法な啖呵を、きるじゃあねえか。

この二人の身代りになるっていうのかい」

「そうだとも、ちょっとここじゃあ云えない義理がありましたね。妾じゃあいけないのかい。ちっとは罵り甲斐のある駄だと、妾や思

っているけど」

お蘭は、谷中の黒鯉組の隠れ家でうけた責めをチラッと思いうかべる。

（あの上の折檻になりそうだな。又平さん……勘忍してよ）

お蘭は自分の肉体に加えられる淫虐な拷問のおぞましきよりも、夢売の又平にすまぬと思う気持ちの方が強い殊勝な女であった。

（このお蘭、どんな責めにも耐えて見せるから、お前さん、許して……）

「さあ、親分さん。早く始めて下さいな。いつまでも女を待たせるものじゃあないでしょうよ」

「よかろうぜ、狐六。まずその鉄火姐さんに音をあげさせてさしあげな。お長とお豊の目の前でよ」

牢から連れだされたお蘭、荒むしろの上に立ったままで、

「さあ、どうするのさ。勝手におしよ」

きらりと、瞳を輝かせた。

「そりゃあこちらのいう台詞だぜ。そのおべは、ぬがせて貰いてえのか、自分でぬぎなされるか……どちらでい」

「勝手におしよ」

「そうはいかねえ、どっちかに決めな」

チラッと目を伏せたお蘭、

「縄をときな」

と、狐六に命令するように云った。（クソッこの阿魔、今に吠面かせてやるぜ）と狐六、乱暴に縄をといていく。

縄をとかれたお蘭、

「よく目をあけて眺めていることだね、夜桜お蘭さまの躰をよ」

さあっと、桃色の帯締めをとくと、献上博多の帯を、シュッシュッと衣ずれの音を小気味よくたてながら取ると、ぽいっと、そばでニタニタと笑っている馬吉に投げつける。

「な、なにしがやる！」

若竹色のその帯を、やっと受けとめた馬吉が、二歩すすんで、綿紗の伊達巻きに手をかけた、途端――

「触るんじゃあないの！ バカ」

その手を払ったお蘭、くるくると二廻りさせて、ぽいっと今度は熊七の顔に投げる。

「フッフッフ……威勢のいい姐さんだ」

熊七、毛むくじやらの掌でうけとめる。

つづいてお蘭、業平格子小紋の飯能銘仙の襟に左手をかけ、右手で前身ごろを合わせながら、自分を見つめている十数人の男共を睨み返すと、

「どいつもこいつも三下奴の面構えってことだね。このお蘭さんのお裸を拝むにゃあ、とてもじゃあないけど役不足だねえ」

「つべこべぬかすな！」と狐六。

「あせっちゃあいけないってこと！」

お蘭、男たちをじらすように、三呼吸、四呼吸していたが、そろりと左肩から袖を脱ぎ前身ごろを押えながら右肩も脱ぐと、前で両手を組んで、落ちるのを支える。

眼もさめるような牡丹と梅を染めぬいた友禅縮緬の長襦袢が、うす汚れた地下倉を、パアッとあかるくする。

「さあてね。この長襦袢、誰かにとらせてやってもいいんだよ」

ゴクンと唾をのんだのは、女好きの辰五郎であった。

「姐さん、あっ、じゃあいきませんかい」

「そうね。このなかじゃあ、まあ、ちっとはましな顔してるわねえ。それに、まだ若いしさ……いいわ。あんたにまかせよう」

辰五郎、ピュッと口笛を得意気に吹くと進みで、お蘭の両手をとった。いきな業平格子小紋が、荒むしろの上に散る。その空気のうちが、足もとから、ひんやりと内腿にまで伝わってきて、お蘭は、伝法な言葉とは逆

に心のなかが鳥肌立つ。

牢にもどされたお長とお豊は、床に顔をうつぶせたまま、肩を小刻みに震わせていた。

「じゃあ姐さん、ごめんなすって」

辰五郎、真紅な腰紐に手をかけて、すらりとぬきとり、田之助襟に手をかけた。

「フッフッフ、随分と慣れた手付きじゃあないかい、兄^{にい}哥さん」

「おかげさまで、ヘッヘッヘッ、じゃあ」

辰五郎、前から、ぐいっと襟を、背中までひきさげた。ハッと、前を押えようとしたのは、女の本能であろう。

「いやですぜ、姐さん」

辰五郎、お蘭の両手をさあっと下へのぼしたから、華やいだ友禅縮緬が、音もなく足元に輪を描く。

あとはもう純白の真岡もめんの肌襦袢と湯文字だけであった。長襦袢に思いきり華美なもの、下着は、清潔なもめんをと云うのが夢売の又平の趣味であった。その趣味に合せているお蘭、よほど又平に惚れている。

しかもお蘭、その名のように蘭の花の香りを体臭として持っているのである。

それに気づいた狐六、小鼻をぶんぶんさせながら、

「てえした匂いをしてるじゃあねえか」

辰五郎に、肌襦袢の紐をとかれながら、さすがに目を閉じているお蘭の首すじをかき廻る。勝蔵までが、それを真似る。

「じゃあ、皆さま方。この鉄火姐御、いよいよ、このヨツカマリの辰五郎の手で、裸になりあそばしまする」

ピクッとお蘭の睫毛がうごいた。

「お蘭姐さん。いいんですね。どんなにくがあるのか知らねえが、あいつ等の身代りになるにしちゃあ、ちっとばかり、高くつきすぎるんじゃないですか」

お蘭の唇のはしがすこし動きかけたが、答えはなかった。

ニタツと笑った辰五郎、ゆっくりと肌襦袢の襟もとをはだけさせ、グイッと背後へ。

「アッ……」

かすかな呻きをたてたが、お蘭は、背後で狐六が、右、左と袖を脱がせる動作に、抵抗ひとつしなかった。

「坐りやがれい！」

狐六が後から弱腰を蹴った。

「な、なにをするのよ！」

ガバツと両手を荒むしろに突いて四つ這いになったお蘭。なまめいた香りがあたりに漂

い、辰五郎は、再びゴクンと唾をのみ込む。

「さあて……」

勝蔵が、おき上って居ずまいを正したお蘭を見おろしながらいう、

「隣の部屋じゃあ、千次郎と君香の二人がそれこそご作法どおりの拷問責め。こっちは色気責めといくか」

と、左、右の壁の金輪にとおった縄をのばしてくるとお蘭の両手をとってたち上らせ、両手首に縛りつける。両腕が一本の棒のようになつて横にのびる、つまり「十」の字の型にされたお蘭の前後左右を男たちが囲む。

「これから、どうしようというのかい。こんな奇妙な恰好にしてよう」

「ひんむくのさ、その湯文字をな」

「そりゃあそうだろうよ。女をここまで裸にした親分さんたちが最後の一枚を許しておく筈はないでしょ」

お蘭は、むきだしの輝くように息づいていゝ上半身に、男たちの荒い呼吸をふきかけられながら、まだ、勝^{かち}気な事を云っている。

「ぬがして貰いてえのか、お蘭さんよ」

「さあね」

とお蘭、じいっと唇を噛みしめる。

「もう一度、云ってみな。その可愛いお口で

よ、お湯文字をとって下さいな——とお願い
をしてみなよ」

「バカ！ 誰が、そんなことを！」

「云わねえってのかい。そうかいそうかい。
それじゃあ、お長の方を！」

勝蔵が、お長の牢に目をうつす。

錆縹色の大島つむぎの襟元を乱したまま、
床にうつぶせて、死んだようになってい
るお長であった。

「親分さん、云々あいいでしょう、妾が
願いますって」

お長を憎悪のこもった目で、舌なめずりし
ながら眺める勝蔵に、お蘭はあわてた。

「勝蔵親分さん、辰五郎さん始めみなさま
が。このお蘭、お蘭の……」

「あとはどうした！」

勝蔵の目が、羞恥であかく染まったお蘭に
もどる。その目をもろに受けながら、

「親分さん。妾のお湯文字を、どうかぬが
せてく、ください……な」

云い終わったお蘭、さすがにうなだれてし
まった。女として、自分の腰のものを、多
数の男たちの前でとられることだけで、耐
えがたい屈辱であるのに、それを、自分から、
すすんで、ぬがせてく、ださいと頼みこまなけ

ればならない……（又さん、許してえ！）

お蘭は、心の中で絶叫しながら、

「辰五郎さん……お、お願いします……妾
のお湯文字をとって……取って下さいな」

「湯文字をとるとスッパダカになるんだぜ、
姐御。スッパダカってことは、何も着てねえ
ということですよ。いいんですかい、ほんと
うに……」

勿論、お蘭を、より以上、羞恥地獄に追
こむための言葉であった。

「いいのよ、いいのだってば！」

「けどねえ姐さん。ここにやあ十数人の男
ちがいるんです。姐さんの素裸をみたとな
っちゃあ、そのままじゃあすみませんぜ」

「アウ……アア……」

お蘭、咽喉をひきつらせて呻いた。

「そうともよ、お蘭。お前、ここにいる男
たち全部に、たらい廻しにされるのは覚悟の上
だろうな。その腰、でっけえ尻、そして」

と、狐六は、馬吉といっしょに、お蘭の足

首を右、左からとると、一寸刻みに開かせて
いきながら、なぶるように、

「こういう具合に引き裂くかも知れねえが。
……よう、わかってるのかい」

突然、どこをどうしたのか、

「キャアッ！ 卑、卑怯じゃあないの！ 人
非人！ や、やめてよう！」

お蘭は激しく身悶える。

「あれだけいきな啖呵をきっておきながら、
なんでえ、なんでえ」

熊七や牛造たちが、狐六たちを手伝って牢
の両側から、ガラガラと音をさせて鎖をとり
出し、お蘭の両足首に絡ませ固定する。ひん
やりした鎖の感触に、お蘭は、もう、自分が
どうにもならない女という、勝られものにすぎ
ないことを知った。

「お言葉に甘えてぬがさせて貰いましょう」
辰五郎は、お蘭の最後の砦である真岡もめ
んの紫の紐をゆっくりと解いていく。

「アッ、アッ……アッ……」

お蘭は、もえるように熱くなった唇から、
舌で押しだすように呻いたが、何の役にもた
とうはずはなく、純白の布が、蠟燭の光のな
かで、あかく黄色く輝きながら、宙に舞い、

「大」の字型で、お蘭は、その馥郁として匂
う蘭の花のように美しい全身の姿を、さらけ
出したのであった。

「フッフッフ……御気分はどうかね」

勝蔵が、ふくよかな頬をつつく。

「姐御、全くだい魅してるじゃあねえか」

辰五郎が、乳房を撥じく。

「か、かんにんして、辰、辰五郎さん」

うっすらと瞳をあけてお蘭は、せつなそうに訴えたが、辰五郎はニヤリとしただけだ。

馬吉たちが黙っている筈がなかった。わらわらと十数人の男たちの手が、蛇の鎌首のように、白い花びらのような裸身にのびて、お蘭は、身も心もなくしたように絶叫し呻きつづけた。

「お蘭、覚悟はできてるな」

新しい蠟燭を、次々と蠟燭台にたてていきながら狐六は勝蔵と顔を見合わせ、ニタツと淫らな笑いを洩らし、お蘭の両手の縄をとくと、上半身を馬吉と二人で支えるようにして前に倒す。足は引かれたままである。床にいったん「人」の字型に俯伏せたお蘭の両手を二尺ほど開いて鉄輪にいそいそと縛りつけると、隅から低い三角木馬をひきだして、腹の下へ、こじり入れる。

四つ這い——。いや、四つ這いともちよつと違い、両肘は垂直にのびきり、輝くばかりの白く肉づきのいい尻を大きく上に突き出して、両脚は、膝をまげることでもできず、真直ぐに伸びきった無惨な姿で、お蘭は、固定されてしまったのである。

「フッフッフ……お蘭、どこまで耐えることができるか、楽しみだぜ」

勝蔵は、お蘭の黒髪が付根を、かがみこんで、つかみ、顔を無理矢理、あげさせた。

「畜生！……」

途端、お蘭は、ペェツと唾を勝蔵に吐きかける。額にその唾をあびながら、

「こんなに気の強い阿魔は見たことがねえ。

やりな！ 泣きっ面、存分にかかせてやれ」

百匁蠟燭を手にした狐六が、お蘭の足元に廻る。何をされるのか——お蘭は、見えないだけに、一層、恐怖をおぼえる。

「な、なにをしようというのさ。女をこんな恥かしい姿にしておいてさ。抱くといったのだらう、早く抱くといいさ！ 早……」

すてばちな言葉が、中断され、

「ウッ！ キヤアッ！」

牢のなかのお長とお豊までが、思わず顔をあげるほど、ものすごい悲鳴であった。

が、次の瞬間、その二人の唇から、それを上廻る絶叫があがる。

「キ、キヤアッ！」

同じ女として、それは、全く見るに忍びない光景であった。お長とお豊は、眼をしっかりと閉じた。が、再びあがるお蘭の悲鳴に、

二人は、もう、悪魔に魅入れられたようにお蘭の姿を眺めつづける。

お蘭の、つき出された尻の辺りに、百匁蠟燭の焰が、ゆれうごき、それは、白く悩ましい太腿をじわじわと焼いていた。おれたちもとばかり、馬吉と牛造が、新しい百匁蠟燭を持つと、左、右から、透き通るような腋下辺りをあぶっていき、動物の毛の焦げる匂いが牢中にただよっていった。

もうお蘭は羞恥のひとかけらもなくなったように、少しでも苦痛から逃れようと狂ったように、のたうち廻った。

油汗が、額から、乳房から、下腹から、ぼた、ぼたと、床や三角木馬を濡らしていく。

黒赤縄十六方

隣室では——。

隣室と云っても、お蘭がいま責め折檻を受けている牢の奥、二十坪ほどの別の牢では、落とし差しの千次郎と君香が、長州藩江戸詰御勘定役木更津刑部、その配下、白木、工藤安田、さらに南蛮屋源左衛門たちに、徹底した拷問をうけていた。

片眼をじろりと光らせながら赤鍬丹波が全

読者ギャラリー『想いの果』岡たかし



裸の君香に、長袖鱗形縄、引渡鎖掛、軽卒草
総角縄と、おぞましい縄捌きを、柔らかな肌
に喰い込ませながら掛けてゆく。

千次郎は、三角木馬の上で、もう半刻以上
激痛と斗っている。

「方円流だな。美事だ、丹波とやら」

千次郎が、音をあげるまでのひととき。

「方円流は予州大洲の加藤藩武知吉太夫が創

案した捕縄術ときく。いつ、学んだな」

「それがし、もと加藤藩士、ゆえありまして
浪人をいたし、黒駒の勝蔵殿のもとで」

「左様か。ずい分と忠節を励めよ。御一新の
あかつきには、それ相応に取り立ててつかわ
そう」

「辱う存じます」

丹波は、ぐったりともうなされるままにな

っている君香に進みより、縄をとぎ、新しい
縄掛けを次々と披露する。

紅梅の匂いを放つ君香の肉体であったが、
もうその香りは、残り香をとどめているだけ
で、汗とかびの臭いが、むんむんと牢内にた
ちこめていた。

「まだのようじゃな」

刑部が、木馬の上の千次郎を見上げながら
云う。

「しぶといのう。石をふやせ」

工藤と白木が、千次郎の両足に、頭ほども
ある石を加える。左右合せて六箇の石をぶら
さげられながら千次郎、齒を喰いしばって耐
えつづける。したたりおちる血が、縄を伝わ
り、床におちる。

「刑部様。思いきって……」

南蛮屋が刑部の耳に何事かを囁く。

「それで奴が白状しなければ」

「それはもうそのとき。事実、知らないもの
と考えるほかは」

「フーム」

考え込んでいた刑部、今、何刻だと尋ね、
寅の刻をすぎたと聞かされると、床几から、
すくくとたち上り、

「南蛮屋、一か八か、やってみようぞ。用意

いたせ！即刻じゃ！」

と云いすて、牢を出ていった。

小半刻の後――

数百年を経た樗木のねかた、野あざみや、なつぐみがおい茂っている内庭の片隅に、六つの穴が掘られ、その前の荒むしろの上に、方円流早陰十文字縄で縛られているのは、右から大瀬半五郎、その妻お豊、お長、豚松、お蘭、そして君香の六人であった。その六人の背後に、太刀を構えた武士が六人。篝火がふたつ、あかあかと人々の頬をそめ出していた。君香とお蘭は、惨めにも全裸である。お豊は、水色の湯文字一枚に剝かれていたが、お長は、まだ着物をきていた。

お蘭のあと、どうやらお豊が罵られ、その途中であつたらしい。

正面に立っているのは、刑部、南蛮屋、勝蔵、丹波、それに、江戸詰家老毛利筑前の五人である。

「千次郎とやら、最後じゃ、よく聞け。汝まこと八重垣流秘伝中の黒赤縄十六方を知らぬのか！知らぬとあらば、止むを得ぬ、この六人即刻、首打ち落とすであらう」

刑部が、白木と工藤に縄尻をとられてひっ

たてられてきた千次郎に、云い放った。その鬼のように赤く映える顔を、血みどろの顔で見上げながら千次郎は、バリバリと歯をかみ鳴らした。

「無法な！なにゆえに、罪も咎もないものを打ち首に！」

「無法だと……無法は、今の世のならいよ。法など守っておっては、下は庶民から上は大名家小名、生きてはいけぬて。どうじゃ、存じておらう、八重垣甚之介！」

「俺の本名まで知っておるのか」

「知らないでか。八重垣大学の嫡子甚之介、勘当の身とはいえ、黒赤縄十六方、父から、或いは祖父から伝授されておらうが！」

刑部は、威丈高に云いながら、六人の首斬役に、目で合図をおくる。刑部たちにとって大瀬半五郎たちやくざの生命は、虫けらにひとしい。ただ、千次郎こと甚之介から秘伝をきき出すための小道具にすぎないのだ。

千次郎は、君香を見た。

惚れて惚れて惚れぬいた女が、今、眼前で首斬られようとしている。

（六人の生命とひきかえに……）

千次郎は苦悶した。彼は、知っていたのである。祖父甚左衛門から一代とばしの秘伝と

して、黒赤縄十六方の秘技を教えられていたのである。が、それは父にも他言してはならないことであつた。子にも教えてはならず、孫のうち一人にだけ、口伝すべき秘技であつた。そもそも八重垣流捕縄術は、根来流の忍びわざに発していた。根来流の忍びわざについてはここではとかない。ただ紀州から吉宗が八代將軍となって江戸に乗り込んできた正徳三年三月、彼はお庭番として、根来流忍びの者を二十五名ひきつれてきたのである。その中で、最も吉宗の信任をうけていたのが八重垣幽斎であり、その孫が甚左衛門、そのまた孫が千次郎となる。吉宗は、孫の家治を子の家重以上に愛し、埋蔵金百万両をのこすことに決め、その埋蔵場所をとく鍵として、最も信任する幽斎と相談し、八重垣家に、一代とばしとして伝わる黒赤縄十六方以下の文句を羊皮紙にかきのこしたのであつた。

幽斎の子源内は、拔擢されて南町奉行の与力となったが、黒赤縄十六方は教えられずとなく、甚左衛門だけが祖父幽斎から知らされ、甚左衛門は、子の大学に伝えず孫の千次郎に、

（徳川家の御為め、たとえ身を八つ裂きにされようとこの技、他言すまいぞ）

と遺言して死んだ。

その声は今も猶、千次郎の耳もとにある。
が――

果してそれが、六人の罪咎のない男女の、
さらには女としてのすべてを捨てて尽してく
れる君香の生命に匹敵するものであろうか。

千次郎は、懊悩の極みにあった。

今まで、君香が、どんなに男たちの慰みも
のになっても耐えてきた千次郎であったが、
いま、その君香が、愚痴ひとつこぼさず、従
容として首の座にすわっている。その健気な
献身の姿や、微笑みすらうかんでいるかと思
われる顔を眺めながら千次郎は迷う。

「や、やれい！ 首をはねい！」

刑部が、ひきつった声で叫んだ。

六人の武士の刃が、篝火に映える。その時
であった、千次郎ががっくりと首を落とした
のは――。

神妙なり！ お長

「その女ひとりのみが着衣というのも何じゃ
ろう。千次郎、その女をつかって黒赤縄十六
方を試みるがよからう」

千次郎が、秘技を伝授すると血を吐くよう

に叫んだとき、木更津刑部は、首の座にすわ
っているお長を指さして言い、他の五人を牢
にもどすと、先頭に立って座敷に入った。

凡そ二十畳はあろう、豪華な部屋である。

折上格天井に、欄間も透し彫り、襖には四
君子が色あざやかに描かれている。

正面、床の間に、毛利筑前、その横に刑部

南蛮屋、黒駒勝蔵、赤鉄丹波たちが居並び、
千次郎が下座に控え、工藤、安田、白木の三
人が、万一一に備えていた。

寅松と狐六がお長をひき出してくる。よろ
よろとするたびに蹴出しから紅いものがちら
ちらと高坏の灯明に映える。

晩春の朝はまだあけず、ひんやりとした空
気が部屋中にながれていた。

「清水次郎長の女房お長、当年とって三十歳
にござりまする」

勝蔵が、したり顔で筑前に云う。

うなずき返した筑前が、

「始めるがよからう、刑部」

「では、このお長の躰に」

と刑部が、安田典膳に目配せをする。

その典膳から会釈をうけた狐六、

「お長さん。もうじたばたしても始まらねえ

ぜ。さっさと裸になることだな。なあに、ち

よっと縄掛けされるだけのこと。お前さんの
身体をどうしようってわけじゃあない」

緊張したお長の蒼白な顔に、さあっと紅が
さす。

「早くしねえと、ひんむくぜ」

お長の縄をいったん解いた狐六、三保の松
原であろうか、松を染めぬいた竜文の帯に手
をかける。

「妾、妾が……」

お長は覚悟をきめた。一世一代の大喧嘩と
思い、主人の次郎長を説き伏せて加わり、女
とさとられ、捕まったお長であった。つい先
刻までそのお長を守るために、お蘭とお豊が
犠牲となってくれた。次郎長の救助を万が一
と期待したが、まだやってこない。もうこう
なれば、次郎長の女房として堂々と振る舞う
ほかは、口惜しいけれど方法はない。

お長は、帯締めをとき、帯をシュツ、シュ
ツと音をさせて解く。ばかし染めの帯揚げ、
伊達巻き、腰紐と順繰りに身体を離れた小物
類が、お長の足元にちらばる。

「お手伝いしますぜ、お長さん」

狐六が、大島つむぎの襟に手をかけ、ペロ
りとはぎとる。

むーんとする女の匂いが、狐六の鼻をくす

ぐった。

「おととと、そいつは、あっしが」

寅松が、海老あみの紐に手をかけているお長の紋紗の長襦袢を右、左と袖をぬがせる。薄桃色の布が、音もなく足もとにおち、お長は、さすがに蹲まってしまった。

「あと二枚ありますぜ、お長姐さん」

仇敵である次郎長の女房を、多人数の前で裸にする興奮にふるえながら、勝蔵が声をかける。ちらっとそちらを眺めたお長、頬をぱおっと朱く染めた。二度三度、草鞋わらじを脱いだこともある勝蔵である。姐さん、姐さん——と、一しよに酒を次郎長や大政、小政たちとくみかわしたこともある。その勝蔵のために一糸まとわぬ姿にされようとしている——。

屈辱に身をふるわせるお長であった。

しかし、お蘭やお豊のことを考えると、自分ひとりが安閑としてもおれない。お長は、淫らな顔で自分をみつめている勝蔵を意識しながらも、狐六と寅松に身を任せるほかはなかったのである。

二人の大的男が、神妙にひかえている女の肌襦袢をとるのに手間ひまはいらなかった。

白い三河木綿の布きれとなった肌襦袢が、寅松の手で、ぽいっと投げすてられると、お

長は、はちきれそうな双つの乳房をしつかりと抱いて、再び蹲る。

「立ちなせえ、姐御！」

ふるえる肩ごしに寅松と、耐えきれないようにちかよってきた辰五郎の二人に、両手をつかまれて、たち上らせられるお長——。

「俺が、俺がその一枚を……」

同時にたち上ったのは勝蔵であった。

「いつかはやつつけなくちゃあならねえ次郎長の女房。ここはどうしてもこの勝蔵が、素裸にする義理がありやして」

口早に云うとすすみでて、お長の真正面に立ち、あごに手をかけて、

「目をあけなせえ、お長姐御。あけろっていうんだ！」

うっすらと瞳をひらいたお長の胸のなかは羞恥と憎悪に燃えたっている。

「こ、こんなことが、よくおできになりますわねえ、勝蔵親分。いつか、必ず」

「ヘッヘッヘ、お返しをするというのかい。そうはいくめえぜ。これから、ここにおいで

の長州藩を中心にする世の中にならあ、次郎長なんざあ幕府の犬よ。野たれ死にするがおちだろうぜ。それにしても姐さん、お前さんは着物のそとからはうかがえねえ、いい駄

してるじゃあねえかい。この身体がねえ、次郎長をとりこにした……ヘッヘッヘ」

勝蔵、お長の顔をのぞき込みながら、紅い湯文字に手をのぼし、紐をといていく。

「アッ、アッ……」

お長が、熱い息を吐き身悶えたが、寅松と辰五郎がその両手をしっかりとつかんで離さない。ニタツと笑った勝蔵、

「姐さん。よく覚えとくんだね、お前さんの湯文字をこの黒駒の勝蔵がひんむいたということを」

ぶるぶるっと、双つの乳房が大きくゆれて紅い布が、宙に舞い、女だけの、爛熟した女だけのもつ甘ったるい体の香りが、あたりにただよう。

思わず勝蔵の手が柔肌なめかわに吸い寄せられる。

「な、なにをするのよう」

お長が、自由な脚で、力一杯、勝蔵を蹴りあげた。勝蔵は、腹を押えて横転した。高笑い、いっせいに上った。

「フッフッフ、勝蔵。お前としたことがとんだ恥をかいたな」

刑部にまで軽口をたたかれて、「この阿魔、やりやがったな！」

とつかみかかろうとしたが、竹内流柔術の

達者安田典膳が、しっかりと組みとめた。

「勝蔵、詮議を始めるぞ。仕返しはそのあとだ。あとでたつぷりと、な」

しぶしぶ、席に勝蔵がもどると共に一座がしいーんと緊張した。

「始めい、千次郎」

安田が、千次郎をお長のそばに押し出す。

最早、ためらうときではないと観念した千次郎は、辰五郎、寅松からお長を受け取ると仰向けに倒した。

真新しい備後畳の上で、お長の身体が、白い生きもののよう息づいている。

「黒赤縄十六方とは」

千次郎は、お長の頭を北に向けさせる。

毛利筑前以下が、思わず一膝、乗り出す。

天井に向かって臉を閉じ腿をしっかりと合わせ、双つの乳房をかき抱いているお長の右手首に縄をからませ、紐尻を刑部に持たせ、同じように左手首をくくり、その縄尻を、反対側の馬吉の手に。おおうものもない乳房が白い丘のように起伏している。足元に回り、左右の足首に別に縄をからませた千次郎は、その縄尻を南蛮屋と牛造に持たせてひきしぼらせる。

ゴクンと唾をのみ込む辰五郎には見向きも

しないで、

「これで四方」

千次郎はぶっきら棒に云うと、脂肪のたつぷりとのった太腿にぐいぐいと縄が見えなくなるほど喰い込ませる。右、左……。つづいて腰を持ちあげて、畳との間に二本の縄をとおすと、下腹に一本、へそのあたりに一本とぎゅっと締めあげて、縄止めをする。

「これで四方、合わせて八方」

どうやら、十六方とは、身体の十六カ所を縛りつけることだと悟ったらしく、刑部たち次はどこかと目を皿のようにして見る。その視線のなかで、お長の左右の二の腕に、それぞれ縄を、腕輪のように結びつけた千次郎、太目の縄の一端をお長の右の鼻の穴に押し入れ、もう一本を右の穴に押し込む。

「ヘッヘッ、よい顔になったぜ、お長」

勝蔵は、お長のいまにも泣き出しそうなその屈辱の表情を楽しんでいる。

「次は、口ですかい、乳房ですかい」

勝蔵が云った。千次郎は、細目の紫色の縄をとり出すと、お長の右乳房を根もとでくぶり、ぐいっ！ぐいっ！と二巻き——

「アッ、アッ……」

お長が喘ぐのも構わず左乳房も瓢箪ひょうたんの形に

縛りあげる。なつぐみの実のような乳首が、いまにも乳液をほとばしらせるように突き出ている。

「あと二方は！」

南蛮屋が叫ぶ。百万両の埋蔵金の隠し場所がいまあかされようとしているのだ。千次郎は無表情に、お長の喘いでいる舌を、ひょいとつまみあげると、強い黒い糸でその舌端を二度巻き、その一端を勝蔵に渡す。

「フッフッフ、これは面白えや。どうでいお長」

勝蔵の手の動きにつれて、お長の顔が融くゆがむ。涙とも汗とも唾液ともつかない、ねばねばしたものが、お長の軀中にねっとりとうかび、ながれ、まといついている。

「わかった。最後は、ここでしょう」

待ちかまえていたように辰五郎が指さし、千次郎が、その指さした方角へと赤い縄を近づけ、お長が、たまぎるような呻きを洩らした。

「フウ——」

肩で大きく息をした刑部は、

「黒赤縄十六方、三方より十二方にいたる二十七町——とある三方とは、十二方とは」

と尋ねた。

「三方とは三番目の縄掛け、つまり右足首、十二方は、右乳房……」

「すると右足首から右乳房への方角というところか……。日光男体山と女体山との合する所にこのお長を置き、右足首と右乳房……フム。身体とはば平行な方角へ二十七町の処に百万両が！」

「刑部さま。待って下せえ。身体と平行と申しまして東西南北、いずれの方角にこの女の頭を向け、足を向けますのじゃ」

南蛮屋の声に、千次郎は、もう、どうにでもするがよいというような声で

「黒赤縄十六方、まことは磔刑台を使って行なう拷問の一種、頭はいつも北の方角よ」

「有難え！ じゃあ、刑部さま、毛利様。こいつは急がにやあなりますまい」

刑部が、すつくとたち上がる。

勝蔵がこれにつづく。

「工藤、安田、白木、このもの等、逃がすでないぞ。勝蔵、南蛮屋、急ごうぞ日光へ」

毛利筑前に見送られた刑部たちの一行三十人。うっすらと明けはじめた初夏の朝を、日光へと駆けて行く。

一行が、小塚原に近い金杉の宿を通ったのは、五つ過ぎであった。

目ざとくこれを見つけたのは黒鯨左弁の配下、金杉に隠れ家を持つ甲南の近衛である。

近衛の報せをうけた左弁が、老中稲葉美濃に、これを告げると殆ど同時に、美濃は、小栗上野から、芝白金の長州藩邸がありがたいと報告を受けていた。二人は相談の結果、木更津刑部たちを追って稲葉美濃が黒鯨組を始め百名近くの与力、同心を指揮して日光に赴き、小栗は、長州藩邸を窺う事に決めた。

一方――

千次郎たちが監禁され責め折檻されていることを一人でつきとめたのは、一日に二十里を駆ける夢売の又平である。お蘭の行方を追ひ、江戸中を探し廻り、刑部の長屋の内庭でお蘭を始め六人が首の座にすわっているのを見つけ、黒い陽炎のような早さで、次郎長たちに告げたのであった。

次郎長から援助を求められた勝海舟が、屈強の旗本、四十人を思い思いに変装させて、その救出を命じ、旧知の勘定奉行小栗上野にも知らせたのであった。

「ない！ ない！ 三方より十二方に至る二十七町、この大槻の樹のあたりだが、ないぞ、小判一枚！」

刑部が叫ぶ。南蛮屋も勝蔵も、あたり一帯を掘り返したが、千両箱の破片一つ、でてこない。

「たばかられたか、あの千次郎に！」

刑部が、手にした鯨を投げ捨てた時、轟然と銃声がいっせいに新緑の山々にこだまして稲葉美濃が、百名の武士と共に現われ、刑部がのけぞり、南蛮屋源左衛門が射殺され、赤鯨丹波たちが折り重なって倒れた。

死者十名、手傷を負って逮捕されたもの十七名。

が、その中に黒駒勝蔵とナゲサイの馬吉、ミズチヨボの狐六の三人の姿はなかった。この場を逃れた勝蔵が、三年後、池田数馬と交名し、倒幕軍の先頭にたち東海道を江戸へと下って清水にきたり、これを斬ろうとした次郎長が総督府判事伏谷如水にとどめられて果せなかったことは、あまりにも著名である。

余談は、さておき――

無事、救い出された千次郎たちを迎えて次郎長の仮の宿、高萩万次郎の家は、歓びに沸いた。

祝いの酒の席で、大瀬の半五郎、頭をかきかき自分の非力を謝すると、豚松が、
「けどさ、半五郎の兄哥。お豊姐御や、夜桜

のお蘭姐さんの裸姿は、拝みてえくれえ美しかったぜ」

と云って、二人の顔を真赤にさせた。

「お長姐さんの躰も、生き弁天さま見てえだったぜ」

千次郎までが正面のお長をからかい、そばの君香に、きゅっと、膝をつねられてとび上る。そこへ、無事、釈放された八重垣大学夫妻が娘の千春、望月秀之進、それに笹川妥女夫婦を伴ってかけつけてきた。

「すまぬ、許せよ」

と、一言、老中稲葉美濃から言葉をかけられただけだったと言う。

八重垣大学は、筆頭与力の職を、その一言でやめる決心をした。

「武士というものは、辛いものよ」

大学は、心の底からそう云うと、盃を次々と重ねていった。

朱房の重蔵を駕籠にのせて、お千賀が現われ、千次郎ともども多年の不孝を詫び、勘当もとかれたが、千次郎は、父のあとを継がず加島屋兵助親分のもとで、町火消さ組の纏をもち、やがては頭、頭取になるという。

「よかろう、千次郎。どうやら、もう、武士の世の中ではなさそうだな」

大学は快く、それを許した。

五月晴れの空が、眼にしみるほど美しい朝であった。

三日後、

「千次郎、みごと刑部等をあざむきおおせたのう。」

軍宝

男女ありて一双より九双に至る

男六双にして起つ

女九双にしてすすり泣く

陰陽相なかばす

黒赤縄十六方、三方より十二方に至る二十七町——いったい、三方より十二方に至るとは、何じゃ」

老中稲葉美濃守正邦と勘定奉行小栗上野介

忠順に問われた千次郎は、

「黒赤縄十六方の縄掛けの順をわざと間違えただけ。三方、つまり三番目は口を縛り、十二番目に、女の急所を責めるのが本式、つまり百万両は、北が頭でございますゆえ、真南へ二十七町の所にござります。南蛮屋たちは右足から右乳房へ、つまり、北の方へ少しずれた地点を掘りましたゆえ見つからないのが当然でございましょう」

「フーム。左様であったか、御苦労」

と小栗は、ねぎらいの言葉をかけたあと、そばの君香に、

「君香殿。黒赤縄十六方、今度はひとつあんなの身体で試して見たいものよのう」

と、君香が羞恥に白い頬をそめるのを見おろして高らかに笑った。

慶応四年春三月、怒濤の如く迫る倒幕勤王の軍を相手に、一大決戦を挑もうと最後まで小栗上野が主張しつづけたのは、この百万両の埋蔵金を、軍資金として使用できるという財政的自信があったればこそであった。

彼の主戦論は、結局は、十五代將軍慶喜の決断で取り上げられることなく、同年四月、江戸城は無血開城したが、城内には、小判は勿論、一朱金一枚なかったのである。

主戦論破れた小栗上野が、開城寸前、この百万両その他を、徳川家再挙に備えて上州は赤城山中深く、かくしたと一部に噂された。

小栗上野が、まもなく官軍に捕われ、斬罪に処せられてしまったので、その真偽のほどはあきらかでないが、今もなお赤城山中でこの百万両をもとめて発掘をつづけている人があるという。

切腹百年史 中 康 弘 通



ところで計数上はどうなるか？
日数の多い方からあげると、

七月	一九日(日数)	二七例
五月	一八日	二八例
八月	一八日	二六例
四月	一二日	二〇例

反対に少ない方からあげると、

十月	七日(日数)	八例
二月	八日	九例
十一月	一〇日	一〇例
九月	一〇日	一二例

従ってまとめてみると、事実、

一、四月	四三日(日数)	五九例
五、八月	六七日	九七例
九、十二月	三九日	四三例

やはり、温かくなりかける四月から増加し
て、涼しくなる九月から減少して行く、とい
うことは云えそうである。

一カ月のうちで旬別にみると、是はあまり
変化がない。しかし、

上旬	四一日(延日数)	五三例
中旬	五三日	六九例
下旬	五六日	七七例

と、多少下旬にふえている。

月を無視して、日を単位でみると、発生件
数の多い方からあげれば、

二十二日	九日(延日数)	一四例
二十日	八日	九例
十九日	七日	九例
二十四日	七日	九例
六日	六日	九例
二十六日	六日	九例

反対に、少ない方では、

八日	二日(延日数)	三例
五日	三日	三例
九日	三日	三例

二三 統計数的に見た女腹切

凡そ二〇〇例もある切腹事件、仮に一年三
六六日と見て、その何月、また何日に一番多
く事件が発生しているだろうか。

笑いはなしに、死にたいという男が、いま
冬や、水に入ると寒い、切れものは痛い……
なんてご託を並べる条りがあったが、たしか
に腹を切るのも、真冬は着衣が重なっている
し寒くて肌を露わしにくくもあるから、当然
少ないだろう、と予見される。

二十三日 三日 三例

が特に目立つ程度である。先の月別の計数と並べてみると、七月二十二日が最多でなければならぬのだが、実際はどうか。

四月二十七日 四例

五月二十二日 三例

七月十二日 三例

七月二十五日 三例

八月 四日 三例

が特に事件発生が多い日であって、実際の七月二十二日は、わずか二例。

以上は不完全な資料に拠るものであるし、何か数字をもてあそぶようでもあるが、暗示的でもある。

二四 無理心中

戦前でも無理心中の切腹は少なくなかったが、どちらかというと男から仕かけたもの、つまり男が女を刺して、返す刃で我とわが腹を突き刺し、又は、かき切るという類のものが多かった。ところが戦後は、女が男を刺して返す刃でおのが腹を刺す、という事件がよく起きている。

先にも記した例、昭和二十九年五月十三日大阪で地方公務員の妻（二十八才）が、不貞

の夫を刺殺し、用意の真新しい出刃包丁で腹一文字にかき切って、幸い一命をとりとめたのもその一例であるが、是は深夜、自宅のこと。その後、街頭で二件も発生している。

一つは昭和三十六年九月二十八日夜、名古屋市千種区円山町の路上で、近くのアパートに住む会社員S夫（三十二才）と、同じアパートで隣室に住む女性（二十九才）が倒れていた。男は死亡、女は重傷で早速、病院に運ばれた事件。

これは三角関係のもつれから来た無理心中で、それも、有夫の女性と恋愛関係になった男が、折角、夫と協議離婚した女に、手切れ金で別れようとしたためのものであった。女は「S夫さんのために生活が、めちゃくちゃになった」と走り書きの遺書めいたものを残し男の脇腹を一刺しして倒したのち二度も腹をみずから突き刺して昏倒したものである。

同じ年の十二月七日には、東京も銀座の街頭で白昼、二十八才の内妻が無理心中を計った事件が起きている。一度、結婚に失敗した松江の女の隣家に、東京から出張で下宿した男が、妻のあるのを隠してねんごろになり、東京へ連れ帰る破目になったところから破綻

が来た。内妻は本妻の存在を知り、睡眠薬自殺を企てたが、退院した日に惨劇となった。

女は「どうしてもあちらへ帰ると云うのと念を押し、とうとうオーバーの下に隠した肉切り包丁で男の心臓をひと突き、返す刃でみずから下腹を刺して折り重なって倒れたもので、男は即死、女は重傷とある。

昭和三十八年五月二十九日には、岡山市で生命保険外交員の人妻（二十九才）が事件を起こした。

彼女は夫の入院中に妻子ある同僚と深い仲になり、男の希望で金融会社を作ったが、周囲の諫言でやめて理容学校へ通っていた。間もなく男に出来ていた若い愛人から罵られ、別れ話となって、いよいよ結着の日が来た。女は夫への遺書をハンドバッグに納め、会見場所の知人宅で、男の胸と背を刺して殺したのち自分も睡眠薬を呑んだうえ、二カ所まで腹を刺し重体とある。

昭和四十年十月一日には、東京渋谷のホテルで投宿中の内妻（三十七才）が、夫の某国賠償使節団運転手（二十七才）を、刺身包丁で腹、胸、背を突き刺して殺したのち、自分

は腹と首を切ったが、未遂に終わっている。
男は同棲して共かせぎの女をそっちのけで見合いをし、女が男の親に会いに行った留守に引越しの準備までしていたというから大概、事情も察せられよう。一度、結婚に失敗した女が蟻地獄に落ちたような経過を辿ったことが想像される。

二五 異色無理心中

変わった無理心中では、夫の妾の腹を突き刺し、返す刃で己が腹を刺した女もある。

昭和二十九年五月二十八日の丑満どき、大阪福島区の無職Y子と呼び出した女がある。いきなり女は持っていた刃わたり一尺の短刀で、Y子の腹部を突き刺し、返す刀を我とわが腹に突き立ててしまった。

Y子は阪大病院に収容されたが、出血多量で二時間と持たず絶命、女は腹膜を突き破って腹腔に達する瀕死の重傷、とある。

女は神具製造業の本妻（四十三才）で、平常からY子と争いが絶えず、とうとう悲劇を招いたものである。

「老いらくの無理心中」として世間の目を引いた事件は、昭和四十一年七月三十日午前零

時ごろ起こった。所は千葉県柏市。

七十一才の夫が旅行会ばやりの折から、前年は九州、この年は北流道と二度まで旅行会に妻（六十九才）を伴わず、知り合いの五十才の婦人を同伴したことから、妻が出刃包丁で夫に斬りつけ、自分は殺虫剤を呑んだ上、わき腹にその出刃包丁を突き刺して絶命したもので、「嫉妬の刃傷」とも報道された。

老女の無理心中が、もう一つ。是はアメリカまで若い男を追いかけての事件だけに、国際性？がある。

昭和四十一年九月七日、米国カリフォルニア州バークレー市のアパートでの出来ごとである。カリフォルニア大学大学院留学生の青年（二十七才）が、養母K子（六十一才）に刃わたり二十センチの肉切包丁で滅多刺しにされた室で、K子は睡眠薬を呑んだ上でスリップ姿の腹部をナイフで切っていた。

週刊誌によると、元芸妓のK子が、下宿させた東大生の青年を養子にしていた、というから、いろいろと無理な事情もあり、惨劇を招いたものとみえる。

切腹ではないが、壮烈な無理心中をとげた

女性を、ついでに一人、紹介しておこう。

昭和四十年七月十五日の夕方、東京蒲田の町工場で、男が刺された。刃わたり十三センチの出刃包丁で左胸と、逃げる右腰をも刺されたのである。

女（二十八才）は大井競馬場に勤めていて男と知り合い、女ぐせの悪さから妻子と別居中の男に独身とだまされ、深みにはまってから三角関係ともつれたのである。

ここまではよくある話だが、彼女は同僚に身の上に似た芝居の話をしていた、

「私だったら、親兄弟に知られないうちに自分で刺してしまうわ。いい加減な男の口車にのって、女が泣き寝入りするなんてバカよ。そのかわり、私だって心臓をひと突き、万事終わりよ」（週刊新潮）

と、ふだんに似合わぬ強い口調だったという。そしてその言葉どおり、男を二度まで刺した刃を、そのまま己が左胸にあて、壁に体当たりして、心臓を突き貫いて即死したものである。その壮烈な有様は「男を刺し、返す刃で自分の心臓もひと突きという激しいケースは珍しい」と、係官に云わせたと云う。

二六 国際無理心中

昭和三十八年四月二十二日の午後、東京渋谷の高級某アパートで、警備員が某国賠償使節団員M氏（四十六才）の部屋のドアを叩いた。ガスがもれていたからである。

もちろん？ 応答はない。こじあけて入った警備員の目には、ベッドに仰臥したM氏の姿と、窓ぎわにうづくまるようにして倒れているM氏の愛人（二十三才）の姿が、異様に映じた。

M氏は心臓を一と突きされ、胸に両手を組み合わされて絶命。愛人は血まみれで意識を失っていた。やがて意識を回復した翌二十三日、彼女の供述が事件の状況を明らかにしたのである。

彼女が「こだま」のウェイトレスをしていたころ、常連客のM氏と知り合った。程なく

愛人として渋谷で同棲したが、故国には妻子がありながらM氏は彼女に結婚をほのめかし一方では生活費を引きしめて、かなり彼女を苦しめていた様である。そうした生活の疲れと、夫人からの電報に考え込んだM氏のその夜の態度から、彼女は思いつめたもののようなのである。

別れ話も出ていて、タイプ学校へ通っていた彼女だが、結局、結婚を真剣に考えていたこともあっただけ、彼女の心は急速に破局へ傾いて行ったようである。

刃わたり二十センチの刺身包丁でM氏を刺し、その手を胸の上で組ませて十字架を乗せたのち、彼女はガスせんを開いて死のうとした。

しかし苦しさの余り意識をとり戻した彼女

は、M氏の常用していた睡眠薬を多量に呑んだが、これも吐き気が来てもどしてしまふ。

「夜が明けてくるし、わたしはあせりました」

と自身が云っているように、早く死ななくてはならないと彼女は、M氏を刺した包丁を拾うと、窓ぎわに立ちながら、みずから脾腹を刺した。

刃は八センチも入って腹を切ったが死ねない。彼女は一層あせったであろう。あらためて鳩尾、臍のすぐ上を今度は深く、十センチも刺した。そして、うづくまるように崩折れたのであった。

ピンカートンの悲劇は、第二の黒船時代とも云うべき戦後に、やはり起こったのである。腹を突き刺したとき、彼女に日本人的感情や感覚が戻ったのであったろうか。病院でなお、死なせて下さい、と叫んだと云われる彼女の哀しみを、誰がおろかな女と嗤っているであろうか。

その後、服役して出所した彼女は、間もなく謎の鉄道自殺をとげた。遺書もなかった。M氏の屍のかたわらで、我とわが腹に刃を突き刺したとき、彼女の人生は終わってしまったのであったろうか。

天星社刊

△限定版グラビア写真集▽ 在庫案内

山原清子「刺青の魅力を探ぐる」 一部一〇〇〇円（送共）略号「美？」

◎刺青の女王の魅力を抉ぐり出し、その美しさを最高度に発揮した緊縛フォト結集版。

M写真集「女王様に飼育される日々」 一部一〇五〇円（送共）略号「M特」

◎M男性が色々の女王様に奉仕し、飼育される生態のかずかずを網羅した写真資料。

◎以上の写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いします。

カット・岡たかし



28

坂西喜久雄は郁子をどう見ているか？

もちろん郁子に矢沢という夫のいることは知りませんから、デートを重ねているうちに郁子が好きになって、二人で結婚……などと考えたりするようですと、問題は少々深刻になります。

あるいは、スナックバーのホステスだし、ちょっとした浮気の遊びとあっていてくれるのでしたら、これは両方とも一時のお楽しみですみますし、矢沢と坂西の間に入った三角関係で複雑な悩みを郁子に抱かせたりするこ

壺

中

の

園

連載・Mの傾斜

真砂十四郎

(9)

とは本意ではありませんから、出来ることなら矢沢に内緒で郁子がほんのつれづれのひとときを楽しむ「秘密の遊び」の方であってほしいのです。

「郁ちゃん、きのうはどうだった？ 坂西さんとのデート……？」

あくる日、私は郁子にそっときいてみました。

「きのう……シネラマ見たわよ。いやよ、デートだなんて……」

「シネラマ見て、あとは直ぐ帰ったの？」

「もちろんよ。六時に、うちの人が帰ってくるもん。五時半には家に帰ってないと、具合

がわるいじゃないの」

「そうだったなァ……。そういうときに僕が郁ちゃんとこへ行ってもいいんだったら、ご飯の支度ぐらい、僕がしといてやるんだけど。もっとも郁ちゃんのかわりに、お膳の前で僕が、ハイお給仕……じゃ、矢沢君もお気に召さないだろうけどね」

「矢沢にはシネラマ見に行ったなんて言っていないのよ。内緒のデートなんてのは、やっぱり気がひけるわ」

郁子は、いたずらっぽく笑って、ペロッと舌を出してみせました。

「いや、気がひけるなんて必要はないよ。た

だ男の友達と一緒に映画を見たというだけのことじゃないか。それも矢沢君が知らずにすんでしまったことは、それはつまり映画を見に行かなかった……と同じことになるんだ。何かがあるに「ある」ということは、人がそれを「ある」と認めたから「ある」んで「ある」ことを誰も知らない場合は、それは「ない」に等しいんだよ。これはカントの哲学の中にも、ちゃんといわれてるんだ」

私は、わかったような、わからないような屁理屈をならべて、郁子のきのうの行動を弁護しました。矢沢が知らないということは、すなわち、郁子にそういう行動がなかったことと同じである……と力説したわけです。

しかし、坂西と郁子と内容のあるデートを期待している私としては、ここで郁子に引込み思案になられたら、なんにもなりません。うまくゆけば放っておいても進展するかもしれませんが、二人の歯車がかみ合わない、このまま立ち消えになってしまうおそれもあります。立ち入りすぎるかもしれないが、これはもう一つ手を打っておくに越したことはありません。

よし、次の手は一、二週あと、この次か、その次の店の休業日——と私は胸三寸の思案

をきめて、さりげなく郁子のそばをはなれました。

十日ほどして、私はまず郁子に、そつときいてみました。

「あさっての休業日、郁ちゃん、なにか当てるがあるかい？」

「別にないわ」

「矢沢君は？」

「出勤よ。このごろ日曜出勤が多いんで、いやなっちゃうわ」

「すると、からだは、あいているわけだね。実はネ、こんどの日曜に君を昼飯に招待したいと思ってるんだ。渋谷のS亭って割烹旅館があるんだけどね。割合に美味いんだよ、そこ……。それに静かで、ゆっくりした気分でも落ちつけるんだ」

「ふーん……姉ちゃんも？」

「いや、姉さんには内緒なんだ。姉さんにしたら、妹のことだし、平気にいるけど、僕としては、君がよく働いてくれるだろ。だからその感謝のサービスってわけさ」

「あら、だったら、あたしとマスターと二人きり……？」

「じゃあ、いかなだろ。だから、この前シネラマ見ただけで、ゆっくり話もできなかった

ろ、坂西君……。坂西君も招待してさ。三人で昼飯でも食べようと思ってるんだ。……名案だろう？」

「ふーん……」

郁子はしばらく無言のまま、いいとも悪いとも答えてくれませんでした。

ご馳走を食べる話には、とびつきたいところでしょう。しかし、坂西と一緒に……。これが他の男から持ち出された話となると

郁子もちょっと考えるところでしょうが、相手が気心の知れた私のことです。姉にふりまわされているだらしない男で、あたしの言うことなら、なんでもきく男……のとりもちなのです。

しばらくは返事をしませんでした。「そうね、行ってもいいわ……」という気持ちに次第に傾いてきたようでした。

私は次の日、坂西の会社に電話して、日曜日に郁ちゃんが貴方と食事をしたいと言ってあるので一緒におつきあい願えませんか……という旨を伝えました。一人暮らしで、退屈な日曜日を送っている彼は、招待されることにちょっとひっかかりを感じたようでしたが、結局は私の予想どおり承知してくれました。私は落ち合う場所、時間などを約束して電話

をきったのです。

日曜日。正午ごろ、私は玉枝に「芦花公園にでも行ってみる」と、でたらめな口実をもうけて家を出ました。

渋谷駅のハチ公の前で、まず私が待ちました。十分ほどして坂西がやってきました。さらに十分ほどして郁子がきました。

シネラマのときとがらりと服装をかえて、白地に花模様のワンピースでしたが、ごてごてした飾りつけやアクセサリーもなく、そのシンプルなフイリングが郁子のからだにぴったり合って、べつに上等の服でもありませんが、ウエストの線、ヒップの線など、郁子のからだの曲線が服地一枚下ながらも露骨に感じられる、内心私も抱きつきたくなるようなスタイルでした。

三人でS亭に入ったのが午後一時半ごろでしたが、電話で予約しておいた部屋は八畳と四畳半二間つづきの、観光地の旅館などと同じようにバスもトイレもついている、壁できっちり仕切られた独立家屋のような部屋でした。そこで私たちは簡単にビールを添えて、カツオのたたきで食事をしながら、私はわざと冗談を言ったり、おどけたそぶりなどして坂西と郁子の気持をほぐすことに、これつと

めました。

食事の膳を女中がとりかたづけたあと、私は計画したとおりの行動にうつりました。

「ここは、とても落ちつけるところだね。この部屋の時間も五時までとってあるんだ。お風呂へでも入って、ゆっくり休んでいってくれ給え。……ところで、僕は急に用事が出来てね、三時にはどうしても行かなければならないところがあるんで、残念ながら一足先に帰るけど、坂西さんも郁ちゃんも五時までにはゆっくり休んでいって下さいよ。ベルを押さなければ誰も入ってこないから、お風呂のあとには裸で寝ころがっても平気なんだ。せっかく坂西さんを招待しておきながら、まことに残念だけど僕は失礼します。勘定はもうすませてあるから、ご心配なく……。郁ちゃん、僕のかわりに大いにサービスをお願いしますよ」

私は、ろくに二人の返事もきかず、そそくさと退散してしまいました。

さて、私が退散したあと五時まで、まだ二時間以上あります。坂西と郁子の二人きりの密室で、どんなふうに進展するか……。私は期待に胸をわくわくさせて、何をするとも当てのない渋谷の街をぐるぐると歩きまわ

ったのでした。

男女の仲というものは、肉体関係のある仲か、ない仲か？ たとえ本人同士が内緒にしていなくても、そのつもりで観察すれば、ほぼ推察できるものです。たとえば、バーのホステスとお客との間柄にしても、肉体関係のある場合は

①会話する声が低くなる。②お愛想笑いをしなくなる。③とってつけたようなサービスをしなくなる。④相手の悪口を平気で言う。例えば「あんたみたいな肥ってる人きらい」⑤あまりお互いのからだに触れなくなる。⑥その反対に触れる場合は自分のからだと同じように扱う。たとえば「いま、何時？」ときくかわりに無遠慮に男の腕をつかんで引き寄せ、腕時計をのぞきこむ……

等々ですが、さて、郁子と坂西の仲はどういうことになったでしょう。郁子も「きのうは、ありがとう」と私に、そつと言ってくれましたが、坂西さんとどうしたとか、どうなったなどということは、一言もふれてくれません。それならば、この「男女の仲、観察法」による二人の態度は、どうあらわれているで

しょうか……。その後数日、私も注意深く観察しましたが、肉体関係があるともないともさすがの私も顕著な徴候は発見できません。

ランデブーといっても、まだ最初のことだし、そうそう馴れきった態度をとる筈もない……。まあまあ、時間をかけてゆっくり観察するのも楽しみの一つ……。とあきらめて、私は二人の次の逢引きを待ったのでした。

その逢引きの日を知るのが、これがなかなか至難のわざです。しかし、チャンスは毎日ころがっているというわけでもありません。もちろん夫の矢沢に知れたらコトですから、夜、おちあつて一泊するということは、まず不可能です。すると会合時間は、郁子が店に出るまでの午後二時ごろから五時ごろまでが適当なのですが、ウィークデーでは坂西が会社に出勤していますから、これもちょっと無理です。そうになると、坂西の会社の休み、すなわち日曜日で、同時に矢沢の日曜出勤の日……。ということになりますが、こう絞ってきますと、適確日は月のうち、まあ二回あるかないか……。とみたらいいところでしょう。

その日に焦点を合わせたらいいわけです。私は矢沢の日曜出勤の日をねらっては郁子の家を訪れました。いつものきまりみいたいな

ものですから、行けば私は早速、洗濯や便所掃除にせいで、をだします。郁子に外出の予定のないときは、彼女も落ちついて私にあれこれと用事をいいつけ、自分は寝ころがってタバコを吸ったりしていますが、外出の予定のあるときは……？

遂に何回目かの日曜日に、私はその「予定のある日」にぶつかったのです。

私が行ったときから、なんとなく、そわそわしていました。

「ねえ、あたし、きょうはちょっと出かけるから、あんた、もう帰ってよ」

鏡台の前でお化粧しながら郁子は、部屋の掃除をしている私に声をかけました。

「ああ、そうかい。それじゃ掃除をすましたら、すぐ帰るよ」

いつも、そのことばかり待ちかまえていたもので、私は途端に外出の目的は坂西……。じゃないかと胸にきたのです。

「きょうは、お化粧がなかなか念入りだね。

誰かと逢うの？」

「……………」

彼女は私の質問を無視して、無言のまま口紅をつけています。これが「デパートへ行くの」とか「うちの人と待ち合わせて、一緒に

ボーリングに行くの」というような外出でしたら、彼女も簡単にそう言ってくれますが、この何も言わない無言というのが曲者です。

いよいよ坂西君と第二回目の……。いや、あるいは第三回目か四回目かしれませんが、その坂西君との逢引きか……？

これは通り一ぺんの質問で彼女に口を割らせるのは無理です。

私は、そそくさと掃除をおえて、彼女の家を出ました。いま、一時ちょっと過ぎです。いずれにしても彼女は五反田の駅へ出てくるに違いありません。

うまくいくかどうかかわからないが、とにかく待ってみよう――。

私は五反田の駅へ着いて、一応新宿までの切符を買っておき、改札口附近のスタンド売店のかげにかくれて、彼女の来るのを待ったのです。

一時半……。彼女がやってきました。坂西と、シネラマを見に行ったときと同じ服装です。レモンイエローのセーターにブルーのプリーツスカート。歩きたびに左右にゆれるお尻の線がひととき魅力的です。いやいや、そんな服装の評価をしている暇はありません。私は気づかれぬように二〇メートルほどの距

離をおいて、彼女のとをつけた。

電車は一輛うしろの車輦に入って、通路ドアのガラス越しに彼女の方をのぞきますと、ま昼どきでもあり、乗客が比較的、少ないので、前の車輦の中ほどに坐っている彼女の姿が、よく見えます。私はホッとしました。電車の中が一ばん発見される危険があつたのですが、この調子なら、まずわかりません。

夜の尾行とちがつて真昼間の尾行です。彼女が、こっちの顔を知らない場合ならともかく、よく知りきっている私ですから、ちよつと振り向いてもすぐ発見されてしまいます。

「あんた、なにしてんのよ」と言われたら、お手あげですが、このぶんでは発見されずに尾行が続けられそうです。もともと、そう綿密な注意がゆきとどく郁子ではありません。私が、うしろから、のこのことお供していることも知らずに、彼女はまっすぐに自分の目的の場所に急ぐことでしょう。

渋谷——で彼女は立ちあがりました。私もうしろの車輦からおりました。

駅附近で待ち合わせている模様もありません。彼女は左右を見回すようなこともなく、急ぎ足で歩いてゆきます。道玄坂をあがって右へ折れ、百軒店の方に入りました。それか

ら、さらに左へ折れて……これは知らないところへ初めて行く状態ではありません。よく知っているところへ足を早めて急いでいる状態です。

入口に植木が並んでいる洋風まがいの建物のドアをあけて、彼女は躊躇なく中へ這入ってゆきました。

私は胸がおどりました。真昼のしずけさの中に、音もなく彼女を吸いこんだその建物のドアには「ホテル・シルバー」という銀文字が、あざやかに浮き出されているではありませんか。

もう前からの打合わせ済み——。外でなまじ落ち合うより場所と時間をきめて、お互いが別々に行った方が障碍も少なく、面倒もかかりません。郁子はここで男と落ち合つて秘密の楽しみにふけるのです。その男とは、坂西をおいて他に考えようありません。おそらく坂西の方が先に來て待っていることでしょう。とすると、相手が誰か、正確にたしかめるためには、私は四時か四時半ごろ、ここで再び待つてみなければなりません。しかし一緒に出てくるとは限りません。いや別々に出るかもしれませんし、一人は、この入口から一人は裏口から出るかもしれません。待つ

のもいいが、これだけ知ったら一応、充分です。

矢沢夫人として結婚生活の日も浅い郁子ですが、ちよつと水を向ければ、このようにたちまち他の男と情熱を燃やすのです。夫一人ではものたりず、秘密で坂西と抱擁する郁子の淫性を、いままざまざと見せてもらつて、私は大きな収獲をあげたような満ちたりた思いを胸一ぱいにして、その場を去つたのでした。

二人の秘密の逢引きを、郁子から聞きだすのに、私は相当の努力をはらいましたが、しかし私だからこそ郁子もたかをくくつて打明けてくれたので、他の男でしたら金輪際、言う筈がありません。最初のシネラマのこと、S亭のこと……すべて私が二人の逢引きの誘導役をしているのですし、それに郁子は私に對しては「絶対あたしに頭のおがらない男」という自信を持っていますから、間違つても矢沢の味方になって、あたしをおとしいれたりしないという安心感があります。

「知ってるんだったら仕様がなけりゃ……大たいこうなるように一生懸命しむけたのは

マスター、あんたじゃないの」

「うーん、まったくもってすみません」

「わかってるでしょ、そのかわり絶対、秘密よ。もし他の人にしゃべったりしたら、あたし、承知しないわよ」

「わかってる、わかってる。絶対、言わないよ。僕が言うわけじゃないか……。郁ちゃんの命令なら、死んでもまもらんだから」私は神妙な顔をしてペコペコと頭をさげました。そして

「男はみんな浮気をしているんだから、女がしなきゃいけないって法はないよ。ただ、家庭の平和ってことがあるからね。誰にもわからないように行動しなきゃいけないんだ。誰も知らなければ、それはすなわち、そんなことしていないと同じことなんだから……」

と私は例の持論をもちだして郁子の心をほぐしました。と同時に「今後、二人の間の連絡は僕がしてやるから、二人は店では出来るだけ知らん顔をしている方がいいよ」というようなことを力説して、郁子を安心させたのです。

もともと、二人の間に火が燃えて、お互いに結婚したいなどという気をおこさせたりしては、おだやかではありませんが、郁子は最

近リファインされてきているとはいえ、身のこなしやふるまいに、氏、^{うじ}育ちからくる気品や知性のありよう筈はなく、所詮は裏町のハレンチ女にすぎませんので、大学を出て一流会社に勤務しているインテリ青年の坂西が、結婚しようなどと真剣に考えることは万々ありません。もとより私もそのつもりで恋のメッセンジャーを買って出ただけで、要は郁子のおなぐさみ遊びの便利道具に私がなったらしいのです。そして二人のデートの場所や時間の連絡に、私が都合のいい便利屋の役目をはたしたら、それで私は満足なのです。

郁子も玉枝と同じことです。私が彼女のために陰日向なく忠勤をはげむことは彼女も承知の上ですから、自分の腹心の男という安心感があります。そうなると女というものは図々しいもので、他人に見せられないふるまいでも、他人に言えない行動でも、心をゆるして私にだけは見せても、言っても平気になっってくるようです。彼女から見て私は「男性」という対象の圏外に遠くはずれて、彼女が使用しているヘヤードレッサーやヘルスメーターと同じような一つの「道具」として見るようになってきたと言っているでしょう。

「あしたの二時半ごろ、あたし「シルバー」

へ行くから、坂西さんにそこで待ってるように言っといて。もし坂西さんの都合がわるいようだったら、あしたの正午ごろ、あたし店へ電話するから、そんなときオーケーとかダメとか知らせてよ」

郁子は、そっと私に命令します。私はすぐに戸外の公衆電話から会社の彼に電話して、彼の都合をききます。坂西が「オーケー」ということになれば、時間のある場合は、ご念のいったことに私は、その足で渋谷のホテルへ行って部屋を予約しておき、二時半から五時半までの料金を先払いしておきます。

「料金は五時半までの分として僕が払うといだから……」

と「万事オーケー」の報告とともに郁子と一緒に伝えておきます。

「あら、そう……。すまないわね」

郁子は悠々とホテルへ行って、誰も知らない密室の中で夫ならぬ坂西と情事のかぎりをつくしてから、何くわぬ顔をして店へ出勤します。私は郁子の耳もとで「お楽しみ……」とささやきますと、

「ああ、疲れちゃったわ、あたし……。お店休んじゃおうかと思ったけど、そんなわけにもいかないし……」

と憶面もなく二人のやりとりなどを私にきかせて、ペロッと舌をだすのです。

「お店、休まれちゃ、かなわん。まあ、ほどほどにたのむよ」

以前の喫茶店時代でしたら、二階の部屋で郁子の腰でも足でもマッサージしてやることも出来るのですが、玉枝のいる現在は、それは、ちょっと困難です。

郁子と坂西との情事は、夫の矢沢はもちろん、玉枝も全然、知りません。玉枝の浮気と比較べたら郁子のこの程度の火遊びなど、比較にならないほどの些細なことですが、私にとっては他の何とも比較にならない神秘の宝をひそかに抱いている思いで胸がおどるのでした。

31

私さえこれで満足していれば、玉枝も郁子も自分の思うままの気儘な暮しがつづけられて、万事、結構……なのですが、好事、魔多し」といいますか、ものごとは、なかなかそうまい具合にばかりはいきません。

というと、郁子の行動が夫の矢沢に知れてひと騒動もちあがった……かと思われるかもしれませんが、その方は私が綿密な注意をは

らっていますし、坂西と郁子の仲も案じていたような火が燃えるというほどの激しさにも進展していないようで、その点は、まあまあだったのですが、それどころか、もっともつと、いまわしい驚天動地の出来ごとが突発したのでです。

午後十時ごろだったでしょうか……。店には例によって清水さんが来ていましたし、他にもう一組、これは郁子が相手をしていましたので、私は二階へ上って一人でテレビを見ていました。私が二階へ上ってから三十分ぐらいたったでしょうか、突然「キャーッ!」という郁子か玉枝かわかりませんが、女の悲鳴と同時に、椅子が倒れる音、男の叫ぶような声がきこえたのです。

喧嘩? 私は途端に立ち上りましたが、すぐに駆け下りるのはどうか……? と迷いました。もし客同士の喧嘩なら、私などが駆けつけるより女の玉枝か郁子が間に入った方がおさまりがつきやすいのです。

階段の下り口で階下の様子をうかがっていた私は、追いかけるように階下から「大へんよオ、おりてきてッ!」と叫ぶ郁子の声をききました。

もう躊躇できません。私はダダダッと階段

を駆けおりて店のドアをあけましたが、文字通り大変な光景が、そこに現出していたのでした。

玉枝が床に倒れて、もがき苦しんでいました。そのあたりは血の海でした。その前に魂が抜けたように突っ立っている男――、加納敏夫が、うつろな目をしたまま佇立しているのです。

加納の立っている足許に、血に染んだ登山用ナイフが投げだされています。店にいた若い男の客二人が、両横から加納の両腕をおさえこんでいます。

遂にやった! なぜ? どうして? など聞く必要ありません。私の胸の中には一瞬にして、その真相がひらめきました。私は夢中で電話口へかけつけて一一〇番へ電話したのでした。

このいまわしい光景を、ながながと説明していることは、私には堪えられません。警察が来て加納を逮捕したこと、玉枝を病院へ運んだことなど、その間、郁子がどうしたか、清水さんがどうしたか、まったく私の目にうつりませんでした。私の輸血など、ほんの気休めで、病院へ運んで間もなく、玉枝は息をひきとったのでした。

警察は常識どおり殺人の状況、原因、現場にいた者の目撃談など、矢継早に取調べていました。犯人がその場で逮捕されていますし、原因は痴情による犯行とすぐに判断がつきますので、私たちへの取調べも比較的、簡単にすんだようです。

いずれ加納への本格的取調べが進みましたが、情交のあったマダムの態度が近ごろすげなくなり、彼がいいよって冷たくあしらわれたのを恨んで……という原因から、そこにいたった経過として、あるいは清水さんの存在も一応、調書の上に浮かび出てくるかもしれないませんが、私は加納のことも、清水さんのことも、ただ店に来るお客という以外、他のことは何も知らない……の一点ばりで、私の口からどうこうというようなことは一さい申し出ませんでした。

バーのマダムと客との痴情によるトラブルは、商売がら、とかく三角関係になりやすく千に一つ、あるいは万に一つ、こんな殺傷事件となって結末をつけることは、今までの新聞の三面記事によっても諒察できますが、それにしても世の男たちは、なぜこうも独占欲が強いのでしょうか？ 私には到底、考えられぬ心境ですが、加納敏夫も玉枝のようなく

だらな女にひっかかって、あたらしい有為の人生を破壊してしまったのです。

葬式もすませ、バー「タマエ」は、とにかく閉店しました。

玉枝がこんなことでいなくなるとは……。私は二階で一人、坐ったまま目をとじていますと、玉枝が私をあざ笑いながら清水さんとふざけちらしている光景が、次から次と私の臉に浮かんできます。「あんたは黙って、おとなしくしてたらいいのよ」と言わんばかりに私を無視して、男から男へと情交を重ねていた玉枝の姿が、私の頭の中一ぱいにひろがるのです。

その玉枝も、いまはいない……。私はこれからどうして暮したらいいのだろうか……。？ 思い悩む私の脳裡のかたすみ、なにかルビーかサファイアのような、小さなキラキラとした光がさしたかと思うと、やがてその光が次第に大きくなって、ちょうど観音様が雲にのって空中にあらわれるように、ピンクのネグリジェ姿の郁子が、しどけなく立ちはだかって私の前に悠然と姿をあらわしてくるのでした。

一人ぼっちになって淋しいだろ？ だけどその淋しさも、あたしを拜んだら忘れること

が出来るんだよ。どう、あたしのからだ……。素晴らしいと思わない？ 思うんだろ。思うんだったら、何もかもなげ捨てて一生懸命、あたしを拜んでたらいいのよ。ほら、見てごらん、あたしのこの手、この足……。これが、あんたの御神体よ。さ、あたしのこの足に、うやうやしくお辞儀して拜んでごらん。淋しさなんか消えてなくなっちゃうから……。

観音様の、みことのりのように郁子のハスキーな声が私の空虚な脳裡に、波紋がひろがるように満ち満ちてくるのです。

「ああ、郁子さま……。郁子さま」

私はかたく閉ざされた胸の辺が、にわかに開いたような歓喜の中に、随喜湯仰して、そのネグリジェの御姿を伏し拜んだのでした。

玉枝の四十九日は、郁子と矢沢をよんで私と三人だけ。坊さんの簡単なお経をすませたあと、私は郁子と矢沢を前において、一つの提案を出しました。

「ねえ、郁ちゃん。姉さんは商売が好きだったし、それだけに一生懸命、この店の経営につとめていた。僕も考えたんだがね、バーをやってたんでは姉さんがいればともかく、姉

さんなしでは、とても経営はおぼつかない。場所がわるいからね。それで、また元の喫茶店にもどそうと思うんだけど……どうだろ、郁ちゃんがその喫茶店の経営に当たってくれないものだろうか？ そうすれば姉さんも喜ぶと思うんだが、もちろん経営に当たるんだから、収入は郁ちゃんのものにしていいんだよ。郁ちゃんがお店に出ていて、僕は前のように調理人で働くから、矢沢君はそのまま会社へ勤めてたらいいいんだ。もちろん僕の月給なんかいらないんだよ。郁ちゃんは前のバーみたいに僕をバーテンだと考えてくれたらいいんで、いっそのこと、これを機会に郁ちゃんは五反田の家をひきはらって矢沢君と一緒にこの家で住んだら、どうだろう？ 二階の六畳と三畳とあったら、夫婦二人ならなんとかいけるし、僕は階下^{した}でもいいんだ。もっとも、それだけじゃ郁ちゃんも気がひけるかもしれないから、そうだな、純利益の二割だけ僕にくれて、まあこれが僕の月給がわりかな。それで、あとの八割は郁ちゃんの取り分にするという案は、どうだろう。大たい前の「コルティナ」のときの成績からみたら、月に十万円ぐらいの利益になるから、その中から僕が二万円、郁ちゃんが八万円さ。もっとも

も利益の二割なんだから、利益が八万円だったとしたら僕が一万六千円で郁ちゃんが六万四千円ということになるがね。これでまあ矢沢君も会社の方で働いてるとしたら、郁ちゃんとも少しは貯金も出来ると思うんだ。喫茶店といっても、僕一人じゃどうにもならないだろう？」

ならないことはありません。新聞広告でも出してウェイトレスを一人雇ったら、どうにでも出来るのですが、それでは味気ない、空漠たる、いわば抜け殻のような私の生活が残るだけです。

「だから姉さんの遺志をついで、郁ちゃんが当分、精をだしてみたらどんなものかと僕は思うんだよ。ねえ、矢沢君。君も一緒に考えてくれよ。バーと違って、喫茶店だろ。以前は正午ごろ開店して九時に閉店してたけど、営業時間なんて郁ちゃんの考えどおりでどうにでもなるし、君と郁ちゃんと相談してどうとでも決めてくれたらいいんだが、すくなくとも前のバーのときより、郁ちゃんのからだも楽になると思うんだ。バーのときは矢沢君とまったくすれ違いで、ろくろく二人で楽しんでたりする時間もなかったんじゃないかな。喫茶店なら、一週に一ぺん休日もあるし、営

業してる日でも、二人で何処かへ遊びに行ってくれたっていいんだよ、僕が留守番してるから……。一時間や二時間、からだをあけたところで別にどうってこともないからね……」

この非常識な、ばかげた条件に対して、郁子と矢沢は顔を見合わせ、お互いにそのうけとり方を打診しあっている様子でした。

「まあ、二人でよく相談して、いつでもいいから僕に返事してくれよ。いいと決まったら早速、店を開けるようにするからね」

いずれ二人でよく相談して返事するわ……ということになって、その日は二人、五反田の家へ帰りました。

私の出した条件は、もちろん郁子夫婦にとって思いもよらない好条件ですし、第一その相手が私なのです。あの男なら遠慮もいらない、あたしの思うようにどうにでもなる……という気安さが、郁子の心の中にありますから、まずこの話は決まる、と私は樂觀していました。

本当をいえば、この家も店も私の財産も、みんな郁子に捧げてしまいたいところなのですが、しかし一ぺんに大変化をあたえても、郁子が私の真意をはかりかねて、とまどうことでしょう。様子をみて、徐々にそういう方

向にすすんでいったらいいと私は考えていました。その時こそは……。

それは黙ってこのままでもいい、いずれそうなることは、ほぼ間違いありませんが、郁子がなんの不安も危惧もなく完全に私を「道具」扱いしてくれるときのことです。そしてその「道具」を使い飽きて捨ててしまわないよう、いつまでも「道具」として御使用をつづけて下さるようには私は郁子さまに嘆願して名実ともに郁子さまを女神と仰げる日のくるのを私は待つことにしたのです。

四、五日たって、郁子が一人でやってきて「あんたの言うようにしてみようと思う」と告げてくれました。私は郁子の前に大袈裟に

〔伝言板〕○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりません故御諒承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

両手をついて「そうか、ありがとう、ありがとう。よくこそ承知してくれました」と三拝九拝するしぐさをして郁子を笑わせましたが、大たい、こういう大袈裟なおどけた態度が、私の動作から消えるようにならなければ本当とは言えません。

おどけてみせたり、冗談にかこつけたりすることは、私自身が郁子さまに対して、まだ真の崇仰心を持つにいたっていない証拠で、このごまかしメッキは、出来るだけ早く洗い落としてしまわなければいけません。そして文字通り郁子さまの前に「へ、へーえ」と平伏して、その尊いお姿を拝める日の早からんことを私は願うばかりなのです。

そうなる日も遠くはありますまい。

33

郁子夫婦は五反田の家をひきはらって、この家へ引っ越してきました。

店は小改造をして喫茶店「イクコ」として再び開店しました。たいした客もありませんが、どうやら「コルティナ」時代ほどの客は来てくれています。

それに、いささか気になっていた坂西喜久雄のことですが、大阪の支社へ転勤となって

彼もアパートをひきはらって大阪へ行ってしまう。郁子とのひそやかな二人の遊びは、ほんのひとときの隠れ遊びとして、お互いのささやかな思い出になる程度です。

これからの私は、矢沢と郁子のむつまじい仲を願うばかりで、調理場でただ一生懸命、コーヒーや紅茶をいれていたら、それでいいのです。

「これからは、この店のご主人は郁ちゃんなんだから郁ちゃんとも呼んでいられないな。マダムって呼ぶことにしよう。郁ちゃんも僕のことをマスターじゃダメだぜ。そうだ、僕の名前の頭文字の「山」をとって、ヤンマーって呼んでくれよ。他の人がきいても、なんとか職名みたいでわからないだろ。実はシロとかエスと呼んでるのと同じだけど、ヤンマーなら、ちょっと他人にわからないから面白いじゃないか。そうしようよ、ね。……と」

「なアに……」
「おや、結構。それで結構……。なかなか板についてるじゃないか、マダムぶりが……」
「冗談はおいといて、早くコーヒーカップでも洗っときなさいよ」

「はい、はい、かしこまりました」

私はごきげんで、調理場へ入ってゴシゴシとカップを洗いはじめました。

いまや、郁子たちはこの店のご主人さまなのです。

二階の六畳と三畳は、すっかり整理して二人にあげ渡しました。そして階下の調理場の横の、道具置場になっている部屋をかたづけ、私の部屋にしました。私は何も要りません。寝て、食べられたらそれでいいので、寝る部屋はここにありますし、食べる方は郁子さまのお召しあがりになったお食べ残しがあつたら、それをきれいにさらっていただくまで、経済的にも、きわめて安くつく使用人といえましょう。

私自身もこれで満足なのですから、これで四方八方、オーケーです。

中国の古い話に「壺中の天地」という諺があります。酒ものまず、遊びもせず、一日中黙々として働いている男がいて、何が面白くて生きているのか、近所の人不思議に思っていたのですが、彼の家の庭先に小さな壺があつて、夜になって戸を閉めたあと、彼は待ちかねたように、その小さな壺の中にスルスルと這入りこんでしまうのでした。その壺の

中は花園のように華やかで、美女の肌のように柔らかで、その中で彼は、あらゆる楽しみにふけることができた……という話なのです。が、私はここにいたって初めて、私の「壺中の天地」を見出したのです。道具部屋に寝て残りものを食べて、一日中、黙々と働いて、私は心の底から満足して、その壺の中に入るのでした。

私は昼間は郁子さまを「マダム」と呼んでいます。夜になって一人になると、私は以前となえた「白御ブラウス赤御スカート御セミロング媛の命」の御名から、玉枝なきあとふたたび最高貴の位におつきになった郁子さまとして、さらに新しい御神名を捧げ「幾久矢坂長帯日女大神」（イクヤサカナダタラシヒメオオミカミ）と、およびすることにしました。

幾久はもちろん郁子さまのイクで、矢坂は矢沢と坂西という男神がお相手をしたという意味。長帯はナガラシと読みますが、これは古事記による神功皇后のお名前で、神功皇后は戦後の今でこそ、その実在がはっきりしないという理由で歴史書から消えているようですが、しかし戦前小学校で学んだ私たちにとっては、神功皇后といえば光明皇后とともに最も素晴らしい皇后として謳われた皇后さまです。その皇后さまのナガラシ媛を郁子さまの魅力の一つの肩まで長く垂らしたロングヘヤーを長垂らしと発音して仰ぎ奉る意味も含まれているのです。日女は媛であり、日の女神であり大神は他の神々より、さらに尊い神として天照大神と同じように郁子さまはオオミカミでおわします、という意味なのです。

その幾久矢坂媛は、もう間もなく私を、ごくあたりまえのこととして「ヤマ」とか「ヤンマー」とか呼び捨てにして下さるようになるでしょう。

私は「へーい」とかしこまって、郁子さまのなげだしたお足もとに侍り
「わきへはみだしちゃダメよ」
「はい、わかっています」

と慎重に注意をはらいながら、週刊誌のセクシー漫画をパラパラと拾い読みあそばしている郁子さまのおみ足の爪先に一つずつ丁寧に、ピンク色のネイルエナメルを、ぬりつけたりすることになるでしょう。



ヘンナデンワ

グーなキカイ

須 渾

朔

●「はい。もしもし」

○「あのオ、エツギヤク作家とかの芋田淀吉先生でいらっしやいますでしょうか？」

●「はい、(フン、なんて一寸ばかり苦笑なんかしちゃって)悦虐作家の芋田です。あなたはどうなす？」

○「ぼく、SF作家志望の中学生なんですけど……。あのオ、実はぼく、いつも先生のもの読んでいます」

●「あそう、それはどうも。ぼくのファンというわけですネ」

○「いいえ！(とんでもない、といった調子

で)そんなんじゃないやありません」

●「……。じゃ私に何か用でもあるの？」

○「はい、とっても重大な。いや、たいしたことじゃあ。でも、やっぱし……」

●「はっきり言ってくれないかな」

○「あのオ、ほんとにはっきり言っちゃってもいいでしょうか？」

●「もちろん、何なりとはっきり」

○「ほんとにいいんですね？」

●「へんな子だな。はやいとこ言いなさいよ。ぼくはいそがしいんだ」

○「はあ、やっぱりネ。そう言えば、ずい分

と先生お書きのようですね、すごくたくさんペンネーム使って。ぼく知ってます。でもどうして、あんなにバカみたいに」

●「バカみたいになって？ 失礼じゃないか。余計なお世話だよ」

○「困っちゃうな、ぼく感激しちゃってる、っていったんです。あんなに書いてさ、とってもすごいなあってさ。ですけど、どうしてあんなに」

●「どうしてって、作家だもんね。パンのためにきまってるじゃないか。当たり前だよ」

○「でも、みんな、おんなじみたい。どれもこれも、縛ってばかりしてるけど、結局みんな……」

●「当たり前じゃないか。悦虐小説だから縛ってばかりいるのは。ハハなるほど、キミなんかにはまだよくはわからんだろうけどネ。無理もない話だ。中学生じゃあね。SとかMとかの、あの倒錯した耽美の世界の価値判断なんてのは……。君にはまだ早いんじゃないか、ぼくの小説なんか読むのは」

○「でしょうか？ でもぼくのことはいいんです。おかまいなく……。そう、どれもこれも同じみたいな先生の小説。名前と題だけしかちがってないみたいって話でしたね。やたら

縛っちゃったり、くすぐったり、馬になったり、おしっこ飲まされたり……あのオ、先生はフツのシンブンなんかのりっこない、いわば裏街道の作家でしょ？ ですから稿料なんかも高くないから、数でこなすんですよね。でも、皆同じことを書くんだから稿料も高くは貰えるはずが……」

●「キミは一体、何が言いたんだ！」

○「いや、別に。ただ、お話してみたくて仕方なかっただけです。だっていつも先生の小説読んでるから。でもことわっときますが、決してファンじゃないんです。あのオ、縛ったり、おしっこ飲むのほかに、SFなんかもお書きのようですけど」

●「そりゃ書きますよ。わるいですか？」

○「とんでも……。わるいだなんて。フフ、だってサ、もう先、X誌にさ、おとのさまみたいなペンネームのと、もう一つ、女優さんみたいなペンネームのとあったでしょう？ ぼく読んじまいましたよ」

●「……………」

○「登場人物の名が、むこうのと、日本人のちがってるだけっていうのがありましたネ男と女が逆になってるだけなんてのも。そうほかにもあったみたいだけど思い出せない。

でも、たしかあれば、やっぱりイカサマ臭いの。カメカメエブリボディ、いや、これは深夜放送のパーソナリティだったナ。こまっちまったナァ、思い出せない。ええっと、あれは……」

●「……………」

○「すみません。思い出せなくて。あのオ、しらべときますから」

●「……………」

○「もしもし、きこえてるでしょうか？」

●「（吐きすてるみたいに）きこえてるよ」

○「安心しました」

●「キミは相当いやみだよ」

○「いいえ、とんでもないですよ。いつもみんなから、少々子供っぽいけど、素直ないい子っていわれてます」

●「……………」

○「あのオ、先生、こんなおハナシ、別におきらいというわけじゃあ——」

●「そりゃあ……」

○「安心しました。だってネ、何だか元気なみたいと思ったりして。でも安心です。あのオ、ぼくネ、実は、盗作発見器っての作ってあるんです」

●「トーサクハッケンキ？」

○「そうなんですよ。ええ、まあネ。こんなこと自分から言ったりするの一寸へんかも知れませんが、ボク天才少年っていうやつなんです。それでサ、そういった関係上、ずい分と、そうなんですよ。いや、大したことでもないけど、ともかくぼくとしても、苦心してやっと出来上ったというわけなんです。ああ原理はネ……それはヒミツのナイショ。言えなくたってっても残念ですけど、これネわりとカンタンなんです。まあ、ちょっとだけいうと特殊頭脳を使用してるってことです。もちろん特殊光線なんかもネ。そう、何というかな、あんまりハンディでないのが欠点といえば欠点で……」

●「……………」

○「あのオ、ぼくの言ってることよくきこえてるでしょうか？」

●「きこえるったら、うるさい子だな」

○「よかった。だって、きこえてないのにしやべったってバカバカしいですもんネ」

●「早く言いたまえ。何を言いたんだ」

○「だから言ってるじゃありませんか。ボクが天才少年だって」

●「……………」

○「ええと、ぼく何しやべってたのかな？」

そうそう、盗作発見器で……そう、先生のトラヴィジョンのと」

●「君！ 君は脅迫するつもりか？」

○「とんでもない！ 脅迫だなんて、大体とっても、格調が低すぎますよ。だいいち、ぼくが先生をキョーハクしてどんな得があるんですか？」

●「そ、そりゃ……」

○「でしよう?! ね、それでネ、どっちがパクったんでしょうか？」

●「……」

○「芋田先生！ きこえますでしようか？」

●「きこえてるったら」

○「ああそう。あのネ、アレは先生がパクったんでしょうか？」

●「バ、バカな……」

○「という事は、パクらなかつたって事？」

●「だからさ、キミはぼくを脅迫したいのかって……」

○「だからさ、とんでもない、ってさっきから言ってるでしょ。わかっちゃいないナ。――つまり機械の性能について調べるために、お訊きしてるんですよ。ネ……もうちょっとです。切らないで下さいネ、電話を」

●「……」

○「ネ、それでネ、すると、やっぱりラヴィン氏が先生のをパクったんでしょうか？」

●「……」

○「あのオ、むこうが先生のをちょうだいしたことになるんでしょうか？」

●「そ、それは……」

○「あのオ、きこえませんけど、すみませんはつきり、もっと」

●「そ、そんな、バ、バカな、ぼくは……」

○「そうですよネ、ラヴィン氏がそんなことしないですネ。安心しました。では、おやすみなさい」

●「も、もしもし、ちょ、ちょっとオ、キ、

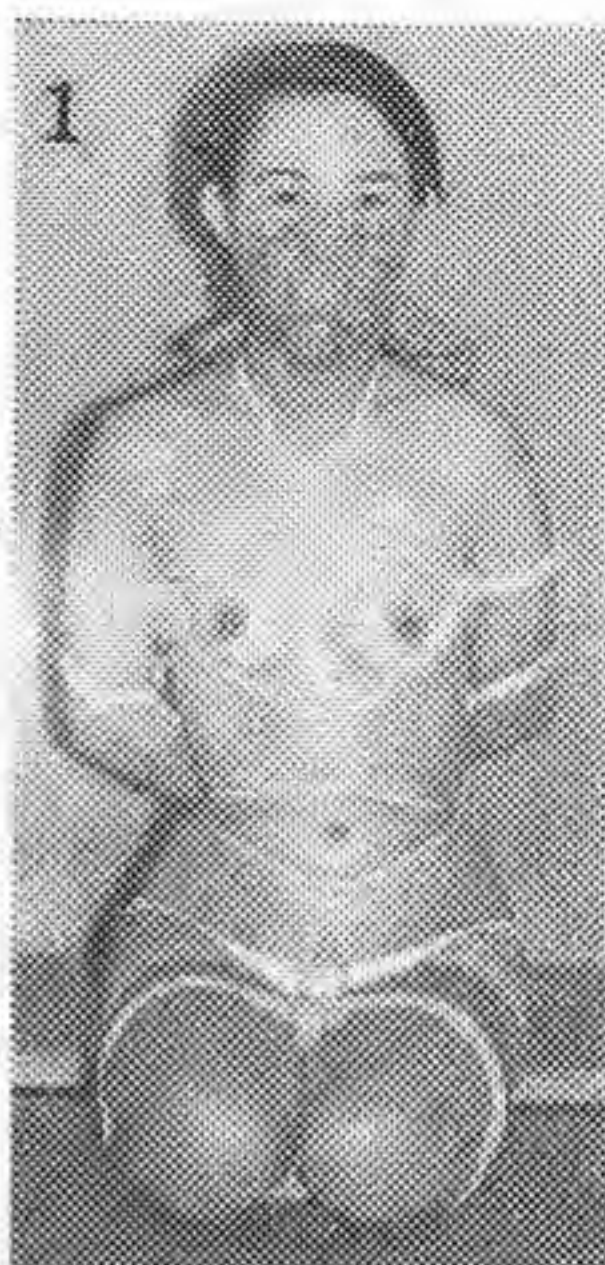
キミは一体――」

○「もういいんです。さよなら」

●「だってキミは――」

○「だってもう何も。ですけどネ、ぼく、すごく安心しました。不眠症で毎晩のように悩んでたんだけど、これでやっとよく眠れそうです。だってさ、パクったのがラヴィン氏じゃないって分かったんですから……。ラヴィン氏がまさかそんなバカなことするはずないじゃかって、思ってたはいましたけどネ。……そう、というわけで安心しました、とても。何しろぼくはラヴィン氏の大ファン

で、とっても尊敬してるんです、ずっと。そのラヴィン氏ともあろうヒトが……まさかとは思ったけど。何が何だかわからなくなっちゃまって、とってももうユーウツで。でもネもう全然大丈夫です。それにサ、ぼくの盗作発見器に関しても、益々信用がおけることに確信が持てて。ね、ものすごくグーなキカイですよ。まるで神様みたいな。そう、発見ですと、すごい唸り声なんかあげちゃってネ。とくにご本人がその場に居合わせでもすると、そうなんです。ぼくにだってかたんにとめられないんです。つまり、とってもゲバルトリッヒというわけ。すっごくたのしいやつなんだ。頭があって胴があって、腕なんかも生えたりしてるんです。え？ うん縛るかも知れない。おしっこ？ なんかぶっかけないよ。あの機械はそんな趣味ないって……。ア、ハハハ、なんでしたら芋田さんにも見せてあげましょうか？ 他ならぬ芋田淀吉大先生でありますからネ。え？ そんなもの見たくないって?! ああそう。無理におすすめしません。でも、やっぱりぼくは天才児だったんだなあ。ぼくは誇り高い少年なんだなあ。ああ、じゃあネ、バイバイ」(ガチャン)



プレイ・レポ

はじめての撮影行

文と写真

城

章 夫

午後二時、東京駅発の急行「伊豆四号」は秋の霖雨のさなかにもかかわらず、さすがに満員の混みようだった。明らかに職場の団体旅行とみられるグループが車輦の中央あたりに座席を占め、缶ビールをあげ、ウイスキーの瓶を傾けて、早くも陽気な歓声をあげている。そんな連中を横目に、ぼくと那津子は、ひっそりと肩をならべて坐った。

やがて左手の窓外に、湘南の海が広がり始める。ひとときの雨の晴れ間を雲からこぼれ落ちる陽差しは、さわやかな秋のそれを思わせるように澄みきって、紺碧の水がキラキラ輝いている。それまで一心に読みふけていた創元推理文庫の一冊「思い乱れて」から目を挙げたぼくは、ふと思いついて旅行カバンのなかから、ひと綴じの紙片をとりだして那津子に渡した。その表紙には黒いボールペンでこう書かれている。

緊縛写真撮影コンテ

時・一九七〇年九月一二日

所・伊豆、今井浜
モデル・滑川 那津子

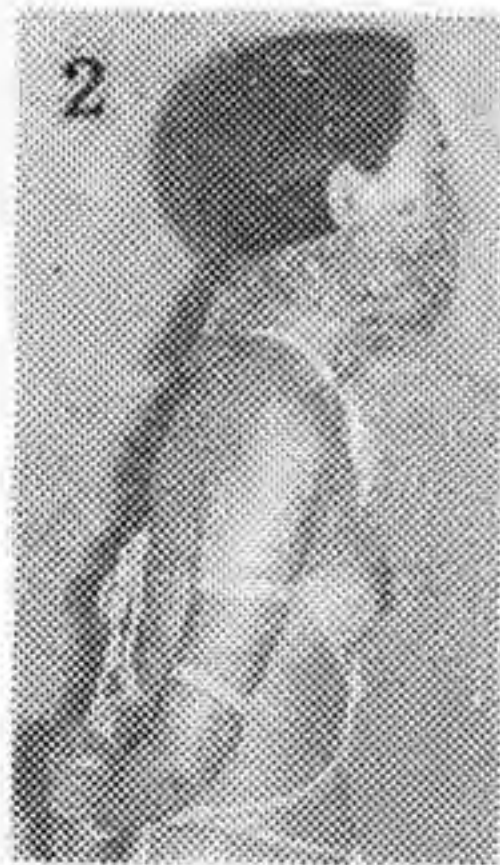
「フフ」と、含み笑いをしながら那津子がいふ。「ずいぶん、凝ったわね」

「そうさ」例の団体旅行の連中は、ますます喧騒を極め、声を低めることもないのだが、それでもぼくは、自ずと声をひそめる。「縛ったり解いたり忙しいからね。ちゃんと手順をきめておかなくちゃ、スムーズに撮れないよ」

○

「旅に三楽あり」という。一に計画、二に実施、三に追想がこれだそう。今日のこの日

までの一週間ほどというものの、ぼくはまさにその計画のプロセスを、フルに楽しんできたのだ。三十六枚撮りのフィルム一本に縄をまとった那津子のさまざまな姿態をどう写すか。むろん予備のフィルムを一本もつ

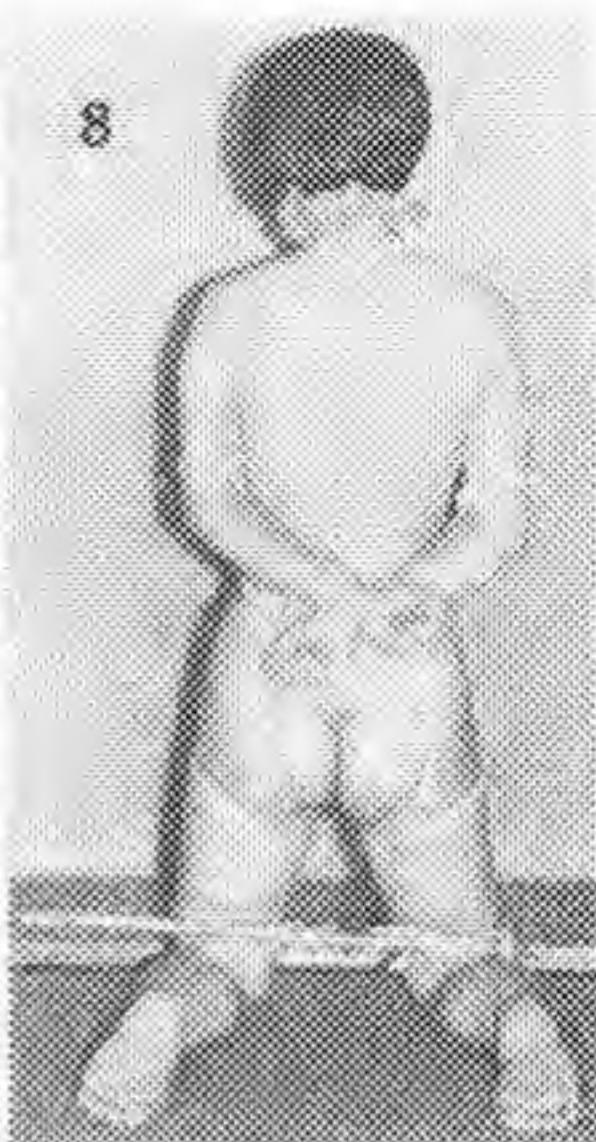


ては行くが、できることなら一本にまとめた。ロスを見込んで三、四枚撮ることにしよう。まず、いつもの菱縄しばかりから行くか。書いては消し、消しては書いて、ようやく作りあげたコンテナなのだ。その間、縄にくぐられ、猿ぐつわを噛まされた那津子の千姿万態を頭のなかに描きながら、ぼくは心ゆくまで、「旅」の第一の楽しみを味わった……。

◇ ◇ ◇

豊かな流の幸をとり集めた食事のあと、ゆったりとお湯に入ったぼくらは、いま、いうにいわれぬ充実感と倦怠感に身をまかせている。宿の人がとってくれた夜具の上に、す裸のまま長々とねそべりぼんやりと天井を眺める。窓下を行く溪流の音までが、どこか遠くから聞こえてくるようだ。

無為の時間が速やか



に流れる。何もしたくない——いや、そうしてはいられない。ぼくは、むっくり起きあがり、テーブルの上に例のコンテを拡げて那津子を促した。

「じゃ始めようか」

コンテの第一頁、Aグループは、いつもの手慣れた一重の菱縄縛りだ。那津子は心得たように手を後ろに廻す。（もう決して若いとはいえない年だが、子どもを生んだことのない那津子のからだの線は、あまり崩れてはいない。まして要所々々を縄でぎっちり締めあげれば、それなりの魅力もでようというものだ。ぼくと那津子が愛をかわす夜に、縄がなくてはならぬ所以である）あまり痛がらないように、しかし必要な箇所は、きちっとからだに喰いこむように、ぼくは慎重に縄をかけて行く。ぼくは、いわゆるグルグル巻きなどという縛り方は好まない。あくまでも左右均等に縄をかけ、そのシンメトリカルな線が女体に絡んで、かもしだす美しさをこそ愛する

のだ。「さあ、坐って」

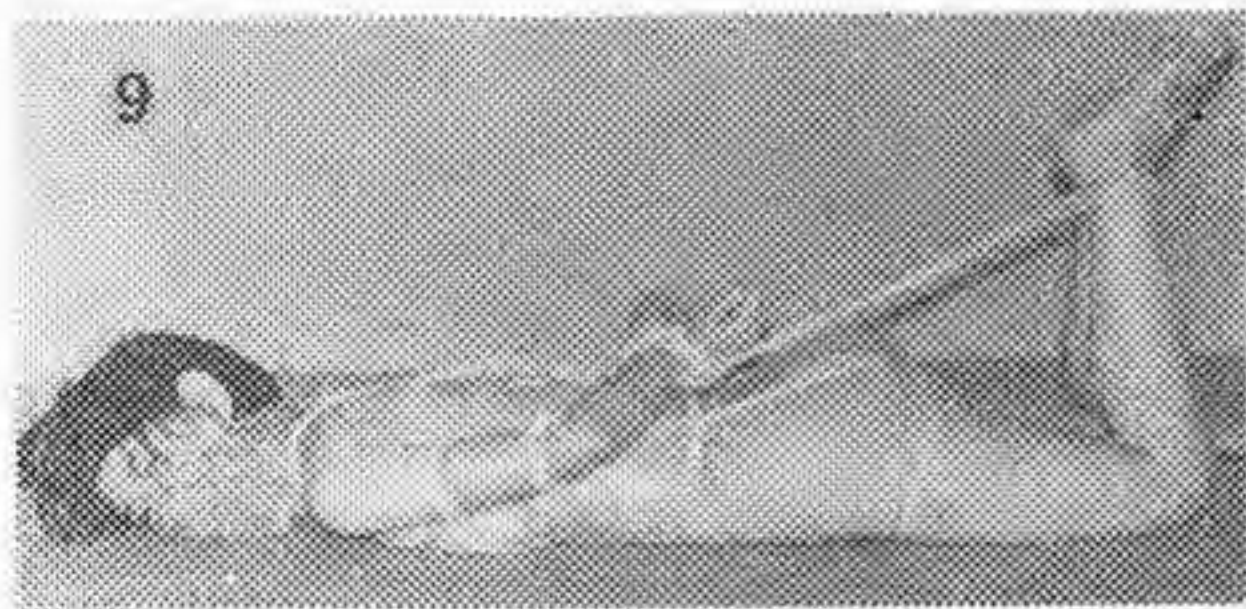
正座した那津子の両膝を揃えて縛り、口にハンカチを押しこんで、鼻の上から手拭で覆う。海老茶色の地に、桜の花びらを白く染め抜いたこの手拭が、那津子の白い顔によく似合う。あんまり手拭を強く引き絞ったので、彼女の顔が少しゆがんでしまったのが、いかにも緊迫した現実感を高める。

その昔、凝り性の溝口健二監督は、「忠臣蔵」の松の廊下を撮るとき、カメラには入らぬところまで玉砂利をびっしり敷きつめることを要求したという。目に見えないところにも手を抜かない、その心意気が溝口作品の厚みとなっているのだ。この頃のテレビや映画によく見られる、今にもずっとけそうな形ばかりの猿ぐつわは、ぼくの探るところではない。

「はい、こっちを向いて。撮るよ」

閃光一閃。かくて第一枚目が銀膜上に焼きつけられた。縄をかける前にからだに、たっぷり塗りこんだオリブ油を吸って、那津子の肌がつやつやと光っている（第一図）。

続いてコンテに従って、横を向かせ後ろを向かせて一枚ずつ（第二図及び第三図）。手も足もぎっちり縛られて、那津子が思うように動けな



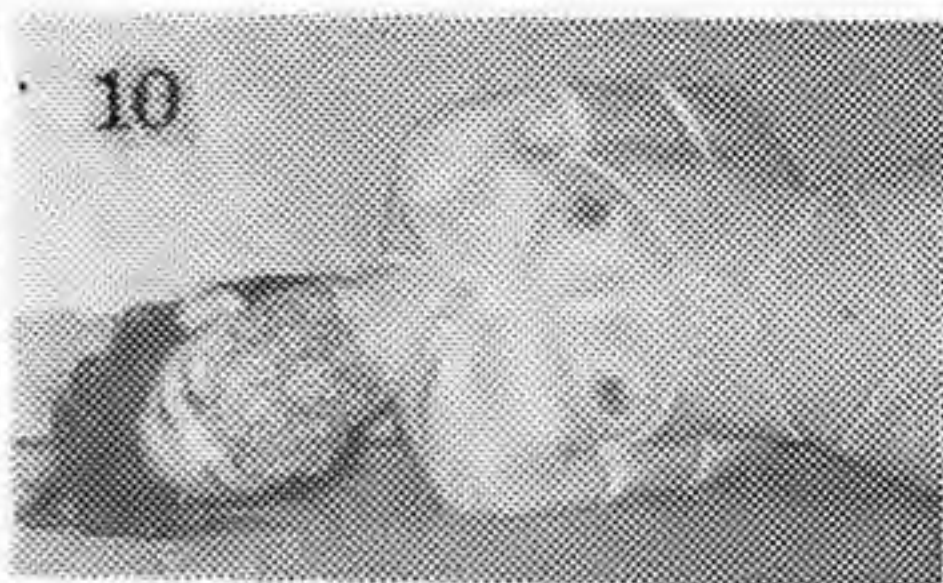
いので、ぼくは抱きかかえるようにして、向きを変えさせなければならぬ。それからカメラのところへ戻ってシャッターを押して、また那津子のところへ行ってポーズをとらせるというわけで、モデルも楽ではないだろうがカメラマンもなかなかの労働である。

次は海老縛り。膝を縛った縄をのびし、首にかけて引き絞る。とはいっても、あまりひどくしては可哀そうなので、ごく軽く前かがみになった程度で止めておく。これを正面と側面とから一枚ずつ（第四、第五図）。

コンテに従えば、つぎは足枷の場面だ。膝の縄を解いて膝立ちの姿勢をとらせる。できるだけ足を開かせて、用意してきた竹の棒を膝頭のうしろにあてがって縛りつける。うつむいてその作業を一生懸命やっている上の方で那津子が、くぐもった声で何やら言っている。

「どうしたんだ？」

ききながら猿ぐつわをはずしてやると、那津子はホッとしたような顔をしていった。「あんまり手拭がきつすぎて鼻を抑えつけるもんだから苦しくって——それにハンカチがみんな唾を吸ってしまっ



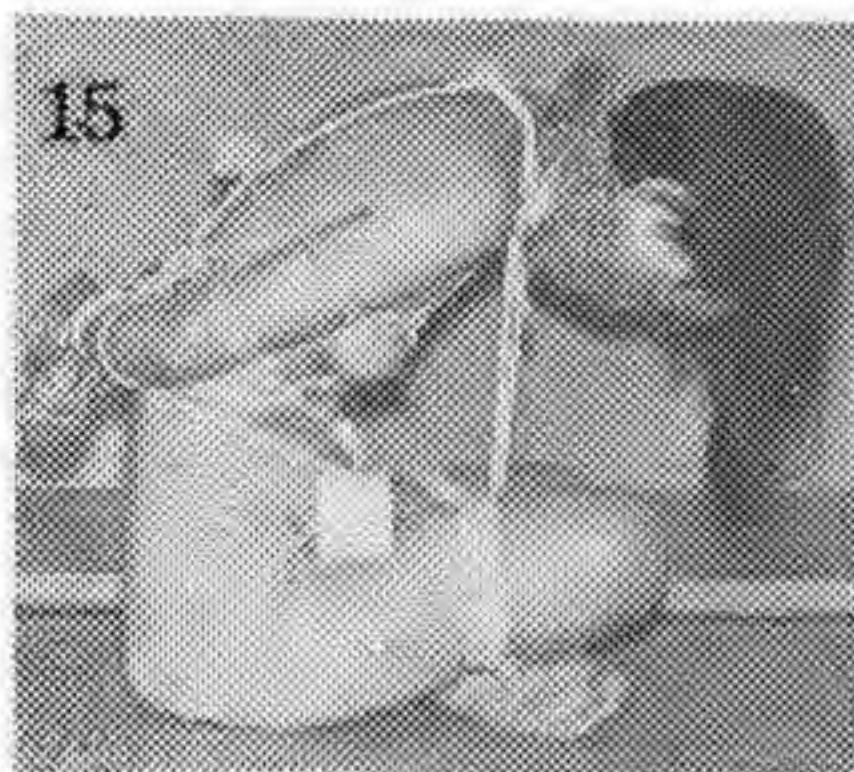
口がカラカラにな
っちゃうのよ」

そこでお茶を、
ひと口飲ませてや
り、こんどはハン
カチなしの手拭だ
けで猿ぐつわをし
直した。ついに溝
口監督の非情さに
徹しきれない弱さ
を情なく思いなが
ら（第六図、第七

図および第八図）。それに、出来上った写真
を見ると、第八図のように竹の棒が左右へ長
くつき出て、ぼくの信条であるシンメトリイ
が、やぶられてゐる。初めての撮影とあって
さすがにそんな細かいところまでは神経がま
わりかねたようだ。

Aグループ（一重菱縄縛り）の最後
は、俯臥、横臥、仰臥の三態。足を長
々と伸ばすと忽ち六頭身の欠陥が露呈
されてしまうので、窮余の一策として
足を曲げさせ、手首と足首を連繫する
（第九、十及び十一図）。

ここへくるまでフラッシュ・ガンの
調子があまり思わしくなく、発火しな
いバルブが五六発もあって、気もいら
だたせられたし、意外に手間もかかっ



たが、やっとカメラマンもモデルも慣れてき
て、撮影の進捗具合もどうやら軌道にのって
きたような感じだ。一気に次のBグループを
とろうというわけで、いったん縄をすっかり
解き、コンテに従って縛り直す。このBグル
ープは三重菱縄、猿ぐつわは口のみ覆うとい
う指定になっている。

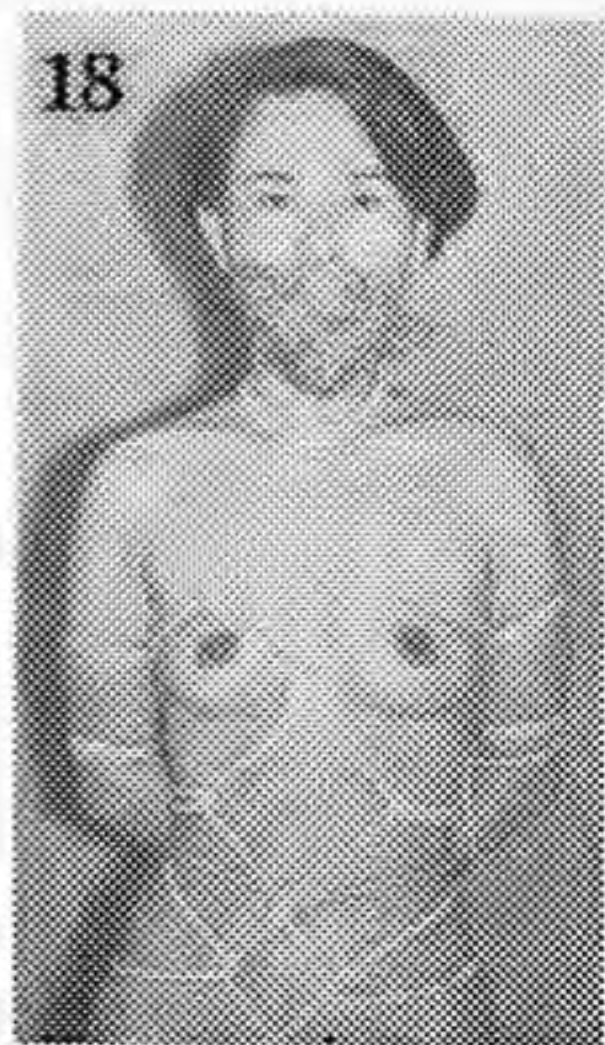
菱縄が三重というのは、身長一七〇㎝前後
というグラマーガールならいざ知らず、那津
子のような小柄なからだには少々うるさすぎ
る感じがするのではないかとも思ったが、さ
て実際に縄をかけ終わってみると、やはり心
配した通りの結果になった。しかし今更、縛
り直すのも億劫なので、そのまま撮影を進め
ることにする。

Aグループの時と同じように、あぐら縛り
のポーズを前と横から（第十二、十三図）。

海老縛りを正面と
側面から、一枚ずつ

（第一四、一五図）

続いて、あぐら縛り
のまま那津子のから
だを押し倒して仰臥
と横臥のポーズ（第
十六、十七図）。髪
がだいぶ乱れてきた
ので櫛ですいて整え
ようとするが、どう



もうまく形がつかない。頬に喰いこむほど堅
く縛った猿ぐつわが、ずっこけてゐる。やは
り猿ぐつわは鼻まで覆わないと駄目な様だ。

最後に膝立ちの姿勢をとらせて、竹の棒を
足首に結びつける。膝が畳にすれて痛いと言
うのを（口中に布片をつめこんでいない形ば
かりの猿ぐつわだから、しゃべるのは自由な
のだ）、もうちよっとだからと我慢させて、
膝立ち三態（第十八、十九及び二十図）を撮
り終わったときは、二人ともクタクタに疲れ
てしまった。

縄をといてやると、那津子は手首や二の腕
の赤い縄の跡をさすりながら「ひと休みした
いわ」という。こっちにも異議のあらうはず
がない。お茶をいれて、ようかんを囓じる。
今まで撮影に夢中になっていて気がつかなか
ったが、広間の方で宴会をやっていると見え
て、調子外れの歌声や手拍子が、遠くきこえ
てくる。時計をみると、もう九時を過ぎてい
た。撮影を始めたのが——そう、あれは七時

23



をちよつと過ぎていた頃だから二〇枚ばかりとるのに二時間近くもかかったことになる。

あとで考えると、このへんで一と風呂浴びて、髪を直したり、オリブをもう一度、からだに塗りこんだりすればよかったのだが何となく気がせいて、この小休止もそこそこに次なるCグループの撮影に入ることにした。だがその前に剃らなければならぬ。布団の上に仰向けに寝かせ、ブラシで泡立てた石鹸をたっぷり塗る。手にした剃刃の刃はウィルキンソンのステンレスの刃である。ぼく自身は、このところ電気カミソリを使っているのだ、この替刃は三年も前に買ったものだ。二度ぼくのヒゲを剃ったこともあるが、そのまましまいこんでおいたやつだ。しかし、さすがによく切れる。

それから、縄をかけ始める。Cグループはキの字縛りで、手拭を口に噛ませる猿ぐつわだ。乳房の上と下と胴のくびれたところの三カ所を縛り、それを縦に上から縫うようにし

て縄がのびる。

横坐りに坐らせて足首を縛り、それから猿ぐつわ。こんどは手拭を口のあいだに噛ませるので、ここはやはりリアリズム尊重で行こうと、ハンカチを丸めて口に押しこむ。

右斜め前と左斜め前から、一枚ずつ（第二十一、二十二図）。あとは例によって側面と背面（第二十三、二十四図）。シャッターを押すと那津子のところに行き、後ろから抱きかかえてドッコイショとばかり向きを変えさせ、またカメラのところへもどってシャッターを——なんとも、しんどい作業が続く。

次は足首の縄をといて、膝立ちのポーズを正面と側面から（第二十五、二十六図）、ヒゲの剃りあとなら「おおおお」ということになるのだが、この場合はどうも余り頂けない眺めだ。

「こりゃあ、やっぱりふさふさとしている方

24



27



がいいね」というと、猿ぐつわのなかで那津子が何やらモゾモゾ言っている。あとで聞くと、「自分で剃っておいて何いってるのよ」といったのだそう。

Cグループの最後は、その膝立ちの姿勢のまま、上体を顔が畳につくまで押し倒して、正面と側面からフラッシュを浴びせる（第二十七、二十八図）。

さてDグループは両手吊りの場面だが、フィルムに残り数も少なくなった。それに夜も更けたし、何よりもすっかり疲れきってしまったので、それはまたの機会に譲ることにして、今夜の撮影はこれで打ち切りとした。

「さあ、それじゃ、もう一と風呂あびて寝るとしようか」

那津子のからだを抱きよせると、嬉しそうに顔をすりつけてくる。もう宴会も終わったと見えて、あたりはひっそりとして水の音ばかりが、ひととき高くなった。

川口たえこ画



(一)

「英国ではインテリというのは、現実の問題に空論を振り回すばかりで、頭さえよければというかなりひねくれたものを除けば、異性にもまるで魅力のない身体を持った人を暗に示す軽蔑のことばである……」

懸賞創作応募作品

奇型の舞踏

川崎章

瀬沼浩治は、ふと開いた英文の一頁に目を留めた。perverse (ひねくれた、倒錯の) という語が、妙に心にひっかかった。

浩治は大学を卒業後、すぐ順調に大阪の商事会社に就職したのだが、その会社が倒産してから、まともなサラリーマン生活に嫌気がさし、いまダンス教師をしていた。

いつの間にか踏み込んでしまった芸で身を

立てるこの世界も、思ったより競争が激しかった。浩治は、二カ月後のダンス選手権中国地方大会に何とかして入賞することを、さし当たっての目標にしていた。

パートナーは、ダンスの技術や経験からいって、当然、尾形泰子に決めるべきだった。しかし浩治は、すんなり伸びた脚線が若いかもしれないと思わせ、陽に焼けた清純なおさな顔の宇野由美子に賭けてみたい気持ちでもあった。

まだ習い始めて間もない由美子は、浩治と組んで踊っているとき、ステップを何度も間違えた。

「だめじゃないか」

浩治は、ことさらにきびしく叱り、ぐっと思い切り力を入れて、由美子の右手を握った。

「あっ」

由美子は低く叫んだ。

「痛かったの」

「ううん、ちっとも——。でも指の間に一本ずつ鉛筆を挟んで、それからうんと強く握られたら、こたえるでしょうね」

浩治はぐっと息を飲んだ。いじめてほしいとまるで挑発している風であった。浩治は由

美子をパートナーに選び、自分の思うままの型に、練り上げ、作り上げてみたい欲求にかけられた。由美子はその調教に耐えるにちがいない。浩治は目を輝かした。捜し求めた珠玉を、いまやっと手にした喜びに似ていた。由美子のはえぎわのあたりや、長い髪を無造作に束ねた細っそりした首筋は噴き出た汗に濡れ、若い女のおまざすっぽい匂いが、浩治の嗅覚をくすぐった。

(二)

由美子と組んで選手権大会に出場するため本格的練習が始まった。由美子はやがては七色の脚光を浴び、満場を沸かすきらびやかなダンスのクイーンを夢みた。

「泰子さんたらね、関本さんと気が合うらしいのね。いつも一緒よ。いやあね、あんな人と。もう競技ダンスは止したのかしら。すごく上手なのに」

などといいながらも由美子は、ともかく浩治を独占できたことに満足している風であった。関本というのは、白木会の幹部とかで、よくホールに出入りする男だった。

浩治と由美子の特別な練習は、ホールの営業が終わる夜の十時からだった。

競技ダンスでは、ルーティンといって、曲に合わせてステップの組み合わせを予め決め、四種目についてそれを何回となく繰り返し練習するのである。

一曲はおよそ三分足らずだが、腕と肩を柶のように固定したまま、身体のあらゆる筋肉を、あるいは緊張させ、あるいは弛め、前進し後退し、回転するのだから、見た目にはのびのびした柔らかな動きに見えても、実際は重労働といってよい。

浩治は数曲踊って、かなり疲れていた。ステップの大体は、由美子に覚えさせたが、まだ不満な点が多かった。

「まるでリズムに合っていないなあ」

「だって——」

「シャドーをやらないとだめだ」

相手なしに一人で踊るのをシャドーといって、よく男子が練習するものだが、浩治はそれを由美子にやらせた。

由美子は左腕を肩の線まで挙げ、右手も高く挙げてポーズを作り、決められたステップを踏んだが、ほとんど後退の動きばかり続いたので、平衡がくずれ、たびたび身体がぐらついてしまった。

「なんだ、それは」

浩治のきびしい声に、由美子は思わず涙ぐんで、フロアにしゃがんでしまった。が、次の瞬間、この広いホールにいま浩治と二人きりしかないことを意識した。

「バックの練習をするわ」

由美子はさっと鏡の前に立ち、脚を動かしては重心の移動と身体の均衡を確かめ、それから後退運動を繰り返した。

次にまた浩治と組んで数曲踊った。もう汗で全身がびしょ濡れだった。

「またバランスがくずれる」

急に耳元でどなられ、由美子は一瞬ぴりりと身体を震わせ、すねたような目の色で浩治を見た。

「だって、靴がハイヒールですもの」

「ハイヒールを履いて、そんなにバランスが悪いのなら、四つん這いで歩けばいい」

「——」

「さあ、バランスをくずした罰だ」

由美子は両手をフロアにつき、四つん這いになる真似をした。

「それじゃ服に床の脂がつく。服をとって」

「え——」

「服を脱いで」

「は、はい」

由美子はワンピースの服をぎこちない手つきで脱いだ。スリッパはぐっしり濡れていて、ブラジャーはつけていなかった。あまり隆起していない青い果実が透けて見えた。

由美子は三十坪ほどあるフロアの上を、左廻りに、四ん這いで歩き、走り、よろめき、あえいだ。露わになった肌は小麦色で、身体を支えた腕は意外にたくましかった。

由美子は二周目には、もう呼吸は荒くなる一方で、頭にかっと血が上った。

「まだまだ、もっとはやく」

浩治の声が、ずっと遠くの様に聞こえた。

二人のほかいま誰もいないのだ。由美子はふと密室での情事を想像した。

ホールの間接照明に当たって、さまざまに色彩の変わる下着だけにダンスシューズを履いた四つん這いの姿は、何とも異様だった。

浩治はいまこれと似た状景を思い出した。

学生の頃、軍事教練で炎天下を揮一つで走らされたり、腕立て伏せをやらされた記憶である。非常な苦しさと同時に、何か下腹あたりを快くしめつけられるような感触を憶えている。それは浩治のやや虚弱だった思春期の嗜虐と性との奇妙な結びつきであつたらしい。

浩治の由美子に対する訓練は、激しさを日

毎に増していった。

(三)

練習の成果を問う選手権大会の決勝では浩治の組を含めて五組の燕尾服とイヴニングドレスのカップルが、動く造形の美を競い合った。結局、浩治の組は三位だった。

翌日、浩治はホールで泰子に会った。

「よかったわね。三位だったそうね」

泰子は三位というところに妙にアクセントをつけていった。自分と組んでいたら一位になっていただろうといわぬばかりの、皮肉な調子だった。

「それからね、マスターが、初心者を教えるに来てほしいっていうの、私に。いいわね」

「そりゃあ、いいよ」

浩治は答えた。泰子は遊び半分に勤めるつもりしかめた。

数日して、突然地元の放送局から浩治に、テレビに出演してほしいといってきた。

浩治は由美子と一緒にテレビのスタジオに行き、江波というデレクターと打ち合わせをした。由美子は江波をよく知っていた。以前ある劇団に入っていて、そのとき知り合ったということだった。

由美子が、なれなれしく江波と話している声がある。あたりが、がやがや騒がしいのでよく聞きとれないが、江波は放送局の劇団に入るよう、由美子に勧めているようだ。それに対して、由美子は断る様子もない。

むら気な女だ。こんどは放送劇団に入る気であるのか——浩治は少しいらした気になって、由美子の方をちらっと振り返った。

「このファスナー上げて、江波さん。ねえ」
甘ったるい声でいう半裸の由美子が目に映った。浩治は思わず、かっとした。

(四)

休日に浩治は由美子を誘って、海へ泳ぎに行った。バスは山並みのつづら折りの路を縫って、瀬戸内の静かな入江になった海岸に四時頃到着したが、もうシーズンが過ぎてしまった海岸には、人っ子一人見当たらず、一軒だけぼつんと建っている宿舎にも人影は見当たらなかった。

下に着込んでいた水着になって少し泳いだ。水はかなり冷めたかった。由美子は一向平気で、はしゃいでいたが、浩治はすぐ水から上った。全身が鳥肌だって、どうも寒くてしょうがないので、早々に引きあげること

した。

更衣場はと見廻しても、それらしい物は見当たらず、ただトタン屋根の炊事場らしいのが見つかった。井戸の横に、かなり大きなコンクリートの貯水槽があり、手桶もあった。

浩治と由美子は、貯水槽の両側に向き合って、潮水でべとべとする身体を洗った。その水がまた海水より、はるかに冷めたかった。浩治は歯をかちかちいさせた。

由美子は水着をすっぱり脱ぎ、うしろ向きのまま、手桶の真水を何度もかぶった。水に濡れた淡褐色の肩から、ゆるやかな曲線が腰のあたりに流れていた。

「これからまた演劇をやるつもり？」

浩治は、この間から気にかかっていることを問い質してみた。

「ああ、あのこと。あれは江波さんがしきりにいうもんだから、そのうち気が向いたらっていっただけよ」

「そうかな。あのとき、そうでもなさそうだった」

「違うわ。これだけは信じて——ダンスのことだけよ、私の頭の中にあるのは」

由美子は、頭の中にあるのは浩治のことだけ、とは、ついいいそびれた。

「じゃあ、その証拠を見せてほしい」

「証拠？」

「そうだ。絶対にがんばるといふ証拠に、波うち際まで走るんだ。そのまま」

「いや、いや、だめよ。このままじゃ」

「そういいながらも、浩治が裸のまま近づくと、由美子は身を翻して、一糸まとわぬまま海の方へ向かって走った。すんなり伸びた脚が砂をけるたびに臀部が大きく揺れた。

波うち際で、浩治に両腕をとられた由美子は、半ば本能的に身をすくめた。

「さあ、鍛えるぞ」

「いいわ、とことんまでがんばる」

——それが浩治を喜ばせ、浩治を自分だけのものにする愛の証でもあるように、由美子は思った。

由美子は命じられるままに、両足を開いてふんばったまま、思い切り背を反らして曲げた。背骨が音をたてて鳴った。両手がやっと砂につくと、髪は長くもつれて、白い砂の上に乱れた。腹部から胸にかけて、筋肉は少しの弛みもみせず張り切って、小さい乳房はさらに小さくなって、寒さに耐えて早春を待ち望む固い蕾のように震えた。

いま羞恥の極限でその羞恥を見失ったかの

ように、由美子はそのままの恰好でじりじり歩き出すと、突き出した両もものあたりは、深海の軟体動物のように、ねっとりとうごめいている風情があった。

浩治に仮借なく追い立てられ、由美子は速度を増し呼吸をはずませて、砂浜を駆けた。浩治が弓なりの腹部に馬乗りになっても、由美子は耐えた。苦しかったが、その苦しさは奇妙な幸福感を含んでいるように思えた。

由美子は、逆さに見る夕べの空と海が、ぼんやりかすんでくるのを陶然と酔ったように眺めた。白浜はどこまでも続いていた。

(五)

ホールは盛況で、とくに土曜日や日曜日は入場者でごった返し、経営者の藤田は、ほくほく顔だった。

しかしそれに比例するように、街の与太者の出入りが多くなった。たまにワルツのようなおとなしい曲が流れると、

「なんだ、お経みたいな曲は止めちまえ。もっと気分の出るやつにしろ」

と、うるさくどなる。

無銭入場を咎めると、中には

「誰だって、道楽しているときは金に不自由

するものだ。あるときは払うからよお」

と、まるで理屈にならぬ理屈をこねて、やらんでくる。警察を呼んでも、その場限りの効果しかなく、その上、与太者の方が数が多いので、警官の方が逆に圧倒されることもあって、どうにもならないことが多かった。

何とかしなければと思っていた矢先、困ったことが起きた。愚連隊風の男が雪駄履きのまま料金を支払わず入ろうとするのを泰子が止めたところ、その男はいきなり泰子突きとばしたのである。

「何をするのよ」

勝気な泰子は、男をきつと睨んだ。

「うるさい」

男は片方の顔を妙に歪めて、開き直った。二人を取り巻いて、何人かの客がわいわい騒ぎ出した。

「それが客に対する態度か。生意気な奴だ」

「冗談じゃあないわよ。ちゃんとお金を払えばいいじゃあないの」

「なに——」

男はいきなり、泰子を平手でぴしゃっと叩いた。さすがに泰子も顔色を変え、浩治の方を救いを求めるように見たが、すぐ奥の事務所へ駆け込んでいった。

ちょうど入れ違いに、関本がやって来て、事情をその場に居合わせた連中から聞き、男に詰め寄った。男はさっきまでの泰子相手の威丈高な態度をがらりと変え、急に怯えた様子を見せた。

「とっとと出てうせろ」

関本は男の肩を引き寄せておいてから一気に、どんと突きとばした。男はとぶように逃げた。

しかし、男はその足で隣の食堂にとび込むが早いか、さっと奥の調理場に入り込み、びっくりして目をみはるおかみさんを尻目に、そこにあった包丁をわし掴みにしてとび出していった。

男はホールに舞い戻って、ヒステリックに獲物を目で追ったが、関本はすでに事務所へ行って、いなかった。男は、そのまま意外にあっさり出ていった。

浩治は、騒ぎが大きくならずに済んだことに、やれやれと胸をなで下ろし事務所へ成り行きを報告に行った。すると浩治を見て泰子が、経営者の藤田に甲高い声で訴えた。

「女の私がなぐられたのよ。それを何よ、何もしないで見てるなんて」

「まあまあ、インテリの先生には無理だよ。」

ダンスはお得意でも、喧嘩の方は苦手でしょうから」

と藤田は言って、腹をゆすって笑った。

「それじゃ、マスター、来週からということにしておきましょう」

関本がいった。

「お願いしときます。会長さんに、よろしくおっしゃって下さい」

「承知しました」

そういつて関本は部屋から出ていった。浩治には、何の話なのか、さっぱり合点がいかなかった。

「実は、先生。白木会に見廻りをやってもらうことにしたんですよ。こうもめごと続きじややり切れませんからね」

藤田がいった。

次の週から契約通り、しゃれた黒色の服に丸に白と刻んだバッチをつけた組員が数名、さっそうと見廻りに来た。

数日経って、浩治は由美子から妙な話を聞いた。

「変な男が暴れたあの日ね。ちょうどこの入口のところまで来ると、あの顔面神経痛みたいな男が、包丁を持ってとび込んで行くのに出会ったのよ。私はこわかったのでホール

に入らず、附近をぶらぶらしていたの」

「入って来なくてよかった。あの日は大変だったから」

「でもね、そのあとが変なのよ。だって、あの男と関本さんが、路地の蔭で何かひそひそ話しているのを見たわ。あとで聞いたんだけど、あの男は関本さんに突きとばされて逃げたんでしょ」

「うん、そうだ」

「だったら、あんなに話し合っているのは変じゃない？ 何か二人とも、にやっと笑って別れたのよ」

浩治は、周囲に何か異変が仕組まれているのではないかと、ふと不吉な予感に襲われた。

(六)

ホールでの争いや無銭入場が減った代り、白木会関係の連中が大手を振って出入りし、雰囲気はますます卑俗化する一方だった。

白木組にたかられる寄付金の額もだんだん上り、この頃では見廻りを依頼した当の藤田も、ほとほと弱り切っていた。このままではホールを白木会に乗っ取られてしまうことにもなりかねなかった。

その上、もう一つ浩治にとって困ることが

できた。県条令がきびしくなり、ダンスのレッスンは教授所だけでダンスホールでは一切できなくなるというのである。

「ダンスを教えることは、結局ホールの風紀をよくすることになるんだから、何もそうやかましくいうことはないんだがなあ」

と浩治は由美子にいった。

「そうね。ほんとにそうだわ。いいことがあるわ。中島さんっていう県会議員を知ってるの。その人に相談してみようかしら」

「どういう知り合いなの？」

「選挙運動を手伝ったことがあるのよ。当選したとき、大喜びで私に、困ったことがあったらいつでも力になるっていつていたのよ。だからそのくらいのこと、相談に乗ってくれるわ、きっと」

由美子は細っそりした身体に似合わず、精力的で才女でもあった。さっそく由美子は中島県会議員に会い、県会に働きかけてもらう約束をとりつけた。

「中島さんて、いい人だわ」

由美子は浩治に告げた。

「でも、白木会のことをしきりに尋ねられたわ。ここのホールが、白木会にお金をどれだけ払っているかって。領収書何か手に入ら

ないかって」

「それで？」

「もちろん、私知らないっていったわ。会長の白木っていう人も県会議員で、何か大きな土木関係の汚職をやっているそうなの」

中島県議は、同じ土木建設の競争相手である白木の追い落としを狙っているらしい。このホールから金を受け取っている証拠をつかんで非合法的な暴力団の資金集めの一つを^{あは}発したい腹なのだろう。それは白木会を排除することに役立つにちがいない。

浩治はその日、経営者の藤田のいない留守に、事務所から白木会の領収書数十枚を抜きとり、中島県議に届けるようにと、由美子に手渡した。

その翌日、由美子は街で泰子に呼び止められた。

「ちょっと付き合ってほしいの」

泰子は、さりげなく切り出した。

「どこへ行くの？」

「ついこの先を曲がったところなの」

由美子は、さして気にとめなかった。角を曲がって、豪荘な邸宅が建っている閑静な通りに入ったとき、背後から一台の車が二人を追いつき、五、六米先で止まった。関本が運

転していた。

「あら、関本さん」

泰子が叫んだ。関本は車から降りて近付いてきた。

「いいところで会った。ちょっとこの人に用があるんだ。君も一緒に来てほしい」

という関本に、泰子は笑って答えた。

「ええ、いいわよ」

由美子は狼狽した。

「あの車を止めたところが、会長のお宅なんですがね。会長がぜひ、あなたに会いたいといわれるものだから」

関本が意外に丁寧な口調でいうものだから由美子は断り切れなかった。

門から玄関までかなり長い敷石で、庭はよく手入れがゆきわたっていた。玄関を入るとまるで人を威圧するかのよう、等身大の鎧が飾ってあった。

「お帰りなさい」

怪しげな風体の組員が、磨き上げられた床に片手をついて、関本を出迎えた。洋風の応接間に通され、ソファに腰を降ろすと、さっきの男がやって来て、うやうやしくお茶をおいてから出ていった。関本は姿を現わさなかった。

「遅いわね。いつまで待たせるのかしら。ちよっと見てくるわ」

そういつて出ていったきり、いつまでたっても泰子も部屋に戻ってこなかった。

無気味な不安が由美子を襲った。

すると、隣の部屋かどこかで、女の声がする。低い押しつぶした声だ。泣いているようでもあり、呻いているようでもあった。

泰子なのだろうか。まさか——。由美子の不安は募った。

(七)

暫くしてやっと、白木が入ってきた。精悍な感じのする、でっぷり太った赤ら顔の男だった。背後に関本と、それから案内に出てきた男が、じっと立っていた。

「わざわざお越し願ってどうも。あなたが私のことで、何か感違ひしていると若い者がいうものだから」

「何のことでしょう。私にはちっとも……」

いしかける由美子に関本が口をはさんだ。

「そうしらばくれちゃ困りますぜ。中島議員のところへ、あんたが出かけて行ったことは分かっているんだから」

「え、——」

由美子は声を呑んだ。

「あんたがダンスの先生に肩入れするのは勝手だが、妙な真似は止した方がいいぜ。一体何をしゃべりに行ったんだね」

「何も、何も別に」

「じゃ、なぜ行った」

「それは……」

いしかけて由美子は口をつぐんだ。説明して分かる相手ではない。それに下手に説明しては、かえってまずいことになりそうだ。

「切符を、演劇の切符を買ってもらおうと思つて……」

由美子は、咄嗟に考えた嘘でごまかした。

「そうですか。わかりました」

それまで黙っていた白木が、意外にやさしげな口調でいった。

が、そのとき、突然悲鳴といっしょに、女が転がり込んできた。何ということだ。後手に縛られ猿轡をはめられた女は全裸だった。

前かがみに膝をついて、女は何か訴えているが、声にならない。

「とつてやれ」

白木が命じた。猿轡が外されると、女はふ——と大きく乳房まで脹らませるように呼吸をした。

「水、水をください。お願い、お願いです」
女は嘆願した。

「昨日から、何もやってないんですが、まだまだもつでしょう」

関本が白木にいった。

「うん」

白木は口元にうす笑いを浮かべて肯いた。

「おい、あいつはちゃんと会長に詫びを入れたぞ」

関本が女にいった。

「じゃ、もう……」

女は怯えた目で、関本を見上げた。

「ああ、そうよ。指をつめてけりをつけた」

「え、指を——」

「そうさ。お前も、会長に目をかけてもらっていながら浮気心を起こすとは何て料見だ。

いつまでもシラを切っていねえで、奴とできていましたと、正直に白状したらどうだ」

「……」

「ちえ、ずうずうしいあまだ」

「水、水をください。あ、あの人とは何もなかったんです。ほんとに……」

女は空の唾を飲み込んで、からからの喉を動かした。

「じゃあ、水を飲ましてやれ、たっぷりと。」

その庭の井戸の水をな」

白木は無表情にいった。

縄尻を引っばられて、庭に放り出された女を、関本と組員二人が左右から押えつけて両足を縛った。長い綱が、井戸の上の滑車に通され、その先端は女の両足を緊縛した縄に結びつけられた。

荒くれ男が綱を引き絞ると、女の裸身は逆さまに宙に浮いた。

「お、お願い。助けて」

女は哀願した。顔は見る間に紅潮し、髪は乱れて垂れ、後手に緊縛されているため突き出た乳房は、じりじりと加わる圧力に耐えかねて、ぶるぶると震え揺れた。

「さあ飲め。お前が飲みたがっている水を、たっぷりとな」

男が綱をゆるめると、女の位置が下がり、じりじりと井戸の中に降ろされた。

「あ、あ」

逆さになった鼻や口に非情の水が迫ったらしく女の悲鳴が井戸枠に反響して聞こえた。

ぎいぎい滑車が音をたてて再び引き上げられると、女はずぶ濡れの上半身を揺すぶり、雫の滴る顔はひきつって、ぐらぐら力なく頭を振るばかりだった。

ときには目をおおい、ときには恐る恐る見ていた由美子は、この凄惨な私刑が、次には自分の身にふりかかる前触れのように思えて不安と同時に、キューツと胸の奥が波打つのを覚えた。

「もう許して。お、お願い」

女は力をふり絞って叫んだが、情容赦なく滑車が軋んで、こんどは女体のほとんど全部が水の中に沈んだらしい。

「う、う、う」

女は悲鳴というよりは、動物の叫びに似た声で呻き、その声にならない声が井戸の中にこだまして、無気味な響きを残した。

いつ止まるともなく、水の中に漬けられては引き上げられるうちに、女のむき出しの腹部は、次第に飲んだ水で脹れるよりほかなかった。

女はやがて声も立てなくなり、綱を引き上げられても、ぐったりとして身体をほとんど動かさなくなった。

「会長、だいぶ参ったようです。納屋にでも放り込んでおきましようか」

関本がいった。

「よし。いいだろう」

白木はそれから由美子の方に向き直った。

「いやあ、とんだところをお見せした。若い者は気が荒いもんだから。あなたのことは、若い者が誤解しておったということですね。お引きとり下さって結構です」

白木はこともなげにいつて、さっさと部屋を出ていった。

由美子がほっとして帰ろうとすると、関本が戻ってきた。

「さあ、こちらへ」

由美子はいって行ったが、連れて行かれたのは玄関ではなく裏口の木戸で、そこからも関本は由美子に付きまとい離れず隣接した倉庫風の建物の一室に連行されてしまった。

(八)

「さあ、出して貰おうか」

関本が由美子にいった。

「何をですか」

「しらばくれちゃ、いけないぜ。会長を納得させたつもりだろうが、ホールの事務所から盗み出したものがあるはずだ」

「えッ！」

由美子は、はっと息を呑んだ。どこから洩れたのか、白木会の領収書を浩治から預っていることまで、相手に知られているのだ。

「知りません。さっきもいった通りです。何も事務所から持ち出したりしていません」

「そうか。それなら調べてみるまでだ」

関本は、すばやく由美子に襲いかかった。

由美子は大声で喚き拒んだが、男たちがさらに二人やって来て、着ているものを次々に剥ぎ取られ、瞬く間に薄いパンティー一枚にさられてしまった。

「そいつもとってしまえ。女がものを隠すのは、だいたい相場が決ってやがる。へへへ」

野卑な笑いを浮かべた男の脂ぎった顔が近づいたとき、由美子は愕然とした。ホールでのめごととき、包丁を持って暴れたあの顔面神経痛の男だった。

やっぱりグルだったのか。すべてが暴力団の資金源を拡張するたくらみだったのだ。由美子は、自分が畏に落ちたことを悟った。

「さあ、せいぜい上手に踊ってみろ」

男はパンティーを引き裂いた。

「書類をどこにやったか、はやくいっちまいな。さもなきゃあ、身体にきくまでだが」

「知りません。私は何も……」

由美子は、たとえ先程の女のような目に合わされようとも、浩治のために、飽くまで知らないといい張ろうと心に誓った。

男たちは由美子の両手を縛り、その縄尻を鴨居にかけた。ぐいぐい縄が引かれ、腕が伸び切って、爪先立つまでになった。

「踊るんだ。その恰好で、腰をふって」

由美子は両脚をびったりくっつけて、必死に最後のむなしい抵抗をした。腕は肩の付け根からもぎ取られるほど、上方に引き上げられ、小さい乳房は緊張に震えた。背後から関本の振る鞭が、由美子の柔肌にとんだ。

「あ、あ」

閃光のように身体中をかけ抜ける痛み、由美子は歯をくいしばった。

「どうした。腰を回して踊ってみろ」

由美子は仕方なく腰をわずかに動かした。

「脚が少しも動いていないじゃないか」

両脚を頑なに閉じたままの由美子に、男たちはさらに羞恥のポーズを強制した。関本はどこからか画鋲を持って来て、由美子のトウで立っている両足の間一面にばらまいた。

足を降ろそうとすれば、どうしても画鋲が足の裏に突き刺さってしまう。由美子の脚は画鋲を避けておろおろし、次第に広げないわけにはいかなかった。

しかもその姿で、男たちの野卑な好奇心を満足させるための踊りを見せねばならない。

由美子の目から、涙が頬をつたって落ちた。激しく宙に唸る鞭に追い立てられ、由美子の裸身は、あやしい曲線を描いておどった。「思ったよりしぶといあまだ。逆さにしな」関本がどなった。

「やめて、お願い、やめて」

つい先程見た女の苦痛に歪んだ顔が頭に浮かんだ。——ああ、あの同じ責苦が自分に加えられようとしているのだ。由美子は肌が鞭のあとで真赤に焼けつくようなのに、身体の中を冷たい氷のようなものが通り抜けるのを覚えた。何か、いよいよだわ、という感じが閃いた。

引き挙げられていた縄がゆるめられると、由美子はぐったりと床に倒れたが、さらに今度は後手にきびしく縛り上げられ、両足を別々に緊縛した長い縄が鴨居にかけられた。

男たち二人がそれぞれの縄を引き絞ると、由美子の両脚は別々に引かれ、無残にも逆さ吊りで宙に浮いた。

心臓を押し潰すかのような圧迫感に、由美子は口を力なく開けて、ぜいぜい苦しい息をはいた。

「ただぶら下っているのは芸のない話だぜ。ダンサーは伴奏がなくちゃ感じが出ない

らしい。おい、レコードを持ってきたな」

関本が大きな声で命じた。

すぐ隣室から携帯用のレコードプレーヤーを持って入ってきた女を見て、由美子は目を見張った。泰子なのだ。心のどこかで、いくらでも責めなさい、耐えてみせるから……という気持は、あったようだが、このはずかし、あさましい姿を、ライバルである同性の泰子に見られることは、何よりも由美子には耐えられぬことだった。

「まあ、いやらしい恰好ね。それにヒップばかり大きくて、おっぱいなんて、まるでないじゃない」

泰子の言葉は由美子の心を突き刺した。残忍な言葉ばかりではなく、由美子は逆さになった乳房から腹部に、マニキュアした真赤な爪の攻撃を受け、泰子のライバル意識がいかに執拗で、残酷なものであるかをじかに知らされた。爪に噛まれた肌がカッカと火を噴く想いだった。

喧噪なレコードの曲が鳴り出し、由美子は再び野獣に似た男たちの振る鞭のもと、極限の体位を無理に律動させねばならなかった。

脂汗が由美子の全身の毛穴から噴き出し、どろどろになって流れ、もうろうとしてきた

意識の中で、ふとそれはダンスの練習のとき、あの浩治に接したさまざまな感覚の記憶に繋がった。

『あの人としっかり結ばれているんだわ、きつと。私のこの肌がそれを知っているもの』由美子のぼんやりと薄れゆく痛覚のかなたに浩治が現われて鞭を振り降ろしてくれた。由美子は悲鳴とも歓声ともつかぬ呻きを挙げた。そして総ての知覚が暗黒の中に消えた。

八年後、東京の日本武道館で世界ダンス選手権大会が開かれ、各国の選手が絢爛の演技を競った。

由美子はあれきり会っていない浩治に、ひょっとして再会できるかもしれないという漠然とした期待を抱いた。しかし出場選手の中にも、会場の観衆の中にも浩治を見出せなかった。由美子は、あのことがあってから、自ら浩治を離れて上京し、あるサラリーマンと結婚したが、由美子の意識の奥深く潜在し燦ぶり続ける奇態な欲望は、彼女をいつも満たされないまま、離婚にまで追いこんだ。

遠く流れ去った「時」は、あの奇型の舞踏と、説明のつかない陶酔の感覚だけを、由美子の心と素肌に刻み残していた。

女責め図絵の系譜

ストリップ残酷物語

文と絵

南

彦造

その一

私が、はじめてストリップ・ショウなるものを実際に見たのは敗戦前——すなわち（昭和十七年）一九四二年であった。

その頃の日本は、太平洋戦争の緒戦での勝利に酔い痺れていた時で、私は、当時の南方総軍（陸軍の総元締）傘下の映画報道員だったので昭南島（いまのシンガポール）の宿舎にいた。

昭南島には、二つの歓楽街があった。一つを「大世界」、他の一つを「新世界」と云ったアミューズメントセンターで、市街の一区が、ちょうど、東京の後楽園遊園地のようになっていて、遊戯場あり、ダンスホールあり、ビヤガーデン、野外喫茶場あり、洋品店あり靴屋ありなどで、遊びながら買物も楽しめる

といった一大アミューズメントセンターで、更に玉突き場、コリントゲームなどのギャンブル的な球技場もありで、とにかく、夕暮のスコール一過の涼しい南国の夜は、南十字星の下でフィーリングなレジャーを楽しむ人々の群で賑わった。

私も、友人に誘われて、夜になると涼を求めながら、この歓楽区での憩いの一時に夜の更けるのも忘れたあの頃が懐かしい。

私は、まだハイティーンだったので好奇心が強く特に「性」に関する諸問題では、悩みもし、また秘かに危険でない限りの「探訪」なども悪友たちと一緒に行ったものだった。

その一つに「ストリップ・ショウ見物」なるものがある。ストリップ（？）と云ってもいまの日本にあるような立派なショウとかドラマ的なものではなく、表の看板に曰く入透

明人間「レントゲン写真」Vと云ったような猟奇的な、見出しの辞句や絵が、どぎつく描かれていて、木戸口で、前の椅子には、ひなびた華僑の老人が、番に立ち、若い男とか未成年と思われるような小さな少年などが、客の呼び込みに夢中であった。

木戸銭は、日本金に換算すれば二十銭とか三十銭たらずの安いもので（当時、五円も出せば、立派な鰐皮のバンドが買えた）私たちは、一杯のコーヒーでも飲んだつもりで入場したものだ。

だが、ストリップ劇場と云っても、テント張りの鰻の寝床のような場内に入れば、先客が五、六人（華僑、現地人など）だが粗末な椅子に腰を下ろして居り、キャパシティは三十名（？）程度——まるで旅客機の座席さながら、縦長に四筋ほど奥の舞台から入口の木戸の辺りまでつらなっていた。

あまり前の方（かぶりつき）では日本人として、恥かしかったので適当な中間の位置に腰を下ろすと、暫く満席になるまで待たされた。

やや、八分入りに近い頃——ベルが鳴って入口との仕切りの黒カーテンが閉じ、同時に場内の電灯が消え、レコード音楽の怪しげな旋律が流れ始めると、正面（一坪ほどの）舞台が仄明るくなった。

すると、妙齡の中国服のユーラシアンと思



故伊藤晴雨氏は、平中愛蔵も、情心りある人
描いた、其の如く、三つ、ついでに
て、ついでに、ついでに、ついでに、ついでに
ついでに、ついでに、ついでに、ついでに、ついでに

われる、美しい顔立の混血娘が立っていて、踊りが始った。踊ると云っても狭い舞台でのこと——あまり動かず、なるべく舞台の真ん中で、身振り、手振りよろしくリズムに合せてスネークしているだけだった。しかし、その見事に均斉のとれた肢体は、いまで云う八頭身。肌はとくだように青白く、眼を見張るばかりのポリウムたっぷり、たわわな双の乳房は、やはりこの種の売物で——思わずウンと見惚れるほどの素晴らしさだった。

やがて、一曲すむと二曲目に入り、——皮を剥ぐようにスリと中国服を脱ぐ。下着はピンクのシュミーズ、純白のコルセット、ブ

ズで、たった一枚のパンティにも手が移り、脱ぎに掛かると舞台は再び暗転して彼女の肢体のシャドウだけが薄いカーテン越しに映り全裸の黒い影が暫く、踊ったりスネークした後で、幕という構成だった。

私は、なるほど「レントゲン写真」かと感心したり、流石に素裸はシャドウにしたあたり、うまい演出だと、彼女の全裸を、まともに拝めなかったのを残念がったり(?)であったが、当時の日本では見られなかった時代でのことではあり、あれから、三十年——あんなチャチなストリップ・ショウでも、結構満足した、その頃を想い出し、懐しくてたま

ふさね

ラジャーをはずしお臍の見える短いパンティ姿になると、豊かな双の乳房を曲に合わせグルグルりと回転させる。更にローリング、ピッチングである。巨大なお尻を熾惑的に躍動させたり、セクシーに突っぱたりで——堪能せよ!と云わんばかりのポーズだったが、

らない。

そのストリップにも見飽きる頃——サドシヨウとかマゾシヨウなどと云う、秘密シヨウの穴場を見つけ、抗日テロ団に狙われる危険を覚悟で、見物に行ったりもした。

美しい姑娘を逆吊りにして股裂きにしたり焼燬を当てる火刑とか、海老縛り……など実演とは云え、真実に近い迫力だったのを記憶している。故伊藤晴雨氏は「……年甲斐もなく、決心の責め場を描いていると、若者以上に興奮して、つい漏らして終うので……云々」と、どこかの雑誌に書いて居られたが……迫真力のある演技は、責められる女が美しく、それが処女であれば処女だけに、人妻であれば人妻だけに……それなりの魅惑的な姿態を観客の心に訴えるものである——と実地に知り、見たい欲望で病みつきとなり、危険を冒して毎晩のように通い続けたものだった。

当時の愛好の仲間達は、戦禍の犠牲になつて終い、生き残ったのは私だけである。

その二

終戦で復員した私は、軍閥の片棒を担いだ形になった映画報道の仕事から解放され、思い切ってドラマの世界に飛び込んだ。

しかし、先輩、諸先生曰く「お前のような世間知らずに、ドラマのフィクションは描けない。もう少し、色の道を修行せよ」との御

託言だった。

実際、私は日本娘との恋愛経験もなかったし、もっぱら、異人相手の交際が多かった。それも戦時下でのこと、東亜の盟主としてのプライド專一に生きて来なければならなかったのだから、勿論恋愛も得恋の経験もない。《失恋ぐらいしなけりゃ、ものにならん》とけしかけられ、ままよ！ 修行のためなりと東京は浅草六区のストリップ劇場の宣伝部へとはまり込んだ。

舞台の奈落の下にある物置き部屋のような宣伝部の上では、蹴ったり、はねたり踊ったりするヌードスターたちの、騒音を耳にしながら、次週上演のポスターやイラストレーション、絵看板の構成の手伝い、字書き（絵書きではない）字専門の宣伝社の出張員のためにドロ絵具をねって準備をしてやったり、ニカワをといたりで、何とか下働きも身につき始めた頃——やっとなり踊り子さんたちとも親しくなり言葉をかわすようになった。

彼女たち（踊り子）の生活は、やはり娑婆の人たちとは別個で理解しにくいほどの、複雑さであり、私を含めて三名の宣伝部員は、いやがおうでも、眼にし、耳にする噂とか、スキャンダルなどは、到底、週刊誌的な悠暢さで想像出来るものではなく、時々……たずねて来る記者とか、レポーターなどに材料などを提供しているうちに、次第に彼女たちの

生活に共鳴したり、批判したり、進んで協力者になったりで、結構、楽しみながら勉強になった。

その頃の印象的な想い出の中には、奇巧的な内容のエピソードも数々ある。

その三

R座の人気番組には、きまって登場する、《残酷ショウ》なるものがあつた。普通の刺戟ではどうにもならない人々のために……と云えば大袈裟だが、一般にサド・マゾ劇は、観客の好む演じ物で評判がよかったからだが……たとえばアルジェリアの動乱はなばなしき頃には、当時の週刊誌などを賑わした所謂アルジェリアに於けるフランス人婦女子の輪姦事件などが、すぐとりあげられ、均斉のとれた美しい女体を、縛り上げたり、ゴムホースの先で突きまわったり、撥ぐったり、電気責めにかけてたり、はては舞台の左右から荒縄で引いて「股裂きの惨刑」とか——とにかく現地の事件を、その儘に再現したりしたのでかぶりつきの若い者などは、思わず興奮して悲鳴をあげて喚いたり……とにかくエキサイトする男の呼吸が渦のように沸いた。

そうした演じ物の、絵看板に使うスチール写真の撮影が、深夜の立台で行われた。

ショウなどとは違って、仲間同志の立ち合いなので、馴れ合いのせい、スターたちも

全裸になって終う。もっとも、支配人とか、カメラマンの注文もあって、全裸で撮った方が使い道が広く、なまはんかツンパ（パンツの逆語）などをつけていては全裸的効果がなく、リアルな写真にならないからでもある。

その日のモデルはA子。彼女はしもぶくれの日本的な顔立ちの十六才の少女だった。

まだ現役で、何処かの舞台で活躍中だと思うから特に源氏名は秘すが、むっちり肉のついた円柱のような太股が、とても十六才の処女（？）とは思われぬ豊満さで、勿論、双の乳房の隆起も、並外れた大きさだった。

その彼女が、アルジェリア兵のために逆吊りに天井から吊り上げられて、揺れている場面——という構成で、早速——彼女がスタッフ連中に、後手に両腕を縛られ、足首は別々の縄で、片方ずつ縛って、天井の滑車が、するすると引きあげられた。ながながと舞台の床に横たわっていた彼女の足首から、次第に天井の方から逆しまに荒縄が引き上がって行く——動力は幕引きのモーターだから強力に引っぱり上げられるわけだ。

ブーン！ と云う電気の唸りで、彼女の肢体が一回転した。遠慮のないモーターの力が彼女の足首を引きあげ、左右に大の字型に吊り上げた。

途端に「痛ッ、痛いッ、いたた……」と金切声の悲鳴——続いて「こわいッ、こわいッ

「ヒーツ」と洩れる泣き声——だが……モーターだから遠慮などするはずはない。ようやく停止したが、彼女の肉体はその俛、中天高く揺れているのだった。

「ヒーツ、ヒーツ」と彼女は空中で動けぬ肉体を弓なりに反らせたり、はてはエビのように曲げたりして、少しでも苦痛からのがれようと悶え「やめてエー」と泣き続けた。

最初は、それほどでもない、たかをくくって吊られたらしいのだが、実際には、やはり恐怖の刑罰だったのである。

私は、真実の股吊り——を眺める想いだった。そして異常な彼女の悲鳴に妙な快感を覚えた。彼女の肉体的な本当の悲鳴には、抉るような魂の奔りがあった。

実際の責苦に喘いだものだけがあげる無意識な叫びほど、鋭く肺腑を抉るものはない。——と思った。それと同時に、動力の強い力で引伸ばされた見事な緊張も、イメージに鮮かだ。

アルジェリアの女の拷問を、私はいやがうえにも連想した。初日から絵看板の前には、群衆が好奇の眼で囁集した。無論劇場は『大入り』だった。

その四

E座のB嬢はエキゾチックなマスクとダイナミックな洋舞で人気者だった。

彼女は混血児だとも伝えられたが、明確な根拠はない。彼女には飲んだくれの夫があったそうだが、浅草界隈のテキ屋の一味だとも云われ、誰もが恐れ、男の話題を避けた。彼女に、新しいボーイが出来た。新入りのライトマンだった。

うぶで劇場ずれしていない、新鮮な果実のようなこの少年に、男ですりへらした肉体を鞭打ち、ステージでは生活だけの目的で踊り続けていた彼女は、何故か引き込まれるような恋を感じたらしいのだ。彼女は、この少年を愛するようになった。少年は舞台や楽屋でいやおうなく露骨に見る彼女の見事な肉体の虜になっていたようだが、一度愛されてからは夢中で彼女を求めるようになったらしい。

彼女の夫は、都合のよい時だけ金銭をせびりに楽屋に現われるのだが、少年との交渉を知ると、こういう男の常で、彼女を縛りあげると激しく責めたてた。つまり、どうしても逃げることは出来ないのだ、という絆を女の肉体の上に刻み込まねばならない、という考えからだろうが、彼女の豊かな肉体が腫れ上がり、逆手に折り曲げられた背骨が、ギシギシと弓のように鳴り続けるほど、彼のようなテキ屋の私刑はすさまじいものだが、決して女の体を屑物にして終うような野暮な痛めつけ方はしないのだった。恥かしくて逃げ出せないように、先ず裸にして、絶対にトイレには

行かせないのだそう。用をたしたければ、男の世話になり、男の見ている前で排泄させられるのだ。

それでも新しい男と関係が続けると云うのなら、女の最も恥かしい部分に、自分だけの艶消しになるような酷い文句の「刺青」を刻み込むのである。どんな男でも、一瞬、鋒先がにぶって全然用をたさなくなるからだ。したがって、如何に悪どい「刺青」であるかわかろうと云うもの——打つ、叩くなどは序の口なのだ。だが、彼女は最後まで、泣き声をあげ許しを乞わなかった……と、以上は警察に於ける調書の後日譚だが、如何に彼女が夫との生活に苦しみ、清算したかったか……と思えば、こうした悲しい女の心情は哀れと云うほかはない。

彼女と少年との結びつきが、ますます強くなったので、男は少年の私刑を計画——塩酸をオレンジジュースに混入——彼女は事情を知って、少年の身代りとなった。彼女はこの毒入りジュースを飲み救急病院に搬ばれた。

彼女は咽喉から胃にかけて、真赤に焼けただれ、幸い生命はとりとめたが、声帯を侵され、啞同然となって終った。踊るには差支えないが、不具者になった彼女は、これからどうして生きるのか(？)兇行の夫は「殺人未遂」で逮捕されたが、当時の新聞雑誌を賑わしたセンセーショナルな事件だ。

はなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへび

連載小説

花

はな

2

蛇

へび

團
鬼
六

續篇（第七十回）

裸
芸
者

静子夫人の個人財産を全部没収して自分のものにしてくれた伊沢をこれ以上じらしておくのは可哀そうだと千代が云い出した。

とにかく伊沢は静子夫人に恋い焦がれてゐるのだ。すっきり思いを遂げさせてやらねば気が変になるかも知れない、と千代は川田の耳に口を寄せて小さく笑った。

「じゃ、色々と骨折って下さった伊沢先生に感謝を送る意味で、今夜はこの場で静子をお譲り致しましょう」

川田がそう云うと伊沢は顔面をくずずして何

とも云えぬ嬉しそうな表情になる。

「珠江との関係は明日の朝、結んで頂く事にするぜ。いいな」

鬼源は、深い翳を含めた美しい瞳を氣弱にしばたたかせている静子夫人の頬を指で突きながら云った。

「折原の奥様はこの部屋へ残って頂いてもう少し俺達がお相手してあげようじゃないか」

川田は柱につながれている珠江夫人の脛のあたりを指ではじくのだ。

珠江夫人は相次ぐ暴虐の波風に心身ともに打碎かれてしまったように象牙色に光る冷たく冴えた片頬にはつれ毛をなびかせたまま、ぐったりと首を垂れさせている。

静子夫人の縄尻をとった千代はそれを伊沢の手に渡して

「それじゃ先生。今夜はどうぞ、たっぷりとお遊びになって下さい。お部屋まで、私がご案内致しますわ」

と云うと先に立つて歩き出したのである。

静子夫人はその優美な背を伊沢の手で抱きしめられる。

「さ、奥さん、約束を果たしてもらおう時が来たようですな」

伊沢は夫人の頬に自分の頬を押しつけていき、縄に緊め上げられた豊満な夫人の乳房に手を回しかけるのだ。

美しい眉根を寄せながら静子夫人は

「お願いです。しばらく待って——」

と悲しげな声を出すと小さくすすり上げて
いる珠江夫人の方へ体を向けるのである。

「——折原の奥様、どのような責め苦に合っ
ても、死んだつもりになって耐えて下さい。
千原家のお嬢様も、必ず生き抜いて下さる筈
ですわ。必ず、そのうちに救われる日が来ま
す。希望だけはお捨てにならないで」

せめてもの慰めのつもりで涙ぐみながらそ
う云う静子夫人であつたが、珠江夫人も涙ぐ
んだ美しい瞳をそっと開き、象牙色の頬を物
悲しげにそよがせながら小さくうなずいて見
せるのだ。

「さ、行こうぜ。明日はまた朝から二人とも
逢えるんじゃないか」

鬼源は静子夫人の肩をたたく。

伊沢の寝室は二階の廊下を二つばかり曲つ
た一番奥にある部屋で二間つづきの立派な日
本間であつた。

小さな方の部屋には艶めかしい友禅の夜具
が敷かれ、水差しや煙草盆などが枕元に配置
され、それが小さなスタンドの淡い光に、ぼ
んやりと写し出されている。

静子夫人は、部屋へ引き立てられると千代
に命じられて寝室の小さな床の間の柱を背に

して正座した。

静子夫人の縄尻を柱につなぎながら千代は
さも楽しそうに云うのだ。

「いいわね。伊沢先生はあんたの財産を全部
私の所有物にしてくれた、私にとっちゃ大恩
のある人なんだよ。今夜は特別にうんとサー
ビスしてあげて頂戴ね」

隣の座敷では伊沢と鬼源が酒を飲み始めた
らしく何か大声で笑い合っている。

千代は、ハンドバッグの中から櫛を取り出
して乱れた夫人の髪をすき上げ、馴れた手つ
きで化粧していく。

口紅を取り出して千代が夫人の頬に手をか
けると、夫人はゆっくりと眼を閉ざし、そつ
と花のような唇を押し出して千代の手で紅を
引かれていくのだ。

「支度の方はどうですかね、千代夫人」

酒気を帯びた鬼源が入って来た。

艶やかな乳色のうなじや肩、麻縄に緊め上
げられた乳房のあたりまで、千代の手で香水
をふりかけられている静子夫人を見た鬼源は
満足そうに眼を細めて、その場にあぐらを組
んだ。

いささか痩せた感じはあるけれど、胸も腰
も太腿も磨きがかかったように色っぽく発達

した静子夫人の肢態美を、さも頼もしげに見
つめる鬼源は

「近頃じゃ、静子夫人の美しさがまた一段と
輝き出したようだとか社長も御満悦だぜ。あと
は客に対するサービス精神だ。何度も云った
事だが、客を有頂天にさせてくれりゃ俺達の
商売が繁昌するって事になる。そろそろいい
客筋だけを選んで奥さんに商売をして頂くつ
もりだが、そのためにもうんと勉強してくれ
なきゃ困るぜ」

千代も含み笑いしながら

「とりわけ、今夜の伊沢先生は大事に扱って
頂戴ね。しつこいので有名な人なんだけど、
奥様のようなベテランになれば上手にさばい
て下さる事だと思ふわ」

千代は押入れを開けて枕を二つ取り出し、
新しいカバーに取りかえて夜具の上に並べて
配置すると、懐からチリ紙を取り出して敷布
団の下へそっと入れるなど、まるで遣り手婆
みたいな、いそいそと動き廻るのだ。

それを見ていた鬼源は、どっこいしょ、と
立ち上り

「井沢先生は、今夜は水入らずで奥様を調教
させてくれないか、とおっしゃってるんだが
ねえ」

と千代に告げる。

先程、夫人がシスターボーイに調教されているのを見て心がときめき、伊沢はその手伝いをかって出たが、見た目ほど簡単にはゆかず、夫人に叱られた事が口惜しく、今度は自分一人の力で、も一度挑戦してみたい——と伊沢は鬼源に話したというのだ。

「面白いじゃない。色事師としての面目にかけて伊沢先生は奥様に戦を挑むというのよ」千代は床の間の柱につながれてぴっちり正座している静子夫人の端正で優雅な横顔を面白そうに見つめながら云った。

「それじゃ、一応、用意だけしておこうか」と鬼源は戸袋を開けてロープを取り出すと夜具の上に踏台を乗せ、酔った足をフラフラさせながら工事にかかり出した。

調教を受けるためのポーズを夜具に横臥した静子夫人にとらせるため、天井に鉄の鉈を鬼源は打ちこみ、それにロープをつなぎ出したのである。

「じゃ、ここの仕度は鬼源さんに任して、一寸、伊沢先生のお酒のお相手をしてくるわ。さ、奥様、行きましょう」

千代はまた柱から夫人をつないだ縄尻だけを解いて立ち上らせる。

夫人は眼の前の夜具の上で鬼源がそんな仕事にとりかかっているのを見ても狼狽を見せたりはせず、やや蒼味を帯びた冷たい表情のまま千代に背を押されて伊沢のいる次の間へ静かに足を運んで行くのだった。

一人でウイスキーを飲んでいた伊沢は、千代に引き立てられた静子夫人が入って来るとえびす顔になって、「さあさあ、奥様、ここへどうぞ」と自分の隣へ座布団を置く。

「この女は裸芸者なんですよ。そんな気を使っちゃ困りますわ。手前共はしつけをきびしくしているのですからね」

千代は笑いながらそう云うと座布団を押しやって、畳の上へ緊縛された全裸の静子夫人を坐らせた。

かなり酩酊している伊沢は早速、夫人の柔軟な肩に手をかけて

「そう固くならず、僕のようにあぐらでも組んだらどうだね、奥さん」

すると千代が夫人の乳首のあたりを指で押して

「先生のおっしゃる通りにするのよ。全くこの女ったら、おしとやか過ぎて困るわ」

邪険に耳を千代に引っぱられたりして夫人は腰を動かし、云われるままに畳に尻もちをつく。

「こういう時は、こうするんだったね」

伊沢はズボンのバンドを抜いて夫人の足首を交錯させてキリキリ縛りつける。

「大分、要領がおわかりになったようね」

千代は伊沢の手つきを見て笑い、

「今夜は先生に骨身にこたえる程、泣かせてほしいわ、とこの奥様は云ってるのですよ。」

ですから、先生もそのおつもりで大いにがんばって頂かなきゃ」

千代は伊沢に注がれたウイスキーをゆっくり喉へ流しこみながら、ますます遣り手婆みたいな口調になっていく。

綺麗な眉をわずかに曇らせて、何か物思いに浸るのかぼんやりと卓の上へ視線を向けている静子夫人の匂うような美しい横顔を、伊沢は気もそぞろになって見つめている。

「ちよいと、そう借りて来た猫みたいにおとなしくなっちゃ困るじゃないの」

千代は夫人の形のいい鼻先を指ではじいて「伊沢先生にお願いしておきますが、これから森田組ではお遊びになるお客様に女の点数をつけて頂く事になりましたの。お客様に対する接待が八十点以下の時はその翌日は食事や休憩抜きで終日激しい調教を受けねばならな

い。でも、九十点以上の点をお客がつけた場合、次の日の調教は休ませてもらえる。こういう事に取りきめましたから、一つ、よろしくお願い致しますわ」

千代は得意になってペラペラしゃべり、再び、険のある表情で静子夫人を見つめるのだった。

「奥様もわかったわね。楽をしようと思うなら、お客様にいい点数をつけてもらえるよう心がける事ね」

襖が開いて次の間から鬼源が出て来た。

「へい、用意も万端、整いましたようで」

鬼源の示す隣の間の夜具にはその両端に夫人の両肢をつなぎ止めるための皮紐が細工されてあったし、夜具の上には、これもまた夫人の両肢を吊り上げるための二本のロープが天井より垂れ下がっている。

ふと、その光景を眼にした静子夫人は、優雅な白い両頬をほんのりと朱に染めて小さく頭を垂れてしまうのだ。

「春太郎達に調教される奥様を見て、伊沢先生も真似がしたくなったのですって。素直にお受けするのよ」

千代は、夫人にそう云ってから、卓の横にある一升瓶を取り上げて鬼源のコップになり

なみと注ぐ。

「どうも御苦労だったわね。さ、それを一杯やったら、邪魔者の私達はこれで退散致しますよう」

「へい、どうも、こりゃ御馳走さんで」

鬼源は、うまそうに一息に飲み乾して、コップの滴を切ると、それを静子夫人の前に置いた。

「お前さんも一杯、御馳走になりなよ。女は少し酒を飲んだ方が色気が滲むってもんだ」

「おっと、そいつは迂闊だった」

伊沢はあわててコップの中に酒を注ぐ。

「さ、飲ませてあげよう」

伊沢は夫人の肩を抱き寄せて、コップを夫人の紅唇に押しつける。

「——頂くわ。お願い、今夜は静子をうんと酔わせて頂戴」

ようやく心のふんぎりをつけたように夫人は白く冴えた美しい顔を伊沢の方に向け、かな微笑を口元に浮かべると、ゆっくりと眼を閉じ合わせ、伊沢の押しつけるコップ酒に唇をつけるのだ。

「こりゃ見事だ」

静子夫人が一気にコップの酒を飲み乾したので伊沢はホクホクした表情になる。

「それじゃ先生、私達はこの辺で」

千代は鬼源をうながして立ち上ったが一杯のコップ酒に、もう桜色にポーッと上気して伊沢の肩に額を押しつけている静子夫人を見ると、近寄って柔軟な肩に手をかける。

「ホホホ、今夜の奥様はとても美しいわ。きつと伊沢先生も熱烈に愛して下さると思うのよ。うんと甘えて楽しい一夜を送って頂戴」

千代と鬼源がようやく部屋から出て行くと伊沢はホッとしたように立ち上り、ドアの鍵をかける。

そして、卓に額を押しつけて柔らかく肩で息づく夫人の背に手をかけて、ひっぺ返すように上体を起こさせ、強く抱きしめると「これでようやく二人きりになれたね」

そして、伊沢は夫人の美しい顔を両手ではさむように押さえると強引に唇を押しつけていく。

ほんのりと桜色に上気している夫人はためらわず、ぴったりと伊沢の口に唇を合わせるのだ。

うっとり眼を閉ざした夫人は、甘く濡れた舌の先端を伊沢の口中へ差し入れて静かに愛撫しながら、次に伊沢の舌を柔らかく吸いこむ。そして、再び、舌を伊沢の口に深く差

し入れて、舌と舌をからませ、そっと離れさせていくなど、伊沢も随分と女遊びはしたがこれ程、接吻の上手な女に出喰わした経験はなく完全に心まで痺れてしまったのである。

鬼源は夫人のフランス式の技巧はこの道の玄人でも太刀打ち出来ぬ程、うまいものだといったが、たしかにそうかも知れぬと、火のように激しく、また、しっとりとした優雅さを混えた夫人の接吻を受けて、伊沢は思うのだった。

伊沢は浮き立つような気分で、再び、コップに酒を注ぐとそれを口一杯に頬張り、口うつしで夫人に酒を飲ませた。

夫人はやや顔を傾斜させてぴたりと伊沢の口を唇でふさぎ、強く押して唇をすりつけながら、「一滴も洩らさないように喉を鳴らして酒を吸い上げるのだ。」

「うまいものだね奥さん。こんなに成長しているとは思わなかったよ」

ようやく夫人から唇を離れた伊沢は感激した声で云った。

「——鬼源さんの教育のおかげですわ。あの時だって——」

静子夫人は上気した熱い頬を伊沢の頬へびったり押し当てながら

「——一滴でも、お口から洩らしたりすればきつく叱られるのですもの」

さも羞かしげに身を揉みながら、夫人は伊沢の胸に顔を埋めるようにするのだ。夫人の艶々しい黒髪から甘い香料の匂いが伊沢の鼻を切なくくすぐる。

「僕の場合もそう願いたいものだね。とにかく僕は、以前から奥さんに首ったけだったんだ。今夜は堪能するまで奥さんを料理しちまうつもりなんだよ。何時またこういう機会が来るかわからないからな」

「——いいわ。気がすむまで静子をおもちゃにして下さいまし」

静子夫人は、伊沢の胸に抱きしめられながら、そっと瞼の深い濡れた瞳で伊沢を見上げるのだ。

「それじゃ、僕も奥様みたいに生まれたまの姿になるよ。一寸、待っていてくれ」

伊沢は夫人の柔らかい肩に手をかけて体を離すと立ち上り、上着を脱ぎネクタイを外し始める。

あぐら縛りにされている夫人は、全身に酒気が廻り始めたのか、耳や首筋までも赤く染め、情欲的なうるみを次第に瞳に粘っこく湛え始めて、じっと一点を思いつめたように見

つめているのだ。

今頃、千原美沙江は、また、折原珠江、そして、桂子や小夜子達は——恐らく今、自分が置かれているような立場に追いこまれているのでは——そう思うと、夫人の胸は痛み、ふと涙がこぼれそうになる。

「何をぼんやり考えているんだよ、奥さん」裸になった伊沢が、ニヤニヤしながら夫人の傍へ歩み寄って来た。

ズカズカ近づく伊沢を見た夫人は、思わず顔をそむけた。

「どうしたんだよ。急にあわてたりして」

伊沢は夫人の足を縛った皮バンドを解きながら笑い出す。

「どうだね。この体じゃ不足かね。僕なりにこいつは自慢の一つなんだが」

そんな事をいいながら伊沢は唇を突き出し高貴な感じの夫人の鼻先や優雅な頬のあたりに押しつける。

今まで千代や鬼源の命令通りにわざと媚態を演じて伊沢をモソモソ悦ばせてきた静子夫人であったが、何ともいえず嫌悪感と同時に伊沢に対する憎悪もわいてくるのだ。

しかし、腹を立てれば、それだけ自分がみじめになる、と胸のつかえを噛み下す静子夫

人である。

このキザで破廉恥で、千代に喰いついて自分より一切の財産を奪いとり、それだけでもあき足らず笠にかかって自分をなぶりものにするという卑劣な男——それに対する報復手段は、彼の手に乗ったふりをして、キリキリ舞いするほど狂わせてやる事だと、夫人は自分の心にいい聞かすのである。昔、男の命をいくつも吸いとった毒婦がいたという話を聞いたが、自分もその毒婦になったつもりでこの男をねじ伏せるより手段はないのだ——と夫人は醜惡な裸身を眼前に押しつけられながら顔をそむけるようにして悲痛な決心をするのだった。

「——ふざけてばかりいらっしゃるの嫌。キッスがお望みなんでしょう」

静子夫人は顔のあちこちへ押しつける伊沢の悪ふざけをたしなめるようにわざとらしく睨んで次に微笑して見せ

「——何も遠慮なさらなくてもいいのよ」

そつと唇を押し合わせようとする伊沢は身をひいて

「何も、そうあわてる事はないじゃありませんか。夜は長いんですよ、奥さん。ゆっくり時間をかけて楽しみ合いましょうや」

伊沢はウイスキー瓶を手にしてラッパ飲みしながら卓を足で押しのけて、ぺたりと夫人の前に腰を下ろした。

「まず、ゆっくりとお見合いから始めましょうよ。さ、奥さんも僕のようにこういうポーズを取って下さい」

伊沢は酒で真っ赤になった顔を幾度も手でこすりながら、両足をだらしなく左右に開くのだ。

「——嫌っ、嫌ですわ。そんな——」

夫人は、苦しげに美しい眉根を寄せながら顔を伏せ、逆に両肢を締めさせる。

「今夜は、どんな事でも、僕のいう事は聞くという約束でしたね。悪い点数を僕につけられると、奥さんはまた苦勞しなくちゃならない。さ、勇氣を出して」

伊沢は、羞恥に身を揉む静子夫人を楽しそうに見つめながら、ウイスキー瓶をまた口に当てるのだ。

「——ひ、ひどい方ね。こ、こうすればいいの？」

静子夫人は、もじもじしながら縮めていた両肢をわずかずつ割り始める。

「駄目だよ。僕みたいに堂々としたポーズをとらなきゃ」

伊沢は、臍たけた美しい容貌を朱に染めた静子夫人がぐつと羞恥を噛みしめるようにしているのを見ると、魂までが溶けるような気分になってしまうのだ。

「ハハハ、そうこなくちゃ。これこそ、本当のお見合いというやつですよ」

遂に夫人が極端なポーズをとると伊沢は足の裏で夫人の割った足首をびったりと押さえこんで羞恥の悶えを封じこみ、声を立てて笑い出す。

夫人は憂愁を帯びた優雅な頬をわなわな慄かせながら、必死に眼を伏せているのだ。

「こっちを向いて下さいよ奥さん。眼を伏せていちゃ、お見合いにならないじゃないか」

伊沢は酒に濁った好色そうな眼を、夫人のそんなあられもない肢態に注ぎかけながらいった。

「——嫌、嫌、ねえ、もうそんなにいじめないで」

夫人は鼻にかかった甘い声を出しながら、すねたように首を振って見せる。

伊沢の強い好奇心に光る眼は、ねっとりとした白雪のような夫人の内腿を貪るように見つめているのだ。

「男と女の身体ってものはよく出来ているじ

やないか。さ、はっきり見てごらん」

伊沢は畳についた両手で体を支えながら、足裏で押えつけた夫人の足首を揺さぶった。

「いわれた通りにしないと悪い点数をつけて千代夫人に報告するよ」

伊沢は意地悪くそういって、夫人の開いた足をまた揺さぶるのだ。

「——ひどい方だわ」

夫人は鼻を鳴らして、伏せていた顔をそっと上げ、羞恥に慄える瞳をチカチカまばたかせながら伊沢の方へ向けたのである。

「どうやらびったりいきそうだね。え、そう思わないかい、奥さん」

伊沢は、夫人の世にも羞かしげな美しい容貌を見詰めながら、喜びに胸をうずかせつつまたもからかうのだった。

夫人は綺麗な睫毛をふるわせながら伊沢の眼に視線を合わせていたが、次第に度胸をすえ始め、優雅な頬を冷たく凍らせて

「——とても御立派ね。ところで如何が、静子のは、御満足頂けそう？」

夫人は伊沢の挑戦を正面から受けて立とうというような捨鉢な心境になったのだ。

苦痛とか羞恥とかを見せれば、それは敵の思う壺なのだ。娼婦のように振舞って色事師

を鼻にかけている伊沢をたじたじにしてやるより戦う術はない——そんな気持ちになった夫人は悲痛な覚悟をしたようである。

「さすがに鬼源さんが折紙をつけただけの事はある。見るからに名器の貫録があるよ」

伊沢はそう言って笑い出した。

媚態と酔態

隣の寝室へ伊沢が緊縛されたままの夫人を横抱きにして入って来た時は、もうすっかり酩酊して足元もかなり乱れていた。

伊沢だけではなく静子夫人も、あれからしこたま酒を飲まされて、かなり酔っていた。

「さてと」

伊沢は夫人を夜具の上に投げ出さず、床の間の柱の下へおろしたのである。

「そら、立つんだ。まだ寝るのは早いよ」

伊沢は夫人を強引に立たせて、柱に背を押しつけさせるとキリキリと縄尻を引きしぼって柱に縛りつけたのである。

「——もう、もうお酒は充分ですわ。ね、お願い。お布団に寝かせて」

伊沢が戸棚から小さな瓶を取り、コップに注いで近づいて来ると夫人はねっとり潤む情

感的な瞳を、哀願するように伊沢に向けて首を振った。

「何をいってるんだ。これは強い精力酒なんだよ。少し飲むだけでモリモリとスタミナがつくという南方の珍しい酒なんだ」

ハブやマムシなどのエキスがたっぷり入っているというその気味の悪い赤い酒を、伊沢は夫人に無理やり飲ませようとしてコップを口に押しつける。

夫人は、ふと、酒気を帯びてねっとり潤んだ瞳を色っぽく開いて伊沢の顔を見る。

「——そんなに静子に精力をつけて、あとで後悔なさっても知らないわ」

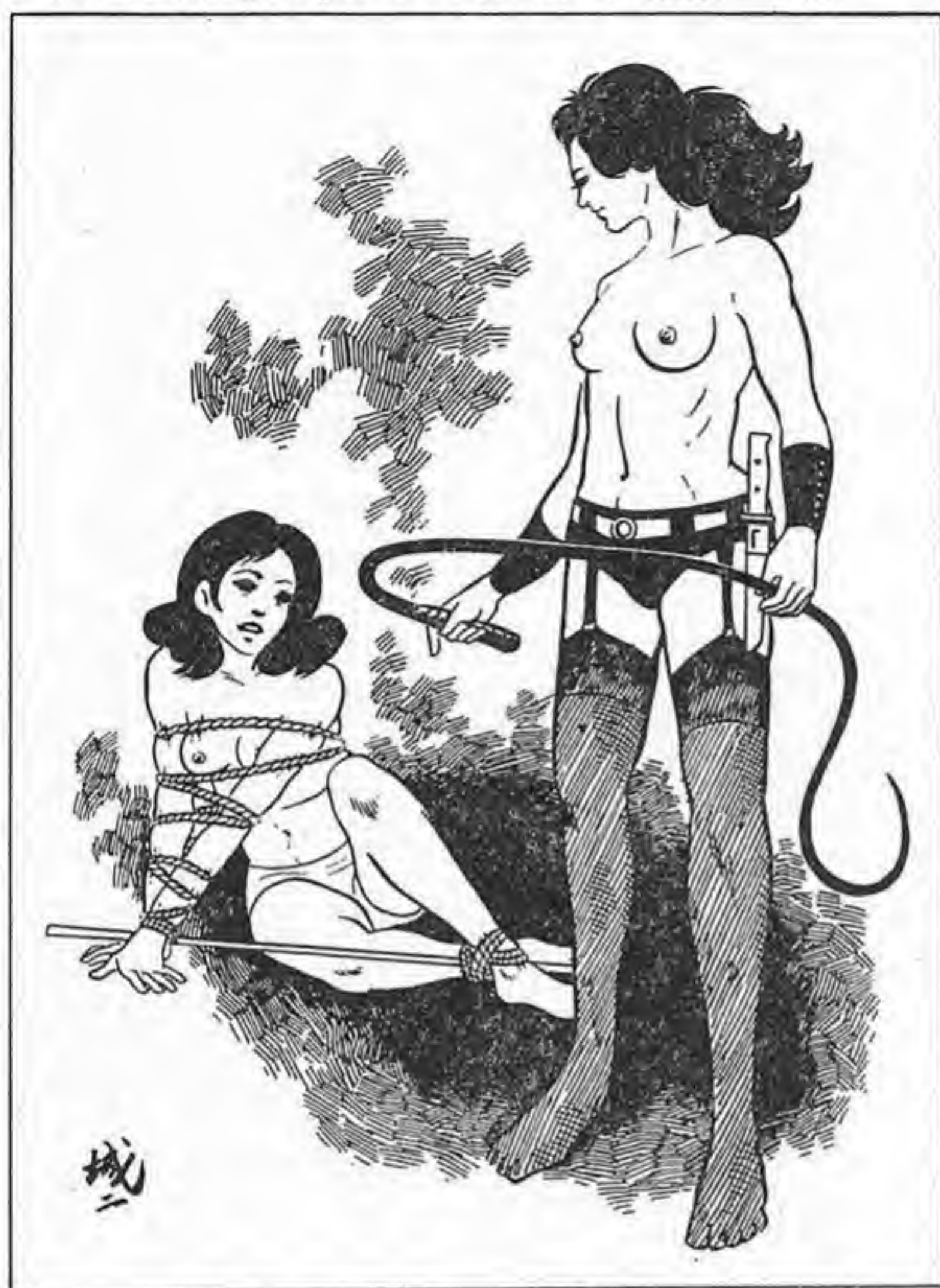
と、媚態めいた微笑を口元に浮かべると夫人は、伊沢が押しつけてくる赤い酒を自棄になったように一息に飲み乾したのだ。

「僕だって負けないよ」

伊沢もコップに注いだ赤酒を飲み乾し、次に戸袋を開けてハミガキのチューブのようなものを二個持ち出して来た。

「こりゃ何だかわかるかい。街の薬局なんかで売ってるような安物じゃないんだ。外国製の高価な薬なんだよ。これを使うと、一寸やそっとの事では参らないんだよ。つまり一種の麻醉クリームだね。女泣かせの妙薬さ」

S・コレクション『ムチをあなたに』豪 城 二



伊沢はぬけぬけとそんな事をいいながら、夫人に見せつけるようにして自分に塗り始めるのだ。

「——駄目。そ、そんなの卑怯だわ」

静子夫人は、すねてもがくように柱につながれた裸身を揺さぶる。

女の肉という武器で戦を挑み、キリキリ舞

いさせ、忽ちにして自失させようと考えた夫人の作戦の裏をかくように伊沢は北叟笑みながら、たっぷりと塗りつけている。

「男ってのは損な性分だね。自分よりも女性の方に快楽を与えようと思えるんだ。女性の狂態を示す姿を眺めるだけで満足感があるんだよ。とりわけ、僕はサービス精神が旺盛に

出来てるんだ」

そんな事を樂しげにしゃべる伊沢を無視したように夫人はそっぽを向いていたが、今しがた伊沢に飲まされた媚薬の故か、熱っぽいものがじわじわ身内に衝き上げてくるのを夫人は感じた。何か情欲めいた靄のようなものが全身にこみ上げてくる。

「今、飲んだ赤酒の効果が早くも現われたようだな。そうじゃないのかい、奥さん」

伊沢は、真っ白な肌を薄桃色に上気させ、脇たけた妖しいばかりの美しい顔を切なげに曇らせる静子夫人を見て、眼をギラギラさせるのだ。

「さて、こっちのチューブは女性用なんだよ。すごく敏感になる。おかしなものだね。この種のクリームは男を鈍感に、女を敏感にさせるように出来ているんですよ」

伊沢はチューブを押して、指先にたっぷりとクリームを掬い取った。

「赤酒でカッカと燃え始めた身体にこのクリームをたっぷりと塗りこみゃ、正に鬼に金棒ってものだよ、奥さん」

「——嫌っ、嫌よ、伊沢さん」

伊沢がゆっくりと腰を沈めると、ミルクを溶かしたような色白の優美で官能味豊かな両

腿を夫人はぴったりと閉じ合わせて、なよなよと全身を揺さぶるのだ。

「——ずるいわ。静子一人を狂わせて御自分だけは冷静になろうなんて、そ、そんなの卑怯よ」

「何をいってるんだよ。これは男女の礼儀やしきたりみたいなものなんだ」

伊沢はそういつて、むっちり肉の緊まった柔らかい優美な夫人の太腿や白い滑らかな腹部に熱い接吻を注ぎかけ

「さ、いい子だから、いう通りしなさい」

いわば女に残された最後の武器で激しく攻めたて、伊沢の武器を破壊するより手はないと悲痛な覚悟をした夫人であったが、狡猾な伊沢の作戦でそれも微塵に打砕かれたのだ。

「——負けましたわ。どうとも、お好きなようになさって」

静子夫人は、綺麗に揃った睫毛をうっとりとして閉じ合わせるようにした。

とうとうこの男の手で泥まみれの玩具にされてしまうのだ、と思うと、また妙な事に被虐性の倒錯した悦びのようなものがこみ上げてくる静子夫人であった。

伊沢の作戦を甘受しながら、さも悩ましげに肩を揺すって見せたり、鼻を鳴らして「ひ

どいわ、ひどいわ」と嗚咽を洩らしてみせたりするのも、責め手の官能を高ぶらせるための夫人の一種の技巧かも知れなかった。

伊沢は気もそぞろになって、煙草に火をつけてうまそうに煙を吐きながら、改めてしげしげと夫人を凝視するのだ。

「——ねえ、もっとよく御覧になって」

静子夫人は喘ぐようにさういうと妖艶なばかりの艶めかしい流し眼で伊沢を見る。

「——鬼源さんのおっしゃるようだとお思いになる？ うん、笑ってばかりいるの嫌、何とかおっしゃって」

伊沢は快楽に酔い痴れた様にモリモリ立ち上ると卓の上にあった卵を一つ取り上げた。

「それが本当なら、抱く前に一度、奥さんの芸が見たいもんだな。今夜は水入らずで、とくと拝見したいんですよ」

伊沢が再び近寄ると、

「——お待ちになって」

と夫人は体をひねって

「——そんなせっかちな嫌。女の身体ってそんなに単純じゃなくてよ。優しくリードして下さるなきゃ」

「ああ、そうだったけな」

伊沢がすぐに応じようとすると、

「——うん、馬鹿、馬鹿」

と夫人は鼻にかかった甘い声で、またもや肩を悶えさせるのだ。

「——まず、おっぱいから——」

夫人はうっとりとして眼を閉じ合わせて、ひっそりと口を開いた。

上下を麻縄で固く締め上げられている夫人の乳房を伊沢の両手が押えこむ。

「——ねえっ」

と、夫人はもどかしげに髪を揺り動かせると、伊沢の方へ顔をねじって唇を押し出すのだ。

「——舌を、ああ、舌を吸って」

ぴったりと伊沢の唇へ唇を押し当てた夫人は、無我夢中になった伊沢の口中へ舌を入れて吸わせ、

「——あんなクリームなんかお使いになるから今夜の静子すぐ取り乱してしまったわ」と、ぞっとする程美しいギラギラする瞳を

伊沢に注ぎかけるのだ。

「——もう充分ですわ。芸をお見せします」

伊沢がソワソワしながら卵を取り上げる。

「じゃ、ゆっくり見物させて頂くか」

夫人から離れた伊沢は、すぐ前に敷かれた夜具の上に肘枕して横になる。

静子夫人は、優雅さに包まれた麗身をくねらせ、ゆるやかに腰を廻し始めた。

縄に緊め上げられた豊満な乳房、雪のように白い滑らかな腹部、乳色のむっちりした太腿——それらが悩ましくゆるやかにうねり舞うのである。

夫人は美しい眉根を寄せ、薄く眼を閉ざして、すすり泣きの声を混えながら、段々と激しい動きを見せ始める。

「それがすんだら、骨身にこたえる程、ここで楽しい思いをさせてあげるからね」

伊沢は夜具の両端に細工された皮紐や天井から垂れ下がっている二本のロープなどを楽しそうに眺めながらいった。

「——ね、畳が汚れるといけませんわ。足元に手拭か何かお敷きになって」

静子夫人は割り砕く自信がついたのか、全身をくねらせつつ伊沢に向かって、か細い声を出すのだ。

伊沢は風呂場へ行って、タオルと手拭を持ってくると夫人の傍へ近づき、夫人の華奢な足首の前に丁寧に手拭を上げた。

夫人の美しい富士額にねっとり脂汗が滲んでいるのを見た伊沢はそれをタオルで優しく拭いてやり、弧を描くようにゆさゆさ揺れ

動いている官能的な悩ましい夫人の双臀を、眼を細めて眺めるのだった。

伊沢は、ふと、何年前か、豪華なホテルの大広間で行われた慈善パーティの光景が脳裡に浮かんできた。そのパーティで始めて夫人を見た時の驚き——この世にこのような美女は実際にいるのだろうか、とさえ、正直、伊沢は思ったのだ。夫人の気高いばかりの美しさは伊沢だけではなく、そのパーティに出席した人々の心をうずかせたに違いない。

豊かな胸の美しい谷間のカーブを見せた豪華なドレスを着た静子夫人——宝石を散りばめたような美しいアップの髪型をした静子夫人は高貴で優雅な匂いに包まれて、黒の長手袋をした手にワイングラスを持ち、外国の知名人達と何か流暢なフランス語で談笑していた——

伊沢は、悩ましく双臀をうねらせている静子夫人のうしろ姿、美しい横顔を見つめながら何ともいえない不思議な気分になるのだった。

あの時の上流階級社交界の天性の美貌をうたわれた令夫人が、名器一つを頼りに生きていく女奴隷なのだと思うと伊沢はたまらなく痛快な気分になってくるのだ。

「奥さん、さっきから僕はうずうずしてるん

ですよ。まだ割れないのかい。これ以上、時間をかけると減点して千代さんに報告しなきゃならないが」

伊沢はわざと意地の悪い方をして、夫人の脇を指で突くのだ。

「——もう少し、お待ちになって。もうすぐですわ」

夫人は、齒を喰いしばった表情になった。割るという事は簡単なようだが実際は非常にむづかしいもので、よほど筋肉の強い力を持つ女でなければ出来ないものだと思源がいていたのを伊沢は思い出した。

それだけに夫人が必死になるのが面白く、伊沢は立ったり坐ったりして夫人の舞いを見物するのだ。

急に動きを止め、夫人は、小さくうめいてがっくり首を垂れてしまった。ぴたっと閉じ合わせた、汗ばんだ柔らかい太腿あたりが、ひきつったように激しくふるえている。

「どうしたの。割れたのかい」

伊沢ががっくりうなだれた静子夫人の乱れ毛をかきわけながら耳もとでいうと、夫人は赤らんだ顔を一層深く沈めて、かすかにうなずくのだ。

「何も、そんなに羞かしがる事は、ないじゃ

ないか」

「——だって、あんな薬で——ひどいわ。ですから静子——」

夫人はさも羞かしげに唇を震わせて、そういい、伊沢の視線から逃げるようにさっと熱い顔を横へそらせるのだった。

伊沢は大声で笑い出した。

「成程、そうかい」

「——知、知らない。うん、意地悪な方」

静子夫人は、すねるように首を振るのだ。

「ところで嘘じゃなく、本当に割ったんだらうね」

「——お疑いなら、気のすむまでお調べになつて下さいまし」

伊沢が身を沈めると、卵が割れたたしかな証拠がぴったりと閉ざした太腿、内腿を伝わってしたたり流れているのだ。

「——ね、おわかりになつて」

静子夫人は、ポーツと赤らんだ顔を伊沢の方に向けて甘えるようにいった。

「こりゃ面白いや」

「——ねえ、もういいでしょ。早くお掃除して下さらなきゃ嫌ですわ」

静子夫人は夢からさめたばかりのような半ばうつつの声で伊沢に後始末をねだるのだ。

伊沢は、タオルを湯に浸して丹念に夫人の体を洗い清める。

「全く、こいつは鬼源さんのいう通り、すば

らしい芸だよ」

と、夫人の顔を見上げて、薄笑いを浮かべた。

「今夜は僕にとって、一生の思い出になるようなすばらしいプレイをしてみたいと思うんだよ。奥さんもその気になってくれるだろうね」

伊沢は、次に櫛を持ち出して、夫人の乱れた毛髪を整え始めるのだ。

今夜はこれから明け方まで、貴様はさめざめと泣きつづける事になるんだぞ、と伊沢は敵意のようなものまで抱き、ゆっくりと櫛を使い続ける。

——(未完)——

京子ファンの「花と蛇」への不満 前原 昇

これまで「花と蛇」がマンネリ化したとして様々な意見が出されてきたが、私は、私のも含めてどれもその打破のキメ手となるものはないように思うし、団先生は「珠江、美沙江」の新登場によって新鮮さを狙っていられるようだが、私としては首を捻りたい。

だいたい私は「花と蛇」がマンネリだとは思っていないのだが皆がそういうので、そう

かな？ という気にもなるが、新登場の二人の美女には、全く興味を感じていないのは確かである。私としては、むしろヒロインの整理を提案された、忍頂寺譲氏のご意見に同感で、あまり次から次へ浮気するより、団先生自身が語っておられた『静子、京子、小夜子らは女性の類型』の特色を、一層強めてもらいたいものだと思わざるを得ない。

私は以前、京子ファンとして「花と蛇」のヒロインは「京子以外にはない」と述べたことがあったが、今でも、京子、静子、美津子小夜子の四人の美女だけで充分と思っているし、これまでの静子夫人を中心とした展開には不満を持っていて、もっと他の三人の特性も活かしてほしいと思っている。いつのことかは忘れたが、安藤秀一氏による『花と蛇に現われた羞恥責めの類別』という一文に感心したことがあったが、この中にも指摘されていたし、私も感じていたことの中に、すべて

の責めに共通するものとして「弱みにつけこむ」というテが現われている。たとえば、美津子を責めると脅して京子に受責を承知させるという精神的脅迫が、肉体的責めの媒介となっている点である。

この導入方法が「花と蛇」のうまいところなのだろうが、それをすべての美女に、全く同じように適用するところに同質化のキライが生じて、類型としての特色がかすんでしまうような気がしてならない。この適用について、私の受けた感じでは、最もうまく行っているのが「静子夫人」であり反対の例が「京子」の場合であるように思う。

私としては、なんとか静子夫人に対するウエイトを少し低くして、京子をもう少し起用して従来とは異った責め（マゾ化するためばかりでなく、泣かせるための責め）に移行してもらえないものかと思うし、美津子には青いっぱみを成熟させる責めを、小夜子には令嬢意識を完全に打ち砕く陰惨な責めを、と願う次第である。

次に、私の最も愛する美女「野島京子」に与えられた従来への責めをまとめてみたい。

① 脱衣Ⅱ捕えられた後、京子自身が脱いでいるが、ブラジャーとパンティだけは拒否して抵抗のうえ剥ぎとられている。

② 排尿Ⅱ四回。一回目は塩水を飲まされて、立ち縛りで強制。二回目は静子と同時展

示ショーで……。三回目は春太郎達にオマルを使用させられて……。四回目は彼等によって……。一回目は激しく抵抗、それ以後は半ば自発的。

③ 浣腸Ⅱ吉沢によって、五〇ccずつを二度、激しく抵抗。

④ 処女喪失Ⅱ激しい抵抗の上、棒の両端に足首を縛られ、川田に……。

⑤ 騷りⅡ川田、森田、吉沢、春太郎、夏次郎、清次、五郎、三郎の八人。森田は、はっきりしないがストーリーの運びから、おそらくこの仲間。いつの場合も激しく抵抗し、美津子を口実に脅されている。現在進行中の清次については資料なし。

⑥ 悦虐Ⅱ初期においては静子夫人との同時責め。吉沢に調教のまねごとをされているが、春太郎達の調教責めが主流。ただし、静子の場合と違い、京子の責めは更にネチネチとしていて、やるせない思いをさせている。

⑦ 剃毛Ⅱ三回。吉沢に二回、春太郎たちによって一回。

以上であるが、京子に対する責めの基本的なものを見ても、はっきりではないが特色があると思える。すなわち、静子夫人や小夜子にはマゾ性開発に重点のおかれた責めで、男達に、静子らの悶えに対する喜びを感じしめて情をかけさせ、静子を愛らしく思わせて優しく扱わせているのに対し、京子の場合は、

男達に、京子の抵抗をにがにがしく思わせてサディスティックな責めをさせている。

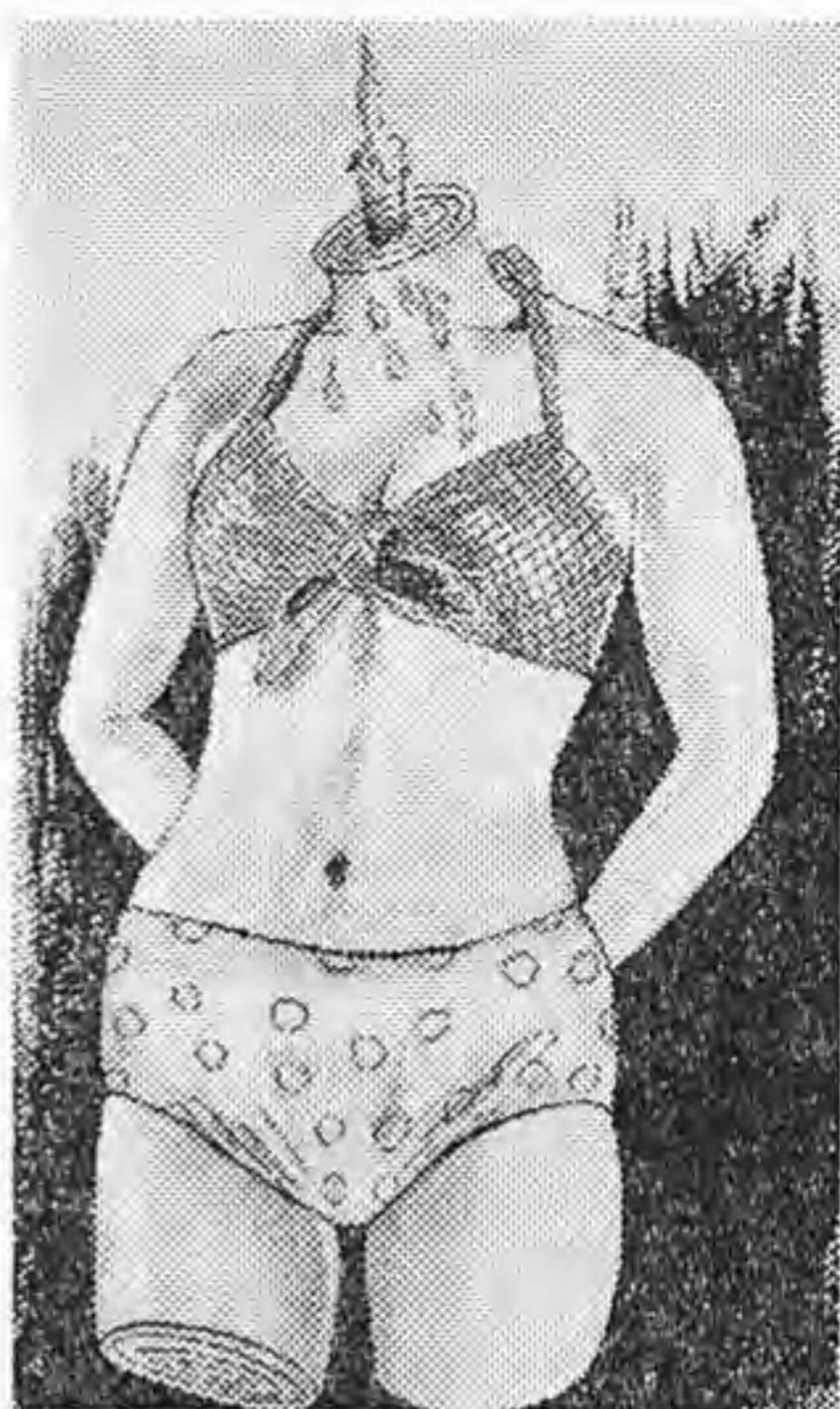
私としては、こうした「花と蛇」の傾向から、静子夫人のような甘い責めではなく、京子に拷問的責め、実験台的責めを加え、泣かせ得るだけ泣かせてやってほしいのである。

私は毎号、「花と蛇」に京子が責められる場面の出てくるのを期待しているのだが、最近ではガククリの連続である。これまでの内、各ヒロインが登場するページ数をくらべてみても京子の場合が一番少ないのだから、京子ファンとしては文句の一つもいいたくなくろうというものである。

団先生、どうか、もっと京子を登場させて浣腸を中心とした責めにかけていただけないでしょうか。彼女の美しい泣き声を、その悶えと共に挙げさせてやってももらえないものであろうか……。

それから、まさかとは思うのだが、京子に妊娠させるのは絶対に反対である。組の若い衆は、静子夫人には憧れを持っていても、京子や小夜子には反感を持っていると思われるので、たっぷり泣かせることになんら異議はないと思うのである。多くの男達の前で、つぎつぎ浣腸されて悶え抜く京子。どれほどまでに弄ばれば、どんな反応を示すかを実験するための材料にされる京子……。

団先生、お願いする。いや、します。



カット・小川茂正

△創

作
V

ある夜のザンゲ

林
た
け
し

夜更けの病院ってやはり静かですね。あ

たくし好きですわ。ですからこうして、あれから毎日ここへぶらりとやって来てみることにしておりますの。別に誰と面会すると云う訳でもないのですけれど、この待合室で煙草をふかしながら、みなさんのお話に耳を傾けていると、不思議に気持ちが落着きますの。

いろいろな人の、いろいろな人生がありますのねえ。ほんと。チラチラと断片的にしか聞こえはしませんが、患者さんと家族の方、又お友達などの交している会話の内容をあれこれ推測しておりますと、社会の縮図をみる思いがいたしますわ。

こんな時、つい自分の過去を顧みて、少な

からず感傷的になってしまいます。

あたくし、どう云う星の下に生まれて来たのでございましょう。きっと業の深い人間ですもの悪い星の下に生まれたのに違いありません。あたくしはこれまで五回も自殺を計りましたの。そのうち三回はお相手して下さる方がありまして一応心中と云う形にはなっていますけれど、あたくしばかりが生き残っちゃって彼たちにはほんとに気の毒なこと致しましたわ。あら、誤解なさいで下さいまし。決して狂言なんかじゃございせんことよ。取調べの刑事さんのように心中を装った殺人だなんて仮にも猜疑なすったらいやですわ。隼人さん、典雄さん、英二さん、みなさ

ん好い方ばかりでした。あたくしはどんなにか彼たちを愛していたことでしょう。

今度の英二さんとの件では、はじめて刃物を用いたのですけれど……。

あれは二月の十日でございました。夕方、英二さんは薬を買いに行つたのですけれど、生憎と手に入りませんでしたので、日延べにしようか止めようかと思案しているうちに、「ええ、もう面倒くそなつたわ、これでやらへんか」と云つて英二さんは短刀ドスをキラリと抜き放ちました。

あたくしは思わず、ぞっといたしました。
だって血がとても怖いのですもの。夕食の用意の時だって英二さんがいませんものですか

ら仕方なくお魚を料理しましたけれど、お魚の銀色に光るお腹に、鋭い包丁の切っ先をズスリと入れた瞬間、あつと目を閉じました。ヌルヌルした血に塗れた腸を見て、あたくしは下腹がシクシク痛むのを感じたのでございます。こんなのを感情移入と申しますのではありませんか？

あたくし、自分で云うのも変ですけど、とても神経がデリケートにできているのですわ。人間はなかなか冷静には死ねるものではありません。薬を飲む時にしても、ウイスキーでもあおって酔っていなくちゃあ、とてもとても、あの小さなタブレットを嚥下する勇氣はもてませんわよ。

いい加減お酒が廻ってきた時、「本当にあなた、後悔なさらない？ 今だとまだ間に合いますわ……」と喋ってしまいました。あたくしは英二さんがふと可哀そうに思えて、こう申したのでございます。

すると英二さんは「何を今更後悔なんかするもんか。オレはこんな世の中が厭になってるんやし、お前もどうせ助からへんし、一緒に死ねたら本望や。女はオレをだましてばかりやったけど、お前はホンマに正直で親切やった」と、まばらにのびた髭を一寸つまみ

ながら云うのでした。

まだそんな年でもありませんのに、彼がともニヒリスチックになっっているのは、被爆者であるせいのようにでした。白血病とまではいってないのでしょうけれど、老人のように疲れ易く頭痛や不眠に悩んでいましたし、いつバツタリと倒れるかわからないと思って、正業にもつかずヤクザの道を選んで、明日のない人生を生きてきたのでしょうか。

そうして、二月十日の深夜、英二さんはまず、あたくしの胸に短刀を突きさし、かえす刃で自分の頸動脈を斬りはなしたのでございます。

あたくしはしっかりと目を閉じていましたけれど、「ドスッ!!」と云うような感じがした途端、生暖かいものが噴き出したように思えます。痛いより何より、すっと頭の中が空白になり、意識がうすれて行きました。朦朧とした中で「痛い——苦しい——助けて！」と叫んでおったようでした。

どんなにか痛みは激しかったか知れませんが、少しもはっきり記憶されていませんのよ。不思議ですわね。

ぼんやりと白い天井が目に入った時、「さあ、気がつきかけたようだね。何しろ大

へんな傷だからね、よく注意していたまえ」

「はい先生。けど、どうしてこんな美人が自殺する気になったんかしらん？」という男と女の声。「さあ、いろいろあるんだろう。あ君、点滴がホラ……」かすんだ目にお医者さんと看護婦さんの白い姿が映りました。痛みはありませんでしたが呼吸をするのも胸苦しくらいでして、口をパクパクしておりますと、「どうしました？ 苦しいの？」と看護婦さんがカラカラに乾いたあたくしの唇を、水を含ませたガーゼで拭いてくれました。

ああ、やさしい白衣の天使。本当に看護婦さんて素敵ですわね。愛と奉仕に生きるのもっとも女らしい生き方ですもの、看護婦業は女の天職みたいなものだと思いますわ。でも時々お医者さん同様、患者を物体かモルモットのように冷酷に扱う人もおりますわね。そんな人に限って意外と淫らで、すぐ若いインターンやハンサムな患者とデキちゃったりするんですって。……あら、あたくしとしたことが、はしたないことを申しました。

あたくしは美しい優しい女性を好きでなりませんの。憧れ、そう崇高なまでの憧憬を抱いているのですわ。あたくし自分でマザーコンプレックスだと思っております。

あたくしは、太平洋戦争も酷な昭和十八年一月、横浜で生まれました。

私生児！　そもそも出生からして暗い翳につつまれていたのですわ。

父は高利貸しだったそうですけれど、軍需省にどんな伝手があったのか巧く入りこんで戦地へも行かず、かなり悪どい闇取引などしてますます身代を肥らせていた様ですが、終戦後は進駐軍相手にきりかえて、それはそれは鮮かな時流への、のり方でございました。

あたくしは父を嫌っておりました。母は大好きでしたけれど、母の方は父を愛するほどにあたくしを構ってはくれませんでした、あたくしは常に淋しく孤独でした。色白で線病質なあたくしは甚しく内向的で、学校でもあまりお友だちもありませんでした。学校から帰る時でも大ていひとりぼっちで、のろのろと道草をしながら帰る習慣です。あの時も、別に遠廻りして帰ったわけではありません。

そう、六年生の冬のことでした。確か二月だったと思いますが、風も無く、うらうらと穏かな午後でございました。

大通りに出た時、一台のジープが除行して来てあたくしの横に止まりました。そのジープ

には濃いカーキ色の軍服を着た二人の黒人と一人の白人が乗っていて、片言まじりに何か云いながらチョコレートやガムをくれたのです。あたくしは、G・Iには馴れておりませんでしたので、別に物おじすることもないでございましたが、中の一人が降りて来て、「カモン、ベビィサン」と云うなりあたくしを抱き上げてジープに乗せた時には本当に怖かったのを覚えております。

後年になって、戦後の日本女性が強姦された話はよく耳にいたしましたけれど、男であるあたくしが（たとえ女の子と見間違えるほど可愛らしい少年でありましたにせよ、あたくしはまぎれもなく男の性を備えてこの世に生を受けました）犯された例は、珍しいのではないでしょう。あの時あたくしは、やさしい兵隊さんが人をとって喰う鬼に変身したのだと泣きながら思いました。それは絵本に出てくる赤鬼青鬼ではなくて、唇と手のひらがピンク色をした二匹の黒鬼と金色の毛におおわれた一匹の白い鬼でございました。

そして未だに忘れられない強烈な印象があります。それは赤い色、鮮かな赤、血の色なのです。

でもあたくしは家に辿りついて、この鬼のことを誰にも話さず、不審げにしている母を尻目に階段を上りました。そうして夜具を頭からすっぽり被って泣きました。しくしくと泣き続けました。

その春あたくしが中学に上って間もなくのことですが、突然父が死んでしまったのでございます。あたくしは母と一緒に東京のご本宅まで行きました。玄関で親類の男の人に追い帰されたあたくしは母子の屈辱と悲哀、おわかりになりますか？

母の愛を独占できるよろこびに酔ったのも束の間でした。色深いたちだったのでしょうか、弱い女性の本能でありましたのか、母はまた第二の男を持ったのでございます。でもそれは正式の結婚でした。ただし先方にも二人の男の子があり、義父となった人は働くのが嫌いなグウタラ亭主の典型で、その上自分の連れ子は可愛がってもあたくしのことを、女のような奴だ、と毛嫌いいたしまして、いつも邪魔にするのでございました。

そんな家庭が面白いはずもなく、あたくしは非行少年のグループに入り、学校を毎日毎日サボタージュいたしました。無断欠席は担任の先生の家庭訪問からバレてしまって、ひ

どい折檻を受けました。野球バットで殴るんでございますよ。骨がバラバラになってしまったような痛みでした。一寸の虫にも五分の魂ですわね。あたくしは始めて男らしく反抗して「こんな家なんか出て行ってやる！」と泣きながら飛び出してしまいました。でも行くあてもなくて二、三日、友人の家でゴロゴロしては家に帰ると云った有様でした。

いつの間に手続を取ったのでしょうか、義父は強制的にあたくしを教護院に送ることにしてしまいました。その時ばかりは母も泣いて反対したそうですけれど結局、駄目でした。

月に一度の面会日には必ず顔を見せた母が涙まじりに云うのです。「母さんが、みんな悪いんだよ。かんにんしてね。一日も早く真面目になって帰ってきて頂戴」あたくしは無言で母の白い顔を眺めているばかりでしたが心の中では、母の胸にとびこんで泣いていたのでございます。

二年間の教護院生活で、あたくしは完全な女役に仕立てられてしまいました。凄い少年ばかりの中で、あたくしは恰好の獲物であったようです。彼らは順番にあたくしを襲い、昔、G Iにやられた通りのことをするのでした。でもあの時と異って、あたくしはまんざ

ら厭でもありません。何となく自分が本ものの女に変身しているような錯覚の中で、あたくしは快感すら感じておりましたの。

やっと出られた教護院から、家に落ち着く間もなくあたくしは又、義兄にひどいめにあわされてしまいました。

それと云いますのが相変わらず邪慳にする義父や、精薄の弟のいる暗い生活があたくしを前より一層孤独にしておりましたので、不良じみていたといってもやさしい義兄にちょっぴり心を預けたのが間違いのもとでした。義兄は当時、大学受験に失敗して、ブラブラ遊んでいたのですけれど特に「ギャルソン」と云う名のゲイバーには、毎日のように出入りして、沢山の借金があったのです。

両親の目を盗んで彼はあたくしを「ギャルソン」によく連れていってくれるのでした。

初めて接した大人たちの倒錯の世界は、異様な雰囲気でもございました。妖しいまでに美しい男たちが、哀しい、空ろな眼をして、束の間の恋をし、歌を唄いお酒に酔い痴れていたのでした。

この世界にあたくしは、たちまち魅せられてしまいました。仇花のような人たちは、みのりのない愛を求めて魂の放浪をかさね、あ

ちらこちらにこのような世界を作って、世間さまから隠れているのでございます。

義兄はほんとに不屈な男でした。だって、あたくしを犯した上に、借金のカタに「ギャルソン」に売り飛ばしてしまったのですもの。でもあたくし、彼を決して恨んでおりませんの。やせ我慢でも何でもありませんわ。むしろ感謝しているくらいですの。

「ギャルソン」では、ずい分と楽しい思いをいたしました。ええ、あたくしは大へんモテましたわ。一番若くて誰よりも美しい少年だったものですから当然だったのですけれど、世の中って好事魔多しですわね。「ギャルソン」はよくはやっているお店でしたのに、ママさんが不良外人に欺かれて、潰れてしまったのです。数人のゲイボーイたちは、それぞれ友人や先輩を頼って東京、大阪、遠くは九州あたりまで散って行きました。あたくしを一緒に誘って下さる方もありましたけれど、浮草のように流れ流れて行く勇氣は、まだ当時のあたくしにはありませんでした。

それからあたくしは新宿でフリーテンになりました。まだ最近のように沢山のフリーテンはおりませんでしたが、やっぱり家を出て何かを求めたり、親に背いて自由に憧れたり

する連中は幾人もいたものです。

ほんのしばらくの間にあたくしは年長の男たちに、持っていたお金を全部まき上げられスッテンテンになりました。おまけに補導員につかまり、家に連れ帰られてしまいましたの。当然また教護院送りですわ。

二度めの院生活六カ月頃でしたかしら、南村と云う子と仲良くなりました。いえ、変な関係ではございません。その子には好きな彼女がいたのですもの。南村さんは彼女に会いたさの一念で、教護院脱走を企てておりました。お前も一緒に逃げないか、と云う言葉に一も二もなくあたくしが乗ったのも無理ないとお思になるでしょう。何しろあのような所は、大人の方のお別荘と大して変わりないんですもの。

あたくしは九時の消灯から一時間後、見廻りの隙を見はからって、パジャマ一枚で窓から外へ出ました。

まアそのスリルと寒さ、あたくしはガタガタ震え続けまして、齒の根も合わない有様でしたわ。

その頃、教護院の周りは諸畑ばかりでございました。かなり広い街道が町に向かって延びておりましたけれど、もしや追手が、と思

ったものですから、その諸畑の中の畦を縫って走って行きました。空には十月の美しい星がきらめいておりました。でもロマンチックな気持でいることもできないほど、お腹が空いてきたのです。

「もうこの辺まで来れば安全さ。しばらく休むか」と南村さんが云った時には、もう一歩も前へ進めないくらいにあたくしでしたわ。

蔓の根元を掴んでグツとひっぱると、まるまる肥ったいかにもおいしそうなおサツが、黒土の中から転げ出て参りました。水もありませんので、パジャマの裾でゴシゴシこすって泥をおとし、そのままかぶりつきました。少し甘味はありましたが、堅くて生では、やっぱり食べられたものではありません。甘藷特有の白い粘い液で、口や手がネットに付きました。おかげで翌日はまア二人ともひどい下痢。

横浜まで歩いたあたくしたちは、やっと彼女のアパートに辿りつきましたけれど、下痢と疲労のために寝込んでしまいました。

年上の彼女は、あたくしにもずい分とやさしく、なにくれと親切にしてくれるのですが、そうそういつまでも狭い部屋に三人ぐらしはできません。十八才だと偽って、元町の

Rクラブに職がきまった時には本当にほっといたしました。住食付きだし、可愛らしいボーイさんだと、ママやホステスはもちろん、お客さまにも評判がよくて、あたくし一生懸命働きましたわ。

けれど、先輩のボーイたちが嫉妬しましていろいろいじわるするのです。辛くて、厭だなア、と思った折も折、常連の中にゲイバーのママさんがいまして、あたくしは一カ月めにとうとうスカウトされました。

今度のお店はやはり元町にあって「曉」と云う名でしたが、あたくしはそこで亜里という源氏名をつけられました。あたくしにふさわしいシックな名前でしょう？

あたくしの素質を一目で見抜いたママさんの慧眼には恐れ入りましたけれど、四カ月ほど経って、黒人の中尉に世話された時には、ママを恨みました。

苦い怖ろしい過去のできごとが思い出されて、とても外人を好きにはなれません。いいえ、憎悪、呪咀の感情があるくらいですわ。

でも、人間生きて行くための手段には、吐き気をもよおすようなことでもしなければならぬ時があります。

あたくしは山手の外人墓地近くに、中尉の

オンリーとして囲われることになりました。

シドニーネルソンと云うその男は、二米近い大男で、部厚い唇とピンクの掌は黒人特有のものでしたが、綺麗な眼をして、鼻すじも白人並みに通っていて、頭髪も亀の子束子のようにジャリジャリしていませんでした。

彼はあたくしを舐めるように可愛がってくれましたし、生活は派手で、その点ではとても楽しい毎日でした。でも本当云うと、夜のことは死ぬほど厭でしたのよ。あたくしの苦痛がどんなものかおわかりになりましたしょう？やがて彼は遊びだといって、あたくしをナイロンストッキングで縛り、乗馬用のムチで打ったりするようになりました。ある時などあたくしの薄い皮膚が破れて、血まみれになったりいたしましたわ。ああ、赤い血！あたくしは今でも本当に血が嫌いです。

本当のサディストは傷つけたりしないでムチ打つのでございましょう？彼は決して優雅なサド候爵の召使にすらなれませんわ。

一年目に、彼は本国に帰還してしまいました。当分の間は彼の残してくれたお金で、遊び呆けておりました。けれどそれを全部使ってしまったてからは、又食べるにこと欠く生活でございます。

家に帰る気にもなれせんし、お勤めするのも、もう何だか厭気がさしておりますので、あたくしはとうとう墮ちる処へ墮ちてしまいました。つまり、暗い街角に立って、酔っぱらった男の袖をひくのですけれど、仲良しだったジョンと云う子があたくしのこと誘ってくれましたの。

その子から、オカマの手ほどきを受けました。あたくしは、初めて完全女装をしてツヤコと名乗ることにいたしました。

なんとあたくしの商売運はつたなかったのですしょう、お客をただの一人も拾わないうちに、パクられてしまったのでございます。ええ、その時はもう何が何やらわからなかったのですけれど、本物の女の方たちがバタバタ駆け出しながら、「手入れだよう！逃げろ早く！」「オイ、お前さんたちこれからウロついてるとヤバイぞ！」と口々に警告してくれましたので、夢中であたくしは方角も定めず、息せききって逃げましたが、通りの角を曲ったところで、ポリスにばったり。たちまちつかまってしまいました、あの網のついた車に、パンパンのお姐さんたち共々に放り込まれ本署に連行されましたの。

取調室で、あたくしシクシク泣いてやりま

した。もちろん悲しかったことは悲しかったのですけれど、半分は演技でしたの。何とか教護院送りにだけはならないように、と心の中で祈っていたのでございます。

悪い友人にそのかさされてイタズラ半分に女装してみた、などと言ひ抜けまして、しおらしく下を、向いておりました。担当の刑事さんは目をパチパチしながら「へえ……お前さんが男の子とはねえ。全く巧く化けたもんだよな。どこからみても女の子に見えるなア。本当につくものがついてるのかい？」などと云いますので、あたくしは可笑しくなっていました。

とにかくにもさんざんお説教された上、家に連絡をとられて、もらい下げと相成りました。

こんなことをしてかして、どうして家が居りいいはずがありません。

義父の折檻のスキを見て、金庫を破ってあたくし家出しましたの。お金は二十五万円もありました。

今度は少し遠くへ行ってみよう、と九州行の汽車に乗ったのも、あたくしの懐が暖かかったせいかも知れません。

あたくしはのんびりと独り旅を楽しみました。

た。別府、雲仙、阿蘇と遊びましたけれど、良家の御曹子の気まま旅行といった風をよそおっている気分でしたわ。

最南端の鹿児島に参りました時は、夏も盛りでした。強烈な南国の太陽の下で、あたくしは真黒になって泳ぎました。時には名も知らぬ近くの島に渡って魚釣りをしたりして、数日を過ごしました。その時ばかりは本当に少年らしい素直なところに帰り、体内に満ち溢れる自然のエネルギーを感じたものでございます。

辛い過去や、哀しい思い出は、紺碧の空にみんな融けて消え去り、あたくしは晴ればれておりました。このまま、この村に止どまって漁師にでもなろうかしら、と本気で考えたりしたものでございます。

あたくしがふたたび汽車に乗ってしまったのは、何も性来の気まぐれからではありません。ある日、例のように魚獲りに行った小さな島で、ふと腕をみてあたくしは驚いてしまいました。点々と、黒い小さな、まるでホクロのようなものが一面にできているではありませんか。まアどうでしょう、足にまでそのホクロが一ぱいあるのです。これは太陽が強すぎて、色素に変化をおこしたのかしら？

と頸をひねっておりました。もちろん拭いてもこすっても、一向にとれる様子もありません。浜辺にひきかえしたあたくしは、漁師のおやじさんに、聞いてみましたが、おやじさんは赤銅色の顔をくずしてニヤニヤ笑っているばかりなのです。

よく注意して眺めると、驚いたことに、その黒い小さなホクロ群は移動するではありませんか。うす気味悪くなりまして、又聞いてみました。真白な歯を見せておやじさんは答えたものです。

「心配なか！ そりゃ蜘蛛の一種でござす」あたくしは思わず「ぎゃア——」と叫んで気絶してしまいました。

まア、あんなに気味の悪いめに会ったことは、後にも先にもありませんですわよ。その蜘蛛は別に人体に害を与えるものでもないそうですけれど、毛穴から皮膚の中に入り込んで動き廻っているなんて、ねえ、思い出しでも総気立ってしまいます。

そんなことに出くわしたものですから、あたくしはとてもその地で漁師などになれそうもなく横浜へ帰ることにいたしました。でもいつの間にかお金が無くなって、博多の駅に着いた時には一文なしになりました。ぼんや

り歩いていましたところ、一見それらしき大柄な中年の女性に声をかけられました。

あたくしはシスターバー「とんぼ」のママさんに拾われたのでございます。彼女は、立居振舞に少しの無駄のない、きりりとした美人でした。あたくしは彼女に四年もの間、みっちり仕込まれて、一流のシスターボーイになることができたのですわ。

あら、もうこんな時間？ そろそろ帰らなくてなりませんわね。続きはゆっくり明日にでも……。続けるって？……じゃあもう少し……。

まアとにかく、「とんぼ」の時代は苦しい修業の毎日でしたけれど、また一番充実した生き甲斐のある年月だったと思いますの。

裏街道を歩むにしても、このように折目正しく、厳しく、誇らかに生きることとできるかと、あたくしはママに敬服し、あたくしなりの人生観も得ることができました。

そんなあたくしが自殺マニアになりましたのには、こんな理由がありますのよ。

ある時、松竹映画のロケがありまして、その時、主役の男優さんと一夜の恋をいたしました。あたくしは彼のファンでもありました

し、お店にみえた時、一目で恋を感じたのでございます。

彼から誘われた時には、天にも昇る心地になっちゃいましたわ。かりそめの恋にしろあたくしは真剣に愛しました。初めて、ほんとに生まれて初めての気持でしたの。

彼の方も、これまで出合ったどんな女性よりも君はすばらしいと、美しい眼をして云ってくれました。

そして「ああ、君は僕の本当の恋人だよ。

一生離しはしないからね」と、うれしいことを、独特のあまアい声で囁き、妖しい恋のため、朝まで眠りは訪れませんでした。

帰り際に、彼は一万円下さったのですけれど、あたくしはお金など戴いては、きれいな恋が冒瀆されるように思ひまして、無理矢理お返ししましたの。

次の夜、そわそわとあたくしは仕事も手につかぬ有様で、彼の長身がずっと現われるのを待っておりまして。しかし閉店までとうとう来てくれません。翌日、彼はロケが終って東京に帰ったと知りました。

かげろうのように、はかない恋でしたわ。間もなくあたくしは隼人さんと知り合いました。恋しくてなつかしいスターの面影を、

隼人さんに求めました。ところが隼人さんのお家の方に知れてしまって、二人は仲を裂かれてしまったのです。

隼人さんは二十才の大学生、とてもとても純情な方でしたから、お家をとび出してあたくしのアパートに逃げて参りました。

すっかり怒ったお家では、怖ろしい人達をお金で雇ってあたくしを強迫するのです。

とうとう、あたくしたちは追いつめられて心中をはかったと云う訳でございます。

彼を一人で先立たせてしまい、あたくしは申し訳なくて、その時の模様をあれこれ語ることはできませんわ。どうぞお察し下さいましな。

典雄さんの場合も、同じようなケースでございます。

けれども、もっと深刻なことには、あたくしは彼に婚約者のいることも知らないで、奥さんにしてもらおうと、性転換をしたのでございませう。

それはそれは痛うございました。とても筆舌に尽せるものではありませんわ。いくら麻酔をかけていると申しまして、抉り取ってしまうのですもの、その苦しみがどんなものか解ろうと云うものでございませう。それ

も一度で済むならよろしいけれど、何回もかかるのですもの、その都度あたくしは死にそうでしたわ。

おっぱいにしても、始終注射していませんと、形が崩れる心配がありますので、ずい分とお金もかかり大変なんですのよ。

まアよく辛抱したと思いますわ。女の（男の？）一念っておそろしいのですわねえ。

心中の片われを二回も経験したあたくしはそれから日本全国を流浪いたしました。あちらのゲイバーこちらのシスタークラブ、どれほど沢山の男性を知ったことでしょう。でもどれもこれも、みのりなき愛でした。

まことの愛も、偽りの恋もひっくるめて、限りなき遍歴の途中で、一度は独りで自殺未遂をいたしました。別に熾烈な動機はなかったのですけれど、厭世観にとりつかれたと申しましょうか、何だかすべてが空しく思えてはかなく、ハイミナールを飲んだのですわ。

一年前に神戸に参りました。いいところですわねえ、神戸って……。山と海に挟まれた細長い坂の街。港には外国船が一ぱい。とてもエキゾチックでモダンな街ですわ。それに元町、南京町、山手、なんてあたくしの故郷を思い出させる名ばかり……。でも人情は少

想 議 心 理

郎



あらい・かず画

し冷たいようですわね。何となくエゴイスチックな人が多いみたい。あの、神戸言葉で云いますと「ええカッコしい」で、心は冷たいのではないかしら？ いいえ、みなさんそうではありませんわ。ただ、あたくしの周囲の紳士風の方にそんな人が多いようです。

ヤクザの英二さんに魅かれましたのは一見荒々しく乱暴に見えても、とても暖かアいものを持っているように思ったからに、ほかならないのです。人間の価値は地位やお金で決められるものではありませんもの。

でも、あたくしは去年の大晦日に大略血して斃れました。写真の結果、両肺とも蜘蛛の巣のようになってしまっているそうで、もう

手術も不可能と云うことでした。

英二さんはたった半年のおつき合いでしたのに、とうとうあの夜のような出来ごとになったのでございます。

おや、もう空が白みはじめました。もう帰らなくちゃあ、じゃあ又いつかお話を……。あら、いけない。早番の看護婦さんがもう来ちゃったわ。叱られるかも……どうしましう。

「あら、又誰か面会室に入ってるわ。ほんまに誰やのん？」
「五時以後立入禁止」の札、読めへんのかしら」

人には他人に云えないことの一つや二つはあるものだ。SMなどもそうで、別に他人に害を及ぼすのではないから、かくす必要などないようなものだが、余程信用出来る相手か同好の友でもない限り「ゆうべ女房を縛って責めたが面白かった」などと、話すわけにはいかない。

SMは異常でもなんでもない、正常な欲求の現われだと思っていても世間がそう受取ってくれない限り、やはり秘密にしておこうと

「こないだから、ちょいちょい誰か入ってるみたいやわよ」

「へんねえ、うちがゆうべ、ちゃんと鍵かけといたんよ」

「そやかて、ホラ、煙草の煙がもれてくるやないの」

「鍵はかかったままやわ。ちょっと、開けてみよか」

「おかしいわね、誰もおらへんわ……」

「そやかて、あそこの吸殻見てごらん。まだ火がついてる！」

「あの腰掛けの赤黒いもの、なあに？」

「あらッ！ 血、血よ！」

「キャアッ！」

——了——

いうことになる。

ところで十一月号のカメラハントには、上流夫人とも云うべき村上夫人が登場して、正に豊満としか云いようのない、僕のような鞭責め愛好者にとっては垂涎おくあたわざる裸身を展開されたが、女性にとって多くの男性の目に晒すことは生易しいことではない筈である。ましてや社会的地位のある夫人のことである。Mの情念が理性を超越したとでも云うのだろうか。

随

マカ不思議 女性の

二 今

この村上夫人と云い、前に何度も登場された関谷富佐子さんと云い、僕のような社会の底辺をさ迷っているものにとっては、花を手折るような、白地の絹に絵具を叩きつけるような、快感を覚えさせてくれる女性である。いわば『花と蛇』の静子夫人、珠江夫人であり、貞淑な、そして上品な女性を思い切り恥かしめ、苦痛と歓喜に、むせび泣かせてみたというSMの欲求を、或る程度満たしてくれるのだ。

話は一寸それたがとも角、誌上に自分の裸身を現わし、男の目に晒すことは、自分の秘密をさらけ出すことであり、同時に見られることによって快感を覚えるというM女性の特

質でもある。誠にマカ不思議なのは女性の心理であり、裾の乱れを気にする上品な女性のフォートの赤裸々の姿といい、陶酔の表情といい感服する他はない。

ところでつい先日のこと、友人のA君の様子がどうもおかしいので細君と喧嘩でもしたのかと思って、喫茶店に入ってさりげなく聞いてみると、これが意外、確かに細君のご気分を損じたのだが、その原因がなんとSMに關係することだったのである。A君は僕のようなフーテンと比較にならぬ品行方正な青年であり、とても信じられぬ気がしたものだ。

A君も何時しかSMに興味を持ち始め、或る女性を相手にプレイフォートを撮りまくり、その上、相手の女性の、それも六人程の女性の下着を戦利品として獲得して、それらを天井裏に置いておいたのだそう。

ところが慎重なA君にしては千慮の一失、天井のハメ板が一寸ずれているのをそのままにしておいたものだ。綺麗好きの細君が掃除をしながら、ひょいと天井を見ると羽目板がずれているので、ハタキの先でなおそうと突っいたら余計にずれて、何やら天井にある気配、何もあるわけがないのにと、椅子の上ののって下ろしてみてもびっくり仰天。女性の

下着に、これ以上ハレンチなポーズはないという女の緊縛フォートの数々、細君は危なく椅子から転げ落ちる程のショック。ワタクシの夫がこのようなヘンタイとは……というわけで、その夜はA君にひじ鉄をくわし、黙否権行使。始めは何が何やら分らなかったA君もひそかなる快楽の秘密が露見したと知って平身低頭して謝ったが、未だに細君のご気嫌がなおらるのでこの有様と、文字通りの青菜に塩の有様であった。

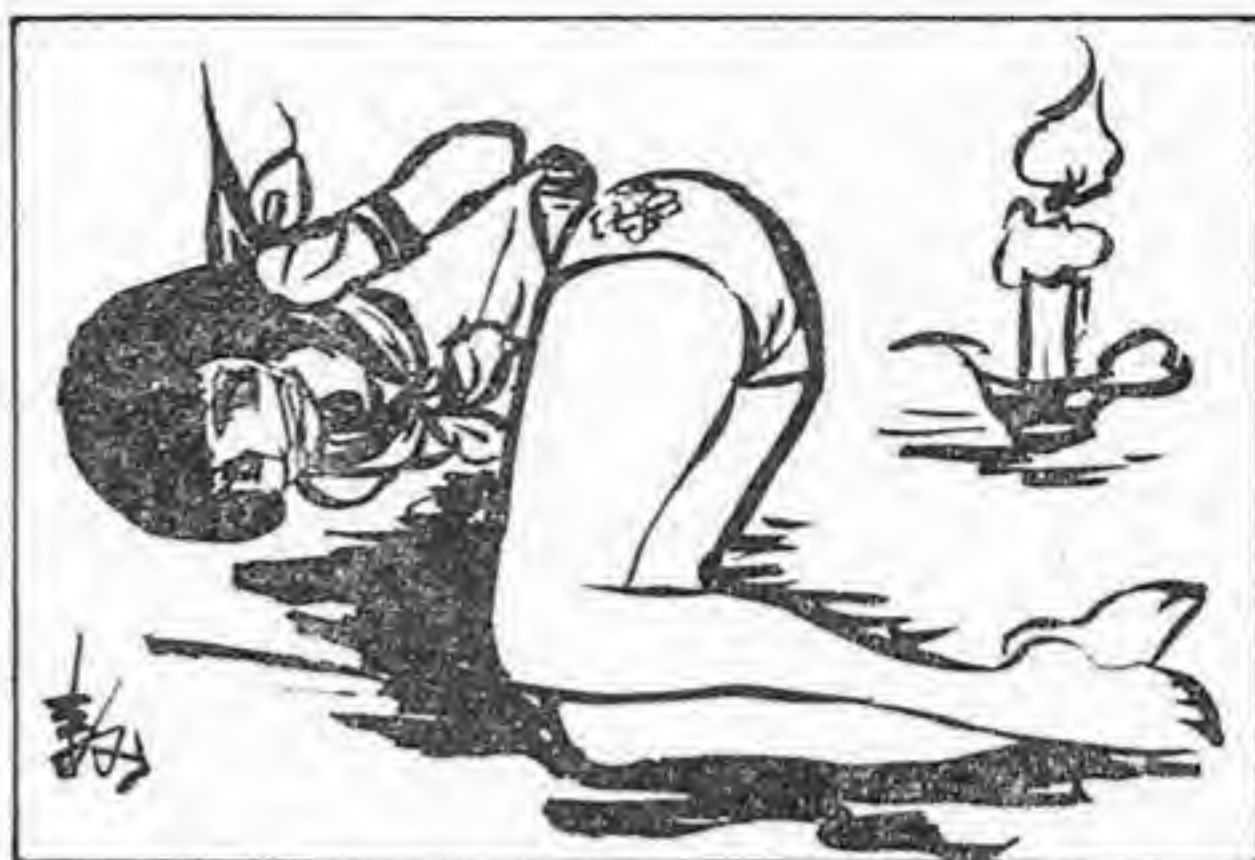
聞いた僕もなんとなつて慰めたらよいかすぐにはいい考えも浮かばなかったが、真面目なA君がSM愛好家であったとは全く意外であったと同時に、より一層彼に親しみを感じたのである。

それで嫌な役ではあったが、仲裁役を買って出て、細君を説得してどうやら成功したようだが、SMフォートは兎も角も、女性の下着は細君に激しい怒りと、下着の主に対する憎悪を起こさせたようである。

その点、僕のような不良亭主は、図々しく出来てる。「どうだ、今夜はエビでいくか」「エビは苦しいからいや、ロマンチックな鯉の方がいいわ」

女房も人間が出来てきたなあ。

カット・あらいかず



□ 水田真紀子習作シリーズ □

女子高校生

水田真紀子

明るい陽ざしをあびた寄宿舎の一室で窓ぎわに机が二つ、壁側にはワンピースと制服がかかっていて、お花畑のカラー写真がピンで止めてあったりして、何となく女らしい部屋の雰囲気でした。

それもそのはず、此処は女子高校生の英子と利子の部屋なのです。全員寄宿舎制の高校でみんな二人ずつの寮生活でした。

「もうちょっとのところで、外出されるところだったわ」

辰子が云いますと、君子も

「無理矢理、つれてきたのよ。ひと苦労だったわよ」

さも、そのことを認めてもらいたいように云うのです。

「一体、何の用なの？ あたし、約束の時間があるんだけど——」

つまらない用件なら、あとにしてほしい様な静子の口ぶりです。

「静子さん、今日は一段とおきれいなね」

利子が意地悪そうに、それでいて多少静子の美貌をねたむように見つめますと、

「ふん」英子は、あからさまに、その美貌を不快げに、顔をしかめます。

「K大の太木君とのデートでしょ？」

と、きりつけるのです。

「えッ？」

静子の顔色がさっと変わったようです。それを見届けますと英子は、みんなに意味ありげな目くばせをします。「ワッ」とみんなは

「つれてきたわよ」

「さあ、はいんなさいよ」

君子と辰子に押されるようにして、部屋の中に入ってきたのは同級生の静子でした。

「御苦労さま」

「いらっしゃい、静子さん」

部屋の中では英子と利子とが、待ちかねたように立ち上って迎えます。

日曜日の朝のことでした。

静子の身体に飛びついたのです。

「あッ？ 何するの」

静子は急にとびつかれて驚いたのですが、三人の力で、たちまち床の上にねじふせられてしまいました。

「まあ、どうしようっていうの？」

腕いたのですが、三人は、かねて打合わせが出来ていたでしょう。辰子と君子が左右から静子の両手を押さえ、利子が静子の制服のスナップをはずし、胸もとを拡げると、セーラー型の上衣を脱がそうとするのでした。これには静子も驚き

「いやよ、よして。何するの」

真剣になって、そうはさせまいと抵抗しましたが三人掛かりでは、どうしようもなく、無理矢理に脱がされてしまったのでした。

そうしておいて、静子の両手を後へねじりあげますと、素早く用意してあったひもで静子の手首を縛ってしまったのでした。

「ひどいわ、どうするのよ。ほどこいてちょうだい。いやよ、くくったりなんかして——」

静子は自由のきかなくなった身をもたえながら抗議するのですが、英子が寄ってくると「大木君とはどこまで進んでるの？ 静子」あごをぐいと持ち上げて、のぞき込んでき

ます。

「知らないわ。それに、そんなこと、貴女に云う必要ないわよ」

静子は憤然とするのです。

「しらばっくれないでよ。これは何さ」

静子の前で紙片をひらひらさせるのです。

「あッ、それは、あたしの——」

「そうさ。今脱がせた制服の胸のポケットに入ってたじゃない？」

「まあ、ひどい事するわね。人の持物を勝手に調べたりなんかして——」

「十一時に、いつもの所であって書いてあるわね。これ、大木君の字だわ」

英子はいまいますように、その紙片を静子にたたきつけると、バシッとその顔に平手打ちを喰わせたのでした。

「あ、あッ」

その痛さに静子が、縛られた身をよじってこらえます。

「利子。いいから、やっちゃんよ。君子も辰子も手伝って——」

云われると、三人はまわりから静子にむらがつてゆくのです。

「面白くなってきそうね」

「静子、あばれても駄目だから、おとなしく

してるのよ」

みんなして、これから静子の制服を脱がせてゆこうとしているのです。

「あッ、いや、そんな——」

静子は、それを覚ってあばれましたが、縛られていては、どうしようもないのです。三人がかりで、紺のスカートを脱がされてしまいました。

「まあ、ステキなスリッパ、つけてるわ」

制服の身で、おしゃれと云えば下着だけ。

まして静子は、これから、みんなが云うようにボーイフレンドの大木君に映画につれていってもらう事になっていたのです。そのスリッパも肩紐を外されますとスリリと脱がされ「いや、やめて。いやよ」

もがいても、もう、ブラジャーが見えてきて、素肌があらわになって、スリッパをぬきとられるとガードルをつけた下半身が黒のスッキングが脚まであからさまに見えます。

「ずい分、おしゃれしてるわね」

女は女らしく、静子の肌着に心を奪われるのでした。

「いや、いやよ」

もう泣くように、もがくのもきかないで、ガードルをはずせば、薄いナイロンの短いパ

ンティだけになり、それがすらりと伸びた黒いストッキングと調和して同性ながらなやましくも美しいプロポーションでありました。「ちょっと待ってよ。どうせ、まだ日は長いわ。ゆっくり遊ぶのよ」

英子がくちばし入れると、あとの三人は、云うままになるのですから妙なものです。

静子は、そんな姿にさせられて床の上にころがされているのですが、もうあきらめたのでしょうか、それとも恥かしくて口もきけないのでしょうか、身体を横向きにして丸め両ひざをかかえるように曲げて恥かしい姿をかくすように、じっとしていたのです。

「静子って、身体の線もきれいだわ」

「案外、こうして見ると、発達してるわね」
君子と辰子がうらやましそうにながめて云うのを利子は

「こんなに、まるまってちゃ見えないわ。仰向けにして脚を伸ばさせなくちゃ」
と英子の顔をのぞくのでした。静子の身体は上向きにされます。

「肌もきれいな」

辰子は相変わらず、うらやましそうです。ブラジャーとパンティだけで大事な所はかくれていますが、こんな裸身をしばらくして、

あからさまに上からのぞかれるのに、静子は「ひどいわ、ひどいわ」

自由になる顔だけを横に向けて真ッ赤になつてつぶやいているんです。両手が後にかくれているだけに、このポーズには痛ましさがあるのですが、英子は

「ブラジャー、取っちゃうのよ」

君子にうながします。

「あッ、いやよ」

横にむいて眼もあけられない静子が哀願するんですが、無雑作にブラジャーがはずされます。

「まあ！」

まだコリコリしたような、それでいて充分丸みをもった静子の両の乳房が、明るい陽ざしの中に晒されたのでした。

まわりの眼が息をのんだように、その個所にそそがれています。

静子はかくしようもなく、せめて身をよじろうとするのを

「駄目よ。横を向かしちゃ」

利子が、あわてて肩を押して引きもどすのでした。

「待って。いいことがあるわ」

英子が思いついたように、君子と辰子に指

図します。押入から寝具がとり出されて一人が、それをくるくると長くまるめますと、静子の両脚をつかんで持ち上げておいてから、仰向けにされた静子の背の下に敷くように、腕のつけ根まで押し込んでゆくのです。

手首を縛られた両腕は、そのふとんの下になり、胴の部分だけが、その上に寝かされると胸の部分が大きく反りかえって、乳房のところが、まともに持ちあがって背に敷きこんだそのふとんに掛かった自分の体重で腕のつけ根を床に押さえつけてしまったので静子はもう寝がえりをうつことも出来ないようになってしまいました。そればかりか、かくそうと思っていた乳房が張りさけるように持ち上げられています。

「どう？　こうすれば、腰まで浮きあがるから手首も痛くないでしょ」

英子は、このアイデアに、よろこんでいるようです。

静子の身体を一層恥かしい姿勢にさせたと云うことがうれしかったのです。きつと。

君子と辰子が両側に長く余った、まるまったふとんの上に乗っかってしまったので、もう静子の裸身は身動き一つ出来ないんです。英子の指図で君子と辰子は両側から静子の乳房

をもてあそぶことになりました。最初、二人にきゅっと丸い乳房をつかまれると

「あ、あッ、いや。いやだわ」

静子がビリッと震えて、眉間にしわをよせて顔をよじったのですが

「すべすべして、いい感じ」

「静子さんの、大きくてすてきだわ」

「いじりごたえがあるってものね」

「やわらかくって、ピチピチしてる」

てんでに勝手な事を云いながら、それでも指先だけは器用に静子の乳房を、ねっちりといじり続けてゆくのです。

「あ、あッ」

「うーッ、よして——」

静子はせつない声を上げ始めてきました。君子も辰子も、どうやると、静子がどんなになるかは、よく知っているのです、じりじりとあそび込んでゆきます。

「乳首が固くなってきたわ」

「あら、ほんと」

ピンとはじいたりすると

「う、う、うッ」

静子がうめくのです。大木君に逢いにゆく身が、こうして恥かしい裸身にされ、縛られて身動きひとつ出来ないようにされて、敏感

な乳房をほしいままにもてあそばれるとは、静子にとって夢にも思わぬ出来事なのです。

約束の時間におくれる。

大木さんを待たしちゃんけない。

あせるのですが、こうして乳房をいじられ続けられると、女体の弱さがやりきれなく、恥かしい、やめてほしいと思いつながら、生理の悲しさで、始めて味あう得も知れぬ快感に陥ってゆくのでした。

「あ、あ、あ。よして——」

口では云うのですが、君子と辰子に休みなくもまれたり、つかまれたり、乳首をはじかれたりされていると、ただもう不自由な身体をよじって、切なげにうめくばかりです。又静子をいじめている君子と辰子も、その姿態を見てから余計に興奮して、ここを先途とやわらかくて弾力のある静子の乳房をもみ続けでゆくのです。それを英子と利子は愉快そうにながめています。殊に英子は自分が好きで以前から交際を続けていた大木君が、ふとしたきっかけで、静子が紹介されると見向きもされなくなつて、そのジェラシーがこんなことになったのですが、他の三人も『ミス××高校』と噂される静子の美貌に女独特のジェラシーがあったのかも知れません。

「はあ、あーッん」

静子の眉間のしわが一層、深刻になり、鼻で呼吸し始めるようになると、利子が

「調子がついてきたわね。静子が——」

ゆれくねっている静子の腰のナイロンのパンティをぎゅうッとする手の掌で押さえこむと

「あ、あッーあ」

静子の裸身がピクリと動いて、もう身も世もなく、もだえるのです。

「あら、べっとりしてるわ」

その声に、一番驚いたのは静子でした。理性に反して恥かしい生理のうごめきが、たまらなく顔を真赤にさせてきたのです。

「いっそ、脱がしちゃおうよ」

英子がしゃがみこんできて、英子のパンティに手をかけます。

「あ、いあん、ゆるして、そんな——」

静子が大きく身をよじってもがきますが、後手にしばられて押さえつけられていると逃げられようもなく、まして背で丸まったふとんのために腰が宙に浮いているので、どうしようもなく、スルスルとひざまでおろされてしまします。

「ああッ」

全身を赤らめてもだえるのです。くるくる

と丸められて足首から抜かれると黒のストッキングをまといはいますが、とても正視出来ない姿態になっているのです。

「どう？ 恥かしいでしょう」

英子は、心地よげに見ています。皆の視線も珍しいものでもみるように静子の哀れな姿にそそがれます。女同志で寄宿舎の浴場でお互いにそんな姿にはなるのですが、腰をかかめて殊更にタオルなんかでかくしているし、意識してどうこうということはないのですがこうして部屋の中で抵抗の出来ない女身をおからさまに脱がせたということが、軽いアパンチュールを感じさせるのでした。

脚をちぢめようとするのを、無理に伸ばさせると、宙に浮いた静子の体は、みんなの視線をまともに受けて、こんな残酷な事はありません。十人よって十人十色、やはり、そんな姿には興味をもって、いじめてみたりする度に

「ああッ、いゃん、あッ」

静子の悲鳴が、部屋中に、こもってゆくのです。さんざんながめたあげく英子が画筆を取り出してきたのです。

「ううッ、ひどいッ」

静子の抗議をよそに、英子の手先が器用に

うごく、ピクリピクリと静子の身体が、なまなましく、おどってゆくのです。

「ああ、あーッ」

さんざん乳房をもてあそばされて、今こうして最も敏感な神経をいじめられてはたままりません。こうすることが、どんなことになるのか実はみんな経験はないのです。英子にしても先輩達から聞いたたり、回覧の本で続んだりして知っているだけで、それはあくまで、生つかじりのものなのです。

あくまで興味本位、好奇心と申しましょうか、こうやって静子を恥かしめることに目的があったのです。静子を最も恥かしい姿に縛り上げたこと自体に、残忍な好奇心があったのですが、それを更にいたぶることによって静子を恥辱の極致に陥れようとする単なる遊びでした。

しかし、これを強制されている静子にとってはたまりません。勿論、始めての体験なのですが、もう肉体的には完全な女性になっているのですから、これはたまらないのです。

「あ、いゃん、許して——」

もがきぬいているのですが、そのもがき次第に全身を燃え上らせて、始めて味わう切ないしびれに崩れてゆくのを理性で止められ

なくなってくるのでした。

君子が、仰向けにされた静子の頭上で顔をはさみこむように両足でふとんを押さえて、両の掌でふくよかな乳房を、依然としていじりつづけているのです。辰子と利子が、ストッキングをつけた静子のふとももを左右からつかんでいて、ふとももの内側の、やわらかい肌ざわりを楽しむかのように、素肌を掌でもてあそんで、静子の正面では、英子が画筆の先で、器用に静子をいじめぬいているのです。

静子の切なげな吐息だけが、部屋の空気をふるわせて、そのうめきに、みんなは余計やるせない思いにさせられて、ここを先途と夫々静子の裸身をいじめてゆくのでした。

「大木君になら、何でも許すんでしょ」

英子はもがいている静子が、だんだん憎らしくなってくるのです。全身がべっとり汗ばんで、時々ぐぐぐと四肢が硬直するように静子もがくと、みんなして一層力を加えてゆくのです。

「あッ、ああッ」

君子の両脚にはさまれて、横へも向けない静子が、もう身も世もないうめきを上げて、そりかえった裸身を、更に伸ばして大きくの

けぞりました。

「とうとう落ちたわね」

「ぐったりなっちゃったわよ」

手をはなすと静子の裸身は、両足首まで硬直させて、真すぐに身体の線を伸ばしてしました。みるからに、あさましくも屈辱的な姿態です。ブラジャーとパンティでかくすべき女体が、ぐったりのびているのです。

「見てごらん。画筆の先を——」

「ほんと。静子もぐったりね」

みんなして、そんなになつた静子をのぞきこみ、すっかり色づいた裸身を、しばらく観

賞していましたが、すぐまた交代で静子をはじめ始めるのです。

「ああ、ああ、あ」

「うう、うう、うッ」

そのたびに静子のもうどうしようもない声もれて、のけぞります。もう恥かしさも忘れ、静子は一匹の女体として何度も何度も陽光の中でもだえるのです。

大木君を待ちぼうけさせてしまったという焦りと悲しみの中に肉体から襲ってくる陶醉に、ふとすると大木さんにいつか腕をまわされて抱かれた時のしびれが錯覚となつて湧い

てくるのをどうする事もできなくなってくるのでした。

大木さん、貴男の為に、あたし、こんなひどい目に合わされてるの。呼びかけるような思いが静子をまるで殉教者のような思いに引き入れるのでした。もう身体を動かす力もないほど、さんざんいじめぬかれ、そのあげく英子がとり出したものを見た時は、本当に驚いてしまつて、縛られている身も忘れてもがきました。

「あッ、いや。かんにんして。そんなことされる静子、お嫁にいけないなっちゃうわ。ゆるして——」

「馬鹿ねえ、大木君になら許すんでしょ」

失恋に狂った英子は、もう前後のみさかいはなかったのです。英子に責めかかられた静子は、

「いや。いやよ」

思わず大きな声を出してしまいました。

しかし、その口には脱がされた自分のパンティがおしこめられていました。

「むッ」ともがくだけで、何の抵抗が出来ません。お腹の中を突きやぶるような痛みに静子は気を失ってしまいました。

——(おわり)——

☆奇クサロン☆原稿募集

一、大好評の『奇クサロン』の掲載に適した短文、写真、絵画を求めます。

一、内容は本誌の編集方針にふさわしいもので、寄稿家編集者執筆者に対する呼びかけ、読後感、感想、批評、映画鑑賞、短信往来、SM時評、図書雑誌紹介、見聞記、詩、歌、川柳、漫画、諷刺、などなど。

一、投稿には必ず「奇クサロン原稿」と明記して下さい。誌上の匿名は御自由ですからペンネーム(筆名)を添記して下さい。

一、採用の可否に拘らず応募下さった方全員に対して編集部作成のフォトを贈呈いたします。

す。贈呈フォトの枚数は作品の出来に従って増減いたします故御承知下さい。

一、誌上に掲載しました作品に対しては枚数に応じて稿料又は謝礼を呈します。

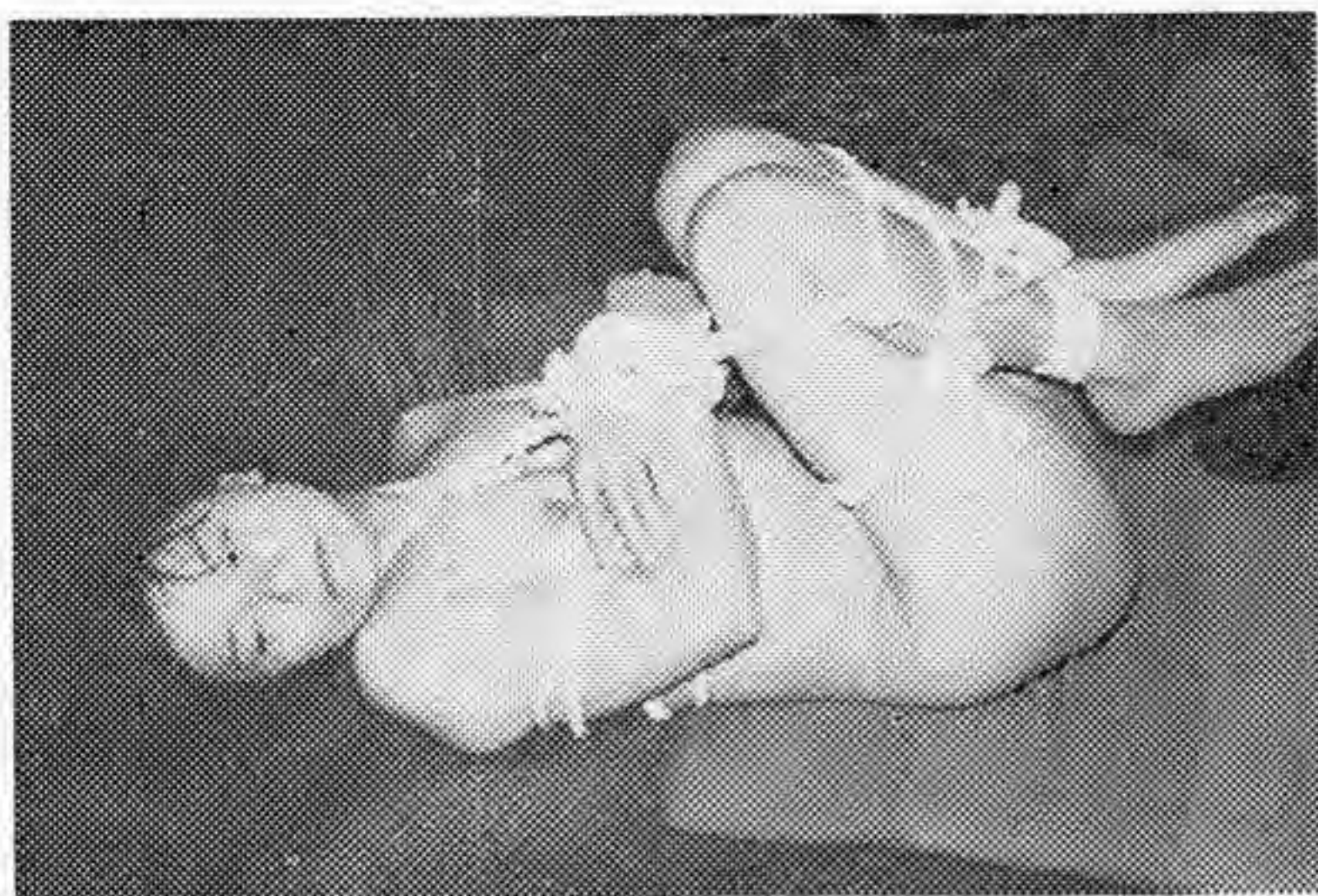
一、奇クサロンに掲載可能な絵画、写真、映画スチール、イラスト、漫画などに対しては、ても応募者全員に編集部作成のフォトを贈呈いたします。優秀な作品は誌上に発表の上、画料をお支払い致します。

一、編集参考資料の提供に對しましては、出来るだけ高価に購入したいと思しますので、お手放し可能の方は内容の詳細に希望価格を附してお申込み下されば、折返しお返事差し上げます。

—手記—

新しい刺激を求めて

渡部 光雄



糖尿病という難病にとりつかれて以来十年余り、私の性的年令は、自分の年の何倍も年をとっていた。夫婦和合のそれも、常に新しい刺激を求め、その上に成り立ち、いずれの日からか、妻を縛り責めることを知り、そこに激しい興奮と肉体の燃え上りを感じた時、私はSMプレーのとりこになっていた。

妻の心の底にも、縛られ責められ、恥かしい思いをさせられることを望む本能が、ねむっていたのか、私の行為にも、少しの抵抗はあったけれども、自然とその中に欲びを覚え自ら責められることを求めるようになり私達夫婦は、生活の中にSMプレーがなくてはならぬものになってしまった。

始めの頃は一本の麻縄、一筋の古ネクタイ

にも心の底から燃え上り、白昼からでも、お互いに求め合ったこともしばしばであった。それはただ感情の起伏にまかせたプレーに過ぎなかった。やがて、縛ることから責めをいろいろ考え、クスグリから始まったプレーもローソク、針責め、浣腸、と、その度合いもだんだん激しくなった。

お尻に集中していた責めも、下腹、肛門、乳首と体の全体へと拡がり、最近では、注射針五本を束ねたので、両方の乳首をつつくことに妻は欲びの声を上げた。最もSMプレーに陶醉した時、女性シンボルのやわらかい部分へ軋涙を落としても、欲涙を流し、かなり強烈な責めにも耐え、甘受するM的女性へと成長していった。

ここまで妻を飼育して来た私は、またもやマンネリ化の陰のしのびよりにせきたてられるように、何かを求め始めた。今日まで夫婦だけが楽しみ、欲び合ってきた夫婦プレーを同好者の前に、さらけ出し、批評をおおぎたい。夫婦プレーの同好者同志の交流など出来れば、それは新しい刺激剤となって、私達夫婦のプレーもまた、より楽しくなるだろう。

そんな願いから、四月号に妻の告白を投稿させたのだが、それは、私はもとより妻にも

大きな刺激となり、自信となり、プレーはエスカレートし、妻のM的願望はより深く、広く、激しく、私のどんな責め、どんな要求にも積極的に応えるようになった。

私のS的願望は、肉体的ハンディも手伝って、新しい次元を求め脳裡に固定されたものが芽ばえ、日とともに成長していった。それは、私達夫婦の間に第三者を招き入れ、その人によって妻を飼育させ、羞恥責めにのたうつ妻の姿態を、この目の中にしっかりと焼き付けたいということだった。

私は妻にこの話を、いつどんな時、打ち明けようか、と、いろいろ考えた末、プレーの中で、言葉のプレーとして約束させよう。それが一番自然的であり、効果的であろうと思った。

ある日、妻を責めながら、今日こそは『あの事を、妻に話そう、きつと約束させよう』と、心に決め、私の責めに燃え上って来る妻の姿態を見ながら、思いきって話して見た。

「おれ以外の男性とプレーしたくないか。したいといえ」

「はい、あなた以外の方に、責められたいです」

「だれとしたいか、いえ」

「辻村さんのような方とプレーしたい」

「それなら、辻村氏に手紙を書け」

そんな言葉のプレーを始めてやって見た。

その時、妻は激しく燃えた。私の言葉にオーム返しに答える妻に、一種のシットのようなものを感じながら、私のS性は、またムラムラとカマ首をもち上げ責めに責め、陶醉する妻に熱い肉体を投げつけて行った。

その日以来、何度となく言葉のプレーを重ね、いつしかまだ一度も見ただけでもない辻村隆という人物を夫婦の間に想定し、それが刺激となってプレーがより一層楽しくなった。

夢の中に求め想定したことを現実のものに



したい、その可能性も決して少なくない。思

いきって辻村氏への手紙を書くことを妻に命じた。その内容については、辻村氏のカメラハント十月号の前文である。しかし、それ以後、何の連絡もなく、夫婦の間に「夢の夢でしかなかったのか」と、あきらめのようなものが生まれはじめた頃、待望の手紙を受けとる。ここに私達夫婦と辻村氏との間に一本の細い糸のようなつながりが出来、七月十四日をプレーの日と決定したのだった。

私の一方的ともいえるこの行為にもしやな顔一つせず、自からも、あわい期待と、未知の刺激に心を動かし私を信じ、これまでに成長した妻をいとしいと思わずには居れない。

昭和四十五年七月十四日、この日を私達夫婦は、決して忘れはしないだろう。いや、忘れてはならない大事な日として大切にしなければならぬ。その結果がどうあれ、私達夫婦プレーへの、新しい出発となる日でもあるからである。

たとえばの心の高鳴



りの中にその日を迎え、愛する妻、好美をカメラハントのモデルとして辻村氏のもとへ送ったのである。

真夏の太陽が、ぎらぎら照りつける正午過ぎ、私は妻とつれだって家を出た。辻村氏と約束した駐車場までゆっくり歩いて十分たらず、歩きながら私も妻も、これから起こることを考えてか、交す言葉さえなく緊張して歩いた。

約束時間の十分前、私は、始めて妻に話しかけた。

「思いきりプレーして来いよ」

そっと握った手がかすかにふるえていた。考えて見れば、いかに夫を信じ、プレーの中で約束し、自分もその気になったにせよ、まだ見ぬ男性にこれからの何時間か、裸にされ

縛られ恥かしいことをされその一つ一つをカメラに納められるのである。

不安があって当然。だが一言もぐちも言わずにいる妻を見ていると、その場を立ち去りがたい感情にかられながら、それを振りはらい妻をのこして離れた。少し離れたところから、せめて辻村氏が来られるまで、そっと妻を見守ってやろうと待つことしばし、一台の車がすべり込み、一人の紳士が妻に近づき二言三言、言葉を交した。

初対面の人にもいつもそうであるように、妻がにっこりと恥かしそうに笑って頭を下げるのを見て、この人こそ私達が夢の中に求めつづけて来た人、辻村氏であることを知った。どんな話をしたか、私は知るよしもないが、やがて二人が手をとるようにして、苔寺山門に消えていった。

ついにその時が来たという歓びと、妻を信じながらも、どんな結果になるだろうという一抹の不安とに、帰宅する道すがら、家に着いてからも、私の心の中は激しく動揺し、

何をしようとしても手がつかず何度となく時計の針に目を走らせた。

激しく庭石をたたく雷雨の音が一そう、私を落ち付かせず、窓をさす雷光のように、妻一人を辻村氏のもとへ行かせたことに、一瞬後悔の念がよぎってすぐに消えた。

私の思いは妻の上に走り、どこか私の全く知らない所で、今頃、妻はどうしているだろう。ペテラン辻村氏によって裸にされて縛られ針でつつかれたりカメラ・ハントに登場してくるM女性のだれもが受けるバイブレーターの洗礼に、のたうち廻り脂汗を流し悦楽の歓喜に甘い涙を流しているのだろうか、と、だんだん拡がり、私の体の中を熱い炎のかたまりがぐるぐる廻り出し、じっとして居れないほど興奮を覚えた。

激しい心の高鳴りの中で私のS性は、むらむらと燃え上り、今夜は思いきり妻を責めてやりたい、責めの中で今日、辻村氏から受けた責めの数々を一つ一つ報告させてやろうと思った。より効果的な責めかたはないものか私はそれを真面目に考えた。

よく考えて見ると、やはり、いつも行なっているものと少しも変わったアイデアとは思えないあたることもなく、妻が一番好む責め方が

よい効果をあげるのだろうと、自分の興奮のあまり何を考えていたのかと、自分で自分がおかしくなったりもした。

私の今日の一連の行為を何も知らぬ人達が見る様なことがあったら、彼らは私を気遣いとののしり、軽蔑のどん底に私をたたきこむであろう。もし、そんなことがあったにせよそれはそれでよいではないか、今日という日が私達夫婦にとって、新しい人生への出発ともなり、夫婦だけが祝い、その意義を正しく理解すればよいのではないか。

妻はきつと私の前に手をつき、辻村氏から受けた責めのすべてを、私の命ずるままに報告するであろう。またしても私の心に去来する妻の姿態は、お尻を高々と持ち上げ大きな流腸器を待ちうけていたり、緊縛された柔肌に太いパイプが襲いかかり、恥かしめを甘受するあられもない姿など、私はたまらないほど燃え、そうして動揺した。

それは、辻村氏のもとへ妻をプレーへと走らせた自責の念か、あるいは、かすかなシツト心なのか乱れに乱れた心の中で妻の名を何度となく呼びつづけた。

夕立もいっしか小降りになり時計は四時を打った。もう私はじっとして居れなくなって



家を出て、妻を待った。辻村氏に送られて帰って来るのを見た時、思わずかけより、傘をさし出しながら「お帰り」と声をかけたが自分の声が上ずっているのが自分でもよく解った。

車窓に見た辻村氏の顔は、にこにこして今日のプレーが成功であったことを物語っていた。しかし、一瞬、氏の目の奥にキラリと光るものを感じた私は、人の心の底を一目で見通す何か、きびしいものを持った人物と思っただ。そうして不思議に心は落ち付き、安心した。一度ゆっくりとお会いし話したい。近

い内にきつとそのチャンスがあるようにと願って雨の苔寺山門で別れた。

ぴったり私によりそい歩く妻はあまり、口を聞かずにいた。それは、今までの数時間、辻村氏と過ごして来たことが、どんなにか緊張の連続であったことだろう。今妻は、その一つ一つを、ときほぐしているのだろう。何も言わず、そっとしておいてやりたいと思っただ。しかし、手首に残る縛り責めのなごりを残す縄目を見た私は、

今日半日、想像していたそれより、はるかに強烈なプレーが行なわれ、妻もその中に陶醉したにちがいない満ちたりた表情に私はそれを知った。

子供達も寝静まり、夜もおそくなってから初めて私は妻に「今日はどうだった？」と、たずねて見た。

「辻村さんで、とても、やさしい方。でも、いろいろと恥かしいことをされたの」「今日はわかってるだろう。私が、どんな気持ちで待っていたか。お前は、今日の出来事を私に報告する義務があるんだ。それも、お



前の一番恥かしい格好でするんだ。よいか」
「はい、よくわかっています。あなたの好きなようにして下さい」

と自分から服を脱ぎ、全裸になって目を閉じていた。その妻の身体には、私の期待していたほどのプレーの痕跡は発見出来なかったが、両腕に残るかすかな縄目にも、私の心はいつもと異った胸の高鳴りをおぼえ、愛用の太目のロープでぎりぎり縛り、椅子に坐らせた。

開股させ、まず、くまなく検査した。小さな桜色の、そこに何度となくバイブレーターバイブレーターの洗礼を受けたのかと思うと、私は思わず口

ーソクに火つけ、責めを初めた。
「あつい、あつい。そんなに近いところからしないで……」

「何をいってるんだ。辻村氏から、もっともっと、あついことされたのだろう」

「はい、あついわ、いや……」

「さあ、報告するんだ。どこで、どんな責めを受けて来たのかを」

「嵐山のホテルでプレーして来ました」

「そんなことは、わかっている。どのようににされたか聞いているのだ」

私は、とまることなく全身に軋涙を落としながら妻にせまった。

「あつい——あつい、二人でビールを飲みました。それから、いやいや、そんなところにあーあつい、それから、ワンプリースを脱がされました」

「パンティも脱がされたんだろう」

「はい、丸裸にされ縛られました」

私は片手にローソク、片手に針を持ち、チクチクつき、ローソク責めをくり返した。

「ここにバイブを受けただろう」と、激しく熱い軋のしずくを落とした。

「あーあーあつい……あつい、ゆるして下さい。ゆるして、そこだけは」

「ここをバイブで責めてもらったといえ」

「はい、あーあ、あつい、そこにバイブを受けました」

「その時の様子を話すのだ」

「はい、でも、とても恥かしくて……」

「それを報告するのだ。また熱いのがたりなのか、さあ、これでもか」

椅子から下ろした妻を、横にころがし、肛門の周囲を激しく針でつついた。

「はい、いいいます。それは、あーいたい。お話しますから、ゆるして下さい。全身がしびれるような、雲の上をふわふわとんでいるような気持ちに何度もなりました。ねえ、あなたもっと責めて。あなたが満足されるまで私をいじめて。今夜のわたし、とても幸せ」

やがて妻は私の責めに興奮し悦楽の甘い声をたて、身をよじり、あられもない姿態を脂汗に光らせ、執拗に責める私の行為を甘受し報告を続けた。私の肉体は、遠いねむりより覚めたように激しく、熱く燃えたぎり、そんな妻を求めて果てた。

潮が引くように興奮からさめた私は、生まれて初めての今日のプレーが、妻にとって決

して後暗いものをのこしてはいないことが私
は何よりもうれしかった。そうして私の命ず
る報告の中で、長い夫婦プレーの中から、い

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	三五〇円(送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円(送共)
半年分	6冊	二一〇〇円(送共)
一年分	12冊	四二〇〇円(送共)

郵便番号
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、
或は地方のため、入手することが出来ないとか、
かいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い
目に、手に入れたたいという御要望をよく承り
ます。そういった方々は、どうぞ是非月極御
予約下さるようお願い致します。毎月製本完
成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下さるのには
大阪市住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会
社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお
払込みの上、何年何月号より何カ月分と御指
定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装
代などは、総べて当社にて負担致します。但
し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分
二十円の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為
替、定額小為替、(切手代用は一割増)振替

つしか「辻村氏に責められて見たい」と願
いかに主人を信じているとはいえ、自からも
それを求めて被虐の道に走り、今日、それを

(大阪四二七八三番)のいずれかをご利用
願います。現金の場合、普通郵便封入は違法
です。必ず『現金書留』にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印
刷完成と同時に、外部から見えないように厳
重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料
三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送
金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者
の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号
から何カ月分送れとお書き願います。第一回
分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何
月号からとお書きにならないときは、重複や
欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に
△本号にて前金切の判を捺印致しますから
継続お払込み願います。継続のお払込みでも
何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方
は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局
留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際にお
取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構
です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。
ば、当方では御指定の局留としてお送りいた
しますから数日後その局で御受領願います。
局での留置期間は十日間でその間にお受取り
にならないときは、発送人に返戻されます。

自分の全身に受けたことへの満足感を知るこ
とが出来た。

今日、辻村氏のもとへ妻を送り、プレーし
それが成功であったことは、私達夫婦プレー
にとつて、それは、新しい刺激を求めてやま
ない、二人が進む方向を示すのであろう。だ
が、一歩ふりかえって見るならば、二人だけ
が、そつと楽しんで来た夫婦プレー。その中
に、今一人の男性を招き入れ、プレーし、そ
れが新しい人生とするならば、一つその方向
を、あやまるならば、生涯埋めることの出来
ない、大きな暗い穴を自分で掘ることになり
かねない。私は、この記念すべき日に、それ
だけは、かたく心に銘じておきたい。

これからも、益々より刺激あるプレーを続
け、よりM的女として妻を飼育し、奇クフ
ァンの前に、その飼育ぶりを発表したいと思
っている。秋になれば、辻村氏との一泊のプ
レー旅行もある。その時は私は、妻を心から
送ってやりたいと思っている。秋の夜長、私
の全く知らないところで、次から次へと、く
り出されるあくことない責めを甘受し、悦楽
の甘い声で欲ぶ妻の姿を思うと、私のS的願
望はまたもや激しく燃えて来るのであった。

△写真は渡部光雄氏提供のものに拠る▽

写真 は 佐野 寿氏 提供



沼正三氏の噂

実は順序から言えば、森本氏が私の交友録では、一番最初に会った人物である。

あれは、たしか昭和二十八年の四月頃だったと思う。

中野の私の仕事部屋に白い大きな角封筒が舞いこんだ。差出人は、いまは忘れてしまったが、英語で何とかカンパニーと書いてあったように思う。何か外国の貿易商社が使うも

連載・アブ紳士行状記

M 派 交 友 録

(13)

△ 森 本 愛 造 の 巻 ▽

鬼 山 絢 策

ののような感じの封筒だった。中を開けて見ると、

“奇クでお名前をよく拝見しています。一度御目にかかって、お話したい”

という内容のものであり、森本氏の本名が記されてあった。森本氏の本名は、周知の人物であると思うが、一応ここではペンネームで話をすすめて行きたいと思う。

森本氏の住所は、当時世田谷の下北沢にあつて、電話番号も記してあった。

電話で打ち合わせて、その夜、彼の家を訪

ねた。

下北沢の駅の南口で降りて、商店街をずつと下って五分ぐらいの閑静な住宅街にあり、かなり広そうな高級住宅であった。

ベルを押すと、お手伝いさんらしき女性が現われて、玄関から直ぐ脇の洋風の応接間に通された。間もなく和服を着ながした三十二三の白哲の好男子が現われた。

「やあ、はじめまして。森本です」

と快活に挨拶した。M派に共通する明るいタイプの人物である。

前にも書いたがM派の人物は総じて明るい印象を与える。ただその中に、開放的な人と秘密的な人とあるが、秘密的な人物は、最初相手をよく観察するために、多少口数が少ないこともあるが、犯罪者とか、一部のS派の人のように陰湿な蔭はない。陰湿な蔭をつくる要因は、社会に対するコンプレックス、同性異性に対するコンプレックスであると思うが、おおかたのM派は自信過剰派であるからコンプレックスなどあるはずがない。まして開放的なM派は、快活で進取的な人物が多いのである。

さて最初の話題は、奇クに載せられた作品の論評からはじまったが、たしか当時、はじめて載り出した沼正三氏のこと、真っ先に話題になったと思う。外国の書籍に委しいところから、恐らく大学の教授か助教授、或いは翻訳が得意の人ではないかと噂し合ったが森本氏も外国の書籍は相当集めていて、当時彼が一番、興味をもっていたのは、アメリカの雑誌「ビザール」であったと思う。それから十数年経て寺岡修二氏などによって日本にも「ビザールの会」などというのができたのだが、当時はビザールなどと言っても、ほとんど知られてなかった時代である。

話が進むに従って、当然のように今度はお互いのMの性向について語り合う形になったが、彼は女性の靴に、かなり強いフェチズムをもっていて、画用紙に黒のハイヒールを精密に描いたものを見せてくれた。

「この靴を、どう思いますか？」

ヒールが極端に高く、尖端が鋭く尖っていて、こんな靴で踏まれたら、骨の髄まで痛さを通るだろうと思われる、M派好みの靴の画であった。

「すばらしいですね」

「僕が特に、或る絵描きに注文をつけて描かせたのですよ。ですが、この絵にも一カ所、気に入らないところがあるので。で、描き直させたのが、これです」

と又、一枚の絵をとり出した。並べて置かれてみると、全く同じような黒のハイヒールである。

「ハハア……」

とは言ったものの、私にはそれほど靴に興味がないので、前者と後者の区別がつかねていた。

「おわかりになりますか。この絵は、このところがいけないんです。で、描き直させたんですが、まだどうも、もうひとつ気にいら

ないんです」

描き直させた個所は分かったが、後者の方がよいという意味が、私にはどうもまだ分かってなかった。

「これ、いくらぐらいで描いてもらったのですか」

「一枚、千円です」

私も雑誌の表紙や口絵やカットなどを、いろいろの画家に頼んでいるから、こういうものの相場は知っている。ペンだけで描かれたこの絵は当時としては、せいぜい四、五百円が相場である。

「それから、こんなものも描かせてみたんですがね」

それは女性の乗馬用の長靴の絵であった。いま、はやっているブーツではない。もっと細く長く、そしてヒールが細く尖っていて、拍車のとげが鋭いものである。

折角、見せてもらったものだから、私もじっと観察した。

よく見ているうちに、ハイヒールにしても長靴にしても、その曲線を眺めていると、女性の下半身、腰から脚線にかけての優美な曲線を想わせるものがある。

森本氏はSの女性として、最高の女性のイ

メージを、この靴から求めているのではない
かと思われた。

彼は次から次へと、女性の靴の絵や写真を
見せてくれた。

「ずい分、描かせたんですね」

「ええ、二十枚以上ですね。二万何千円も払
いましたよ」

なにも画料のことなど、取り立てて書くほ
どのことはないと思われるかもしれないが、
後に起こるいろいろの事件に対する、彼の性
格を判断する資料の一片として参考になると
思うから、書いておく。

とにかく、その時、私が感じたことは、彼
がそれだけの大金を（いまの金に換算すれば
六、七万円か）投じて、画用紙二十枚ばかり
の下絵を描かせたということは、お金持ちか
浪費家であるということである。また金額に
嘘があれば、ホラふきということになる。

いまになって考えてみると、前者でも後者
でもなく、まん中の線ではないかと思う。

また彼は封筒の中から上質の和紙に包んだ
ものを、さも大切そうにとり出して見せてく
れた。

その入念な扱い方から、何が出てくるのか
と期待していたら、三十五ミリの映画フィル

ムの、ひとこまであった。

「これはね、この映画を見て僕はとても感激
したのですよ。それで、その映画館の映写技
師に頼んで、特にこのひとこまを分けてもら
ったのです」

と言う。

その問題のひとこまのフィルムが、一体ど
んな場面のものかと、胸をはずませながらす
かして見たら、何のことはない、乗馬服に長
靴をはいた女性が馬を走らせているところの
場面だった。

内心、呆氣にとられたけれども、恐らくそ
のフィルムを大きく伸ばして見れば、彼女の
はいている長靴か、或いは馬を乗りこなすポ
ーズか何かに魅するものがあるのだろう。ま
た、その映画を観れば一層、前後の事情から
その場面が、或る種の人々にはショックング
なのかもしれない。

だが、正直言って私には、どうもピンとこ
ないものだった。

有名な写真

その後、彼の筆になるものを読むと、しば
しば乗馬に関するものが出てくるし、挿入さ

れている写真や絵も乗馬と長靴に関するもの
が多い。

「私は、どうも乗馬そのものには、たとえそ
れが女性であっても、あまり興味を感じない
んですがね。やはり馬は本ものでなく、人面
馬の方が興味がありますね」

「それじゃ、こんなのがいいでしょう」

と見せられたのは、全裸の男性に乗馬服を
着た女性が、髪をふり乱して跨がり、長い鞭
をふるって、男性の尻を叩いているところの
写真であった。

「オッ、これは凄い！」

馬になっている男性の顔は横向きだが、両
手を突っぱった胸の中に深く首をたれている
ので見えない。

女性の顔も、大きく振り乱した髪で巧みに
かくされているので分からない。

この写真は後に毎夕新聞だったか内外タイ
ムスだったかに「或るマゾヒストの秘密クラ
ブの生態」という探訪記事と一緒に大きくと
りあげられ、またその後、いろいろなこの方
面の雑誌の口絵にも掲載された有名な写真で
ある。

「これは、あなたが撮影したんですか」

「ハハ、いいポーズでしょう。」

「馬乗りの女性のポーズに、迫力がありますね。こりゃ、すばらしい写真だ」

「あなた、痛苦による責めは好まれますか」

森本氏が質問してきた。

「イヤ、私はその方はダメなんですよ。少年の頃は苦痛を加えた惨虐といったものに興味がありませんが、その後、次第に実践に移す場合を考えますとね。空想なら、いかなる惨虐も構わないが、実行するとなると、これは種々の弊害がともなうと思うんですよ。そういう風に考えてくると、次第に身体を傷つける責めというものは敬遠すべきではないかと思うように、戒める気持ちになってきたんです。私は自分に対しては、かなりきびしい方で、日常の行動でも、自らつくった戒律がいくつもあって、やってはならぬと自分に命じたことは、絶対やらぬ主義なんです。例えば医者から、この食物はあなたの身体にはよくないと言われれば絶対食べませんし、そのうちに、前は好きだったその食物が嫌いにさえなってくるんです。そういう質ですから、空想の範囲では許されても、自分が実際に受けることは、現在では好まなくなりましたね」

「そうですか」

な顔つきをしていた。

「すると屈辱専門というわけですか」

「私個人としては、そうです。苦痛は、精神的なものなら、いかなる酷烈なものでも許容する傾向があるんです。これは矛盾していませんか」

「さあ、個人々々によって多少の差はあるから、しかたがないでしょうね。そういう傾向なら、こういうものなんか好きでしょう」

と、またとり出して見せてくれたのは、外国の写真のように見えたが、よく見ると絵だった。

パリの裏街のような背景で、夜である。

狭い道路の敷石の真ん中に、女が立ちはだかって両足をひろげている。その両足の前に小さな水たまりができている。その傍に紳士が道路に四つん這いになって身をかがめ、その水たまりに口をつけているという構図の絵である。

「ウムッ……と、これはスゴい！」

それは女性が道路に放出したものを、紳士が飲んでいたのであって、M派の人間なら非常にショッキングなシーンである。

森本氏は私の讃歎する声に会心の微笑をもちらした。私の性向の的を射た得意の表情であ

った。

「これも、あなたが描かせたのですか」

「いや、これは外国の本から切り抜いたのですがね」

森本氏は私の好みを最初から知っていて、わざとはじめは自分の嗜好から示して、私の好きな御馳走はあとから出すという、憎い演出をやったのである。

外国の好色本も見せてもらったが、語学は苦手の私には借りて読む気もなかった。

「あ、そうそう、家内を御紹介しましょう。おい——」

奥さんの名前を呼んだ。

暫くして玄関に出てきたお手伝いさんが、紅茶を運んできた。

「あれ、家内のやつ、何してるんだ。ちょっと失礼します」

と言って奥へ引っ込んで、五分ばかりして戻ってきた。

「イヤ、どうも家内のやつ、ちょっと具合が悪いもんで……」

と言うことで、奥さんにお目にかかれなかったが、あとになって、ひと目会いたかったと思うことになるのである。

派 が 違 う

結局、その日は十二時近くまで、あれやこれやと雑談し、再会を約して別れた。

私の第一印象は、森本氏はハンサムで上品で、博学でもあり、人をリードして行く、あるいはリードして行きたがる性格とみた。大體、金持ちのお坊ちゃんによくある性格であると判断した。これはその後の彼の行状から推しても大體、当たっているように思う。

それから二、三日して、私は春木君に会った。早速、森本氏と会った話をする、なんと春木君の方が、森本氏については、ずっと委しかったのである。

「森本さんとは、もう二年ぐらい前から会っていますよ」

「へエー、そうですか。ホラ、毎夕新聞にマゾヒストの秘密クラブの記事があったでしょう。あれに載っていた写真ね」

「ああ、あれですか。あの写真のモデルは、男も女も知ってますよ」

「へエー、詳しいんだな。それで、あの女性は誰ですか」

「森本氏の奥さんですよ」

「ホウ、そうですか、そりゃ惜しかった。あの夜、森本さんが奥さんを引き合わせると言っていたんですが、どうしたのか奥さんが出て来ないで、お目にかかれなかったのは残念だった。すると奥さんはSなのですか」

「いや、Sかどうか、そのところは分かりませんがね。なかなか美人ですよ」

「でも、あの写真は凄い迫力がありますね。」

「ええ、あの時は本気でやったかもしれせんよ。それには、わけがあるんです」

春木君の語るところによると、それはまこと奇妙な三角関係によるものだった。

あの写真の男性モデルであるが、彼は高島英次と言って、ダンスの教師をしている男だと言う。

実は後になって私も、高島とは何度か会ったけれども、その時、五十才ぐらいに見えた老けて見える男で、実際はもう四つ五つ、若いのかもしれない。しかし当時としても四十は越えていたに相違ない。

この高島という男はMとH（ホモ）の複合した性向の持ち主だった。女性には、あまり興味がなく、男性に責められるのを至上の快楽とする男だった。この男が森本氏を愛した

のである。それを知った森本氏の妻君は、高島が森本氏の家に来るのを断わった。すると高島は怒って「いまに必ず、あなたの旦那さんを奪ってやる！」と言ったそうである。

四十代の男性と二十代の美しい女性とが、一人の男を奪い合う嫉妬の斗いは、はたから見たら滑稽に見えたかもしれないが同人同志は真剣で深刻だったらしい。

そういう時に、森本氏がMの写真撮影することになって、高島をモデルにした「高島なら、あたしが」と細君が自らS女性の役を買って出たというのである。だからこそあのような迫力のある写真ができたのだと言うことだった。

「高島が僕にこぼしてましたよ。男に殴られるのはいい気持ちだが、女に殴られるのは痛くて堪まらない。森本君のために我慢したけど、と言うんです。変わった奴ですよ」

まあ我々も変わってるが、その目から見ても変わってると思うんだから、かなり異常な性格だろう。

「森本氏とは、いまも、つき合ってるんですか」

「いえ、この頃はあんまり会いません」

「どうしてですか」

読者ギャラリー『ごちそう』春川ナミオ



「いや、昔は面白いことがあったんですよ」
森本氏が企画して『SMプレイの会』をや
るから来いという通知を受けた。春木君は、
かなり期待して、会場の青山四丁目にあるパ
ーへ出かけて行った。すると同好の男性が二
三人、集まっていたけれども、肝心の女性が
現われない。

「今日は凄くピチピチした若いSの女性が二

人、来るんですよ」

と森本氏は言っていたそうだが、何時になっ
てもやって来ない。

結局その日は何もなくお流れになってしま
ったそうだが、春木君はそれ以来、森本氏を
信用しなくなって、従って疎遠になってしま
ったと言うことであった。

「それは会費が何か取ったんですか」

「いえ、別にそういうものは取らなかったで
すね」

「じゃあ、ほんとの趣味の上だけでの集まり
だったんですね」

「まあ、そうでしょうね」

「それじゃあ何もそのくらいで、頭にくるこ
とはないでしょう。何か手違いがあったんじ
やないですか」

「大体、森本という男は、いい加減な人です
よ。そりゃあその日、女の子を呼んだのは嘘
じゃなかったでしょう。でも、いい加減な決
め方するから、女の方でも約束を守らなかつ
たのじゃないですか。人を何人も集めておい
て、ばかにしてますよ」

「しかし彼は、この方面については博学だし
いろいろ本なども集めているし、交際を続け
たら面白いんじゃないですか」

「でもねえ、僕等と少し違うんですよ、傾向
が。彼は靴フェチリストだし、Mの方もどち
らかというと痛苦の方でしょう。鞭にも執着
があるし、我々犬派とは派が違うんです」

それは、たしかにそうであった。

春木君から「派が違う」と言われたので、
私も何となく、こちらから積極的に交際する
ということもなく、そのまま何年か過ぎてし

まったのだ。

森山美歌のこと

その何年か—という間には、私の方もいろいろな友達もできたり、いろいろな経験もした。恐らく森本氏の方もその間、いろいろ研究やら、実験もしたことであろう。

久し振りに彼から、また手紙が来た。

それは—「S・M・F何とか」という雑誌を発行することになった。雑誌の内容はサディズム、マゾヒズム、フェチズムの研究雑誌である。就いては編集方針、筆者の選択、雑誌のレイアウトその他についての検討会を開きたいから、某月某日、夜七時半、京橋の〇〇ビル三階の応用化学研究所まで、是非とも御来席を賜りたい—という意味の案内状だったのである。

タイプできれいに打ってあって、出席者の名前の中には森山美歌、中野安太郎、などという、当時の奇クでは、おなじみのペンネームが記されてあった。

ちょうど、その夜は空いていたし、どんなことをやるのかと、行って見た。

時間が少し遅れて八時頃になった。

会場には森本君だけしか、顔見しりの人は居なかったが、あと五、六人集まっていた。森本氏が愛想よく私を皆に紹介してくれた。「鬼山先生は雑誌の編集にかけてはベテランの大先輩ですから、いろいろお智慧を拝借したいと思ひまして——」

その中に森山美歌が居た。

新しい読者は知るまいが、当時森山美歌という名はM派にとって、あこがれの女神であった。読者通信に森山美歌を讃美する声が毎月毎月載っていた。「悩ましのサディズム」という短文を発表して以来、女性のサジストとしては、本誌に登場した第一号だと思う。「続・悩ましのサディズム」が載って、更に「ドレイの安」という中野安太郎というペンネームの作品の中にも森山美歌がヒロインになっていた。

その夜の席には、その中野君も同席していたのだ。

そのほかには、女性の下着のコレクションにかけては世界各国の下着を集めているという福井氏も居た。デブプリと肥った立派な人物だった。

会議の内容は、雑誌の原稿の内容について論議された。

だが正直言つて、私にとっては子供のままだと遊びみたいな感じがした。

つまり実際に雑誌を発行するに当たつて、一番大切な基本となるべき要項が、何ひとつ考えられていないからだだった。例えば部数ほどのぐらい刷るのか、印刷、製本はどこにするのか、それよりも何よりも、事務所はどこに設置するのか、販売担当は誰がやるのか、取次関係の交渉は誰がするのか、宣伝費は、宣伝の方法は、また、それ等の財源はどこにあるのか、製作原価をいくらにおさえて何割返品で、どれだけの利益があがる見込みなのか？

そういうことが一切、考えられていないのだった。

「これは、まじめにつき合つたら森本氏に恥をかかすことになる」

現在は、まだ、そこまで到達していないのだ。

「こんな本が出たら、さぞ楽しいだろう」という空想的な段階での、集まりであると悟つた。それならそれで、こっちも楽しくやろうと肚を決めた。

「一体、現在の時点では、どの程度まで現実的な描写が許されているんですかね」

森本氏が、誰にともなく質問を投げた。
「例えば、ここに某氏の書いた原稿があるんですが、このくらいなら通りますかね」

三十枚ばかりの原稿を出した。

「鬼山さん、いかがですか」

ザッと目を通した私は、

「とてもだめですね、こんなのを載せたら、一ぺんに発売禁止ですよ」

「そうですか」

森本氏はニヤニヤしていて、困ったような顔も見せない。ここらへんにも「お遊び」気分が出ていた。

「ところで、口絵写真に使うと思うんですが、こんなのはどうですか」

と三、四枚の写真が出された。

「あら、いやだ」

森山美歌が顔をおおうまねをした。彼女がモデルの写真だった。

「ああ、この程度なら大丈夫ですね」

ところで森山美歌さんの容姿について語らねばならない。

目の大きな面長な顔で、まず十人並みと言えるかもしれないが、私の主観からすれば、やせて小柄な女性は苦手なので、セックスアップは感ぜられなかった。ただ話をさせ

ると、なかなか智的なセンスのある女性だったが、その声もきわめて女性的なソプラノで私の好みには合わなかった。

結局、会合は、みんなが勝手に空想的なことをしゃべり合って、まとまりもなく、そのうちに途中で、福井氏ほか二、三の人が退席したので、何ということなく終わった。

残ったのは森本氏と中野氏、森山さんと私の四人だった。お茶でも飲もうと、四人連れ立って新宿まで車で行った。京橋界隈の店はみんな九時か十時で閉めてしまっているからだった。

四人だけになると森山美歌さんは俄然、顔舌になった。そして、おもに私に話しかてくるのである。

ところが、どうもその話の内容が変てこりんなのである。

話は今夜、皆に見せた森山さんのモデルになった写真のことからはじまった。その写真は女性のSの場合とMの場合が半々だった。それが私には不満だった。

「今日、あなたの写真を拝見しましたが、SとMと半分ずつでした。女性のMの写真を撮られるのは、つらいでしょう」

「ええ、でも仕事ですから、しかたありません

わ。この前なんか、もっとひどいの撮られたんです。腕を後手に縛りあげられてね、身体を折り曲げて背中を踏まれるんです」

「……」

「でも妾、頑張りましたわ。鞭をお尻に受けたこともありますわ。二、三日、悲が消えなかったくらい」

どうも女性のMの話ばかりするのである。

「悩ましのサディズム」の凄まじい女王様とは、およそかけ離れたものである。

こういうことを書くのは、古い読者の中には、いまだに森山さんを、すばらしい女王様だと思っている人も多いかもしれない。その夢をぶちこわしてしまつて悪いと思うが、事実なのだから仕方がない。

私が写真を撮っていることを話すと、「先生のモデルになって思いきり責められてみたい」と、言い出す始末なのである。「イヤ私は女性のMの写真は撮らないのです」と言っても、しばらくはほかの話になるが、また同じことを言い出すのである。

途中から中野君が割って入って「イヤ実は悩ましのサディズムは僕が書いたんです」と白状した。

現在、森山さんが本誌に執筆しているのな

らこういうことは素破抜かないが、もう古い話だし、「現役」を退いているから、楽屋をぶちまけてもいいだろう。後章に書くつもりだが、鷹野めぐみさんというひと、このひとは正真正銘のSであった。

それから、中野君と話が合うようになった。私は、由紀夫人の話をした。中野君は、「そういう素晴らしいひとが居るなら、是非飲ませてもらいたいですね」と言った。「飲ませてもらう」ということは、かなり最終的な問題である。

その前に、種々のプロセスがあるはずである。ちよっと私は面喰らった。つまり例えて言えば「一度、家へ遊びにいらっしゃい」と言ったとする。「では、お茶でも飲ませて頂きに……」と言うなら普通だが「では二、三升飲ませてもらいまっさ」と、言われたような感じだった。中野君は「実は僕の友人で、あなたと同じように写真に興味をもっている人が居るんですよ。御紹介しましょうか」と言うので、日を改めて会うことを約束した。

二、三日後に中野君を交えて、その友人なる人物と或るバーで会った。

「この方は海外へも何回か出かけて、あちらの女を撫で斬りにした色豪なんですよ」

と中野君が紹介した。眉毛が一本もないとあってよいくらい、ひとえ瞼の上瞼が重く垂れ下った、あから顔でまん丸い四十五、六の人物だった。良く言えば精力絶倫タイプ。悪く言えば「なりんぼう」みたいな感じの顔だった。

「とにかく、この方はねえ、一時間や二時間はヘッチャラで持続するんですからねえ。我々は足もとにも及びませんよ」

と中野君は、たいこを叩く。我々というと私も足もと組の方に属すのかと思うと、ちよっと癪にさわった。

やがて、写真の話が出る。

「ホラ、こないだ見せてもらった、凄いの、あれ持ってるでしょう。もう一度、見せて下さいよ」

中野君が催促するとポケットから四、五枚の手札判の写真を出した。見ると男一人で二人を相手にしているもので、街頭でどうかするとお目にかかるしろものである。

ただ違っているところは、男性モデルが、彼自身であるということである。中には彼自身がクニリングスしているのもあった。

傍へ寄ってきたホステスが「なあに、あの写真？ 見せて！」と言うと、中野君は平気

でホステスに見せている。ホステスの手から手へと写真は渡って行った。「まあ、スゴイ！」なんて言うのと「なりんぼ氏」は得意そうに笑っている。

もうこの話は、このくらいにしよう。要するに「なりんぼ」氏は単なる自称、色豪でしかない。Mとは少し距りがあるようである。

また中野君についても、少しばかり開放的にすぎる。モデルになってもらっても、やたらと平気で人に見せられては、由紀夫人が迷惑する。

中野君とも、その友人とも、森山美歌さんとも、それ以来、会っていない。

彼の釈明を信じたい

森本氏から脇過へそれてしまった。もとへ戻そう。

森本氏とも、その後は会っていないが、阿麻君は森本氏と会っていたようで、阿麻君を通じて森本氏の消息は伝え聞いた程度であった。そこへもってきて突然「曙会事件」が起こった。

例によって新聞や週刊誌がジャンジャン書

き立てた。そして、森本氏が張本人みたいに書かれてあった。この記事についての資料も保存してあるが、前の佐治浩介の事件と同様なので、ここでは割愛する。

その後、森本氏は某誌を通じて釈明文を載せた。それには「私こそ被害者である」という意味のものであった。それによると、彼の周辺に悪質の人間が居て、それが会員達に脅迫がましいことをやったらしいのである。

私はその後、森本氏に会っていないし、事件についても新聞、週刊誌の記事だけの知識なので真相なるものは分からないが、私個人の意見としては森本氏の釈明を信じた。

森本氏は戦前、大手の印刷会社の社長の子息で、育ちのよさが、その人柄から、うかがえる。ただし悪く言えば、お坊ちゃん的なところがあって、金銭にでんたんなどころがあるように見受けた。これは決していい意味で

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	三千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたものの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

言っているのではなく、金のある時はパッパツと気前よく奢ったりして使う癖があり、ちょっと浪費が多いのではないかと察知された。とにかくSMに限らず、セックスを事業化することは、現代の日本では、まだまだ困難なこと、自分では悪いとは思わなくても、世間や司法の目からは「悪」に見られる節が多い。結局、その責任者だった森本氏が、ひっかぶってしまった。うまく利用されたのではないかと、私は想像するのである。

だが、結果はどうあれ、ともかく自分のやりたいことを実行した勇氣には敬服する。

私だって独身なら法に触れるのを覚悟でやっていたという気もする。

サドは牢獄で果てたが、不朽のイズムを創った。マゾッホの人生も、第三者から見れば悲惨かもしれないが、本人は、やりたいことを意思に徹してやりとげ、後世に名を残した点で本人自身は幸せだったかもしれない。我々凡人には、それだけの勇氣がないのである。

幸い彼は立ち直って、いまは健筆をふるっている。

今後に期待したい。

(この項終り)

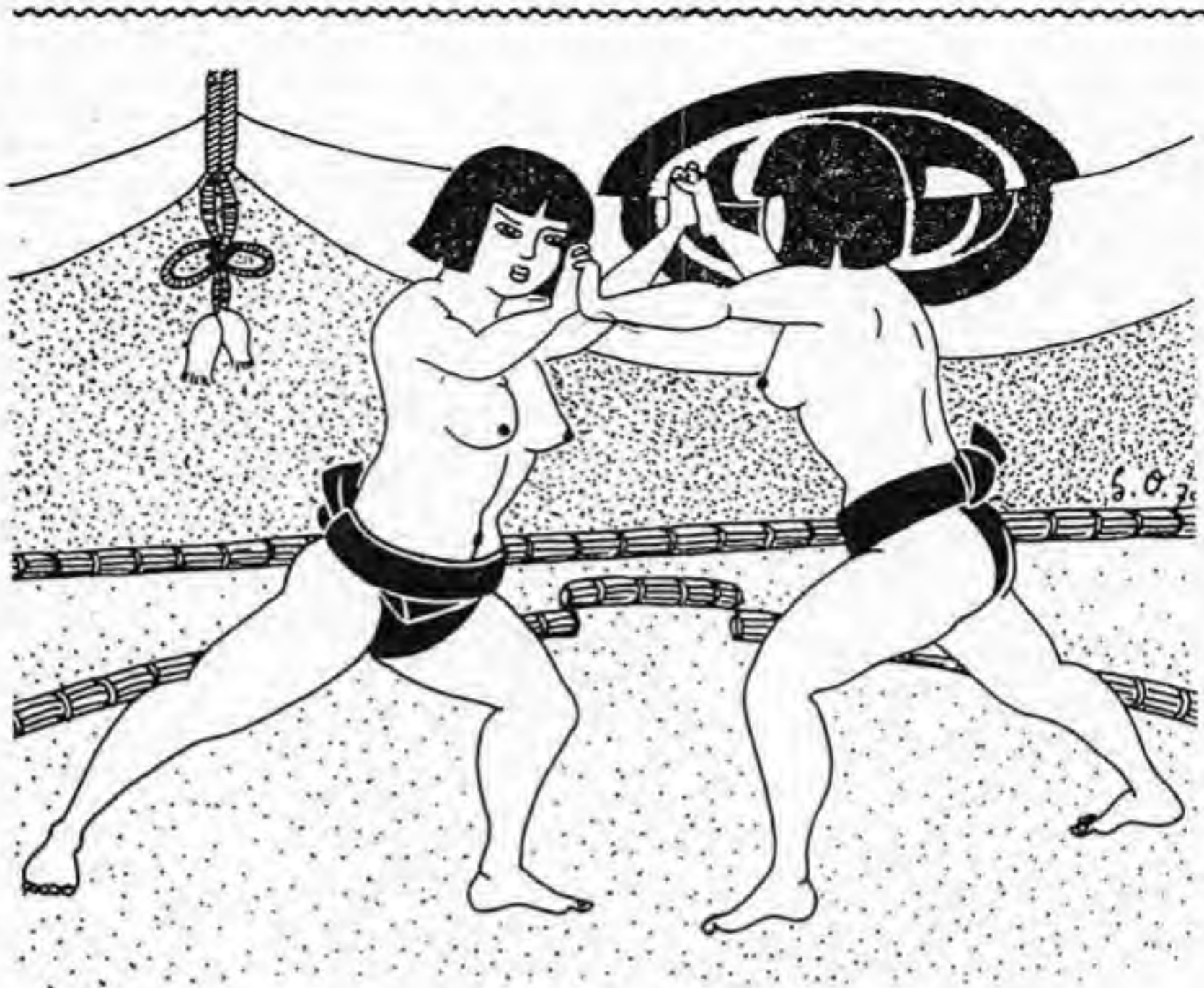
カット・雄松比良彦

助太刀娘相撲

梢の冒険

(上)

奮斗士 好太



旅でもないらしく大した荷物もない軽装。おっとりした顔立ちだがどこか隙のない身のこなし、それにおそろしく大柄だ。老僕がことさら小さく見えるのはそのため。背をなでてやっているのが子供をあやしているようにさえ見える。峠道。松木立の傍だった。

峠を下りかけて間もなく、前から痛みをこらえていたらしいのが、耐えきれなくなつてこの有様。

「少し休めばおさまりましょうから……」

と腰を下ろしたきり、とうとう体を起こしているのさえ難儀になつて、身をこごめての

苦しみよう。白いものの混じりかけた髪のあるに脂汗を浮かべ歯を喰いしばって、娘の呼びかけるのにも、やっと首をうなずくばかり。声を出す気力もないらしい。

「困つたなあ、どうしよう」

見上げる杉並木の頂は、まだ明るい陽が照っているけれど、足元の谷から吹き上げてくる風は、もう夕暮れの気配をただよわせてひんやりと冷たい。立秋を過ぎた陽は暮れやすく、こんな時に限って、峠を行き交う人の影さえ見えない。

しばし考えていた娘は、やがて何か心を決めたらしく、スイと腰を上げた。そして何のためらいもなく、ひよいと裾をからげてのあ

「爺やしっかりしておくれ！ 爺や、爺や」
若々しい、張りのある娘の声だった。

苦しうにうずくまっている老僕を、懸命

に介抱しているのは、十七、八才の武家娘。

一応の旅仕度はしているが、さして先を急ぐ

られもない立ち姿。つつしみ深い武家娘にしては何とも大胆な振舞いだけれど、娘のすました表情から察すると、どうやら人目のないところでは経験済みとも見えた。

「爺や、あたしがおんぶしてあげるからね。」

もう少しがまんしてちょうだい」

この大柄な娘は、動けなくなった病人を背負って峠を下る決心をしたらしかった。

ちょうどその時、峠の上の方から人声らしいものがきこえてきたのだった。

「まあ、よかった。誰かこっちへ来るわ」

耳を澄ましていた娘の顔に安堵の色が浮かんだ。

やがて、この近郊の村人らしい数人の人影が視界に入った。

「爺や、すっかりして……。もう大丈夫よ」

ようやく娘の声に弾みが戻って、あわてて裾をおろし身仕度を直す。こんな時の動作はおそろしく素早くまた無駄がないのだった。

二刻ほどの後、娘は、あの峠を下って一里ほどのところにある岡野村の庄屋、善左衛門宅の客間で主と向かい合っていた。

峠で会った人たちは、所用から戻ってきたこの善左衛門と四、五人の村人たちだった。「さきほどは誠にありがとうございます。」

何とお礼を申し上げてよいやら」

「いやいや、当然のことです。ちょうど通りがかりで、ほんに、よろしゅうございました」

善左衛門は柔和な表情で応待した。

「あの辺は別に悪い獣も出ませんが、もうこのごろは夜になりますと冷えてまいりますから……」

「はい、おかげさまで、爺やも落ちついたようでございます」

「ま、それなら、本復なさるまで三日でも四日でもゆっくり養生なさいませ」

善左衛門の言葉は暖かった。しかし、彼の表情はどことなく沈んでいるように見えた。

ただ一度、この娘が、野田藩の柔術師範、土田治五郎の娘、梢と名乗った時だけ、善左衛門の眸がキラッと光ったようだった。

何かよほど気にかかることがあるのか……

「あのー」

梢は思い切って声をかけた。

「あの、大変ぶしつけですが、何かお氣がかりなことでもおありなのでしょうか」

「いえいえ、お嬢さまのお氣になさるようなことではございません」

「いえ、そうではありませんが、さきほどか

ら何かお考えごとをなさっているように見えましてから……」

梢の言葉に、善左衛門は、ちょっと考え、口ごもる様子を見せたが、やがて心を決めたように

「失礼でございますが、お父さまが柔術師範をなさっているとのことでしたな」

「はい」

「それで、お嬢さまも、やはりその方をおたしなみでございますのか？」

「はい、いささか……。女だてらに、お恥かしゅうございます」

梢は頬を染めた。

しかし、「いささか……」といったのは控え目のこと、実は彼女が男も及ばぬ腕前であることは家中で知らぬ者はない。

最初は知らぬ顔だった父の治五郎も、梢の腕が本筋を行くものと見てからは、

「これが男であつたら……」

と嘆きながらも手ほどきをせざるを得なくなってしまうのだった。

「土田の板額」

とか

「あれは梢ではなくて幹だ」

などと、やっかみ半分になわさるのは、

立ち合つてはとても齒のたたない若侍たちだった。

善左衛門は少しの間、この大柄な娘を見つめていた。その目にはまだためらいの色が残っていたが、やがて

「この村には、少々変わったしきたりがございまして……」

と語り始めた。

善左衛門の語った話とはこうだった。

山深いとまではいえないながら、土地の高いこの辺では、隣村との境を流れる川が唯一の用水源。当然のことながら、干魃期には御多分にもれず激しい水争いがもちあがることになる。双方の顔役たちの寄り合つての協議も平行線をたどるばかりで何の進展もなく、お互いの利慾をむき出しての争いは年ごとに激しくなつて血の雨を降らせる騒ぎを見るほどにもなつたのだが、ある時、奥州のさる所で女たちに相撲をとらせて雨乞いをする風習があることを聞いてきた者がいて、この話が解決の緒口になつたのだつた。結局、まとまつたのは、双方の村から娘たちを選び出して相撲をとらせ、この勝負に勝つた方の村が先に水を引く権利をとる、というものだった。

「以来皮肉なことに左程の干魃はなく、この

相撲も半ば形式に流れていたのでもございまして、ここ二、三年また日照りが続きましてこの勝負が大げさにいいますと、村の暮し向きを左右することになつたのでございます」

村の貧困さが娘たちを身売りさせるということは梢も聞いたことはあつたが、娘たちの相撲が村の運命を決めるといふのはもちろん初耳。武道好きの梢の興味をそそるには十分の話題だった。

「幸い、ここ二年ばかりこちらの勝ちが続いたのでございますが、ことは諦めねばならなくなりまして……」

「何故でございますか」

梢は膝を乗り出すようにして尋ねた。

「それが、相手方はどこへどう手をまわしたのか、長岡の城下で興行を張っておりまして女相撲の一座へ話をつけて、その一行を連れてきて、その者たちを出そうという計画なのでございます」

「そんなことをしてもいいのですか」

「もちろん、私どもも抗議をいたしました。

しかし、先方は、他所ものを頼んで悪いという約束はないと申します。いわれてみればその通り、玄人が出てはいけないという取り決めもございません。しかし……」

善左衛門の眉間に筋が入った。

「卑怯ではありませんか」

梢の頬に血がのぼつた。眸がキラキラと輝いて、この娘がこんな表情をすることはめつたにないのだったが、大柄なだけに迫力は十分でもあつた。

「私に、お手伝いさせていただけませんか」

「めつそうもないことでございます」

善左衛門は、やや氣押されながらさえぎつた。溺れる者は、のたとえどおり、彼は最初梢の見事な体格と柔術師範の娘であることにふと思いつきを抱いたのだったが、この純真な娘の力を借りることまで考えた己れの惨めさに思い直していたのだった。

「もちろん、わたくし程度の修行でその人たちの相手が出来ようとは思いませんが、御恩がえしの一分にでもなればと……」

「はい、そのお気持ちには、まことにありがとうございます。お嬢さまのようなお方のなさることではございません。なにしろ裸相撲でございますので……」

「かまいません」

梢は、きっぱりといった。

「恩を忘れた者はないと申します。女子であつても裸で相撲をとるくらい何でござ

いましょう」

乗りかけた舟。梢も後へひけない。

善左衛門の両手が膝をすべった。

「ありがとうございます。おかげさまで胸のつかえがはずれたようでございます。お嬢さまのお俠氣が身にしみました」

「でも……」

梢は赤くなって、

「あまり期待なされますと、あたくし、困ります。だって、今まで相撲など、とったことがないのであるもの」

「大丈夫でございます」

今度は逆に善左衛門が励ます方だった。

「お嬢さまの柔術のお腕前とさきほどのお氣迫があれば心配なさることはございません」

「まあ恥かしい」

さっきと打って変わった娘らしい仕草に、

久方ぶりの笑いが浮かぶ善左衛門だった。

「それで、その相撲はいつなのですか？」

「はい、あと四日の後でございます」

「それでは、それまでの間、その勝負に出られる人たちに教えていただきます」

「ありがとうございます。では、明日、その者たちに引き合わせいたします。けいこ場はこの屋敷の内にございますから……」

話が一段落すると梢は急に顔が火照り、出過ぎたことをしてしまった氣持だった。

あくる朝もまた晴天。

雲はまばらに流れているが、照りつける陽は灼けるように強い。水を恋しがる緑が、早くも艶を失いかけていた。

梢は軽い朝食の膳に向かいながら、ゆうべのことを、ちよっぴり悔やんでいた。

つい氣持の高ぶりに乗って妙なことを約束してしまつて

「これが、あたしの悪いくせ……」

人前に肌をさらして相撲をとるなんて、考えただけでも顔が火になる。

「でも、約束しちゃったんだし、これも御恩がえしとあれば……」

元來がさっぱりとした男のような氣持の梢は、そのことよりも、むしろ相撲の技の方が心配になるのだった。

当日までの三日間を、村の娘たちと一緒に稽古することになっているのだが

「三日ばかりの間で技を覚えられるかしら」と、のんきな梢にも、いささか自信が持てないのだった。

やがて、善左衛門から事情を聞かされた村の娘が迎えにきた。

おときという、その娘は、梢と同じ年ぐらい。やや勝氣そうな顔をしているだけで、粗末な野良着をまとった体つきは、さして目立つほどには見えなかった。

かえって、梢の大柄な体を見たおときの方が驚いた表情を見せたくらいだった。

「おときと申します。このたびは、ごくろうさまでございます」

ほかに云いようもなかったのだろうが、梢はそのごくろうさまという云い方にちよっと笑いを誘われて

「梢と申します、さし出がましいと思つたでしょうけど、よろしくお願いします」

見かわす目が互いに、にっこりと笑つた。稽古場のあるという、その建物は裏庭の一角にある、ごく普通の納屋のように見えた。

蟬の聲が降るような、庭の木立だった。今日もまた、乾いた田の地割れがまたひどくなることだろう。

先に立つおときの背を見ながら、梢はそんなことを、ふと思つた。

「どうぞ」

おときは、その納屋の戸を開けて、梢をうながした。

明かりとりの窓が、ふつうの納屋より広く

とられていて、そこからさし込む夏の陽に、内部は意外に明かるかったが、そこに展開されている光景に梢は思わず息を呑んだ。

十坪ほどもある、広い土間の中央に土俵が築かれ、その上で二人の素っ裸の娘が激しい組み打ちをくりひろげているのだった。

素っ裸に見えたのは、暗さになれない目のせいで、娘たちは雲斎の相撲まわしを身につけたりりしいでたちだった。背から腰にべつとりと砂がはりつき、無地のまわしも汗がにじんで、まだら模様にくまどられていた。

梢は目を見張って立ちすくんだ。

砂まみれ、汗まみれの裸身がぶつかり合う嵐のような激しい息づかい。額に張りついた乱れ髪の下から、きびしい目がにらみ合う。

梢は息をのむ思いだった。

父の道場には、さすがに通う女はなかったが、家中の娘たちが、なぎなたの稽古をしているところなら、三度のぞいた事がある。

しかし、それは所詮一応の芸事の手習いにも似て、武術のきびしい修練を知る梢の目には何とも物足りないものでしかなかった。しかし、今日のこの娘たちの激しい稽古ぶりは、気迫の激しさと真剣さで、父の道場のそれに決しておとるものではないと思った。村の娘

たちの相撲など、なにほどのことがあるうかと、無意識にもそう考えていた自分が恥しかった。

たとえ技はいうほどのことではないにしても、この人たちは自分と同じものを求めている。梢は思いもかけないところに望んでいた世界を発見して、胸にこみ上げてくる嬉しさに息苦しくなるほどの興奮を覚えていた。

「さあ、お嬢さま、どうぞ」

おときは一足先に入口をくぐり、もう一度梢をうながした。ハッと気を取り戻して後に続く。

激しい寄りを弓なりにこらえていたのが、どっと重ねもちになって倒れる。

息をはずませながら起き上がった娘たちが梢にいぶかし気な視線を向けながら近寄ってきた。

「アラ、ときちゃん、どこへ行ってたの？」

「なかなかやってこないから、始めてたんヨ」

「ウン、ごめんヨ。ちょっと用事が……」

おときは、そう答えながら、後から続いて入ってきた梢に、動作で奥の方へ招じ入れ、けげんそうな顔で、この客人を見守る娘の方へ向き直った。

「このお嬢さまが、あたしたちに加勢してく

ださることになったんヨ」

「加勢って……？」

「試合に出てくださいのさ。柔術の達人なんだから、もうぜったいあたしたちの勝ちヨ」

「達人だなんて……そんな」

梢はあわてて、まだ何かいいたそうなおときを制しながら

「あたくし、梢と申します。名主さまからお話を聞いて、お手伝いがしたくなって、出しゃばりのようなんですけど……」

「おまさです」

「おてるです」

娘たちは、あわてて返事を返しながら、まだこの粹狂な加勢の正体がかめないうような顔つきで、おときと梢を見くらべていた。

おまさと名乗った娘はやや細身ながら、引き締まった肢体は若竹のような弾力を思わせ、激しい気性を物語るひとみが、あどけなさの残る顔を引きしめていた。

おてるの方は、そのおまさとは全てが対照的だった。びっくりするほどに肉づきの良い娘だった。丸々として、およそ角ばったところがない体つきをしていた。よく肉の乗った丸い肩が首を埋め、ぐいと張った胸の上に、二つのふくらみが柔らかそうに揺れていた。

肉の厚い、つきたての餅のような腹部が、やや巾広に締め込んだ雲斎の上にぽってりとあふれ出し、折り整えられた前袋も、左右の太腿のむちむちした肉付きの中へ埋まりそうにみえているのだった。

肩口や、のどもとから流れる幾筋かの汗が胸の谷間を下って腹部に径をつくりながら、さらにまわしを越えて内腿のあたりまで流れ落ちていた。汗につかっているといいたいくらいのその裸身だったけれど、汗に光る若々しい肌はたくましくも美しかった。梢は、幼な顔の残るこの二人の娘たちの純真な姿にうらやましさを感じ、そのまわし姿に感動的なものを覚えるのだった。

二人は噴き出る汗をぬぐい、全身の肌で呼吸をしているような、荒い息づかいがおさまらぬながら、おときの説明を聞いていた。

何を話しているかは、梢の耳にはよく聞き取れなかったが、聞いている二人の表情から大凡の内容の察しはついた。

何やら交互にうなずきながら、おまさとおては真剣な表情で耳を傾けていた。

「だからねえ、今年もまたあたしたちの勝ちが決まったというもんヨ」

おときはそう締めくくりながら梢の方を見

てニコリ笑った。

「わアすごい。そんなに強いのに」

おまさが感嘆の目を向ける。すっかりおときの説明を信用し切った顔つきだった。

「困っちゃったわ、そんなに信用させるなんて」梢は、おときに抗議したかったが、今更違うといっただけもう手遅れかなと思った。

「さあ、そいじゃ、てるちゃん頼むワ」

おときは、ふとった娘に声をかけ、

「お嬢さまは、後であたしがお手伝いしますから、先にまわしをつけさしてもらいます」

おときは梢に軽く会釈すると腰紐へ手をやった。スルスルと紐が解かれ、野良着が肩先を滑り落ちると、突然のように若々しい上半身が現われた。張り切った肌だった。丸い肩先からむっくりと盛り上がった胸のあたりはいかにも村の娘らしく生き生きとしていた。まだ幾分堅さの残った二つのふくらみは、かえってこの娘の素朴さを象徴しているようで好ましかった。腰布の下からは、パンと張った二つの半球が顔を見せ、それはそのまま、たるみのない曲線を描いて、はじけそうな左右のふとももへと連なっていた。もぎたての野菜を見るような野性味と初々しさをたたえた裸身だった。

おときは、そんな姿のまま、分厚い布地を手にしたおてるの方へ歩を運んだ。女同士の他、いかに人目はないとはいえ大胆なしぐさだったが、しかし、そんな何のこだわりもない態度が、この場には、かえってふさわしいもののようなのだった。

分厚い布地を受け取ったおときは、その一端をひろげて腹に当てた。広げた巾は七、八寸くらいもあり、その上の端は、ほとんど胸がかくれる程の位置にあった。その形のままおときは軽くひざを曲げて中腰になると、後ろにまわったおてるが、折り整えて尻に引き上げ右腰へまわす。今度はおときは中腰の姿勢のまま、体をまわしながら、その分厚い布地を腰へ巻きつけてゆくのがだった。二回三回と巻いては、ギュッと締め込む、おときとおてるの呼吸がびったり合って、布地は腰肌に喰い込むように締まってゆくのがだった。ひろげて腹に当てていた端を下ろし、それを横みつへ畳み込み、更に四回五回と巻きつけ、後ろの結び目をギュッと引き上げる。その端がおてるのにぎる手ひとつを残して、ピタリと決まる。なれているとはいえ、鮮かな手ぎわだった。

「あんなにきつく締めて、息が苦しくならな

いかしら……」

梢は、やがて、自分の肌にも、それが着けられる時のことを思って、腰のあたりが熱っぽくなってくるような気持だった。

あんな分厚い布地を四、五回ほども腰に巻きつけたら、思うように体を動かさなくなってしまうかもしれないなどと考えたりした。

しかし、まわしを着け終ったおときの姿はりりしかった。堅ぶとりに、みっしりと肉のついたおときの腰を飾った一筋の廻しが、その裸身の美しさを最高に引き立てている、と梢は思った。

村娘が相撲をとるなど、なにほどのことがあるう、と心のすみに抱いていた自負は、ここで完全に捨て改めねばならないと思った。

けれども、梢は嬉しくもあった。真剣に修業している者と一緒に技を競う機会に、思いがけなくも恵まれたことが有難いのだった。

実際、梢にそんな気持を起こさせたほどの娘達のまわし姿はさっそうとしていた。

やや幅広の腰をずっしりと引き締める横みつと双臀の谷間をすいと引き上げられた一筋の縦みつが、ただそれだけのことで、おときの、ぽってりした臀部に生き生きとした表情を与え、そして、それが彼女の動作につれて

さまざまな変化を見せるのだった。

大きく足を踏み開いて、尻が土に着きそうになるほどに深くひざを曲げ、呼吸を止めてグッと全身に力をこめる。見ている梢も思わず両手に力をこめて握りしめるような、そんな準備の動作を二、三度続けたおときは、すくんと膝を伸ばすと、ちょっと胸をそらすようにして腹をへこまし、前まわしをぐいとひとつ押し下げ、梢の視線に気づくとにっこり笑った。自然の子らしい、何のかげもない笑い。梢もつられてにっこり笑う。胸のうちをさわやかな風が吹きぬけてゆくような、全く新鮮な世界を知った喜びが、心の底からこみあげてくるのだった。

久し振りに、ぐっと斗志が湧く――。

「では梢さま、お仕度をお願いします」

声をかけられるより先に、梢は細紐に手をかけていた。ゆかたが丸い肩先をすべり、裸体が浮き出すように出現した。見事な裸体だった。梢は自分の裸体を若さということ以外に美しいと思ったことはなかったのだが、それは、くらべるものがなかったためなのだった。こうして裸身を見せ合う場面になった時その真価は初めて発揮され、見る者の目を魅了するのだった。

おときも、そしてほかの娘たちも、この梢の初めてにしてはこだわりのない脱ぎっぷりのよさに、びっくりした様子だった。けれども、その露わになった梢の裸身に、さらに驚きの目を見張るのだった。

やや細づくりに見えるのはすこしのぜい肉もないせいだった。しなやかな柔肌の下には鍛えぬかれた強靱な筋肉が秘められていた。豊かに張った肩口から二の腕にかけては少々ばかり男っぽく見えたが、ふっくりとした曲線がゆるやかな起伏を描く胸のあたりは娘らしさにあふれ、しこっとした二つのふくらみが清潔な高まりを見せていた。ほど良く引き締まった腹部は、つましいくぼみを中心になめらかなひろがりを展開して、けがれを知らぬ左右の太腿のあたりは、皮をはいだばかりの若木の膚のようにみずみずしかった。

「あら、そんなに見つめて……いやですわ」

梢は自分の裸身に集中している娘たちの視線にあわてながらも、その視線が、悪意のない素朴な讃嘆であることを、敏感に探りとっていた。

実際に梢自身、こんなにこだわりなく、裸身を見せることが出来るのに意外な思いを感じていた。しかしそれは、この娘たちの相撲

一途にかける純真な心と、自然の子らしいのびやかな態度に大きな共感を覚えてのことだとは、梢自身も、娘たちも意識してはいないのだった。

「はい、はい」

一瞬見とれていたおときは、梢にさいそくされて、ハッと氣をとり戻した。

『あたしたちと一緒に、裸になって相撲をとるなんて、物好きな武家娘もいるものだ。やけに体だけは大きいけれど、柔術の達人だなんて、ほんとなのだろうか』

おときは、正直なところ、そんなふうに考えていた。しかし、今この見事な裸身を見てどうやら本物らしいと思ひ直したのだった。

おときが手にとったものは、彼女たちが身につけている無地の雲斎ではなく、紫色の渋い艶のある布地だった。

それは、彼女たちが、隣村との勝負の時にだけ用いるものなのだった。手にとって見るまでもなく、それはかなり高価な品であることがわかった。そして、おときは、それを、梢への感謝の意をこめて、その身につけてもらおうと考えたのだった。梢もまた、このおときの気持ちが素直に了解された。感激屋の彼女の胸が一層熱くなる。

腹に当てながら、またいだひざを軽く曲げて中腰になる。ひろげて胸のあたりまで引き上げた前の端は、丁度梢のふたつのふくらみの頂点をかくすほどの幅があった。キチッと前袋の形が整えられ縦みつが折り畳まれる。おときの手が、軽く内腿のあたりにふれて、梢はさすがに頬を赤らめたが、何のこたわりもない娘たちの態度が、それ以上の恥じらいを進ませないのだった。

尻へ引き上げられた布地が右腰へ回され、下腹を圧迫しながら二回巻いたところで、胸へ上げていた端を下ろす。おときの指導のまに、梢は黙々と従った。

分厚いくせにしなやかな布地が、肌に吸いつくように締まってきて息苦しいくらい。しかし、それは、胸元まで圧迫してくる振袖袋の帯とはちがって、力強い支えを感じさせ、斗志を呼び覚し、氣力をみなぎらせてくれる布地だった。

からだの中心に堅く締め込んだ分厚い布地の感触は、動作につれて、いやでもその存在を意識させはしたけれど、梢はその初めての感触を不愉快には思わなかった。

少々ばかり窮屈だし、内腿のあたりにすれるようなのがちょっと氣になったけれど、そ

れがかえって、緊張を高めるもののようにもあるのだった。

締め込みをつけ終わった梢は、さっきまでのつつまじやかな武家娘とは打って変わって色白の若々しい裸身に、紫の締め込みが匂うような、りりしい女力士の晴れ姿だった。

男の子の様な、くりっと締まった双臀を割る縦みつの程のよさが何ともいえなかった。

『娘が裸になって取り組む……』

何とも、氣恥かしかった梢だったのだが、このけいこ場で、裸体になってまわしを身につけてみると、よけいなもの一切をかなぐり捨てたすがすがしさと、ふしぎな落ち着きを覚えて、梢は自分ながら軽い驚きを感じているのだった。

『こんな姿を、もし、おくにのおとうさまやおかあさまに見せたら、なんとおっしゃるところだろうか——』

ふと、そんなことを梢は考えた。

しつけにきびしくて、箸の上げおろしにも一々注文をつける、そんな母を、梢はきらいなのではなかったが、どうにも苦手な想いがするのだった。

そんな母からは、まず大目玉は間違いないところ。あまりのことに氣を失いかねないだ

ろうが、らいらくな父ならば一体何というだろうか。

『はほう、これは見事。なかなか似合うではないか』

そんなことを、おっしゃるかもしれない。

『どうだ、わしと一番とってみるか』

などと、いい出しかねない父だった。そんな父のひげづらを、梢は思い出して、くすつと笑いが出た。その父も知らない、秘密の他

流試合——。そんなひそやかな考えが、梢の娘らしい冒険心をくすぐった。

でも、これは遊びではないのだ——。この村の人たちの生活がかかっている真剣勝負なのだ。

梢は気持を現実に戻して、四肢に力をこめ、ぐっと唇を噛みしめた。

父の道場で身につけた技が、その道場を離れて、どれだけ通用するものか——。相撲な

どという、考えてもみなかった形で、その力を試されることになったわけだけれど、むざむざひけをとることもないであろうという、自負もあった。けれども、相撲には相撲の、勝負のきまりもあることだから、それが、二日や三日で体得できるかしら——という不安もまた、あった。

—(未完)—

私の夢想

佐野夫人とのプレイ

千部好夫



胸の高鳴りを抑えながらの挨拶は、たぶんぎこちなかったことであろうに夫人はニコリと物柔らかに受けてくれた。

ともかく助手席に坐ってもらい、ゆるやかにスタートさせながら食事に誘うと、済ませてきたからプレイの場へ、との返事。そのつもりで喰ってこなかった私の腹は、少々北山のはずであるが空腹感、すつとんだ。気がそぞろになれば腹の虫もおとなしくなるものらしい。

はからずも、佐野みさ子夫人と連絡のとれた私は、数本のロープ、パイプ、カメラ等を入れた鞆と共に、はやる心をおさえながら、待合わせ場所へ車をとばした。

かなり余裕をもって出てきたのだが、途中で渋滞にひっかかり、目的地についたのは約東の時間ギリギリ。それでもどうやら間に合ったとホッとして見廻す目に、海に向かったベンチに掛けている女性の姿がとびこむ。ま

ぎれもなき妊婦である。車は、バックミラーに映る江の島をどんどん小さくし、予定していた茅ヶ崎のモデルに走りこむ。案内嬢は夫人の腹と私を見較べていたに違いないが、知らん顔をしてキーを差し出したので、こちらも澄まして受取る。

部屋に落着いて改めて見る夫人は、誌上に見る以上に私好みの美女である。コーラでノドを潤おしながらの短い時間の雑談。夫人の告白文によってある程度のことは承知しているつもりだったが、責められるために生まれてきたヒト、の感がますます強まり、早くも私の気持はプレイに走る。

風呂をすすめると気軽に顔く。見詰める私をなじりもせず、斜め後を見せながら次第に肌を現わして行く夫人の所作に、私同様、心のたかぶりが感じられる。

手早く靴から取り出したプレイ用具を並べて準備していると、思ったより早く夫人が出てきた。恥かしそうな笑みではあるが、強いて隠そうともしない裸身に正面に立たれ、私は一瞬ドギマギしながらも眼が離れない。

既に新生児を迎えるにふさわしく張りつめた偉大ともいえる双の乳房、その先端が黒味がかった紫色を呈しているのは妊婦特有のものである。そして見事にセリ出しているボリュームある腹部、妊娠線も鮮かに、美しい顔立ちとは少々不釣合とさえ思える迫力をもつて、私にはまばゆいばかりだ。

「もう一本、コーラを戴けません？」

私は、はじかれた思いで冷蔵庫にとぶ。

さもおいしそうに飲む様子は、湯上りによる渇きだけではなさそうに思えた。私は夫人の手のピンが空になるのを見届けて、ロープの一束を解きながら近よる。

「いいですか、このロープがあなたの肌にからみついた瞬間から、あなたは私の奴隷として責められるんですよ」

「はい」

「ただの牝として扱いますよ」

「お腹に異常がないことなら、どんなことでもお好きなように……」

私はうなずくと同時に、ムッチリした夫人の腕をとった。夫人はクルリと背を向けた。

自ら背中に組んだ手首を結び合わせたロープを首に回し、腕に一旦戻して胸に回し、乳房の上下を締め上げた。ただでさえ大きな乳房が更に突出されて偉大という他はなくなつた。かなり強く縛つたつもりだが、夫人の表情に苦痛は見出せない。ただ眸がうつろに潤んでいるように思える。

縄尻を引いて、寝室との境の柱によりかからせて縛りつける。妊婦の立ち縛りは予想以上にボリュームがあつて私を圧倒しそうだ。

私は今、このみさ子夫人の、いや、このマゾ牝のご主人さまになったのである。

「みさ子、おまえは今までに、亭主の目を盗んで、他の男と幾度もプレイしているそうじゃないか」

「ハイ」

「この大きな腹の中の子は、夫の子供ではないそうだな」

「……」

「どうなんだ？」

「ハ、ハイ」

「亭主に済まないとは思わないのか」

「そ、そんな。それはいいわな。お願い」

「そうか。じゃ、体で思い知らせてやろう」

「ハイ」

夫人の頬にポツと赤みがさした。

私は用意の風糸を取り出す。三十センチほどに切つてある一筋を手にして、偉大に張り出している両乳房の先端にその両端をかたく縛りつけた。千切れんばかりに絞り上げられた乳首が慄え、夫人は首をそらせてこらえていた。私はその糸の中心辺りをつまんでチヨイチヨイと引っぱってやる。偉大な丘が伸び気味になって、夫人の口から小さな悲鳴があらがるのに構わず、先程空にしたコーラのピンをくくりつけた。ピンをぶら下げた乳房は、奇妙な形に変形した。

「どうだ、痛いかな？」

「ハイ。でも大丈夫です」

「そうか。じゃあもう少し重くしてやろう」

私はもう一本の空ビンに、浴室の湯を扱ってきて、ブラ下げたビンに少しずつ注ぎ込んでやる。夫人の顔が歪み、首が一層激しく振られ始める。青すじが一際鮮かに浮き出した乳房が、重みに引かれて伸びながら痛々しく慄える。

「どうだ、もっと重くしてやろうか」

「ム、ム……」

返事代りに呻く夫人の表情は、その痛みを耐えているというより、愉悦を噛みしめていると受け取れた。

しかし、急所ともいえる乳房を、そういつまでも責め続けるのはプレイとしては、あまり感心出来ない。

ビンを取り外してやると、ホッとしたように見開かれた夫人の眸が、何か物足りなげにまたいた。

私は無言で柱縛りを解き、両手首だけを自由にしてやる。上膊部にはロープがかかったままの窮屈な手で、夫人はくぐられた両乳首をそっと撫ぜながら私の方に、微笑した顔を振り向けて軽く睨む。

「ひどいことするかたネ」

「いやかい？」

「えッ？……いえ、いやじゃないけど……」

「うれしいんだろ？」

眼をそらした豊頬が、かすかに頷く。大きなお腹が波打っているのが印象的だった。

「四つ這いになれ！」

一段強い語調で私は命じる。

ビクッと肩を慄わせてチラッと私に視線を走らせた夫人は、素直に四つ這いになろうとしたが、上膊部を縛られたままだから奇妙な這い姿だ。床すれすれの妊娠腹が、膝を立ててやっと持ち上った。両肘で大きなボールを抱いているような形である。

「這え」

「そ、そんなこと……」

尻を突き上げ、今にもつんのめりそうな姿勢の夫人が恨めしげに見上げるのに構わず、

「這うんだ！」

と、その白い巨臀に一発、私の平手打ちが音をたてる。

夫人はそろそろと這い始めるが、すぐに止まる。私は前に回って、両乳首連結の胤系を中心に掴み、ひっぱってやる。夫人の顎辺りまで伸びた乳首に曳かれて、奇妙な四つ這い

行進が始まったが、ほんの暫くで、夫人はどたりと横転してしまった。巨大な蛙がひっくり返った感じである。胤系を引いても、呻くだけで起き上ろうとしない。夫人にとってはこの四つ這いより、乳首の苦痛のほうが耐え易いのかも知れない。

私は這わすことを諦めて、夫人を抱き起こして坐らせ、再び後ろ手にギッシリと縛りあげた。夫人は嬉しそうに私を振り向いた。やはり縛られることが好きらしい。もたれかかるように背中を預けてくるのを突き倒して、括りっぱなしだった乳首の糸を解いてやる。余り長くほうっておいて、乳首に異常でもきたすと、お腹の赤ちゃんに申し訳がない。

締まりに締まって解くのに骨がおれたが、ようやく解いてしばらくしてから、夫人が美しいしかめ面をしてみせて呟いた。

「い、いたいわ。お乳が……」

解いてから痛いとは？ と少し心配したが、止められていた血が急に通い出したからだろうと思いついてホッとする。少し揉んでやったら夫人の表情が変わった。私としても固いという方がピッタリくる張り切った手触りに少なからぬ未練はあったが、直接感覚に訴えるのはまだ早い。今はSMプレイに徹

すべきだと思ってひねり上げてやる。

「ヒエッ」

という夫人の声があがる。

異常をきたさなかったことに安心した私は次の責めに取りかかる。予定の浣腸である。

私がつきつけた三〇ccの浣腸器を見て、夫人は一際、頬を赤らめ、横倒れの体を縮めた。

私が浴室で造った石けん液を吸い込ませた浣腸器を持って出てきた時、夫人は床板に頬をすりつけて身悶えた。それは、拒否とも催促とも受けとれるものだ。しかし、それが何れのものにせよ、私は強行する肚だったのでわざと無言で腰の辺りを押さえつけた。

「アッ、アア」

とたんに夫人の唇から低い声がとび出す。身悶えが一層激しくなり、押さえつけた掌に柔肌の抵抗が撥ね返ってくる。だが、その激しいと思った身悶えも、構わず強行した時にはピタリと止まり、そしてものの三分も経った頃から始まった身悶えに比べたら、ほんのゼスチャア程のものであったことがハッキリしたのであった。やはり夫人は期待と羞恥と催促を、あの蛇のような身悶えで現わしていたのだ。私は少しいまじくなって、体を丸くして耐えている夫人を仰向けにひっぺが

えし、喘ぎに波打つ巨大な乳房をグイッと踏みつけてやる。

「アア、もう駄目。お願い！」

足の裏にコリコリした、なんとも云えない踏み心地を覚えながら、私は、この場でやられては、どうにもならんと思った。

抱き上げようとしたが思ったよりはるかに重い。切迫した様子から、歩かせては粗相のおそれがある。仕方がないので乳房にくい込むロープを掴んで、引きずるように浴室に引き込む。辛うじてセーフ。

浴室のタイルにブチまけたような異臭のものは、私の責任において入念に洗い流したものの、後から来る客こそいいツラの皮だと思いつたロープも解かずに入浴させる。

夫人もまた、解いてくれともいわずに、私に後ろ手の全身を預けっぱなしである。

「どうだった？」

洗い終った肌を拭いながら訊ねる私に、夫人はニコリと笑ってみせただけだ。

「歩け」

私は、拭い終った臀部に一発平手打ちをくられて浴室から追い出すと、寝室の布団に横たわらせた。敷布に片頬を埋めた夫人の目が、

妖しい潤みを帯びて私を見上げる。私の次の吐づもりでは、寝室にふさわしい責めを予定していたのだが、この魅惑的な後ろ手妊婦の横臥ポーズと、惹きつけるような眸にはフラフラッとさせられる魔力がある。私はテもなくその魔力に打ち負かされてしまった。

夢中で吸った夫人の唇は、呻きにも似た声をくぐもらせて応えてくれた。私の理性が影をひそめかけた時、夫人の囁くような声が私の耳をくすぐった。

「あとで、もっと責めてネ」

私はハッとなってとび起きた。そうだ、今はプレイ中なんだ。しかも、又と得難いマゾ夫人とのSMタイムなんだ。見ろ、夫人は責められ足りなくて、俺のSの薄っぺらさを内心で失望しているじゃないか……。

私は用意の筆を取った。穂先を揉んで夫人の目の前に突き出す。夫人の眸が明らかに歓喜を現わし、頬がポツと赤味を増して、ロープを喰いこませた柔肌が大きく喘いだ。この筆が攻撃したら、この喘ぎがどれだけ激しくなるだろうと思うと、私のS性は限りなくふくれ上り、舞い上るのであった。

——（佐野さん、スンマセン）——

被 虐 の 旅 シ リ ー ズ

六 甲 の 霧

由 利 美 千 子



白浜から帰って、何日になるだろう。

葉山に会えない日が、続いている。

万葉の昔から、女は男を待ったのだろうか。

万葉の歌なんて、学生時代に習っただけでおぼろにしか覚えていないから、男を待つ女の心がどれほど歌われていたか、さだかではない。

けれど、平安の女たちが、男のくるのをどんな風に待っていたか

源氏物語でわかる。待って、待って、待ちくたびれた頃、男があらわれても、いそいそと迎える姫たちが書かれていた。

料亭で玄関に塩を盛るのは、平安の頃の私たちの智恵の名残りだという話を聞いたことがある。

男たちは牛車で女の家を訪れる。

牛の好きな塩を盛っておくと、牛はその塩につられてやってくる。盛り塩した女の家の前に牛が止まってしまうのである。

気まぐれな男は、他の姫の所へ行こうと思った初めのプランを変更して、牛の止まった所でおりてしまう。

それが、玄関へ盛り塩をするはじめだと、きいた。

私は彼の好きなヘネシーでも置いておこうかしら？

それにしても、平安時代の姫のように、いつもぶらりとやってくる男を待っている自分が自分で齒がゆいのは、私が現代娘だからだろうか。

何となくロマンチックな気がして、そういう恋に酔っている時もあるけれど、やっぱりいらいらする時の方が多い。

特にメンスの前なんか、もし彼があらわれたら、縛られたりなんかしてやるもんかと思う。

反対に彼を縛って、滅茶滅茶に打ってやりたいと思うように心が燃える。

そんな気持でいらいらしていたある晩、伊波が電話をかけてきた。

「つき合ってくれへんか？」

というのである。

「つき合ってどこへ？」

「六甲山までドライブでもしたいと思うんやけどなあ」

「二人で……？」

「うん」

行ってみようかと思った。

どうせ待っている葉山はいつ来るかわからない。久し振りに木や草の香を吸うのも悪くないと思った。

この前、思いがけなく伊波を縛っていじめてしまったが、伊波はそれを怒るところか、その後も誘いかける目で私をみる。女にとって好意をしめしてくれる相手というものは、肩のこらない存在なのだ。

私はセーターにスラックスというスポーティな恰好で、伊波の車の人となった。

「ことわられるかと思って、ドキドキして電話したんだよ」

彼は言った。

「今日は泊まっても、ええのやろ？」

「そんな……私、伊波さんと、そういうつきあいするつもりないのよ」

「わかってるよ。ボクのいうのは、今晚帰らんかてかまへんやろいうことや」

「わかってるなら、かまへんわ」

私もつられて大阪弁で答えた。

カーブの多い道を車は六甲の山頂へ向かって走っていく。

百万弗といわれる夜景が目の下にひろがっていた。

(先生と一緒にいたらどんなにいいだろう) 私はその夜景を見ながら葉山のことを思った。

車のライトに照らし出される松の木の枝ぶりにも、葉山とのプレーを思い出した。

情事のともなわない遊び……。縄の遊びのことをプレーとよぶのに抵抗を感じる。葉山にとってそれはプレーでも、私にとっては彼への愛の表現なのだ。彼が好きなのだ。

「キミがボクを愛してくれないのは知っているよ。しかし、ボクはキミを愛している。だから、たとえキミがボクを打ったり蹴ったりしても、キミにかまってもらっているということが嬉しいんだ」

伊波が顔を前方に向けたまま言った。

それは私が葉山に云いたい言葉と同じだった。

「ねえ、美千子さん、今日はボクをいじめてくれへんか。ボクが美千子さんを嫌いになるほど、いじめてくれたら、ボクかてもっと気持がらくになるんやないか思うし、美千子さんかて、ボクのような男につきまとわれんてすむやんか」

伊波の言葉に

「そうね」

と、私は、いつも葉山にいじめられることを、伊波にしてやりたい気持ちが湧いてきたのだった。

○

車は何々会社山荘という立札をいくつかう伊トで照らしながら上って行った。やがて、車がやっと通れるほど細い道へ曲ると、木造の家の前で止まった。

「ここや」

車からおりると、夜気の中に何ともいえない香ばしいような山の匂いがした。

彼は鍵をあけて入った。

「ここもあなたのお家の別荘なの？」

私がきくと

「ここは伯父の会社の山の家だったんやけど今は売りに出している。けど掃除は行き届いているよって、くもの巣が顔にかかるようなことはあらへん。寝具もちゃんとある。うちのおふくろが時々講習会か何かに使ってるんや。さ、遠慮のう入ってえな」

彼は、さきに立って部屋部屋の電気をつけて歩いた。

広い畳の部屋もあって、何に使ったのか黒板が置いてあった。

「ええ礫台やろ」

伊波が言った。

「ボクは知ってるで、葉山さんが、どんな人か……」

私は急にたまらない羞恥におそわれた。

「何をいうの？」

「蛇の道は蛇いうやろ、ボクは知っているんや」

「何を知っているの？」

「それは云われへん」

「いいわ、云わしてやる。あなたはさっき、今日はいじめられたいっていったわね。さあ縄を出していらっしゃい。ハリツケにしてあげる」

私は言った。

伊波は押入れから細引きを出してきた。

「さあ、上着をとりなさい」

私がいふと

「その前にストーブをたこうよ、寒いもの」

伊波がいうのに

「寒くてもいいわ、あなたは私にいじめられたいんでしょう。私の命令に従わなければダメ。上半身ハダカになるのよ」

と私は言いながら、いつも自分がいわれている言葉を男に向かっていうことに、一種の快感があるのを不思議に思った。

私はマゾなのだろうかサドなのだろうか。

愛する人にはいじめられたい。それはマゾなのだが、その愛する人が私の思うほどには愛をしめしてくれないら立たしさを、他の男にぶつけようとする時、私は私が愛していない男に対して、女王のように振る舞おうとしているのだ。

私は伊波の手をうしろ手にくくった。

胸にも縄をまわし、二の腕にも通した。

私は首に縄をかけられるのが好きだ。首の縄は自分をみじめに感じさせるからだ。

私は伊波の首にも縄をまわした。そして、その縄をうしろへぐっと引き、後手に縛った手を上へあげて、結びあわせた。

「苦しいよ」

伊波が言ったが、私は力をふりしぼって、ぎゅうぎゅうと、それを一つに結んだ。

これで、伊波の上半身は動けなくなった。

私は片方の足首に縄を結んで、黒板にその縄のさきをかけて、黒板の裏側から引いた。

伊波の片足は黒板の上からぶらさがるようにな形で上へのびた。私は黒板の脚にその縄尻を結びつけた。

そして、もう片方の足も同じように、黒板の上へ引つ張りあげた。

伊波は頭を畳につけ、両足を上へ向かって大の字に開いて、黒板にくくりつけられてしまった。

「いい恰好だわ」

私は、それを眺めて言った。

若い、均斉のとれた男の体は、体操をしているような感じで、いやらしさはなかった。いじめているという感じから遠いのは何故だろう。

「おなかすいたわ、何かある？」

「台所の冷蔵庫に入ってる」

私は伊波を、そのままにして台所へ入って行った。

広い台所の、大きな冷蔵庫をあけて、先ずトマトジュースの缶をあけてのんだ。冷えておいしかった。

私はそれを伊波のためにコップへ入れて、座敷へ戻った。

「これをのみなさい」

「のめないよ」

逆さになってる伊波の顔は、赤くなっていた。それが苦しいのか、首をあげようとする、黒板がゆらゆら動いて、伊波の上へ倒れかかりそうになる。

「もう少し、足の縄をゆるめてくれよ」

「贅沢いうんじゃないの、贅沢いうところするわよ」

私は手をのばして足の裏をくすぐった。

「ああ……」

伊波は足をひっこめようとしたが、動かしようもなかった。

「どう？ いい気持？」

私は左右の足を交互にくすぐった。

「ああ……おう……」

伊波は奇妙な声をあげて、おなかをピクピクさせた。

「足の裏をくすぐっているのに、どうして、おなか動くの？ じゃあ、ここは？」

私は腋の下をくすぐった。

「おほほほ」

伊波は土人の叫び声みたいな、変な声をあげた。

「さあ、トマトジュースをのむのよ」

私は伊波の口へコップを近付けた。

「だめだよ、のめないよ」

そういう口へ無理やり流しこんだ。

伊波は首をあげようと努力するが、後手と一つにくぐられている縄は思うように首をあげさせてくれなかった。

口の中へ入ったジュースを、のみこむこと

が出来ないのだ。

私は、その努力を面白そうに見ていた。

「のまなきやだめよ。こぼしたら、もっとひどいめにあわすわよ」

言いながら、私は、

（そうだ、もっとひどいめにあわして、葉山の何を知っているのかきいてやろう）
と思った。

私は、台所へとって返すと、周囲を見まわした。何か責め道具になるようなものはないかと思った。

箒か、はたきがあるかと思ったが、電気掃除機を使うので必要ないのだろう、壁には何もかかっていなかった。

私は勝手に流しの下や押入をあけてみた。

土間にはめこみになっている下駄箱の中に大工道具が入っていた。

私はその中から錐をえらんで手にもつと、座敷へ戻った。

彼は口もとからトマトジュースをこぼしていた。それが血のようにみえて、一瞬、無気味に見えた。

私は自分が逆さに長いこと吊られたおぼえがないので、どのくらい耐えられるのか不安

になった。

私は黒板に縛りつけた縄をといた。

ドシンと音をたてて、彼の脚は畳の上へ長くのびた。

「まだ許さないわよ」

私は彼の足首を一つにくくると、背中の手首へ縄尻を通して結び合わせた。

彼の体は弓形に折れた。

私はそれを手で転がして仰向けにさせた。

足で転がすことが出来なかったのは、やっぱりサドの女王になり切れないのかと、自分で自分がおかしかった。

「葉山さんの何を知っているの？ 正直に云いなさい」

私は錐の柄のさきで、伊波の乳の下をグリグリと押した。

「痛……」

伊波は歯を食いしばってこらえている。

「さあ、言ったらどう？」

私は錐の柄のさきを、所かまわず突き立てた。

「ううっ……」

と、伊波は縛られている、のどをそり返らせて呻いた。

「云わないと、錐の方をさすわよ」

私はわざと、その尖ったさきを彼の目の前に見せた。

「云えばいいのやる。けど、キミかて、葉山にいいじめられて、すんなり白状するのんか」

「何ですって……？」

私のおなかの中から熱い塊がのど元へおし上ってくるようなものを感じた。自分が葉山の手で、獣のように呻き、くたくたにされている姿は、私と葉山だけの秘密であって、誰にも見られたくなかった。

それをまるで伊波に見られたような、憤りと、恥かしさと入りまじったものが私の体の中でたぎり出したのだ。

「葉山は知らへんけど、ボクの従姉が彼の恋人だったことがあるんや。そやから、ボクは彼がどんな人間かよう知ってる。彼は女をいじめて……」

私は、とても終りまで聞いていらなかった。

この男をどうしてやろうと思うほど、おなかの中が煮えたぎってきた。

葉山の恋人だったという言葉が、私の嫉妬をかりたてたのだろうか。

私は、もう平静さを欠いていた。

「もう二度と、そんなこと口にしないと誓い

なさい」

私は上ずった声で云った。

私は錐の柄の方を握っていた。

「ボクは本当のことを言っただけなのに……」

伊波がいうのに

「まだいうのね」

私は錐のさきで彼の胸をついた。

「あっ！」

と、伊波は体をピクツとさせた。

私は尖った錐のさきで、伊波のあらわになっている上半身をついた。

伊波は体を転がして、私の手を逃れようとした。

私は彼の体を、もう一度仰向けにすると、片足を彼のおなかの上へかせて、ぎゅうと押さえた。

ポキッと骨の鳴る音がした。

一瞬、私はひるんだ。骨が折れたのかと思ったからだ。

しかし、そうではなかった。

足首の縄と手首の縄を一つに結びつけた体を、仰向けにして上からおさえれば、手も脚も背中でも重なってしまう。

女のように柔軟ではない男の体は、よけいに自分の手足で自分の背中をゴリゴリと責め

ることになる。それでどこかの骨が音を立てたのだろう。

私は足に力を入れてふみつけた。

おなかをふみつけるだけでは、私の体の中の血のたぎりは静まらなかった。

私は彼の顔をふみつけた。

頬の感触は足の裏に、おなかよりやわらかかった。ぐしゃっと何か潰したような感じがした。

私は私の足の下で、彼の頬がゆがみ、唇が奇妙な形にまがっているのを、のぞきこむようにしてみた。

伊波は醜い男ではなかった。

しかし、その押し潰された顔は何とも形容のつかない醜さだった。

こころよいものが私の体を走った。

四馬孝画秀麗口絵八葉が巻頭を彩る 団鬼六作『花と蛇』特集第四弾

本誌S42/1よりS44/4までの連載分を収録し、四馬画伯の華麗なる口絵を附した集大成ですが、重版刊行は致しませんでした。只今、若干在庫がありますので、未入手の向はお早いに是非蔵書の一部にお加え下さい。申込は大阪市住吉郵便局私書箱第41号 暁出版株式会社へ。
略号『花』 定価五〇〇円

それは私がサドであるのか、それとも、葉山のことをいわれた忿懣が、少しでも癒える快さなのかわからなかった。

私はなおも、ぎゅうぎゅうとふみつけた。

「さあ、降参した？ もういわないわね」

しかし、伊波の目はうなずかなかった。

「本当に、この錐でさすわよ」

私は錐を握りしめた。

さっきからそれで突いてはいるが、かげんしていた。

「その目をさしてもいい？」

伊波の目に恐怖が走った。

彼は、やっと私の足から逃れようと、身をもだえた。

私は足の力を入れて、錐を目に近付けた。

「あっあっ……」

伊波の口から声にならない声がもれた。

そして激しい力でもだえた。

もう、体操をしているような感じはなかった。

伊波は完全に捕えられた獣だった。

私は、わざと足はずした。

伊波は縛られた体を転がして、私の手から逃れようとした。

しかし、伊波が背を上に向けた時、私は手首と足首を縛った縄尻をとった。

もう伊波は転がることも出来なかった。

「おとなしくしなかった罰よ」

私は伊波の背中へ錐を突きさした。

「あっ……」

伊波は叫んだ。

私は錐のさきを、そんな深くは入れなかった。

しかし、赤い血が、すうっと流れた。

私は彼の肩を錐で突いた。それは、さすというより突く程度だった。

それでも伊波は痛がって、さまざまな声をあげた。

私はその声をきき、なおも錐で突いているうち、私が人をいじめているのか、自分がいじめられているのかわからないような錯覚に陥りそうだった。

私は、やっぱりアブノーマルになってしまったのか。

そう思うと、よけいに雲のようなものがひろがってきて、私は私の手の中の男の獣を、どうやって呻かせてやろうと思うのだった。

○

その時、急に襖が開いた。

私は心臓がとまるかと思う程、驚いた。

まさかその部屋に人が入ってくるとは思っ

ていなかった。玄関の鍵を伊波がかけるのを私は見ていたのだ。

「こんなことやと思うたわ」

長身の和服の女が立っていた。

「あっ、姉さん」

伊波は声の方へ体を向けると叫んだ。

「帰ってくれ、たのむ、だまっててくれ」

女はそれにかまわず伊波のそばへよると、縄をときにかかった。

私は逃げたいと思ったが、足が機敏に動かなかった。

私は棒立ちになったまま、ジリジリと部屋の隅へあとずさりした。

女は伊波の縄をとくと、私の方へ向かって立った。私も丈は高かったが、同じ位の高さがあった。

「あなたね、葉山の新しい相手は……？」

いわれて、これが伊波の云った従姉なのかと思った。私も、きつとして女を見た。

「私は香織というの。葉山からきいたことない？」

女の言葉に私は小さく首を振ったまま、なおも女を凝視した。

髪を無造作に頭の上でたばねて、髷にしている。多分おろせば長い髪なのだろう。

葉山ごのみというのだろうか。

私の胸は熱い棒をさしこまれたように息苦しかった。

葉山は、この女に何をしたのだろう。

成熟したこの女なら、葉山は最後の線まで深くなったのかもしれない。

私より十は年上に見えた。

しかし、着物の上の胸のふくらみも、腰の線も崩れていなかった。

葉山はこの人と何をしたのだろう……。しかし、そういう思いは香織という人も同じだったのだろう。

彼女の目がギラギラと、水の上の油のように光った。

「自分が葉山にされたことを、この人にしようというの？」

彼女は言った。

「姉さん、違うんだ。ボクは本気で美千子さんが好きなんだ」

伊波が立ち上って私と香織の間へ入った。「ボクちゃんはだまっていらっしやい。ボク

ちゃんの癖はようわかってるのよ。この人がボクの女王になれるの？ この人はね、いじ

められて喜ぶ人なのよ。みせてあげるわ」彼女はつかつかと私に近付くと、いきなり

私の手を逆さにとった。

「何するの」

私は、もがいた。

「ボクちゃん手伝って。この人を縛るのよ」

「厭だよ、ボクは……」

「厭なら厭でいいわよ。叔母さまにいいつけるわよ、ボクの変わった癖を……」

「ママに、そんな……」

「それが厭だったら手伝いなさい。さあ、縄をとって……」

私は香織と伊波の二人がかりで、高手小手に縛られてしまった。

「さあ、庭へ出ましょう」

うしろから肩を押され、私は廊下へ押し出された。

「靴下なんかはかしておくことないわ。ボクちゃん、この人の靴下をぬがせなさい。そうね、ストラックスもぬがしたら……」

私は廊下におさえつけられて恥かしい姿にされてしまった。

「ふふふふ、いい恰好……。葉山に見せたいわね」

香織は言った。「ボクちゃん、さっきのおかえしに、この人のお尻を錐で突っついてあげたら……」

伊波は、じっとしていた。

「しょうがない子……」

香織は自分で錐をとってくると、

「さあ、歩くのよ」

と、私の尻をついた。

私はピクツとして二三歩、足早に歩いた。

香織はそれを、さも面白そうに笑った。

「ほら、歩きなさい」

香織は私のお尻を錐で突く。

私はピクツ、ピクツと、玄関の方へ歩いていった。

香織は下駄をはいたが、私に履物が許されるはずもなかった。

外へ出ると、冷たい夜気に下半身が粟粒立った。

庭といっても、それは作った庭ではなかった。

六甲の山頂にいくつか建っている会社の寮や山の家と同じように、雑木林を切り開いて建物を建て、そのまわりは天然の庭にしているらしかった。

月の光でそんな風景を感じとれたが、庭がどのあたりでついているのか、灯火も見えなかった。

私は肩を押され、お尻を突かれて、歩いて

いった。

しかし私の前に、水の面が見えた時、私は立ち止まってしまった。

「さあ、もっと進むのよ」

香織は邪慳に押した。

小さな池らしかった。

私は仕方なく水の中へ足を入れた。

足の裏がヌルツとして滑りそうだった。

「大丈夫よ、沈みはしないわ、縄尻を持っていてあげるから……」

香織は、なおも私にさきへ進めという。

私の足は足首ぐらいまでやわらかい泥土にうまっと思った次の瞬間、私はドボンと水に漬かってしまった。

急に深くなっていたのだ。

私は水の中へ転んだ。

香織が縄を引いて、沈むのをふせいでくれたが、かえって体の均衡をかい、私は立ち上れなかった。

「ボクちゃん、手を貸して……」

香織が叫んだ。

二人は私の縄を引いて、ズルズルと私を岸へ引きあげてくれた。

私は泥まみれのまま、地面に這ってしまった。

セーターまで濡れてしまった私は、ガタガタと歯の根があわないう程ふるえ出した。

「今、あっためてあげるわ」

香織はいうと

「さあ、こっちへ来なさい」

と、丸くあいている空地の真ん中へ、引きずるように縄を持って先に立った。

私は後むきに、よろけながら引かれていった。

「ボクちゃん、木をとってきて。焚火をするのよ」

その丸い空地は、キャンプファイヤーでもする所なのかもしれない。

やがて、赤々と火が燃え出した。

「池につけてやろう思ったのに、暗くて損したわ。あんた、葉山にされたことあるでしょう？ どこで水に漬けられた？ 葉山とどこどこへ行ったの？ 云いなさいよ」

香織は私をこづいたが私はだまっていた。

「あんたの、のろけをきいてあげようと云っているのやないの、素直に云うたらどう？」

それでも私はだまっていた。

香織は私の髪の毛をくるくると手の中へもつと、私の顔を仰向けた。

「こういうこともされたんでしょう。きれい

な顔して……憎らしい……」

香織は私の顔を地面へつけてこすった。

「あっ、あ……」

私は思わず悲鳴をあげた。

土には小砂利がまじっている。それへぎゅうぎゅうこすられては、肌が傷付かないはずはなかった。

香織は私の髪の毛をもって、火の方へ私の顔をかざし、自分のした成果を見た。

「あの人は美しい顔が好きやから、こういう責めかたはせえへん。あんたの顔、滅茶滅茶にしてやったら、どない思うやろ」

香織の言葉に私の体を恐怖が貫いた。

（この人は、何をするかわからない……）

葉山に責められている時には、たしかに被虐の喜びがあった。

どんなひどい目にあわされても、それが葉山と私の愛の表現なのだと思った。

しかし、香織には憎悪しかない。

憎悪で責められるのは、一つも喜びではないのだ。

本当のマゾヒストなら、責められることに喜びがあるはずではないか。

やっぱり、私のは偽マゾヒストなのだろうか。

責める相手をえらぶのは、情事の相手をえらぶのと同じ心理なのだ。

愛するということが、責められたいと思う気持と結びつく。だから、責めてくれるなら誰でもいいというわけにはいかないのだ。

しかし、人を責めるには愛情がなくても出来る。

私が伊波を責めたように、愛していないから玩具に出来たともいえる。

香織は今、私に嫉妬の炎をもち、責めさいなもうとしている。私だって、香織に対して嫉妬を感じる。

香織のしていることが、葉山の真似のような嫉妬を感じる。もし、香織をいじめさなめるのなら、私はたちまちサドと化して、鞭をふるうかもしれない。

「あんたは松葉いぶしてされたことある？ おそろくないやろな。旅先の旅館じゃ無理やもん。こういう所ならそれが出来るのよ」

香織は私の縄尻を傍の木のかけて引いた。

私は爪先立って、私の体が宙に浮くのを、やっとふせいだ。

「しゃくにさわる、この腰……いい線してる……しゃくやわ」

香織は、いきなり茂みの中の枯枝を折ると私を打った。

「あっ！」

私は身をよじった。爪先が地面から離れて手首がもげそうに痛かった。

「しゃくや……癪や……」

香織は荒い息をしながら私を打った。

「姉さん、もう、やめんかいな」

伊波がとめた。

「とめると承知しないわよ、みんなにいうてやるから……」

香織の言葉で伊波はひるむ。

「それより、松の木の枝を折っていらっしやい。そして、お勝手へ行って、うちわか、新聞紙をもっていらっしやい」

香織は命令した。

生松葉が焚火に投げこまれ、白い煙がもうもうとあがった。

「こっち側から、おおぐのよ」

香織は木に吊られている私の方へ、煙をよこそうと、おおいだ。

私は、むせた。

息の出来ない苦しさだった。

「やめて……やめて……」

私は絶叫した。

涙と鼻水が一緒になって私の顔を汚した。

「もうやめようよ、姉さん」

伊波が言っても香織は承知しなかった。

「苦しむといいわ。私は葉山が憎いのよ。葉

山のかわりにあんたをいじめてやる。殺しは

しないから安心しなさい。どう？ けむい？

火が弱くなったわね。どんな顔してるの？」

彼女は焰を立ててもえている木をぬき出す

と、その焰で私の顔を照らした。

私は顔をそむけた。

「おとなしくしないのね。おとなしくしない

と、セーターへ火をつけるわよ」

香織は火を近付けた。

「あんた、もう葉山とつきあわないと約束す

る？」

私は首を横に振った。

△強烈な被虐女性△

川路むら子子の狂態

本誌二月号のカメラハントで辻村氏もあつた驚いた典型的なM女性川路むら子さんの要望によつて彼女のあらゆる被虐の狂態を再び刻明に描写し、ここにフランクの手に提供することにします。

股間縛りにうめく

大手札三枚一組 略号八〇〇円
川路むら子 四〇〇円
一糸もまとわぬ裸身に只魔のような執拗な媚目だけが柔肌をじわじわと痛めつけてやまない。

羞恥責めに泣く女

大手札三枚一組 略号八〇〇円
川路むら子 四〇〇円
如何に被虐を求めてゐるとはいえ余りのことに泣き叫ぶのか、それとも悦びに泣いてゐるのか？

妖気溢れる開股責

大手札三枚一組 略号八〇〇円
川路むら子 四〇〇円
ねっとりとした脂肪を浮かした素足に縄をからませて、左右に引き開けば忽ち妖気が充満してくる。

全裸縛りの引廻し

大手札三枚一組 略号八〇〇円
川路むら子 四〇〇円
縄尻をとられて追ひ立てられ、うしろも手も開陳してゆく。

臀部晒し浣腸責め

大手札三枚一組 略号八〇〇円
川路むら子 四〇〇円
後手に縛られたまま、臀部を高く持ち上げて肛門を晒せば恐ろしい浣腸器が近々と迫ってくる。

露出した全裸肢體

大手札三枚一組 略号八〇〇円
川路むら子 四〇〇円
締めつけた表情で若々しい肢體をマニアの眼前にあらわした。

両足挙げ羞恥責め

大手札三枚一組 略号八〇〇円
川路むら子 四〇〇円
自分の顔面より上に両足を掲げて挙げさせられた姿をかくすすべもなく身悶えして耐える。

壮絶臀部責の妙技

大手札三枚一組 略号八〇〇円
川路むら子 四〇〇円
ありきたりのM女性であつたものの、このような責めは許容しないものであるが彼女はやり違つた。

悶絶海老縛り地獄

大手札三枚一組 略号八〇〇円
川路むら子 四〇〇円
身体が二つ折りになつた苦痛もさることながら羞恥の個所があからさまになる無防備感はいどい。

片足吊りの全裸裸像

大手札三枚一組 略号八〇〇円
川路むら子 四〇〇円
不安定な片足吊りで全身を揺るがすように見られる羞しい苦痛。

再びむら子子の狂態

本誌五月号で塚本鉄三のペンで八片えくぼのマリアVで再登場した川路むら子は耐え難い被虐の妄想に駆られて三度、四度、鮮鋭なレズの前で、その緊縛の裸身を代筆したの、大阪府阿倍野局私書箱第14号、天星社宛へ、どうぞ。

開股責と強烈縛り

大手札三枚一組 略号八〇〇円
川路むら子 四〇〇円
両足を縛りに開股縛りにした横臥に開股させたり椅子を用いたり縛りなどむら子好みの責め。

緊縛と鼻責め悦楽

大手札三枚一組 略号八〇〇円
川路むら子 四〇〇円
身動き出来ぬまで縛られたむら子の鼻を煙草、ドライイパー、手指などに徹底的にいじめめく。

トイレの排泄縛り

大手札三枚一組 略号八〇〇円
川路むら子 四〇〇円
全裸で後手に縛られたむら子をトイレに追ひ込んでも無理矢理排泄させることをスナブする。

逆エビ責にあえぐ

大手札三枚一組 略号八〇〇円
川路むら子 四〇〇円
縄を用いて逆エビ縛り、痛責め、流石のむら子も「痛い」と悲鳴を上げて泣く。

棒責めの全裸女体

大手札三枚一組 略号八〇〇円
川路むら子 四〇〇円
縄を用いて棒責め、痛責め、流石のむら子も「痛い」と悲鳴を上げて泣く。

椅子責めでいためる

大手札三枚一組 略号八〇〇円
川路むら子 四〇〇円
椅子を使ったグルグル巻きで、椅子を縛られたむら子の妖しい顔。

柱に縛る全裸女体

大手札三枚一組 略号八〇〇円
川路むら子 四〇〇円
部屋中央にある柱に全裸のまゝの裸身を全身に浴びるのだ。

後手縛り顔面玩弄

大手札三枚一組 略号八〇〇円
川路むら子 四〇〇円
顔をさすまよつて悦んでゐるむら子の顔を、後手に縛り顔面を玩弄する。

両手挙げ縛り媚態

大手札三枚一組 略号八〇〇円
川路むら子 四〇〇円
両手を掲げて頭の上へ挙げさせ、ぐるぐる縛りにすればむら子は振り解こうとして、もがき狂う。

悦楽責めアップ集

大手札三枚一組 略号八〇〇円
川路むら子 四〇〇円
柱と棒利用の開股責めを初め、など痛めつけた大写真。

そんなことは出来そうになかった。

「正直ね。ではもう少し、いぶり出してあげ

ましようか。それとも、この火で、その顔を

なぶってあげましようか」

「姉さん、顔は可哀そうだよ。かんべんして

くれよ、ボクが頼むから……」

私は伊波の言葉に救われた。

しかし、焚火は再び枯木が加えられ、パチ

パチと勢いよく燃え上った。

そして、その火の上に、松葉だか桧葉だか

わからないが、白い煙をたてる葉がのせられ

た。私は又、その煙に包まれたのだ。

私は体をよじって咳をした。

「先生……」

私は苦痛の中で葉山を呼んだ。

木から吊るされた大きな魚のように、私は

ピクピクとゆれ動き、体中の骨がバラバラに

なるような気がするほど悶えた。

静かな夜の中で、パチパチと木の枝の燃え

る音と、コンコンとむせぶ私の咳だけが高く

ひびき、やがてそれが夜霧の中にもうろうと

するように、私の意識は失われていったのだ

った。

新 連 載

性 文 献 を 追 っ て

性 典 入 門

(1)

斎 藤 夜 居

生齧りの「性学知識」はいつの時代でもやがては人々に飽きられてしまう。「性の本」の歴史を見ているとつくづくと思う。それならば、それきりで永遠に消えてしまうのかといえば、そうではない。半殺しの幽霊みたいで、必ず化けて出てくる。然かもその都度に、時勢に応じた装いを新たに、判りきったことが、又々如何にも、もっともらしく説かれてきた。だから、通俗的な意味での「性典」などという書は一冊読めば沢山だし別にそんなものは読まなくて夫婦生活に支障を来したという話は、あまりきいた事がない。男女交媾の道は教わらなくて自

然に知っている。そういわれてみれば確かにその通り。私たちの多くは、父母が性典類を耽読しているところは余り見たことはなかったし、家庭のなかで春画春本を見ること、また稀れであった。

併し、翻って考えれば、これから選んで解説するところの性典書のすべては、いずれもかつて多くの家庭にあったものばかりで、そして今でもある、ということも又事実なのである。

およそ人間の文化には、語られざる秘事であったとしても、伝えられないものは無かつ

た。性典の類が初め王侯や貴族の専有物だったことは、『カーマ・スートラ』、『アナンガ・ランガ』、『ラティラハスヤ』、『素女経』、『医心法房内編』等々、古性典の記述にはつきりしており、深遠な哲理をもふくむ学問であったから、庶民の性生活の知識としては程遠い存在であった。只、そこに説かれた真理というものは生殖器の機能をつかいながら、生殖を目的としない性の遊戯と快楽にあって、それは「性典」のもつ本質的使命の一つといつてよい。

この考えは哲学抜きにすれば庶民の性生活においても同然の願望であって、王侯貴族に

専有されるべき性質のものではなかった。其処に始めて、人々は性知識の必要を痛感するに至る筈だ。つまり、性典を知る者と知らない者との差別が歴然としてくるからである。

ところが支配階級にあっては「性」の一切を、本能として放ったらかしたまま、道德の名における大義名分を振りかざして、思潮の抑圧手段のための材料として長く温存して、法律の手綱で自在にこれを操って来たため、これが過去において性出版迫害の歴史を生み研究者等はひとつひとつの既成事実の積み重ねのため、どれだけ多くの犠牲を捧げてきたことか――。

近年に至りやっと我国でも性教育のことが真剣に当局関係者間の課題として叫ばれるようになったことは、周知の事実であり、洵に慶賀にたえない次第だが、如何にせん、その知識を得るための素材が余りにも欠乏していることで、江戸時代において、嫁入前の娘にひそかに贈った枕絵ほどの親心もなくして、ただ科学と医学のみに頼った合理的知識だけでおしえ込もうとすれば、それだけでは情緒という人間性本来の重みがのしかかってくるだけであろう。では、そこを一体どういう風

に説明したらよいのだろうか？ そのことを知るための素材としての性愛資料について考えて見たい。

江戸の枕絵（春画）をみて、すぐに、まず疑念をいだき、嫌悪と滑稽をかんじるのは、まるで人形のようにあどけない美男美女の裾の乱れから顕れる、男女両性器のあまりにも非現実的な巨大さにあって、組み合っている濃艶な姿態の幻想から急転直下、あるいは冷水三斗を浴びるおもしろい、まったく、そういうより他に言葉がない程、グロテスクなのである。画面のバランスからいえばその男根は太腿にも匹敵するし、女陰また大蛇のひろげた真っ赤な口程もあるのだ。構図の上からいえば、そこだけまるで取って付けたように、生々しく拡大された現実感があって、途惑いと恐怖が混じり合う。これが恐らく初めてカットなしの江戸枕絵を見た人々の多くが持つ感想だと思う。枕絵の男と女の恍惚とした表情を「夢」だとすれば、性器描写のリアリズムは写真以上であって、まったく落花狼籍である。併し、そこでやっとホッとする気持ちも湧く「これが本当なんだ」と思うし、安心もできる。

いうまでもなく、江戸の枕絵芸術は近代絵画の理法を实地でおこなっている。一面のうちに平面と立体を両立させ「願望心理」の遠近法がちゃんと備わっていて見たい所（実は見せたい所）だけに、接近と接視が力強く誇張されているからだ。私感だが、江戸時代のナマの性愛資料一般について、絵画と文章の差別なくこのことはいえると思う。

文明におくられていた江戸時代の家庭生活では灯火も暗かったから、若い夫婦が閨房で眺める絵草紙の局部を特に大きく描くことは、浮世絵師たちの極く親切な思いやりだったかもしれない。また、儒教道德で縛り付けられた日常規矩の堅苦しさからの開放として、淫奔不羈な艶笑文芸の発達があったのかもしれない。春画における男女性器描写の拡大は「事実」に反するし、あからさまな性愛描写の文章は風儀上おもしろくないのは判りきっている。だが、事柄と行為に対する「真実」が潜んでいるのだから、それらを抹殺することとは思想の没落を意味するし、文化発展に対する否定的行動となる。よろしく事実を究め真実に肉迫することこそ進歩である。

性の問題ばかりは時代が逆行する程表現に自由さがあって、江戸の艶本類は実にのびの

びとして、春風駘蕩としており、そして微笑ましいヒュウマニテイがあった。

それが、いざ研究とまではいわないが、個人的に、系統的に調べてみたいと思っても、資料の系譜が曖昧模糊としてつかみようがないことに気付く。性文献の調べはまず搜索から始めなければならない。このことは、まだ学問としての基礎が確立されていないため、調べる事だけでも障害が多すぎるのである。

只在るがままにまかせられた暗黒時代が長過ぎたので、埃のなかに湮滅して行ったのは仕方がないとしても、その発掘も、発見（資料に対する個人的卓見）もまったく表だった問題にされないまま歳月が流れていった。科学的にも、芸術的にも、それよりも尚日常生活に於いて大事にしなければならない問題だったのに、人々は今迄余りにも無関心を枉い過ぎてきたために、その間に江戸浮世絵の絶品は海外に流出してしまうし、文献の保護は秘密に託されてきた。

不完全な知識程人間生活を毒するものはあるまい。神を思わぬ日があっても、〈性〉のことを思わぬ日はない。といわれるほど重大

関心事でありながら、はにかみやためらいや自他に対する一種の恐怖が、今迄どれだけ私たちから〈性の研究〉を遠ざけて来たであろうか。確かに性の本は数え切れない程沢山あるのは事実だが、どれだけ真実を書いた本があったか？ 明治の俗謡にも、「ちよんこ唄えば巡査が叱る、叱る巡査の子が唄う」というのがあって、ちよんこを性書に代えようと、過般の実情をとらえたものとしても、立派に通用する皮肉と諷刺が利いている。然し、実際には官憲がその取締りに血眼になり、業を煮やすほど、たしかにくだらないう性の俗書が多かったのも事実であった。また、その巻きぞえを食ってしまった真摯な研究書があった事をも、私たちは知らなくてはいけない。

身近かないい伝え、血肉の教材としても江戸期の性愛資料は実に貴重な存在であった。始めに知って置きたい知識だが、原典がほとんど湮滅に近く、複製・解説の書も問題を起すとか、秘密出版であるとか特殊会員間のみ頒布する非売品であったりして、俗書の氾濫のうちに〈何を求めるか〉の亡羊の嘆を繰り返すように、限定少数の書名を知ってはいても、実物が拝めない。齒がゆいことでは

ある。だからといって江戸時代の性愛資料の全部が隠されたり迫害を加えられたりする程我国の人文科学が蒙昧の域を脱していないというのではない。それはホンの一部分だけなのであるが、其処に研究者たちのいうにいわれぬ苦勞が存在するのだ。絵でいえば局部の描写。文字では、ハア、モウ、ソレソレ、イクイクなどという、他愛（辞書に依れば、他人を愛すること、自分の利益よりまず他人の幸福を願うこと）ない場面だけなのだが、其処だけを各自の体験なり空想なりで補うというのも、まったく不便な話である。

古代からの性愛資料といっても、此処では主として近世に焦点を置く意味で、その一般を知るに、『講座日本風俗史』（雄山閣）の別巻に、『性風俗』三冊がある。まずこの内容を見ることから始めた。

『性風俗』第一集（昭和34・4）総括篇

文学に現われた性風俗。美術に現われた性風俗。演劇に現われた性風俗。宗教に現われた性風俗。貴族の性風俗について。大奥の性風俗について。武家の性風俗について。農山漁村の性風俗について。町人の性風俗について。売春の歴史。艶書と去り状

について。秘画と艶本について。性典と秘戯書について。秘語について。あぶな絵について。謎々について。

『性風俗』第二集（昭和34・3）生活篇

日本性風俗史（古代・中世・近世・近代・現代）。衣生活に現われた性風俗。食生活に現われた性風俗。住生活に現われた性風俗。化粧と性風俗について。生理と性風俗について。恋愛風俗について。婚姻と婚礼風俗。接吻について。性教育と性生活。閨房風俗について。貞操と不義密通。蓄妾風俗について。後家風俗について。妊娠・出産・育児の風俗。墮胎間引の風俗。裸体風俗について。風呂風俗について。性具に

について。媚薬・秘薬。

『性風俗』第三集（昭和34・5）社会篇

遊里の風俗について。江戸の岡場所について。芸能に現われた性風俗。性的見世物について。性的舞踊について。性的俚諺俗謡について。性的祭礼について。性的遊戯について。小咄に現われた性風俗。川柳に現われた性風俗。衆道風俗について。文身風俗について。性的玩具と人形。

以上となっており、各界の権威が執筆している。この目録を見てお分りのように「性風俗」とは社会万般であり、人生そのものなのだ。だからどれの項目を探して読んでみても、該博な知識の一端と輪郭だけは知ることができた。広範囲に亘った性学百科事典になっている。けれども、本当に知りたい項目を一つ見つけると、実は其処に出发点を見出すことはできるけれど、それから先のことは皆目、見当がつかなくなる。したがって性風俗の実相を見究める、個別作業を始めることが如何に困難かと云うことも、段々わかってくる。それから先の面白い所が知りたくなる。

そのように性学（性風俗、性愛資料）一般を説いて、もっと密度の濃いものが何処にあるか、という気持ちが湧く。個別訪問開始だ。すると、益々いろんなことがわかってくる。只書物からだけの話だが、この世界でも昔から先生も多いが、奇人変人も多い。自称性学大家もあれば、道楽だと云って真面目な研究家もいるし売文家もあると云ったわけで、私を含めて斯道研究のアマチュアは随分高い月謝を払わなければならない。その頃になれば珍書入手の手筈もできるが、さて今度はお金が足らぬ。そうした貴重な一冊々々の積重ねのうちから、更に良いものと悪しきものの撰別が繰り返えされ、見捨てられたり、見直されたりする。そのうちから記述の目的としては、なるべく芸術（絵画・文芸）を除いた、やや実際に即し過ぎる感もあるけれど、性愛秘事を説いた性典類の紹介に重点をおくことにした。尚、引用書の出典（原本あるいは活字本の所在）については、好学家共通の便宜のため、各章毎に必ず記入した。

次に、艶本そのものと性教訓式のものとの区別であるが、江戸には情事指南の狂訓亭という戯作者もいた位であるから、人情本からも脚本からでも探せば心理的な人性訓Vだったらいくらかでもあるであろうが、性愛の表現

東亜軟書考（表紙）



としては千篇一律であって、江戸期に限らずいつの時代でも、好色読物の興味の中心はそこに至るまでの、手練手管の過程にあって、交為とその結果までは問題にしていない。従って純読物式の記述中からは強いて性訓を求める方法はとらなかった。

人間の性思考は即ち森羅万象の根源であることは、判り切っている。従って各種性的出版物を漠然として蒐集したらきりが無い話で書物、雑誌である以上そこには何処かに「読み所」はある筈だ。限りなく慾望を發揮できたら、性愛図書館でも造って見たら、どんなに有益な事業かと思うが、そういうことは望めない。過去にあった性愛文献類がどういう風に分類整理されてきたか、その記録の足跡を眺め、存在を確かめ、私たちの現在時点に於いて、どこまで探し、どれとどれは読めるか、そうした手掛かりが得られれば有難い。原本を被見することは無理だとしても、活字翻刻の有無、その紹介の精粗の大略だけでも判れば便利だ。

江戸の性典資料を多数一括して、一冊乃至叢書にまとめたものは甚だ少なく、やはり風俗雑誌の中の記事に多く散見するが似寄りのものが多く、原典の完全覆刻を若し志すとし

たら、原本所有者から資料を借り、全部写真に撮ると云った方法きりないから、それも亦個人的所有のもので、まったく好事の士一般の眼にはふれない恨みとなるだろう。益々歯がゆい話ではある。

其処まで、斯道の真底を探ることとは別に先人の努力の跡に謝意を表し、その集成書・解説書の主なものを挙げると、

『秘戯指南』（昭和4・5）梅原北明著、文芸市場社。

今更説明するまでもなく、東西古性典類を一堂に会した珍書中の圧巻。江戸期のものは「色道禁秘抄」、「女才学絵抄」、「色指南艶道の大意」、「陰陽手事の巻」、「枕文庫」『好色智恵の海』、『文指南』もの、『実娛教絵抄』、『艶道日夜女宝記』、等々が含まれているが、余りにも艶笑文芸式に手輕に扱われているので、この時代としては偉業だったと認めるけれども、引用書の校訂は杜撰、どうしても信頼度はうすくなるが、本文七七五頁という重さは大したものである。

『東亜軟書考』（昭和23・1）斎藤昌三著、星光書院。

内容は、「序説」「近古篇」、「現代篇」「中国篇」「印度篇」に大別されているが、資料を豊富に持っていた点では当代随一の人の編著としては軽いもので、軟書類の表つづらを一通り撫ぜただけで、食い足りないが、手引書としての役目は充分に果たしている。軟書書名の概要を知るための入門書として適切である。一四四頁、特装本と普及版の二種がある。

『徳川性典大鑑』（昭和28・4）和綴箱入上下二巻（一五五頁）、同書普及会会長高橋鉄開板。上巻に色刷口絵一枚、贈呈図説八枚、（十六図）付。一千部発行。

内容。巻頭の序辞のうちに、「私は（高橋氏）龐大な徳川期艶文献のすべてを、後世に伝える資力はないため、ここに複製したのは性科学及び性教育の面に貴重な参考資料となるものだけを厳選し、頭註として近代科学による私見を添えた」とある。

「姪事養生解」蘭山・高井伴寛。「新撰古今枕大全」春信、穂積次兵衛。「艶道日夜女宝記」雪鼎・月岡昌信。「閨宝大成 女容婦美観」月岡昌信。「新童児往来万世鑑」月岡政信。「閨中紀文 枕文庫」英泉・池

田義信。——上巻——

「懷宝秘伝 真情指南」英泉。「しめしごと雨夜の竹がり」楳本法印。「三ッ組盃」月成松寿楼永年。「旅枕五十三次」笑山・柳水亭種清。「男女狂訓 花のあり香」飯尾東川。——下巻——

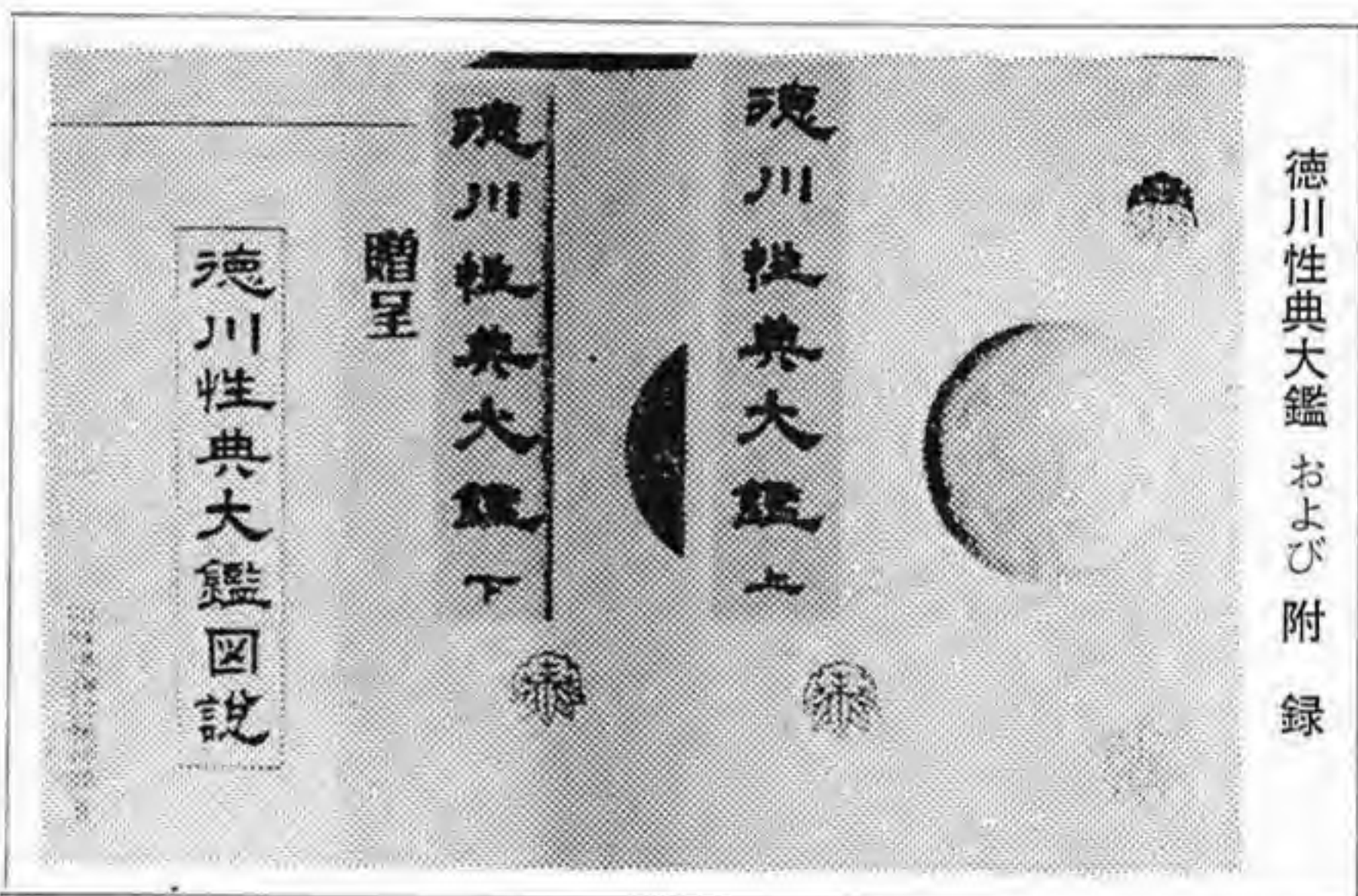
以上、十一部を収録。但し、全文覆刻もあり部分抄出もあり、全冊とも挿絵と書影を欠いてしまったことは如何にも惜しい。これらの底本は現在では、この書を編纂した日本生活心理学会に保存されていない書もあると聞くので尚更である。

この大鑑の発刊された昭和二十八年は、質の良い日本艶笑文献類の出版面では空前絶後会員雑誌・各種単行書ともに現在をしのいでいる。確かにいまは印刷や製本は以前にくらべ美しくなっているが、内容という点では、どうしてもこの頃の刊行物に頼らざるを得ない。編者高橋鉄氏は当年の斯道文献界においても代表的存在であった。

同じく高橋氏の私家版で、

『日本性典大鑑』日本生活心理学会発行、上巻昭和二十九年九月、下巻同年十月、両冊共本文一二四頁、がある。

徳川性典大鑑 および 附 録



内容。好色旅枕。婚礼秘事袋。枕文庫発端枕文庫補遺。医心方房内篇。男女仕附方。閨の御慎しみの事。女閨訓。

序文のうちに、「窮巷勉学の中から先年、向学敬人の同志の秘蔵に托した『徳川性典大鑑』二巻は、倅、身に余るばかりの謝意を表され、原爆の世をくぐり、幾冊か次代の手へ渡されるであろう」また、

「時に偶々賤吏により縄目の辱殆を受ける事態が生じたのを性科学者の榮譽として、猛夏の中を強行し、今迄に書きためてあったものを整理して加うるに漢籍の註解を伏見冲敬君に、江戸文献の一二を花咲一男君に教示され漸く脱稿をみたのである」と述べている。

註。この私版五百部発行の資料集のうちには、今日ではもっと完全整理された覆刻が出ている。高橋氏の盛名をもってすら、全冊が会員に行きわたるのに、五十年かかった由。斯道研究のむつかしさを物語っている。

『日本艶本大集成』（昭和38・6）魚住書店編者名はないが中野栄三氏である。

まったく書名通りの大集成で、一望のもとに我國の艶本類を大鑑できる便利な書で、古代から近世・近代、現代にまで及んでいる。

「説話」「小説」「絵巻」「衆道物」「江戸文芸（小説・戯曲・狂歌・川柳・小咄）」

「指南書」「奇書」「艶本」「道中物」「事典物」「性典」「往来物」「絵本」「目録」

「調書物」「性随筆」「風俗研究書」等々。多彩な項目に分類・解説されている。愛好家にとっては正に座右の書として離すことはできないであろう。但、校正上の難があり全般に亘って誤字・誤植、訂正を要する点が多いのは、この書を利用する場合特に留意し、原本（あるいは確実な校訂書・解説書）との対照が必要である。

強いて探せばまだあるかも知れないが、私見の集録物は以上であった。尚、諸書の中に散在する記録類の発見には余程広く眼を配らなければならぬ。まして雑誌記事ともなれば尚更である。また、最近の風俗雑誌類には

日本艶本大集成 〈中野栄三編〉（表紙）



カラーをふんだんに使った江戸枕絵の部分図も多いけれど、原本を主とした丁寧な解説もある反面に、ただ読者の好奇心のみを煽ろうとする一箇の画面に過ぎない紹介もあって、やはり正確にあくまでも知識の対象としなくては、いまの時代の風俗規制のゆるやかさに甘えた単なる好色見世物に過ぎなくなってしまう。過去の性文化をいたずらに露呈し、バクロ的に利用する研究者（出版社）は、それこそ自らの墓穴を深めているだけである。そのものが存在した江戸時代にだって、まさか白昼の公刊物ではなかった筈だから。

江戸の性愛資料の取扱いについては、その真実（科学的という意味ではなく、人性の）を現代において如何に認め活用し、性生活を考えるための素材にするかという点にある。また、明治以降にあっては海外から人文科学の流入が甚だしく、かえって日本人本来の情緒がしだいに失われてしまった。

古いものが、今日程情容赦なくどんどん棄て去られて行く時代はない。現代にあっては消費は美德だとすらされている。例えばまだ使える部分が残っていても、捨ててしまわなければ身辺は屑だらけになって、身うごきす

ら出来なくなってしまう、と誤信されている。そして人々は常に新しいものへ、より新しい方へと流行を追って行く。悲しいかなそれが現実の諸相である。特に、人の古いのが一番きらわれる。だが人間というものは段ボールの要らなくなったのとは違うから、廃物ではない。従って老人問題は絶えざる社会の関心事であると同時にまた無関心でもある訳だ。だが併し、老人も知識も古い程おもしろい位そこ光りしているという事も知ってもらいたいと思う。新しい科学のみが万能と思ひ込むのも、それは新しい迷信の誕生である。新しいものは又速かに古くなるものだ。私は性文献をいろいろと読み漁った果てに、此頃になってつくづくと想うのだが、男女の真剣かつ真心をこめた理解ある性愛なくして、家族への愛、社会愛、人類愛は絶対に生じないとかんがえた。これは正しいことだと信じている。そして、性愛の実相を、いつまでも淫らなものとして閉じ込めて置けば、それは何時いつまでも淫猥であるだけで、古人が折角のこしてくれた尊い正直な性体験が生かされないまま埋もれてしまう事を惜しむ。そして語り得ざることを語り継ぐべく、どれ程慎み深く考えられてきたか、そのことに就いて素

材を紹介して行きたいと思う。

だいぶ長い前置きになってしまったが、この稿はもし連載が可能ならば、毎号三十枚以上十回分までの用意ができています。平凡陳腐な古文獻類の羅列に過ぎぬものですが、性典式のものを一望のもとに眺められる便宜は得られるものになります。完結までどうかご清援のほどお願いしたい。

旧道徳時代の女の性典

一、女 閨 訓

この書は通常、『女訓』または『女閨訓』と呼ばれ流布されてきた。別に『高貴女性常の心得、某姫君降嫁の節に』と題した秘密出版が昭和初年にあった由。また現代文に書き改めた春本もあったし、それが種本かと思うが、恐らく印刷工などの悪戯かとも思われる。貝原先生作などと戯文化した改作ものを二三見たことがある。印刷した原文には、活字・孔版共、左の四種がある。

①『相對』（孔版は刊年不明、活版は第二十号で昭和廿九年十月）。

②斎藤昌三編『東亞軟書考』（昭和23）。

③日本生活心理学会編、解説付『閨の御慎みの事、婦女庭訓、全釈』（昭和23）。

④中野栄三編、魚住書店刊『日本艶本大集成』（昭和三十八年六月）。

尚、『相對』第二十号では『玉手箱』と題してあるが、これが恐らく普及本の原題であって「あけてビックリ」という意味である。以後の流布本は全部これに拠っている。説明をあとにして、先ず原文を相對二十号によりお読み願いたい。

玉手箱

「常の御心得」

女性性は性順に礼儀正しく恥あるを淑徳と致し候、淑徳なければ、公家大名の姫君にても下素に異ることなく、下賤の鄙女にても淑徳備はり候へば、公家高家の簾中奥方とも仰がれ申す可く候、下世話に、女は氏なくして玉の輿に乗ると申候も、偶に賤女より天然の淑徳備はれば、女性顕れて後、御台所となり候事もありとの事に候、御輿入後は必ず順を以て御心と遊ばされ、何事につきても殿御に口を返し、又は荒々しき挙動をなし、或は猥がましき行ひなど夢遊ばされまじく候、色を以て男に仕ふるは妾の事にして、心を以て殿御に仕ふるは、正妻の御務に候故に、御輿入先の殿御の許に多くの妾在しまし候とも、色を

以て之と争ふなど端なき御挙動はされまじく候

一、奥方は気品高きをよしと致候、さりながら、気品高ければ情薄くなり、情濃かなれば品格を失い、中庸を得むこと誠に六ヶ敷候故に、礼儀を正しくすれば品格乱れず、心を順にすれば情うするがず、情濃かにして品高き奥方たらんには、順と礼とに由るを第一と致し候

一、殿御の御運勢は奥方の好悪によるものに候故に、奥方常に優に美はしく花の如くなれば、殿御の御運勢は春の如く日に月に萌えいで、御立身遊ばさるべく候、之に反して、奥方若し憂ひぬる悲しみ怨み等其心にありて、御顔にあらはれ、又は言葉の端行に顯る時は、殿御の御心其度毎に乱れて、果ては、御運縮まり家傾き御身も遂に亡び給ふに至るべく、夫れ故に古来より大望ある武士は、妾を持とも妻を持たずとまで申候、妾なれば何時にても去らるべく、正妻は去り難き為に候、夢々慎みて殿御御一代の御守り菩薩と御成りなさるべく候

「閨の御慎の事」

一、御色気薄きは情なく、情なくば御夫婦の御仲睦しからず、終には御家の滅亡とも相成

申べく候まま、御色気は充分なるを可と致し候、されども色は乱れ易きものにして、之より礼を失ひ端たなき挙動顕れ、殿御に見下され愛想を尽かざる事最も多く候、故に閨中にては殊に淑徳を尊びて順を以て情を助け、礼を以て乱れを防ぎ、恥を以て愛を補ふことに候、殿御よりお許に迫り給ふとも、自ら進むで情を商ふ歌妓に等しき猥りの御挙動かならず遊されまじく候、女子の良人に嫁して初めに愛せられ、後に愛想を尽かざるは、皆閨中にて淑徳を失ひての事に候、況して金殿の奥方としては、妾に等しき行ありて、其方の品格を失ふは第一の恥に候

一、用事終れば、必ず床を別々にし給ふべし寝床一つなれば、末にても急度愛想を尽さるものに候

一、閨に入る時は、必ず幾年の後にてても初めての如く恥しき面色を忘れ給ふべからず、狎れても恥しき面色なければ、妾の如くなりて其の品格を失ひ、用事すみて後必ず殿御の心に嫌気起り、度重なるに従ひて愛想をつかされ申候

一、殿御は何誰様にても寵愛の増すに従ひて種々になされ、枕辺に笑絵を置き之を眺め、又は陰所に手を入れてそぶりなどし給ふ事あ

り、斯様のとき心掛けなき女性に興に入り果してあられもなき大口をきき、或は自ら心崩れて息荒く鳴らし、恥もなく挙行ふ方様もありと申す事に候、依て殿御の用事にかかり給ふ時は、種々にして曲を尽し、充分に仕度思ひ給ふが常なれ共、用事終らば見るも嫌になるとぞ申す事にて候、色は柔かくして恥しきうちに味あるものにして、恥しき面色ある程情深くなり申候、故に殿御より興乗じて種々に挑み給ふ事あれば、荒々しく之を拒めば情失ふを以て、只々殿御の胸に顔をさし入れて恥しく思ひ給ふべし、又殿御用事にかかり給へば、殿御の胸に顔をさし当てぐつと抱き付き、腰など余り動かし給ふともたわけたる事を言ひ、又自分より口を吸ひ或は取り外したる事を言ひ給ふべからず、又佳境に入り給へば、常に溢るるとも耐えて殿御の措き給ふ時に止め給ふべし、閨中斯くの如く優美に在しませば、奥方の品位日々高くなり、高くなるほど麗はしく麗はしきほど殿御の愛増し、毎日閨の中に名残りのこりて、殿御は御元様のみ思ひ給ふに至り、生涯御寵愛衰え申さず候、賢夫人は偏に此の慎みにて殿御の内助となり守神となりて御運勢を保護し給ふなり、下様の賤女にても閨の淑徳を守れるものは、

顯紳高貴の正妻となりて、良夫を助け天晴れ功名を為さしむるものとぞ申候

一、閨の用事終れば、陰門の始末し給ふに紙の音など御耳に入らぬ様に心掛け給ふべし、用事終りて後は、殿御の心色に飽き給ふ時なるを以て、陰門を顕さぬよふに意を用ひて静かに始末し給へば、品よく殊に麗はしきものに候、斯様の時こそ、海棠の雨に打たれし譬の如くなるを可と致す事に候

一、殿御の寵愛勝れ給ひて昼の房に入り給ふ事あらば、無碍に拒み給ふは情に背き給ふなり、されども夜の房事にも愈々増して一倍深く慎み給ひ、切に宜ふとも萎れたる姿なし給ふ可からず（註。別本では、うちかけ襦褌をぬぎ給ふべからず）、殿御佳境に入り給はば、静かに起つて厠に到り陰部の始末して、其帰るさは腰元にも仰せられず、自ら御手拭を水に湿し持ち帰り、跪きて顔を背けて殿に差上げ給ふべし、此外色々閨中の御心掛あれども心して行ひ給ふべし、只礼と順と恥を忘れずして、情濃かに心掛け給ふべく候

次に、「朝夕の御心得」という章があるが「朝は必ず殿御に寝姿を見られ給ふべからず疾々起きて化粧を直し麗しき顔にて殿御に会ひ給ふべし」という閨房生活における卓見の

あるほかは、日常の生活訓が七項目ばかりある。「武門の習にて討死ともならん時は、女々しき挙動なく、潔く殿御と共に御自害遊ばされ、末代の誉を残し給ふべく候」と結んでいる。きびしい言葉ではある。

女訓または女閨訓と称された一巻の書は、遠く元禄の頃島津の大名の姫君が東国の某大名に輿入の際に、姫の伝育の任に当たっていた老武士夫婦が別れに臨み奉った、という伝説もあるが、一方には江戸期における仮託の戯文という説もあり、原本は不明である。勿論写本で伝えられてきているので、書写の年代によって文章も随分かわって来ているから、原型をしのぶ位までの所で、これと一巻の極彩色の枕絵を副えれば、立派な嫁入道具である。

とにかく、この閨房訓は全く男性本位の封建的色彩の強い、犠牲の上に成り立つ婦徳を説いたもので、淑徳を強調し奥方としての気品を保つ事を重視している。色情で仕えるのは妾のことであって、殿のお側にはその種の女性が多いから、「色を以てこれと争う」のはおろかだ。と云っておきながら、そのくせ色気の薄いのは情なしだから、色気を充分に持つようにと訓え、だが色は乱れやすいもの

であるから、度が過ぎて好色下品な女と思われてはいけななどと、論理の展開がきわめて重複し、注意が細心であって、性教育のむつかしさを痛感させられる。殆ど行為の説明というより、その事に対する心構えや、覚悟の説明となっている。

性交を殿の「用事」と表現。まさに用事には違いないが、女性がこの場合、しごとの容器としての存在になってしまつて、感じの悪い言葉である。殿が用にかかる時は「種々にして曲を尽し、充分に仕度思ひ給ふが常なれ共、用事終らば見るも嫌になるとぞ申す事に候」と、性交後における男性の冷酷な心理倦怠を伴う飽和感にまで鋭く簡明に突っ込んだ叙述をも示している。また、昼どり（昼間における性交）の實際を説くなど、心憎いばかりである。

然し、『女閨訓』の意味は女性生理を説いたものではなく、文字通り閨房の心得だけであって、通俗婦人医書としては価値のないものであろう。明治になってからは、この種の心得書は女性生理から説き起し、生殖器そのものの説明、交媾法、妊娠中および分娩の注意、更には育児法にまで及んでいたが、女閨訓にあっては、閨房における婦徳のみを説い

たものであった。然かもそれは、常に殿（男性）に都合のいいことばかりであった。

したがって、原文はごく短いものでありながら、長い歳月を経た封建女性たちの忍従の記録として見る事ができる。

男女交媾の基準を示した

二、貝原益軒の『養生訓』より

素朴で、平凡陳腐な質問にちがいないが、扱て性交のことは幾回位が適当なのでしょうかと訊かれたらどうする。各自の個人的体験から割出して返事をするのは極めて危険だと思う。体質や年令のこともあって、解答にこまる。先ず決めてからかかることではないこと、結婚生活に入る以前はあらゆる点数を決める訳には行かなかったことを、いざ性生活に入ってからと云って、無智なるが故に毎晩行うものと考えている場合もある。併し、そうしたことは巻を追うに従って理解できると信じるが、此処では古人の説を聞いてみたい。

貝原益軒の『養生訓』のうち第四巻に「慎色慾」（含む「房室戒」）の章があつて古来有名である。今更に此処で紹介の勞をとる必要もないし、余り現代的意義をどうのこうの

と云うべき程ではないが、江戸時代における性訓として長い間親しまれ、典拠とされた点を改めて見ることにしたい。養生訓の活字化は明治年間に博文館で発行した西田敬止校訂の『益軒十訓』にもあり、国文学叢書として知られた有朋堂文庫（大正6）にもあるから原文は珍しいものではないので、性交回数を説いたところと四十以後の初老期に入ってから性生活上の注意を聞いてみたい。

「人年二十の者は四日に一たび泄す。三十の者は八日に一たび泄す。四十は十六日に一たび泄す。五十は二十日に一たび泄す」とあって、これは実に長く信奉されてきた思想であって、実際に、行なわれたかどうかということとは別として、一つの基準を示したものだ。二十代の新婚早々のカップルに四日目に一度だけ泄せじゃ承知しないであろう、他の年代にしても平均少な過ぎると思われる来ている説である。然しむかしは「人生五十年」と云われていたことなども考慮に加える必要もあって、現在程寿命が長くはなかった。従って六十以後のことは、「六十は精をとどてもらさず、もし体力さかんならば、一月に一たび泄す」とあって、殆ど六十歳以後は問題にしていけないが、W・シュテークルが一九二

〇年に発表した医書の実例に依れば、

「デンマーク人、ドラックエンブルイは百五十歳まで生きた。彼はしらふでいるより酒を飲んでいゝるほうが多かったが、こんなに高齢まで生きた。彼は百十一歳のとき六十歳の女性と結婚し、妻の死後、百三十歳のとき若い百姓の女に恋したが、彼女にことわられた。百二十三歳まで生きたペーター・アルブレヒトは八十歳のとき結婚し、七児をもうけた。ガーゴン・ダグラスは百二十歳七カ月まで生きたが、八十五歳のとき結婚し、八児をもうけた。しかも百三歳のとき一児をもうけている。イタリアの男爵パラヴィチオン・デスカペレスは百四歳でメランで死んだ。彼はそれまで四人の妻をもったが、最後に結婚をしたのは八十歳のときであった。彼が死んだとき、彼の妻は妊娠していた。当然人々は「その子は私生児ではないかと疑った。これらの老人達の精力は、彼らの妻たちから高く賞讃されていた」

ということもあって、貝原益軒にきかせてやりたい。海外の実例ではあるが、益軒流に六十にもなれば月一回と断定されてしまうと慾望の強い老人はこまるであろう。但し養生訓は長寿法を説いた書なので、なるべくひか

え目に云っているのである。この事は體質や人種の相違、安逸な経済生活に恵まれている人と労働者とは違うから、まず基準や定則と云ったものはない。只、東洋思想のうちには仏教の無常観がつねに人生を支配しているので、色情に対してはいつも消極的であって女人不浄性悪説に支配され性慾はとかく節制することを美德とされ、これを愉快と観ずる説は文書の表面に現われず、俗書俗文学のうちに活躍している。

次に、これもよく人々に知られた初老の性訓を見ると、

「年四十に至らば房中の術を行ふべしとて、四十以後血氣やうやく衰ふる故精氣もらさずして、ただしばしば交接すべし。かくの如くすれば元氣へらず、血氣めぐりて補益となるといへる意なり。四十以上の人血氣いまだ大いに衰へずして、稿木死灰の如くならず、情慾忍びがたし。しかるに精氣をしばしばもらせば、大いに元氣をついやす故、老年の年に宜しからず。ここを以て四十以上の人は交接をしばしばにして、精氣をば泄すべからず。四十以後は腎氣（註・性的慾望）やうやく衰ふる故、泄さざれども壮年のごとく精氣動かずして滞らず、この法行なひやすし。この法

— 附稿 —

犬張子のはなし



犬張子は閨房一儀の始末紙を入れた容器で、『女中庸瑠箱』（文政二）には「犬張子といふ物は犬の形したる宮也。産屋に用ふ器なり。産着を先づ此犬宮に着せ初て其後子に着する。南都の法華寺といふ尼寺の内より天下へ出す也」とあるが、安産のお守りともなっていたが、『婚礼秘事袋』のうち、部屋かざりやうの事、のうちに「紙は一二三と文庫の上に並べかざりて前に犬張子を置く也。犬

張子は拭い紙を入れるとき頭の方を持て蓋をとり入るるべし。さうじの人は尾の方を持てあくるべし」と明記してあるので、これの説明が真であろう。古式によれば翌朝仲人の検分があつて、めでたい証拠として嫁の里方へ送ったという。その顔は小児に似せてあつた。古人がいかに性交のことをいやすまず、情愛を以て接していたかということの頭われを、此処に見ることができる。

を行なへば、泄さずして情慾はとけやすし」と云うのだ。随分と無茶な話であつて、いちばん良くない点は女性側の性感がまったく無視されていて、泄さずしてそうしばしば交接のみされていては、たまったものではあるまい。まったく男性本位の性論で長寿もしい快樂もむさぼりたい。それが権威づけられた訓戒として、性モラルとして通用させようとするのであつて、王者が後宮百千の美女に対する交接術であつて、夫婦道においてあるべき行為ではなからう。養生訓の性訓はいずれも支那房術書からの換骨奪胎であつたら、こうした組立式哲学的行為の論まで採用したくなつたのだ。如何にも学者好みの理屈と云つた感じがする。又、案外に知識人士には好まれ、古来これを相当実行し、長寿と性慾を折衷させた妙法として金科玉条としたらしい。貝原益軒がこの『養生訓』を著したのは正徳三年（一七一三）一月、八十四歳のときと伝えられているから、やはり長寿者であつた。その点は、支那房術学を信奉した正直な偉人らしくて良い。又実践者でもあつて、日本人には珍しいエピソードも伝えられている。



A

一人で寝ていると、隣の大崎の家のことが気になってしかたがなかった。

葉子をむかえにいった三田までも帰ってこないのは、葉子が大崎と浮気をしている現場をみつけたとしても、怒れるような三田では

青春の陥穽

(12)

一

対

三

芳野眉美

カット・春川ナミオ

なさそうで、かえって、葉子と大崎のいいおもちゃにされているのかもしれないと勇は思った。

微熱は続いていたが、ひとりで、ぼんやり寝ていると、いろいろな妄想が湧いてきて、勇はしきりに寝返りをうった。

葉子のぬめやかな肌が急に恋しくなり、さんざん飲まされたり、たべさせられたりした葉子の糞尿までもが、急にほしくなるから不思議であった。

勇は起き上った。

大崎の家の様子を探っていたほうが、一人でむずむずと妄想にふけっているより、よほ

ど気が楽であった。

忍び込むのは慣れている。

さんざん留居番し、また、忍び込んで雨戸の節穴から覗いていたのである。

少しくらくらしたが、勇は大崎の家の、まだ新しい石塀を越えた。

工場の廃墟といい、雑草の茂った空地といい、広い畠といい、人通りのないときの二軒の家は、まるで陸の孤島であった。

誰に気がねをする必要もなかった。

大崎の家は昼間から、ぴったりと雨戸が閉められている。勇は、雨戸の節穴に、やもりのように吸いついた。

勇の眼に飛び込んできたのは、四畳半と八畳の境の、鴨居に吊るされた、絵里子夫人の裸身であった。ふくらみきれぬ乳房に、無惨に噛みついたあとらしい歯型がつき、むっちり肉づいてゐる太腿に、つねられたらしいあとが青くついてゐた。

絵里子夫人は、奴隷の帯ともいうべき、アヌス拡張器をはめられたままであった。手首を吊るすロープも痛々しく、眉の間にしわをよせて、絵里子夫人は眼をつぶっていた。

絵里子夫人の足のほうに眼をやったとき、そこに、無惨にも身体を二つに折られて、うんうん呻っている三田を、勇は見た。

三田の身体がこれほど柔軟だとは勇は思ってもみなかった。

後手に荒縄で縛られた三田は、開いた自分の両脚の間に、顔を無理やり押し込まれた恰好で、上体を折られてゐたのである。

足首はそれぞれ足枷がはめられて、部屋の隅にうちつけられた鉤に吊るされた鎖で左右に開かれて引っ張られてゐる。

自分の股間に首を突っ込むかたちで、「ホホ、自分の臭いでも嗅いでおいでよ」と妻の葉子に嘲笑されてゐた。

三田の首に巻きついた首縄が、股間縛りの

ように前から後に回り、背中を一周して再び後手に縛られた手首に、もどっているのである。極度に彎曲し、半宙吊りにされた三田の姿は、葉子を興奮させるのには十分のようであった。

「くるしいかい」

三田の苦悶の形相がすごかったのか、葉子は三田の顔を覗いて、ちょっと心配そうに声をかけた。

「くるしいよ、葉子」

かぼそい三田の声が、ときれときれに聞こえたが、

「ちえっ、甘えるんじゃないよ」

声をだせるぐらいなら、この程度の縛りは大丈夫だと思つたらしく、葉子の態度がまた横柄になった。

葉子は、鴨居に吊るされた絵里子夫人に近づくと、

「奥様、ちょっとこれをおかりしてよ」

と、絵里子の拡張器をはずして、その太い栓に眼を円くした。想像以上にその栓は大きくて太かったのである。

葉子は三田の鼻の先に、その栓を突きつけた。

「いい匂いでしょ」

「うう」

と三田は自分の股間に首を突っ込んだまま呻きつづけた。

「大崎の奥様の匂いなんですもの、お前はきらいじゃないわね」

「うう」

「ほら、よく見てごらん。大崎の奥様の残りのものがついてゐるでしょう」

「うう」

「お前にしゃぶらせてあげるから、うれしそうな顔をしてごらん」

葉子は夫の口におしこんだ。拡張器は、三田の頭を締めつけ、鼻を圧し潰し、口を割つて、猿ぐつわに変化した。

全裸の大崎が、妻の絵里子に近づいた。

爪先立ちになって、ひっそりと眼を閉じてゐる妻の裸体を、にやにやしながら見ていたが、絵里子の足首をつかむと持ち上げた。

二の腕が彎曲して、絵里子は身体を支えたが手首に食い込むロープが痛いのか、涙が頬をつたわった。

「いたい」

大崎は新妻の涙に、かえって刺激を受けたようであった。

葉子が見ているからかもしれない。

大崎は、妻に対して、かなり残酷になっていた。

「いたくても、がまんしていろ」

絵里子は激痛をこらえて、唇を噛み、めく
れた唇から唾液があふれていた。

宙吊りの身体を支えている手首が、苦痛を
通りこして無感覚になり、その無感覚が、マ
ゾヒスティックな快感となって、絵里子の全
身を戦慄させた。

勇の胸のどよめきが激しくなった。

葉子の顔がじっと雨戸のほうに向けられ、
雨戸の節穴から覗いている勇の視線と、葉子
の猥らな濡れ濡れした眼が合った。

葉子は、忍び寄った勇が、雨戸の節穴にへ
ばりついていることを知っていたのである。
雨戸にむかって、葉子の体が、これ見よが
しに大きく振り向けられた。

その瞬間、勇は、煮えたぎっているルツボ
の中に、吸い込まれたと思った。

男には、誰でも胎内復帰願望というものが
あるものである。

母性型の女性に憧れる男の、なんと多いこ
とか。

勇の吐く息が荒くなった。
と、

「勇」

と部屋の中から葉子の声がした。

「そんなところで覗いていないで、こっちへ
おいで」

どきっとするひまもなく、雨戸があげられ
て、

「なによ、その恰好は」

寝巻のまま忍び込んだ勇が、葉子の手で裸
にされるのは、いとも簡単だった。

あっという間に勇は葉子に馬乗りになが
られた。

女上位は時代の風潮でもある。

小さな庭のおもちゃのような芝生の上で、

葉子と勇は転げまわった。

ヘリコプターの爆音が聞こえ、上でとまっ
たようであった。

ヘリコプターは、大崎と三田の、二軒の古
びた家の上空をゆっくりと旋回し、なかなか
はなれなかった。

かなり低空なのでヘリコプターの操縦席か
ら見下ろしている男の顔がはっきり見えた。

失速したら、墜落するかもしれない。

勇を抱きかかえて、葉子は眉をひそめた。

ヘリコプターの爆音が、まるでバイブレー
ターのように心地良い震動を葉子の全身にあ

たえていたのかも知れない。

宙吊りにした妻を放ったまま大崎が、ヘリ
コプターに驚いて飛び出し、葉子と勇のあら
れもない姿態を目撃して息をのんだ。

ヘリコプターから望遠レンズでねらわれた
らどういふことになるのだろう。

ヘリコプターの男は一人らしく、しばらく
葉子と勇の頭上に停止してから、大崎に見上
げられているのに気がつく、バツが悪そう
に飛び去った。

「大胆すぎる」

と大崎は葉子にいった。

「大丈夫よ」

と葉子は笑いかえした。

「誰にも話しはしないわよ。あの男」

「そうかなあ」

と心配そうに大崎はいった。

大崎の家を調べられて、あとあとつまらな
い事件にひっかかるのを、大崎はおそれい
るようであった。

「話したところで、誰も信用しないわ」

勇を突き放して葉子はいった。

「大崎の奥様のところへおゆき」

勇は雨戸のかげから庭を見ている大崎を見
上げた。

大崎が何かいう前に、葉子が、弾丸のように大崎の胸に飛び込み、もつれあって敷いてある布団の上に倒れた。

吊るした絵里子夫人を勇がどうするかを見物しながら、葉子と大崎は、布団の上で狂態を示すつもりだった。

勇が、おずおずと絵里子夫人に近寄った。

「いや」

と絵里子夫人が叫んだ。

「いや、いや」

絵里子の華奢なからだに、勇を見てぶるぶるふるえていた。

「あなた、助けて」

手の自由を奪われていたのでは、勇に何をされようと、ふせぐことは出来ない。

「いやったら、許して」

本気になって、助けを求める絵里子夫人の悲鳴が、葉子の感度を鋭くさせた。

「無理もないな」

大崎は、新妻が勇にいたずらされているのを見ながら葉子にいった。

「俺しか男を知らないのだから」

絵里子にとって、葉子から雄犬あつかいにされている、フーテンのような勇が、二番目の男になるわけであった。

「いや、いや」

吊るされた絵里子夫人の前に勇はひざまずいた。

「やるじゃないの、勇」

にやにやしながら葉子は、勇が絵里子を責めるのを見ていた。大崎は平気のようであった。

「あまりあわてないで」

と葉子は大崎にいった。

「ゆっくり舐めてよ」

勇が大崎夫人を舐めまわし、一人、三田は身体を二つに屈折されて、上眼使いに二組の乱れ方を、ちらちらと見つめていた。

B

勇が絵里子の足首をつかみ、夫の大崎がしたように、絵里子の足を持ち上げた。

「はなして」

二の腕を彎曲させて全身を支え、絵里子は苦痛に悶えていた。

「いたい、いたいだよ」

夫の大崎は、妻の悲鳴にも知らん顔をして葉子の唇を狂ったように吸っている。

「あなたったら」

「うるさい」

大崎は、部屋の隅にほうり投げてあった下着の中から、丸められたままの自分のパンティをつかみ、妻の口におしこんだ。

「あ、あなた」

「静かにしろ」

夫の汚れたパンティを口につめられては、絵里子は夫に助けを求めることは出来ない。

ほかの男におもちゃにされることを、夫が公認しているのだから仕方がない。

夫の汚れたパンティを口から押し出す気力もなく、絵里子の全身から力がすっと脱けていった。

勇は、絵里子の主人である大崎が、勇の手助けをしたのに少しばかり毒気をぬかれたようであった。

「勇」

と葉子が叱責した。

「ぼやぼやしていないで、絵里子さんを可愛がってやりよ」

「うう」

夫の汚れたパンティを口からはきだし、絵里子は死にそうな声をあげて真青になった。勇は絵里子夫人の口の中から大崎のパンティをつかみだすと、やにわに絵里子の唾液がながれてべとべとになった唇にかぶりついた。

それは、接吻というものではなかった。勇は絵里子の唇を、鼻を、眼を、いや、顔全体をたべているようであった。

葉子が、身体を乗り出して、勇と絵里子の様子を見守った。葉子は布団に四つ這いになっ

ていた。大崎は葉子のお尻に顔を近づけると、犬のように鼻を鳴らした。

「ああ、いい匂いだ」

と大崎は溜息をついた。

「いやだわ」

葉子はびっくりして大崎を振り返った。

「お尻がほんとに好きなのね、大崎さんて」
四つ這いのまま、葉子は尻をくねらせた。

「葉子さん」

大崎が、うわずった声をあげた。

「なあに」

「ここを……」

大崎は、葉子の尻に顔を寄せた。

「貰ってもいいですか」

「馬鹿ね」

と葉子は、のどの奥で笑った。

「そんなこと聞く人がいるのですか」

大崎の妻の絵里子を知っていることを、葉子が知らないということが、なんだか残念に

思っていたのかもしれない。

キス以上の経験がなくても、大崎のようなベテランが上手に教えてくれるだろうと葉子は思ったのに違いない。

「勇」

葉子は四つ這いのまま叫んだ。

「絵里子さんの、かんじんなところをためし
てみないのかい」

「そうだった」

と勇は、にやりとした。

絵里子夫人を吊るしてあるロープをほどき
休むひまもあたえず、絵里子夫人を後手に縛
ってしまった。

「お尻を見せるんだ」

と勇は大崎のまねをして絵里子にいった。
絵里子は尻を高くもたげて、畳に顔をひし
やげた。

「もっと、突き出すんだ」

勇は絵里子の尻を、掌でびたびたとたたいて
いった。

肩で上体を支えて、絵里子は勇の命じるま
まに従った。

「すばらしい」

と勇は感嘆した。

華奢なからだつきの絵里子なのだが、細い

腰から、急にむっちり肉がついて、丸い尻は、むずむずするほど勇を興奮させていた。

「御主人のテクニクにはかなわないけれど
公認でお尻の浮気も、またいいのですよ」
勇は肩をふるわせている絵里子にいった。

「あああっ」

という声がダブッた。

三田夫人と大崎夫人の二人の口から、同時
に発せられた呻き声であった。

「ああ、だめ」

と二人の人妻は叫んだ。

「だめよ、だめ」

と葉子は大崎をふりほどうとした。

「でちゃうわ」

排泄の快感に似た甘美な陶酔が、葉子をく
るしめていた。

「どうだね、絵里子は」

と大崎が勇にきいた。

「奥様はすばらしいよ」

と勇は平気で答えた。

勇は満足そうな大崎の顔を見た。

大崎の新妻に対する飼育は成功したようであ
った。

大崎は二つ折りにされて、うんうん呻って
いる三田の背中を、足でけとばして、

「いただきましたよ」

と三田にいった。

「奥様の処女地をほおっておくなんて、御主人らしくありませんね」

何をいわれても、拡張器の栓で猿ぐつわをされていては、三田は返答することができない。

「御主人、背中をかりますよ」

大崎はそういうと、絵里子を抱いて、三田の屈曲した背中にまたがらせた。

「いやよ、いや」

と絵里子は泣かんばかりに首を振った。

「ねえ、おトイレに行かせて」

「だめだ」

と大崎は妻にいった。

「三田さんの背中の上にするんだ」

「そんなのいや」

絵里子の秘宝は、落ちもしないでとまっていた。

「お願いだから」

「だめだといってるだろ」

葉子と勇があきれざるぐらい、大崎は自分の妻に対して残酷だった。

「ああ、もうだめ」

ぬるっとした、あたたかいものが、やわら

かくとぐろを巻くのを、三田は背中に感じていた。

それが大崎夫人の排泄物だとは、うすうすわかっていたが、つんのめって首を折られていたのでは、見るすべもなかった。

背中に火がついたのではなく、背中をトイレの代用にされて、三田のマゾヒスティックな感傷は、ますますエスカレートした。

「勇」

と葉子は、夫の背中に排泄された絵里子夫人のものを指さして

「たべてみるかい」

といった。

「奥様のは、新鮮だから、おいしいのじゃない」

勇は首をふった。

「け、けっこうです」

絵里子に対して、かなりサディスティックに責め続けたので、急にマゾヒスティックになるのは、なんとなくいやであった。

「このブタなら、なんでもたべるわよ」

と葉子は夫の三田を指さしていった。

「葉子のをたべさせたことがあるから、絵里子さんのなら、喜々としてたべるわよ」

葉子は、勇に命じて、三田の口から、絵里

子のアヌス拡張器をとらせた。

はしを持ち出し、絵里子の不必要なかたまりを少しつまむと、

「ほら、絵里子さんのものよ、おたべ」

と、三田の口に、はしごと突っ込んだ。

「おいしいでしょう」

三田の口がもぞもぞ動き、死にものぐるいで食道にのみこんでいるのがわかった。

「妻のUrethraの味は、どんなものでしょう」

と面白そうに、大崎が三田にいった。

「よかったら、毎日でもたべさせてあげますよ」

C

夫婦交換ならば、三田は大崎の妻の絵里子と関係が出来るわけであった。

三田の妻の葉子は、繰り返し、大崎と関係しているのである。

三田が、絵里子と関係しなければ、こんな不公平なことはない。

三田夫妻と大崎夫妻との間に行なわれていたSMプレイに、勇という他人が、いつのまにか交じってしまい、まことに妙な具合になっていた。

三田にとっては、勇という浪人が、妻の愛

人というより奴隷みたいな男であり、妻のい
いおもちゃにされていることは気がつかない
ほうが不思議であった。

知っていても、知らないふりをしたのは、
三田が妻の葉子の気嫌をそこないたくなかつ
たこともあるだろうが、妻を寝取られる（こ
の表現はあまりびったりしないけれど）コキ
ユの味に、麻薬の匂いを感じていたからだと
思われる。

その勇が、三田のかわりに、大崎の妻の絵
里子を自由にし、普通の関係はおろか、A・
SEXまでしてしまったのだから、三田の立
場は、まるでない。勇が、三田の代理をつと
めているわけなのである。

上体を無理やり屈曲され、首縄、股間縛り
と、荷物のようにくくられて、半宙吊りにさ
れたまま、三田は四人の男女の痴態を、うん
うん呻さりながら、見るより、いや、気配で
感じるより仕方がなかった。

あげくのはて、背中に絵里子の固形物を排
泄され、こともあろうに妻の葉子の手で、は
しにつまんでたべさせられるという、残酷な
目に合わされていた。

妻の葉子が、夫に対して、これほど残酷に
なれるのは、むしろ、妻だからこそできるの

であって、最大の妻の特権というべきものな
のかもしれない。

面白いことに、夫婦交換の記事を読んでい
ると、夫婦交換をすすめるのは、きまって夫
のほうで、夫にやいやいいわれているうち、
しぶしぶと妻が承諾することである。

妻は夫を気にすることによって、燃えあが
る。

夫にかくれて浮気する以上に、夫の視線を
ぎらぎらと感じるが故に、妻は逆上する。

夫以外の男に抱かれたというだけで、妻は
興奮する。

夫が、自分と交換に、よその女を抱いてい
るという意識は、はじめはない。よほど慣れ
てこないと実感として湧いてこない。

夫の眼の前で、ほかの男に抱かれていると
いう事実が、どろどろした欲情を高ぶらせる
のである。

夫婦交換のルールは、ただSEXを楽しむ
ことであって、そこに、恋愛感情の入るよう
はない。

二組の夫婦の場合は、二人の男と二人の女
が、相手をかえて、SEXを楽しむ。

三組の夫婦の場合は、三人の男と、三人の
女が、それぞれのカップルを作る。

『夫婦交換プレイを讃美し、呼びかける御夫
婦が多くなってきたのは、大変うれしいこと
です。』

わたくしたち夫婦も、より充実した人生を
求めたいと思い、読者通信に思い切って投稿
したところ、思いもかけず、数多くのおたよ
りをいただき、驚いたしだいです。

しかし、いざプレイをするとなると、なか
なか条件に合った御夫婦がなく、残念に思い
ました。

距離、時間、費用、そこで、趣味などを考
えますと、なかなか二組の条件が一致せず、
夢と現実のむずかしさを、あらためて認識し
たわけでございます。

なかには、興味本位と思われるお手紙もあ
り、安心してつきあえる御夫婦を選ぶことは
かなりむずかしいことでした。

結局、一組の御夫婦とだけご交際いたしま
した』

この通信を読むと、
「充実した人生」

という言葉にぶつかり、また、
「興味本位」

という、相反した言葉にも、ぶつかるので
ある。

夫婦交換パーティの実情を適確にものがたっているといえよう。

こういう夫婦交換の通信もある。

『はじめは恥かしがったり、夫を気にして、まるで他人のような態度を取っていた妻が、だんだんと興奮してきて、夫の存在も忘れるほど悶えてくると、そんなとき、自分がまるで無能な夫のように思えて、嫉妬に胸がしめ

つけられ、じりじりし、いらいらしてくるのです。

夫婦交換ですから、相手の奥さんを抱いているのですが、気もそぞろで、どうしても相手の御主人に抱かれている妻が気になり、熱中することができません。

妻の、何かを訴えるような、許しを請うような目を見ますと、夫として、これ以上の興



奮はないだろうと思えるほど、燃え上ってきます。妻の裸体が、ほかの男に抱かれて、悶えれば悶えるほど、絶頂を感じてくるから不思議です』

夫にすすめられ、仕方なしにはほかの男に抱かれ、抱かれているうちに燃えてきて、夫に助けを求めている。

夫婦交換の醍醐味といえるだろう。

夫は、あらためて、こんな妻に惚れ直すのに違いない。

夫婦交換プラスSMプレイ。

単なる夫婦交換だけでなくSMプレイがこの華麗なパーティに花を添えるわけである。夫婦交換パーティの通信に妻の緊縛フォトがのせられているのも面白いことだと思う。それにしても、三田夫婦と大崎夫婦、それに勇が加わった男三対女二のプレイは、少々強烈すぎるようであった。

D

夫の三田に対して、これほど残酷になれるものかと、大崎も勇も、葉子を見て思ったことだろう。

二つ折りに屈曲されていた身体を、ようやくほどこれたと思うと、休むひまなく、三田

は葉子に再び縛られてしまったのである。

「少し休ませてあげないと、骨が折れてしまいますよ」

心配そうに三田の顔を覗き込んでいた勇が葉子にいった。

葉子の夫をかばうのは、三田の眼を盗んで妻の葉子と寝たうしろめたさもあるかもしれないが、勇は、この人の良い三田に同情したのかもしれない。

「折れたっていいじゃない」

平然として葉子はいうのである。

「なによ、背骨の一本や二本」

「そんな無茶な」

「無茶かどうか、縛ってごらん。勇」

いいだしたら、あとにひかないのが葉子の癖なのである。

勇はおろおろして、大崎に助けを求めた。

「ねえ、大崎さん。少し休んでからにしてはどうでしょう」

「そうだね」

どっちつかずの返事をして、大崎は葉子を振り返った。

大崎も、どうも葉子に弱いらしい。

この色情狂のようなタフな葉子に反対する勇気がなかったのかもわからない。

「時間がもったいないわ」

と葉子が叫んだ。

「早く、その白ブタをくくるのよ」

「はい」

二人の男は、息もたえだえに畳にのびている三田に飛びかかった。

本当は、飛びかかる必要はなかったのである。

さんざん責められ、エネルギーを奪われた三田は、抵抗することもできずに、半病人のような青い顔をして、大崎と勇のなすがままにされていた。

心配そうに、こわごわ縄をかけている勇と違って、そうときまれば手も早い大崎は、三田が気絶しそうになっても平気で、葉子の指示通り動いていた。

畳に長々とのびている三田の足首をつかんで、両脚をそろえて持ち上げると、大崎は足首に足枷をはめて、

「胴とももを、まとめてひっくくれ」

と勇にどなった。

勇はロープを握りしめ、大崎と葉子にどなられながら、三田のものを胴体にくっつけてギリギリに縛り上げた。

前かがみではなく、寝たまま、三田は両脚

を腹にくっつけられて拘束され、うしろにひっくり返ったまま呻き続けた。

前にうしろにやたらに身体を曲げられ、両脚を捻じせられたり、宙吊りにされたり、今度は、ぴったりとそろえて上に持ち上げられては、下半身がすっかりしびれてしまったとしても当然であった。

「もうかんべんしてくれ」

と三田は、ようやくいった。

まったく、ようやく言葉になったという感じであった。

「かんべんしろだって」

と葉子がじろりと夫を見下ろした。

「誰にいったの」

「誰にって！」

弱々しく三田は妻を見上げた。

「はっきりおっしゃい」

「大崎さん」

と苦しそうに三田はいった。

三田のひたいに油汗がたまり、三田の顔はみにくくゆがんでいた。

大崎が、ちらっと葉子を見た。

「大崎さん、助けて下さい」

「どうでしょう、奥さん」

と大崎が困ったように葉子にいった。

「やめましょうか」

「ほっておおき」

憎々し気に葉子は三田にいった。

「葉子が、大崎さんと寝るのがいやなんだろう」

「——」

「ええ、どうだい」

「——」

「そうなんだろう」

妻から何をいわれても、夫の三田は無言であつた。

ただ、悲しそうな顔をして葉子を見上げていた。

「両手も縛っておしまい」

葉子が勇に命令した。

「はい」

勇は、びっくりとして棒立ちになった。

えらい剣幕であつた。

勇は三田の両手をつかむと、大崎の助けを借りて、足枷をはめてある足首に、まとめて縛り上げた。

「よし」

満足そうに葉子はいった。

葉子はつかつかと三田に近寄ると、腹にペったりとくっつけられたものの上に、まるで

椅子に坐るように腰掛けたのである。

特製の人間椅子であつた。

「ううっ」

葉子の体重にたえかねて三田は呻いた。

「助けてくれ、胸がつぶれそうだ」

胸を圧迫されて、三田は苦しいようであつた。

「許してくれ、お願いだ」

「うるさい」

太目のローソクが三田の口中にねじ込まれ火がつけられた。

「あちっ、つつつ！」

上に持ち上げられている脚に、ローソクの炎がかぶって、三田は悲鳴をあげた。

「あぶない」

ローソクが倒れ、火がついたまま、三田の髪をこがした。

大崎はあわててローソクを、もみ消した。

「乱暴だなあ、奥さんは」

「甘えているのよ、このブタは」

葉子は、夫のことをブタ呼ばわりして、うんうん呻っている夫の、人間椅子に坐っていた。

すんなりした足をのばして、

「キスをおし」

と勇に命じた。

勇がかしこまって、葉子の素足をおしいた

勇の舌が、葉子の足の指にからみついた。

「キスして」

大崎に流し目を送り、半開きにした唇から唾液をあふれさせて葉子は両手をひろげた。

「奥さん」

人間椅子の三田を気にして、大崎はためらったようであつた。

「こいつは人間じゃないわ」

三田の顔を、ごつごつたたきながら、葉子はいった。

「ただの椅子よ」

「でもねえ」

「大崎さんらしくないわよ」

ふらふらと大崎の身体が、葉子に抱きすくめられた。

「あっ」

めりめりと、三田の骨が折れたような、にぶい音が聞こえた。

「ぎえっ」

と三田が叫んだ。

「オーバーね」

びくついた大崎を、しっかりと抱きしめたま

ま葉子は人間椅子から立とうとしなかった。

勇のなめくじのような舌が、葉子の足の指から、くるぶしに、ふくらはぎへと、少しずつのぼっていった。

大崎に乳房を舐らせながら、

「フフ、おいしいかい」

と葉子は勇にいった。

宙吊りにされたままの絵里子は、半分失神したまま、くにゃくにゃと身体を動かしていた。

「奥さんを、下ろしてちょうだい」

と葉子は大崎の顔を胸に抱きかかえて勇に命じた。

「くたびれたでしょうから、三田の顔にまたがって休ませるといいわ」

「――」

「勇ったら」

と葉子はぺろぺろと足を舐めている勇の顔をどやしつけた。

「大崎さんの奥さんに腰かけをあげて」

勇はのろのろと立ち上ると、宙吊りにした絵里子のロープをゆるめ、三田の顔をまたがらせた。

「立っているより、腰掛けたほうがらくですよ」

勇にいわれる前に、へたへたと絵里子は三田の顔に坐ってしまった。

かなりのショック続きで、腰がぐくぐくらしかった。

勇は絵里子の膝を、三田のそろえて持ち上げられた足にまわして、ぐるぐる巻きにして縛った。

「く、くるしい」

まっ白な熱っぽい絵里子のお尻に踏み潰されて、三田は死にそうな声を、ますます、はりあげていた。

三田の舌が、絵里子の裸の尻をぺろりと舐めた。

舐めるつもりでなくても、顔を丸いお尻で押し潰されていては、口で息をするたびに、舐める結果になった。

人間椅子に深々とよりかかった葉子は、勇の顔をがしつと内腿ではさんだまま、大崎に固くしまった乳房を預け、首をひねって、絵里子夫人のあごをつかみ、絵里子夫人の唇に唇を近づけたりした。

葉子は、大崎夫人とも、レスビアンをしてみようと思ったのかもしれない。

人間椅子が、また、みしみし音をたてた。「奥さま」

と葉子は、いやらしい猫撫で声で絵里子にいった。

「宅の主人は、舐め舐めがとても上手でしょう」

絵里子はあごをつかまれて、眉をしかめ、眼を閉じていた。

絵里子の尻でべったりと顔を定着され、三田は息苦しくて舌を出しているのだが、それが、舐める結果になるのだから、どうしようもなかった。

「あああっ」

とだしてはいけない声をあげて、あごをがっしり葉子につかまれながら、絵里子は悶えた。

「フン、恥かしくもなく声をだしているよ」
葉子は絵里子の夫の顔をかかえこみながら絵里子のほほを憎々しげにつねった。

「いっ」

いたいが声にならなかったらしい。
葉子の爪あとが、絵里子の頬に残った。

「おどき」

勇の顔を乱暴に、あしげにした。
「いつまで足の指なんか舐めているのよ」

勇は勢いあまって、うしろに引っくり返った。

人造生命 室井 亜砂路



葉子の肩ごしに、大崎夫妻は顔を見合わせ
た。

「奥様と接吻したら」

大崎を抱きながら、身をよじって、葉子は
大崎夫妻の顔と顔を鉢合わせした。

「むっ」

夫に舌を噛まれて、絵里子は大粒の涙を流
した。

勇が葉子の唇に吸いついた。

(未完)

人間には、誰でも一度は自分の意のままに
なる美しい一個の人形を製作し、所有したい
と望むことがあるのではないだろうか。そ
うした願望が、やがて形をかえて舞妓を寵愛
したり芸者をかこったり、S的には奴隷妻を
飼育したり、となるのではないだろうか？

と、ここまで書くと「それは逆だ」という
声が聞こえてくるようです。きっと、そうお
っしゃるかたがいられると思います。生きた
人間を愛せないから、人形で代用するという
考えの方が普通かもしれません。しかし、僕
にはどうも生きた女を愛すること、人形を

愛することとは別のような気がしてならない
のです。それが、フランケンシュタインの怪
物のようにグロテスクなものであっても、ロ
ボットがはじめて電気力で眼を開き、ぎこ
ちなく身をふるわしながらも、徐々に活動し
はじめる瞬間は、今でも素晴らしいと思えるの
です。以前、京橋近代美術館のフィルムライ
ブラリーで観た無声映画に、ドイツの表現派
の名作「カリガリ博士」があり、その中の人
造人間が動き出すシーンが今でも印象に残っ
ております。

本誌では、人形愛という分野の作品や紹介
はほとんどみかけませんが、読者の方々の中
でそういう方面に興味をお持ちの方はいらっ
しゃらないのでしょうか。外国では、ベルメ
ール、ダリ、レオ・マレ、ピエール・モリニ
エ、アレン・ジョーンズ等が、人形や人形家
具を製作しておりますが、日本でも日本人形
の素晴らしい技術を生かしたダッチワイフや、
和服売場のマネキンを電気仕掛けにしたロボ
ット等が出来てもよさそうに思うのですが、
どんなものなのでしょうか。以前に僕は、日本
人形をコマ撮りして、8mmのアニメーションを
作ってみようとして、うまくいかなかったこ
ともありました。僕にとって、動く人形の
魅力は、やはり捨てられないものです。

創作

悪魔の復讐



旭坂須・カット

大木喬

自分自身の息使いだけが大きく耳に入ってくるのだった。

それにしても、何故にこんな処でこんな目に遭っているのだろうか。確かクラスメートの洋子と一緒に短大の正門を出たところで、

「今お帰りですか。よければ其の辺まで乗って行きませんか」

と、兄の友人佐伯伸也に車の中から声をかけられたのだ。彼は高校を卒業するまでは度々直子の家へ遊びに来たりしていたが、今は大学の医学部に籍を置き、その附属病院に勤めているはずである。直子達は一緒に車に乗せて貰って佐伯の家に寄り、応接間でコーヒーを飲み、そのうちに急にたまらなく眠くなって……。そこ迄は思い出せるのである。

それにしても此の部屋は佐伯の家の応接間ではない。窓一つないガランとした部屋は片側だけが、黒っぽいカーテンで仕切られている。天井や壁のところどころには何か金具のようなものが取り付けられてあり、窓も電灯もないのに、どこからか光が部屋全体を照らし出している。直子自身は黒いレザー張りの病院で見かけるベッドのような台の上に横たえられているのだった。

洋子は、どうしたのだろうか？

フト気が付いた直子は、未だ薄ぼんやりした意識の中で四囲を見廻した。

私はどうしたのだろうか。頭がいやにズキズキと痛い、体もなんだか窮屈だ。それにここは一体何処なのだろう？……

ぼんやりと考えているうちにだんだん意識がはっきりしてきた。そして自分の両腕が後へまわされ、何かでしっかりと縛られている

のを知って愕然とするのだった。あわてて縛られている両手をふりほどこうと身悶えしてみたが、それはしっかりと縛られた手首がいたずらに激しく痛むだけで、起き上る事さえ出来ないのだ。自分をどうする事も出来ぬ不安と恐ろしさが、思わず叫び声になっていた。

「誰か！ 誰か来て！」

しかし四囲の静寂は依然として変わらず、

グルグル見まわして足元に目をやると、洋子も又後手に両手を縛られ、未だ気が付かないのか、台の下でグッタリと転がっていた。

「洋子！ 洋子！」

二、三度、呼ぶと

「あっ！ 何よ、これ！」

洋子もはっと気が付くと、驚いて直子を見上げるのだった。

「何だか知らないけど失礼しちゃうわ。とにかく此の縛られているの、ほどうてよ」

二人が、お互いの縄を解きあおうとして身を動かし始めた時、部屋の照明が急に明かなくなり、カーテンの向こうから足音が近付いて来た。

直子達が思わず体を固くしてそちらを見ると、カーテンの陰から、白衣を着た一人の男が入って来た。何と其の顔は自分達二人を車に乗せてくれた佐伯ではないか――。

「佐伯さん、これどういう訳なんですか？」

早く此の手をほどうて！」

「どうしてこんな事をなさるんです！」

口々に佐伯に向かって非難の言葉を浴びせるのであった。

しかし佐伯は答えない。ただ目だけが冷たく直子達に向けられ、白衣のポケットに両手

を突っ込んだまま、じっと二人の姿を見詰めて立っている。

「私達を、どうしようっていうの？……」

「……」

「お願い、帰らせて……」

「……」

「ねえ、何とかおっしゃって！」

「……」

「どうして私達がこんな目に……」

直子達の声は、だんだん不安に駆られて哀願に変わって行く。

「僕は君の兄さん、即ち志村建一に復讐をするのだ。その為に君達を利用するのさ」

「えッ？ 何ですって？」

冷たく云い放つ佐伯の言葉に、直子は啞然としてしまった。

「僕には一人の妹がいた。僕達は早く両親に死に別れ、兄妹二人だけで、淋しい時も悲しい時もお互いに励まし合って今日まで、いや此の間まで過ごして来た。建一君はたった二人だけの兄妹を、僕を、そして妹の朋子を裏切ったんだ。妹は建一君に弄ばれた。しかも彼の異常性欲の対象にされ、さんざん虐め抜かれた上に子供まで身妊って捨てられた。妹は自分の体に植えつけられた被虐心を恥じて

自殺してしまったよ！」

「……」

「……」

「そこで僕は、妹の残した日記に溢れる怒りや悲しみを、建一君達に身を以て味わってもらおうと決心したのだ。もっとも、建一君の気持は僕にもよくわかるがね」

「待って！ 待って下さい。私は兄が貴方の妹さんと、どんな間柄であったかも貴方の妹さんがそれで自殺なさった事も、何も知らないんです。でも、お話を聞けば兄が悪いと思います。言え兄もきつと後悔してくれると思います。私も兄と一緒にお詫びします。お願いです、どうか兄を許してやって下さい」

「駄目だ！ 僕達の怒りや悲しみはそんな事位でとても消えはしないんだ。君や建一君がどんなに謝ってくれたって、死んだ妹が生き返りはしないんだ。それよりも君達を、妹がされたのと同じように思い切り羞かしめて、その記録の一つ一つを建一君に知らせてやる。そうすれば建一君がどんな思いをするか僕は悪魔になって君達に復讐をするのだ。何も知らなかった君には気の毒だがねッ」

「――」

直子は、あまりの驚きに声も出なかった。

「それから君の友達、洋子さんと云ったね、そのお嬢さんにも気の毒だけど一緒に犠牲になってもらうよ。その女は、今、建一君と愛し合い始めた仲だそうだからね」

「お願いです！ 兄に云ってどんなお詫びでもさせます。ですから——ああッ」

直子の言葉の終わらぬうちに佐伯の手が肩にかかり、グイと直子の体を引き起こした。

その佐伯の心の中には、建一に対する復讐心とは別に、彼の体に流れているサディズムの血が頭をもたげ始めているのだった。

○

そこは佐伯の家の地下室であった。かなりの資産家であった彼の父が、何の為にか造ってあった十坪程の地下室を利用して、彼が実験室に改造したものである。ただ防音にだけは気を配っている、少々の悲鳴をあげても、外へは聞こえないようになっている。

閉ざされた部屋の中は、二人の女性の甘酸っぱい匂いが立ち込め、佐伯の神経をこころよく刺激していた。直子と洋子は天井の金具から下げられたロープに両手を高く括られ、スリッパ一枚の姿で吊り下げられていた。

直子は面長な顔立ちだが、ふっくらとした感じで、切れ長な涼しい目と、口元から顎に

かけての柔らかな線が、ことに美しく、洋子の方はどちらかと云えば、目鼻立ちのはっきりとした派手な輪郭で、其の美しい大きな瞳と、形の良い可愛らしい唇が魅力的である。

どちらも、若くてピチピチとした肉体が、薄いスリッパの下で息づいているのだ。佐伯はそんな二人を舐めるように見まわし、取りあえず二人を素裸に剥いでやろうと考えるから立ち上った。

「さあ、それではこれから君達に、生まれたままの姿になってもらって、君達の成長ぶりを見せてもらおう」

その手には、ピカピカ光る手術用の鉗が握られていた。そしていきなり洋子の真っ白なスリッパの肩紐を切り落とすのだった。

「あッ！ いやッ！」

スリッパは、スリリと足の下に落ち、あとはパンティとブラジャーだけの、惱ましい洋子の姿態が残る。佐伯の手は、尚も容赦なくブラジャーの紐を切り離していった。成熟した乙女のふっくらとした円錐型の乳房が、羞かしそうに震えている。次に佐伯は、洋子の可愛いピンク色のパンティに、手をかけた。そしてくびれたウエストにピッチリついたゴム紐のまわりに、止血鉗子を十本近くも挟み

つけていくのだ。パンティは鉗子の重みで、今にも洋子の腰からずり落ちそうな気配を見せている。

「やめて！ 羞かしい！」

洋子は、パンティを落とすまいと、必死に太腿を合わせるのだった。

「もう少しだ。もっとお尻を振って！」

そんないやらしい事を云い乍ら、佐伯は自動車の毛ばたきを持ち出して、洋子の脇腹や乳房のまわりを軽く撫でたりするのだ。

「……………」

くすぐったさに身を振る洋子、パンティはビキニスタイルよりも、もっとひどい状態になっている。もうこれ以上、動いては——と、くすぐったさの他に、もう一つの苦痛を耐えているのだった。それは先刻直子に呼び起こされて気がついた時から催していた生理現象である。あれからもう三時間は経つだろう。だが、佐伯は尚も執拗に毛ばたきの攻撃を洋子の身に繰り返していた。

「ああッ！……………」

とうとうパンティは、鉗子の重みで裏返ってしまい、ズルズルと膝の辺りまでズリ下ってしまった。

洋子は、全裸を晒している自分の羞かしさ

に顔も上げられず、その上、今にも洩らしそうな尿意に、泣き出したい思いで身を固くしているのだった。「困った、どうしよう……」心の中で困惑しながらも襲ってくる苦痛にいたたまれず、

「あの……お願いです」

「ん？ 何だい」

「……あのウ」

「どうしたんだ、モジモジして」

「トイレに……」

消え入るように真赤になる洋子に

「ああ、オシッコか、よしッ」

勢いよく立ち上った佐伯は、カーテンの向こう側から、背の低い台の上に何かを載せて引き出して来た。そこには透明なガラスの便器が置いてある。その台を洋子の前へ持って来ると、

「さあ、一部始終をここで見ているから、全部、出してしまえよ」

そう云って便器の前にドッカと腰をおろすのである。

「そんな！ 羞かしい事を……お願いです。トイレに行かせて！」

「駄目だな、そこで出来ないのならゴム管を使って探ろうか。僕はこれでも医者 endpoint くれ

なんだぜ」

佐伯の答えは冷たく、その上、ポケットからカテーテルを取り出して洋子の目前に見せびらかすのだった。洋子の生理的要求は限界に達していた。膝頭がブルブル震え出しているのだ。耐えに耐え、もうこれ以上、耐えられなくなって夢中で台の上にしゃがみ込む。

「見ないで！ いやッ……」

全身に佐伯の視線を感じ乍ら、一点に集中していた筋肉をゆるめるのだった。

耳を覆いたくなるような恥かしさに、顔も上げられず、やっと長い用を済ませた洋子に「随分、我慢していたもんだなあ。でも今の姿は素晴らしかったよ。妹も、こうされたらいいが、建一君がさぞ喜ぶだろう」

いつの間に持ったのか、カメラを手にした佐伯が、死ぬよりも羞かしい思いに追い打ちをかける言葉を投げつけるのだった。

○

——冷酷な、ひどい男。

直子は、今、洋子の受けた羞かしめを目の前にして、佐伯という人間を本当に恐ろしく感じた。何もかも周到に計画された行為が、もともと感情を表面に出さない佐伯の顔と相まって、まるで氷のように冷たく、いやそれ

より、もっともっと冷酷に見える。

「悪魔」そうだ！ 白衣を着た悪魔だ！ そして目の前にある透明なガラス便器は、哀れないけにえを待つ悪魔の祭壇だった。目をそむけて見るまいとしても、ガラスの窪みに溜まった琥珀色の液体が、ありありと直子の臉の裏に刻みついている。そしてやがては直子も同じその祭壇のいけにえにするべく、魔の手はすぐそこまで迫っているのだ。

それにしても、女が自からの恥かしい姿を男性に覗き見られ、その上に、いくら仲の良い友達とは云え、同性にまで惨めな姿を見られなければならぬ二重の精神的な苦痛を、佐伯は充分、計算に入れてに違いない。

直子は、迫り来る羞恥と絶望に、全身がすくんで行くのを、どうしようもなかった。

そんな直子の姿を佐伯は上から下へと、ゆっくり眺めていた、まるで獲物を目の前にした獣の気持である。若さでは切れそうな肉体、吊り上げられた両腕の付根の附近から乳房にかけての白くまろやかな曲線、締まったウェストに続く豊かな腰、スラッと一直線に伸びた、かもしかのような脚、この美しい獲物を自由に弄び、賜り物にする事を思うと、今の佐伯には、建一の事も妹の事も念頭にな

く、ただサディスティックな血だけが興奮に沸き返り、体中を駆け廻るのだった。

勝誇ったような佐伯の顔が直子に近づき、その手が俯向いている直子の顎を、グイと自分の方へ捻じ向けた。

「……………」

いやいやをして身悶えする直子を、前から抱き込むように佐伯の手が背中中回り、ブラジャーのホックが一つ一つはずされて行く。

「いやよ！ やめて！」

しかし、ブラジャーをはずした手が、今度は不遠慮にスリップの下から入ってパンティのゴムにかかった。

「いやッ！ いやいや！」

直子は、猛然と暴れ出した。どんなに激しく抵抗しても無駄だと分かっている、やはりそうせずにいられないのだ。そしてむなしに抵抗の末にパンティは取り去られ、直子の心を一層不安と羞恥に追いやるのであった。

佐伯は、脚立を持ち出すと一本のロープを天井の金具に通し、その一端を直子の片方の足首に巻きつけた。そしてもう一方の端を引っ張ろうというのだ。

「次はバレエを踊るんだ」

「駄目よ！ そんな事いやよ！」

「何を今更——。君はバレエが得意だったじゃないか」

必死に拒む直子の片足が、佐伯のロープを持つ手に力が入ると、じりじりと引き上げられていく、十センチ……二十センチ……そうさせまいとして縛られた足を踏んばると、床についている足が宙に浮いて、不安定な直子の体はクルリと廻り出すのだった。体重のすべてが吊り上げられた両手首にかかり、その痛さに思わず宙に浮いた足を床におろすと、縛られた片足は前よりも高く、じりじりと上へ引き上げられる。

「あッ！ あッ！」

痛さと恥かしさに、片足を床についたり離したりしているうちに、縛られた足は、とうとう大きく上に挙げてしまっていた。佐伯は直子の前に回り込むと握っているロープの端をスリップの裾に結びつけ、引張っていたロープをいきなり放してしまった。操り人形の糸が切れたように、直子が大きく挙げられた足をあわてて降ろすと、代りにスリップが勢いよく胸の上辺りまで捲れ上ってしまった。

「あらッ！」

思わず降ろした足を浮かせる直子。しかしスリップは未だ大きく捲れ上っている。スリ

ップで体を隠そうとすれば思い切って足を挙げる事になり、足を降ろそうとすれば全裸同様にスリップは捲れ上ってしまうのだった。

「やめてッ！ こんなひどい……お願い！」

足を中途で上げ下げする直子の足元から、

佐伯が

「駄目々々、もっとしっかり踊らなくちゃ。鏡に自分の姿を写して、よく練習してもらおうか」

からかうように云って立ち上ると、大きな姿見を持ち出して来て直子の前に置くのだった。そこには、何とも挑発的な直子の半裸の姿が写っているではないか。なまじスリップを身に付けているだけに、其の姿は一層エロティックに見え、直子には恥かしくて自分の姿を、まともに見る事さえ出来なかった。

しかし鏡の中の彼女はそんな直子をあざ笑うかのように、スリップを捲り上げ、足を挙げた直子の裸のカンカン踊りを、いつまでも演じているのだった。

○

一休みした佐伯は、グッタリとしている女達を見て、次に為すべき行動を考えていた。

この美しい躰に、どのような恥かしいポーズをとらせ、自分の欲望を貪ろうかと——。

そして思いついたのは、自分が毎日見馴れている婦人科の検診台であった。病気の苦痛に自からの意志で診察される患者でさえも、検診台の上では羞恥を堪えるのに精一杯なのである。

まして健康でピチピチした若い女性が、それも初めて検診台の上に載せられ、病いも知らぬ若肌を弄ばれるとしたら、その羞恥は想像を絶するものがある。

佐伯は、自分の想いつきの素晴らしさに思わずニヤリと笑うと、父が使っていた古い型の器具類が、物置き代りの地下室に放り込んであるのを思い出し、早速カーテンの蔭からごそごそ音をさせ乍ら、黒いレザー張りの検診台を引き出して来た。それからもう一つ、これは椅子型をした、これも足台がついており、その開閉や高さが自由に調節出来るもので泌尿器科でよく使用されているものを持ち出して来ると、検診台と並べて直子達の前に置くのだった。

始めはそれを見て何だろうと思っていた直子は、それが婦人雑誌などで見た婦人科の検診台だと知ると、その足台の大きく広げられた位置に自分の姿を想像して、思わず胸を締めつけられるような羞恥心に襲われ、いたた

まれない気持ちになってくるのだった。それに直子は今、生理の最中なのだ。タンポンのお陰で汚れてこそしていないが、それを異性である佐伯に知られる事は若い直子にとっては死ぬよりも羞かしい出来事であり、女の誇りまで無視される事だった。しかし恐ろしいまでの羞かしめが、これから直子達に襲いかかろうと待ち構えているのである。

ハンドルを操作して、広がった足台を中央に揃えると、佐伯は二人に向かって「これから此の台の上で君達の素晴らしさをゆっくりと拝見するのだが、君達はどちらの台がいいかな？」

と、問いかけるのである。

「いやです！ 貴方は、私達にこれ以上、どんな恥かしい思いをしろと云うのです！」

叫ぶように云う洋子に続いて、

「もうやめて、お願いです。私、今、汚れているんです」

直子も哀願するのだが、佐伯は何も聞かないような顔をして

「まあ、どちらでも一緒だがね。じゃあ取りあえず、こうしよう。君は、こちらだ」

そう云って洋子には椅子型を、直子には検診台を指して

「おとなしくするんだ！」

と云い乍ら、必死に暴れる二人を簡単に台の上へ抱え上げてしまい、手足を動かさないようにベルトで固定してしまうのであった。

佐伯が再びハンドルを操作すると、自由を奪われた直子の体は、膝が持ち上げられ、足が無情に広げられて行くのである。

「ああッ：いやッ！ いやッ！ やめて！」

悲痛な声を出す直子は、羞かしさに顔がカッとしてしまっ、もうものを云う事さえ出来なかった。思っていたよりも、もっともっと大きな羞恥に、ただ震えている以外にどうにもならないのだ。

続いて洋子も、同じような状態にされてしまった。膝頭が乳房に触れる程に折り曲げられ、その脚は両側へ引きあげられている。お尻を前に突き出し、それを自分が覗き込むようなあられない姿態に、洋子は思わず唇を噛むのだった。

「ほう、二人共いい恰好じゃないか。妹もきつと、建一君にこうして縛られただろうよ。

こんな診察台はなかっただろうけれどさ」

佐伯は自分の計画に有頂天になって、羞かしい二人の姿にそんな言葉を浴びせかけるのだ。そしてそこは、いつの間にか俄か作りの

診察室に変わっていた。佐伯の持ち出して来た架台の上にはピカピカ光る金属類やガラス器具がいろいろと並べてあり、今まで見た事もないような器具類が羞恥と不安におののく直子と洋子の目に見えるのだ。

「さあて……、誰から先にするかな？」

二人を見較べていた佐伯の目が直子の怯えるような視線を捕えると

「君からだ」

つかつかと傍へ近付いて来た。直子はハッと目を逸らせたがもう遅かった。その佐伯の手には、ボールペン程のガラスの管が光っている。

「君も、もう大分溜まっているだろう。床を汚すといけないから、先ずそいつを始末してやろう。それともあの便器で彼女のように恥かしい思いをする方がいいかい……」

からかいながら、佐伯の不遠慮な掌が直子の柔らかい肌をピタピタと叩くのだった。

「ああッ……」

腰をよじらせて逃がれようとする直子は、いきなり、襲いかかられたヒヤリと冷たい感触に慄え上った。

「ウッ……」

何とも云えぬ不快な気持ちにさいなまれてい

る間中、せせらぎにも似た水の滴り落ちる音が聞こえていた。それは長い長い時間のよう

に直子には思えた。気がおかしくなる程の不快な異物感が去ると、それまで感じていた尿意がすっかりなくなっている。

「そうら、気持ち良くなっただろう。こんなに溜まっていたんだぞ」

佐伯は、手にしたピーカーを目の前に示すと、目を丸くしてみせて、直子の顔を覗き込むのであった。自分のものであった臭いがプンと鼻をつく。羞かしい。直子を感じるのは唯それだけだった。

「さて、次の始末をするか。処置するのは医者

の任務だからな」
一人言のようにつぶやくと、佐伯の手が今度は直子に伸び、黄色い短かな糸を指先つまんで引っ張った。

「あッ！ それだけはいやッ！」

思わず洩れる直子の悲鳴も空しく、彼女の汚れを救っていたタンポンは、羞恥に悶えるのを楽しむように、薄笑いを浮かべる佐伯の手に移った。

「……」

全身が恥かしくケイレンするのが、直子の

気持ちを一層惨めなものにするのだった。あ、もう駄目。直子は全身の力が、ガックリと抜けた。

佐伯は、さすがに医者らしく手際よく、直子のバックから代りのタンポンを取り出して始末をしてしまうのであった。

「それでは最後に大掃除をして、今日は終わりにしよう」

そう云って佐伯が取り上げたのは、太い青味がかった色をしたガラスの浣腸器である。見るもおどましい浣腸器を直子達の目の前で弄び、その手が器用に、白い透明な液体を吸い込んでゆく。一本、続いて一本。腹一杯に悪魔の液体を吸い込んだ浣腸器が、にぶい先を放っている。

用意が整うと、佐伯は

「さあ、これから何をするか分かるかい？
妹の日記にもよく出てくるヤツさ」

「……」

「……」

浣腸と分かっていても、羞かしくてとても二人には口に出せる言葉ではなかった。洋子などもう三日も便秘が続いているのだ。もし今浣腸を施されれば……。いや浣腸をされる事は決定的なのだ。どうしよう。自分の惨

めな結果の姿を思うだけで、洋子は真暗な絶望の谷底へ突き落とされて行くような気持ちになるのだった。

「ああッ、もういやッ！」

体を固くして呻く洋子——。すぐに直子も招かざる闖入者の暴力に叩きのめされた。

「ひどいわ！ ひどいわ！」

直子は身を振らせていやいやをしている。

「十分も我慢するんだな」

佐伯は、やれやれといった仕草で煙草に火をつけて、二人を見守るのだった。

二分、三分と時が過ぎる頃には、もう直子も洋子も、必死になって羞恥と便意を耐えている。

「この浣腸液は、効果を高める為に薬局で扱っている浣腸と同じように、グリセリンの外に酢酸フェニール水銀が、少し入っているんだ。グリセリンは君達も知っている通り、滑りをよくする潤滑剤なんだ。そしてフェニール水銀は腸に収縮弛緩を起こさせる性質があるんだよ」

佐伯は、羞かしい姿の二人を前にして、こんな説明をし始めるのだった。

「それにこの浣腸器は、普通のものよりも少し嘴管が長く出来ているだろう。だから、う

んと奥の方まで液が入れられたって訳さ」

何というひどい言葉、そして残酷な仕打ちであろうか——その間にも透明な悪魔の使者達は容赦なく体の中を駆けめぐり、堪えられなくなった直子は、云っても無駄だとは知りつつ、佐伯に許しを乞うのだった。

「駄目だね！」

直子の願いに、にべもない返事が返ってくる。

「お願い、これ以上はもう羞かしい事させないで……」

腸がグルグルッと鳴り出し、直子は必死に腹痛を耐えるのであった。みじめに拘束されたままの姿で激しい便意を耐える苦痛。それは、とても並大抵の事ではない。連続的に襲ってくる腹痛にどうにもならなくなって哀願すると、

「もう我慢出来ないか？ 出来なかったら下にちゃんと受けてあるから、そのまま、やっちゃえよ。建一君の大好きなポーズだ」

佐伯はそう云うと、カメラを向けて構えるのである。

「そんな事！ ああッ！ 駄目よ！ ああ……洋子ッ！ あ……ッ！」

絶え入るような直子の叫び声が挙った。

一方、直子の哀れな叫び声を耳にしながら洋子も又額に膏汗を浮かべて、物も云えずに襲いかかる悪魔と斗っていた。

「こっちの美人さんも苦しそうだな、君もそろそろ限界か」

直子の姿を撮し終えた佐伯が、今度は洋子に矛先を向けて来た。

「……」

「そんなに我慢出来るのだったら、もう一本追加してあげよう」

「あッ、いや……止めて……」

やっとの思いで哀願の言葉を口にする洋子に構わず、佐伯の一方的な魔手は再び浣腸器を操作した。

もう息を吐くだけでも堪えがたく、背筋を悪感が走り

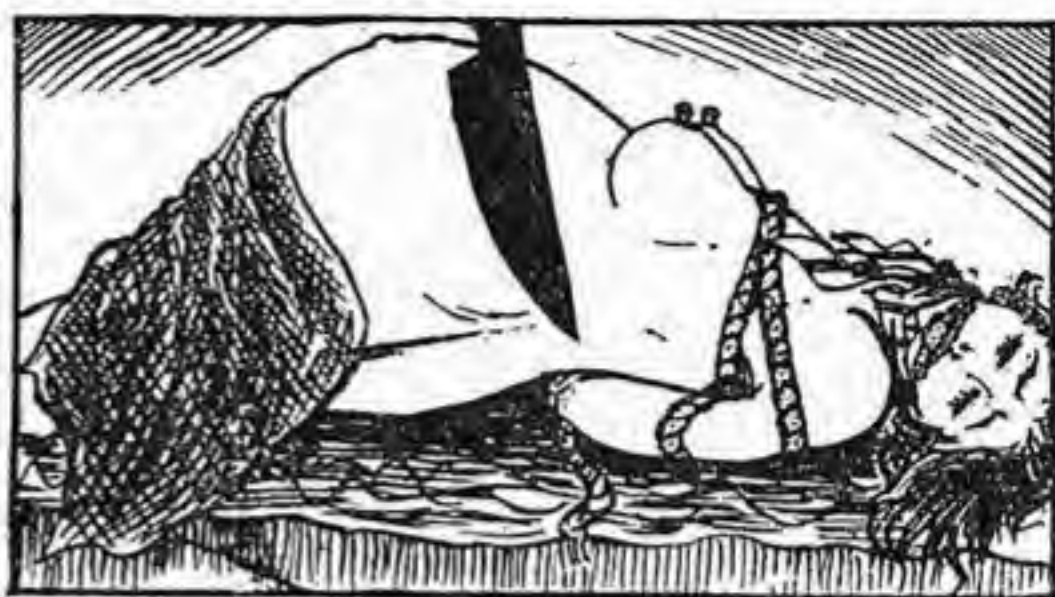
「むむッ！……」

最後の力を振り絞って耐える洋子であったが……、遂にたたきのめされるような羞恥の瞬間がやって来た。

「くウ——ッ！」

腹の底から絞り出すような呻きが、自然と口を衝いた。

「パシッ」「パシッ」とカメラのシャッターの音が、一際高く響き渡った。



妊婦さまさま

腹裂き妄想

羽鳥水江

十二月号に載せていただいた短い原稿を送ってから間もなく、十一月号が届きました。佐野みさ子さんの、「あるM的妊婦の告白」

——妊娠七カ月になられたお腹の大きいヌード写真を添えて、すぐく卒直で大胆な告白です。併せて、久しぶりに、高野原美さんの短文ながらも間髪を容れぬ——「妊婦の羞恥責め」というわけです。

私のこの原稿が活字になるとしても、誌上では、すでに年の改まった後のことになりましょうが、例によって、思いつくままに、駄文を弄してみたいと思います。

○

八月号の「逆さ妊婦」の中で私は、「はらみ女を逆さに吊るす」と題して、孕みモデル金原奈加子さんの分譲写真八さめVについて感想を述べました。全裸で——と言っても腰部は布で掩ってありましたが——天井から真

っ逆様に吊るされた妊娠九カ月初期の妊婦の赤裸々なフォトを拝見して、感激したままを卒直に綴ったものでした。しかしその後、何回もとり出してじっくりと眺めているうちに新しい想像が次から次へと湧いて来しましたので、それらを追加して述べてみます。

先ず、この三葉の写真は——昨年（一昨年？）八月号に載った写真もそうですが——ほ

とんど同じような写真であることが物足りません。何れも逆さに吊るされた腹の大きな妊婦の真正面からの写真で、背景——ごちゃごちゃし過ぎています——との関係で、やっとカメラ位置が高いか低いかの違いがあることが分かるだけです。折角の写真だけに、もう少し何とかならなかったものか、惜しまれるところです。

次に、写真を両手ではさんで眺めかえしているうちに、妙な空想が湧いて来しました。この逆さ吊りの妊婦の、プックリ膨れ上った腹を——実物がこの写真の大きさと仮定した場合——私の両手の親指で、両側からギョツと押し潰してしまったらどうなるでしょうか。

突飛な空想でしょうが、私がガリバー旅行記の小人の国に行って、小人の妊婦である奈加子さんの腹を親指で押し潰してしまうのです。恐らく、プチンと音を立てて、腹の皮が破れ、子宮も破れて、腹の内容が無残にも飛び出してしまいうでしょう。腹の中の赤ちゃんが、血に塗れた内臓と一緒に、ピュッと飛び出し、飛び散って、ガリバーならぬ私の指を真っ赤に染めるに違いありません。ちょうどホウセン花という花の成熟し切った果実が、

ちよつと指先で触れただけで、その果皮が開裂して種子を弾き出すように、奈加子さんの腹が無残にも裂けて、腹の中の赤ちゃんを弾き出してしまうのです。

たしかに突飛な空想だとは思いますが、佐野みさ子さんが、妊娠して大きくなった妊婦の腹を包丁で切り裂いて、腹子を取り出されることを想像していらっしゃるのと同巧異曲ではないでしょうか。みさ子さんのように、みずからが妊娠していて、そのお腹の子を抜き取られたいというM的心境と通ずるものがあると思います。

もう一つ、同じ写真を見ていてふと思ったことですが、辻村さんがモデルで、奈加子さんをこのように逆さに吊るしてしまっただけで、そのまま放って置いたとしたらどうなるでしょうか。五分、十分、二十分、三十分と経つうちに、恐らく奈加子さんは苦しくなっていて意識が薄れて行くに違いありません。その時、現実には絶対にあり得ないことですが、辻村さんが急に、何かの拍子でおかしくなっ

てムラムラと鬼畜のような衝動に駆られてしまったとします。

逆さ吊りの奈加子さんに近寄って、包丁の刃先を奈加子さんの下腹にズブリと突き立てるのです。そして逆さにブラ下ったままの妊婦の大きな腹を、下腹部からみぞおちまでザックリと一気に切り裂いて、ドツと溢れ出るハラワタと羊水の中から胎児を掴み出します。あとに、見事に切り裂かれた腹から溢れ出し血塗れになって垂れ下るハラワタ。

何というむごたらしい凄惨な光景でしょうか。想像も出来ないことでしょうが、辻村さんはしばらく呆然とした後、ハッと我にかえって、あとはそのまま、用心深く立ち去って行きます。床の上には胎児が、これも血塗れでごろんと横たわって、弱々しい産ぶ声を挙げているでしょうかしら。

この静寂な地獄絵図が、何時間か続いた後に、交差を発見してあわてふためくモデルの従業員たちと警察との騒ぎは、いかばかりでしょうか。

私のこのような、とんでもない妄想をお許し下さい。

○

ご覧になったかたもたくさんいらっしゃると思いますが、女性週刊誌「ヤングレディ」7月13日号に、「私の妊娠記録はヌードアル

バム\この大きなお腹を公表する\武田美由紀さん(21)の勇気」という記事がありました。内容は、神奈川県大和市に住む武田美由紀という21歳の女性が、自分の妊娠中のヌード写真を月を追って撮影して、本にして出版すると言っているという話ですが、それからすぐ後、同じく女性週刊誌「女性セブン」7月22日号を見ると、やはり「武田美由紀・21歳・妊娠5カ月\わがヌードを撮り続ける未婚の母」とあるではありませんか。

記事になるまでのいきさつはよく分かりませんが、珍しいことだと思えます。こういう勇敢な女性が現われたことに、私は全く時代の変化を感じないではられません。

さらに二カ月経って、この同じ美由紀さんが「週刊大衆」9月24日号の「出産までのヌード写真集を作る夫婦の思惑」、そして「アサヒ芸能」9月24日号にも「自分の妊娠記録を公開した絵描きサン」として、登場してきたのです。

記事の内容は似たりよったりですが、この美由紀さん夫婦が、こうした妊婦ヌード写真を撮り続けるとして、果して本当にそのような妊婦ヌード写真集が出版されるかどうか。私など非常に興味のあるところです。

なんてことは到底いう筈もない。となるとウカウカ家からは電話も出来なくなってきた。

余り用事でもない用事を慥えて、京都に走り、渡部氏の会社に電話すると、いい具合に在社していた。電話口で喋るにはコトが重大だけに呼び出す。

彼の会社の近くの舗道で、車を止めて待っている、汗を拭き拭き走って来る。駐車OKの最寄りのレストランに入って、やっと話を切り出した。

「本当にいいんですか、奥さんと二人で一泊旅行しても？」

「ええ、家内も望んでいますし、辻村さんさえよろしければと、大いに愉しみにしています」

みるからに善人そうな渡部氏は、ずり下った鼻眼鏡を、たびたび指でかき上げながら、一オクターブ高いトーンで、せかせかと答えるのであった。

「どうして又、そんなことになったのです」

「辻村さんが、お書きになっておられた通りです。夜のプレイの睦言に、言葉のプレイが嵩じてしまって、そういうことになってしまったのです」

「ダンナさん公認の旅行なんて、私も始めて

です。私も男ですからね、いくら糖尿病だといっても、いざとなると、どうなるか自信はもてませんよ」

「ハイ、同病相憐れむの、私も糖尿病なんです。あれにかかる、さっぱりダメですね。心逸れど、いうことがききませんからね。それで好美がいじらしいくらい、懸命に努力してくるのです。妻の努力のお蔭で、男性を何とか保持してるようなものです」

「オヤ、元気そうで若いし、そうは見えませんかよ」

「辻村さんこそ、とても糖尿とは思えませんよ。兎も角、私は家内を信じているのです。可愛い奴です。妻を愛していますから、のびのびと私や子供の桎梏から離れて、好きな様にプレイに耽溺させてやりたいのです。それを任せられる方は辻村さん以外にはないと確信しているんです。うんと虐めてやって下さい。浣腸もローソク責めも、針責めも、強烈な緊縛も、すべて甘受する様、飼育してありますから……」

「そこまで仰有って戴けるなら男冥利に尽きます。欲んで御一緒にします。唯、プレイ旅行のあと、お二人の間にシコリが残るといけな

「妻は、辻村さんとの一泊旅行が出来たら、私の奴隷妻になると約束しました」

「それほどまでに——」

好美夫人のひたむきな慕情を感じて、私の胸はジーンと熱くふくらむ。それだけに、この一対一の旅行は、何か危険を胎んでいるような不安をおぼえた。私は底知れず彼女に傾斜してゆく自分の心を懼れた。二人で誰にも患らわされず、いで湯の一夜を過ごした時、理性を制しきれず野獣になるに違いない私の心が恐ろしかったのである。それは又、好美夫人にも云えることであつた。この茫漠として掴みどころのない寛容そのものの彼を、裏切る様な行爲になった場合、彼の折角の好意がふみにじられはしないだろうか、盲目の刹那の行動に自信が持てなかったのである。

その時、天啓の様にひらめいたのは、このチャンスに、複数のプレイ旅行を試してみたいという想念であつた。女性二と男性一なら、お互いに索制して、私も刹那の行動を自制出来るかも知れない。さて誰にしようか——と咄嗟にめまぐるしく考えたが、いざとなると好美夫人との対照が仲々浮かばない。「何を考えておられるんですか？ 何か御都合でも悪いのでは」

「いや、今ちょっとしたアイデアが浮かびましてね。一層思いきって、も一人女性を加えてWプレイしたら、面白いんじゃないかと考えていたのです」

「そりゃいいですね、誰方か？」

「さあ誰に当たろうかと考えているんです」

「私もお供したくなりました」

「いいですよ、交換プレイなど如何？」

「やりたいですね。でも、それでは好美が窮屈がるでしょう。やはり我慢します。いつか又いい人を御紹介下さるだけで結構です」

「さあ、誰がいいかな？」

「余り若い人だと、好美がコンプレックスを感じます。やはり同年輩の人妻なんか……」

「一泊となると、そうそうあなたの様な理解あるダンナ許りでもないのですね。そうだ、谷山久美子さんはどうです」

「いや、あの人には一寸家内がついて行けません。何しろハントで読みますと、Mの塊りみたいで、家内が辟易するでしょう」

「安井喜久子夫人なんか、恰度年頃もいいのですが、旦那が承知しませんし、三浦夫人も最近撮って、この次の約束があるのですが、夫人だけとのプレイの約束も、一泊となると無理でしょうし、さてとなると——」

「あっと驚く人妻の、川路むら子さんなんか如何です」

「そうですね、あの人なら、一カ月中、殆ど旦那不在で、子供さんさえ預けられたら、融通がきくかも知れませんか、早速当たってみますよ」

と、話が妙な方へ展開してゆく。

「一度、彼女の顔を見たいですな」

「うまくゆくようでしたら、車に乗せてゆきますよ。でも全然、話していないから一方的ですが」

「二対一のプレイも楽しいでしょうね。好美がきいたら驚くかも知れませんよ。何しろ、辻村さんと二人きりで行けるとって非常に愉しみにしているものですから」

その癖、渡部氏の表情に、何故ともなく、

安堵の色が泛かび上がっていた。二人っきりの楽しい旅行を自から崩しておき乍ら、私も又、折角のチャンスを私の手でつぶした軽い落胆に、内心ガッカリしていた。まあ、でもその方が、あとあとの為、無難というものである。川路叢子が、この一泊旅行を喜んで承諾するか否かは未知であった。何しろ非常に照れ屋で人見知りする、むら子である。一旦琴線を弾き始めると、それこそセックス・ア

ニマルに変貌する彼女も、平静に返ると、口数も少なく、別人の様になるだけに、口説き落とすのに一骨折れそうである。

土、日曜にかけては、温泉旅館も混雑するので、二日ずらして月、火曜ときめ、生理のない九月二十一日、二十二日を選ぶ。一方的にきめたものの、むら子はどうかろう。私の心は急に重くなった。二度ばかり便りが届きプレイを仄めかしているのに、その俚無視して便りの返事を出さなかったのが、今となっては悔まれてきた。

旅は道連れにむら子を誘えば大乗気

コトは内密を要するものだから、こうなつては、どうしても箕田のダンナに一枚噛んでもらうよりほかには仕方がない。しかも緊急手配である。

レストランより箕田氏に電話。シカジカ、カクカクと話した上、

「というわけで、川路さんにすぐ電報で連絡しようと思うけど、電文は『ハナシアリ、スグデンワタノム、ミノタ』として、そちらへ掛ける様手配しますから、今の件よろしく伝えてくれませんか」

「さりとて虫のいい話だね。まあ、あんたのことだ。又ハント書いてもらわにゃならんか



「そうですか、ハイハイ」

「奥さん、そばにいるんだね」

「ハイ、そうなんです」

「まあいいや、適当に返事しなさいよ。」

モテモテはつらいね。それで相手の、も

一人の女性は誰かと聞くので、渡部さん

だといっておいたよ」

「ええ、結構です」

「辻村さんは薄情だといってたよ。自分

の都合だけしか考えずに勝手だって」

「ハア、そうですか。じゃあ、新しいモ

デル女性ですね。行きますよ。えッ、何

日？ ハア？ 九月の二十一日。その頃

だったら構いません」

「おいおい、何いってるんだ、わたしや

行きませんよ」

「ハイ、よく分かってます。それじゃ十二時

京都の八条口の、新幹線の出口で……ハイ、

分かりました」

「オイ、オイ、どうなってんの」

「いや、よく分かりました。それじゃ、その

日をたのしみに……」

女房殿が耳をすましているのを知っての、

冷汗の応待で、日時を告げたが、彼はどこま

で分かってくれたことだろう。

「今日の電話、イヤに丁寧な仰有るのネ」

女房がチクリと切り込んで来た。あッ、そ

うか、いつもはもっとゾンザイで、喋りたい

放題に喋る。虚胆懐でない、つい隠すよ

り現われるというものか。内心、冷汗をかき

乍ら、

「そうかね、つい仕事の口調が出たんだね。

仕事と仕事の合間にかかったから、そうなっ

たんだろ」

と濁しはしたが、女房の直感力にドキリと

して、矢張り内緒ごととは出来ない私なんだと

自分の正直さに苦笑するのであった。大抵の

場合、家内にあっさり告げるのに、一泊とい

うのが引っ掛かっていいそびれ、そうなる

もう段々と嘘の上塗りをするより、仕方がな

い。箕田氏とハントに出掛け、酔いつぶれて

泊まったという筋書きを秘かに組んだものの

何となく心苦しい。

翌日の夕方、川路叢子より速達が届く。恰

度家内がマーケットへ、夕食の買物に出かけ

た折でやれやれである。内緒というものは、

かくもシンドイものか。

『前文御免下さい。朝夕幾分凌ぎ易くなつて

まいりました。誌上で貴男様の御活躍を拝読

し、そのタフさに、驚いたり、あきれたり、

ら、言うこと聞いたげましょ」

ということになったから、まずは、ひと安

心。そこは海千山千の箕田のダンナ、大船に

乗った気で電話をきる。

翌朝、早速、彼からジリジリとかかる。

「今、彼女の電話をきったところ。泣かせる

ことをいうじゃないか、奇クのためになるの

なら、喜んで一泊でも二泊でも、参りますっ

てさ」

羨望したりしております。その後長い間、お目にかかる機会もなく、何となく貴男はわたくしを避けておられるようで、心淋しく感じておりましたわ。今日、箕田様から突然電報をいただき、お電話しましたら、貴男が私に会いたいということでした。本当に飛び立つ思いでしたが、私一人じゃないのですね。何だかガッカリしました。相手の方は渡部好美さんですね。貴男のカメラ・ハントが真実なら、ずい分お心を惹かれていらっしゃるようね。一人の人を追い続けない貴男の御性格を知りつつも、私があの方の当て馬の様なものを感じて、その時フトいやになりました。でも奇クのために私でもお役に立つのなら、貴男にお目にかかり、自分なりに行動するつもりです。御免なさいね、こんなこと書いたりして。でも本当は、嬉しくて仕方がないんです。貴男はやはり私を忘れてはいらっしゃらなかったと思って——。唯今、生理中ですがお目にかかる頃は終わると思います。何かしらファイトみたいなものが湧いてきます。渡部好美さんでどんな方かしら……。でも同性の前で、はにかしいめに合うのはいやだなあってチョッピリ。私ってすごく羞かしがり屋なんです。でもいいわ、貴男のためです

の。どうぞお好きな様に、虐めて責めて下さい。わたくし、近頃のんきなせいとか、又大分肥えましたの。プレイしないと、虐めてもらえないから、肥えますのね。夫は、九月一杯は戻って参りませんから、いつでも大丈夫です。子供は母に預けて行きます。折返し、日時、場所などお知らせ下さいませ。嬉しさの余り、ペンも乱れて、文も乱れ勝ちです。お目にかかる日の一日も早からんことを楽しみにしております。あなたまかせのむら子』

両手に花の緊縛の旅は、思いがけず実現の秋が来た。

簡単に日時、場所を知らせた返事をかく。場所は、彼女といつも会う、京都の新幹線八条口である。

十二時過、彼女を迎え、車にのせて国道九号線を走り若寺付近で渡部好美を乗せて一路城崎に向かう予定であった。温泉地を、いろいろと候補にのぼせたが、京都からでは、琵琶湖畔の雄琴温泉は余りに近く、湯の山、榊原方面となると、奈良を経由して名阪を走るには一寸時間がかかり過ぎ、いっそ京都南インターから名神高速へ入って、西宮から芦有道路へ出て、有馬温泉とも思ったが、比較的閑散で走り易い九号線の城崎温泉を選んだの

であった。

性格の異なる人妻二人を操縦するのは、今の私の体力をもってすれば、かなりの重労働の様にも思えた。しかし、いつものハントのように、時間を区切られて帰宅を急ぐのではない。徹夜でプレイしても、時間を気にかける心配がないとすれば、私もノビノビと自由に振舞えるだろうと思った。

この安易な考えが、プレイに当たって如何に浅慮であったかは、あとあとイヤという程思い知らされるのであるが、それはあとあとの事である。

とあれ一泊旅行のプレイは、最近志摩半島へ行った長井葉津子以来であり、かてて加えて円熟の人妻二人とである。私の心は弾みに弾まざるを得ない。何とか支障も瑤珠もなく二人に出会って、うまくプレイ出来ますようにと、そのことばかりが気掛かりのうちに日は一日一日と遅々と経っていった。

心ウキウキ、人妻二人をのせて城崎へ

恋人に——振られたのウ——

よくあるハナシじゃないかア

日吉ミミの第一作『男と女のお話』のメロディーがカーラジオから流れる。シャンソン

風の短詩からなるこの歌が、ラジオでPRされ始めた五月頃、私はテツキリ、ヒットすると予感した。作詩も洒落ていて作曲がいい。ムスコは当たらないという。二人で賭けをしてヒットしたので、ムスコは私にビール半打を買った、いわくつきの歌である。

今私は、この歌ならぬ、かりそめの恋心を抱いて、女と男と女のお話に夢中になっていた。私の傍らに、川路むら子が、凭れかかるようにして、甘い声をかけてくる。約束の十二時に、既に彼女は京都駅に到着していたのが、幸先のよさを感じさせた。

「ねえ、辻村さん、このまま二人っきりでどっかへ行きたいわ。ダメかしら」

「でも渡部さんと、十二時半に苔寺で会うよう約束済みなんだよ」

「始めて会う女の方と一緒にプレイするのなんか、とてもイヤなのよ。二人きりになりたいわ。でないとチツとも愉しけれないじゃないですか」

私は苦笑して首を振った。彼女の謂う、愉しみという意味が、プレイに続く、激しいセックスの戯れを意味していることは、過去数回の経験から、余りにも燎らか過ぎることであったからだ。他の同性を交えてプレイした



場合、彼女のこの燃える願望が、不発に終わることを恐れ、それが、Wプレイを忌避する気持ちにかり立てているようであった。

私としては、むしろそれがつめである。このソーレツ女性と一夜を共に過ごしたら体がいくつあっても足りない程のオソレを感じていた。兎も角、川路むら子の豹変ぶりは目

をみはるばかりで、一転するや忽ち奔放極まりない、性女に急変するのである。一山二山三山越え、幾山河越えても、彼女の情熱の果てしはなかった。川路むら子とプレイする場合、第三者の緩衝地帯がないと、とてももちそうになかった。身も心も許した女の、情熱のほとばしりの凄まじさは、想像以上のものがあるものであった。

(渡部好美とのWプレイによって、彼女は相当荒れるかも知れないぞ) そんな予感を感じつつ、私は一路、苔寺へと走る。

甘い誘惑にも乗らないと知ってか、むら子は姿勢を起こし、あきらめたかの様に車外の風景に眼を移していた。彼女自身の手紙にもあった様に、確かにむら子は目立って肥えていた。気楽さと美食と、運動不足からかも知れない。既に私と出会った時より、虚飾をかなぐり捨てた、淫らな褻が、彼女の眼隈に漂っていた。

「その渡部さんと仰有る方、好きなのですよ」

ポツリと呟くように、眼を正面に向けたままいって、しばらく黙っていたが、
「ねえ、本当のこといって。どうして私を呼んだりしたのよ」

「縛を撮りたかったからさ」

「ウソだわ。それなら何も温泉で一泊して撮ることないじゃないの」

「慌しくアベックホテルでプレイするより、偶には温泉にでもつかって、ゆっくりしたかったからさ」

「一つの部屋で一緒に寝るの？」

「まあ、そのつもりだけど」

「イヤだわ、ちっともいいことないじゃありませんか、お互いに気になって」

「一対一で、あんたが燃え過ぎると怖いからね。しかし、雑魚寝でそうするのも、刺激があつていいんじゃないかな」

「私はイヤだわ」

「イヤというあんたの方が怖いんだよ、いざとなると」

「エッチそのものね」

「じゃあ、あんたに縛ってもらって、おとなしくオネンネするとうか」

「お生憎さま、私にSのけはありませんよーだ」

私と二人きりだもんだから、むら子は好き放題に喋っている。

しかし、渡部好美が同乗すると、恐らくこの奔放な女性は、ピタリと、貝が蓋を閉じた

様に口を利かなくなることだろう。いみじくも、むら子の名前は、その性格のむら氣に通じていた。

横縞の半袖のスポーツウェアに、ミニスカートといういでたちで、ナップザックのような袋を膝に抱いた軽装で、まるでピクニックにでもゆくようなスタイルのむら子は、それでも苔寺が近づくと、笑いが消えて、真剣な表情に変化していった。

苔寺前の駐場車で車を停めるまでもなく、私の車を認めた渡部光雄と好美夫妻が、待ちかねたように近づいてきた。

車外に降り立つと、彼はぺこりと頭を下げ「どうもどうも、すっかり御無理申しまして……。どうぞ好美をよろしく願います。もう家内も昨夜からソワソワしましてね、すっかり飲んでるんですよ。辻村さん好みに一寸細工しておきましたが、お気に召すかどうか分かりませんが」

何を細工したというのか詳しくは聞かず、私は返事も上の空に、二人の人妻と無事出会えたことの安堵感に、心をワクワクさせていた。川路むら子は降りてこず、気拙い表情でソッポを向いている。

「あの、辻村さん。あの方、川路さんでしょ

うか」

「そうですよ」

「家内をよろしく頼みたいんですが、一寸あいさつしておいてもよろしいでしょうか」

彼の本心は挨拶の名にかこつけて、ナマの川路むら子の姿を、判っきり確かめたかったらしい。

「ええ、いいですよ」

彼はイソイソと車の窓に近づく。

「渡部です。妻が御厄介になりますが、よろしく願います」

町重な彼の言葉に、案の定、むら子は黙ってチラリと視線を投げ、軽く会釈しただけであった。人見知りする、激しい羞恥心が、彼女の頬を、やや強ばらせていた。

彼は、引っ込みのつかない顔で、佇む私と好美夫人の方へ引き返してくると、小声になつて、

「おとなしい方ですね。好美にも頼んでおきました。一度、機会をこしらえて、川路さんと是非……」

「ええ、伝えておきましょう。じゃあボチボチ出発します。安全運転で参りますから御安心下さい」

うなずいて渡部光雄は、フト淋しいかげを

泛かべた。一緒に行きたい激しい欲望を押えて彼は笑顔をとり戻し、傍らの夫人に、

「辻村さんの仰有る通りするんだよ。うんと虐めてもらって、愉しんでおいで」

と、その言葉は何のてらいもなく、好美夫人の自由を卒直に認めているようであった。

「行かせていただきます。子供達のこと、よろしく願います」

軽く夫に頭を下げて、彼女は後部のシートに乗り込む。微かに爽やかな鈴の音が、夫人の体のどこからか、チリチリンと洩れて、私の耳朵に流れて消えた。

川路むら子は、先取得権で当然のように前部に坐っている。羞恥の無口が、見ようによつては不貞腐れているようにも感じられる、素ッ気ない素振りである。渡部好美が背後から、

「よろしく願います」

とむら子にかけた言葉も、無視したように返事もしない。

淑かに好美夫人は、遠慮がちに後部シートの片隅に身をよせていた。

窓際の彼に会釈して走り出す。バックミラーに、いつまでも立ちつくす渡部光雄の姿がやがて小さくなってゆく。何故ともなく私の

心はジーンと熱くなる。この廣大無辺、大海原の如き広き心の夫の為にも、私は好美夫人を、すべてを忘れて存分に愉しませてやりたい気持ちにかられた。フト気が付くと好美はサングラスを掛けていた。その表情はハッとするほど新鮮さに溢れていた。

「よく似合いますよ、サングラスが」

バックミラーに声をかけると、ヒソと笑って、

「若し知り合いの方にみつかったとも困ると思ひまして、変装のつもりなんです」

と、笑顔がはにかんだ。スピードを出し始めると、微かな鈴音が、好美の身边から、さわやかに断続して響いた。

「鈴が鳴るようですね」

うしろを振り向けない俤、正面を向いて訊ねると、バックミラーに、さっと愧らしいのアルカイックな笑みが流れて、ききとれぬような声で、

「ハイ」



とうなずく。サングラスの奥の眸に、初々しい羞恥がただよう。

平日の国道九号線は、老いの峠を越え、亀岡に入った頃から、ゆきかう車の数も目に見えて減って、至極快調である。

渡部好美が乗りこんでから、隣の川路むら子は、唇にカンヌキがかかったように、一言も発せず、無聊げに、女性週刊誌をとり出して頁を開き、見るともなく読むともなく、眼を落としている。心ここにあらぬくせ、それは好美を如何にも無視した態度であった。軽い悔恨が心をかすめてよぎる。私は未だ、好美に対し、プレイへの核心には、何一つ触れ

る機会はなかったのであった。何かいいたいのである彼女も、むら子に気兼ねして、何も喋らなかつた。私と好美との間には、喋りたいことが山ほどあるようで、何もいえない。甘い言葉も、いたわりも、楽しい車中の話らいも、何一つとして、むら子の思惑を慮って出来なかつた。いつしか私自身も寡黙になつてゆかざるを得なかつた。

私という一人の男性を挟んで、体の隅々まで赤裸々に知りつくされ、心の動きや性向をすっかりさらけ出しつくした二人の人妻は、目に見えぬ激しい感情の火花を散らしつつづけているのであろうか。寡黙と饒舌が突発的に反転し、欲情すると手のつけられぬむら子。貞淑で控えめなくせ、激しい被虐の願望を内潜し、声を殺して愉悅に咽び泣く好美。二人の人妻は、まったく相反する性格であり乍ら被虐の願望と、私に対するそこはかとなき慕情だけが、共通点であつた。

「どこかのドライブイン・レストランで、食事しようか、大分腹が減ってきたね」

どちらへともなく独り言すると、

「私もよ」

と、むら子の声がかえる。

「渡部さんも未だなんでしょう」

「ハイ」

「じゃあ、福知山市を越えたあたりでおヒルにしましょう」

と、カニ飯を喰べたことのある、菖蒲園ドライブインを指して走る。京都駅を出発して、既に百キロ近い道のりを走りつづけていた。

このモーター名物のカニ飯を注文して、待つ間に、川路むら子はトイレにいった。

「何か気難しそうな人ですね」

好美は囁くようにいって、私の顔をみた。

「照れてるのですよ、すごいハニカミ屋の、人見知りする方でしてね。あっと驚く人妻の豹変」でも御存知の通り、一旦饒舌になり出すと、ドキッとするようなことをズケズケいって人が変わったようになるのですがね。

貴女という人が分からないから幾分は警戒しているんでしょうね。私の本心は、貴女と二人で行きたかったが、何だか御主人に悪い気がして、心ならずも彼女を誘ったのです。しかし何か気拙いですね。或いは、彼女の方でも、自分が本命じゃないことを感じている様なんです。それで尚更しゃべりにくく、チョイと拗ねてみせてるんですよ」

「主人は辻村さんと二人だけでもいいと、最

初から承知しておりましたのよ」

それが、好美の精一杯の抗議の言葉であつただろう。

「分かっているのです。でも、やはりイザとなると気を使ひまして」

「改めて、お呼びして下さいませ。いつかそんな日のあることを、愉しみにしておりますわ」

「どうも失敗したようです。お互いに索制して何も喋れない。ドライブの愉しさが半減しましたね」

「でも、あの方、辻村さんの横に坐られて嬉しそうですわ」

チラリとジェラシーがのぞく。

「ここを出発する時、前後の席を交替しました。彼女にそう言いますから」

「あの方にお悪いですわ」

「いいんですよ、そんな気を使っているのは、これから先が思いやられますよ。ところで、今もチリンと、鈴の音がきこえたのですが、何処につけていらっしゃるの？」

好美はパツと頬を染めた。もじもじしているかにも、云い辛そうであつたが、蚊のなくような声で、

「主人が脱いでゆけと申しまして」

「えッ？ 何を……」

「あのう、あたくし、何も穿いていないので
す」

「どういうこと」

「鈴をつけてありますから」

「……………」

私は、まじまじと好美の顔を、みつめた。

どうして装着しているのであらうか……。愧
らしい笑顔が泛かんで、

「五個の小鈴を一纏めに糸で繋ぎまして、そ
れに、小さなクリップを結びつけ、挟んであ
るのです」

彼女は私の耳にヒタと唇をよせ、クリップ
の挟んだ位置を、ききとれぬほどの声で告げ
た。

「本当？」

思わず声になって、並んで坐った彼女のワ
ンピースの裾のあたりを、そっと上から押え
ると、チャラチャラと澄んだ音が響いて、確
かに固い円形の塊りが、私の指先に判っきり
確認された。

「毛根が引きつれて痛いでしょう」

「案外そうでもないんです」

「御主人がそうしろといったの？」

「主人の命令なのです。アイデアをお見せし



ろって……」

「是非見たいですね。こりゃ、どうあっても
彼女と交替してもらわなくちゃ」

私の感情は、唐突にするどく刺激される。
今こうして、私の傍らで、膝も露わに坐る好
美夫人の、ワンピースの一枚下は、ノーパン
ティは疎か、数個の小鈴が摩擦しつづけて、

涼やかな澄んだ音を、振り撒いているのだっ
た。この心ニクい演出が、渡部光雄の感情の
傾斜を如実に証明していた。

彼のこの細工が、私の心を自分の妻の方に
惹かせようとする、とっておきの手段の様に
思われて、プレイの場へ、最愛の妻を送る夫
の心情がそこはかとなく偲ばれたのである。

川路むら子に、果してノーパンティの心構
えありや否や。懼らく彼女は、その様な配慮
は考えてもみなかったに違いない。

既に目的地の城崎に着かぬ前から、軍配は
好美の方に上っていた。Sの男性を飲ばせる
手段を、渡部夫妻は願わなくして構じていた
のである。

むら子が戻ってくる。折よくカニ飯が私達
の食卓に届く。

食事をしながら私はさりげなく、むら子に
問いかけてみた。

「えらくトイレ、長かったね。さては脱いで
きたね」

「あらッ、何を？」

「パンティさ」

「どうして脱いでくる必要があるの」

「オサワリしたいもん」

「あらイヤだ、ヘンなこと云わないで」

「いいんだよ」

私は、好美と顔を見合わして、くすと笑った。それ以上、言う必要はない。好美のこの細工は、むら子にとっては、予想だにしえなかった行為に違いなかったからである。

食事を終えてレストランの外へ出る。思い立って記念撮影しようと、三脚をとり出してカメラを据えかけたら、折から止まった車からアベックがおりて、その青年の方が気軽にシャッターを押してくれた。



二人の人妻の肩に左右の手をのせ、私はそっと抱きよせる。

既に時間は二時半を廻っている。

「さあ、城崎まで直行だよ。前後交替してのったり、のったり」

さっさと好美を助手席にのせ、むら子を後部シートへ押し込む。否応いわず二人を乗せかえると、私はスタートした。

山間のルートを、あと八十キロばかり、ひた走りに走らねばならない。

快適に飛ばす私の左手が、時折、好美の膝を這い、鈴の所在を確認する。彼女はしおらしく、ひそと身をよじった。バックミラーのむら子に眼をやると、横坐りにいつしか仮寝の夢を結んでいた。それは好美に心を奪われた私に対する、面当てのように感じられ、話の継穂もなく所在なげな彼女の、寝たふりをして私達の行動を窺う、妖しい女心の凝態かも知れなかった。時折、爽やかな鈴音が、断続して車内に流れ、上気した頬をそっと両掌で押えて、好美は、軽い恍惚のめまいを覚えていた。

二人の心乱れる人妻をのせて、城崎へ城崎へと、車は距離を縮めてゆく――。

プレイ前のいで湯のひとつ

万一のデート不成立の場合を考えて、温泉旅館の予約は、していなかった。行き当たりばったりでも、平日の九月下旬頃は、温泉街も閑散である。

城崎駅前で車を停めて、旅館の総合案内所へ入る。もともと城崎は外湯で、一の湯、地藏湯、柳湯、鴻之湯、御所の湯、まんだら湯といった、湯治場の外湯が温泉街に点在していて、ここを訪れる人々は旅館で湯券を買って、外湯に出掛けてゆく湯治客が多かった。私達の目的はおのずと別にあるから、案内所に頼んでなるべく内湯の大きな旅館を探してもらう。旧温泉街は飽和状態で、小じんまりした旅館が林立しているが、大浴場となるとやはり幾分、街はずれになっていた。

温泉街を突き抜け、ケーブルの乗場を過ぎて出外れたあたりに、次々と新しい旅館ができていく。その一軒に、なんなく私達は無事到着した。S荘という水車風呂が名物のこの旅館も、泊り客は少ないらしくヒソと静まり返っている。その方が私達にとっても勿怪の幸いであった。

女・男・女というこの組み合わせも、温泉旅館の女中は馴れているのか、さして好奇の表

情も見せず、四階の奥まった広い和室に案内してくれる。

宿泊帳にハタと困惑し、架空の会社名を書いて、社員二名と補足する。事件でも起きぬ限り、誰の何ベエであろうと、旅館でも一向に構うことはなかった。

狭いバスも附属しているが、これはプレイのあとの、縄目のついた体を憚る場合に残しておいて、大浴場をきくと、いい工合に空いているという返事。水車風呂の風雅な浴場に隣接して、温泉プールもあるということ。私の心はソワソワと弾み出す。心臓強く、カメラとストロボ、十二段伸張の三脚を紙袋にしのばせ浴衣に着かえた二人に声をかける。

「一緒に入らないかい？」

二人の人妻はチラリと、お互いに顔を見合わせ、流石にためらっていた。

「渡部さんは？」

「あたくしはいいんですが、川路さんが……」
「川路さんもいいんだろ、それとも困る？」

私は彼女に近よって、おおいかぶさるようにして肩を叩き、パチンと軽く頬を指ではじいてやった。

「いつまでもにらみ合ってたら、あとでいい目さしてやらないぞ。いい加減に仲良くして

くれよ」

優しくいうと、コックリとうなずいて、

「ごめんね、何だかお話するチャンスなくしちゃったのよ。いいわ、もうこうなったら、パーッと楽しくやりましょう」

わざと自分の心を引き立てるようにはしゃいで、むら子は、やっと笑顔を取り戻した。

「よし、じゃあ、ここで仲良しの握手だ」

私は好美とむら子の手をとって、私の手を重ね、平等に、二人の頬っぺたにチュッ、チュッと軽くキスをした。

お互いに心裏は感情の火花を交錯させていても、一応表面上は、私という人間の介在で平和条約の締結が出来る。やれやれ、女子と小人は養い難しか。

渡部好美は、そっと壁面を向いて、鈴束をハンドバッグにしまい込んだ。その仕ぐさにむら子は背後から眼をやり、鈴の所在が、奈辺にあったかを、始めてこの時、知ったようである。

私の手を引っ張るようにして、むら子は廊下に出ると、素早く私の耳許に口をよせ「分かったわ、食事の時仰有った意味が……あの人、パンティのかわりに鈴をつけていたのねえ」

「そうだよ、床しい心掛けだろう。主人がそうしろと命令したというのだがね」

「大分変わってるのネ。だから私と交替して前へ乗せたのね。可怪しいと思ったわ」

「男は、面白い方へ心を惹かれるにきまってるよ」

「私だって、今はこうよ」

むら子は人気のない廊下で、さっと浴衣の裾を開いた。ノーパンティである。

「おそかったよ」

「憎たらしい」

チクリと腕をつねられて、思わず眉をしかめ、「痛い！」と叫んで、「こいつめ」と、駆け出すむら子に追い縋り、背後から浴衣の裾をめくり上げた。ハレンチ学園なみの、スカートめくりならぬ浴衣めくりを、いい年をしてやっている。丸々したむき出しのおしりが、むっちりと覗く。

好美が小走りに追い掛けてきて、ハレンチ学園は、お預け。私達は自動エレベーターで一階に降下してゆく。

「渡部さん、仲良くしましょうね」

むら子は潔ぎよく、好美に笑いかける。

「ええ、私の方こそ……」

狭いエレベーターの中で二人の会話をきき

乍ら、私の心は、この二人のやりとりで微笑ましく愉しい思いにかられていった。やれやれ、まさしくそんな感慨であった。

萱ぶきの門を潜って、岩風呂造りの大浴場に入る。有難いことに誰一人入っていない。カメラのレンズが曇るので浴場の入口を開き、湿った温かい空

気を出す様にして私はクルクルと裸になる。「あらお珍しい、辻村さん、おフンしているのネ」

吃驚した様なむら子の声であった。戦友仲間はこの夏会い、同好者の医師に会った時も、彼等が等しく便利な、越中禪をしているのに目を止め、いやがる家内を説き伏せて、やっと積年の思い叶った越中禪は、夏場を過ぎてはやめられなかった。体裁を構わねば、こんな便利なシロモノはなかった。ピッタリと股にくいついたショートパンティなど、蒸



れて、アセモが出来て、窮屈で、とても穿いてはおられなかった。

「おいおい、御婦人の脱衣場はアチラだよ。いくら無人でも、誰か入って来た時、困るからね。いずれのちほどお湯の中で——」

二人はあわてて出て行く。山肌に面した硝子戸を開き、カメラを置いて、出湯にのびのびと体を伸ばす。広い大浴場を四分六に粗い柴枝で境界

し、すき間から向こう側はスケスケである。石だたみの洗い場に潜り戸をつくり、婦人浴場へは、いけいけになっていて往來自由である。水の流れは止まっているが、大きい水車が岩づくりの背景にデンと据えられ、これが水車風呂の由来でもあるだろうか。

ほどなく、むら子と好美の語らう声が垣根の彼方できこえ、ざぶざぶかかり湯をする音が私の耳を打った。

「誰も外に入っていないんだらう？」

と声を掛け、垣根の低い位置からヒョイと婦人風呂を覗くと、一人の若い十七、八才ぐ

らいの娘が、吃驚したようにタオルで胸を蔽い、バチャンと湯音を立てて鉢を沈めた。しまった！ と思ったが、もうおそい。私は、無意識に、ノゾキ見した恰好になってしまった。独りヒソと、湯あみする娘の存在など、てんで私の脳裡にはなかったのである。

照れかくしに、わざと大声で、

「こっちは私一人だよ、二人ともおいでよ」

と呼びかける。返事はなかったが、やがて潜りを抜けて二人の姿が現われる。手招きすると、タオルを胸に乘せて、同性を意識する羞恥を互いに泛かべながら、むら子と好美は顔を見合わせていたが、勇を鼓して、そろそろと湯の中に、身を沈めてきた。「若い子が一人、入ってるのよ」

むら子が声をひそめていう。

「知ってるよ、構わないじゃないか。旅の恥は掻き捨てさ」

両手をのばして二人の肩を引き寄せ、私は歌の一つも唄いたくないようないい気持ちで人妻に挟まれて至極太平楽な気分浸っていた。

既に過去数回、城崎を訪れているので、この土地の由緒来歴は聞き齧っている。町の中央にある一の湯は、宝暦の昔、名医香川太仲が、海内第一の名湯と折紙つけて、一の湯と

いう名のある由来や、ここから車で十数分の日和山公園に、浦島に由来する竜宮城や、海女の実演、群魚白鱗をみせる水族館での、面白いように釣れる魚のこと、円山川の対岸の天然記念物の玄武洞のことなど、いかにも知ったかぶりで喋っていた。

気配で、若い娘が上っていったのを知って逸早くカメラを三脚に据え、三人の入浴シーンをセルフタイマーで撮り、数枚、あられもないポーズで戯れる。水車を背景に、二人の全裸をカメラに納め、私達は裸の俤、石段を下って、温水プールへ全裸で飛び込み泳ぎ始めた。むら子は数米泳いだと思うと、フウフウと息を弾ませ、

「ああ、きついわ。学生時代には少しは泳げたんだけど、こう太っちゃ、もうダメね。重くてすぐ沈んでしまうわ」

ひたいに濡髪をへばりつかせて、水をかきわけて戻ってくる。

「よく太ったら浮袋がわりになると思うんだけど、そもゆかないのかね」

「ひどいわ」

むら子は激しく水を浴びせかけてきた。好美は泳げないという。私が手をとってやってバックし乍ら引張ってやると、体を浮かせて

バタバタと両脚で水を蹴立てている。他愛ない水遊びがしばらく続いた。

私にしてからが、中学生時代、堺の大浜海岸より浜寺まで五キロの遠泳に、泳ぎ通したほどの水泳力もあったが、今、むら子がいったように私自身も中年肥りの腹の出張った体となった今は、二十メートルぐらいも泳ぎつづけると息が苦しくなった。むら子のことを笑えたものではなかった。

私達は再び温い湯へと引き返す。既に隔てのとれた今、人妻達はあるが俤の裸体で振舞い、私も又、憚らず肉体を、さらけ出していた。いで湯ののびやかな雰囲気、しらずしらずのうちに私達の心を柔らかに、ほぐしているようであった。

長風呂ですっかりのぼせて、部屋に戻る。

早いめに夕食を頼んでおいたが、時間は少し早い。ほてった体をひやすべく、私達は陽の



かげった夕暮前の舗道へと出た。プレイの夜をひかえて、黄昏の散策の味も又格別であった。温泉街の町中を流れる大谿川の、兩岸のしだれ柳が初秋の風にそよいで、裸身にじかに着流した浴衣の裾を、微かにはためかせていた。志賀直哉の「城の崎にて」の名文も、今の私の満ち足りた心には影の薄い思いである。三々五々ゆきかう湯治客は、私達三人の散策にも誰一人として気を留めない。それは温泉街にザラにある遊歩の風景であっても、

この人妻二人が一人の男の前で、やがて悦虐と痴態にのたうち廻るとしたら恐らく驚倒するに違いないであろう。妖しい構図を秘めて、さりげなく私達は立ち並ぶ土産物店の軒先を覗いて、そぞろ歩いていった。

プレイという名の欲

望の歯車は廻る

温泉旅館の料理は、年毎に画一化されてゆきつつある。それだけ土地柄の特徴ある料理が少なくなっていた。城崎も又その例外ではない。日本

海を控えて、ぐっと新鮮な魚介類の料理の期待は、やはりはずれて、いずこもおなじ秋の夕食である。それは最近、雨後のタケノコのように、無数に乱立するドライブインレストランの、いずこも同じメニューにもいえることであった。このS荘も、この旅館独特のものは何一つ、なかったといってよい。

食べ歩きではないのだから、別段不満にも思わず、出された料理をすっかり平らげ、三人で空けた二本のビールで陶然としているのだから、結構その料理なりに喜んで喰べているのであろう。宿の女中は、早々に自由の時

間を得たいのか料理の膳を下げると、さっさと川の字型に三組の夜具をのべて引き下っていった。その方が私にとっても都合がいい。いよいよ待望の本番到来である。折角敷いた夜具をくるくると巻き上げて、部屋の片隅に丸め、プレイ開始のスタンバイに、しばし時間を過ごす。

一泊の夜長に安心してのんだせいか、一本ちよっとのビールが、意外に体内の血行をたかめて、酔いがかけめぐっていた。

むら子も好美も、私の奨めで、コップ一杯程のビールをのんでいたが、さして変化はみとめられない。

よろよると立上ると「さあ、どちらさんから始めようかな。そうだ、ジャンケンで負けた方が先に脱いで、縛られるのだ。いいだろう」

等分に二人を眺めて縄を握りしめる。「じゃんけんなんてしないで、どうせ脱ぐのでしたら、思い切っ

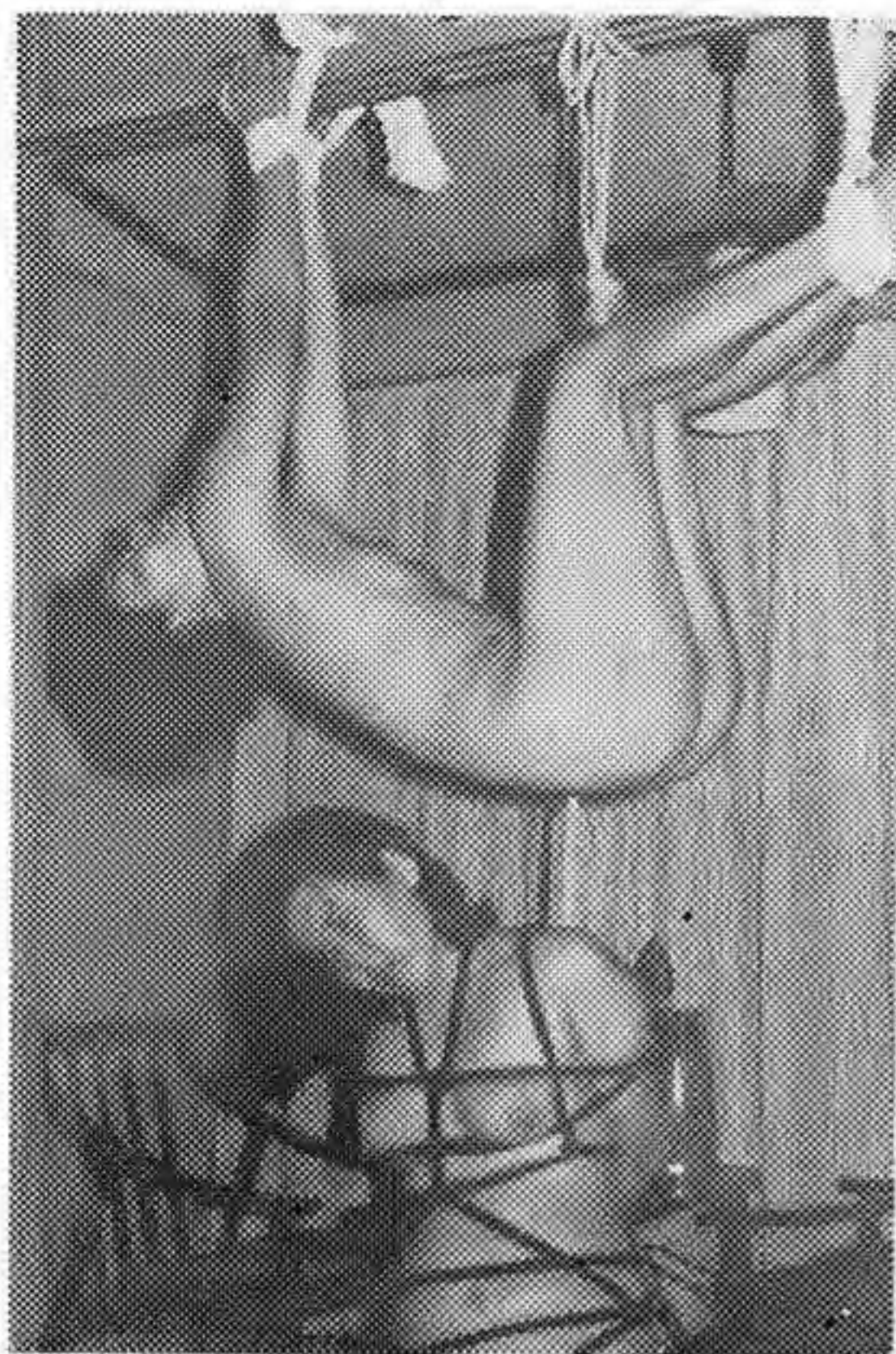
て二人ともパツと脱いじゃったらどうなの」むら子の発言である。好美は既に、いつしか腰紐をといた浴衣の胸を合わせて、私の命ずる俥になる姿勢を控えめにとっていた。「じゃあ、一緒に脱いでもらおう。いろいろとアイデアを考えてはいるんだけど、兎も角最初は連縛するよ。どちらから縛ろう?」

「あたしから縛って——」

むら子は逸早く叫んで、パツと浴衣を脱ぎ捨てると、早くも一糸纏わぬ裸身をのり出してきた。勢いに気圧されて、好美の意見をきく間もなく私はつられて、むら子に縄をかけ始める。二人の緊縛というので、かなりの縄を準備してきたから、縛る縄にはことかかない。むら子の態度は、何処となく挑戦的であった。渡部好美にヒケをとるまいという自負心がありありと現われて、気負い立っているかのようにすら思われるのであった。

手早く後手に縛って胸に回し、一分足らずで上半身を縛り終わる。むら子の乳房は、やや垂れ気味に大きく、対照的に好美の乳房はふくらみも少なく扁平であった。垂れた乳房が早縄で圧せられて、乳首のみ、ピョコリと上を向いて誘惑をそそる。

その場にむら子を直立させた俥、好美に近



づき、同様に後手に縛り上げると、二つの女体を前向きにしつかりと密着させて、胴体で強く犇々と締め上げていった。

好美に比して心持ち上背の低いむら子は、密着の強まるにつれて、微かな悲鳴を早くも洩らし、好美とすれすれに近づけた顔をそむける。動くたびに、肌と肌が敏感に触れあい奇妙な感触に、二人の人妻は羞恥を撒きちらせて、腰を蠕動させた。否応なく相手の肌によって、互いの肌が刺激をうけ、女同志の感触にとまどって、ピッタリ密着した肌を努めて刺激しない様にと、努力しているようであった。お互いの顔を離そうとするから、一見シャム双生児のようなポーズをとる。その反射神経を利用して、足を左右に開かせると、互いの爪先を揃えさせ、出来る限り背をそろすように命じる。細身の柔軟さで、好美はかなり体をそらせたが、むら子の体は、首だけぐっとそっても、上半身はそれないのか、殆ど直立に近かった。そらせようとすればするほど、内心、激しく火花を散らす二つの体は密着の度合が強まってゆくようであった。

カメラを指いて被写体に近づき、大きく手を広げて、二人の双臀を深々とかかえ込んで揺すり始めると、案に違わず、虚飾をかなぐ

り捨てて、忽ちにして豹変したのは予想通りむら子であった。揺さぶりに応じて、須臾にして、むら子は悦楽の歓声を、けたたましくあげて、牝獣のなやましい咆吠は、部屋の空気を震わせて轟き渡った。慎しみ深く好美は微かな呻きを洩らして同調したが、むら子の叫喚に掻き消されて、その呻きは殆ど、ききとれぬ位であった。長時間お預けを喰っていた被虐の想念が、緊縛によって、一気に爆発したかのように、むら子はこらえ性もなく悦楽のハーモニーを奏でていたのである。搗き上る寸前の餅でもこねるように、飽くことなく私の両手は、双臀を一抱えにかかえこんで、歓楽への前奏をかなでつづける。もうかくなれば、私の嗜虐の心は、油をそそいだ如く、快虐にかりたてられてゆく。

嬌声を挙げつづけるむら子、ヒソと精一杯に声をかみ殺す好美――。しかし、声のみが愉悦のパロメーターではない。内燃機能は果してどちらが火と燃えさかっているか、それを確かめるべく、じりじりと二つの女体を横ざまに倒してゆく私。

お互いの左右の片腕に全身の力がかかり、胴体で緊縛された二人は既に熟れ始めて、それがパロメーターとなって、ありありと感知

出来たのであった。

下敷きになった腕に力がかかり、かなり痛むのを承知で、重ね餅のような二つの腹に跨がり、小型バイブを手にする往復をくり返す。

むら子は嬌声かしましく、好美は声を殺して愛欲の吐息を洩らした。私の悦虐の血は、はげしくのたうつ。既に淫心をきざした二人にとって、くどくどしいプレイの説明は不要である。悦楽の歓声は、妙なる調べとなって妖しい変奏曲をかなでた。

早くもむら子に陶醉の昂まりが感じられ、それは怒濤の様に狂奔して、ひいていった。吐く息すら頬をなでる、近々とより添った顔を、互いに必死にそむけ、むら子はタタミに俄破と顔を埋め、好美は堅く眼を閉じて、相手の叫喚する表情を見ようとはしなかった。プレイ開始後、十数分の経過で、いわば、これは私にとって小手しらべに過ぎない。余り慌しく、官能の渦に巻きこまれてもらいたくはなかった。

羞恥をかなぐり捨て、むら子は、自由の奪われた裸身をみもだえさせて、更に新たなる快楽に没入しようとしている。

物憂い振動を止めて、私はやつこらさと、



「いやッ、そんなこと口に出さないで……。何だかすごく愧かしいわ」

彼女は両手で顔を蔽うとイヤイヤをした。いうまでもなく、好美に対しての羞恥心である。しかし天衣無縫に燃える、むら子の方が謙虚に悦楽を殺す好美より、とりようによっては正直なのかも知れ

なかった。

「この鴨居に吊ってやろうか？」

「あたしを？」 とむら子は両手を顔より離して、軽く指で自分をさす。

「二人共だ」

「パリッと折れちゃうわよ」

「一度その俣ぶら下って、足を離してごらんですよ」

「こう？」

いわれる俣に、むら子はヒョイと鴨居に手をかけると、両脚をくの字に曲げてぶら下った。ミシリと、鴨居のどこかがなったが、そ

れでも、はめた障子に支えられて、どうやら大丈夫そうである。とはいえ、吊用になんて出来ていないから、鴨居の材木は余り太くもない。好美を手招くと、軽い恐怖の表情を浮かべて私の傍らに近づく。

「軽そうだから、あなたから吊りますよ」

「あのう、あたくし、吊られると、とても怖いのです。高所恐怖症でしょうか」

「今迄、御主人とのプレイで、一度も吊ったことないの？」

「狭い家ですし、私がイヤというものですから、まだ一度も」

「大丈夫ですよ。落ちたところで、低いところじゃないの。それに、私が知っているから心配いりませんよ」

「本当に落ちないでしょうか」

事実、好美は微かに唇を震わせ、こころも表情を強ばらせていかにも心細げである。

「落ちないよう、しっかり縛りますよ。縄が痛いようでしたら晒布でやりますよ。さあ」

促がされて、洩々、やっと心をきめたのか

好美は、敷居ぎわに立った。

両手を合せて縛り、鴨居にかけて結ぶ。怖がる彼女に、最初から逆吊りは無理だったので、精々猪吊りぐらいで我慢するつもりであ

重い二人分の体を抱き起こし元の姿勢に還元させる。縄を解くにも二人だから、倍の時間がかかる。私に好意を寄せる二人のM女性を同時に禦するむつかしさに、私は軽い悔恨を覚えた。しかし今の処、むら子と好美は平和条約を締結して、さしたる内紛も認められなかった。

解き放した二人は、ほんの先刻までの、猥らに発した嬌声のしどけなさに、何となく照れているようであった。

「むら子は感度良好だね。二人を均等に扱ったのに、あんただけ先に喜んでしまったよ」

った。むら子は両手を胸で組み、大胆に両脚を開いたポーズで、私達のやりとりを、さも痛快げに眺めていた。両脚首を結び終わり

「一寸、抱き上げてよ」

と、むら子の応援を求める。一人でも出来なくはない軽量であったが、無駄な労力の浪費を懼れて、彼女に体を抱えさせる。

「大丈夫よ渡部さん、晒布だから痛くないし私が下から受け止めてあげてよ」

その言葉の裏に、私はチラッと、むら子のサジズ的なよろこびを見つけた。いずれは自分にも順番が廻るものとしりつつも、今、顔をこわばらせて微かに震える好美が、吊り下げられるのをみれば、むら子ならずとも、軽い加虐性を覚えるのは、その場の状況からみて当然のようでもあった。

好美の足首の布を鴨居に結びつけたのを見て、むら子は、ささと手を離す。ギギッとさしみ音を立てて、好美の裸身が、ダラリと鴨居にぶら下った。

「ああ、怖い、怖いすわ。落ちそう……」

好美は叫んで、両手で必死に鴨居を握りしめ、揺れた体がやっと安定したのか、叫び声を殺した。

「さあ、次はあんたの番だ」

黒地の縄をもってむら子に近づくと、さっと身を引

き、
「まって、一寸一服、吸いたいよ」

と、卓上のタバコに手を伸ばし素早く火をつける。

好美を少しでも長い間がら下げておいてやれという、わざとらしい意地の悪さがポカリポカリと吐き出す煙

草の輪に滲んでいた。それは無意識の同性に対する嗜虐のあらわれかも知れなかった。過去数回のむら子とのプレイによって、彼女のM性は充分に知悉していたが、女は激しい競争意識にかられると、こうして唐突に急変するものなのであろうか。豹変はむら子にとってお家芸でもあったが――。

「もういいだろう、早くしないと気の毒じゃないか」

つい語調がきびしくなる。ノロノロとむら子は煙草を押しつぶし、ニヤリと笑って、鴨居に眼をやり、

「近頃、肥えちゃったから、二人吊りなんてとても無理よ。第一、私をどこへ吊ろうとい



うの。場所がないじゃありませんか」

成程、むら子のいう通り、猪吊りの好美によって、鴨居は大半、占拠されていた。私の構図は果敢なくも崩れて、やむなく、むら子を緊縛にとどめることにした。黒縄でぐいぐいしめつけ、やや肥満した肌に縄を深々と喰い込ませてゆく。

吊り上げた好美の真下にむら子を据え、数枚のフィルムを流し終わる。声もなく好美はかなり長い間、必死にこらえている。反動的に、私の心は好美の方へ傾斜していった。むら子にとって、この軽い意地悪がウラ目に出たことを、彼女自身、気付いたであろうか。

私は好美の足首の布を鴨居より外す。否応



なく、むら子の中腰の体に好美の体がのしかかるようにおちる。足首の布を外すと、晒布で鴨居に縛っただけの好美の体は、緊縛を伴わず、さしたる苦痛はなかった。

むら子を立たせて、二人の足首を、それぞれ鴨居に片脚吊りにする。そうした露わなポーズにカメラを向け終わると、私はわざと、むら子に当てつけるように、好美のたおやかな裸身を抱いた。

「御免ね、長い間、吊っていて。さぞ怖かったでしょう」

「いいんです。あたくし、段々馴れるように努力します」

「ムチ打ちしていい？」

「痛いだけで、余り好きじゃないんです。でも、辻村さんがなさりたいなら我慢します」

好美夫人は何処迄も従順であり、極めて協力的であった。そむけた横顔に軽くくちづけし、私は比較的柔らかい一条の縄を束にして背位には廻らず、腹部から腿にかけて、痛感度の敏感な個所に、交互に縄ムチを振った。

むら子にはやや強く、好美にはやや弱く、それは私の手加減一つで、等しい力のように見えた。二人の人妻は、忽ちに眉をしかめむら子は大きく、好美は小さく、苦痛の呻きをほとばしらせた。このポーズで使えばパイプが、甘美なエクスタシーを伝えることは百も承知でそれは使わず、唯、ムチ打ちによる、かなり激しい痛みのみを与えることによって、私の嗜虐心は昂揚していった。流石にむら子は好美の手前、かなり苦痛をこらえて我慢していた。ムチ打ちの贈物が、二人にとっては好まざるプレゼントであつても、そのあとにくる、甘美な悦楽を期待して、二人とも私の我儘を甘受しているようであつた。

縄束を投げ捨てると私は好美の前に跪く。辛うじてバランスを保つ、片脚をしっかりと抱え、私はムチ打ちの代償の、感謝のしるしを舌端で送る。たえいるような愛欲の喘ぎが好美の唇から洩れて、腰がゆるやかに蠕動し、吊られた腿がピクピクとケイレンする。むら子の嘆息のほむらを燃やした眼を、私は背に判っきりと感じとっていた。

湯の街の夜は更けて

判っきり川路叢子は拗ねていた。猪吊りの代償に、私が好美に与えた甘美な行為が、ともすれば崩れがちの均衡を、あっさり破ってしまった恰好である。勿論それは私も予測していた。猪吊りの好美を、わざと放置させて独りタバコをくゆらせたむら子の、故意の非協力ぶりが、敏感に私の心を刺激して、むしろみせつけがましい行為に出たのも、むら子の態度が尾を曳いたからに外ならない。

拗ねたのか、行かないというむら子をその俥にして、私と好美は、再び広々とした水車風呂につかって肩を並べていた。二、三の浴客はあつたが、ほの赤いステインドグラスに彩られた浴場では、誰も気に咎めない。

私の招きに応じて、好美の方から潜りをぬけて、こちらへやってきたのである。

「あの方、大分御気嫌わるいようですわね、いいんでしょうか」

「放っとけばいいんですよ。いつ又ケロッと豹変するかも知れないからね」

「でも……」

「どうしたっていうの？」

「こうして一緒に来たのですから、仲良くしない」と

「非協力的なんだよ、あの方は。とても激しくせに、何かの拍子に、ころっと態度が変わるんですよ。私から又うまくいうから、心配しないで」

「始めてのこんな機会に気を使うなんて……やはり御一緒は無理だったのですわね」

「後悔していますよ、お互いの為に——。あちら立てれば、こちら立たずで、二人を平等には愛せない。どちらか一方に心が傾斜するのは当然ですからね。ずっと昔、梨花と伊吹という二人の女性とよく一緒にプレイしたけど、彼女達レズの仲だったから、反って私の存在が居辛いくらいうまくゆけたけど、貴女とむら子は今日が初対面だけに、お互いの心を忖度して、むづかしいね」

「あたくしは努めて、あの方を立てているつもりなんですけど、やはり気心が知れませんか、すっかり心からなじめませんのね」

「私が悪かったのだよ、ただい無理な構想だった。しかも心はあなたの方に傾いているでしょう。それだけに三人が並んで床についてからが頭痛のタネですよ」

「私は構いませんから、あの方を可愛がってあげて下さい」

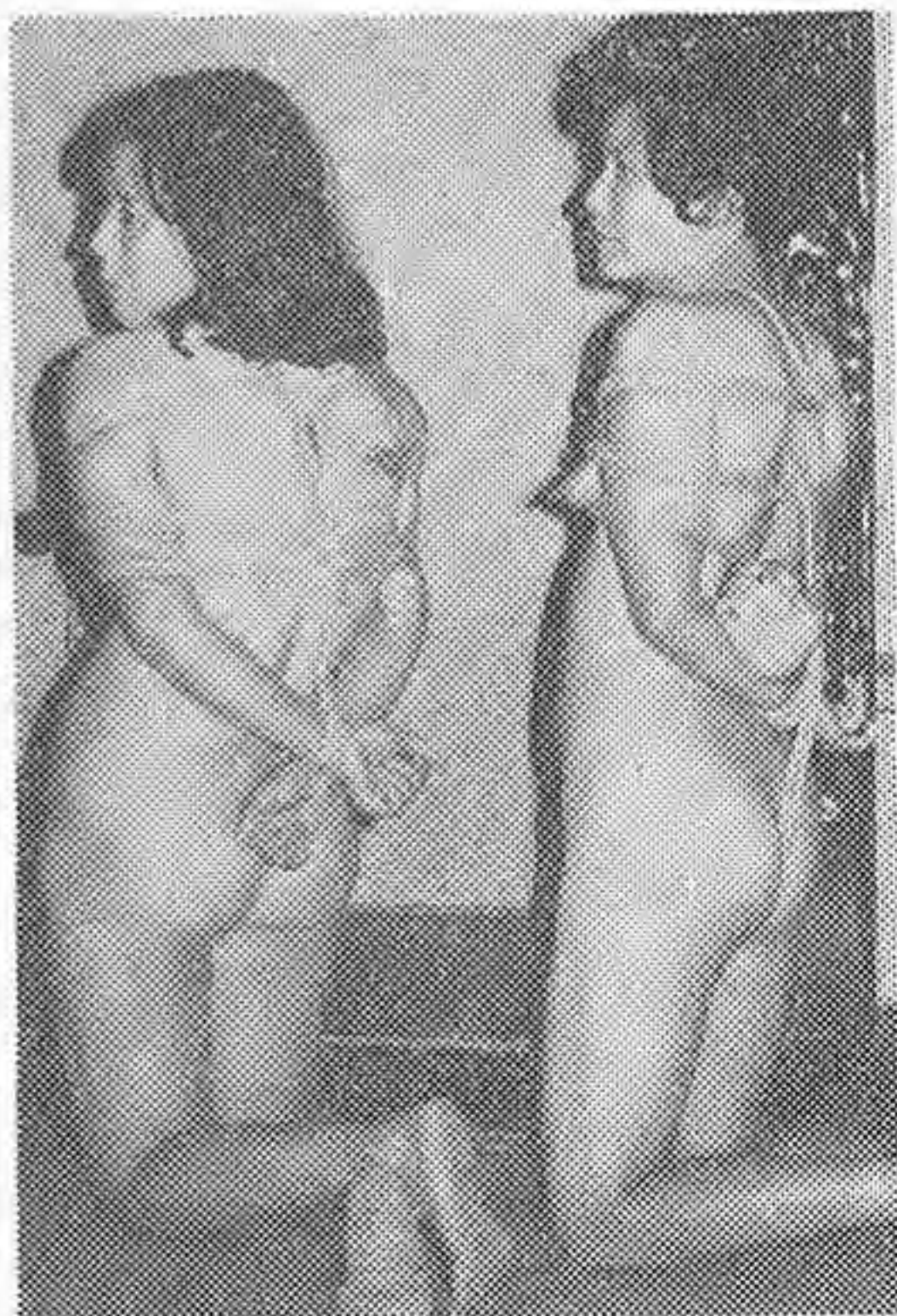
「その、遠慮——その謙譲

の美德があなたの欠点ですよ。何故もっと堂々と、むら子を圧するくらいに自己を主張しないんです。一晩中、ずっと貴女に背を向けていていいんですね」

「だって仕方ありませんもの。私なんかよりあの方のほうが、以前から御存知なのでしょう。どちらかが譲らないと、納まらないんじゃないありませんか？」

「だから、わざとむら子に冷たく仕向けたんです。怒らせとけばいいじゃないですか。彼女を散々じらして、みせつけてプレイするのも、反ってハッスルしますよ」

「でもそれじゃあ、あの方が可哀想ですわ。」



やはり御無理なさって出てこられたのに」

好美はその癖、言葉とはウラハラに、湯にたゆたう俤に裸身をヒタと私に寄せてきた。

「ハーフ、ハーフですね。どちらへも半分の愛情しかそそがれない。所詮、男は私一人だから……。どちらへも根限り体力をぶつけたら私の体が持たない。まあ、成行きにまかせましょう。多少はイヤなことがあっても我慢して下さいね」

こっくりと好美はうなずき、湯の中で、私の手をまさぐって強く握りしめた。好美とは仄々とした愛情が通うのに、虚勢を張るむら子とは何故となくシツクリとゆかなかった。

むら子の強烈な欲情が、私を独占しようとするところに無理があったのである。度々プレイしながら、むら子と共に過ごす一夜は私にとっても始めてである。それだけに彼女は期待し、いで湯の一夜さを、燃えに燃え続けたかったであろう。その期待が好美の存在によつて見事に外れ、しかも尚、私の心が好美のほうに傾斜していることを、敏感な女心から察知して、裏切られた期待に、やり場のない憤懣を感じているように思えたのである。

正直いって、両手に花のプレイ旅行は、愉しいどころかシンドイことである。あっさりと渡部光雄の提案を受諾して、好美夫人と二人いで湯で夜もすがらプレイ出来たら、どの様に楽しかろうと、つくづく、浅慮な計画が悔まれるのであった。

しかし、この俚では、これからのプレイにも差支える。私も意地悪したものの、今頃独りで部屋でしょげている、川路むら子の心情を察すると、急に可哀想になってきて、なぐさめか、いたわりの言葉の一つもかけてやりたい衝動にかられた。

「あなたは少しロビーでも一服して、あとから部屋へ戻って下さい。やはり気になりますので、彼女の気嫌をとりますから」

「ええ、分かりましたわ」

あっさりと好美はうなずき、婦人浴場の方へ戻っていった。すぐさま水車風呂を出て、自動エレベーターで、慌しく部屋に引き返す。そつと把手を廻して室内に入ったが、むら子の姿が見えない。その時、室内のパスの方から、いい調子で歌を口ずさむ、のんきそうな、むら子の声が流れてきたのであった。

氣にして、慌しく駆け戻った私の方がバカみたいである。耳をすませると、例の日吉ミミの、男と女のお話の一節をくり返して唄っている。

……ベッドで、泣いてると、涙が耳に入るよう……。昔を忘れてしまうには、素敵な恋をすることさあ。

……男と女が、ためいきついているよう……。夜が終ればサヨナラの、はかない恋のくりかえしい……

なる程、今のむら子にとっては、ひとごとならぬ、身にしみる文句である。

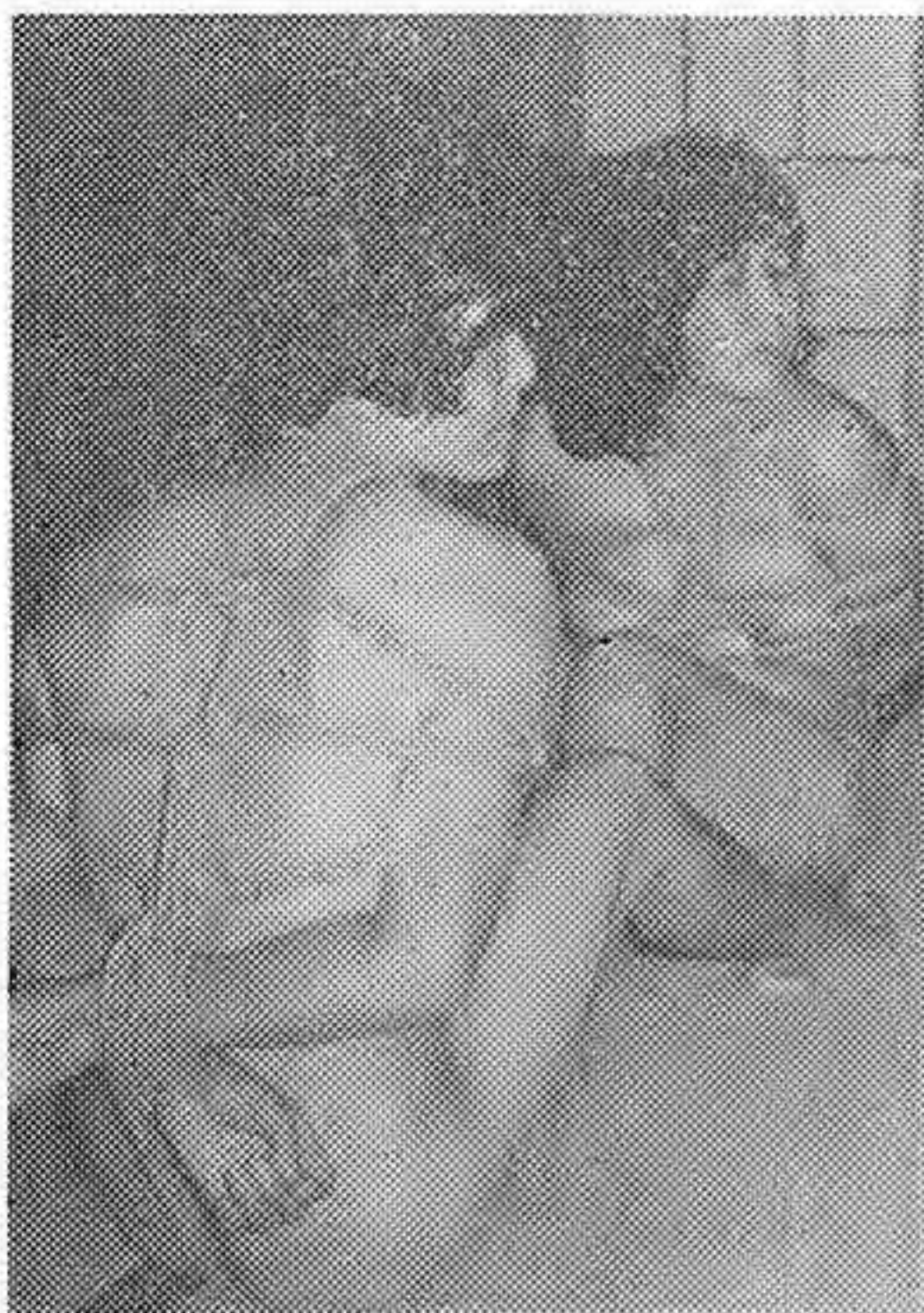
私は今、入ってきたばかりなのに、再びクルクルと裸になって、まだじっとりと湯にしめった体をバスに運んだ、黙って扉を開く



と、むら子がギョツとしたように私をみつめプツンと唄をやめて、そっぽを向いた。まだ拗ねているらしい。

年甲斐もなく私はいつ迄も歌の好きな方である。まして日吉ミミの歌は五月頃、長男と流行る、流行らないの賭けをした歌だけに、文句もすっかり覚えていた。歌は風呂の中で唄うと、少々声の出ないものでも高音が出て唄い易いもの。私はその一節を口吟んで、タイトルにしゃがみ込む。

……淋しいなら、このボクが、つきあってあげてもいいよう。涙なんかはみせるな



よう、恋はオシャレなゲームだよ

……恋人にフラれたのう、よくあるハナシじゃないか。世の中かわっているんだよう、人の心もかわるのさあ——。

「バカー、辻村さんのバカ、出て行って」

むら子は、いきなりしぶきをあげて、激しく湯をかけてきた。二人はいると、殆ど湯の溢れ出してしまうようなバスに、私は無理矢理、体を割り込ませてゆく。否が応でも、肌と肌が密着して、身動きする隙間もない。荒々しく、むら子の頭を抱え込み、ぐいと唇を近づけて、貪るように女の唇を吸いこもうとすると、

「イヤーン、イヤン、バカー」

と、私の唇を避けて喚き、それから堰をきったように、痛いほど私の舌を吸い込んでいった。息詰まる数十秒——。

やっと唇を離れたので、

「まだ拗ねてるのかい？」

ときくと、

「拗ねるようなこと、どうしてするのよう」

と、ガムシヤラにむしゃぶりつくのであった。ピッタリと吸いついた肌は、ヌメヌメと凝脂をまきちらし、色情を浮かび上らせていた。むら子の手が私をまさぐる。

「あの人がかりじゃないやーよ、私も可愛がって。見せつけたいのよう、ねえったら」

「いいいいいよ、分かったよ。だから意地の悪いこともするんじゃないよ」

「しない——だからいつか改めて私とだけ泊ると約束して……」

「ウン、約束するよ」

「じゃあ、許したげる」

いつの間にか主客は転倒してしまった。

縫れる様にして部屋に戻ると

ベランダに面した椅子に、ヒソと腰を降ろしていた好美が、チラと批難めいた、まなざしを投げてよこした。

折角のフォトプレイのチャンスだというのに、私は未だ、数ポーズとっただけである。

「さあ、続きをやるよ」

と縄をとり上げ、二人を招いて、床柱を背に並べると、一条の黒縄で二人を連縛した。むら子は後手縛り、好美は前手縛り。別の縄で胴体をぐいとしめて、両腿をしっかりと交叉させて縛りあげる。先程、好美を吊り下げた晒布で二人に猿轡をかませ、この動きのないポーズにストロボを光らせる。これ以上どうにも変化のしようのない緊縛に、数枚とり終わってカメラをおくと、二人の前で膝を折り私の左右の両手は伸びていった。等分の戯れ均等割りのいたぶりに、むら子は相も変わらず、猿轡の奥で叫声を発し、好美の眸はしつとりとうるんで、尻尾が悦楽を伝えていた。そこで一旦縄を解き、いつもの斑ら縄をとり出すと、縛り直しにかかる。

二人揃っての股縛り——。同じ様に縛ったつもりなのに、細身の体とやや肥満した体では、縄の使用量が違ってくる。好美は一本の縄で、首縄から股までかけ、胸に使ってピタ

りと結び終わったのに、むら子は途中で足りなくなった。縄を足したが、好美と同じ緊縛では、余分が多くなり、つい、いつものことながら、縄掛けが多くなってしまい、首縄を二重に廻して、背でむすんで締めたら、ぐつと縄が吊り上ってしまい、どうも不細工な縛り方になってしまった。もう一度縛り直すのも億劫なので、その俣坐らせて、前後左右から撮りまくる。編集部からの分譲フォトの依頼もあって、この緊縛に、かなりのフィルムが費消された。

膝立てにして正対させ、むら子と好美の肌が腹部で接触する。

「頬をよせあって——」

私はレスビアンめいたものを考えて叫ぶ。むら子のかたくなに横をむいて、その気になっっている好美の顔にどうしても近づけない。

「やってくれないの？」

「イヤ——」

むら子はきっぱりといい切った。

「どうして、さっき協力するといったじゃないか」

「でも女同志、おかしいもの」

「困った人だな」

好美は、その拗ねたようなむら子の、そむ



けた顔に苦笑を泛かべて顔を近づけた。むら子にとっては、同性のこうした緊縛よりも、いっとき早く、プレイに没入したかったのであろうか。無論、悦楽のプレイは女心を綾に搔き乱して愉しいかも知れない。しかし、わざわざ城崎くんだりまで、二人の女性帯同

して出掛けてきた上は、もっと激しい、過去のどの緊縛プレイよりも数等まさるものを撮りたいと希う私の夢は、次第に遠ざかりつつあるように思えるのであった。

好美は私の命令には忠実である。それは夫の渡部光雄からも、散々いいふくめられ、かつは被虐女性に飼育され性来の従順さが、さして抵抗も感じずに緊縛プレイに融和していたのである。移り気のむら子は、刹那刹那には激しく狂奔し、手に負えなくなるほど乱れに乱れるくせに、こうした単なる緊縛のフォトプレイにはさっぱり気乗薄で、早く終わってしまってくれといわん許りに、果ては不貞腐れたように豹変しているのである。

私がむら子をハント女性の対象として書いた、このハントをも含めての三篇は、三篇とも、その都度むら子のむら気から、いつも性格が違っているように感じる。同一人物であり乍ら、川路叢子のように、その時、その時によって、受ける感覚の違う女性も、珍しいことであった。

今のむら子は、好美の対抗馬である。それだけに、むら子の我侔な一面が顔をのぞかせて、ともすれば反発的になりたがっていた。

むら子の伸展させた膝の上に、好美を跨が

らせようとしたが、これも彼女の拒否によって果せなかった。私は自分の思うようなものが撮れぬ焦燥に、いつしかイライラし始めてくる。何とか両膝立てたものの組みついたという感じとはおよそ程遠いポーズで、詮方なく妥協してカメラに納める。二人の女性を対象とした、数々の想像のSMプレイは、これといったきわどいポーズもとれぬ俚、次々と破れていった。むら子にとっては、しかしこの程度が精一杯の妥協なのではあるまいか。

柱を中心に、相対して縛り、二人の腿に縄をかけてみたものの、先刻とよく似たポーズに過ぎなかった。二人の人妻の、相反する心を忖度しながら、緊縛フォトを撮るのは、誠に芯が疲れる仕事である。もう半ば投出したくなつたものの、やはり又とないチャンスという気持が、何とか私のSの心をかり立てていた。むら子は詮方なく縛られてつきあっているといった態度だった、好美にしても、むら子の露骨な反発に流石に白けて、もう終わらないかしらといった表情を泛かべていた。

この重苦しい雰囲気好転させるには、どうすればいいのだろうか。私はとつおいつ思案したが、結局はむら子の御気嫌をとるより仕方がないという結論に達した。この際、好

美を少し虐めて、むら子を厚遇することが、一番手っとり早いように思えた。要するにむら子は欲求不満なのである。私の心の比重が好美の方に傾いていることを敏感な女心でさと、それがむら子にとっては、我慢ならぬ屈辱のように思えたのであろう。

縄をとくと、好美がチラッと、はじらいをうかべてトイレへたつた。私はむら子の耳許に甘く囁く。

「渡部さんがいてはどうも話にくいから、あの人を縛った俚ここへ放っておいて、二人



で屋上のベランダへでも出てみようか」

「ウン、うれしいわ、そうしましょう」

パツと生気を蘇らせて、むら子は男心を蕩かすような、まなざしで私を、みあげる。これが若し、むら子と好美が反対の立場だったなら、好美は恐らく、むら子に気を兼ねて、逡巡していたことだろう。むら子は私と二人になりたがっていた。人前では照れやで、羞恥心の強い彼女にとって、好美の存在はたまらなくユーウツだったのかも知れない。

「もう一度二人を縛って、その時、あんたの縄だけとくからね。君は積極的に何もいわない方がいいよ」

むら子は嬉しそうにコックリとうなずく。そんな陰謀を知らぬ好美は、肩をすくめて戻ってきた。

同じ斑ら縄で、かなり強烈に二人を縛り上げ、背中合わせに坐らせたり、互いの頭を相反する方向に倒して転ばせたり俯伏せにさせたりして、相当の枚数を撮りまくる。好美はいざしらず、むら子は無言で、私の云うが俚によく協力するようになった。

仰向けになった好美に、重いむら子の体を徐々にのせてゆく。白い肌と肌がピ



ツタリと密着し、重さに耐えかねて、下敷きになった好美は思わず呻き声を洩らした。重ね餅になった二人の脚下に回り、一杯に四本の足を広げてみる。タブーの図がそこに開陳され、唾をのみ込んでシャッターをきったが所詮は発表出来ないシロモノである。

手を添えてごろりと回転させ、むら子が下になり好美の体を押し上げる。上下の女体が逆になり、ふくよかなむら子の腹上で、好美は軽く喘いでいた。カメラをおいて、ドッキンクした女体の臀部に、七十五キロの体をそっとおろすと、腰をくねらせて、ぐいぐいと

押しつぶし、揉みしだく。重圧にたえかねる呻きが交錯して、二人は私の重圧の激しくなるにつれて、愛欲の叫びを挙げた。いつしか私の心も急激に昂揚してゆく。

私が腰を上げると同時に、好美の裸身が、むら子の体から転がり落ちた。上気した頬に猥なかげらいが走っていた。

重圧から解放されて、むら子はハアハアと大きく肩で息をし、急に縄目の痛みを覚えたのか、しきりに身悶えし、後手の位置をラクにしようとうごめいていた。

うごめくむら子に近より、黙って縄をといてゆく。くつきりと縄目の痕が桃色に染まった肌を軽く撫で、浴衣を投げかけ目顔で合図する。先に部屋を出てゆくと、指先で外を指し、私はゆっくりと浴衣に袖を通し始めた。心得たむら子がそそくさと出ていったあと、縛られて転がる好美にのしかかるようにして抱きしめ、私は無言で強く唇を吸った。熱い吐息を吹きかけて、

「この部屋に二人ともいちゃまずいんだよ。肌で感じて拗ねているんだ。うまくいくるめてくるから、しばらく待っててね」

「ハイ、どうぞ——あたくし、こうして縛られた儘で？」

「解いてあげようか」

「どちらでも構いません、辻村さんのお好きなように」

「こうしておこう」

パイプを見せ、しっかり太腿を縛り合わせ乳房に唇を当てて、噛むように愛撫したあと「鍵をかけてゆくよ——」

と立ち上る。俄かに紅潮し始めた頬が微かに慄え、好美は熱いまなざしで、じっと私を凝視して唇を噛んだ。

部屋の鍵をぶら下げて廊下に出ると、自動エレベーターの前で、むら子は私を待ちかねていた。

「どうしていたの？」

「縄がゆるんでいたから縛り直してきたよ」

「何かあったでしょう」

「早く戻ってくれて——。彼女はM女性だから、じっとあおして独り縛られて転がっているのが好きなんだよ。君なら辛抱出来ないだろうね」

「勿論だわ。縄を喰い切って、さっさと独りで帰ってやる」

「解けないように縛ってあったら？」

「戻ってきたら喰いついてやるわ」

「激しいんだね。とも角、屋上のベランダへ出てみよう。泊り客も少ないし、きつと誰もいないだろう」

絡んできたむら子の手をとって、階段を昇る。ヒソとして音もなく、暗いベランダは闇の中に沈んでいた。彼方に、温泉街に蜷集する、バー、スタンド、ストリップ小屋、土産店などのネオンが、五彩にチラチラと小さく輝いていた。

「ああ、とってもいい気持——」

むら子は、闇に大きく手を広げてノビをした。屈託していた心が晴々とはれて、解放されたような気持になったのであろう。

「誰も上ってこないかしら？」

「多分ね」

「今、何時？」

「九時半を一寸、廻った処だ」

「ハダカになっちゃおうかしら」

「いいよ」

「辻村さんもぬいで——」

甘えた声でいうと、さっと浴衣をぬぎ捨てる。半分の不安もあったが、えーい、ままよと私も越中褌一本になった。ぶつかるような勢いで、私の胸に飛びこみ

「抱いてえ、きつく抱いてえ。」

むら子、淋しかったのよう」

と、胸に顔をこすりつけ喘ぎながら見上げて唇をつき出す。裸身を抱き上げて建物の蔭の暗闇に忍び、降るような満点の星空の下で、しばし私達は甘い抱擁にひたっていた。

ホテルの前を流れる小川のせせらぎと、黒々と聳える背後の山並の、微風吹きわたる音のみが、抱擁とくちづけのハーモニーのように静かに奏でていた。

「三人で一緒に寝るの？」

「そうだよ」

「いやだなあ——」

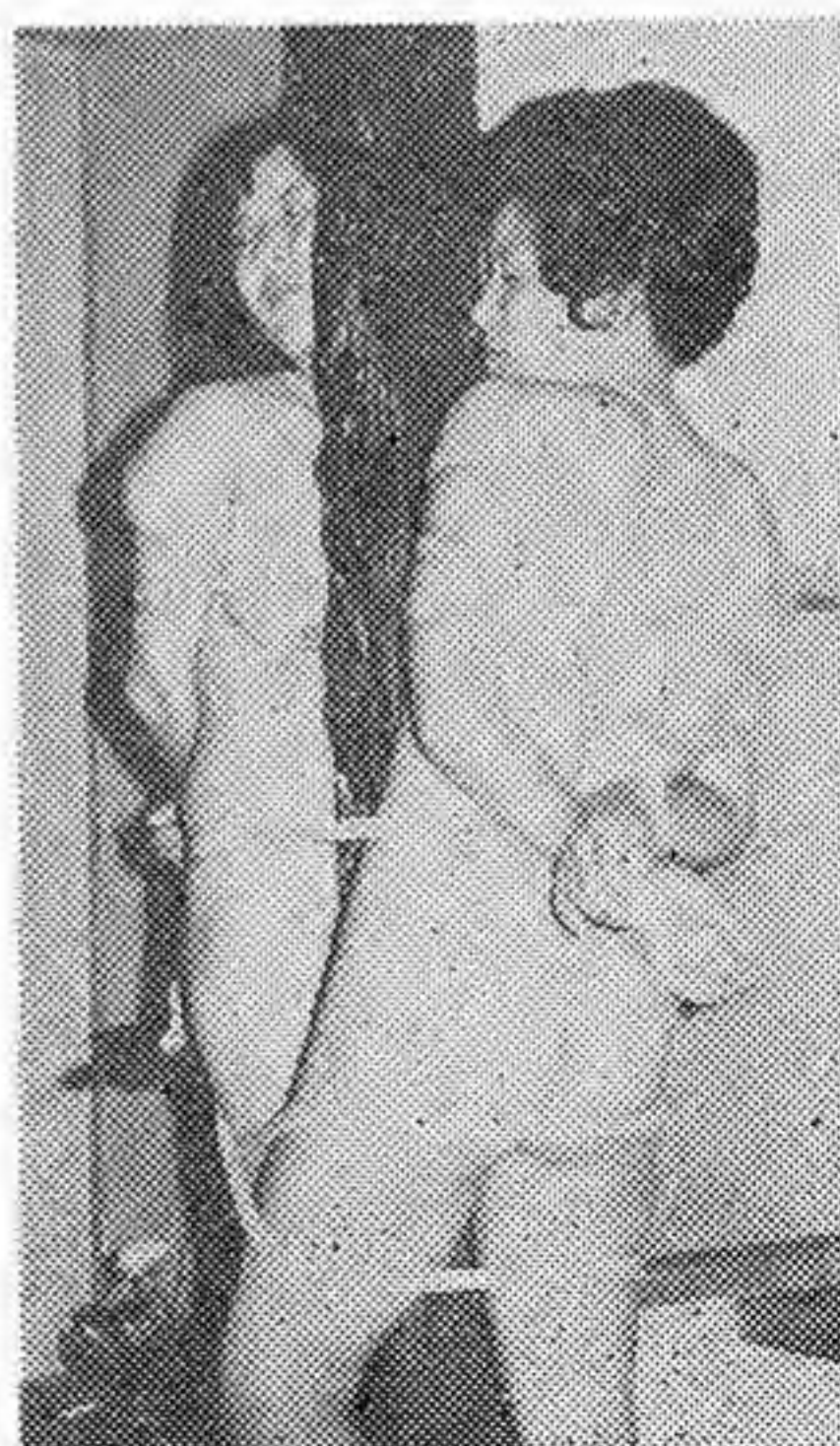
「どうして」

「わかってるじゃないの」

「いいじゃないか、若い男性なら別だけど、私なんか一度でダウンだよ、いくら感情だけがハッスルしても、どうにもならないさ」

「情ないことを仰有るのネ、でも許してあげる。私のために、そのたった一度のチャンスをとっておいてね」

むら子は狂おしく、しがみついていた。



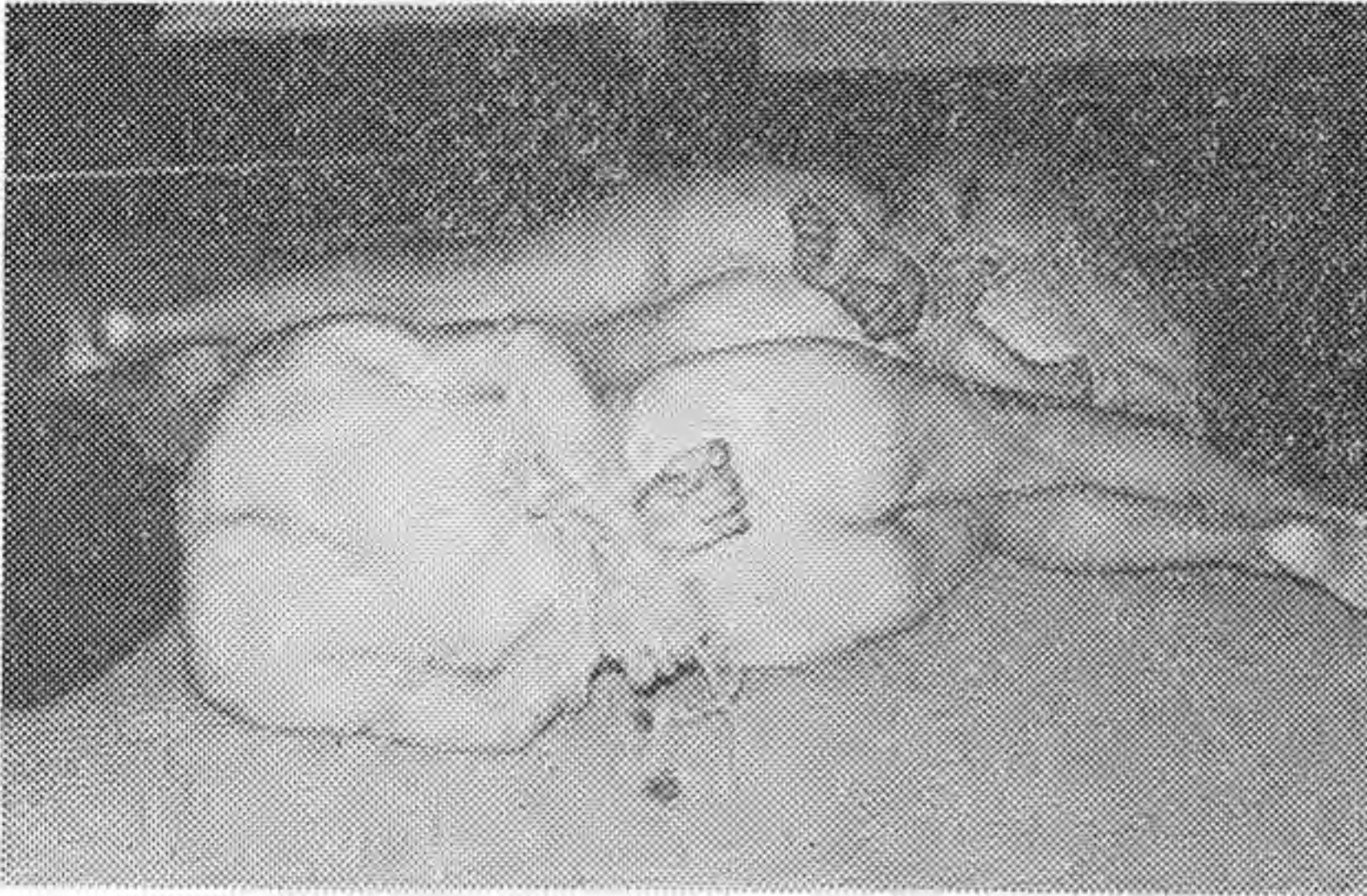
「わかった。その代わり私の方にも条件があるよ。一つは、もう拗ねないこと。いいね」
「最初から拗ねてなんかいないわ。淋しかっただけ」

「それからもう一つ。渡部夫人もプレイメイトだ、仲良くハレンチにゆこうじゃないか。あの人もそれを求めている。心は二つ、身は一つっていうところだから、わかってほしいんだよ」

「あの人ともなさるの？」

「そりゃ、時と場合によってはね」

「辻村さんて、本当に悪党だわ。悪い人……あたし、毎月カメラ・ハントよんで、そのこと知ってるくせに、やはり事実には直面するといやーな気持になるのよ。辻村さんはこんな



人と知っていながら何に惹かれるのか分からないんだけど、来てしまうのね。悪党のために体をモミクチャにされに、わざわざ。自分で自分の心が掴めないんだわ」

「プレイに理窟は抜きだよ。この一夜を思い切り愉しく過ごせばいいじゃないか。あっさ

りオサラバして、気が向けば又会えればいい。その刹那だけ、身体ごとぶつかって、思い切り燃え上げればいいんだよ」

「勝手な理窟ね」

「そう、勝手だね。でも現実はどうなっているじゃないか。今頃、渡部夫人は被虐の快楽に悶えて、独り輾転反側しているかも知れない。それもまたかたの快楽のヒトコマだよ。

あの人はすべてに内攻的で謙虚な人なんだ。

それにひきかえ、あんたは外見は無口で人見知りし、とっつき難いようにみえる癖、一旦ベールを剥ぎとると、すべての思慮分別をなくし、人の思惑も想念も無視して、ひたすらに爆発的に、トコトンまで燃えたぎる人だ。

物凄く情熱的なんだね。正にズバリ、あっと驚く豹変ぶりだよ。好美さんは、激しく燃えながら、いつも理性が何処かでそれを制禦しようとして自分を押えようとしている。男性にとって、そうした奥床しさがいいかトコトンまで燃えたぎる人がいいか、それは各人の好みで何ともいえない。謂わば、火と水のような性格の二人が、私という男を挟んで対立すれば、心の衝突のあることは当然だったのだよ。でも火には火のよさがあり、水には水のよさがある。私は老いたるプレーボーイ、

そのどちらの性格も好きなんだ。それだけに辛い立場なんだよ」

「分かりましたわ、確かにおっしゃる通りのようよ。でも私、そうだった時の自分をどうしようもないの。夢中になると、もうどうなってもいいようになってしまうの。渡部さんは毎日、旦那さんと一緒でしょう。でも私は主人とは月に僅か二日か三日しか一緒にいる日がないのよ。私の魔性のような肉体をどう処理すればいいというのよ」

「私の責任だろうか」

「そう、辻村さんには関係ないことね。いいわ、出来るだけ我慢します。でもあまり見せつけないでね。でないと私、狂っちまうかも知れなくてよ」

「じゃあ、そろそろ戻ろうよ」

「もう少しいて——。辻村さんの、唯一度のチャンスをここで……。いけないかしら」

むら子の五指は妖しくくねりながら、白蛇のようにムチムチと絡みついてきた。

「こんなところで？」

「ロマンチックじゃないの」

「あんたはいいけど、私は惜しい。若し誰か上ってくればどうするのだよ」

「来やしないわ」

「分からないよ」

そっとぬめつく女体を離すと、女はいきなり私の手をとって、皓い歯を顫わせて、欲望の虜になっていった。

ほんの十分ばかりのつもりが、三十分近くも経ってしまい、一足先に私は急いで部屋に戻った。微かな振動音を耳にしつつ、部屋の唐紙を開くと、好美は恨めしげな視線をサッと投げてよこし、眼を伏せた。すっかり紅潮した顔に、軽く汗すら泛かべ、恍惚の境地を逍遥したらしく、淡いくまが、眼のふちをいろどっていた。急いで縄をとく。深々と喰い込んだ縄痕をいとおしげに撫でて、沈然をつづける彼女は一言も詰問しなかった。

登音が近づき、媚を含んだむら子の眼が、私の肩越しに好美の様子を覗き視た。

好美は微かに睫毛を震わせて、無言の反発を続けている。

宝石を鏤ばめたような星空の下で、甘い抱擁をむら子と交していた時、好美は、独り孤独に怯えて、しかも冷たい器械の責めを拒めもせず、怨み心で、蒼褪める心とは反対に、体のみ熱く火照らしていたことであろう。

女同志の憐愍にかられてか、むら子は流石に気の毒げな表情で立ち竦んでいた。それは

若し、自分が好美の立場であったなら、どうであつたろうか、という反省にもつながっているようであつた。

「あたし、先程行かなかったから、もう一度水車風呂で温まってきます。一人でいきますわ」

最後は、はっきりと付け加えて、むら子はタオルを握ると、そそくさと出ていった。自分のみ、いい目をしたというひけ目から、何ともなく、いたたまれなかったのであろう。

「あおう、ちょっと辻村さん」

とドアのところで私を呼ぶ。声につられてむら子に近づくと、彼女は声をひそめ、

「何だか悪いことしたようね、やさしく慰めてあげてね」

それはプレイを通じて知り合った女性の、心からのいたわりの言葉であつた。私はうなずくと引き返す。むら子はわざと、私と好美を二人にしようと考えていたに違いない。それは自分に与えられた自由のひとつきを、好美にも与えてやりたいという優しい女心であつた。三十分の好美の犠牲によって私の意図する思惑は見事に当たった。もう二人はさして心でニラみ合うこともあるまい。それがこの場合、何よりの収穫であつた。



「御免々々、随分苦しかったでしょう」

黙って、好美は首を振る。切々とした女心がそれを否定して、不満も口に出さず、そつと首をもたげて、何かいいたげに口籠っていた。

「彼女、自分からいい出して、風呂へ行ったでしょう。あれでいいんだよ、あなたにも二人だけの時間をつくろうとしたんですよ」

「長かったですわ——」

好美はポツリと吐き出すようにいった。見上げる眸が、熾惑的にキラリと輝く。そっと裸身を膝に抱きかかえてのせると、彼女は遠慮がちに華奢な体をよせてきた。

「気にならない？ 御主人や子供さんが」

「無かし、いろいろと想像して眠れないと思います」

「今日のプレイのことも、今夜これからあることも、すべて告白するの？」

「させられるでしょうね。それを愉しみにしているようですから……」

「余りヘンなことは出来ないね」

「いいんです」

鸚鵡返しにいつて、好美はポツと耳朶を染めた。

「辻村さんのなさることに、絶対逆らってはいけなと主人にいわれました」

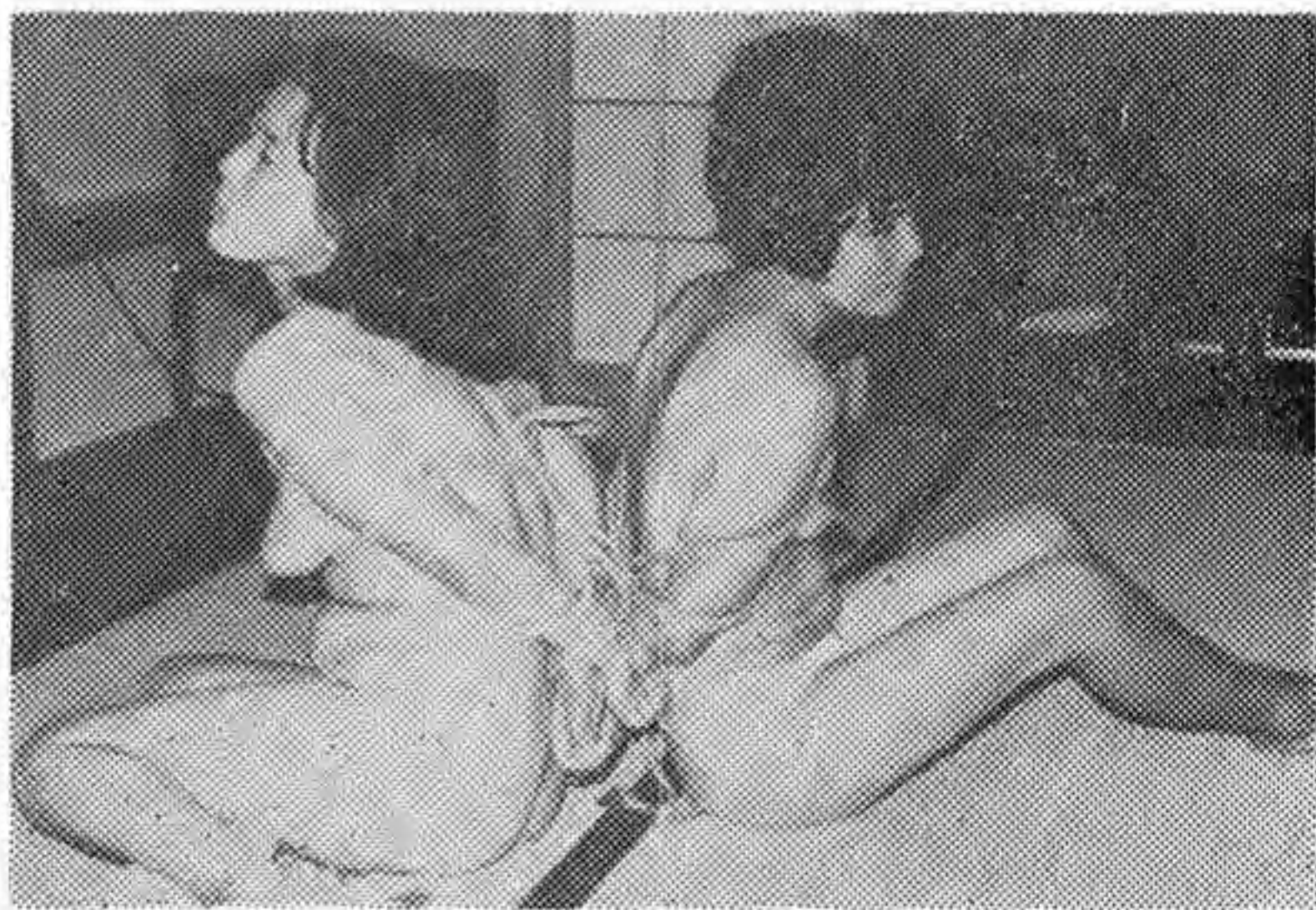
「そんなに買被られると、かえって辛い」

「本当にいいんです。これからまだまだなさいますの？」

「心はやりたい気持ですが、体の方が何だか疲れてしまっ」

「あの方、しばらくは戻ってこないのでしょう」

「二、三十分ぐらいはネ」



好美は私の膝からスツと立ち上ると唐紙の境の壁ぎわに歩みより、パチ、パチと部屋のスイッチを消してしまった。瞬間、部屋に暗黒が大きいのかかり、光に馴れた眼は黒白も分からぬ盲目を強制された。手探りの女が私の肩を押えるとドサリと倒れ込んだ。

「明るい、私、何も積極的に出来ないの」

「す。どうぞ私を、好きなようにして下さい」
激しく悶えて、好美は犇としがみついていた。力に押されてどさりとうしろに倒れ、輾転として、二人の体は縫れた。激情が私の体を走り廻った。

闇は女を大胆にする。それは謙虚な好美の残された最後の手段のようであった。

「ああ、あたくし、嬉しい。思い切り虐めて下さい。力限り縛って下さい。お願い——」
気圧されて、たじたじとなり乍ら、好美の女心の奥に潜んでいた激しさを、今、私はありありと知った。

「針も持ってきましたのよ、チクチクさして下さいね。ローソク責めにも馴れましてよ、何をなさってもいいの。好きな様にして……」
昂ぶる心を押えようもなく、好美はうわ言のようにいつづけて、私の手をもどかしげに待っていた。

「むら子の、みている前でもいいの」
「いいんです。あの人の前で、うんと虐めて下さい」

「じゃあ、嬉しかったら、もっと声を立てるのだよ、あの人のように」

「立てます——仰有る通り何でもします。ああ、私……だから、だから……」

「主人にいうのでしょ」

「すべていいいます。構わないんです。許してくれているのです。だから……可愛がって」

闇に馴れた眼に仄のり浮かび上る好美夫人の白い肌は、ハッと息を嚙むほど妖艶であった。私の年令として、たった一度だけ与えられたチャンスも、私はこの慌しい一刹那に、抛擲しようと腹をきめた。人妻に対する一線を理性で辛うじて保っていたものの、官能の痺れに破れて、私はみずから、その陥穽におちこんでいった。

両手に花のプレイの夜もすがら

何事もなかったように、明るい部屋で私と好美は雑談を交していた。うばたまの闇の中で、ほんの数分前まで、狂おしくのたうち廻ったのが、まるで一場の性夢のようにすら思われる物静かさである。好美は折角セットしたての髪が、歪りとりように握った私の手でくずれたのを気にするように、そっと両手で形を整えていた。

「疲れたよ」

ポツンというと

「御免なさい、私のせいですわ」

眼尻に微かな淫靡なかげをおとして、好美はヒソと顔を綻ばせた。彼女は、私とむら子

の三十分の空白が、何でもなかったことを、私の肉体で知って、女性のみが味わう優越感を覚えていた。昔から一盗二婢という言葉があるが、私は主人の眼をかすめて盗みはしない。受けて立ったような驚きと共に、つくづく、世の中変わったものだ、くすぐったいような感慨に耽っていたのである。

この闇黒の中での出来事のすべてを好美は主人に細大洩らさず報告するといっていた。

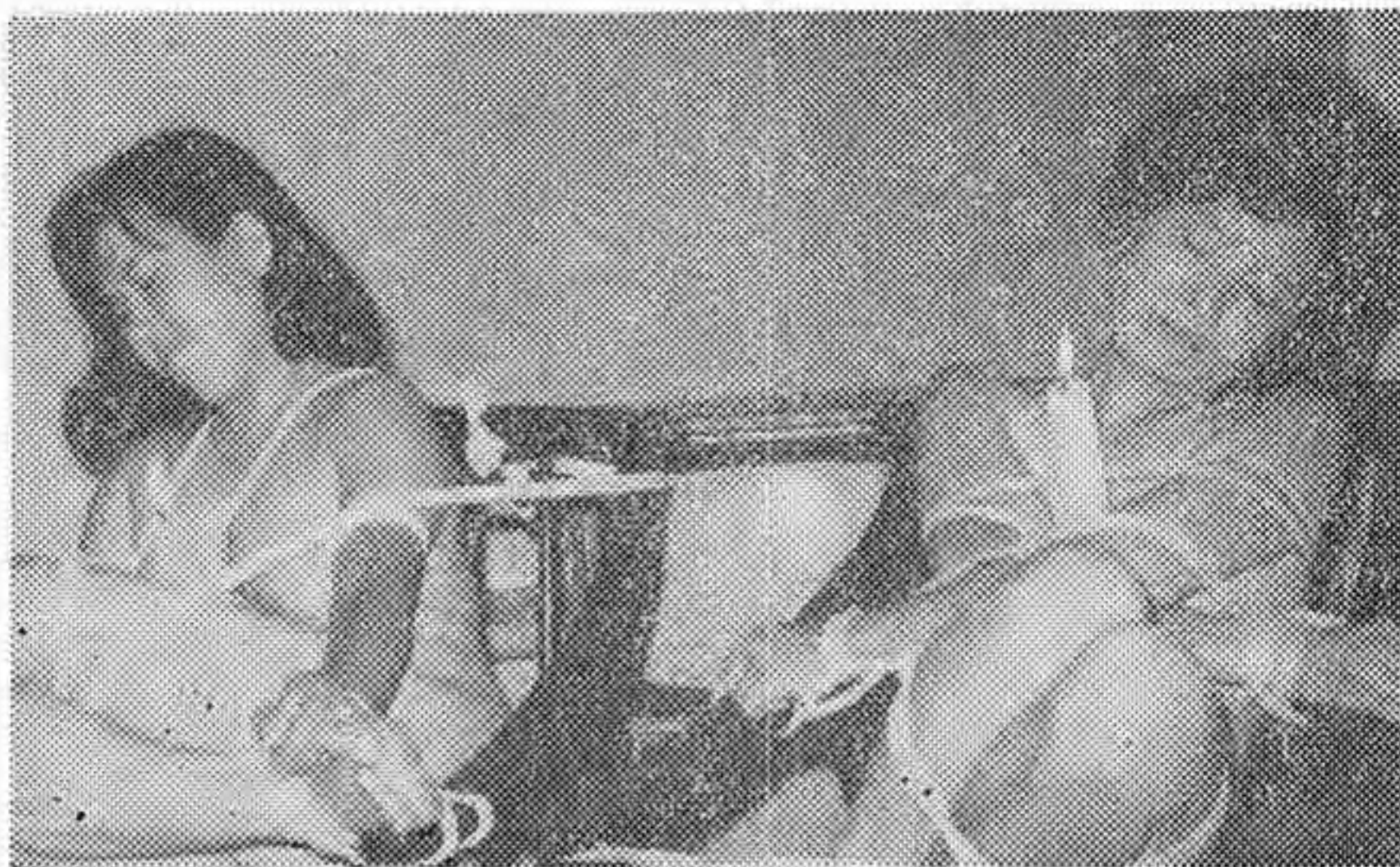


これは正に驚き以外の何ものでもない。妻の報告によって、糠尿の彼は発奮し、プレイはいよいよエキサイトするといふのであった。世にも不思議な物語が、現代では堂々と罷り通る時代である。私にしろ、夫婦交換プレイの粹ごとなら、家内も納得の上で、気が合えば大いにその気になっているが、妻一人を他の男性のもとへやるほどの勇氣はやはりなかった。夫婦の相互信頼の上に立って、渡部夫妻は、過去の封建的なルールを見事に打破しているようであった。何年先、何十年先にはこうした行為も、或いは日常茶飯事になるかも知れない。しかし今の段階では、やはり驚異に値する行為のように思われた。川路叢子は夫不在の欲求不満で、プレイのよろめきであって、そこにはおのずから家庭の事情が違っていた。

そのむら子が、さりげなく戻ってきた。チラリと私達に眼を走らせたが、暗黒の敬虔な行事には、気がつかないようであった。

「ああ気持ちよかった。広いお風呂に、あたし一人なのよ、何だか怖いみたい。このホテル空いてて本当によかったわね」

煙草を啜えて、紫煙を吐きながら、むら子は火照った顔を撫でている。



「辻村さん、まだ撮影なさる？」

と、むら子。

「ウン、何だか非道く疲れた。もうどちらでもいい気持」

キラッと怪訝そうに、むら子の眼が光る。

女のカンで何かあったと感づいたのであろうか。私はあわてて言葉を足す。

「どうも運転疲れが出たらしい。といって、この素晴らしい夜をムザムザ過ごすのも惜しいし、今も好美さんに話していたのだが、どちらがMが強いのか、ひとつ我慢くらべをやってみようかと思うんだよ」

「どんなことをするの？」

「体にローソクを立てて、どちらが先にネをあげるか試してみたいのさ。被虐度のテストだよ」

むら子はチラッと眉を顰めて、好美と顔を見合わせていたが、

「いいわ、やりましょう。こうなったら、もう何でもやっちゃいますわよ」

半ば反発するようにいい切って、

「渡部さんもいい？」

と問いかける。好美は軽くうなずいた。云い出した手前、私は重い体にムチ打って、やつらさと立ち上ると、二脚の椅子を床の間の前に据えて、二人を坐らせる。

好美——むら子と前手に縛って、うるさげにカメラをとり上げる。正直いって、もうフオトには少々飽いていた。どちらでもよかったが、これもWプレイの連縛の記録とシャッ

ターをきる。最早、私のカメラは情性で動いているようであった。

黒い袋から、二本の太いローソクをとり出すと、好美には両腕の交叉した個所へ——。むら子には組み合わせた太腿へ突き立てた。倒れないのを確かめて点火する。好美にくらべ、むら子のローソクは二センチばかり、短い。蠟芯の燃える匂いが徐々に部屋にこもり出す。チリチリと芯がゆらめいて燃え上り、やがて蠟涙が溜まって、ツツウとローソクを這って肌へと流れ始める。

どちらもやめてとはいわない。融和を願いながら、迂闊にも私のやる行為は、又ぞろ無意識のうちに、反発と敵愾心を燃やさせていたようである。むら子は緊張に蒼褪め、ローソク責めに馴れている好美は、憮然として燃えて行く蠟芯を、み守っていた。むら子に怯えが走る。ここら辺りが頃合と、私は近寄りフッフツとローソクを吹き消して取り去る。ホッとした軽い安堵が、むら子の表情をかすめた。

渡部光雄に、連日のように飼育されている好美の方が、現在の段階では、被虐度は強かったようである。しかしそれは皮相の浅い考察で、むら子が一たび、欲望の虜になり果て

た時、強烈なM性を発揮することを、私は過去の幾度かの経験から、よく知っていた。快感につながるSMのプレイによって、同様の行為が、快楽にもなれば苦痛にもなるものである。一概に、今のローソク責めをもって、女心を云々することは出来ない筈であった。

二人の人妻を、自由にあやつれる欲びに、一旦は、好美との暗黒の戯れで消え去ったかに見えた、黒い嗜虐の欲望が、逸早くも甦ってきて、私にとっては、思いもかけぬ喜びであった。この年令層で、一度のチャンスとは誰もきめてはいないし、何の規制もないにもかかわらず、私自身、勝手にそうきめ込んでいただけに、再び湧きあがる、逞しい気魄の意外さに、私自身が一番、駭いている始末であった。

むら子と好美の下半身の縄を素早く解き、改めて極端な開股位に犇々と縛り直し、むら子の左脚と好美の右脚を、椅子の肘置きを挟んで連縛する。辺りの静寂を打破る激しい叫声を懼れて猿轡を嵌めると、二本のローソクに点火する。等しい高さから、同時にローソクを傾ける。その落下点の皮膚は鋭敏であった。

ツツウと走る蠟滴に猿轡の奥からけたた

ましい叫び声を挙げたのは、むら子である。好美は眉を蹙めて必死にこらえ、呻き声すら洩らさない。艶やかな地肌がみるみる白い蠟雨に掻き消されてゆく。その行為は、弥が上にも、私の嗜虐の血をかき立てていった。

むら子の眼尻に涙が浮き上り、苦痛をこらえるまなざしは、私に中止を訴えていた。

ローソクを吹き消し、好美の斑々とかたまつた蠟骸をはがしてゆくと、彼女の顔にありありと陶酔のいろが泛かび上った。ローソク責めによって、好美は激しく心を昂ぶらせて椅子のシートに残骸が、醜くこぼれおちている。縛った縄をとき、彼女に蠟骸の後始末を任せて、むら子のそれを剥がしてゆく。彼女は時折軽く呻いて、裸身をねじらせた。好美にくらべ、むら子の悦虐が左程でないことを慙懣無礼に確かめ、そのM感度のよさは、これも好美の方が上であった。好美は嗜虐の行為そのものにも激しい愉悅をおぼえることを知り、むら子は、嗜虐行為のあとに訪れる本番をあからさまに期待していた。嗜虐が、性の悦楽に対し、或る程度エンジヨ

イすることによって、むら子はSMのプレイを歓迎しているということであろうか。

時計をみると、既に十一時半に近い。これが最後の緊縛のつもりで、全裸の二人を寝かせて、足首を握ってぐいと彎曲させる。更に一人、同様にして、倒れぬよう、腰と腰を合わせて、二人の手を連縛し、背から腿にかけて縄でしめ、足首を縛り合わせた。

白々とした、二人の双臀が屹立して、贅沢この上もない露出ポーズが現出した。

二基の人間燭台——。その夢は今叶えられようとしている。めらめらと蠟芯をゆらめか



せて、二本のローソクが、微妙に揺れて、激しく私の官能をかき立てる。

うんうんと苦悶を洩らす女体の豊かな広々とした臀部に、平手打ちが交互に炸裂する。みるみる烙印される掌の薄桃が、二つ、三つと柔肌に、うすくれないの紅葉をちらしてゆく。嗜虐の陶醉境を逍遙する私の手許に、二本のローソクが握られている。

焰を華麗な女体に近づけ、魂切る悲鳴の断続に、嗜虐の血は激しく浪打つ。キョトンと眼をむく黒ん坊人形のバイブ、子守人形の微笑むバイブが、のたうつ柔肌に戯弄され、流動音を残して黒ん坊と子守は、不躰けに体を顛わせる。

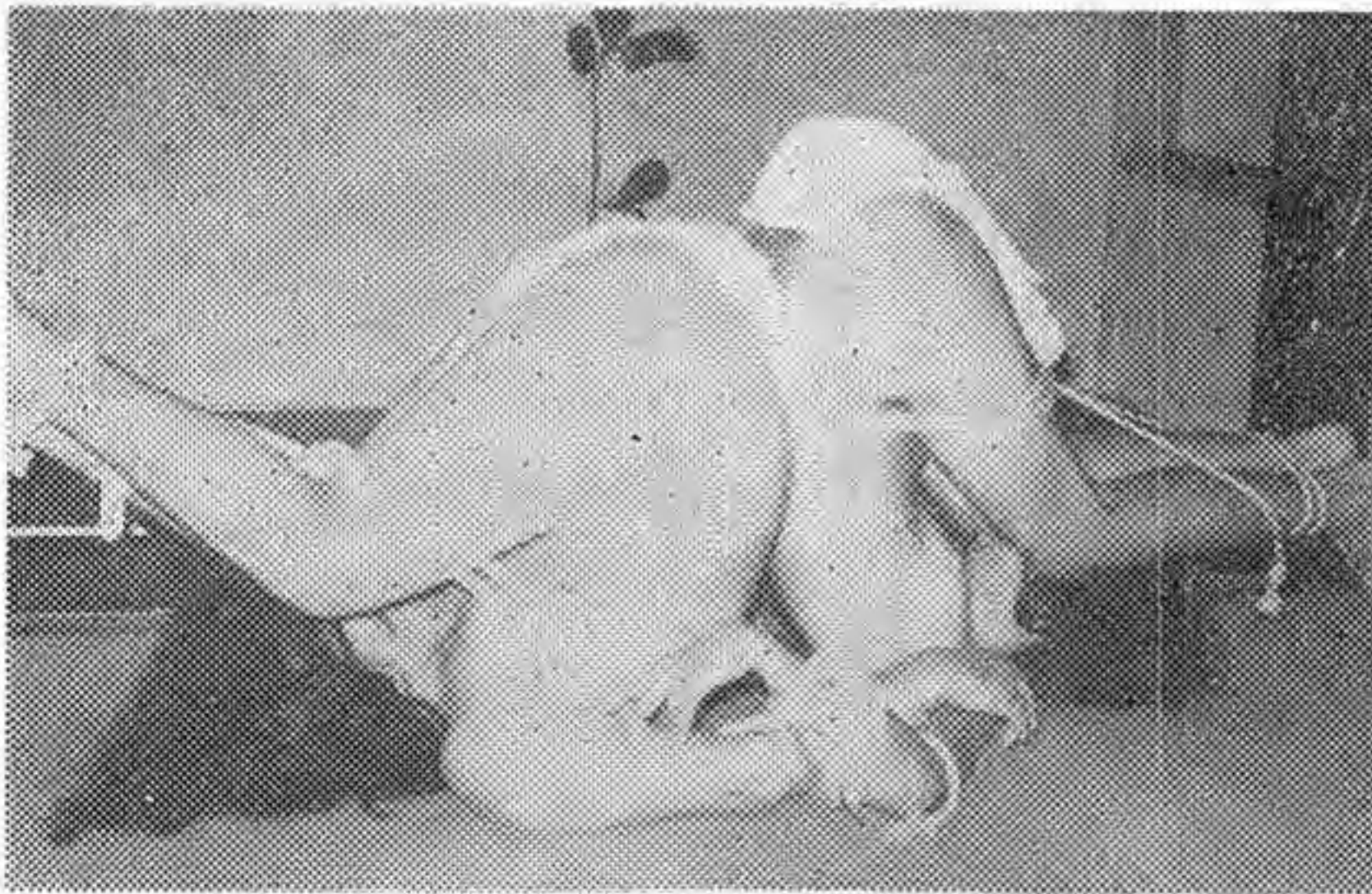
絢爛たる女体は今、燃えに燃えさかり、懣惑の美酒に酔い痴れた人妻二人は、歎歎と涕泣の愛欲の渦に溺れて、叫喚はけたたましく夜のしじまを破っていった。そっと近づけたソニーのカセットテープ・メモに、永久に二人の声を残したことを、この人妻二人は果して気付いたであろうか――。

太陽は黄色く、行きはヨイヨイ

帰りはシンドイの顛末

くたくたになって、窓際から、好美、私、むら子の順で、川の字になって床についたの

が、午前零時――。疲れているくせに誰も寝つかれず、ウトウトとし始めたのが午前二時頃とあっては明日の車の運転が心配である。灯を消した暗闇の中で、夢うつつに私の右側に這い寄って、ヒタと寄り添ったのは、むら子であった筈である。



彼女の求める切ない吐息、うごめく手指にも、私の反応は最早、痙攣していた。兎も角眠かった。怒ったように、くるりと背を向けたのを微かにおぼえていても、私にはもうどうしようもない。

深い深い眠りの淵から、微かな会話が耳に入って、そっと眼を開くと、もう朝の光がさし込んでいた。会話は、真中の私を隔てた女二人であった。

「お風呂へ一緒にゆきませんか？」と誘っているのは好美の声。

「いいわ、あなた行っていらっしゃいよ。あたし、すぐあとで行きますから」

むら子は寝そべった儘、物懶げに答えている。好美は起き上った気配である。そっと布団の裾を踏んで外へと出ていった。

「何時なの？」

「あら、起きたのね。未だ午前七時よ」

「二人とも、いやに早く目がさめたんだね」

「ウトウトしただけ。昂奮したのかチツとも眠れないの」

むら子は二本の煙草に火をつけると、一本を私の口に、啜えさせてくれた。軽く頬をつねって、

「約束守らなかったでしょ、何度もそっと起こしているのに、グウグウ蟻のようにねむってしまつて——キラリ」

私はじっと眼をつむって、紫煙を深々と吸い込みながら苦笑する。

むら子は急に長い煙草を、指先でねじりつぶすと、頭から私の足許に潜り込んだ。唇が這い始める。

「おい、よせよ」

と、あわててとめるが、布団をかぶっている耳には聞こえないらしいのか、きこえても敢えて続けるつもりなのか、激しく布団に浪を打たせる。必死に挑むいじらしい行為に、私の心は、いつしか昂ぶりはじめる。

あわただしい早朝の行事のあと、私はぐったりして長々と伸びていた。むら子にとっても決して満足すべき状態ではなかった。にも

——ご投稿下さる方へお願い——

各種原稿募集に対しての応募は歓迎致しますが、作品に住所、氏名を書かずに送付されると、稿料送呈その他で整理がつかねる場合が生じますので、投稿作品には必ず一作（イメーヅ画も）毎に、住所、氏名、ペンネーム附記を、原稿用紙使用、縦書きと共にお願い致します。

かわらず、はけ口をみつけて女は晴々とした顔を、私の傍らに横たえていた。

「お風呂に行かない？ 辻村さんの体全部、洗ったげる」

「ウン、しかしシンドイな」

「さあさあ、元気を出して——。あの人といれ変わるころよ」

「じゃあ、ゆくとするか」

立ち上がるとユラリとゆらめき、腰がふらつく。折から昇り始めた太陽が、やけに眩しい。

午前九時——私達は見送りの女中に照れ乍ら出発する。

微かに響く、聞き覚えある鈴の音——。ハッとして好美の顔をまじまじみつめると、ポツと赤くなった。

軽くその肩をたたいて、私は車のドアに手をかけようとした。

「ちよっと……」

むら子が背後から声をかけてくる。

「うん？」

振り向くと、むら子が呼びかけたのは私へではなく、私のすぐ後に居た好美夫人に対してのものだったらしい。

何か？ と問いかける風情の好美夫人に向

かい合ったむら子が、いきなり夫人の肩をちよいと押した。一步、好美夫人がよろけるように退がる。とたんに、かすかな鈴の音。

「やっぱりそうでしたのね」

むら子は、確認したかったらしい。

「フッフッフ」

ひやかすような含み笑いと一緒に、羞かしそうな好美のうつむいた顔をのぞきこむと、

「ジャンケンしましょう。ね、公平に」

私の傍らに坐るための、むら子の提案である。それもいいだろう。

淑かな、好美夫人——。

奔放な、むら子夫人——。

どちらでもいい。一夜に二人の人妻の肌を知った果報な男は、ぼんやりとかすむ頭を振り振りエンジンをかけていた。

黄色い太陽は次第に赤く見え始め、今日も又、早秋の風爽やかな、暑さの残る上天気である。ジャンケンで勝った好美を前にのせ、むら子はシートから体をのり出して「鈴が鳴るわね、貴女の旦那さんにつくってもらおうかしら」と微妙に笑った。

——（おわり）——



マゾ女の妄想 深田 初美

愛読者の皆様、いかがお過ごしですか。本誌には時々「見せたい見られたい」という女性の気持を素直に訴えていらっしゃる方々が多く見受けられ、私も意を強くしております。

と、申しますのは、私は露出狂かしらと悲しくなるほど異常な露出欲に悩むことが多いからです。

ヌードダンサーや、せめてトルコ娘にでもなれたら、幾分でも気が安まるかも知れませんが、到底家の事情が許しません。

私がこのようになってしまったのは、半年程前に公園のお手洗いで覗かれていることを覚った時に全身を貫くような興奮を覚えて以来で、それ以後も、その隙間だらけの板囲いのトイレ通いをしながら、恥かしい期待を持ちました。

最近では、それだけでは飽き足らないで、超ミニのスカートのノパンでハイキングに行き、外からまる見えのこわれかけた汲取式の便所で、わざと覗かれ易い場所を選んで入ったりしました。

このような私ですから、十月号の里子様や十一月号の守子様のお気持も十分に理解できましたが、私もお二人が望んでいらっしゃるのと同様に、縛られた上で机の上に丸裸の体を曝して、SMマニアの皆様にも、よってたかつて調教されたら、どんなに素晴らしいだろうかと思っております。

仰向けに寝かされて脚を両方とも高々とあげ、お尻の下に男ものの枕を挿しこまれ、少々脚を左右に開かされた上、施術されるのです。私の表情の変化を求めて一人

の男が顔に向けて8ミリの焦点を合わせ、私の興奮度を調べる為に女性の一人が私の脈搏を計り、本日の立役者が一人、私の足元にしゃがみ込みます。

机の端にお尻がゆくように仰臥させられていますので、どんな施術でも容易に行なわれるのです。

こんなことを想像しております

私は、中河恵子様と同様に本誌に連載中の八花と蛇Vの熱心な愛読者なのです。私が初めて、この小説を読みましたのは増刊号でございました。中編にあたる分でしたが、グラビアも挿絵もありませんでしたので、題から想像して普通のヤクザ物だと考え、平気で本屋さんで買い求めました。

買って帰って退屈しのぎに読んでみますと、内容は深窓の令夫人や美しいお嬢さんが丸裸に剥かれて縛られたり、流腸までされてしまってお話の連続なので、びっくりしてしまいました。と、いうより私の気持にぴったりの内容なので一遍に好きになってしまい、繰返して読んでいる中に、自分自身が不思議なあこがれを静子夫人に抱いているのに気付きました。

これが女の業火というものでしょうか。黒人ショー、香港犬ショ

1、人工受精見学など、華麗な幕開けも近いそうですが、女として知りたいのは、女が何人の男性に続けて悦びを分けあえるか、ということとです。千代が見ている前で一人、また一人と新しい相手と取り組み、凄まじいばかりの官能の姿を露呈しつつも徐々にその様相を変えてゆく静子夫人の羞恥を考えただけでも、私の全身はふるえるようです。

その姿はマゾ女の求める最高の被虐の喜びであり、羞恥でございませう。前に若い衆達を配して観賞させ、好色的な中年男が後に添い伏して横向きにねかせ股を大きくひろげさせます。ひくひくと足を牽き立てて終了を告げる静子夫人に感激して交代する若者達の群。

静子夫人に憧憬する私は、『花と蛇』の文章を読んで、主人公に自分を置き換えて空想を楽しむのです。その場面では、いつも私は沢山の男達に見られていると思っただけで燃えあがってしまっています。女の人達に見られるのは余り好きではありませんが、それでも見られないよりはましです。こんな妄想に悩む私って、本当に異常なものでしょうか。



和装の縛り

山本五郎

余り変わりばえもしませんが、私好みの写真です。右の写真は最初帯揚げはもっと巾広く出したつもりでしたが、少しあばれたので下ってしまいました。帯も太すぎるようですが、着物はピンク地に



に手描きの京友禅です。

左の写真は胸元を乱し、乳房をのぞかせたところが、狼藉を想わす苦心の演出？ なのですが、やはり私は裾を曳いたオーソドックスなスタイルが好きです。帯を結ぶのが面倒な時は、しごきを前で結びますが、帯がないと高手小手で手首が肩まで上がり、縛り自体にはよいようです。

菱縄マニアの苦笑

昔の女

早木夢二

昔、しばらく交際したことのある女と、バツタリ出合った。どちらが誘うでもなく肩を並べて歩き出していた。

× × ×

小さな料理旅館の小部屋で、食卓に向かい合って昔話に花が咲くうち、フツと女の眸が光り、「ご趣味の方、相交わらず？」

「え？……」

「おしばりの方……」

「ああそのことか。……きみにはずいぶん振られたっけ」

「だってあの頃は……。でも、今はあたしだって大人になったわ」

「縄の味を知ったの？」

「男の人って、皆なのネ。女を縛りたいっていうのは……」

「皆っていうことはないさ」

「だって、あたしのつき合った人は皆が皆よ。あたしって、縛られる星の下に生まれたいわね。」

あなた、菱縄っていうのを、ご存知？ 体中にいくつも菱形が出来る縄がけ……あたし好きなの」

私は、お株をとられた気持で絶句する。誰がこの女の肌にそんな味を教えたのか。ムラムラと妬け

る気持が湧き上がる。

「あんなに嫌がっていたきみがねえ。……ホントかい？」

女は色っぽい流し目を私に投げかけて、黙ってバッグを開け、細目のロープの束を取り出す。

「持って歩いてるぐらいよ」

私はまじまじと女を見詰める。

「昔にかえってみたいこと？」

女は、白いフックラした腕をしなわせて、私にロープを差し出してくる。私は夢見る気持で、ロープの束を解き、柔らかな女の手首をとって背後に回る。

× × ×

私の「お茶でも……」という誘いに女は首を振った。

「子供が待ってますから。じゃあお元気で……」

私は、昔、縄の話を持ち出して振られた時の冷淡さを、女の後姿に思い出した。クリクリと動く尻の辺りが、ヘンタイさん、さよならといっているようだった。

つい走馬灯のように甘い幻想を廻らせた自分に苦笑しながら、心

の中で私は呟いていた。

「俺には慶子がいるんだ」

緊縛フォトについて

朝野 祐

奇クに登場する緊縛フォト全般についていえることですが、記録写真としては役に立っても鑑賞用にはどうもお粗末なのが多いと思うのです。プレイの記録を作ることに気を取られ過ぎて、というよりもむしろ、プレイを記録する目的としてたまたま写真を用いている、そんな写真ばかりだと思ふのです。

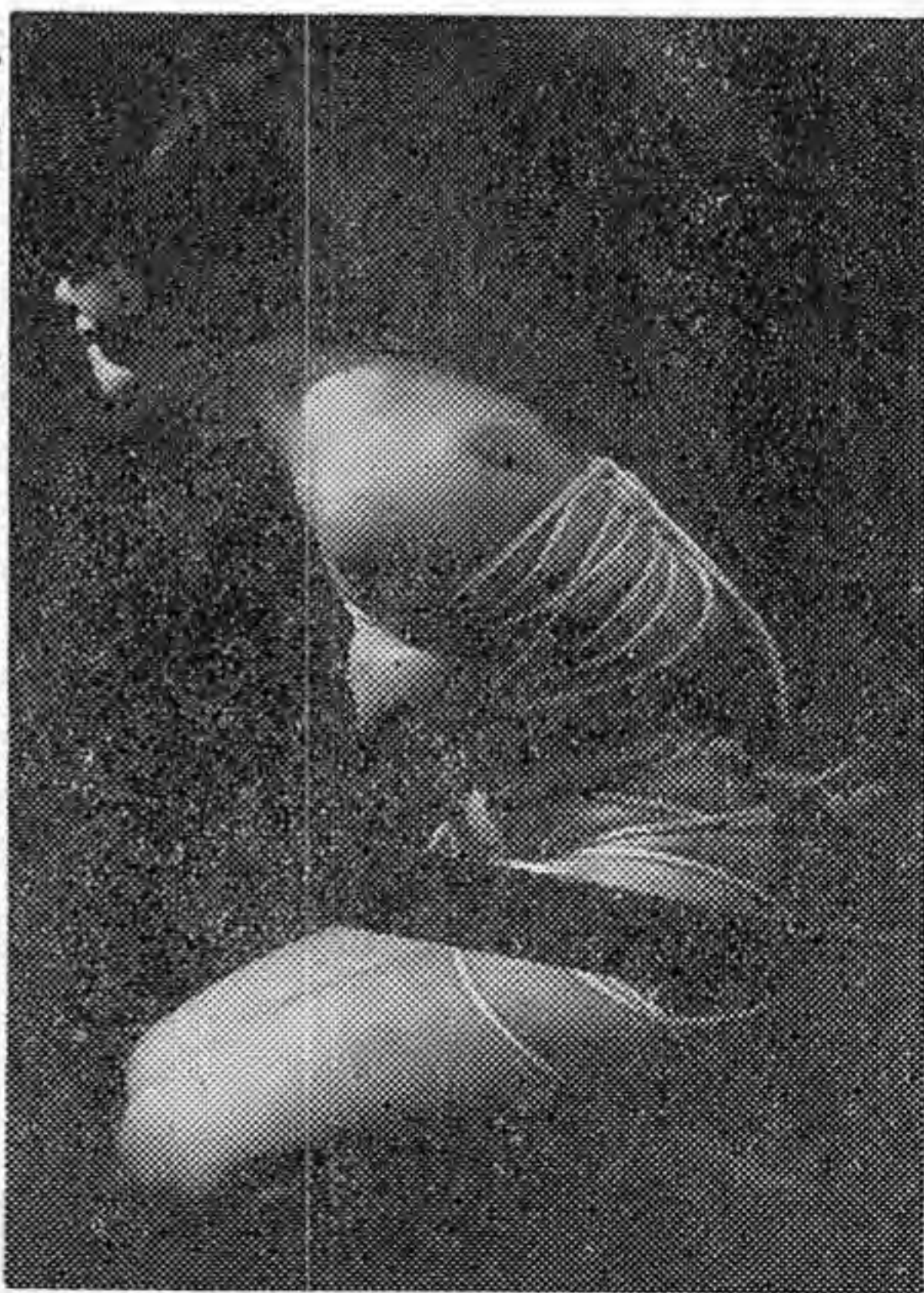
SMプレイにおける緊縛という行為が、本質的にセックスプレイの一種であるためにでき上った作品の鑑賞という面はとかくおろそかになり勝ちですが、緊縛フォト

は縄というアクセサリによって無限に多くの変化が得られる、それだけ隠された女体の美しさを引き出す可能性を持ったものだと思うのです。そういう緊縛フォトというものを私は単なる記録に止どめず、できることなら創造にまで高めたいと思ふのです。

女性の美しさを効果的に表現しようという意図を持たぬ作品は、決して記録としての緊縛フォトの目的も十分にはたせないと思います。縄にくびれた柔肌の実感、歪んだ乳房の立体感、などが効果的に表現されて始めてプレイの記録としての価値も高められるものだと思います。

そのためには、

ライティング、カメラアングル、シャッターチャンスなどに、細心の注意が必要です。ストロボ、フラッシュによるベタ光の写真は、見られたものではありません



ん。照明にはフラットランプを用いるべきです。ライトの位置により、緊縛された女体に深い陰影を持たせ、よりデリケートなムードが得られます。また、カメラアングルを自由に選べるという面からは35ミリカメラが有利です。大型カメラではどうしても小廻りが効かず、動きのないものになってしまいます。

最近では緊縛フォトがブームの観を呈していますが、今のところ全紙のパネル張りで展示する機会も無さそうですから、通常の作品は

せいぜいキャビネ止まりで十分と思われまふ。従ってそれほどの拡大も必要なければ、なおさら大型カメラの必要性は無くなり、35ミリカメラが有利になる訳です。トライXは感度の面からも便利ですが、露出を切りつめて薄目のネガを作れば四ツ切に伸ばしても十分美しい印象が得られます。

さらに画面を単純化して主体を浮き出させる努力も必要です。バックにゴタゴタと物があつたり、手前にプレイの小道具が散乱しているのは頂けません。それが効果

的なこともあるのでしようが、あまりそういう作品にはお目に掛かりません。私自身の好みはバックを黒に統一するのが好きです。女性の白い肌は黒バックの時が一番美しく浮き上ると思うのです。

これらの点から私の好みに合うのは、本誌44年10月号に投稿された三浦敬一氏の作品です。単純化されたバックの中にチャージングな氏の愛妻の姿が非常に初々しく表現されています。斜光線を用いたのも効果的です。それと全く対

あの娘 青井 松造

私が背後に回った時、自分から両手を腰の後ろに組んで、いったつけ。ねえこれでいいの？と。

私が両手首を一緒に握り、グツと引き上げてみた時、びっくりする程よく上がった手首と共に丸っこい感じのおとがいがそり返り白いノドが小さく波を打って鳴ったつけ。「コクリ」……と、いうように。

私の持つロープが胸乳を絞り上げた時、あのコの眸がそれを見詰めて、新発見でもしたように云ったつけ。ずいぶんくい込むのに痛くないわね……と。

照的なのは同月号の辻村氏のカメラ ラハントの写真です。



最近の緊縛映画から

東山 映史

最近の緊縛映画の、目ぼしいものを拾ってみよう。

緊縛女優は、やはり何と云っても美矢かほる、二条朱美、香取環そして辰巳典子がベストテンの上位にランクされる。

美矢かほるは「壺あらそい」名作の⑧もので、「人生劇場」をアレンジしたもの。「王将」からの「松葉くずし」で清水世津が緊縛モデルで妖しい美しさを見せたが「壺あらそい」では、美矢かほるの玉の井の足抜き女郎が捕えられ

面からのストロボ撮影で色気無し。これではそれでも小さいモデルさんの胸を益々貪弱にしよう

というものです。とまあ色々通ったことを並べ立て、さらには辻村大先生の作品にまでケチをつけてしまい、出過ぎたことをいってしまったものだと後悔しているのですが、どうせここまでできてしまいましたので、ついでにあつかましくも私の拙な作品を同封しますので、どうか御覧下さい。なお私の考えを理解して下さる方で、私のモデルになっても良いという女性がいましたらどうか御連絡下さい。

リンチにあう。半裸で、乳房の上を二筋、ぎっちり縛られる。そして棒しばりにされる。酒のさかなにと、その姿で連れ出されるがヒョロヒョロと押し出されてくる姿に、残酷さがただよう。そして責められ、舌をかんで死ぬ。

二条朱美は「第七の性」で、父の仇を討つため、金貸しのエジキになる。あなたのいう通りになるという言葉で「わしは変態だ。いう通りになるか」と緊縛され、責められる。その縛られ姿をパチパチ写真にとられる。

香取環が「尺八弁天女地獄唄」で久しぶりの緊縛スタイルを見せる。はじめから武藤周作の刑事に

捕えられ、前手錠で引きずりまわされる。逃げたところをまたやぐざ者に捕えられ、崖下で両手を縛られ、上から吊り下げられたような姿で犯される。すさまじいたたかいである。この映画では、青山リマが両手吊るし責めにあい、ムチ打たれる。

東映の「セックス恐怖症」ではサジステイック・ショーを見せてくれた。

日活の「ハレンチ学園」では女学生が両手をジュズツナギにされオシリを打たれたり、ハリツケの恰好にされたり、Sシーンを十分盛り込んでいるのがヒットする原因の一つだろう。



—〈第七十九回〉—

辻 村 隆

待望久しい「緊縛写真集」が発刊されることになった。久しく切齒扼腕していたが、膨大な撮りだめのフोटのうちから、傑作ばかりを選出するのだから、嘸かし同好者垂涎ものの素晴らしいものが出来上がるに違いない。私も一文を頼まれたが、緊縛フोट集をみていないので、咄嗟にさて何を書いていいやらと迷ったが、枚数の制限はないというので、かねてから、回顧してみたいと思っていた「カメラハント」以前のハント女性を中心に、私と奇クの二十数年の結びつきを駆足で書いてみた。奇クの緊縛モデル女性には、私のハントではないから省略して、始めて私がハントした、緊縛女性第一号の梨花悠紀子を皮切りに、単発のハント女性及び「奇譚三十九夜

物語」中に登場させた女性などのプロフィールを思いつく限りに書き、さていよいよ「SMカメラ・ハント」に言及しようとして気がつく、既に原稿が百枚になんなんとしている。

何しろ、昭和三十九年十一月号から、昭和四十五年十一月号まで満六年間に、ハントした女性七十七名、そのなかで、両再度に亘って登場した女性もあって、実数を調べると六十六名になる。一人一枚のせても、フोट六十六枚になる勘定で、再び膨大なネガの中から探し出して、焼付する煩雑さに懼れをなして、SMカメラ・ハント女性には遂々あきらめた。しかし緊縛写真集の中には「SMカメラ・ハント」に登場した女性も、かなり分譲フोटになったり、編集部

や塚本氏が撮っているから、集録されている筈である。いつか機会があれば、次には「SMカメラ・ハント」女性に絞って、そのプロフィールを紹介するつもりである。離合集散は世のならい、大半は音沙汰なくても、そのフोटの一枚々は、私の筐底深く眠っている。いつかは発表する日もあるうか。

× ×

この処、急に彫ものが、夜のテレビに連日登場して、一体どうなったのかと、眼をそば立たせている。刺青は、刑罰上の囚人に彫る言葉、イナセな若衆や女人が彫るのは、ホリモノだそうである。

先ず最初が十月二十二日のイレブンPMの名古屋版——。数人の若衆や、女人の観音像のホリモノの紹介のあと、イレブンガールの若い娘に、睦会とかのホリモノマニアの男性が、いきなり耳朶に外国産の穿孔器具で、パシッと穴をあけ、あっという間に耳環をはめこんだ。クローズアップの女性の穿孔の個所からじりじりと鮮血が泌み出して、正にホリモノの驚きである。余り痛くないらしい。最後にうつつたら、もう一方の耳たぶにも、チャンと耳環が嵌められ

ていたが、眼前で耳朶穿孔にお目にかかったのは始めてである。ついで翌二十三日の毎日テレビ、12チャンネル「奥さん！二時です」では、睦会の、全身刺青の前夜出演の男性、観音のホリモノの女性とホリモノ師梵天太郎氏の登場で若い美貌の女性の耳たぶに、耳朶穿孔の耳環の、穴を中心に菊の可愛いホリモノが紹介され、更に同夜、朝日テレビの「ナイトUP」では、マイク真木の紹介で、三たび全身ホリモノの男性と梵天太郎氏が現われ、前述の菊のホリモノを耳たぶにした女性の外、もう一人、耳たぶにバラのホリモノをした女性が登場し、全身ホリモノ氏は、ブラウソ管内を、禪一丁で自在に濶歩し、夜から夜にかけて、よみうり、毎日、朝日の三局を股にかけて、ホリモノを披露していた。

外人が手首や、腕に彫るのがTATで、日本人の、こうした全身に亘る見事なヤツは、スキン・イラストというらしい。全身くまなくだから、勿論、秘所の隅々まで彫り込んであるらしいが、会社の社長さんだそうである。山原清子が始めて登場した時、世にも珍しい女性と遭遇したものと感激した

が、もう女性のホリモノも当世では、一向に珍しいものではなくな
ってしまった。これも時代の推移
であろう。

× × ×

今年は映画もテレビの方もお呼
びでないと、自分の好きな道をゴ
ーイングマイウェイしていたら、
ひょっこり十月下旬、大映撮影所
から電話がかかる。映画の緊縛指
導に一つ御協力願いたいというの
で、内容の分からぬ俣出掛けてみ
たら、大映も協力する方で、映画
は、独立プロの作品『沈黙』であ
る。例の岩下志麻の旦那の篠田監
督作品で、原作は遠藤周作。『心
中天網島』『無頼漢』につぐ意欲
作で、外人の切支丹バレンの迫
害の殉教史とでもいおうか。それ
だけに主人公は外人で、それにマ
コ岩松、仲代達矢、加藤嘉、戸浦
六宏、岩下志麻、楠侑子といった
面々の至極マジメな作品である。
篠田監督に紹介され、その御意見
を拝聴して少々戸惑ったが、問題
は、外人宣教師や切支丹の信者な
どが捕吏に捕えられの際の、早縄
の掛け方であった。捕縄の術は、
古来、縄の伝極意を始め、種々紹
介されているが、肝心の個所はい
ずれも口伝であって、図解からで

は実際問題となると理解しにくい
面も多々ある。私もこうした専門
ではないが、昔、伊吹真砂子をモ
デルにして『縛り方教室』や『縛
りの四十八手』など、緊縛フォト
と共に、研究したこともあり、話
をきいて急拠あれこれと思い出し
ながら、兎も角、映画にとっても
可笑しくない、早縄の方法を二、
三公開して、捕吏になる俳優さん
方に御披露したのであった。それ
は正当なものでないかも知れない
が、口伝であれば、何をもって正
皓となすかは誰も断言出来ない。
史実に出来る限り忠実に、島原キ
リシタン迫害の断面を描こうとす
る監督の意図にそって、私も至極
大真面目で二日間協力し、一行は
十月三十日、長崎へとロケに出発
した。十二月セットに入って又或
いは協力する予定であるが、クラ
ンクアップは大体一月中旬の予定
で、二月半分編集にかかって、恐
らく公開は二月末頃になるであろ
うが、商業主義でないモノクロ、
スタンダード版の『沈黙』は、大
いに期待される作品ではなからう
か。

商業映画より、こうした薰り高
いアートシアター向きの映画に、
案外ドキツとするような、リアル

なシーンがある。私の緊縛指導が
果たしてどの程度まで活用されて
画面に出てくるかは、封切後でな
いと分からないが、こうした真面
目な作品に、私のようなアングラ
人間がかり出されるようになって
それが良い映画をつくる一助とも
なれば、私の喜びもこれに過ぎる
ものはない。

× × ×

謝国権氏の『性生活の知恵』に
端を発して性書は、最近いよいよ
エスカレートして、段々とどぎつ
くなっている。便乗組の、怪しげ
な医学博士の性書がハンランして
いる御時世である。それが果たし
て正しい性生活の指導書であるか
どうか、疑わしいのも随分多い。

ペンハーゲン大学のセクソロジー
(性学)の担当者、ステンヘゲラ
ーが、奥さんのインゲヘゲラーと
共著した、『インゲとステンにた
ずねなさい』(石渡利康、ビーバ
ン・クリスチーナ共訳)という性
の質問箱をよんだが、セックスに
関しては、流石にセクソロジーの
第一人者だけあって、大いに共鳴
を感じるところが多々あった。し
かし、セックスに、ことSM的要
素のからだ質問になると、分野

が違ふというのか、まことに解答
がたどたどしく感じる。

夫婦の生活に、SMの行為がと
もなうのは、人類は違っても世界
共通らしく、もともと、Sとい
Mという語源の、サジズム、マゾ
ヒズムも、サドやマゾッホという
欧人からの言葉であれば、それは
当然かも知れないが、SMプレイ
に憂身をやつす私にとって、イン
ゲとステンの解答は誠に物足らな
かった。二人がノーマルだからと
いえば、それまでだが、SMがセ
ックスに占める地位の重大さをひ
しひしと感じるだけに、セクソロ
ジーなれば、そうした人間の微妙
な心理までも深く追及してもらい
たかったのである。左に、その質
問と解答を挙げて、諸賢の批判を
俟とう。

◎むちうち(一七三頁より)

△質問▽小さいときに、母によ
くぶたれたものでした。母にはそ
うす事が必要だったようです。
エクスタシーが、得られるからで
す。わたしは自分の子供をぶった
ことはありませんし、そんなこと
をする必要がないのをうれしく思
っています。でも一カ月に一度だ
け、二人きりのときに、妻にしお
きをします。妻はそうしてもらい

たいからではなくて、わたしを喜ばすために受けいれてくれるのです。

妻はオルガスムに近づくと、痛めつけてくれとたのみます。大抵妻が上にのっているときで、わたしは性交中、妻をさいなみます。

しおきをする、妻はますます刺激されて、すばらしい愛人になっていくようです。それでも、しおきによって得られる快楽の度合は、わたしの方がはるかに強いのです。妻になにかしてもらいたいことがあるかどうかたずねても、特別にはないと答えます。精神病

幻の女相撲を恋うる

奮斗士 好太

実際には見ることでできないスポーツ……どなたかが女相撲のことをこんな表現をしておられた。女と断らなくとも、若い世代では今や相撲は主流からはずれた存在になっているのだから、女相撲が幻のスポーツと云われてもしかたのないことかもしれない。街を歩けば、素晴らしい肉体美の若い女性が目につく。その見事に発育した、というより少々育ちすぎた肉体の盛り上がった胸や、はちきれ

医に相談した方が、いいでしょうか。でも快楽を得るためには、しおきが必要なのです。

匿名氏より

解答——。しおきについての手紙が沢山来ていますが、興味深いものがあります。医者にみてもらうのが必要かどうかは、わたしではなくて、あなたの奥さんがきめることです。奥さんがしおきでオルガスムを得られるとすれば問題はないうちに思われますが、どうでしょうか。あるいは、あなたにやめてもらいたがっているのですか。しおきに大きな快楽を

そうにたくましい腰のあたりがまぶしく見える。こんな子がもし相撲をとったら……とスカートの縫い目がはじけそうな量感や、すっくりと伸びた堅締まりの太腿に彼女達のまわし姿を想像する。見事だろうなあと思う。若々しい健康美あふれる肉体のぶつかり合いを目のあたりにすることができたら三年や五年寿命が縮まっても……と思っても、彼女たちからしてみれば、関係ないのひとことで片付

見出しているあなたにやめてくれといっても仲々むずかしいことです。人間の精神を変えることは好みを変えることでもあるのです。

あなたのお手紙を、ここに出した理由は、ぶつことやぶたれたりすることに興味をもっていらっしゃる人は、自分が小さいときにぶたれた経験をもっているという例を示したかったからです。考えさせられることではありませんか。

インゲとステンより

◎思春期の影響（一七七頁）

△質問Ⅴ 先日の記事を読んで興味をもったのですが、子供時代にしおきをするうけたりと、大人になってから、セックスと結びついて、マゾとかサドの傾向が出てくるのでしょうか。とくに、女性にそういうふうですが、どうしてなのでしょう。わたしも、成長期にかなりしおきを受けました。十八、九才になって、もうしおきをやめてしまっただけでも、寝室の大きな鏡の前で、自分をむちうって楽しみました。結婚してから、夫に自分の要求を打明けました。夫は規則的にしおきをしてくれますし、その最中にわたしはオルガスムをもよおします。わたしたちは、とても幸福です。わたしと

同じような女性も、このようにして、オルガスムを得ることが出来ると思います。

幸福な人妻より

解答——。二人で、眉をしかめることもなく、適切な方法を見出すのは、素晴らしいことです。おしあわせに暮して下さい。さて、女性の方が子供時代にうけたしおきの影響を受けやすいのかどうかは、はっきり答えられません。こういう調査はまだなされてないのです。きつい男性を得て、彼をじらせれば、女性のこうした望みは叶えられるのです。でも、なぜ子供時代にしおきが、大人になって、こういう結果をうむことになるのでしょうか。これも答えるのは難しい質問です。ただ思春期はもっとも敏感な時期ですから、しおきの苦痛が、性的快感に移るということは、考えられます。インゲとステンより

以上、二項ばかり抜萃したが、その外に、ゴムマニア、フェチ、女装、レズとホモ、露出癖など、洋の東西を問わず、いろいろの趣味への質問と解答があるが省略する。適切な解答かどうかは、諸賢の御判断にお任せするより仕方がない。

『下手投げ』 妙花山人



けられそう。

会社のアルバイトに来ていた女の子にK子というのがいた。二十才を過ぎていたのに高校生くらいにしか見えなかった。子供っぽい丸顔に、くるっとした大きな眸がそんな印象をつくっていて、丸くつまみあげたような鼻が、可愛い

子だった。海水浴、魚釣り、山登りと若さの特権をフルに行使して、仕事の方はお義理にも申し分ないとは云えなかったが、くつたくなのいあけっぱなしの性格が憎めなかった。大柄ではないが肉付きのいい、しなやかな肢体はかなりなグラマーと云えた。ウマが合ったというのか、か

なりつつこんだことまで打ち明けて相談を持ちかけてきたりして、自然こちら目もかけるといふことにもなった。こんなK子に何気なくモデルにならないかと持ちかけてみた。「ヌードの？」

邪心のない目が羞らいをふくんだ。赤くなつたと云いたいが、かなり色のくろいK子はレンガ色と云った方がよかった。

そうじゃないと云うと

「じゃ、水着？」

それでもないと云われて、不安そうな顔つきでK子に説明する。「わあ、いやだア。ふ

んどしをするの？」

いやだと云うよりはめんくらつたという感じで、どんなスタイルになるのか直ぐには考えつかないらしいのだった。

「だって、女の子がふんどしするなんて、へんでしょ」

と、半ば自分に云い聞かせているような感じでもじもじし出す。

しかしこっちが別に深刻な顔もしていないので、彼女の方もそれ以上妙な空気をつくらなかった。

「ビキニなら……」

いいのだけれど、ふんどしなんかで締め上げられるというのは抵抗がある——というような意味の釈明だった。もちろんこれは実感ではないのだからもうすこし押ししてみれば、気のいいK子のことだから、あるいは、りりしいまわし姿を披露してくれたかもしれないのだったが、その機会がないままシーズンは過ぎていった。

夢は夢のままに終わった。こんな中から「花の女斗美たち」の娘たちが誕生してきたのだった。しかし、夢が楽しければ楽しいほどそれから覚めたあとの現実が淋しくなる。

広い世の中だものそんな女性だってどこかにいないことはない

考えるのだけれど、いっこうに名乗りをあげてはくだらない。

SM全盛万々歳ではあっても、毎月一本くらいは女相撲ものを、と最後の期待をかける本誌も最近ほとんどお見限りのよう。多数決は民主主義の原則だけれど、少数意見の尊重もお忘れなくと、グチりたくもなろうというもの。

これだけさまざまな風俗がはんらんしているスクリーンにも、女相撲が、曲りなりにも登場したのは「徳川女系図」一本だけとはあまりにも淋しい。女子プロレスなんか堂々とテレビに登場し地方興行もされているのに、伝統ある女相撲が消えようとしているのは民族の一大損失——とまあ、そこまでいかなくともいいけれど、功利的にのみ支配されているようなスポーツのあり方を見ると、むずかしいなあとは思ふ。

各地で女力士を養成して年一、二回程度の選手権大会を開き、優秀選手に相応な賞を贈る——というふうな企画をしてはいただけないものだろうか。また関東、信越の女性の方で相撲をやっているらしい方、または相撲をとってみたいという方は是非名乗りをあげていただきたい。

△告白▽………佐渡黄門………

あるアナス狂の独白

私は以前から奇妙に、女性のお尻、すなわちアナスに対して、一応世間一般的な目からみれば異常といわれるに違いないほどの関心をいだいてきた。

町で見かけるミニの女性に対しても、正常？なる男性なら、その短いスカートから白いパンティのチラッと見えたりしようものなら、おそらく反射的に想像するであらう秘所に対して、私はといえば、それほど興味は覚えることもなく、その裏の、より秘密の部分を思い描いて、あれこれと想像しているありさまである。

そして、その場合は、たいていは、いささか羞恥をもってしか語れない（それは私自身が異常と思う興味、友人らの前では語れない類の興味をもってはいるが故に感ぜざるを得ないのか？いったい異常とはどの程度からという、はっきりとした絶対的な基準などあるのだろうか？）ことであるが、想像することは浣腸場面である。

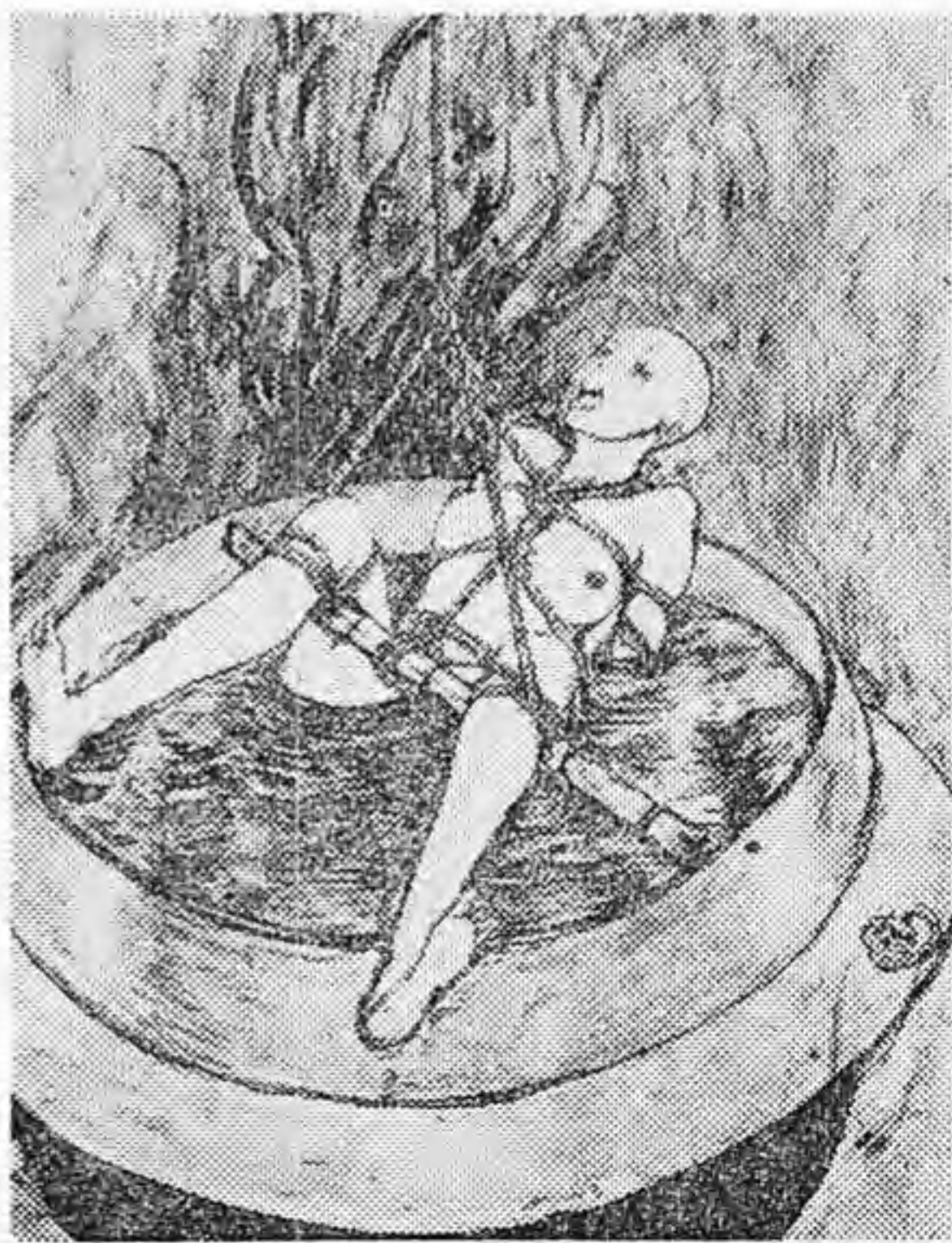
この場合まず私は、その女性をハダカにし、ナワで後手にくくりあげ、臀部を高々と持ち上げさせ

て、触覚と臭覚を味わってから、おもむろに浣腸器をつきつけるのである。

そうして女性に浣腸を施して体内をからっぽにさせた後、再び私は、今度は浣腸器に酒を入れて注入し、女性に、腸に力を入れさせてそれを逆に排出させ、私の口がそれを受けとめる……。

もちろん、このような想像は実現できそうもなく、ひじょうに空虚な後味が残るものであるが、如何に私が興味を持っているかの証にはなろう。しかし、私が望ましい女性の臀部からすぐに浣腸場面を連想することは、私が特に浣腸好きであるということの証明にはならない。

もっとも、浣腸がキライであるということではなく、これにも少なからぬ興味をもっていることは否定しないが、私が女性からすぐに浣腸を思い浮かべるということは、私のもっとも関心のある便意の苦悶を与える道具としてのことである。又私が、好ましい女性の臀部が浣腸によって汚されても、そんなに汚ないなどと思わないの



『あわれ玲宝』市原幸三郎

に、男性となると、興味を覚えなればかりか、嫌悪すら感じるということは、本来的に残念ながら？ホモ的な要素はなく、又作家T I氏のいう意味でのA感覚的な人間でもないことの証かも知れない。

要するに私は、P感覚的人間であるが、それは好ましい女性のA感覚を通してのP感覚であるということであろうか。その辺は定かでないが、ともかくも、私が、女性の豊かな丸みを帯びた臀部、そしてアナスに人一倍興味をもって

しかしながら、なぜに私は、これほどまでに心ひかれるのだろうか。なぜに、女性の豊かな臀部に對する一種の憧憬、というより秘密めいた、もはや抑圧しようのない強烈な魅力に取りつかれたのだろうか。……心ひかれるから、魅力を感じるのであって、理由などないと言ってしまうえばそれまでかも知れぬが、もう少し、この問題を自分なりに追求してみる必要があるかも知れない。

肛門とは消化器官の最末端部であり、口とプラスマイナスの関係

大映作品

「おんな牢秘図」

沢 瀉 しの

すっかり御不沙汰してしまいました。したが、去年から今年にかけて、テレビドラマのことなど何回か書きかけたのですけれども、いつも清書までゆかないうちに時期遅れになってしまいました。

その内でも大映の「続・秘録女牢」は、女体サービス映画になりがちな内容を、手際より道法精神強調中心にまとめてあり、縄目姿



無惨画秘帖『腹削ぎ』桐原紫門

が殆ど見られない点を除くと、牢屋敷の間取りなど、きちんと作って見せてくれていました。

早速書くつもりでいたのですが、早くも、とうとう書かずじまいになり、なんとなく大映に借りが出来たような感じで気にかかっておりましたところが、先日、大映本社の前を通ると、「おんな牢秘図」というポスターが目につきましたので、又、手遅れにならないようにと思い、作品案内とスチルを貰ってきました。

封切りは十月十四日で、本来ならば鑑賞したうえで書くべきなのでしょうが、又々、原稿が私の机

の上から四次元の世界にまぎれこんでしまうといけませんのでスチルを見たかぎりを書くことにいたします。

この作品は、今までの刑罰史式の話とは違って全くの創作物語のようで、題名はおんな牢ですが、実際は女だけが送られる

にあり、マイナスの口とも言えるのだが、この名を口にする人々にはばかる。口の方なら、いくら言っても平気であるのに、肛門、と一言発すると、たいいていの人々は、一瞬不安と羞恥に顔面がこわばるようだ。これはなぜなのか？ 私の長年の疑問の一つである。

流人の島のお話です。どうも九州のどこかの藩の出来事といった感じですけれども、長崎奉行所の役人が転任してくるところをみると、天領なのでしょう。

とにかく小さな島に、あばずれ女が十三人と、すれっからしの小役人たちが一緒に暮すとなれば、騒ぎが起らない方がおかしいというお話ですから、公儀の定法だの、御縄流儀だのといったことを持ち出す余地はなさそうです。

御縄といえ、芝居の普通の場面では胸元を腕ごと一巻きするだけなのが定法のようになっておりません。これは多分、能楽の巻絹や正尊などの形を、そのまま踏襲しているのだらうと思われます。

ところが、その一巻縄が、映画やテレビドラマの画面にまでノサバツているのは、一体、どういうわけなのでございましょうか。私

る。

なぜ人々は、肛門という言葉に一種独自の名状しがたい反応を示すのであろうか？ 性器に対する羞恥、好奇心とは、あきらかに異なるものが、そこにはあるようである。この問題は、今後の私の一つの課題となろう。

は、映画やテレビドラマが様式芸術だという説は、まだ聞いたことがありません。

話が少し脱線いたしました。今回の作品は、流人の生活録ですから、正式の縄目姿はあまり出てきそうにありません。ただ、始めのところに逃亡をはかって処刑される女が、一人居るのが楽しみです。

しかし、四十二年の女牢、さらに続・女牢と、いわば正調の牢獄映画を発表し、古いところでは近松物語の処刑場面などを手がけた撮影所だけあって、囚人たちの着ている、丈の短い筒袖のおしきせは程よくくたびれて、いかにも古しらしくみえますし、布切れやワラしで結った引きつめ鬘とともに、出色の出来ばえといえそうに思います。

M 奴隷みさ子の
臨月腹プレイ

佐野みさ子

みなさまの女奴隷になりたいと願っている「みさ子」には、これまでいろいろな人生ドラマがありました。

中小企業の事務員からバーのホステスへの転向、そこで知り合った、中年の男性（現在の夫）との交際、結婚、欲求不満の悩み、冒険、プレイ、被虐のよろこび、そして妊娠。そしてこれから始まる女性にとって人生最大のドラマともいえる出産。

自分の肉体のなかから、無限の可能性を秘めた新しい生命が誕生するという

この感激、愛情、出産時の苦痛などは、女性にのみ与えられた何ものにも代えがたい特権だと思えます。M女「みさ子」にとっては、出産の苦しみと喜びは、ひとしお



胸高鳴らせて待っているところなのです。病院での定期診察も楽しみます。丸々としたお腹を診察台の上に晒して、男の先生の手で検診を受けることに、いつも私はMのよろこびを感じてしまします。ここに同封し



まず数枚のフोटは、みさ子が妊婦になってからの二回目のプレイをした時に撮してもらったものです。幸い、お腹の子供の発育も順調のようで、私の体も「ムクミ」や「タンパク」も出ず、太腿などは自分ながらピチピチしていると思われる状態なのであの方も喜んでプレイして下さったのでした。今までに奇クに登場された妊婦は、木戸、中川、飯田、金原さんの四人の方だと思えます。どなたも辻村さんの手で、すばらしい妊婦羞恥態を引き出して貰っていられます。なかでも、金原さんの逆吊りにはおどろきました。私もお相手が辻村さんなら逆吊りもOKするかも知れません。でも、母体や子供に万一のことがあれば大

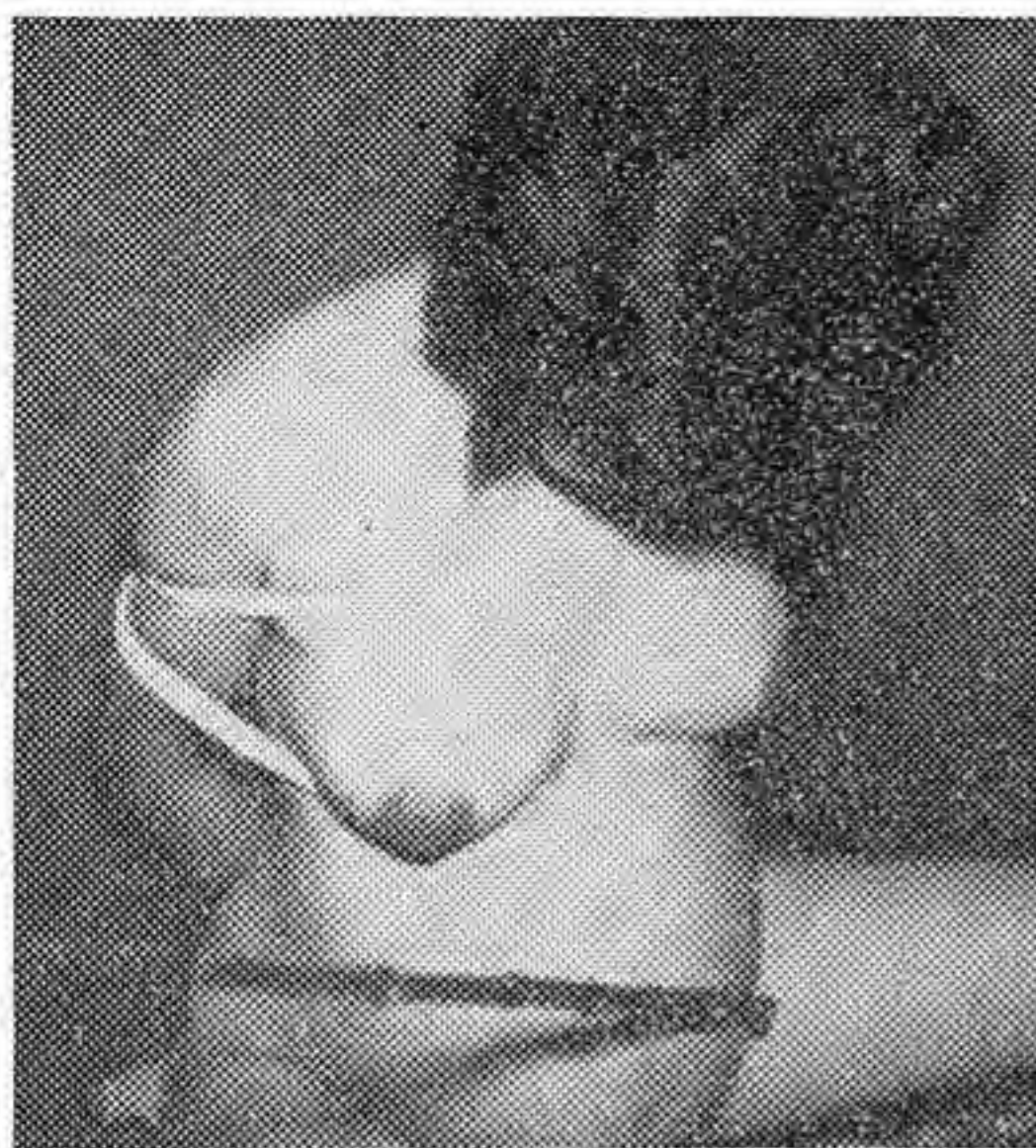
編集部だより

○先月号のこの欄で予告しました臨時増刊の「写真集」は十二月上旬発売の予定で鋭意企画を進行させていますが、前評判は上々で既に予約注文も舞い込む有様です。二、三年も経てば定価の何倍もの古書価値を出すような充実したものにしたいと考えています。

○特写カラーフोटを始めとして百葉以上の女体緊縛写真を網羅し加えて辻村隆・塚本鉄三両氏の書き下しの「ハント楽我記」と「カメラルポルターージュ」を写真入りで公開致します。どうか大いに御期待頂きたいと思えます。

○愈々今月から新年号となりましたので気分を一新して表紙の構成も変えました。新年号を機会に斎藤夜居氏の「人性文庫」を追ってVの連載を開始しますがこれは大体十回の予定で、極めて好評だった連載小説風流極道軒氏の「八重垣流秘聞」と真砂十四郎氏の「壺中の園」の二篇が今月号で完結しますが、いずれ読みごたえのある新連載を開始する予定です。

○最近読者の方々からの投稿や



変だと思う気持ちが強いものですから、きつとシャッターを切る数秒間だけにしていただけのようにお願いしてしまうことでしょう。

同封のフォトから、この時にはどんなプレイであったかははいたいわかりと思いますが、私の相手を下さる方は、プレイの後でいつもきまってみさ子の体をお求めになります。

お医者さんは、お腹を刺激さえしなければ別に差しつかえはないとおっしゃって下さったので、みさ子がプレイをお願いしたので、縛られたままのよろこびは、みさ子にとって忘れられないもの

なのです。こうしてペンを持っておりますと、またもや、いろいろの想像が湧き上がってまいります。

S気のな
い今の主人
と別れて、
生活の保証をして下さる方の奴隷
となり、被虐の毎日のうちに、又
妊婦にしてみらいたい。いや、一
人の方よりも、たく
さんのS男性の奴隷
となって、それぞれ
違ったプレイ、交わ
った縄かけの毎日の
方がいかしら……
などと、とめどがな
いのです。

それにしても、つくづく自由な時間がもつとあればと思います。大阪へ出掛けハントモデルとして辻村先生に縛っていただきたいという夢



も、自由な時間さえあれば実現していたでしょうに……。金原さんのように、逆吊り妊婦の自分のフトを眺めることも出来たでしょうに……。

いずれにしても、私の妊婦腹プレイは今回（といってもたったの二回きりで心残りですが）が最後になることと思います。妊婦としていられる間に、あんな責めを、こんな縛られ方を、と夢みていたことも諦めねばなりません。この次にお便り出来る時には、スマートになったお腹を見ていただくことになるでしょうが、どうか、この奴隷願望の「みさ子」をお忘れなさらないよう、お願いいたします。

通信、私信が殺到し、その返事を書くのに忙殺され嬉しい悲鳴を挙げております。他の雑誌に例のない程、大幅に読者の投稿を重点的に取挙げ、読者の声を誌上に反映させるよう努力しておりますが、今後更に一層、読者中心の雑誌としての本領を発揮したいと思っております。通信や便りを待っています。

○水田真紀子シリーズの筆者を訪ねて、その草稿を見せて貰いました。大学ノートに鉛筆書きの細かい文字で、びっしりと書かれた文章には、「スチュワデス」「女子大生」「看護婦」「バスガイド」「芸者」という見出しで、原稿用紙にすれば何百枚にもなりそうな分量です。昼は事務員をしていて夜の時間をさいて、コツコツと書き貯めているそうです。三十才前後の、すらりと背の高い清楚な感じの女性というのが、水田真紀子さんの第一印象でした。

○夫婦プレイのモデル志願者は相変わらず多いです。一組でも多くのカップルが誌上に登場してほしいものだと願っております。今月号では前田真知子さんが求めに応じて勇敢に書いて下さいましたが体験記も堅くならず、ゆったりした気持ちで書いてほしいです。

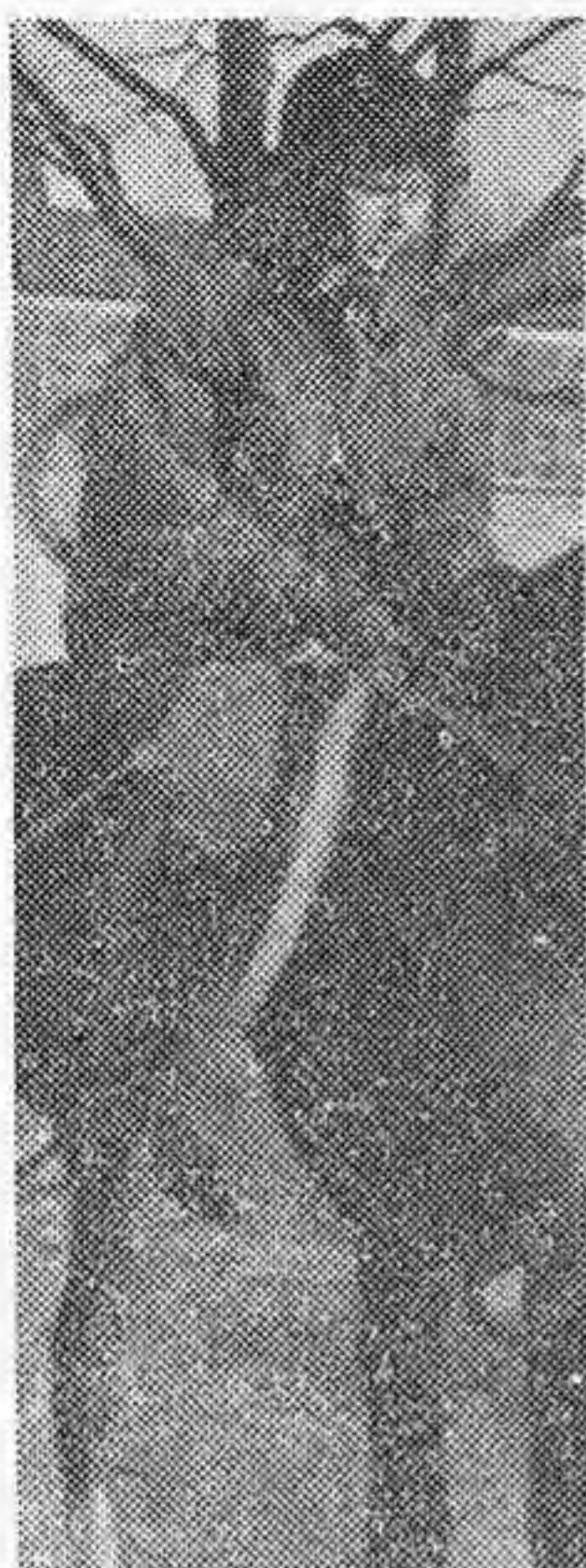
乗馬の女性
アマゾンの想い出

佐野 寿

北欧の女子高校生は一般に体格がよく早熟ですが、乗馬が得意な娘さんも多いようです。左の写真の乗馬娘も高校生で、早朝の野外騎乗のために馬首を森に向けてスタートするところですが、その健康美溢れるプロフィールは素晴らしく、私は清楚の中に妖しい雰囲気

気を感じるのです。

右の写真の乗馬女性も、林に馬を乗り入れるOL嬢です。自信と優越感といったものを感じる堂々たる乗馬ぶり、まるで別世界の一コマを見る思いを与えてくれるお嬢さんでしたが、一週少なくとも十時間は乗馬なさるそうで、ミス・アマゾンのコンテストにも出場の前定と聞いていました。うだったでしょうか。私はきつと入賞なさったものと思っていますが……。



みさ子さん後援会を！

仏山逸富

十一月号は久しぶりに妊婦の緊縛写真がのって、妊婦ファンとして大変うれしくなりましたが妊婦の佐野みさ子さんが告白で、

生活の保障さえつけばS的男性の奴隷になりたい、一人で無理なら何人かのグループでもいい、そして八花と蛇Vの静子夫人のような特訓を受けてみたいという、S男性にとってはこのうえもない申し出。私に経済力があればすぐにも名のりをあげ、おもいきり飼育を試してみたいと思う一方、一人で奴隷にするより、小説八花と蛇Vのファンとして、何人かの人と共同でみさ子さんを奴隷として飼育してみたい気持ちで一杯です。

以前、奇巧で刺青の女性、山原清子さんの後援会を企画され、集りがあったようだが、今回もそのような企画で空想の人気小説八花と蛇Vを現実で出来る限りの実現をされれば楽しいでしょう。

後援会の一會員の邸宅で集會を持ち、女奴隷みさ子さんの特訓を行ないます。



『疲れとり？』志羽利也

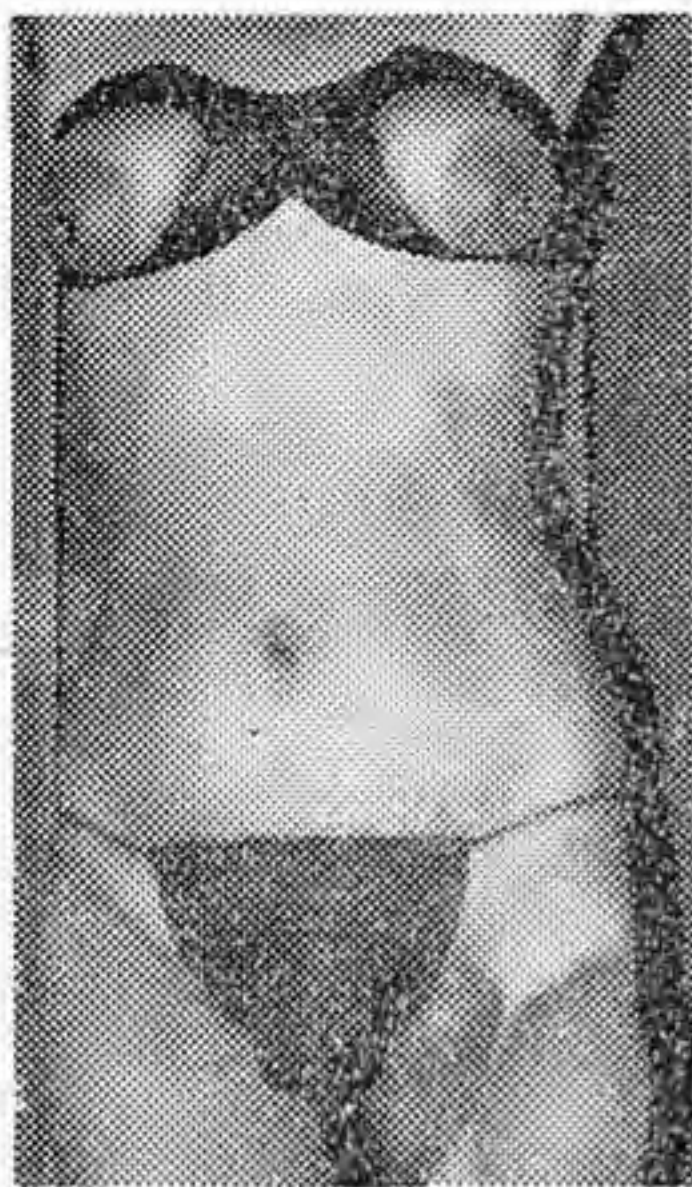
短信往来

同好の皆様へ

紀川正信

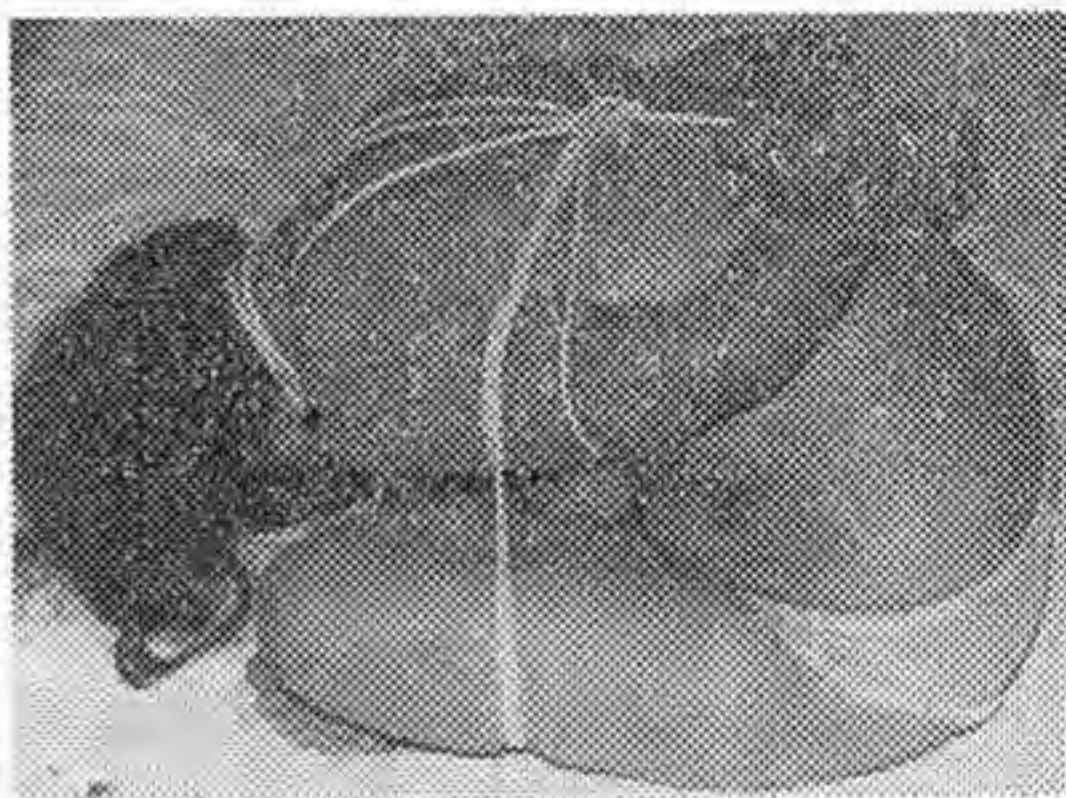
私の投稿を十月号のサロンに見出した時の感激は、いい表わせない気持ちでした。早速、妻に見せてやりましたが、恥ずかしいといいながらでも、まんざらでもない様子でした。神戸の清水様、ご批評ありがとうございます。又、和歌山にもK様のような方がありとは、心強い限りです。

十月号の分以後にプレイをした写真、不出来ですが同封します。この写真の責め具は、自動車用チューブで自作したものです。もしどなたか、このような責め具以外にお作り(なるべく安価に)の方が



がおられたらご教示願いたいものです。

九月号にてお呼び掛けの東京E T生様、貴方のお説に同感です。当方三十八才ですが、多少はD・P・Eの経験があります。写真店



のようにはいりませんが、今まで失敗は、ありません。ポラロイドより安価で多く撮せるライカ版の方が、より満足出来ると思います。もしよろしければ、私が現像して差し上げます。

始め、会員のとり囲む真中に全裸のみさ子さんを大の字に吊るし

奴隷に耐ゆる体であるかどうか、又、体各所の寸法等を、皆で調べます。そして剃毛し奴隷宣言として次のようなことを誓わせます。

「私、みさ子は、生活の保障とひきかえに、会員の皆様の女奴隷となることを誓います。奴隷となりました以上、どのような厳しい調教にも不満を申し上げません。私をSM界のスターとなれるよう特訓をお願いします。そのためなら妊婦になることも、フリーセックスのお相手も、責めの限界を試すためのことなら、どんな厳しいことも耐えることを誓います」というようなことを文章にし捺印させます。

次に調教に移りますが、まず始めに休の中のものを出す目的で、大量の食塩水を飲みし水道からホースの先にノズルを挿し込み、水を勢いよく噴射させ、妊娠七カ月程までふくらませ、会員注視のなかで排泄させます。

それから卵を産む鶏プレイ、ピンポン玉、小型パイプなどでA責めの好きな会員達が調教します。次は、緊縛趣味の会員により、海老縛り、鉄砲縛り、逆エビ、開

股股間縛り、亀甲股間縛り等にして写真をとります。

そのあとは逆さ吊りをし、ローソクをたて人間燭台とし、電灯を消し、たてたローソクの火で、逆さ吊りのみさ子さんの全身を鑑賞します。

以上の場面を8ミリや写真にして、会員以外の希望者にも分譲したら……等。

どうも実行不可能な空想になってしまったようですが……。

でも、後援会を作り、会員のとり囲む中で辻村氏、塚本氏の緊縛師? の緊縛を鑑賞したり、縛り自慢の会員による緊縛等は実行出来るのではないのでしょうか。

ただ、佐野みさ子さんには御主人がいる。SMプレイを理解しないだけで大事な家庭をこわしていいものだろうか? SMプレイはあくまでプレイとして、みさ子さんが御主人をリードし、理解させたらどうでしょう。そして、御主人の了解を得て、奇巧の誌上を飾られることを期待します。

現在妊娠七カ月とか、すばらしい妊婦腹、この機会に、すてきな妊婦腹を奇巧ファンに分譲写真として提供されることを、奴隷希望の、みさ子さんに期待します。

ありがとう

KK誌

津軽 壤

初めて、投稿致しました。KK誌をみつけたのが一年前、それまでは幼稚な縛りとも責めともつかない妄想をしては煩悶し、そんな自分を心配しながらも、その世界の甘い夢に浸っては愉悅していた私です。そして少しでも縛りとか、サディスティックなところが掲載されている雑誌をみつけると矢も盾もたまらなくなり、さっそく買い込んでくる日々でした。

そんなある日、なんの気なしに手にしたのが、KK誌でした。たしか昭和44年6月号でしたが最初目に飛び込んできたのが、辻村氏のカメラ・ハントでした。みずみずしい肌に爛熟さを物語っている左近嬢が、長押の上に、後ろ手で乳房の上下をくびられて、縛りつけられている素晴らしいポーズのものでした。



ああ、この瞬間の感激。このような嗜虐美を、どれだけ探し求めていたことか。今でも目に灼き付いているその写真を見たとき、血が顔面に噴き上げ、胸の鼓動が鳴り響き「ヤッター」と叫ぶところでした。もし、誰かが私の挙動を見ていたら不思議に思ったことでしょう。

一枚また一枚とページをめくるたびに、今まで漠然と頭の中にあつた、女の誇りが踏みにじられる場が、一つ一つ甘美に私を酔わせてくれました。

あれから一年、三十数冊になったKK誌が、今、アパートの片隅

SMゴツコ

小杉千恵

「SMゴツコしようよ」
「SMってなあに」
「とっても楽しいことサ」
「そんなら、してもいいわ」
「そこに、しゃがんでごらん」
「これでいいの？」
「そのままじゃあ駄目だよ。ずらさなくちゃ」
「これ脱ぐの？ 嫌よ、エッチ」
「SMって、それ脱がなくなっちゃ、できないのだよ」
「ほんと？ 止めようかしら」
「するって、云った癖に。きらいだ、嘘つきは」
「本当に楽しいことなのね」

に大事につまれています。

そして、このような趣味を持っている方が多々あることを知り、あんなに心配していた罪悪感も、自分の性向に潤いを持たせる方向に振り替えることによって別の道になることに思い至り、こうして投稿しています。もし、あの時、KK誌を手になければ、相も変わらずジメジメと毎日を暗い気持ちで重々しく暮していただろ

「絶対に楽しいよ」
「羞かしいわ、こうでいいの」
「いいけど、もうちょっと肢を横に、もう少し」
「見ないで、羞かしいわ。」
「この洗面器の中にオシッコを」
「嫌よ、止めて」
「SMって、これから始まるんだよ。今、その準備なんだ。早く」
「いやあねえ」
「きれいだなあ、君のお腹は」
「かかってもしらないわよ」
「それにとってもチャージングだ」
「いやあん、手で受けたりして。エッチ」

このように何故、私は素なおになれないのでしょうか。とても楽しいに違いないと思いつながら、なんて私はお馬鹿さんなんでしょう。

うと、KK誌に感謝の気持ちでいっぱいです。

私が空想をフル回転させる時、それはきまってる、気強い反抗をする女が、はかない抵抗であること、を悟り、か細い泣き声のうちに、被虐の甘美さを知って屈服し、ついに縛られた肌を歓喜に慄えさせるのです。

一度でいいから、どうにかして自分の作品を、と思うのですが、

女性でない
口惜しさ

中村 純

フォトでは自分で撮るチャンスがあるわけではなし、創作能力はまるでだめな自分が、なんとかイメージを発表出来るものと考えるところ下手ながらも絵が一番良い様に思われます。

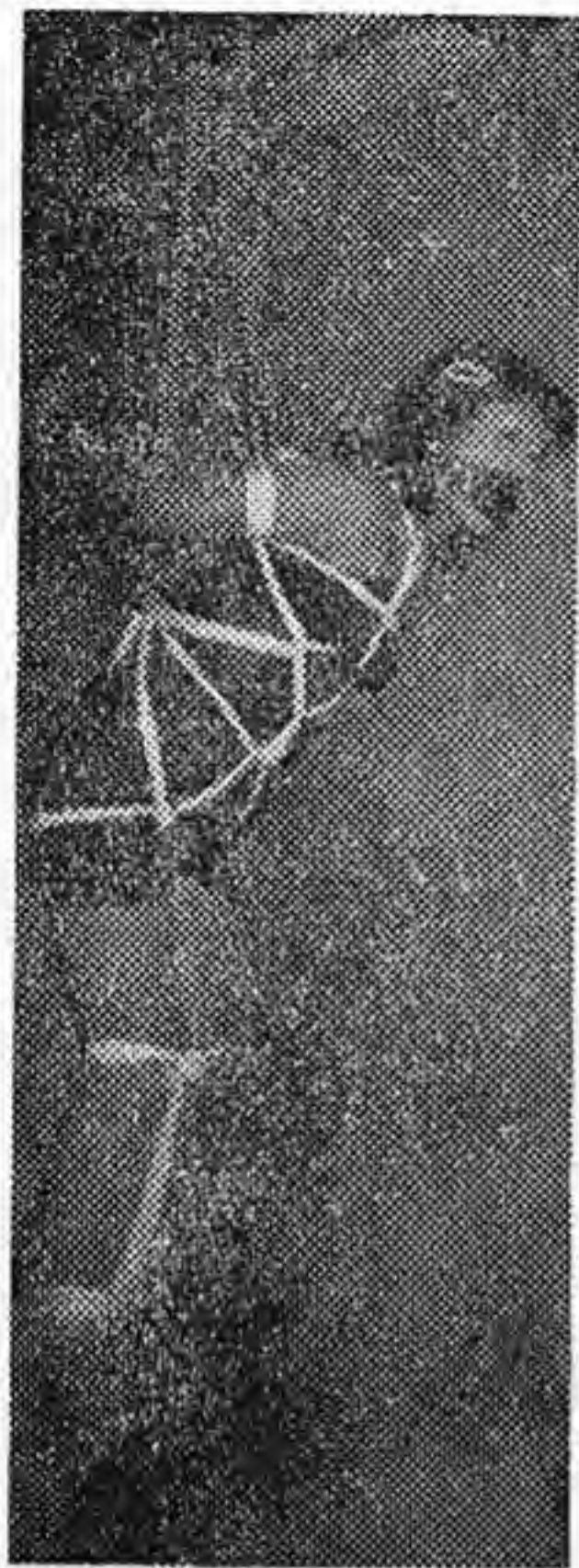
宮城晶子様のイメージ画は、いつ見ても、私を燃えたたせてくれます。

しかし自分で描いてみて、しみじみ難しさがわかりました。どうすれば、このように、柔らかな線



本格的な秋となり、女装趣味の者にとっては絶好のプレイシーズンです。毎月辻村隆さまの『S M カメラハント』は楽しく読ませていただいています。最近是人妻ハ

ントが目立ちますが、不本意なプレイに終わるといったような感じがします。けれどもさすがに辻村さまの文章はそれをカバーしています。私はご承知のように女装の

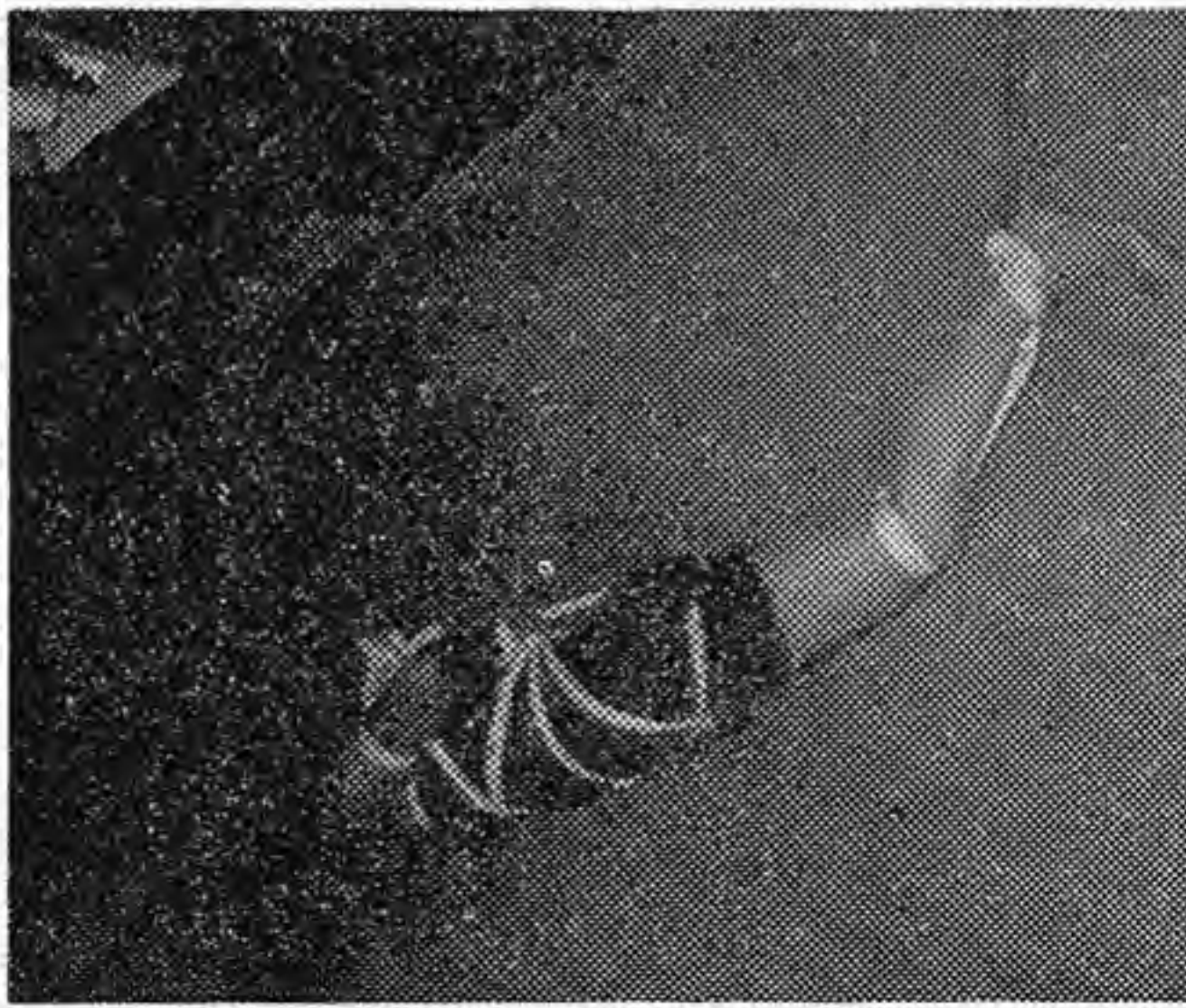


が出るのか不思議でなりません。今、ない画才をふりしぼって、豪様志羽様等を手本として練習しておりますが、どこから書き出していいのやら、道具はどんなものを使うのかまったくわからず、まご

まごするばかりです。しかし、たとえ絵とはいえないようなものでも、描いているとそれなりに楽しくなるものでして、欲求不満のいらいらも消え、不思議に気持が納まるのです。

Mだけに、いつもハントされた女性を自分に置き変えて読んでいますが、そうするととてもすばらしい感じで、まるで女として自分が縛られ、恥かしめを受けているような感じになり、ときにはひとりブラジャーとパンティだけの恥かしい姿で何度も読みかえし、空想の世界にひたります。私が本当の女性だったら、きっとモデル女性として名乗りをあげることでしょ。責めフォトとしては、やはり女性の一糸まとわぬ全裸が最高だと思っています。女装しても女性でないだけに口惜しいかぎりです。

十二月号の『読者通信』で、井風呂秋於さまとお約束しましたとおり、私の女装フォトができ上がりましたので、同封します。女性らしく見えるでしょうか。とても井風呂さまの女装には及びませんし、以前『奇クサロン』に掲載していたいたものに較べますと、もうひとつのようです。



M資料分譲品一覽

○新人S女性出現○

- 遅ましき股に挟まる
大手札四枚一組 略号(あと) 一〇〇〇円
- 素足の脂がべっとり
大手札五枚一組 略号(あて) 一〇〇〇円
- 縛った男をムチで料理
大手札十枚一組 略号(あさ) 一〇〇〇円
- 女王様の人間便器になる
大手札十枚一組 略号(あす) 一〇〇〇円
- 蠟涙の雨を全身に浴びる
大手札四枚一組 略号(あせ) 一〇〇〇円
- 尻の下につぶされた男
大手札二枚一組 略号(あた) 六〇〇円
- エビ責めに弄ぶ女
大手札六枚一組 略号(あそ) 一四〇〇円
- 神酒を与える女神
大手札六枚一組 略号(あち) 一四〇〇円
- 咽喉輪を股責極楽
大手札四枚一組 略号(あつ) 一〇〇〇円
- 素足の足舐と嗅香
大手札五枚一組 略号(あこ) 一〇〇〇円
- M男性を尻に敷く

- 大手札六枚一組 略号(まく) 一〇〇〇円
- 人間犬の芸仕込み
大手札十枚一組 略号(あえ) 一〇〇〇円
- 女の尻に顔がつぶれる
大手札三枚一組 略号(あく) 八〇〇円
- 足指に挟んだ菓子
大手札二枚一組 略号(あの) 六〇〇円
- 男を縛って弄ぶ女
大手札十枚一組 略号(あに) 一〇〇〇円
- 尻責めと股責め
大手札十枚一組 略号(あぬ) 一〇〇〇円
- 大男の訓練風景
大手札十枚一組 略号(みら) 一〇〇〇円
- 男を刺し殺す美女
大手札十枚一組 略号(みむ) 一〇〇〇円
- 男を尻の下に敷く
大手札十枚一組 略号(みう) 一〇〇〇円
- 女の足下にうごめく顔
大手札六枚一組 略号(みれ) 一四〇〇円
- 汚物を戴く男
大手札六枚一組 略号(みわ) 一四〇〇円
- 男を馬にする美女
大手札五枚一組 略号(みか) 一〇〇〇円

- 人間椅子の御褒美
大手札五枚一組 略号(みお) 一〇〇〇円
- 飼犬に餌を与える
大手札四枚一組 略号(みた) 一〇〇〇円
- 浣腸器で男を弄ぶ女
大手札三枚一組 略号(みつ) 八〇〇円
- 股で絞められる首
大手札三枚一組 略号(みね) 八〇〇円
- 芳香を嗅がす尻
大手札二枚一組 略号(みな) 六〇〇円
- 人間馬の調教プレイ
大手札三枚一組 略号(まの) 八〇〇円
- 足舐めの奉仕と強制
大手札三枚一組 略号(まわ) 八〇〇円
- 股責めにあう男の顔
大手札三枚一組 略号(また) 八〇〇円
- 女に縛られて弄られる
大手札三枚一組 略号(まひ) 八〇〇円
- 踏みにじられる顔面
大手札三枚一組 略号(まな) 八〇〇円
- 肩車に奉仕する青年
大手札三枚一組 略号(まは) 八〇〇円

- 男を縛って玩具にする
大手札三枚一組 略号(まて) 八〇〇円
- 首を太股で絞めあげる
大手札三枚一組 略号(まや) 八〇〇円
- 灰皿にされた男
大手札四枚一組 略号(そほ) 一〇〇〇円
- 裸女の長靴に悶ゆ
大手札四枚一組 略号(そに) 一〇〇〇円
- 美女に飼われる犬の生態
大手札三枚一組 略号(そろ) 八〇〇円
- 美女の手で縛られる過程
大手札四枚一組 略号(そと) 一〇〇〇円
- 女御主人に使役される男
大手札四枚一組 略号(そち) 一〇〇〇円
- 美女のおいしい足を戴く
大手札四枚一組 略号(そぬ) 一〇〇〇円
- むしゃぶりつく素足の味
大手札三枚一組 略号(そは) 八〇〇円
- 凌辱と美女のなぶり者
大手札五枚一組 略号(そり) 一〇〇〇円
- 素足を舐める構図
大手札四枚一組 略号(そへ) 一〇〇〇円

「最近版」粒選り麗美女体緊縛力作写真

Z 組 百 態 大手札型印画紙 (9×13 ㎝) 極鮮明焼付

各組 一組一枚 (送料共)

四組四枚 五〇〇円
 十組十枚 一〇〇〇円
 二十組二十枚 一八〇〇円
 五十組五十枚 四〇〇〇円
 百組百枚 七〇〇〇円

(郵便番号 545-19)

大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号
 天星社宛お申込み下さい。

一枚一枚、いずれも一粒選りの素晴しい緊縛フォトばかりを集めました。お好みのモデルの、好きなポーズをお選び下さい。

1 鞭打条痕の臀部(関谷富佐子)
 2 後手は高く縛る(佐々木真弓)
 3 八の字の開股縛(左近麻里子)
 4 狂う女体の表情(ローズ秋山)
 5 縄に苦しむ長身(川越美佐子)
 6 弄ばれる全裸縛(長井葉津子)
 7 ゴム衣縛りの極(木村 洋子)
 8 白肌輝く股間責(山原 清子)
 9 全身縛りを吊る(大塚 啓子)
 10 悦虐に悲泣する(関谷富佐子)
 11 亀甲股間縛り晒(山原 清子)

12 開股強烈羞恥責(木村 洋子)
 13 妊婦の太鼓腹縛(中河 恵子)
 14 縛りの好きな顔(一宮百合子)
 15 美貌の妊婦緊縛(中河 恵子)
 16 縛りの全裸を見て(金原奈加子)
 17 憂愁の佳人縛り(左近麻里子)
 18 前面を晒す裸像(長井葉津子)
 19 亀甲縛りの正面(左近麻里子)
 20 後手縛を見せる(川越美佐子)
 21 鞭は女体に炸裂(ローズ秋山)
 22 遅ましき臀部晒(左近麻里子)
 23 真白の柔肌責め(左近麻里子)
 24 ムチ責めの果て(安井喜久子)
 25 鉄砲逆海老縛り(関谷富佐子)
 26 湯責めにあう女(山原 清子)
 27 変型高手小手縛(川越美佐子)
 28 洋子をいじめて(木村 洋子)
 29 緊縛のホステス(佐々木真弓)
 30 柔肌に喰込む縄(長井葉津子)
 31 均斉のとれた体(佐々木真弓)
 32 涙涙責めの熱演(ローズ秋山)
 33 脚吊りで責める(ローズ秋山)
 34 片足吊りの狂態(大塚 啓子)
 35 猿轡の開股縛り(木村 洋子)
 36 股間縛の縄掛け(ローズ秋山)
 37 妊婦仰臥猿轡責(中河 恵子)

38 二つ重ねの裸女(佐々木真弓)
 39 縛られた洋裁生(長井葉津子)
 40 椅子開股羞恥責(左近麻里子)
 41 責め抜いた挙句(安井喜久子)
 42 黒髪をいたぶる(大塚 啓子)
 43 全裸の股間縛り(山原 清子)
 44 黒総ゴム衣縛り(木村 洋子)
 45 パンティを剥く(大塚 啓子)
 46 緊縛に頬赤らむ(一宮百合子)
 47 猿轡の妊婦縛り(中河 恵子)
 48 全裸高手小手縛(長井葉津子)
 49 黒髪をいたぶる(ローズ秋山)
 50 後手の嚴重縛り(左近麻里子)
 51 麗わしの妊婦縛(中河 恵子)
 52 炸裂する革ムチ(安井喜久子)
 53 剥がされた布片(金原奈加子)
 54 浴槽と荒縄の責(山原 清子)
 55 髪吊りの操り責(ローズ秋山)
 56 高手小手の裸女(左近麻里子)
 57 海老縛りに泣く(関谷富佐子)
 58 恐怖の滑車吊り(大塚 啓子)
 59 悶える全身縛り(一宮百合子)
 60 伸びやかな素足(一宮百合子)
 61 卓上の人身御供(左近麻里子)
 62 皮紐の柔肌責め(中河 恵子)
 63 股間縛を羞らう(金原奈加子)
 64 宙吊りにもがく(木村 洋子)
 65 裸身を晒す表情(金原奈加子)
 66 輝く全裸の悶え(関谷富佐子)
 67 全裸をもがく女(ローズ秋山)
 68 豊満な臀部晒し(佐々木真弓)

69 乳房強調縛猿轡(左近麻里子)
 70 媚を撒く縛り女(佐々木真弓)
 71 縄のブラジャー(左近麻里子)
 72 逆手吊りの鞭打(関谷富佐子)
 73 逆エビで責める(ローズ秋山)
 74 美しき緊縛立像(関谷富佐子)
 75 悶える緊縛全裸(金原奈加子)
 76 鞭で責める女体(ローズ秋山)
 77 両手吊りで晒す(金原奈加子)
 78 豆絞りの猿轡縛(川越美佐子)
 79 あどけなき表情(金原奈加子)
 80 敵しい縄目の肌(金原奈加子)
 81 白肌にむごき縄(左近麻里子)
 82 両手大の字吊り(関谷富佐子)
 83 首縄縛りの裸女(佐々木真弓)
 84 美しき全裸肢体(佐々木真弓)
 85 柱に繋がれた女(長井葉津子)
 86 尻挙げ海老縛り(安井喜久子)
 87 鑑賞用全裸緊縛(川越美佐子)
 88 荒縄縛りの刺青(山原 清子)
 89 股裂きで責める(ローズ秋山)
 90 ドレイ洋子の姿(木村 洋子)
 91 後手に縛上げる(ローズ秋山)
 92 滑車吊りの裸女(大塚 啓子)
 93 若々しき緊縛美(佐々木真弓)
 94 S男がいたぶる(佐々木真弓)
 95 強烈縛りに喘ぐ(山原 清子)
 96 正面全裸柱晒し(長井葉津子)
 97 開股縛りに羞う(左近麻里子)
 98 白肌に喰込む縄(大塚 啓子)
 99 尻立て股間縛り(木村 洋子)
 100 悦虐に泣く美女(安井喜久子)

〔優秀緊縛写真特選集〕

〔光沢印画紙極鮮明焼付〕

緊縛女体撮影風景

大手札四枚一組 略号(むら) 五〇〇円

足挙げ開股責め

大手札三枚一組 略号(あけ) 四〇〇円

猪 吊り三態

梨花悠紀子 略号(いの) 四〇〇円

責め衣縛り

大手札三枚一組 略号(せめ) 四〇〇円

強烈エビ責め

大手札三枚一組 略号(ねむ) 四〇〇円

後手首の高縛り

玉田美佐子 略号(ねへ) 四〇〇円

椅子またぎの責め

大手札三枚一組 略号(ねと) 四〇〇円

全裸脚挙げ縛り

大手札三枚一組 略号(てい) 四〇〇円

全裸アゲラ縛り

長野 良子 略号(てへ) 四〇〇円

全裸屈伸縛り

大手札三枚一組 略号(てほ) 四〇〇円

強烈エビ責め

松本アサ子 略号(まと) 四〇〇円

吊り打ち

大手札三枚一組 略号(やり) 四〇〇円

股間縛り法悦境

大手札三枚一組 略号(ぬこ) 四〇〇円

踊り子緊縛

絹川 文子 略号(りこ) 四〇〇円

月経帯のまま縛り

遠藤百合子 略号(ゆす) 四〇〇円

縄目に悶える夫人

関谷富佐子 略号(ほく) 四〇〇円

髪を引き回される夫人

関谷富佐子 略号(ほむ) 四〇〇円

膨満正面縛り

長野 良子 略号(へな) 四〇〇円

マニヤ全裸緊縛フット

栗本ミチ子 略号(いな) 四〇〇円

強烈エビ縛り

関谷富佐子 略号(もい) 四〇〇円

乳房責めの苦悶

関谷富佐子 略号(もろ) 三〇〇円

全裸ムチ打ち

関谷富佐子 略号(もた) 五〇〇円

強打に泣く裸身

関谷富佐子 略号(むち) 五〇〇円

裸身の晒し

大手札三枚一組 略号(わあ) 四〇〇円

全裸股間縛

関谷富佐子 略号(せら) 五〇〇円

双胸の強調縛り

長野 良子 略号(そう) 四〇〇円

動感海老責地獄

一塚 啓子 略号(とう) 四〇〇円

色禪の開股縛り

長野 良子 略号(いふ) 四〇〇円

鼻責めのアップ

大塚 啓子 略号(はす) 四〇〇円

乳房しばり

長野 良子 略号(うは) 四〇〇円

鼻責めと緊縛

大塚 啓子 略号(うい) 六〇〇円

木馬責三態

大塚 啓子 略号(もく) 四〇〇円

椅子責めの果て

大塚 啓子 略号(いす) 四〇〇円

檻に入れられた女

山原 清子 略号(もの) 三〇〇円

浴室の全裸刺青

山原 清子 略号(よな) 六〇〇円

鼻いじめ三態

山原 清子 略号(はね) 四〇〇円

鼻責め万華鏡

山原 鈴木 略号(はた) 二〇〇円

碧玉裸身緊縛

刑部 典子 略号(のん) 四〇〇円

くすくす責め地獄

大塚 東浦 略号(きす) 四〇〇円

灼熱の蠟涙責め

大塚 東浦 略号(きせ) 五〇〇円

豊満な乳房を責める

大塚 東浦 略号(きそ) 七〇〇円

女奴隷を飼育する

大塚 東浦 略号(きて) 七〇〇円

凌辱されるマソ女

大塚 東浦 略号(きと) 七〇〇円

鼻責め悦楽

大塚 東浦 略号(きな) 三〇〇円

全裸強烈羞恥縛り

大塚 東浦 略号(なの) 四〇〇円

猿ぐつわにあえぐ裸女

大塚 東浦 略号(なむ) 四〇〇円

全裸の緊縛姿態開陳

遠藤百合子 略号(ゆり) 五〇〇円

☆浣腸関連資料の部☆

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
東浦ひかる 略号 (かみ)

強制空気浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
東浦ひかる 略号 (かく)

百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
東浦ひかる 略号 (かな)

浣腸責の極致

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
東浦ひかる 略号 (かむ)

女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 略号 (五〇〇円)
梨花悠紀子 略号 (れち)

強制女体浣腸三態

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
絹川 文代 略号 (きか)

イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 略号 (五〇〇円)
梨花悠紀子 略号 (いるり)

太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
東浦ひかる 略号 (かふ)

自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
遠藤百合子 略号 (ゆか)

浣腸器と女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
絹川 文代 略号 (ほの)

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)
大塚 啓子 略号 (るい)

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
大塚 啓子 略号 (るは)

女体浣腸ブレイ

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ほは)

進ばしる浣腸液

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ほい)

浣腸後の排便

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
大塚 啓子 略号 (へき)

便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
大塚 啓子 略号 (へか)

浣腸される清子

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
山原 清子 略号 (かる)

浣腸に興ずる女

大手札八枚一組 略号 (一三〇〇円)
山原 清子 略号 (かへ)

浣腸に悶える女

大手札七枚一組 略号 (一二〇〇円)
山原 清子 略号 (かに)

イルリガートルの浣腸

大手札五枚一組 略号 (七〇〇円)
大塚 啓子 略号 (けか)

オシメと下着着脱

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
大塚 啓子 略号 (けひ)

イルリガートル

大手札十枚一組 略号 (一五〇〇円)
山原・東浦 略号 (かも)

オシメの中へ排便

大手札五枚一組 略号 (七〇〇円)
大塚 啓子 略号 (けま)

浣腸後カバー装置

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
大塚 啓子 略号 (けさ)

浣腸と便意の苦悶

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
遠藤百合子 略号 (のけ)

高圧空気浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (むい)

浣腸場面大写真

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (むは)

施される浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (むろ)

浣腸をする女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
遠藤百合子 略号 (ゆか)

自ら施す浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ちぬ)

浣腸器を弄ぶ女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ちり)

浣腸を施される女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ちら)

浣腸後介添排便

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)
山原・東浦 略号 (かね)

グリセリン溶液注腸

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)
山原・東浦 略号 (かて)

シリンドーにて浣腸

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)
山原・東浦 略号 (かた)

イルリガートル嘴管挿入

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)
山原・東浦 略号 (かち)

ア・ヌス浣腸補助

大手札四枚一組 略号 (七〇〇円)
山原・東浦 略号 (かの)

浣腸に興ずる清子

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)
山原 清子 略号 (うも)

浣腸される浣腸マニア

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)
山原 清子 略号 (うわ)

浣腸悦楽独りプレイ

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
美木乃々子 略号 (ぬる)

施される浣腸の美味

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
美木乃々子 略号 (ぬか)

挿入された嘴管

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)
大塚 啓子 略号 (るて)

襲いくる浣腸器

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚 啓子 略号 (るち)

女体浣腸独り遊び

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ると)

絵・緑JOE



○

奇クを読んでいつも感じることだが、他誌に比べて、一種の重みといったものを感じる。(風俗文獻誌として)それは、告白、奇クサロンや読者通信などを通して、読者の声が、常連作家(現在、常連は正確には、三、四人。つまり一面では常連がほとんどいない。別の一面では読者全体が常連であるといえる)に混って奇クを盛りたてているということである。特に奇クサロンは、写真、イメージ画、短文などがひしめきあい奇クの中で重要な位置を占めている。奇クサロンの一層の充実を望む。自分で、この文章を書いてみてわかったが、奇クを理解(そんなにむずかしく考えることはないが、ぼんやり読み流しが殆どであるから)するに役立つ。最近A感覚に関するものが多くなった。私は最近まで「A感覚」や「浣腸」な

どに余り関心がなかったのだが、今では、大分興味がわいてきた。

(東京都杉並区・真野俊彦)

○

フォト贈呈、有難う御座居ました。厚く御礼申し上げます。十二月号も書店に出ると同時に入手致しました。最近書店への入荷も多くなっている様ですが、なくなるのも早く少しおくれるとあちこち探し廻る様になりました。被虐の旅シリーズは十一月号に引続いて今月号も楽しく読ませてもらいました。その中に書かれてある責めよりもムードが大好きです。余計なことですが、作者がはっきりしない方が読む方にとっては有難いです。今読んだ文章そのものより他に想像する楽しみがあります。作者もその内で、イメージをこわさない方が楽しみが倍加します。次に貴誌全体について見ますと、写真、さし絵がひと頃より増えま

したがもっと欲しいです。欲をいえば切りがありませんが、増えなければ内容を充実して欲しい。写真を一頁大にするとか、上質紙を一部使うとか。我々マニヤは成人雑誌といわれ差別を受けてまで買いたい読み度いのですから、余り無理をいって弾圧を受けるようなことは望み度くありませんが、何ともあきらめ切れません。

(広島県・深田 清)

○

昨今の寒さが冬を感じさせる今日この頃、貴編集部の御諸兄いかがお過ごしですか。わずかずつながら表現の自由の幅が拡がりつつある世相を反映し、貴誌ますます繁栄に向かっておられる様子、御同慶の至りです。さて今度九月号を読んで拙い感想を書いてみました。私の好みからいって最も読ませたのは南彦造氏の小篇、女責め図絵の系譜「煙管と女に想う」で、題材が一風変わっているばかりでなく、文体自体が奇をてらわず押えた調子で書かれていて格調の高さと、他の文には、なかなか見られない確かさを感じられました。元禄の頃のくるわの奥、物憂い夏の昼下りに、吊し責めにあい油汗のため、ぬめったような肌を

あえがせている遊女のビンの乱れの凄絶な悩ましさがまざまざ浮かんできます。また、この想像を裏切らないさし絵も実に素敵です。私は特に時代物のSM読物が趣味で非常にポピュラーになっているものに例をとれば、五味康祐氏の「色の道教えます」に出てくる鰻責めやタンポ槍等、或は、山田風太郎氏の小説に書かれている女忍者のどじょう責め、捕えた女使者を片足吊りにし、局部を切りとった毛髪で責める場面等には、何ともいえない「味」を感じます。いったいにSMの趣味は爛熟した文化が産み出す頹廢の中から出て来るもので、本来、優雅さと切り離すことが出来ないものであるというのが私の持論で、元禄等の時代背景にひかれる理由はここにありますが。従って、ただ徒らに激しさのみを求めるのは低次元のSMで不粹としか言い様がないと思うのです。この点については、生ぬるいとかの御叱りを受けると思いますが、激しさのみを求めて尖鋭化するより、例えば舞台装置に趣向をこらすように、ひ弱な虚飾の中に優雅さを求める方が良い趣味であると思うのです。至らぬ身で生意気なことを書きましたが、奇ク

(東京都府中市・杉井友三)

||御送金についてのお願い||

現金を普通郵便物に封入する
ことは、郵便法によって禁止さ
れています。現金での御送金の
場合には必ず「現金書留」でお
願い致します。他に、振替等の
方法もあります。で、ご利用下さ
い。尚、便宜上、「切手代用」に
ても結構ですが、必ず一割増に
てお願い致します。

(滋賀県・守山弘)

冬もま近かになってまいりましたが、奇ク愛読者の皆さま、お元気ですか。私はSM小説を書きたいと勉強しております一女性でございます。容貌やスタイルに自信がありませんので、せめて文章の上で自分の思いを書きあらわしてみたいと、家事の合い間を見てはこつこつと書いておりますが、なにしろ、何一つ体験したこともなく、頭の中の空想だけで書くものですから、とてもお見せするようなものは書けません。時には自分でもびっくりするような露骨な文章を書いたりして、ひとりで顔を赤らめております。本誌の記事の中では、やはり「花と蛇」「カメラハント」「カメララルポ」などが

(大阪府堺市・土井悠子)

(美加輪生)

私は埼玉熊谷に住む二十九才、妻二十六才子供一人の夫婦です。私の方は愛読して七年のSですが

妻は全然、興味を示してくれませ
ん。結婚して五年、近頃は妻との
交渉も色あせて困っております。
何かと妻に話を持ちかけてはいる
のですが、夫婦交換だったらい
いのですが、夫婦交換だったらい
と聞いています。このような私達
と交際いただける御夫婦の方、御
手紙下さい。また私はSですので
M性の女性の方の呼びかけも希望
します。お互いに秘密を守って末
長く交際したいと思ひます。

(熊谷・山田義夫)

東京の浜口里子様。貴女のお便
り拝見いたしました。私は四年前
からの奇クの大ファンですが、い
まだにプレイの経験は一度もござ
いません。貴女の呼びかけを拝見
して、私は貴女を奴隷女として調
教してみたいとSの欲望が湧いて
きましたのでペンをとった次第で
す。犬の首輪をはめ、四つん這い
にして犬の真似をさせたり、下着
のかわりに責具をつけさせた上に
服を着せて外出させたり、その他
色々の方法で貴女を責めてあげま
しょう。私と一緒に楽しいプレイ
をしませんか。

(広島県・能地律夫)

福岡並びに近県の愛読者の皆様

私は奇譚クラブを愛読しはじめて
早や五年になります。「カメラ・
ルポ」等、特に楽しく読ませてい
ただきました。さて、SMについ
て机上論、または想像だけに終わ
ってしまう方が多いのではないか
と思います。それは誠に残念なこ
とです。この機会に、実践的にS
Mの極を求めて研究し合おうでは
ありませんか。皆様の大きな参考
になるものと思ひます。愛読者の
方々、Mを研究する会をつくらう
ではありませんか。直方の緒方さ
ん、貴女もご賛同いただければ幸
甚に存じます。

(北九州市・縄紋美樹夫)

栄山あつ子様。お便り拝見し、
早速、御返事します。貴女よう
な女性を責めることが私の念願で
す。ご希望どおりミッチリ責めて
あげましょう。死ぬほど恥かしい
羞恥責めにあって悶え泣く貴女を
想像すると、たまらなくなってい
ます。先ず貴女を素っ裸にして後
手に縛り上げ、更に海老責めにし
て仰向けにころがすのです。貴女
の体は余すところなく露呈されま
す。そして私の考案した「リング
責め」を行なうのです。細い針金
で小さな輪をつくらせておき、それ

安井・中川・金原緊縛写真

大手札印画紙極鮮明焼付フोट	開股羞恥責めの姿態	髪吊りで強烈ムチ打ち	片足首引きつけ縛り	尻立て鞭打ち艶姿	柔肌に炸裂するムチ	エビ縛りの鞭打ち	貞操帯着用鞭打ち	痛打にもがく美女体	あぐら縛りの羞恥責	片脚挙げで晒す裸身	大手札三枚一組	中河 恵子
大手札四枚一組	大手札四枚一組	大手札四枚一組	大手札四枚一組	大手札四枚一組	大手札四枚一組	大手札四枚一組	大手札四枚一組	大手札四枚一組	大手札四枚一組	大手札四枚一組	四〇〇円	略号△とは▽
五〇〇円	五〇〇円	五〇〇円	五〇〇円	五〇〇円	五〇〇円	五〇〇円	五〇〇円	五〇〇円	五〇〇円	五〇〇円		
安井喜久子	安井喜久子	安井喜久子	安井喜久子	安井喜久子	安井喜久子	安井喜久子	安井喜久子	安井喜久子	安井喜久子	安井喜久子		
略号△しう▽	略号△した▽	略号△しち▽	略号△しつ▽	略号△して▽	略号△しと▽	略号△しや▽	略号△しゆ▽	略号△しよ▽	略号△しよ▽	略号△しよ▽		
五〇〇円	五〇〇円	五〇〇円	五〇〇円	五〇〇円	五〇〇円	五〇〇円	五〇〇円	五〇〇円	五〇〇円	五〇〇円		
中河 恵子	中河 恵子	中河 恵子	中河 恵子	中河 恵子	中河 恵子	中河 恵子	中河 恵子	中河 恵子	中河 恵子	中河 恵子		
略号△とは▽	略号△とは▽	略号△とは▽	略号△とは▽	略号△とは▽	略号△とは▽	略号△とは▽	略号△とは▽	略号△とは▽	略号△とは▽	略号△とは▽		
四〇〇円	四〇〇円	四〇〇円	四〇〇円	四〇〇円	四〇〇円	四〇〇円	四〇〇円	四〇〇円	四〇〇円	四〇〇円		

中河 恵子	膝頭縛り開股竹棒責め	竹棒開股足首縛り	股間縛りの裸身表情	菱縄縛り猿ぐつわの表情	乱痴戯騒ぎの結末	菱縄縛りで床に喘ぐ	浣腸責めの甘い恐怖	浣腸液の注入直後	強制浣腸の各姿態	浣腸責め的美態開陳	浣腸を待つポーズ	中河 恵子
大手札三枚一組	大手札三枚一組	大手札三枚一組	大手札三枚一組	大手札三枚一組	大手札三枚一組	大手札三枚一組	大手札三枚一組	大手札三枚一組	大手札三枚一組	大手札三枚一組	大手札三枚一組	中河 恵子
四〇〇円	四〇〇円	四〇〇円	四〇〇円	四〇〇円	四〇〇円	四〇〇円	四〇〇円	四〇〇円	四〇〇円	四〇〇円	四〇〇円	略号△とも▽
略号△とに▽	略号△とほ▽	略号△とへ▽	略号△とち▽	略号△とり▽	略号△とぬ▽	略号△とる▽	略号△とか▽	略号△とま▽	略号△とみ▽	略号△とめ▽	略号△とも▽	
四〇〇円	四〇〇円	四〇〇円	四〇〇円	四〇〇円	四〇〇円	四〇〇円	四〇〇円	四〇〇円	四〇〇円	四〇〇円	四〇〇円	
中河 恵子	中河 恵子	中河 恵子	中河 恵子	中河 恵子	中河 恵子	中河 恵子	中河 恵子	中河 恵子	中河 恵子	中河 恵子	中河 恵子	
略号△とは▽	略号△とは▽	略号△とは▽	略号△とは▽	略号△とは▽	略号△とは▽	略号△とは▽	略号△とは▽	略号△とは▽	略号△とは▽	略号△とは▽	略号△とは▽	
四〇〇円	四〇〇円	四〇〇円	四〇〇円	四〇〇円	四〇〇円	四〇〇円	四〇〇円	四〇〇円	四〇〇円	四〇〇円	四〇〇円	

を貴女にはめるのです。貴女のふくよかな唇をこじあげ、舌を引き出し、リングをキツチリと舌のつけ根にはめこみます。貴女の体は貴女の意志にそむいて反応してくるのです。リングをはめられた可愛い舌はそり返っていくのです。舌のつけ根にキツチリとはめこまれたリングは、舌が緊張するにつれて強く食いこみます。貴女は羞恥と快感と苦痛の中で悶え泣くのです。そして貴女の完全な屈服を示すのです。貴女が全く抵抗力を失うまで責め抜いた上で、私はユツクリと止めをさすのです。こういう空想が早く実現することを熱望しています。

(横浜・杉山慶市)

私は「花と蛇」のような羞恥責めを好むSマニヤです。奇クを読みはじめて一年余りになります。未だ正式のSMプレーを行なったことはありません。未婚既婚を問いませんから、ぜひ愛読者の美しい女の方、私に恵みを垂れて下さい。私は生活の安定した妻帯者です。後難をおそれる心配は全くありません。私の性向は残酷を嫌う心理責めで、女と全裸に剥いて羞恥美を引きずり出し、パイプ

レーターと浣腸によって極限を求め、美しい女の神酒を尊びます。変哲のない一般通常プレーのようですが、根気よさの点で貴女に最高の羞恥の美態を演じさせてみせる自信があります。どなたか、おたより下さい。

(垂水・責鯛夫一)

八月号の読者通信の栄山あつ子殿。貴女が投稿されて早や三カ月が過ぎていますが、誰も貴女をいじめてやろうとの勇氣あるものが、一人も出ないとは、ちいと淋しい気がする。それならばと、小生が名乗りでよう。おめえさんは、あんな申し出の責めで満足するのかい。いやいや、小生は貴女をいじめめるのに、あんな生ぬるいことにはせん。と言えども小生は今日まで女性の責めの経験はない。しかし小生の頭には、貴女のしごきのストリーが出来上っている。勿論プレーとして常道を踏みはずしてはいない。小生は血を見るのがいやだ。貴女を縄の苦しみから享樂の花園に送ることを目的とするのだ。小生の頭にある貴女に授けるストリーの一節を書いて見る。先じ貴女は小生の手でパンティー一枚の姿になってもらう。次に貴女

可憐表情の全裸縛り 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆめ	立縛り正面裸晒し 大手札四枚一組 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆえ	両手吊り全裸晒し 大手札四枚一組 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆひ	雁字搦目後手縛り 大手札四枚一組 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆあ	股間縛り柔肌責め 大手札四枚一組 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆも	猿ぐつわ開股責め 大手札四枚一組 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆに	豊満な臀部強烈責め 大手札四枚一組 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆほ	強制全裸開股責め 大手札四枚一組 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆみ	股間縛りで悶える 大手札四枚一組 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆろ	全裸縛りに羞らう 大手札三枚一組 四〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆへ	私の妊娠腹を見てね 大手札四枚一組 五〇〇円 中河 恵子 略号 八ゆわ	縛られた妊婦横臥す 大手札四枚一組 五〇〇円 中河 恵子 略号 八ゆよ
被虐に燃える全裸妊婦 大手札四枚一組 五〇〇円 中河 恵子 略号 八ゆぬ	尚も見せたい妊婦腹 大手札四枚一組 五〇〇円 中河 恵子 略号 八ゆる	股間縛り首縄正面 大手札三枚一組 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よれ	両手吊り正面晒し 大手札三枚一組 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よそ	全裸高手小手の麗身 大手札三枚一組 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よの	全裸股間縛りの媚態 大手札三枚一組 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よや	強烈な変型エビ縛り 大手札三枚一組 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よい	正座猿ぐつわの仕置 大手札三枚一組 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よふ	凄絶海老責め地獄 大手札三枚一組 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よえ	女体二つ折り縛り 大手札三枚一組 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よぬ	あぐら縛り全裸晒し 大手札三枚一組 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よあ	イルリの浣腸責め 大手札三枚一組 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よた

の体にまといつく縄だ。普通の縄じゃ面白くない。麻、しゅろ縄、こんなものがないだろう。その縄で貴女の上半身は肉のかたまりになる。次に鼻だ。貴女はイヤリングを持参せよ。それがトンネルとトンネルのかべに食いつく。それに細ひもが下る。その細ひもはパンティの中を通り、後ろ頭のかみの毛に結ぶ。しばらく苦しんでもらう。貴女に残された唯一つのパンティは脱いでもらおう。そのパンティは貴女の口の中だ。これは小生の考えた貴女へのストーリーのさわりである。もう貴女も覚悟は出来ているものと思う。早速便りもらおう。

(岡田キク同人会・陽気な男)

○ 団鬼六様。先生の名が週刊誌で取り上げられて喧伝され始め、私を悲しませておられます。先生が有名になっていかれるのはファンとして喜びに違いはないのですが、先生が何か遠い所へ、手の届かない所へ行ってしまうような気がしてならないのです。そして先生のあの甘美な責めの描写が、ほこ先をゆるめしてしまうのではないかと心配なのです。近頃の盛り上がり、より一層、華麗ですので、

余計に心配でたまりません。こつそりとマニヤだけ楽しんでいたものが、SMの深淵を理解できない人々によって踏みこまれてしまふことのないように先生の精進と自愛をお願いします。

(小林千恵)

○ 十二月号の丸鬼土佐渡氏の「浣腸責め考」は面白かったが、その中で、浣腸器の種類で二〇〇CC(トップKK製)の、いわゆる浣腸マニヤ待望の製品のあるのが書いてない。つぎに、使用液について。「ドナン」は急速に便を催し余程のマニヤでなければ五分も耐えられない。それに手近かなもので「食塩水」が浣腸に非常によいことが案外、知られていない。いわゆるグリセリン(うすめない)と食塩水を混ぜて浣腸し、時間を耐えさせるため二センチ乃至三センチぐらいの栓をすれば、少なくとも十分二十分は我慢できる。そのかわり油汗が出て、腸の中はグルグル鳴りどおしである。二十分ぐらいたって失神寸前で栓を抜くと便液がほとぼしる。浣腸マニヤとしては最高のプレイである。試みられたら如何。

(東京・浣腸キチ)

大手札印画紙焼付

〔緊縛女体美のシリーズ〕

両手吊りに悶える女体

大手札印画紙焼付 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もえ▽

強烈なる甘いムチの洗礼

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もゆ▽

ムチに狂い哭く美貌の夫人

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もよ▽

半吊りでムチ打つ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もす▽

逆エビの味に感泣する

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もせ▽

ムチの一打に反りかえる

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もれ▽

関谷夫人の女体陳列

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もる▽

尻立ての鞭撻ポーズ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もて▽

片足吊り挙げて喘ぐ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もな▽

私をムチ打って頂戴ネ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もね▽

脂ぎった女体を縛る

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もむ▽

鞭は柔肌に炸裂する

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もう▽

滑車吊りに甘い鞭

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もき▽

両手万才吊りに鞭打ち

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もこ▽

狂う鞭に哀切表情の夫人

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もみ▽

浴後の剃玉子縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号△はゆ▽

投げたす白い緊縛裸身

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はよ▽

待望の脚挙げ緊縛姿態

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はて▽

二つ折り女体エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号△はお▽

柱の前に緊縛された全裸

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はの▽

神妙なプレイ寸前の女身

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号△はひ▽

○東京ET様。九月号、十一月号の奇クサロン、拝見させて頂きました。どうか私達をプレーの仲間に加えて下さい。私達は、まだ結婚してはおりませんが、二人とも二十八才でSMのプレーは何度か行なっております。彼女はまだ完全にM化されてはいません。経験は短い方ですが、吊りなども行なったことがあります。写真は始めは現像など困りましたが、今ではどうか自分で処理できるようになり、かなり撮りました。彼女は貴方とのプレーを願っていますので、ぜひお逢いできたらと思っています。

○(東京都・大神次郎)

鯖初子さん。マンネリ化したお二人のプレイに新しい息吹きを求めている呼びかけを拝見し、より豊かな実りあるSMの世界が切り拓かれるお役に立てればと、拙いペンをとりました。私は十数年来、奇クを愛読してきましたが、先年ある機会からプレイを楽しまれる夫婦と知り合い、御多聞に洩れぬSMプレイのマンネリを私が考案加工しました携帯用、定置用の組立パイプや木製架台など、プレイ

環境に適応した加虐器具を製作、寄贈し喜ばれた経験があります。縄一筋の緊縛も、その責めを強調する器具を併用すれば、より一層効果も増し、その中で呻吟する貴女の悦虐感も増進、妖しくも美しい女体の桃源境が拓かれるのではないでしようか。私はゴテゴテした縄だけの緊縛よりも、最小限に拘束された中で最大限に変化する自由な悦虐女体の姿態の美しさに限りない憧憬を憶える、ささやかなサジスチンです。

○(吹田・新庄一)

羽鳥水江様。久方振りに貴女の記事を見て嬉しく思っています。私達夫婦は結婚して十数年になりますが、夫婦生活に浣腸を取り入れて変化ある楽しい日々を送っています。記事の中に蛙腹になるまで三リットルぐらいの浣腸云々とありましたので、同じように大量浣腸を好むワイフの排出液を便器に取り計量してみましたら、二リットルちよつとありました。お腹に残っている、いくらかの液を考えると、それ以上、苦痛もなく入ったことになり、心持よさそうに浣腸を受けたワイフの様子から分かります。ワイフも貴女と同じ

開股縛りに喜ぶ女

大手札四枚一組 略号△はわV 五〇〇円

全裸の女体立ち縛り

大手札三枚一組 略号△はふV 四〇〇円

黒縄は白肌を酷に彩る

大手札三枚一組 略号△はほV 四〇〇円

悦虐に身もたえる美女

大手札四枚一組 略号△はあV 五〇〇円

菱縄は白肌をくびる

大手札三枚一組 略号△はうV 四〇〇円

柱に立縛りでさらす

大手札四枚一組 略号△はさV 五〇〇円

卓上の開股羞恥責め

大手札四枚一組 略号△はめV 五〇〇円

無防備の女体を開陳

大手札四枚一組 略号△はしV 五〇〇円

遠山静子夫人の立縛り

大手札四枚一組 略号△はもV 五〇〇円

若妻の魅力を発散する

大手札三枚一組 略号△へむV 四〇〇円

後手縛り全裸身の魅力

大手札三枚一組 略号△へめV 四〇〇円

悶える猿轡の裸身

大手札三枚一組 略号△へもV 四〇〇円

ムチ打ちの陶酔境

大手札三枚一組 略号△へさV 四〇〇円

両手吊りで痛める女身

大手札四枚一組 略号△へしV 五〇〇円

後手縛りの竹棒責め

大手札四枚一組 略号△へすV 五〇〇円

強烈開股強制縛り

大手札三枚一組 略号△へせV 四〇〇円

両手吊りであえぐ女体

大手札四枚一組 略号△へゆV 五〇〇円

竹棒強烈開股責め

大手札三枚一組 略号△へたV 四〇〇円

厳しき緊縛の正坐責め

大手札四枚一組 略号△へちV 五〇〇円

責めの魔手に屈伏する

大手札四枚一組 略号△へつV 五〇〇円

竹棒の胴絞め責め

大手札四枚一組 略号△へてV 五〇〇円

竹棒開股胴絞め縛り

大手札四枚一組 略号△へとV 五〇〇円

ように小さい時から浣腸好きで私と一緒にになって繰り返しプレイすることによって大量の浣腸を楽に受け入れるようになったものと思います。浣腸の経歴だけは貴女様に劣らず長いのですが、まだまだ御指導ねがうことがいろいろな面であると思います。

（東京・吉川和夫）

増田喜代司様。私の呼びかけに對して、さっそくご返事いただきまして本当にありがとうございます。何度も何度も読みかえしました。私も千葉市に六年ほどおりました。冬になりますと風が強くなり一日で室内が真白な砂ぼこりで、よごれてしまったことを今でも思い出します。サロンの楽我記の辻村様の記事を拝見いたしました。千葉にお住まいなんだなあ、と分かったような次第です。グループを作る件、楽しいことです。ぜひ、実行したいものです。私のプレイのフォト等も、かなりありますのでお送りして、ご感想などおうかがいしたいものです。どうかこれからもよろしくアドバイスの程を。埼玉の安原様大変、参考になりました。今後とも、よろしくお願いいたします。お互い、フォトの交

換などしたいですね。

（東京都・YY生）

奇クの発展を心より喜んでいます。辻村先生のカメラ・ハントの大ファンですが、いつまでも頑張っただけでは私達を楽しませて下さい。御活躍を期待します。私は、奇クを読みはじめて、十年近くになります。終生、奇クのとりことなっています。離れる事ができないと思います。臨時増刊号を発刊の予定だそうですが、今から大いに期待しています。すばらしい内容のものを発表して下さい。十二月のカメラ・ハントは人妻の責めの写真が見事でした。欲をいえば、もう少し鮮明度があれば？ と思いましたが、紙質の関係で無理でしょうね。どうか工夫して、少しでもよい写真を掲載して下さい。

（東京都・山東和夫）

兵庫おさむ様。あなたの通信記事、写真を楽しみにしています。発表された数枚の写真に私の胸はおどりました。私の趣味が、あなたのそれに近接していると思います。どうか今後とも御投稿下さい。

（東京・由利一夫）

最新撮影総天然色
カラー・プリント写真

両手吊りに悶える女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
大塚 啓子 略号八てき

後手裸身柱縛り

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号八てか

縄目にあえぐ裸女

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号八てく

豊麗な裸身をくびる縄目

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号八てこ

後手高手小手縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
大塚 啓子 略号八てま

長襦袢の緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号八てみ

緋の腰巻緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号八てむ

猿ぐつわに呻く女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号八てめ

柱宙吊り強烈縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号八ても

ポリウムを縛りあげる

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号八てん

縄に苦悶する裸女を狙う

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号八てる

真紅の腰巻着用姿態

大手札二枚一組 略号八〇〇円
大塚 啓子 略号八うお

縄に悶える緊縛色模様

大手札二枚一組 略号八〇〇円
東浦・大塚 略号八うて

真紅の腰巻着用縛り

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号八うこ

華麗なる緊縛裸身

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るむ

みだらな開股縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るの

責めに疲れた諦観

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るお

真紅の腰巻姿で緊縛

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るま

羞らいの真正面縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るけ

若肌に喰い込む縄目

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るふ

高手小手後手縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るや

股間縛りの開股姿態

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
中河 恵子 略号八れよ

羞らいの股間縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
中河 恵子 略号八れに

奇ク十二月を拜見、早速ペンを手にとりました。辻村隆氏の「カメラ・ハント」の文中に「そろそろカメラ・ハントにピリオドを打つつもりでいた云々……」の一節が目に入ったからでした。結論から先に申し上げると、これは奇クにとって由々しき一大事と思つたからです。私もカメラ・ハントの大ファンというより、奇クを愛読するようになった原因の一つは、この辻村氏のカメラ・ハントなのですから……これは私一人のみならず、カメラ・ハントの支持者が如何に多数、存在しているかという証左が歴然としていると思ひます。勿論、色々な声もあるでしょうが、カメラ・ハントが奇クのピカ一的存在であることは、誰しも認める私には信じています。私は奇クの永続を望むと同時に辻村隆氏のカメラ・ハントに於ける御健筆を改めて熱望して止みません。

(仙台市・奥の細道生)

愛読者の皆様、如何お暮しですか。私は奇クを読みはじめてから八年ぐらひになります。始めは好奇心で読んだのですが、だんだん興味が出てきて、今では奇クから離れられなくなりました。私は毎

日のように奇クを読んで頭の中で女性への責めを空想しています。しかし、それだけでは私の心をいやしてはくれません。M女性の方で私の奴隷になって下さる方がおられましたら、お便り下さい。夢の世界へお連れします。

(東京・藤良生)

はじめ、お便りさせていただきま。私は三十すぎの会社員です。妻はおりますが私の趣味を全然、理解できないたちなので、飼育もあきらめざるを得ませんでした。私の好みはSMFのすべてでしょう。浣腸、オムツ、強制排便、排尿、など、徹頭徹尾、排泄を中心とした羞恥責めです。女性のプレイ・メイトが欲しいのですが、残念ながら一人もないものです。から、今のところ、きわめてM的に独りプレイしております。M女性の方、ぜひお便り下さい。また同好の方、お声をかけて下さるよう、おねがいします。

(東京・吉村幸彦)

久方振りにお仲間に入れて戴きたく、お便りいたします。奇譚クラブも二十五歳の齡を経て、益々発展されており、蔭ながら喜んで

双胎臨月蛙腹鮮烈写真

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れやV

双胎臨月腹強烈縛り

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れゆV

臨月腹裸身の媚態

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れえV

黒縄縛りの媚態

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
中河恵子 略号八れぬV

立縛りにあうの裸女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
木村洋子 略号八れねV

開股された股間縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
木村洋子 略号八れのV

豆絞りの猿ぐつわ縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
木村洋子 略号八れむV

柱宙縛りに喘ぐ刺青女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やかV

高手小手に悶える全裸

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やきV

緊縛に映える入墨の肌

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やくV

脱がされた緊縛刺青女体

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やもV

縄にのたうつ入墨裸身

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やしV

腰巻一つで縛られる刺青女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やみV

女相撲迫力投業連続動作

大手札十二枚一組 略号五〇〇〇円
大塚・東浦 略号八なるV

恵子の妊孕美観賞

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
中河恵子 略号八ぬめV

孕み若妻の羞らい

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
中河恵子 略号八ぬねV

八の字の開股責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しいV

足枷強制開股責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しみV

全裸強烈逆エビ責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しけV

両手吊り足枷責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しこV

両腕逆手吊り責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しらV

豊満なる臀部責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しれV

大の字縛りと足挙げ責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しわV

お申込みは大阪阿倍野局私書箱第14号天星社宛へ願います。

おります。東大阪市の鯖初子様、一度、お会いしてみたいと思ひます。振りかえれば今日まで、奇くにより小生のS性を、よく導いていただき有難いと思ひます。一度蔵書を処分しては見たものの、生来のS性が忘れられず、最近、花と蛇に熱中している白髪まじりの男です。作中の静子夫人のような女性に巡り合うだけで小生は、もう何も言うことはありません。それから大阪の人で錫半に御勤務の方。小生が貴重な御本を拝借したまま未だ御返しせず、御迷惑をおかけいたしましたことを誌上をお借りしてお詫び申し上げます。何とかお逢ひして、お返却いたしたいと思ひております。

(西宮市・谷本武雄)

東大阪市の鯖初子様。十二月号のお呼びかけ、大変、嬉しく拝見いたしました。私は当年三十八才の公務員で、本誌の愛読歴もすでに十年を越えんとしております。この間、待ちに待っていた年上のM女性に遂に現われましたことはこの喜び、到底、筆舌には現わし得ないものがあります。私は或る事情により、十数年前、かつての兄嫁(三才年上)を妻にするに至

って、その後、濃厚な年長女に慣らされたためか、年下の女の人には全く興味がなく、折りあらば中年女性と一度、プレイを……と思いつつ、適当な相手にめぐり合うこともなく、独り酒濁の日々を過ごしておりましたところ、突然、貴女からのお呼びかけ、全く旱天に滋雨の心地で、早速、筆をとった次第です。若し貴女とのプレイが許されるならば、私は次のことを試みたいと思ひます。それは私の家にあつた古書から引用したもので、辻村隆氏も塚本氏も写真で見ると限りにおいては、未だお見受けしない捕縛法で、つまり、わずか一尺余りのコヨリ一本で以て、貴女の豊満な肢体を恥かしい開股全裸晒しに、手足の自由を奪う方法です。パイプ等によるインスタント方法でなく、じっくりと手作りの味を、お目にかけます。すなわち謀叛責め(菊花攻め)栗責め綱渡り、縄鞭等々。そうした浅ましい姿を写した写真と共に体験記の寄せ書きを作ってみませんか。

(兵庫県高砂市・味田満)

十二月号は鼻の花盛りで、マニヤには堪まらない嬉しい記事でした。大変、興奮しましたので久し

編集部特写緊縛女体資料

逆さ吊りの臨月妊婦

大手札三枚一組 略号△さめ 五〇〇円

両手吊りの臨月妊婦

大手札三枚一組 略号△さめ 四〇〇円

若妻初妊娠の哀歎

大手札三枚一組 略号△さい 四〇〇円

妊婦の全裸縛り全身

大手札三枚一組 略号△さい 四〇〇円

妊婦腹の緊縛側面

大手札三枚一組 略号△さみ 四〇〇円

強烈縛り妊婦責め

大手札三枚一組 略号△さる 四〇〇円

若妻の緊縛妊孕美

大手札三枚一組 略号△さま 四〇〇円

膨満の妊婦乳房責め

大手札三枚一組 略号△さむ 四〇〇円

臨月腹の全裸晒し

大手札三枚一組 略号△さち 四〇〇円

躍動する妊婦の裸像

大手札三枚一組 略号△さほ 四〇〇円

妊娠という異常美の女体

大手札三枚一組 略号△さへ 四〇〇円

見てほしい臨月腹

大手札三枚一組 略号△さと 四〇〇円

妊婦全裸の全身肢體

大手札三枚一組 略号△ささ 四〇〇円

全裸正面の縄掛け

大手札三枚一組 略号△れろ 四〇〇円

柔肌の高手小手縛り

大手札三枚一組 略号△れほ 四〇〇円

後手首を縛られた少女

大手札三枚一組 略号△れへ 四〇〇円

飼育された美少女縛り

大手札三枚一組 略号△れと 四〇〇円

縛られた美女二人

大手札三枚一組 略号△とそ 四〇〇円

全裸の美女を連縛する

大手札三枚一組 略号△とれ 四〇〇円

白肌に喰い込む縄目

大手札三枚一組 略号△とわ 四〇〇円

一糸まとわぬ柔肌縛り

大手札三枚一組 略号△とら 四〇〇円

開陳した華麗縛り肢體

大手札三枚一組 略号△とゆ 四〇〇円

縄に喘ぐ諦観の相

大手札三枚一組 略号△とえ 四〇〇円

ぶりにペンをとります。六月号で犬畜生氏、美枷輪氏、M七〇生氏と、小生に鼻隔壁穿孔の指導を求められ、続いて十一月号では東京YY生氏の鼻責め願望の投稿に対して、小生の体験を貴社を通じて転送お願いしました。十月号には「被虐鼻」があり、十二月号には美枷輪氏の「鼻輪」があり、辻村氏は増田氏寄贈の鼻輪のフォトを発表され、増田氏は東京YY氏へ同志として呼びかけられ、犬畜生氏は鼻輪のフォトを発表され、読者通信では安原氏がYY氏へ呼びかけられ、ホントに嬉しい記事ばかりで、ありがとうございます。美枷輪氏が穿孔の跡釘を切断して栓をはめるそうですが、それは面倒ですから、炊事用の太い竹箸を切って、順次、太いのと差しかえます。また安全剃刃の刃を折って尖った先端で軟骨から鼻柱の裏まで徐々に切りとってカードリングを二コはめて上下に張って拡大して行くと、鼻の高低によって同一には行きませんが、錐の柄が半分以上は通りません。小生は現在、固定して十七ミリの棒が通りますがこれ以上は軟骨につかえて痛いです。三十才から始めて現在七十五才で、鼻翼には左

右七カ所の孔があいています。十月号のカメラ・ハントの渡辺好美さんも、なかなかM性らしく、かつての安井喜久子さんにとってかわって一躍スターになられました。注射針でチクチク刺して疼痛を楽しんでおられますが、耳朶と鼻隔壁にも針を使用して、ピアッシング（穿孔）されては如何ですか。おすすめ致します。

（京都・耳鼻環生）

年毎に益々発展して行く奇譚クラブ、貴重な風俗文献を、どのよう整理されておりますでしょうか。私の文献的整理法を御紹介し御批判を仰ぎたいと思います。奇譚クラブ発売を待ちかねて購入、読了後、丁寧に表紙をはがすと、目次が二本の綴じ金で、とめてあります。次に色付き目次のみ（二枚、計四頁）を綴じ金より、そとはがします。（本文より紙質が丈夫なので心配ありません）次に表紙と扉（扉で一言の頁）を糊付けします。はずした目次は、別に厚紙で表紙を作り一括、一月より十二月号分まで、綴じてしまします。これで又読み返したいハント・ルポ・連載物・小説・告白等、一瞥して取り出せます。（数年分

SとMの甘い一瞬	抱擁する美女二人
大手札三枚一組 略号△とさ▽	大手札三枚一組 略号△とや▽
松山・小池二嬢	ミキとマキ
縄に通う愛情の焰	柔肌と柔肌のレス狂態
大手札三枚一組 略号△とけ▽	大手札三枚一組 略号△とよ▽
マキとミキ	ミキとマキ
相愛の極致を描く二女	緊縛麗姿に映えるライト
大手札三枚一組 略号△とな▽	大手札三枚一組 略号△こほ▽
マキとミキ	佐々木真弓
鞭に狂う悦虐表情	臀部強調後手縛り
大手札三枚一組 略号△らて▽	大手札三枚一組 略号△ころ▽
関谷富佐子	羞恥に悶える全裸緊縛
鞭打ちにうねる肢体	大手札三枚一組 略号△こに▽
大手札三枚一組 略号△らあ▽	佐々木真弓
関谷富佐子	ホステスの緊縛姿態
足吊りの被虐肢体	大手札三枚一組 略号△こち▽
大手札三枚一組 略号△らえ▽	二つ折り責める女体
関谷富佐子	大手札三枚一組 略号△こへ▽
美しきマソの境地	佐々木真弓
大手札三枚一組 略号△らせ▽	脈打つ全裸の臨月腹
関谷富佐子	大手札三枚一組 略号△こふ▽
裸後手柔肌縛り	中河恵子
大手札三枚一組 略号△こよ▽	臨月腹の革紐股間縛り
佐々木真弓	大手札三枚一組 略号△こや▽
乳房強烈膨隆責め	中河恵子
大手札三枚一組 略号△こわ▽	猿轡の臨月妊婦腹縛り
佐々木真弓	大手札三枚一組 略号△この▽
海老責めに苦悶する	中河恵子
大手札三枚一組 略号△こお▽	卓上の股間縛り狂態
佐々木真弓	大手札三枚一組 略号△こそ▽
全裸の緊縛全身晒し	長井葉津子
大手札三枚一組 略号△こる▽	羞恥の足挙げ責め
佐々木真弓	大手札三枚一組 略号△これ▽
煙草責めに喘ぐ女	長井葉津子
大手札二枚一組 略号△こぬ▽	
佐々木真弓	

次号(二月号)は十二月二十五日に発売いたします

でも大した厚さになりません)そ
つと本を大切にされるのも、物の
考え様。座右に置かれ、御活用の
愛読者の皆様、如何でしょうか。
尚編集部の皆様、十二月号四十一
頁のように写真版でも結構ですが
是非本年からは、十二月号に、総
目次を付けて戴きたく思います。
(バックナンバーを、そろえたい
マニアもいると思います)最後に
御面倒でも目次に、読者通信者名
(月平均三十名内外)も、小さな
活字で結構ですが、載せて頂けれ
ば、縦に系統的にそのマニアぶり
が窺えるのですが、如何なものだ
しょうか。是非、御願いたいたし
ものです。
(愛知・会津一)

○
私は東北の表玄関、山形に住む
K誌ファンで、二十五日を中心に
毎月、楽しく過ごさせて頂いてお
ります。そしてK誌を手にし、頁
数の少なくなる頃、一度でよい、
誰かと本誌の内容にあるようなプ
レイを、と今春まで願ってきまし
た。又、もう一つの私の心は、K
誌を手にながら、ひそかな夢想
にふけるのがノーマルの限界だと

納得させたりしてきました。とこ
ろが今から半年ほど前、現実の世
界に引きずり込む誘惑に負けて、
私の恋人T子二十三才と、ささや
かなプレイを楽しむようになりま
した。彼女は背がやや低いのが欠
点ですが、顔はまず十人並み。身
体は真白で、特に乳房は人一倍大
きく、つけねにナワを掛けると、
まん丸に盛り上り、かけたナワが
食い込んで見えなくなるぐらいで
す。今も月一回ぐらいの軽いプレ
イを楽しんでおりますが、二人共
あまり強烈なもの、特に鼻責め
逆吊り、浣腸等は好みません。軽
いムチ打ちかローソク、あるいは
羞恥責め等で楽しんでおります。
私も、この程度ならばと、多少の
不満はありましたが、彼女に対し
ても、これが限度と思ってきまし
た。ところが先日プレイの際、
相手が赤の他人ならば、もう少し
羞かしい責めもガマンできると思
う、とか、又、複数プレイに、多
少の興味がある様子がわかりまし
た。そこで私の考えてるプレイを
提案し、よき協力者を求めたいと
思っております。まず、一室のテ

ーブルに向かい合い、私達と別な
もう一組が経験談に花を咲かせた
あと、それぞれ相手を交換し、ピ
ールでも呑みながら、軽いペッ
ングでプレイ開始です。一応、こ
の場面では乳房を片方つまみ出し
乳首をもみ上げたり、スカートを
着けたままパンティをヒザまで下
げたり……と、まず、こんな程度
にしておきます。つづいて私の恋
人が相手二人に責められますが、
この間、私は軽くうしろ手にしば
られております。この場面では手
を吊り上げ、恥かしめながら衣服
をはぎとり、身体の各部分を評価
したあと、大の字しばり等で、ム
チ打ち、ローソク等で責めます。
一通り済んだところで今度は私達
が相手の女性を同じコースで責め
ます。最後に、それぞれ相手を交
換し、イス利用の羞恥責め、ロー
ソク・パイプなどの責めで終わり
です。以上が私の実現可能なオリ
ジナルですが、いかがでしょう。
いずれにしても、あまり強烈なも
のは好まず、特に、身体に傷や痕
の残る責めと、セックスは今の段
階では、さけたいと思います。そ
うでない、二回三回と、あとの
楽しみがなくなると思います。回
を重ねるに従って責めの経験豊か

な男性を加えたり、別室による交
換責めなど考えて行なったら良い
と思います。私と同じようなお考
えの方がいましたら御連絡下さ
い。
(山形・早池)

○
小生、年少の頃よりS趣味のあ
る、現在三十才の男性です。以前
はよく書店で人に頼まれたような
ふりをして顔を赤らめながら貴誌
を購入し、それを、こっそりと自
分の机の抽出しに入れておき、た
まつてくれば自己嫌悪に陥り、処
分し、その後また虫が騒ぎ出して
買いに行くといった有様でした。
だから以前、何十冊と購入した筈
の貴誌も現在、手許には一冊も残
っておりません。今あるのは最近
買い求めたものだけです。しかし
つくづく思うのですが、絹川文代
さんを中心に誌上を賑わしていた
あの頃の写真が、一番、印象に残
っており、何故、一冊でも残してお
かなかったのか悔まれてなりません。
ん。恐らく彼女以上のモデルは居
ないと信ずるものです。現在、出
ている、その種の写真集は、余り
に単調です。ただ写真を大きくし
て一頁をうめるという傾向があり
これも商業主義のあらわれでしょ
うか。人それぞれ、好みも異ると

は思いますが、小生はやはり一つの写真にしても、何気ない動きのあるものにひかれます。今、小生が貴誌に対して望んでいることは写真集を出版して欲しいということです。それも、まだその手のものは出ていないと思われる、女性が女性を縛るといふ特集です。更に希望をいうなら、一頁一枚の写真はなるべくさけ、女性が女性に縛られる過程をコクメイに追って欲しいものです。ヌードばかりでなく普通の恰好のものも、中に挟むのも効果的な一つの方法でしょう。そして全部が全部、何も新しい

いモデルによる新しい写真でなくとも、以前グラビヤを賑わしたものの再編でも良いではありませんか。春日ルミさんなんかは縛り手の名優ともいえるでしょうし、あの人以上の縛り手は今でも一寸見つからないと思います。一応、小生の希望なるものを述べさせていただきます。

(金沢市・福田緊縛生)

奇クサロンに拙画を掲載して頂き有難う存じます。女斗美ファンの皆様、それぞれお元気のことと存じます。私の女斗美愛好も長く

なりまして、そろそろマンネリズムになって参りましたので、大いに若がりをはかるため、この頃は娘力士たちの元気のいいアクション、とんだりはねたりするところをアニメーションに作るためにいろいろやってみております。それにつけても、最近のテレビジョンにあらわれるコマーションフィルムアニメの粗製乱造、ギコチない貧弱さは目をおおうものがあるようです。娘相撲のアニメーションは、手間が大へんですが(取り組みなど反ぶく使用できるセルがない)製作は比較的気がラ

クです。というのは、相撲の実写フィルムがあれば、それからライヴァクションをコピーできるからで、それにかわいい乳房をつけてオカッパやお下げに仕立てれば、たちまち娘力士が動き出すわけです。女斗物ばかりでなく、オスカールワイルドの「サロメ」なども、ギュスターブ・モロー式か、又はピアズレイ式で一巻、作ってみようかと思っております。SM愛好の方々も、試みられては如何ですか。ただ、気が遠くなるほど時間のかかる仕事です。

(雄松比良彦)

本誌既刊号在庫一覧表

既刊雑誌在庫案内

○本誌既刊雑誌は左記一覧表の通り在庫しておりますが、40年に発行のものについては在庫の僅少ななものもありますから、お早い目に御注文願います。

○従来、雑誌の送料は当社にて負担しておりますが、今後は三カ月以上予約注文以外(既刊号は含まず)は一部につき送料二〇円の御負担を願います。多数一括してお求めの際は八小包Vにて発送申し上げます。

昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

編集後記

○「新年号」……早いもんだなア、と表紙屋サン？　がいつていました。早いといえは早い一周の流れ。しかし時刻目盛のような十二節を、ともかくコッソコッ歩いてきたという感じ。しかも遅速の時針のように……分針はおろか秒針よろしく、めまぐるしい週刊ものに較べたらまことにオトリしたものだとおもうのですが、振り返ってみて余り悠々として居れた覚えのないのが不思議。な気もします。改巻だからといって、とりたてて改るガラでもないのですが、今、デザインの変った表紙校正を前にして、遅速であつても螺子山を辿るように一周毎の推進の強化を……なんて、もっともらしく考え直して

います。とにかくスタッフ一同、旧に倍して張りきりますので、本年度もどうぞよろしくご支援賜りますようお願い申し上げます。と、やはり改つてしまいましたが。○年頭の、というか年末のというか定かではないようですが、ともあれ辻村隆氏の百枚を越す「カメラ・ハント」の贈りもの。豊満なM女を両手にしての奮闘。気疲れとお疲れのダブルパンチを押されてのルポ記事なのですから、どなたかのように妬いてはいけません。モチモチも楽じゃあないんですよ、きつと、ネ。ナアニ読むだけのこっちにだって、片手にハントとすれば、片手にニューフェイス前田真知子嬢の告白「白い陣痛」があるんです。国文科専攻が領ける麗文、魅せてくれるじゃありませんか。面影だけだけれど……

懸賞原稿募集

体験、告白、手記

読者の皆さまが自分で親しく体験されたことや、かくされた性癖や性向について語ってみたいと思われたこと、或はこれだけ、どうしても書き残しておきたいと考えられ、た事を大胆にお寄せ下さい。採用しました原稿には三千円以上の賞金を贈呈します。

創作、小説、物語

本誌の編集内容に適した特異な素材を駆使した力作をお待ちします。すべて自作の未

発表作品に限ります。これはとて思ふ作品は必ず誌上に取上げます。腕試しの意味で奮って御投稿願います。採用篇には賞金十万円迄贈呈。

感想、論評、批判

本誌に関連したものでしたら話題の内容は問いません。忌憚なき皆さまの御意見をお待ちします。採用篇には二千元以上の賞金を呈します。

映画、雑誌、通信

映画、雑誌、演劇、新聞、単行本或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出

処は詳しく明記願います。採用篇には本誌三月分以上又は二千元以上の賞金贈呈。

◎御送付下さいました原稿は原則として返却の求めに依じないことになっております。故に悪しからず御諒承願います。

◎本文記事中に各種の「懸賞原稿募集」を致してあります。故、御応募の方は項目を御明記の上御送稿下さい。

読者通信原稿

巻末の読者通信欄は読者の皆さま方のための公共の広場として開放してあります。御遠慮なくお寄せ下さい。

☆ 本誌御購読の榮 ☆

に限り
一月分(1冊)三五〇円(送20円)
三月分(3冊)一〇五〇円(送共)
半年分(6冊)二一〇〇円(送共)

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下さい。重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三五〇円

一月号 (第二十五巻第一号)
昭和四十五年十二月二十日 印刷
昭和四十六年一月一日 発行

郵便番号558
大坂市住吉郵便局私書函第四十一号
発行所 暁出版株式会社
振替口座大阪四二七八三番
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)
(昭和四十二年四月二一日)
国鉄大局特別取扱雑誌第二一〇号

☆ 書店の皆様方へお願い ☆

○本誌は口絵、グラビア写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に努める各条例に指定されないうち、本誌は充分に注意して編集いたしております。本誌は成人として発行を企図しており、下す関係上、十八才未満の方には絶対販売し上げません。特にくれぐれもお願